
スピリット・マイグレーション

ヘロー天気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピリット・マイグレーション

【Nコード】

N59550

【作者名】

ヘロー天気

【あらすじ】

欠けた記憶と生前の思考を内在したとある一つの精神が、元居た場所とは別の世界へと零れ落ちた
幽霊もどきな主人公が次々と身体を乗り換えながらその世界と人々に関わっていくお話。

プロローグ（前書き）

憑依系の物語です。

プロローグ

死者の魂が集まる所。輪廻転生。生まれ変わり。次の生を受けて現世に出て行くそれぞれの魂から、前世の記憶と共に『その者』であつた精神はこの場に留まり、奥深くへ沈んで行く。

偶に新しい生を得た魂から引き上げられる場合もあるが、殆どの記憶は人々が思考を始めた時から存在するこの”場所”に蓄積されていく。静寂に満たされた悠久の”場所”にて、新たに加えられる筈だつた『その者』は、生前から魂に刻み込まれた強い想いに大きく揺れる。

僅かな記憶と共に魂から離れた一つの精神が、別の世界に惹かれて現世の扉へと零れ落ちた。

『……………ここは、どこだろう』

何気無く見上げた石の天井には黒い稲妻のような亀裂が走り、その一部から射し込む光がぼんやりと周囲を照らし出している。随分と風化した様子の古い祭壇らしき建造物の傍に浮かぶ人影は、滲む意識で自問自答を繰り返す。

『ボクは……だれだろう』

隙間だらけだった意識は徐々に鮮明な意思を持ち始め、自身が人であった事を思い出す。名前や年齢は思い出せないが、精神の傾向に残る思考の癖などから男であった事は分かった。結構長く生きたような気もするし、若かったような気もする。

『なぜ、ここにいるんだろう』

自分が異物である事をなんとなく自覚する彼は、ここが記憶に残る慣れ親しんだ世界では無い事を理解した。射し込む光は時折陰り、古い祭壇の陰影が強調される。周辺を見渡すと、朽ちた石畳が暫らく続いた先にアーチ状の彫刻が施された壁がぐるりと囲む。

『なにをすれば、いいんだろう』

出入り口らしきものもないこの祭壇の間にて、彼は何をするでもなく、何をすればいいのかも分からず、ただぼくつと祭壇の脇に浮かんでいた。

どの位そうしていたのか、射し込んでいた太陽の白い光は月明かりの仄かなものになり、今が夜である事を感じさせる中、相も変わらず地縛霊の如くそこに浮かんでいた彼は、足元を駆け抜ける小さな影を見つけてそちらに意識を向ける。

何処どこから迷い込んで来たのか、成長した猫ほどもありそうな体躯を持つ大きなネズミが、チチツツと何事か鳴きながら祭壇の周りをうろついている。この場から動く事の出来ない彼は、自由に動きまわれるネズミを羨ましく思った。

そうして暫らくネズミを観察しているうち、彼はネズミの首筋付

近に隙間のような穴が開いているのを感じ取る。肉体に穴が開いているのではなく、『そこに穴がある』という感覚。

『なんだろう？』

その部分に意識を向けた途端、吸い寄せられるように身体が流れ始め、気がつくとは彼はネズミの中に入っていた。一体化というよりも、ネズミの意識の上に乗ったような感じで、所謂いわゆるとり憑いている状態。

自分の意思で行動するネズミは、彼が強く働き掛けない限り、その身体を支配して自由に動かす事は難しいようだが、意識に直接触れている為かネズミの考えている事が概ね理解できる。

ネズミの思考から、この一帯は彼等ネズミの住処であり、餌場であり、危険地帯でもある事が読み取れた。

地下にある広大な空間。身体の小さな生き物しか通り抜けられない張り巡らされた抜け穴や、大きな動物でも往来が可能な広い通路など、この場所に関する情報が少しずつ明らかになって行く。

このネズミは壁の亀裂が広がって出来た小さな隙間から祭壇の間に入り込んでいたらしい。取り憑かれた影響で若干頭が重くなった事を気にしながら、獲物を求めて餌場であり、危険地帯でもある場所へと向かう大ネズミ。

取り憑いている彼はネズミの弱い視界からだあまり周りの景色を見渡せないのです、首筋の辺りから頭を出して周囲を観察し始める。

『なんだか、ネズミに跨ってる気分だなあ』

狭い亀裂の穴を結構な速度で移動するネズミの頭越しに見えてくる出口の光。やがて穴を抜けると、そこには巨大な空間が広がって

いた。天井を見上げると自然の洞窟のようなゴツゴツした岩肌が見えるが、壁や床は加工された石で出来ている。どうやら広い通路のようだ。

古い祭壇に比べるとそれほど風化している様子ではないが、所々に見られる床の窪みや壁の亀裂は自然に出来たモノのようには見えない。そこに大きな力が加えられて碎けた跡のようだ。壁には等間隔に突き出た金具に松明らしき明かりが燃え盛っている。

壁沿いをチヨロチヨロと駆け抜けたネズミは、角の辺りで顔を上げて鼻をひくひくさせている。そしてピクリと何かに反応した。ネズミの感覚に意識を向けてみると”ニンゲン”の存在を知覚したようだった。

「近くに人がいるのか？」

ネズミの身体からもう少し抜け出して高い視点から周囲の様子を探ってみると、広い通路の奥の方に何人かの人影を見つけた。じつと目を凝らせば、視点だけが近付いていくように人影の姿をはつきり捉える事が出来る。

「……………」

前に三人、後ろに二人という並びで構成されたそのグループは、彼の記憶にある一般人の常識とは掛け離れた格好をしていた。

映画やゲームなどに見る革製の鎧染みた防具を全身に装備して剣を下けている者から、魔術士や聖職者を思わせるローブ姿に杖を持つ者。毛皮と葉っぱを組み合わせたような服装で弓を構えている者など、とても普通の現代人には見えないし、二ホンジンとも違うようだ。

『現代人……？ ニホンジン……日本……ゲーム……コスプレ……
カルチャー』

欠けた記憶から自身に関する何らかのイメージが形成され始めたその時、弓を構えていた毛皮に葉っぱ衣装な女性が矢を放った。『あつ』と気付いた時にはもう、彼の憑依していた大ネズミはその矢に射抜かれていた。

肉体から魂が引き離される断末魔の波動に煽られ、精神体の彼は
大ネズミの死体から少し離れた場所にふわりと浮かぶ。最期に感じ
取れたネズミの意識は『イタイ』『ハシル』『ハラヘッタ』だった。

「よし、一発で仕留めたな」

「このくらい簡単よ」

「リーダーさんよう、もうそろそろ下の階まで案内してくれよう」

「ネズミやコウモリ相手にするのも飽きちゃったよねー」

通路の奥から仕留めた獲物を確かめに近付いて来たグループは、
そんな会話を交わしながらナイフで捌いたネズミの皮やら牙やらを
収集すると、グループの中でもとりわけ立派な装備で固めている壮
年男性に訴え掛けている。

「ダンジョンのモンスターを甘く見るな、お前達が下に行くにはま
だ早い」

リーダーと呼ばれた壮年男性はまだ歳若い血気盛んな青年達にそ
う言っただけで諭す。

直ぐ近くで浮いている”彼”の存在には誰も気付いていない。”彼”は彼等の話す言葉は分からなかったが、字幕でも読んでいるかのように知らない言葉の意味を理解していた。精神体である”彼”は言語を超えた所で、彼等が言葉に乗せて放つ”意思”を認識しているのだ。

会話の内容と僅かに拾える零れた思考から、彼等グループは狩りの目的でこの場所へ来ているらしい事が分かった。

ここは彼等がダンジョンと呼ぶ地下迷宮の一階で、下の階へ進むほど凶悪なモンスターが生息しているという危険な場所。モンスターから採れる素材は高く取り引きされるので、一角千金を狙って訪れる者は後を断たない。

剣や魔術の腕試しをしたい者、極めたい者、お宝探し目的の者など、冒険者達にとっては地獄の楽園とも言える場所である。

『ダンジョンか』

そう呟いた”彼”の中で幾つかの情報が整理されて、自身の現状に対する把握を少しずつ深めていく。

壮年男性に引率されたグループが去った後、静かなダンジョンの通路に一人浮かび続ける”彼”は、やはり何をするでも無く、何をすれば良いのかも分からず、ただぼくとそこに浮かび続けていた。傍に転がっていたネズミの死体は、小さな虫達のご馳走となつて既に跡形も無い。

『……誰か通らないかな』

”寂しさ”や”退屈”といった感情を思い出した頃、彼の近くを細長い胴体と尻尾の先にハサミを持つ一匹の蟲が通り掛かった。彼の記憶にあるハサミムシという虫に良く似た姿だったが、目測で体

長四十センチ近くはありそうな巨大過ぎるハサミムシだ。

じっとその巨大ハサミムシに意識を向けていると、頭の近くに穴があるような感覚を掴める。大ネズミと同じ要領でその穴に意識を集中した彼は、吸い寄せられるようにハサミムシへと憑依した。

『よし、これで移動できるぞ』

少々多過ぎる足を手に入れた彼は、ダンジョンの中をうねうねカサカサと移動し始める。特に明確な目的があつた訳ではない。しいて言うなれば、人恋しさから人間探しの探索に出たのだ。

『あ、人がいる……ハサミムシ君、あつちだ！』

ハサミムシの意識に対する彼からの強い働き掛けにより、ハサミムシは通路に行く人影に向かって移動を始める。不完全な記憶と共に精神体でこの世界に来てしまった”彼”のダンジョン生活は、こうして始まったのだ。

01話：少女の落し物

”彼”が真つ直ぐ向かつて来るハサミムシ型モンスターに警戒した冒険者によって迎撃で叩き潰されてから数日。大ネズミや普通のネズミ、蟲などに憑依する事にも慣れてきた”彼”は、コツを覚えたのか割と思い通り操れるようになっていた。

『よ……っ ほ……っ よいしょっ』

ふらふらとバランスを取りながら通路の中を飛んでいる”彼”は今、このダンジョンに生息する大コウモリの一匹に憑依していた。

この場所に棲む生物は皆ダンジョンを覆う魔力の影響で変異体となり、巨大化したり凶暴化したりしている。時折この前見たような引率者付きの冒険者パーティーが通り掛かるので、彼等の話す内容からダンジョンの仕組みや歴史などを知る事が出来た。

人間でも長くダンジョンに留まり続けると影響を受けるらしい。ちなみに”彼”は人間にも憑依を試みてみたが、上手く行かなかった。

『しかしこのコウモリ、身体が大きくなったせいで一回落ちるとまた飛ぶまでが大変だなあ』

元は小さい普通のコウモリだったこの変異体の大コウモリは、従来の習性どおり天井にぶら下がって休んだりするのだが、足を滑らせてよく落ちる。”彼”が憑依したのも、ネズミで移動していた所

にポトツと落ちて来た事で大コウモリの存在を知ったのが切っ掛けだった。

バランスは悪いが飛行出来る点で移動効率が飛躍的に伸びる。お陰でこの階の端から端まで探索して地上に上がる場所や、更に地下へと下りる階段のある場所なども把握出来ていた。地上へは一度出てみようとしたものの、結界があるらしく弾かれて出られなかった。

そんな訳で、今日も特に何をするでもなくそこに存在している人恋しい”彼”は、地上との出入り口に近い場所の天井にぶら下がり、『誰か来ないかな』とぶらぶらしていた。あまり目立つ所にいると矢とか火の玉とか氷塊とかが飛んでくるので目立たない場所に陣取って。

『おや？』

昨日、引率者の先生に連れられて仲間たちと共に訪れたこのバラツセの街にあるダンジョン。『一階は安全だ、何も怖い事はない』と自分に言い聞かせながら恐る恐る地下一階の通路へと足を踏み入れる小柄な人影。今日は訳あって一人でやって来た。

まだ冒険者見習いになりたての彼女は、少々の戦闘訓練経験と冒険者の心得を持つ以外は一般人と大差ない十代半ばの少女である。

装備も普通の街服に長旅用の厚手なコートを羽織っただけで、武装は冒険者協会の支給品ナイフと短弓に矢が少々。ダンジョンの一階には明かりがあるので、松明などを持つ必要がなく両手を開けら

れる為、安全な距離から攻撃可能という理由で彼女は弓を持ってきていた。

「だ、大丈夫、大丈夫。昨日行った所を回るだけだし、モンスターが出てきつと一人で対処できる」

緊張しながらそう呟いた彼女は、ベルトに下げたナイフを確認すると、短弓を握り締めて通路を歩き出した。

天井から如何にも初心者らしい雰囲気纏う少女の様子を窺っていた”彼”は、彼女に意識を向けた拍子にコウモリの支配が乱れて足を滑らせた。咄嗟に飛ばうとした”彼”だったが、少女を観察する為半分近く身体を乗り出していたので間に合わなかった。

目の前にポトツと落ちて来た黒い塊に、驚いた少女は慌てて弓を構える。が、矢を番えていない。

焦りながら矢を手に取り、弓に番えて構え直した時にはもう、黒い塊は起き上がってこちらを見詰めていた。思わず背筋が冷える。しかし、黒い塊は襲い掛かってくる様子もなく、ガラス玉のような瞳をじっと向けている。

「……コウモリ？」

「キイ」

”彼”は少女の呟きに返答してみた。憑依しているモンスターが矢で射られようが剣で斬られようが”彼”自身は特に影響を受ける事もなく、肉体の死で何処かへ旅立つモンスターの魂を見送るだけ

なので冒険者達の前に立つても問題ない。

何時もは問答無用で狩られてしまうので、人に近付く時はこっそり行動しているのだ。

「もしかして落っこちたの？」

「キキ」

少女は一度天井を見上げ、通路にちよこんと立つ大コウモリに視線を戻して問うと、それに答える大コウモリ。一応”人喰いコウモリ”等と呼ばれているモンスターなのだが、この大コウモリに敵意がない事が分かると少女は落ち着きを取り戻した。

大コウモリの牙や羽は何かの素材になるらしく、駆け出しの冒険者や商人達がちよくちよく狩りに来る事もある。基本的にあまり危険のないモンスターなので警戒心は持たれ難いようだ。

「ドジな子ねえ」

「キィ」

少女は短弓を背中に仕舞うと恐る恐る大コウモリに近付き、威嚇などの危険が無い事を確かめてよいしょと抱え上げると、気持ちを紛らわせる意味でヌイグルミ代わりに抱き締めながらダンジョンの探索を始めるのだった。

「それでねー、多分昨日ここに来た時に落としたんだと思うのよ」

「キィ」

「珍しく気の利いたプレゼントだったから大事にしてたのに、こんな所で落としちゃうなんてもう……」

「キィ」

一人と一匹の奇妙な会話が、ダンジョン地下一階の通路に響いている。人とのコミュニケーションが出来て嬉しい”彼”は、言葉のやり取りは出来ずとも相槌を打つことが出来るので、少女の愚痴に近いお話の聞き役を楽しんでいた。

少女の話によると、幼い頃から両親に連れられて冒険者をやっている幼馴染の男の子から貰った大事なブローチを昨日、実地訓練に向けた下見でここを訪れた際に落としてしまったらしく、それを探しにきたのだそうだ。

冒険者協会の訓練学校にはまだ入ったばかりなので、個人的な探し物にダンジョンまで付き合ってくれるような友達もおらず、件の男の子には『落とした』等とは気まずくて言い出せない。一階を探すだけなら一人でも大丈夫だろうと、勇気を振り絞って下りて来たのだ。

引率のパーティーと歩いたコースを回りながら床にブローチが落ちていないか探しているが、中々それらしいモノは見つからない。

「無いなあ……誰かに拾われちゃったとか」

「キィ」

「まさかモンスターが拾って行く訳ないよねー」

「キキ？」

そうでもないよ？ と伝わらない言葉を返す”彼”は、時折大ネズミやハサミムシがダンジョン内に落ちているコインやら宝石の欠片などを拾って運んでいる所を目撃していた。

精神体でいる時の”彼”は一定量に達した魔力の流れを視認する事ができる。宝石には魔力が染み込み易く、ダンジョン内に転がる宝石や貴金属にはダンジョンを覆う魔力が蓄積されていくのだ。ダンジョンの魔力に中てられて変異体となった大ネズミ達は、魔力の塊になったモノにも惹かれるらしい。

「もしモンスターの体内に取り込まれてたら、探すの厄介だろうなあ」

少女の腕の中から辺りを見渡し、落し物探索を手伝っていた”彼”は、前方の壁際隅っこに大ネズミの姿を見つけた。少女は余所見をしていてまだ気付いてない。大ネズミは腹を空かせている状態で凶暴になっているようだ。”彼”は少女に危険を報せた。

「キイキイ！」

「わっ どうしたの？ 急に っ！」

前方の壁際に見える影にハツとなる少女。明らかにこちらを狙っている大ネズミに気付いて腕の中のコウモリを降ろし、少女は短弓を手に取った。引率パーティーで来たときは直接戦闘を経験しなかったのでこれが初めての实战になる。牙を剥き出して威嚇する大ネズミ。

そのまま突進してくる大ネズミに思わず矢を射るが、訓練場的に中てるのにも集中してやっと七割程度といった彼女の腕では動く相手に中てられる筈もなく、矢は大きく逸れて床を跳ねた。

次の矢を番えようとまたつく間に直ぐ目の前まで迫った大ネズミが少女の喉元を目掛けて飛び掛かる。

「ひ……っ」

恐怖のあまり身を竦めた少女は、咄嗟にナイフを抜く事も出来ず硬直する。そこへ黒い塊が割って入り、少女を庇った。石をも齧り削る鋭い牙が大コウモリの身体を噛み貫く。大ネズミは食えりやなんでもいいやと、そのまま大コウモリを捕食に掛かった。

「コウちゃん！」

『え、もう名前とか付けてたの！？』

”彼”は大コウモリから抜け出すと断末魔の波動に煽られない内に捕食者である大ネズミの方へと乗り移り、少女の狙う矢からひらりと身を躲して逃走を図った。少女の身の安全確保と移動手段の確保を両立させたのだ。

一旦この場から離れる事にした”彼”は壁の亀裂下に開いている小さな穴に飛び込んだ。後方から『ごめんね、ごめんね』と自分の身代わりとなって半分食われたコウモリのコウちゃんの死を嘆く少女の泣き声が響く。

彼女が初心者だからという部分もあるのだろうが、少なくとも”彼”は今までにこのダンジョンを訪れた冒険者達の中でモンスターにあそこまで情を向けた人間を見たことがない。老若男女問わず、狩りの対象であるモンスター相手に心を痛める者などいなかった。

『優しい子なんだなあ』

初めて人とのコミュニケーションを取らせてくれた少女の為に何かしてあげたいと思った”彼”はこの大ネズミの身体を使って付近一帯を探索してみる事にした。

少女の落としたブローチがどの程度の品物であるのかは分からないが、宝石ないし貴金属が含まれる物なら一日ダンジョンに置いていた分の魔力が染み込んでいる筈。”彼”の視点でなら見分けられる。

そうして暫らく壁の中の抜け道を移動するうち、体内に魔力の塊らしき反応をもった大ネズミを発見した。変異体である大ネズミは群れを作る事をしなくなるが、一応縄張り意識は持っているので、他のネズミがテリトリーに入ると威嚇して追い出そうとする。

鋭い牙を剥いて威嚇してくる大ネズミに対し、”彼”はここぞとばかりに人間の知恵を使った。

結構器用なネズミの手を使って適当な大きさの石を拾うと、そのまま無造作に近付いていく。先程の捕食でついた血の匂いに刺激されたのか、対峙している大ネズミは益々いきり立って飛び掛かってきた。

攻撃してきた大ネズミの口に石の欠片をプレゼント。がちんがちんと勢いよく噛んでいた大ネズミは、噛み砕けないと悟ると石を吐き出すべく後ろに下がる。が、そうはさせじと更に押し込んだ。

石で口を塞がれた大ネズミを仰向けに転がし、ジタバタしている間に柔らかい腹部へ向けてネズミの牙、所謂げっ歯類の強力な門歯を突き立てる。肉を噛み千切る感触なども他の感覚と同じくぼんやりとしか感じないので、その行為にさほどの忌避感を懐くことも無かった。

そうして倒した相手の腹から微量な魔力を放つブローチを見つけ出す。

『これかな？ あの子の落とし物』

早速届けてあげよう”彼”は先程の通路へと走った。

「まだいるかな？」

現場に戻ると既に少女の姿は無く、大コウモリの死体にはダンジョンの清掃役でもある小さい蟲が、何処からとも無く現れては群がっている。遠くに人影が見えたので視点を寄せてみると、冒険者らしい格好をした少年が出口に向かって歩きながら少女を宥めていた。

「だってだって、せつかくあなたがくれたモノなのに……」

「あんなのまた何時でも買ってあげるさ」

本当は少女が冒険者協会の訓練学校に入る事にも反対だった少年は、頼むから今後こういう危ない真似はしないでくれと念を押す。

「それにコウモリが君を庇ったっていうのも偶然だよ」

「だって、コウちゃんは……」

大コウモリの死体を地上に持ち帰ってお墓を作りたかったという少女に、冒険者の少年はモンスターについて講釈を語る。

基本的にダンジョンに巣食うモンスターはそのダンジョンに漂う憎しみや怨念が絡み合った集合意識の支配を受けて活動しており、浅い階の変異体はまだ普通の動物だった頃の意識で動いているモノもいるようだが、魔獣や魔物の類になると皆が同じ目的意識を持って行動するのだ。

集合意識の存在により、モンスターが人間に懐くなつことはないし、餌付けなども不可能であるという事が多くの実証例で示されている。

「まったく君は、なんでも良い方に捉えるんだから危なっかしくて心配だよ」

「うう、ごめんなさい」

そんな会話を交わす二人の後を、血塗れのブローチを抱えた大ネズミが追いかける。片手が塞がっているので上手く走れず、やっと追いついた時にはもう二人とも出口の階段を上っていた。

地の底からモンスターが這い出て来る事を防ぐ結果によって、大ネズミの身体では階段に一步踏み出す事さえ阻まれる。結局、”彼は名前も知らない少女の落し物を届けてあげる事が出来なかった。”

他の冒険者と鉢合わせる前に近くの抜け道へ避難した”彼”は、ブローチに付いた血を毛皮で拭き取りながら思案する。

『これ、どうしようかな』

直接物体に触れられない精神体の自分では預かっておく事も出来ない。そう思いつつネズミの身体から半分ほど精神体を出してブローチを掴む仕草をする。ブローチは”彼”の手に握られる事なくすり抜け、精神体の彼の手の中に重なった。

『ん？』

微かに感触を得たような気がして、”彼”はブローチに意識を集

中させてみる。これを手に入れようというイメージでブローチを引き寄せるような感覚があり、気が付くとブローチは彼の手元にあった。正確には彼の存在する次元に喚び寄せた形だ。

異次元に在る精神体の干渉で現象界の物質を別次元へと移動させる。試しにそこから辺の石ころに触れて手に入れるイメージで集中してみると、ブローチと同じ様に自分の元へ喚ぶ事が出来た。触れれば今までのようなボンヤリした感覚ではなく、しっかりとした感触がある。

距離の概念が曖昧で、手元に寄せれば手元にあるし、遠くへ離せば遠くにある。収納スペースとしてはとても便利な無限の置き場所

『こんな事も出来たのか……うん、これなら失くす心配もなく預かっておけるかな』

何時かまた出会った時にでも返そうと少女のブローチを異次元倉庫に保管した”彼”は、物に触れる方法を得た事で他にも触ってみたい物を色々と思いつながらダンジョンの通路へと駆け出したのだった。

02話：愚者の狂気と咆哮

殆ど明かりも無い闇に覆われたダンジョンの通路を、体長180センチはあるのかという大きな体躯の大トカゲがのしのし歩く。

一階をほぼ探索し尽した”彼”は下の階も見てもみようかと大ネズミの身体で二階に下りて来た際、大ネズミを主食としている大トカゲに出くわし、喰われた。ので、そのまま大トカゲに憑依。地下二階を探索する身体に使っている。

『あ、コイン見つけ。拾っておこう』

地下二階からは大トカゲの他に犬型のモンスターで野犬が変異体となった魔犬が出没するようになる。群れを作らなくなる大ネズミと違って、魔犬は三匹から五匹の群れで行動しているようだ。大トカゲはあまり動き回らない性質らしく、滅多に見掛ける事は無い。

広い迷宮を探索するに当たっては機動力の高い魔犬の方が便利そうなのだが、魔犬の警戒心が強いのか、力関係で大トカゲの方が強いのか、魔犬と遭遇しても向こうから近付いて来る事はなく、直ぐに何処かへ行ってしまうのでまだ憑依した事はなかった。

床や壁には人の手で整えられた痕跡は見られるものの、一階のような明かりは無く、ほぼ真っ暗状態。一階と二階を繋ぐ階段の途中にある明かりが僅かに二階の出入り口付近を照らし出している。

所々に光苔や光茸が生えていて微かな光源になっているが、ここに下りてくる冒険者達は皆自前の明かりを用意しているようだ。

『おつと人だ……まだ半分か、そんなに経ってないみたいだな』

この階の入り口に近い場所では時折ダンジョンを侮った犠牲者の姿が見られるようになる。やはり暗さに加えて群れで行動する魔犬の存在が危険レベルを一気に上げているようだ。

ダンジョン内に放置された死体は直ぐに蟲やネズミ達によって処理されてしまうので、パーティーの仲間が死んでしまった場合は早めに遺体を持ち帰るか、救援が来るまで傍に見張りを付き添わせるかしくはならない。

『魔力の薬瓶が一つ、二つ………六つも残ってる。杖は折れちゃってるなあ』

一人で下りて来ていた場合や、全員が倒れてしまった場合は、二日と経たず冒険者の装備で固めた白骨が転がる事になる。

その白骨化した死体も長くダンジョンの魔力に中てられると骸骨戦士のような魔物化したモンスターになるのだが、浅い階では魔力の濃度が薄い事や、頻繁に他の冒険者が通る事もあって魔物化する事は稀だ。

依頼を受けた冒険者や、遺体を置いて行くしかなかった仲間が後で回収しに来る場合もあるが、遺体から装備を剥いで稼ぎを得ている者に荒らされる事も多く、装備を剥がされた白骨は魔物化しないよう散らされてしまう。そうなるともう回収は不可能であった。

『モンスターの死体もあるな、こっちはコインと……これは指輪かな？』

当て所も無くダンジョンを探索して彷徨う”彼”は、人間やモン

スターの死体からも使えそうなアイテムを収集して回っていた。

一階に比べると通路にも結構色んな物が落ちていて、大抵が壊れた武器防具や宝石の欠片、それにお金らしきコイン。まだ壊れていない武器や矢なども拾い集めては異次元倉庫な保管場所へ一纏めにしてある。これらは重要なコミュニケーション用のアイテムとなるのだ。

指輪や耳飾りのような装飾品も時々拾う事があり、装飾品の小物はモンスターの腹の中から出てくる場合が多い。大トカゲに食事をさせる為に支配を解いて自由に行動させ、その過程で食べた大ネズミの腹から溶け掛けの耳ごと耳飾りが出て来た事もあった。

この前の落とし物ブローチと同様に、モンスターには魔力の籠った宝石類を飲み込む習性があるようだ。

魔術士だったらしき犠牲者に黙祷を捧げてその場を後にした”彼は、角を曲がった所で遠くにランタンの明かりが揺れるのを見つけた。久し振りに生きた人間と交流できるかもしれない。そう思った”彼は明かりの見える方向へ、のっそのっそと歩き出す。

例え出合って直ぐに狩られてしまふのだとしても、人恋しい気持ちには抗えない。

地下二階の入り口からそう遠くない小部屋状になった一角にて、怪我人を抱えて身動きが取れなくなっているパーティーの姿があった。

彼等は冒険者協会の訓練学校から昇級試験の為にやってきた試験官二人と訓練生三人の五人パーティーなのだが、無謀な行動によって危機に陥った生徒を庇い、引率者である試験官の一人が大怪我を負ってしまったのだ。

不味い事に、怪我をしたのが回復担当の治癒術士であった事と、魔犬の群れに囲まれていて迂闊に移動できない膠着状態に陥っている為、このまま睨み合いが続くと更に魔犬の数が増えかねないという危険な状況にある。

もう一人の引率者である女剣士の實力であれば単独で救援を呼びに戻る事も可能ではあるが、怪我を負った治癒術士を未熟な訓練生三人で護りきれるとも思えず、離れるに離れられない。

試験目的の探索だった為に大怪我を治せるような高価な治癒薬を用意していなかった治癒術士は、自身の怪我を命に別状がない程度まで回復させるのに手一杯で、そろそろ魔力も尽きようとしていた。

「すまない……僕が油断したばかりに」

「ありもしない非を憂えるな、お前に落ち度は無い」

引率者の女剣士はコンビを組むようになって長い少々内罰的傾向のある治癒術士を壁際の隅に庇いながら、どうしたものかと打開策を練る。現在この場で彼等を狙う魔犬は二群れで七匹。

「ここは何とか魔犬の数を減らして訓練生達に救援を呼びに行かせるしかないな」

と、その時、グルルと牙を剥いて唸りを上げていた魔犬の一匹がふと何かに気付いたように通路の左側に顔を向ける。すると通

路の奥からドスンツベタンツと騒々しい音を響かせて這うように駆けて来た大トカゲが、そのまま魔犬の群れに突っ込んだ。

通常、大トカゲがこのような行動を取ることはなく『一体何事！？』と面食らった魔犬達はぎゃわんぎゃわんと飛び跳ねて吠える。

その隙を逃さず、女剣士は自分達から注意の削がれた魔犬の一匹を屠ると、訓練生達に指示を出した。

「今の内に行け！ 入り口の協会関係者に救援要請を出せば直ぐに駆けつけてくれる」

「は、はい！」

三人の訓練生は一階へ上がる階段を目指して暗い通路を走り出す。ここから階段まではそう離れていないので問題なく辿り着ける筈だ。未熟者とはいえ三人の実力であれば一階の通路にまず危険は無い。ダンジョンの入り口にある待機所には常に冒険者協会の関係者が緊急事態に備えて待機しているので、半刻もしない内に救援を呼べるだろう。

生徒達が走り去るのを見届けた女剣士は更にもう一匹、大トカゲに気を取られて背中を向けている魔犬を片付けると、治癒術士を護れる位置に陣取った。乱入してきた大トカゲには二匹の魔犬が喰い付いているが、硬い鱗に阻まれて牙が通らないらしく、噛んだまま唸っている。

残り三匹の内一匹は大トカゲの周りをぐるぐる回っており、二匹が治癒術士を狙って女剣士と対峙していた。

大トカゲの周りを走り回っていた魔犬が巨大な尻尾に払われて盛大に転ぶ。

『群れで行動するモンスターには憑いた事ないからなあ、群れ仲間にくっついて来られても困るし　　って、おや？』

魔犬の機動力が欲しかった”彼”は、どれか一匹に憑依しようかと大トカゲから半分ほど抜け出し、不意に通路の奥に見えた人影を訝しむ。明かりも持たずに近付いてくる三つの人影。先程救援を呼びに走った訓練生達だ。

精神体である”彼”は暗闇でも視界一杯まで見通せるが、普通の人間の目では明かりの届く範囲までしか見渡せない。彼等は治癒術士の傍に置かれた明かりが届く範囲ギリギリの所で留まり、闇に身を潜めながら様子を窺っている。

『何してるんだらう？』

訓練生達の行動に不穏なモノを感じ取った”彼”は、大トカゲから頭だけ出して彼等の動きを観察し始めた。

大トカゲと魔犬による乱闘、負傷した治癒術士と彼を護る女剣士という二人の引率者。二匹の魔犬と対峙している女剣士の様子を壁際の暗闇から窺う訓練学校の訓練生三人。その内の一人がヒソヒソ声で仲間に話し掛ける。

「なあ、本当にやるのか？」

「当然だろ、ここで救援なんか呼んでみる、俺たちは間違いなく落第だぞ」

「試験官を負傷させたんだ、罰金は確実、下手すりゃ退学だ」

今回の試験をパス出来れば冒険者協会の簡単な仕事を受けられるようになるのだが、もし訓練学校を退学させられるような事になれば協会からの支援が受けられなくなり、冒険者としての道は非常に困難を極めるモノとなるだろう。

試験中の不運な事故による引率者の殉職は珍しい事ではない。熟練した冒険者でも何が起きるか分からないのが、ダンジョンの恐ろしさでもあるのだ。引率者の二人を口封じに始末して後日試験の受け直しを計ろうと、三人の訓練生は女剣士の隙を狙う。

乱入して来た大トカゲも居るし、魔犬はその習性から考えて二人分の肉があればこちらに向かって来る事は無いだろうと睨んでいた。

「いいか、あの女が魔犬と戦闘を始めたら仕掛けるぞ」

「ああ、俺たちでやれなくても隙を作れば後は犬共がやってくれる」
「気は進まないけど、将来の為に……」

やがて女剣士は一定の距離まで詰めてきた魔犬に剣を振るって迎撃に入る。

「今だっ」

三人はそれぞれ武器を構えると、女剣士の背後を急襲すべく一斉に飛び出した。足音で彼等に気付いた治癒術士は、訓練生達の異様な雰囲気と目付きに危険を感じ、パートナーを援護する為に僅かな魔力で使用可能な閃光魔法めくらましを放った。

目の前で弾ける閃光に一瞬視界を奪われ、足を止める訓練生達。

「………… お前たち！」

突然の閃光と気配で背後に迫っていた彼等の存在とその意図に付き、表情を険しくする女剣士。しかし今は二匹の魔犬と対峙しているので直ぐには対応出来ない。それをみるや二人が女剣士に武器を向けて威嚇し、一人は治療術士にトドメを刺しに動いた。

「この！ 死に損ないがっ」

治療術士に向かって剣が振り上げられたその時、咆哮を上げた大トカゲが身体に魔犬を喰らい付かせたまま、思いの外素早い動作で駆け出したかと思うと、その訓練生に体当たりをかました。足元を掬われて引っ繰り返る訓練生。

直ぐ傍を通り抜けられた他の二人は大トカゲに引き摺られながら近付いてきた唸る魔犬に思わず攻撃を浴びせてしまい、二匹の魔犬はいくら噛んでも牙が通らない大トカゲを諦めて訓練生の方に牙を剥く。

体当たりをくらって転んだ訓練生は大トカゲの尻尾に噛み付いていた三匹目の魔犬に狙われ、慌てて剣を向けながら立ち上がる。偶然か必然か、引率者を故殺しようとしていた訓練生三人は、女剣士が二匹の魔犬と戦っている間に残りの三匹を引き受ける形となってしまうた。

互いに背中を預けられないなんとも複雑な事情を含んだ共闘関係が生まれ、四人と五匹の戦いが始まる。

そんな中、現れた時から奇行の目立つ大トカゲがのそのそと治療術士の傍に寄って行く。女剣士は治療術士の事が気になったが、二匹の魔犬を相手にしているので気を割くことが出来ない。大トカゲが人を襲う事は滅多にないが、モンスターである事には変わり無いのだ。

『これをどうぞっと』

寄り添うように傍までやって来てパカッと開いた大トカゲの口から薬瓶が転がり落ちる。訝しみながらもそれを拾い上げる治癒術士。薬瓶の中には割と質の良い魔力水が未使用の状態が入っていた。

魔力水はその名の通り魔力の籠められた水で、様々な魔法薬の材料となる。そのまま飲めば手っ取り早く魔力の回復が出来る便利な水だ。

「これを、僕に……？」

その問いに答えるかのように大きな体躯を一度揺らす大トカゲ。転がり出て来た薬瓶は全部で三つ。これだけあれば治癒術士の魔力も二回は全快に出来る。魔力水のお陰で自身の怪我を完治させた治癒術士が魔犬との戦闘に加わり、戦いは間もなく終結した。

治癒術に特化した職でも冒険者として一人前である者の實力は、訓練生のそれなど比べ物にならない。魔犬との戦闘後、たちまち制圧される三人の訓練生達。彼等は武装解除された上で拘束して連れ帰られる事になった。

最初、女剣士は三人を処分する厳しい主張をしていたのだが、治癒術士が地上で裁きに掛けるよう宥めたのだ。

「この場で処刑されても文句は言えん愚行だったと思うがな」

「心の弱い者はダンジョンの魔力に吞まれてしばしば凶行に及ぶ事も、よくある事だよ」

頂垂れる訓練生だった三人は、試験官殺し未遂の罪人として帰路

につく事となった。

この場を去る時、通路に横たわる魔犬の死体を鼻先でふんふんと押し上げている大トカゲに戸惑いがちな視線を向ける治癒術士。大トカゲが助けてくれたという彼の話を訝しむ女剣士だったが、彼女も大トカゲの行動を見ていたので一笑に付すことは出来なかった。

「あの大トカゲ、何だっただらろう……？」

「さてな……むかし人に飼われていた、と考えられなくもないが」

最後に振り返った治癒術士達の視線の先で、こちらに顔を向けた大トカゲがペタンと尻尾を振ったのが見えた。

『魔犬、全滅しちゃったか……また暫らくは大トカゲ君で行動するしかないなあ』

二人の引率者と三人の罪人訓練生パーティーを見送った”彼”は、魔犬の体内にある魔力の染み付いた品を異次元倉庫に移すと、頑張ってくれた大トカゲの支配を緩めて食事をさせる。今回”彼”は引率者の二人を助けた事で、自分にそういう善悪の価値観がある事を認識した。

欠けた記憶と曖昧な自己認識は相変わらずだが、日々新しい記憶と知識は増えていく。

『いつか外の世界にも出られるといいなあ』

そんな事を想いながら、今日も”彼”はダンジョンを彷徨い続ける。

バラッセの街にあるダンジョンには時折、冒険者を助けてくれるモンスターが現れる。そんな噂が冒険者達の間で囁かれるようになったのは、それから暫らく経ってからの事だった。

03話：闇に手向ける光明【前編】

地下二階も粗方探索し尽したので更に下の階へ行ってみる事にした”彼”が大トカゲで階段を下りていると、結構な人数で構成されたパーティーと鉢合わせしてしまい、狩られてしまった。

その集団が通り過ぎた後に近くをハサミムシが通り掛かったので、これ幸いと憑依。”彼”は地下三階に下り立った。

『一階二階とはずいぶん雰囲気が変わってるなあ』

壁や床には殆ど人の手が入っておらず自然の洞窟っぽいくつつとした岩肌が剥き出しの状態で、階段の周囲だけは辛うじて整地されたような痕跡が見られる。

そして全体的に何かの気配がするのだ。濃厚な気配が満ちているという感じでは無いが、何らかの存在を思わせる気配。

『これが集合意識っていうモノの気配なのかな？』

ぐるりと周囲を見渡して近くに人影やモンスターの姿が無い事を確認した”彼”は、壁際の隅っこをワサワサと這って移動しながらこの階の探索を開始した。

基本的にダンジョンの探索は複数人のパーティーを組んで行なわれるものであり、一人で挑むのは非常に危険な事とされている。

世界各地に点在するダンジョンそれぞれ規模や危険度から一概には当て嵌められないが、ここバラッセの街にあるダンジョンは一人で探索出来る範囲を地下二階までであると判定されていた。地下三階からは”集合意識”に支配された魔獣が出没するようになるからだ。

「やれやれ、やっと戻ってこられたか」

「ああ、やっぱり外の空気はいいな」

一人で下りてはいけなと言われる地下三階まで赴いていた十数人規模の冒険者パーティーが街に戻って来た。彼等は冒険者協会から派遣された調査団で、ダンジョン利用の更なる活性化を目指す街の方針により計画された”拠点建設事業”に雇われている者達である。

地下の一角に冒険者の拠点を作る計画。ダンジョンを覆う魔力を中和して結界を張る場所を選定する為、付近の調査をしに下りていたのだ。

全員が無事に帰還して冒険者協会に報告などを済ませたあと、彼等は連れ立って街へと繰り出す。酒場で部下達と食事をしていた隊長役の冒険者は、そこで例の”冒険者を助けてくれるモンスター”の噂を耳にした。

「そついや出発前にも聞いたな、まだ続いていたのか」

「初心者グループを中心に遭遇したって奴らが結構いるらしいです

よ？ まあ騒がれるのを面白がって吹かし放はないでしょ
うかね

噂で拳がるのは大ネズミだったりハサミムシだったり。コウモリ
だったりもするらしい。

「ふん……ガキの遊び場じゃないんだがなあ」

街が冒険者で賑わうのは結構だが、おかしな噂で野次馬的に集ま
ってくる素人が面白半分でダンジョンに入ったあげく、他の冒険者
に迷惑を掛けるような真似は慎んでもらいたいモノだと愚痴る熟練
冒険者な隊長役。

この街のダンジョンも一階全域に明かりが置かれるようになった
頃から、冒険者としての心得やマナーを学ばず小遣い稼ぎ感覚で探
索に下りては、他の冒険者が仕留めた獲物に手を出すようなルール
違反を犯す者が後を絶たなくなった。

そんな調子で愚痴をこぼし気味になり掛けていた彼に、声を掛け
て来る者がいた。

「戻っていたのか、ガシエ」

「ん？ ようくリシエロ、エルメールも一緒か。お前ら何時も一緒
だなあ」

仕事帰りらしい知り合いの治癒術士と女剣士を冷やかしたガシエ
隊長は、二人を隣の席へと誘う。治癒術士のリシエロとは訓練学校
の同期で、元軍人な女剣士のエルメールとはリシエロ繋がりで割と
親しい間柄である。

ガシエ隊長自身、普段はフリーの冒険者をやっており、仕事が無
い時や時間が合った時は三人でパーティーを組む事も多い。

「事業の方は上手く行きそうかい？」

「まあ順調と言やあ順調だな、明後日辺りに祈祷士と作業員を連れて本格的に結界地帯を造る予定だ」

「ほう、なかなか隊長役が板に付いて来たのではないか？」

「よせやい、オレの柄じゃねーって」

しばし談笑に耽る三人。そういえば と、ガシエは少し小耳に挟んだ話で、訓練学校の生徒が試験官を手に掛けようとして拘束されたという話題を振ってみた。すると、訓練学校で講師をやっている二人は顔を見合わせ、苦笑混じりにそれは自分達の関わった事件だと答える。

「ホントかよ、リシエロはともかくエルメールに喧嘩売るなんざ、そのガキども命知らずもいいところだな」

「僕はともかくって、酷いなあ」

「ふふっ 実際、リシエロは甘いからな」

その場から動けなくなる程の怪我を負って結構大変だったという話の中、リシエロは剣を向けて来た生徒から自分を庇い、魔力水の瓶をくれた大トカゲの事を話した。対峙していた魔犬の群れに飛び込んできて窮地を救ってくれた謎のモンスター。

「え、それマジなのか？ 冒険者に味方するモンスターっていう噂の？」

「ああ、俄かに信じ難い事だがな、私もあの場に居たから証言しよう」

「とにかく不思議なモンスターだったよ」

特徴などを詳しく聞いたガシエはふと、二階へ上がる長い円形階段の途中で遭遇した大トカゲの事を思い出す。

「まさか、あの大トカゲの事じゃないだろうな……」

三階以降に現れるモンスターは集合意識に支配されていて、人間の姿を見れば必ず襲い掛かってくる。従って遭遇した場合は全て先手を取って討伐するのが鉄則である。

それに倣い、大トカゲも先手必勝で討伐したのだが、反撃してくる様子がなかったのは少し気になっていたのだ。結構な傾斜のある階段の途中だったので、あの巨体と低い体格では狭さもあって上手く動けなかったのかと思っていたのだが

「もしかして、君も会ったのかい？」

「いや、分かんらん。もしアレがそうだったんだとすると、悪い事したかなあ……」

人間に味方するモンスターの存在には半信半疑ながら、もし親友達を助けてくれたという大トカゲだったらと考えると、少々気に掛かってしまうガシエであった。

「所で、前衛と支援の枠は空いていないか？ 暫らく仕事がなさそうなのでな」

「お？ 二人とも手伝ってくれるんなら大歓迎だぜ」

拠点建設の話に戻り、明後日の本格的な作業が行なわれるにあたって資財を運ぶ作業員と結界を張る為に同行する祈祷士の事が話題になる。

「そついやその祈祷士、精霊だけじゃなく生きた動物とも心を通わせて意思の疎通が出来るんだとよ」

「ほう？ かなりの手錬という事か、協会の意気込みが感じられるな」

魔獣や魔物が集合意識なるものに支配されている事や、集合意識の存在そのものが明らかにされたのも、そういった腕利きの祈祷士達がダンジョンの調査に協力してくれたお陰だ。今回のダンジョン内拠点建設では要ともいえる重要な役割を担っている。

「仮設の結界はもう張ってあるからな、後はその一帯を永久浄化して貰えば終わりだ」

拠点の規模や建設隊への参加について晩くまで協議を重ねた三人は、久方ぶりの語り合いに親睦を深めるのだった。

地下三階通路の探索中、少し開けた場所に出た”彼”は床や壁に何か目印が付けられているのを発見した。線を引くように魔力が立ち昇っていて、近寄ると憑依しているハサミムシから何となく近付きたくなさそうな意思が浮かび上がる。

ダンジョンの入り口にある結界に良く似た感じだったので、そういう類の何かがあるのだろうと推測。何かがあるのか興味が沸いた”彼”はその線で区切られた範囲内に入ってみようと試みたが、ハサ

ミムシでは魔力の壁に阻まれて進めなかった。

『うーん、やっぱり結界が張ってあるのか』

入れないので仕方がないと、”彼”はこの場を後にした。

結界のあった場所から離れた通路を進んでいた”彼”は、三匹の魔獣犬に遭遇した。二階にいる魔犬よりも一回りは大きく、黒い影のような毛並みを持つ体躯の魔獣犬は、普段なら素通りする相手であるハサミムシをじっと見つめながら、何やら行動を決めかねている様子を見せる。

集合意識に支配されているモンスターは対象の姿形ではなく、その肉体を動かしている魂や精神を見て攻撃対象か否かを判別する。”彼”が取り憑いているハサミムシは『攻撃対象外である蟲』と『攻撃対象である人間』がダブって見えるので、攻撃すべきか否か迷っているようだ。

「グルル……………グアウ！」

迷った末、喰う事にしたらしく、がぶりと噛み付いてくる魔獣犬。ハサミムシの外殻も中々に丈夫な鎧なのだが、魔獣犬の牙の前にあっさり噛み砕かれてしまったので”彼”はそのまま魔獣犬に憑依する。

複雑で強い自己を保つ存在である”彼”の精神は、魔獣犬を支配していた単調で微弱な集合意識をいとも簡単に追い出して魔獣犬を支配した。普段から集合意識に支配されている魔獣犬は今までの変異体と違って自律的な意思が非常に弱く、殆ど本能しか持っていない

いようだ。

その為か、”彼”の憑依はスムーズ且つ強力に作用し、取り憑いた魔獣犬を自分の身体のように動かす事が出来た。というよりも、動かしてやらなければ只ぼーっとしているか喰っているか寝ているか、本能に任せて暴れているかといった具合である。

”彼”が取り憑いた事で群れ仲間だった他の二匹はその魔獣犬を攻撃対象と見做した。魔獣犬同士の戦闘。二対一だが全く問題ない。何故なら今憑依している魔獣犬が倒された後、倒した魔獣犬に取り憑けば良いのだから。

無抵抗で噛み殺された魔獣犬から二匹の内の片方に取り憑き、同じ様に噛み殺される。そうして最終的に無傷な魔獣犬の身体を手に入れた”彼”は、これだけ思い通りに動かせる身体でならと、先程の結界がある場所へ行ってみる事にした。

『何も無い……』

魔獣犬の身体に重圧の掛かる結界の中には、普通に開けた洞窟空間が広がっているだけで特に何がある訳でもなかったが、でこぼこの足元が少しばかり平らに整地されている。ここで何かをするつもりのようなだという事は分かった。

『また後で来てみよう』

独り呟いた”彼”は三階の探索に戻る事にした。

道中、魔獣犬の群れと遭遇する度に身体を変えるのも億劫になって来た”彼”は、なるべく見つからないように進んだり、全力で逃

げたり、時には自分から奇襲を仕掛けて手間を省いたりダンジョンの歩き方を学び、経験を積み重ねていく。

人間の冒険者を見る事は滅多に無く、遠くに見掛けても非常に警戒していて殺気立っているのです、近付くのは憚られた。

『この階、かなり危険みたいだからなあ』

代わり映えしない洞窟の風景が延々と続く地下通路。魔獣犬や大ネズミの亜種らしき丸っこいネズミばかり相手にしていた”彼”は、そろそろ人恋しさが募り始めた。人とコミュニケーションを取るなら上の階のほうが良さそうだと判断して一旦探索を打ち切り、二階へと足を向ける。

『そついえば二階の魔犬には結局、取り憑いた事なかったなあつて、あれ……？』

魔獣犬の身体で上の階に上がると、なんだか全身の動きが鈍るような感じがした。三階の結界に入った時に感じる重圧とは違い、力が抜けるような鈍り方。下の階で濃い魔力の影響を受けて身体の状態を維持している魔獣や魔物は、その魔力が薄くなると力も弱まるようだ。

『うわー、力抜ける抜ける』

試しに一階まで戻ってみると、かなり身体が重く感じるほど力が抜けてしまい、人が居ない間に地上への階段にも挑戦してみたが、力の弱まった魔獣犬ではやはり一步も踏み出すことが出来なかった。結果自体も一階出入り口に張ってあるモノは三階にある結界とは

比べ物にならないほど強力なモノのようだ。

また、魔犬よりも大きいこの姿だと一階や二階に行く経験も浅い初心者冒険者達は遠くに見えた段階で一目散に逃げ出してしまふ為、コミュニケーションを図る事も出来ないという事態に”彼”は愕然とする。

適当なモンスターに近付いて憑依すれば本能だけで行動する危険な魔獣犬を浅い階に放置する事になるので、その選択肢は選べない”彼”にとっては想定外の思わぬ落とし穴であった。仕方なく、とぼとぼと三階に戻った”彼”は暫らくこの階の探索を続ける事にするのだった。

『だいぶ弱っちゃったな……身体を休ませないと』

通路にいと徘徊している魔獣犬が襲い掛かってくるので、ゆっくり横になる事も出来ない。”彼”は餌用ネズミの繁殖場所らしき空洞に潜り込み、弱った身体を一休みさせる。

三階に出没する集合意識に支配された大ネズミは一、二階にいる大ネズミより一回り大きく、その身体は丸々と肥えている。驚くべき事に、彼等は魔獣犬の餌になるべく繁殖しているようだ。集合意識がそういう役割を与えているのだろう。

魔獣犬に食事をさせて身体の調子も取り戻した頃、空間を満たす謎の気配が俄かにざわめき始めた。多くの間がこの階に下りて来た事を感じ取れる。まるでダンジョンそのものが一個の生物のように気配をうねらせ、それを報せているような感覚。

普段は淡々と繁殖に勤しみ、一定数匹が食べられに出て行く空洞の餌用ネズミ達は、その気配に従うようにゾロゾロと飛び出していく。

『例の結界がある場所かな……？』

何かが始まろうとしている。そう感じた”彼”は、気配が示す場所の様子を見に行くべく空洞を抜け出した。

04話：闇に手向ける光明【後編】

地下二階へ繋がる階段から少し通路を進んだ辺りで魔獣の群れによる襲撃を受けて足止めをされている拠点建設隊。大量の魔獣犬に混じってまん丸と肥えた餌用大ネズミ、普段は死骸の掃除をやっているゼリー状の粘菌までが行く手を阻むように押し寄せてくる。

「一体何なんだこりゃ、この前までこんな歓迎はなかったぜ」

「拠点の建設地点に張っておいた結界でモンスターが溜まってたとか？」

「丸ネズミや粘菌まで襲ってくる理由にならんだろうそれは」

「うわっ やばい、足元からも！」

後から後から湧いてくるモンスターを捌きながら通路の狭い場所まで後退し、そこに防衛線を敷いて防いでいるが、これだけの数を切り開いて進む事は勿論、下手に撤退する事も出来ない危険な状況に陥っていた。

この異常な事態に対し、後方で護衛役に護られながら作業員達と待機していた祈祷士が前衛組の近くまで歩み寄ると、押し寄せるモンスターから意識の読み取りを試みる。その結果

「迷宮を覆う大きな意思が、私たちに強い警戒と敵意を向けている」

祈祷士がモンスターの内面から読み取った情報によれば、モンス

ターを支配する集合意識が拠点を建設しに来た自分達を重要な敵と見做したらしく、支配する魔獣たちを使って総攻撃を掛けているのだという。

「つまり、こいつらを操ってる集合意識が拠点を作られる事にご立腹だっただけか」

「まじかよ」

「集合意識が人の行動にこれほど知的で明確な反応を示すとは……」
「感心している場合ではないぞ、このままでは拠点の建設予定地に近付く事さえ出来ん」

結界を張っている場所まで移動できれば優位に戦える結界内で前衛が抑えている間に結界の出力を上げ、祈祷士の力で結界の範囲一帯を浄化してしまう事でモンスターの脅威もダンジョンの魔力に中てられる心配も一先ず治める事が出来る。

だが、とてもそこまで辿り着けそうにない。魔獣犬の猛攻も然ることながら、足元から絡みつく粘菌は特に厄介だった。

通常の武器では斬ろうが叩こうがあまり効果がないので、火系の魔術や松明などを用いて焼き尽くすしかないのだが、絶え間なく飛び掛かってくる魔獣犬を相手にしながらではのんびり足元を炙っている余裕もない。

「くそ、穂先がいかれちゃった！」

「だから打撃系の武器にしておけと言ったのに」

「鈍器は性にあわないんだよ」

先端が曲がってしまった鉾槍を捨て、予備の短剣で応戦するガシエ。しかし圧倒的にリーチが短いので最前列にいる魔獣犬の猛攻は

捌けど、一匹倒すのにも一苦労だ。

「ええい畜生め！ だれか大剣か戦斧もってる奴いねえか!？」

と、その時、魔獣の群れ後方に見える通路の奥に一匹の魔獣犬が現れた。また新手の追加かと思われたその魔獣犬は、他の魔獣犬を踏み台にしながら近付いて来ると大きく跳躍、前衛組を飛び越えて彼等の背後に降り立った。

「な……っ しまった!」

まさか魔獣犬がそんな行動をとるとは思わず、前衛組は完全に虚を突かれた格好となった。後方には近接戦闘の苦手な術士や戦闘そのものに向いていない祈祷士、拠点建設の為の作業員達も連れているのだ。例え一匹でも魔獣犬クラスのモンスターに襲われれば被害は計り知れない。

「ここは私とリシエロで抑える！ お前が仕留める!」

短剣の方が小回りも利くだろうと、飛び越えてきた魔獣犬をガシエに任せる事にしたエルメールがダメージ覚悟でガシエの受け持っていた守備範囲に入り、長剣で大振りに薙ぎ払って魔獣犬の群れを威嚇した。リシエロが素早くエルメールのサポートに回る。

すぐさま呼応したガシエは背後の魔獣犬と対峙しようとして、思わず動きを止めた。目が点になるとでも言おうか、目の前のありえない光景にどう反応して良いのか分からない。

「おい、どうした！ 何を呆けている!」

「い、いやその……」

その場から動かないガシエにエルメールが怒声を上げながらちらっと振り返り、背後に見えた光景を訝しんで眉を潜めた。

魔獣犬がその場でお座りをしている。まず、それがありえない。集合意識に支配されている魔獣犬は人間を見ると必ず襲い掛かるように出来ている存在なのだ。これはもう十数年来から変わらないダンジョンの仕組みとして、この辺りの冒険者なら訓練生でも知っている事である。

それが何故人間を前にしてお座りなのか。更に、魔獣犬の足元にはそこそこの質の良さそうな戦斧が置かれていた。勿論、前衛組の持っていた物ではないし、後方の誰かが用意した物でもない。

「こいつ、もしかして……」

ガシエはお座りしている魔獣犬とその足元に置かれた戦斧を見て、例の『冒険者を助けてくれるモンスター』の噂を思い出していた。

その後、思わぬ魔獣の大群に拠点建設隊が行く手を阻まれているとの報せを受けた冒険者協会から急遽、応援の部隊が出撃し、駆け付けた手錬たくねの冒険者達によって魔獣の群れは次々と討伐されていた。

簡単な攻撃魔術と松明で塞き止めていた粘菌は強力な炎の魔術で焼き払われ、通路にひしめいていた魔獣犬の群れもあっという間に蹴散らされていく。

「よし、なんとかこれで片付いた」

「やっと終わったか……」

「気を抜くな、本来の作業はこれからなのだから」

「はははっ どっちが隊長だか分かりやしねえや」

自分で隊長など柄ではないと言っていたガシエは、そういう役割にぴったりなエルメールの仕切り振りに苦笑をもらす。魔獣の死骸に埋め尽くされた凄惨な通路で談笑を始める建設隊の前衛組。彼等の近くに魔獣犬の姿を見つけた応援部隊の冒険者が警告を發した。

「おい！ まだ一匹残ってるぞ！」

その声に一瞬身構えたガシエ達だったが、応援部隊の冒険者が指し示している魔獣犬をみて警戒を解く。

「いや、あいつはいいんだ」

「あれは我々の味方だ、問題ない」

「？ 何を言ってる、魔獣犬だろう？ あれは」

「まあ、そうなんだが……例の噂、冒険者に味方するモンスターとしての聞いた事ないか？」

あれがそうなのか？ と、応援部隊の冒険者達はその魔獣犬に訝しみながらも観察の視線を向けた。

何をしているのか、累々と横たわる魔獣犬の屍を一体一体前足や鼻先で突付きながらうろついている。経験豊富な彼等も今まで人に味方するモンスターなど見た事がない。だが、確かにこの魔獣犬は襲い掛かって来る様子が見られない。

「とりあえず、拠点の建設予定場所へ移動を始めよう」

「だな。モタモタしててまた魔獣の大群に押し寄せて来られちゃた
まらねえ」

ぞろぞろとこの場を後にする拠点建設隊と応援部隊。件の魔獣犬も一緒にいて来るようだ。

応援部隊の冒険者達からは警戒を向けられているが、危険が無いのならばと”彼”は同行を黙認された。

「これだけ大勢の人を見るのは初めてだなあ、何人か知ってる人もいるし」

以前にも会った事のある人や、今し方の戦闘で自分を味方だと認識した人がいるのは「知り合い」が出来たようで嬉しい。

”彼”の上機嫌な感情は取り憑いている身体にも影響し、凶悪なごつい見掛けでパタパタと尻尾を振りながらついて来る魔獣犬の姿は愛嬌があるのか悪い冗談なのか良く分からなかった。

仮設結界を張ってある拠点建設予定場所にやってきた一行は、まず結界の出力を上げて本格的な安全地帯を構築する作業から始める。その後、祈禱士による浄化の儀式を行い、ダンジョンを覆う魔力の影響が及ばない一帯を設けるのだ。

空間を浄化して魔を祓っただけでは時間と共にダンジョンの魔力で侵蝕されてしまう。そこで考え出されたのが、強力な結界と併用する事で恒久的に浄化効果を永続させる方法。それが永久浄化と呼ばれる作業儀式であった。

結界の強化が図られるのと同時進行で、資材を運んで来た作業員達が簡単な補強版を用いた囲いを組み上げ始めた。しっかりした石造りの壁がつくられるのは、拠点として使える安全地帯が設けられてから後日、石材などを運び込んでの作業となる。

『あ、なんかじわじわ身体が重くなってきた……結界が強くなってきたのかな?』

作業を見守っていた”彼”はこのまま結界の中にと動けなくなりそうだったので、一旦結界の範囲外へと避難する事にした。

「お? どうした、ワン公」

「何処に行くのかい?」

「ヴァア」 『身体が重いんだよー』

「結界が苦しいのではないか?」

「ああ、なるほど。魔獣だもんな」

「ヴァア」 『そうみたい』

熟練冒険者三人と不思議な魔獣犬のコミュニケーションは、この場にいる他の冒険者達や作業員達の魔獣犬彼に対する警戒心を、多少なりとも解したのだった。

「敵襲!」

結界強化の効果が十分に始まった頃、第二波ともいうべき魔獣の

群れがこの付近一帯に押し寄せて来た。素早く防衛の配置に付く前衛組。結界の護りに応援の手練勢も加わっている。先程の攻防に比べて皆に余裕があった。

一方、結界が強化された事で拠点建設予定場所の敷地内に入れなくなってしまう”彼”は、魔獣の群れが押し寄せてきた通路とは反対側になる通路の奥から、戦いの様子を窺いながらウロウロしていた。

向こう側の通路へ回り込めなくはないものの相当な距離を移動しなくてはならない上、結界の中に入れないのでは双方から攻撃対象とされてしまい兼ねない。流石にそれは自殺行為だ。

自分にそもそも命が有るのか否かという疑問はともかく、宿主の身体を無闇に死に曝す事は無い。

『でも、どうしようかな』

このまま見物を続けようか、他の場所の様子でも探りに行こうかと考えている”彼”に歩み寄って来る者がいた。拠点建設の要を担う祈祷士。結界が完全に安定するまでは出番が無く待機中の彼女は、人間に味方する不思議な魔獣犬に興味を持ったらしい。

彼女の護衛である戦士は危ないから近付かないほうがいいのではと声を掛けるも、同じく後方で待機中だったリシエロが自分も同行するといって説得。祈祷士は結界のラインギリギリの所で不思議な魔獣犬と向かい合った。

「……？ これは」

魔獣犬の中に”彼”の存在を感じ、祈祷士は問い掛ける。

「あなたは、誰ですか？」

「祈禱士が”自分”を見ている事に気付いた”彼”は、魔獣犬からひよいと顔を出した。魔獣犬の身体から精霊のような存在が顔を出した事に思わず息を呑む祈禱士。彼女が何かに驚く仕草を見せた事に警戒する護衛役。リシエロは祈禱士が何を見たのかが気になった。

「私はエイオアの祈禱士リンドーラ。あなたは？」

『ボク？ ボクは……』

彼女の問いに答えあぐねた”彼”は、自身には無いが自分に付けられた名前を口にする。

『ボクは、”コウ”』

「”コウ”と言うのですね？ コウ、貴方はどういう存在なのか？」

『よく、わからない』

「コウと名乗る事にした”彼”は人と直接会話が出来た事に驚きと興奮、そして喜びを覚えていた。

「こんな風に人と話せる時が来るとは想像もしていなかったので、リンドーラが何か問えばそれに答えるだけという随分ときこちない会話になってしまったが、とても満たされた気持ちになる。

「自分自身の事はよく分からないと答えるコウ。欠けた記憶に残る自分の居たであろう世界については上手く説明できないので語らない。」

リンドーラはコウの事をダンジョンで生まれた精霊の亜種的な知性体なのではないかと分析していた。集合意識より何らかの要因で分離したか、或いは新たに生出したか。

「コウ、貴方はいつからここに居るのですか？」

『分からない。けどたぶん二十日以上は経ってると思う』

「それは、どうして？」

『日が差し込む場所があるんだけど、そこで昼と夜を数えたから。実際はもっと長いと思う』

ダンジョンから出た事は無いと聞いたリンドーラは、それなのに”外”の世界について少なからず知識がある事に着目した。魔獣犬の身体から出ているコウのボンヤリとした光の身体は、容姿も身体つきもはつきりしないが確かに人の姿を形成している。

「貴方は、元は人間だったのかもしれないね」

『あ、それには確信があるよ、確かにボクは人だった』

なるほどと頷くリンドーラ。このダンジョンで倒れた冒険者の魂が集合意識に囚われるなどした後に分離独立したか、魔力に中てられて魔物化する際、自己の一部を保った為に集合意識の支配を受けず自律した状態で定着したか。概ねそんな所であろうと当たりをつける。

とにかく、魔獣達を操れて人とコミュニケーションがとれる存在を味方に付けられるなら非常に心強い。

「まだまだ不明な点が沢山ありますが、貴方の事情は大体分かりました。これを貴方に預けましょう」

リンドローラは自分の首から緑色の石が付いたアミュレットを外すと、コウに差し出した。そのアミュレットを見たリシエロが思わず
「咳く。」

「祈祷士のアミュレット……」

「っ！ 何ですと!？」

コウが人と敵対する事はないと判断した彼女は、”彼”に結界の効果は無効化する特殊なアミュレットを与える事にした。このアミュレットを憑依している存在に付けておけば、同種の結界なら大體
通り抜けられるようになる。

「リンドローラ殿！ そんなものを魔獣犬に与えては、危険ではない
のですか？」

「大丈夫。彼が私たちに危害を加える事はありません」

護衛役は警戒するが、手錬の祈祷士は対象の心に触れてその者の
本質を見抜く能力を持つ。リンドローラはコウの事を自分達にとって
危険な存在ではないと確信していた。

アミュレットを受け取ったコウは、そのまま魔獣犬の首に回した
のでは紐の輪っか部分が足りないので暫らく試行錯誤した後、欠け
た記憶の中にあつた”インプラント”という知識を参考にして魔獣
犬の体内、厚い皮の余った部分に埋め込む形で現象化させて身に付
けてみた。

『どれどれ……?』

そーっと前足を結界に進めてみると、アミュレットの効果で重圧
を感じる事無く結界の範囲内に入る事が出来た。

『おーっ 入れたー！ リンドーラさん、ありがとうー！』

リンドーラに顔を向けてブンブン尻尾を振っている魔獣犬。影の様な黒い毛並みに、殺傷力を増した長く鋭い牙も剥き出しの凶悪な見た目はそのままだが、全身に溢れる嬉しそうな雰囲気は本当に害の無いただのわんこのように感じられた。

第二波との戦闘も魔獣が打ち止めになったらしく落ち着きを見せ始め、結界の前に溜まっている粘菌の焼き払いが行なわれている。

拠点が造られるまでの間、この作業現場に留まる事を決めたコウは、直接話す事が出来る祈祷士リンドーラを通じて色々とこの世界の知識を深めていくのだった。

05話：策略の報酬

邪悪な魔力を遮断し、モンスターの侵入を許さない永久浄化された結界内の作業現場を、額に緑色の宝石を付けた魔獣犬がダルそうに横切っていく。

ダンジョン内で安全に休む事の出来る拠点の建設が進められる中、コウは自主的に彼等の作業を手伝って資材搬入の作業員を先導したり、早速露店を開きに來た気の早い商人達を護衛するなど、活発に動き回っていた。

そんな活動を通じてコウの存在は街でも噂となり、数日の内に冒険者達の間で周知されて行く。

コウを一目見ようと他の街からもバラッセの街のダンジョンを利用に來る者が増え、ダンジョン利用の活性化を目指していた街の統治者達は収益が増えたと大層喜んだ。

しかしその一方で、一見大人しそうに見えたモンスターをコウのようなモンスターだと勘違いして迂闊に近付き、怪我をする初心者も増えて問題になった。それなら目印をつければいいと、コウは貰ったアミュレットの石部分が額に出るように埋め込んで判別を付け易くした。

額に緑色の宝石を付けた魔獣犬の姿は、そういった経緯で確立されたのだった。

「そろそろ次の搬入部隊が来る頃だな。コウ、通路の様子を見て来てくれるか？」

「ヴァウ」『いいよー』

資材などの荷物は異次元倉庫に喚び込んで運ぶ事も出来るが、作業員達の仕事を奪ってはいけないので自重している。コウがアイテムを別次元に保管して運べる能力を持っている事は、極少数の人間にしか知られていない。

「いようコウ、今日も元気にやってるかー」

「ヴウアツフー」『やあ、ガシエ』

作業現場の防衛隊を引き連れたガシエが付近の見回りから戻って来た。永久浄化地帯が出来てからは魔獣の大群による襲撃も頻度が下がり、今では二、三日に一度の割合で十数匹の魔獣犬が襲撃に来るくらいである。

先の大襲撃でこの階に巣食う魔獣の数が減っているのかもしれない。結果を出たコウはすっかり通い慣れた拠点建設作業現場と二階へ上がる階段までの通路を駆け抜けていった。

訓練学校の講師たちが宿泊する公舎にて、休日を部屋でのんびり過ごすリシェロの所にエルメールが訪ねて来た。

「なんだ寝ていたのか。偶の休日だというのに、部屋で怠惰に過

「……していいの？」

「偶の休日だからゆっくりしたいんじゃないか」

元軍人であるエルメールは訓練学校の講師に就いてからも自身の剣の修行は軍隊式でやっている。朝から訓練場で汗を流してきたらしい彼女を苦笑しながら迎えたりシエロは、最近エイオア地方のアルメッセから仕入れたお茶を用意した。

「今日はどうしたんだい？　ただ僕に会いに来てくれた訳でもないんだろう？」

それはそれで嬉しいんだけど等と、冗談とも本音ともつかない軽い口調で訊ねるリシエロに、エルメールも軽く返しながら本題に入る。

「ふふ、何時も顔を合わせているのだからな、態々部屋を訊ねるまでもない……実はコウの事で少し気になる噂を耳にしたのでな」

コウが額に付けている石が祈祷士のアミュレットである事は、彼の知名度が上がるに従って徐々に知られ始めているのだが、その非常に希少で高価な品でもある祈祷士のアミュレットを狙っている者がいるらしいという話。

「他所から来た討伐色の強い冒険者グループが、コウとアミュレットの事を聞いて回っていたらしいのだ」

「でもアレはリンドーラがコウに預けたモノだろうか？」

「人間とモンスターの間で交わされた貸し借りの約束を、討伐専門にやっている連中が考慮すると思うか？」

「……しないだろうね」

モンスターはモンスター。モンスターを倒して手に入れたお宝は倒した者の物だ。例えばその品物がそのモンスターに倒された誰かの遺品で、形見の品であったとしても、所有権はモンスターから手に入れた者に帰属する。それがこの世界で定められた冒険者達のルールなのだ。

「コウの存在はダンジョン利用の活性化に繋がり、街の収益にも貢献している。そこを挙げて協会にコウの保護を申請しようと思うのだ」

「協会か……確かに街の統治者よりは協会の方が融通は利きそうだけど」

この事をコウにも伝えておく必要があるという事で、エルメールは冒険者協会への申請をリシェロに任せ、自分はダンジョンへ向かうと提案する。実は軍と冒険者はあまり仲が宜しくなく、元軍人の彼女は協会関係者から一目置かれてはいるものの、あまり信用はされていない。

「なるほどね、そういう事なら分かったよ。明日にでも協会支部に出向いてみよう」

「すまん、お前にはいつも面倒ごとを押し付ける」

「君の行動はいつもの確だよ。面倒だなんて思った事はないさ」

「そうか……。えーと……では、これで失礼す」

用件を済ませたエルメールはそのまま部屋を後にしようとしたが、リシェロに捕まえられた。唇に残るアルメツセ産茶葉を使った高級なお茶の雫を、重ねた唇と舌でペロリと舐め取られる。普段から如何なる時でも冷静沈着をモットーとする彼女は不本意ながらその表

情を崩した。

「ん……………ハア……………」
「うん、知ってるよ」

まったくこの男は！ と、こちらの弱点を知り尽くしている忌々しい最高のパートナーに悪態を吐きながら抱きすくめられたエルメールは、夕刻までリシエロの部屋で過ごす事になるのだった。

拠点建設作業現場にて、近くの丸ネズミ繁殖場で魔獣犬の食事を済ませて来たコウは資材置き場に寝そべってごろごろしていた。拠点が完成すれば、ここを出発点として地下四階の探索もずっと楽になるので、大勢の冒険者が訪れて賑わう事になるだろう。

今まで四階の探索に下りられる冒険者は限られた極少数の者達だけだった。かなりの手練勢が集まって三十人以上の規模で協力態勢を取り、一階から三階までの護衛と先導を担当するグループと、四階に挑むグループとに分かれて定められた期間内での探索を行なう。

そういった人材集めや資金面などの問題で、四階の探索は非常に難易度が高くなっている。手練の冒険者であっても、二階と三階の危険度は油断すれば命を落としかねない。行きも帰りも常に万全の態勢が求められる。

三階に設けられる冒険者の拠点は、それら探索に挑む為の条件を

大いに緩和する効果があるのだ。

「お、そこにいたのか」

「ヴァ」『やあ』

今日も防衛隊を引き連れて見回りに出ていたガシエが休憩に戻って来た。ブロック状に加工された石材が積み上げられている資材置き場の壁際でごろりと転がっている魔獣犬は、首だけ起こしてひらりと尻尾を振りながら挨拶を返す。

永久浄化された結界の中に居る間はダンジョンを覆う魔力も遮断されているので、魔獣犬の身体では浅い階に上がった時と同じくらい力が抜けてしまう。その為、結界内にいる時のコウは大抵寝ているか、ダルそうにうろついているかといった具合だ。

しんどそうな見掛けに反して、本人は常に多くの人と触れ合える今の状況に満足していた。力が抜けた状態でも生命活動には然程さほどの支障もなく、何時か地上へ出る時に備えてダンジョンの魔力が無い環境に慣れておけるといふメリットもある。

「ああそうだコウ、なんかお前の頭の石を狙ってる奴らが居るらしいぞ?」

「ヴァウ〜ヴァフ?」『リンドーラさんが貸してくれたコレ?』

「最近是他所から来た連中も多いからな、知らない奴等についてっちゃ駄目だぞー?」

「ヴァーフ」『うん、気をつけるよ』

ガシエは魔獣犬なコウの言葉を明確に認識している訳では無いものの、何となく雰囲気でどんな事を言っているのかは予想できる。

部下達からは『また隊長がコウとなんか喋ってるぞー』と酒場で話の種にされたりもしているが、コウと気さくに話せる事に羨望の眼差しを向けられたりもするので、ガシエはコウとの会話っばい何かのようなコミュニケーションを結構楽しんでた。

コウの方も作業現場に居ると退屈や寂しさに苛まれる事もなく、人と意思の疎通が出来る事に喜びを感じている。

そんな一人と一匹のコミュニケーションを、結界内の物陰から観察する者達がいた。まだ建設途中であるとはいえ、拠点としてモンスターへの侵入を阻み、ダンジョンの魔力に影響を受けない空間としては機能しているので、现阶段で休憩地に利用している冒険者は少なく無い。

「なるほど、確かに人と馴れ合っているように見えるな」

「中身も本当に魔獣犬なんですかね？」

「情報によれば集合意識とは別の知的存在が支配しているらしい」

「知的存在ねえ……どうせ呪術士辺りが作った人工生命体かなんか寄生させてんじゃないの？」

ダンジョンを管理する街の統治者が冒険者を呼び込む為に他所の地から輸入したモンスターを放つて宣伝したりという事は珍しくない。ダンジョンの利用者が増えれば街は活性化し、手っ取り早く収益も上がる。

あの魔獣犬にアミュレットを託したという祈祷士も、今回バラツセの街が進めている拠点建設事業で雇われている者なのだ。街ぐるみで話題作りの客寄せモンスターをでっち上げている可能性が高い。

彼等はそう分析する。

「まあ、その辺はどうでもいいさ。とりあえず、あの石は本物らしいって事だ」

「この結界の強さからして、質も良さそうだよな」

「じゃあ……やりますか？」

「ああ、頂いちまうとしよう」

物陰から資材置き場で横たわる魔獣犬の様子を窺っていた彼等は、地上にいる仲間と合流すべく拠点建設現場を後にした。

翌日、冒険者協会バラツセ支部を訪れたリシエロはそこでリンドーラと顔を合わせた。彼女はこの街での仕事も終わったので報酬を受け取り、これから帰る所だと言っ。

「エイオアに帰るんですか。コウに預けたアミュレットはどうするんです？」

「あれは、彼に預けたままにしておきます」

何時か彼が^{コウ}エイオアの地を訪れる日があれば、自分の知り合いである事の証として良い目印にもなるからと、リンドーラは微笑んだ。優秀な呪術士や祈祷士を輩出するエイオア地方はいたる所に結界が張られているので、彼の地に行くのに祈祷士のアミュレットはとも重宝する。

リシエロはそのアミュレット目的でコウを狙う輩が現れ始めたらしい事と、そういう連中からコウを護れるよう冒険者協会に保護の申請をしに来た事を話した。

「そうなのですか。でも、心配はいらなないと思いますよ？ 彼は不滅の存在ですし、アミュレットも恐らく奪われる事はないでしょう」「不滅の存在……肉体は滅んでも魂は永遠という説の体現者である」と？」

「貴方がたの知る彼の姿はほんの一面に過ぎない、彼はもつと多くの姿を持つ存在である、という事です」

『では、私はこれで』と、リンドーラは冒険者協会の建物を出て帰国の途についた。何か核心部分をはぐらかされたと悟るリシエロは、同時に与えられたヒントについて推察に頭を捻りながら協会の受付へと足を運ぶのだった。

コウの姿と存在の仕方を正確に理解しているのは、今のところリンドーラだけである。もつとも、彼女が把握している部分はコウが魔獣に取り憑いて己が意思の元に従わせる事が出来る事と、道具などの物質を別次元に移して保持できるという一部分のみであるが。

そんな訳で、魔獣犬がコウにとって仮の身体でしか無い事を知るリンドーラは、コウが狙われる事に対しては特に心配もしていなかった。

今日も朝から地下で露店を開こうと下りて来る商人パーティーを拠点建設現場まで先導して来たコウは、何時も通り資材置き場で横になるうとして冒険者らしき男に声を掛けられた。

「えーと、言葉は分かるのかな……？　ここへ来たならコレを君に届けさせて欲しいって頼まれたんだけど」

「ヴァ？　ヴァウアウ？」 『え？　なにになに？』

小さな箱を差し出す男からは今話題になっている魔獣犬とはいえモンスターに話し掛ける事に気後れしながらも、簡単な遣いで結構な報酬を前金として貰った事に対する義務感、という感情が言葉に乗って伝わって来る。

箱には何か魔力の籠ったモノが入っているようだ。この箱を出口の所にいる男に届けて欲しいという依頼だった。

「た、頼めるかな？」

「ヴァフー」 『いいよー』

ぱくつと小箱を受け取って結界を出たコウは、上階を目指して暗い通路に駆け出した。

バラッセの街にあるダンジョンの入り口は少し開けた空間に高い鉄柵で囲まれた祠がぽつんと建っており、柵の周辺には芝生が広がる閑静な場所で、一見すると小さな公園のようにも見える。

祈祷士のアミュレットを狙う者の存在についてコウに注意を促そうとダンジョンの入り口付近までやって来たエルメールは、門の開

かれた鉄柵近くに陣取る数人の武装した冒険者らしき集団を見つけた。

最初、待ち合わせでもしているのかと思ったエルメールだったが、入り口を覗む彼等からは何かを警戒しているような臨戦態勢の気配が感じられる事に訝しんだ。装備品や出で立ちからして、この辺りの者では無い事が分かる。

何か悪い予感を覚えたエルメールが足早にダンジョンへ向かおうとしたその時、入り口の祠から黒い影が現れた。

頼まれた小箱を運んで来たコウは『外に出てもいいのかな?』と、恐る恐る踏み出した地上への階段を上りきり、初めてダンジョンの外へと歩み出る。ダンジョンの魔力が無いので身体は重いが、既に慣れた気だるさなので問題ない。

ダンジョンの入り口となっている祠のような建物を出ると、周囲を囲む柵の向こうに石造りの街並みが見えた。

『おおー、外だー』

コウが街の光景に魅入っていると、完全武装の冒険者らしき男が目の前に立った。その背後には杖を持った魔術士っぽい格好の人が控えており、何やら杖の先端を撫でながらぶつぶつ呟いている。

「よしよし、ちゃんと持って来たみたいだな」

『この人が荷物の受け取り人かな?』

お届けモノですよーと魔獣犬コウが啜っていた小箱を差し出そうとし

たその時、杖を弄っていた魔術士らしき人物が何かの動作をみせたかと思うと、突然小箱から冷気が噴出し、魔獣犬の口周りを凍り付かせた。

「今だ！ やれっ」

正面に立っていた男の合図と共に衝撃が走り、魔獣犬の首が落ちた。ゆらりと傾いだ黒い巨体が崩れ落ち、ザアっという水音を響かせながら噴出した夥しい量の血が、祠前の石畳と芝生を赤黒く染める。

魔獣犬は意思が希薄だった為か断末魔の波動も小さく、殆ど煽られる事の無いままその場に浮かぶ精神体のコウ。

「やったぜっ 一撃だ！」

「こんだけへばってりゃ当然だろ」

「おい、早くアミュレットを回収しろ！」

入り口から死角になる場所に身を潜め、リーダーの合図でターゲットの首を一撃の下に斬り落とした剣士が得意気に誇るも、サポート役だった戦士に冷静なツツコミを入れられる。そんな二人に、リーダー格の男が早く仕事に移れと急かした。

『あ、そついうコトか』

状況を把握したコウは咄嗟に手を伸ばすと、血の海に沈む魔獣犬の頭からアミュレットを喚び寄せたのだった。

いそいそと回収作業を始めた彼等が仕留めた魔獣犬の首から目的の石を取り出しに掛かるうとした時

「お前達、コウを……」

「あん？」

先程通りから現れて一部始終を見ていたと思われる地元民らしき冒険者が声を掛けて来た。ここで起き得るであろう凡その事態を想定していたリーダー格の男が、部下を引き連れて対応する。

「我々に何か用かな？ お嬢さん」

冒険者同士の紳士的な対応、だが威圧するような鋭い眼光。魔物の討伐を専門にしているグループである事を誇示するように”戦斧と大蛇”のレリーフが入ったメダルをちらつかせる。これらレリーフ入りのメダルは冒険者協会より一定の評価を得る事で贈られる実力者の証である。

ちなみに、彼等が持つ”戦斧と大蛇”のメダルはランクで示すなら五番目にあたり、かなり上位のモノだ。

「何故コウ……彼を討った」

「彼？ 我々は結界を越えて来た危険な魔獣犬を退治しただけだが？」

「とぼけるなっ あの魔獣犬に危険が無い事は知っていただろう」

「はて、君は初心者なのかな？ 危険でない魔獣など存在しないよ、妙な言い掛かりをつけるのは止めてくれないか」

彼等が祈祷士のアミュレットを狙ってコウを誘い出した事は明白だが、だからといってそれを罪に問える訳ではない。今日リシエロが協会に向いて掛け合ってくれているであろうコウの保護申請も、通るか否か分からないのだ。

例え申請が通ったとしても、今日の朝まで遡ってこの討伐集団に罰則を適応させるのは難しいだろう。

キツと睨みつけるエルメールの視線を涼しい顔で受け流すリーダー格の男は、回収にもたつく仲間にも早くしろという視線を向けた。解体される魔獣犬。そろそろ野次馬も集まり始め、ダンジョンを訪れる他の冒険者パーティーが入り口の惨状に何事かと困惑顔を浮かべている。

「おい、まだか」

「いや……それが」

「おかしいな、何処にもありやしねえ」

あまり見物人が増えないうちに手早くアミュレットの回収を図りたい彼等だったが、何故か目的のアミュレットは出てこない。

訓練学校の講師としてこの街の住人には広く顔の知られているエルメールは、ここで何があったのかを訊ねて来る野次馬の見物人や顔見知りの冒険者達に、見たままの全てをそのまま話してやった。

反応は様々で、『上手くやりやがったなあ』と感心する輩もいれば、あからさまに眉を顰める者もいる。コウに助けられた事のある冒険者達は等しく討伐集団の彼等に厳しい視線を向けていた。

「これ以上は無駄だな……引きあげよう」

剥けど捌けど目的の品はみつからず。結局アミュレットを手に入れる事が出来なかった彼等は、予定通り早々に街を出る準備を始めた。ほとぼりがさめるまでは再びこの街を訪れる事もないだろう。

凍結魔術の罫まで使って得られたものは僅かばかりの毛皮と牙が少々。それなりの価値になる長い牙は強力な凍結で砕けてしまったので、二束三文にしかならない小粒の牙ばかり。魔獣犬に罫タゲットを運ばせる為に雇った地元冒険者への報酬も含めて大赤字である。

魔獣の死骸は外に放置しておくとして街中に虫やら鳥やらの変異体が増えてしまうので速やかにダンジョン内へと放り込み、野次馬や冒険者の一部から嫌悪の視線を浴びつつ、討伐集団の彼等はこの場から立ち去った。

彼等が去った後、魔獣犬の残った毛皮を採りにダンジョンに下りる人が多数、入り口に押し寄せた。地下三階に出るモンスターの毛皮なので、討伐集団のような実力者達にとってはゴミ同然の物でも、初心者や一般民にとっては珍しくて貴重な素材だ。

一般民は記念にと持ち帰り、コウに助けられた事のある冒険者は御守りにしようと丁寧に切り分けて大事そうに包んでいた。

そんな暫しの喧騒を横目に、何とも言い難い気持ちで佇んでいたエルメールは、先程から足元でブーツをぺたぺたと叩きながら自分を見上げている一匹の猫が気になった。

剣士を志し、修行を始めた頃から今まで動物には警戒こそされど、あまり懐かれた事はなかったのだが、と猫を抱き上げる。

「なんだ？ 餌でも欲しいのか？」

険しく強張っていた顔の筋肉を緩め、優しく話しかけてみる。すると 猫の額に緑色の石が浮かんで消えた。

「っ……！ まさか、コウか？」

「みゃー」 『ボクだよー』

声を潜めて訊ねたエルメールに、鳴き声を返す猫。

「みゃーみゃーみゃみゃみゃーみゃみゃー」 『いやーもうびっくりしたよ、いきなり首が落とされたからさー』

「すまんが、何を言ってるのか分からん……とりあえずリンドーラの所へでも行くか」

コウと直接会話を交わすことの出来るリンドーラを頼ろうと判断したエルメールだったが、彼女は既に街を出て帰国の途についていたという事を知ったのは、冒険者協会から帰って来たリシエロに保護の申請が却下されたと聞かされた時であった。

06話：穏やかな生活

冒険者協会バラツセ支部の近くで大層繁盛をみせている大衆食堂。その店の奥にあるテーブル席で食事をとりながらリシエロと向かい合うエルメールは、協会にコウの保護申請が却下された件について詳しい事情を聞き、溜め息を吐く。

協会は例の討伐集団、“ガウイク隊”の動きには気付いていたが、街の統治者による意向で彼等の行動に干渉出来なかつたのだという。

優秀な実力者集団なので、統治者としては敵対したくない。魔物の討伐を専門にやっているグループは領内の安全を図る上でも欠かせない重要な存在。ましてや“戦斧と大蛇”の証を持つレベルともなれば、是非とも覚えを良くしておきたい相手なのだ。

「統治者ともあろう者が一集団のご機嫌取りとは、まったくもって情けない」

「仕方ないよ、正規軍持ちの領主ならともかく、盗賊対策にも殆ど傭兵頼みなこの街の統治者にとってはね」

人に懐いた一匹の珍しい魔獣と、存在の有無で国家間の戦況すら左右する精強集団を秤に掛けるなら、どちらを選ぶかなど考えるまでもない。こういう事があるから統治者直属の戦力となる街軍の間が冒険者協会から目の仇にされるのだと愚痴気味に嘆くエルメール。

「まあ、それはともかくとして……その猫がコウだっていうのは本当かい？」

「ああ……私も驚いたのだがな、何がどうなって　　コウ？」

若干声を潜めながらコウについて話そうとした二人は、テーブル上に零れている水を前足で器用に伸ばしながら絵を描く猫の姿に思わず顔を見合わせる。

人と動物を描いている事が分かるその絵を指して『にゃ』と鳴く猫。コウが何かを伝えようとしている事に気付いたらシエロは、ここではまずいからと食堂を出て部屋へ向かう事にした。

床に広げた紙の上に描かれていく大ネズミ、ハサミムシ、大コウモリ、大トカゲなどモンスターを示す絵と、それらを繋ぐアーチ状の矢印。それに人型。コウは人型を自分だと指し、モンスターの中に入っていく図を三段階で描き示す。

そして、見覚えがあるような剣を持つ甲冑姿の人間と対峙している二匹の犬。やはり見覚えのある格好をした三人の人間と対峙する三匹の犬。床に座り込む人間に瓶を渡している大トカゲの図が描かれると、エルメールは驚いたように目を見張って呟く。

「そうか……あのトカゲもお前だったのか、コウ」

「みやつ」

「なるほどね、彼女の言った意味がこれで分かったよ」

多くの姿を持つ不滅の存在とはこういう意味だったのかと、リシエロは納得して頷いた。

その後、絵を使ったコミュニケーションで出来る限りの情報交換を行ない、コウは自分に何が出来て何をどこまで理解しているのかを二人に知って貰う事で、この先学すべき事や知っておくべき知識を教えてもらう協力を取り付けた。

僅かな期間ながらリンドーラから学んだこの世界の事について、コウは常々もつと知りたいたいと思っ**つねつね**てはいたが、自分から言葉を伝える方法が無かったので教えを乞う機会も無かったのだ。

今回、祈祷士のアミュレットを狙った罠であったとはいえ、こうして地上に出て来られた事はコウにとって悪い事ばかりではなかった。

「しかし、コウの事情や正体がある程度分かったのはいいとして、これからどうするべきか……」

「私が預かるっ」

「え、君が？」

ダンジョンに戻してもまた同じ事が起きないとも限らない。講師という立場上、そう頻繁に個人の用事でダンジョンに足を運ぶ訳にもいかない事を考えると、コウにこの世界の事を教育するのなら一緒にいた方が都合も良い。

「でも君、動物を……」

「飼った経験はないが、コウなら手間も掛かるまい。なにせ中身は元々人間だったらしいからな」

そういつて抱き上げた猫の毛並みを撫でて手触りを楽しむエルメール。今まで動物に懐かれた事がなく、普通の犬や猫ともあまり触れ合う事がなかった彼女は、猫のもふもふな抱き心地を甚く気に入ったようだ。

「……」

もふもふして楽しそうなエルメールと、その腕の中で心地良さそうにしている猫に複雑な表情を向けるリシエロ。彼の視線に気付いたエルメールは苦笑しながらリシエロの脛をこつんと蹴った。

「あいた」

「猫に嫉妬するな」

「みゃ？」

こうして、コウはエルメールの部屋で世話になりながら地上での生活を始める事になるのだった。

訓練学校で戦闘技術の講師を務める傍ら、家では猫を相手に冒険者の基礎から教え込むエルメール。時折リシエロが差し入れと称してエルメールに会いに来ては、一晩ほど二人で出掛けて帰ってこなかったり。

寝食を共にし、留守を守ったり帰宅を迎えたりと、人間らしい生活環境を与えられたコウは穏やかで充実した日々を送りながら、稀

に思い出す記憶の整理などもしていた。

『あの鳥には見覚えがあるなあ、あつちの黒いのも賢い鳥だってイメージがあるぞ?』

温かい陽射しに照らされる窓枠に座り、通りに群れて何やら啄んでいる集団や、建物の屋根でカアカア鳴いている鳥達を観察する猫^{コウ}鳥に憑依できれば街の散策にもかなり便利そうなのだが、地上の動物達は警戒心も強く、近付いても直ぐに逃げてしまうので未だ他の動物には乗り移れないでいた。宿主が猫なので余計に鳥は難しい。ならば虫ではどうかと小さい虫に憑依して鳥に近付こうとしたが、虫にしては大き過ぎるコウの気配に警戒され、結局逃げられるのだ。

「ん? 今日はコウが入っているのか」

「にゃー」『おはよー』

訓練学校に出掛ける準備をしていたエルメールの訪いに答えるコウ。最近のコウは宿主のストレスを考慮して窓際などで抜け出し、ぼーっと浮いている事がある。その間、猫は普通の猫として行動するので、何処かに出かけていたり昼寝をしていたりと自由気儘に過ごしていた。

コウの支配を通してエルメールが危険な存在ではない事を理解する猫は、彼女から感じる強い力に比例して傍で過ごす方が安全であると認識しているので、休むときは必ずこの部屋に戻ってくる。猫はコウとしても猫としてもエルメールに面倒を見られていた。半分餌付けもされているようだが。

「ふむ。どうだコウ、一度訓練学校にも行ってみるか?」

「にゃ? にゃにゃにゃがにゃなにゃ?」『え? 連れて行ってく

れるの?』

「うーむ、相変わらず何を言っているのかは分かんが……何となく想像はつくな、ガシエの言ったとおりだ」

「うにゃ?」

ちなみに、猫の額に祈祷士のアミュレットは大き過ぎて猫が痛がる事もあり、額に緑石というコウのトレードマークは封印している。普通の猫とコウの見分け方は、毛繕いをしていたり箱座りでゴロゴロ言っている時は支配されていない普通の猫。

色々と周囲の観察をしていたり、にゃがにゃが言っている時はコウが支配している状態の猫である。

「若い訓練生達に弄られるかもしれんがな、厳しい訓練の合間の癒しになってくれれば助かる」

「にゃうにゃうー」『うん、いいよー』

以前、ダンジョンの試験で凶行に及んだ訓練生の事をエルメールなりに思い、厳しい訓練ばかりが続く殺伐とした環境の中で生徒達と講師の信頼関係がすっかり結べていなかった事も凶行に及ばせてしまった原因の一端ではないかと考えた彼女は、息抜きの意味でマスコットのような存在を用意し、より親近感を持ちやすい環境作りをイメージした。

猫の身体に人の理性と知性を備えるコウは、その温厚な性質からしても打って付けの存在と言える。

市街地から若干離れた比較的ダンジョンに近い場所に建つ冒険者協会の訓練学校。講師と同じく街から通う生徒もいれば、校舎脇の寮に住む生徒もいる。国境に近いバラツセの街には、冒険者協会の支部を持たない近隣の街から国境を越えてやって来る入校希望者も居た。

「わー、この子エルメール先生が飼ってるんですかー？」

「ん、まあ一応私が預かって世話をしている」

「にゃーお」『こんちはー』

エルメールがコウを連れて校舎を訪れると、受け持っている生徒達のみならず他の親しい講師達からも珍しいものを見たという表情で迎えられた。リシエロには事前に話しておいたので、彼は概ね予想通りな周囲の反応に苦笑している。

「かわいーっ 名前は名前は？ 何ていうんですか？」

「名は……コウという」

少し迷ったが、エルメールはコウの名前をそのまま使った。先日死んだ”魔獣犬コウ”に関連して街の冒険者の間では知らない者はいない程に広く知れ渡っている名前だが、人間に友好的だった珍しい魔獣犬にちなんで、馬やペットに”コウ”の名を付けている者も珍しくない。

一時の流行ではあるうが、そういった流れがあったお陰か、コウという名について特に気にする者はいなかった。

「先生が猫を……意外だ」

「エルメール先生なら軍用の敵つい大型犬とか、猛獣とかペットにしてそうなイメージだったんだけどなあ」

「だよなー」

「……お前達、後でじっくり話し合う必要がありそうだな」

動物を使った生徒達との円滑なコミュニケーション作戦は早速効果をもたらせているようだ。

座学などで教室にいる時は窓際でのんびり転がっていたり、生徒達と一緒に講義を受けていたり、或いは校内を散歩していたりするコウ。衛生面や校内の風紀が乱れる等としてあまり良い顔をしない講師もいたが、二、三日もすれば皆慣れてしまい、文句をいう者も居なくなった。

あらゆる動物的な粗相をしでかさない上にとっても賢く、まるで人の言葉が分かるかのような反応を示す猫は、すっかり訓練学校で馴染みの存在となっていた。尤も、学校にいる間の猫は殆どコウが支配している状態だからこそその結果なのだが。

そんな充実した学校生活の中、コウは一人の訓練生と再会した。

『あつ あの子は 』

初心者クラスの教室が並ぶ廊下を友人らしき数人の女生徒達とお喋りしながら歩いている何処かぼやっとした雰囲気の子。ダンジョンで初めて人とのコミュニケーションを果たせた相手、ブローチを落とした女の子だ。”彼”に名をくれた”コウ”の名付け人である。

「あ、コウちゃんだ」

「え？」

「にゃー」

猫コウに気付いた周りの女生徒がきゃーと寄ってきては猫の身体をもふもふし始めた。普段はエルメールが担当するもつと上のクラス付近をうろついているので彼女達はあまりコウに触れられる機会がなく、ここぞとばかりに群がっている。

「ニーナもおいでよ、コウちゃん可愛いよ？」

「う、うん　コウちゃんかあ……」

最近街でも動物に付ける名前として流行っているコウの名を聞くと、何時かのダンジョンで出会った大コウモリの事を思い出して複雑な気持ちになるニーナ。

”コウモリのコウちゃん”の事を否定していた幼馴染のルカベルも”魔獣犬コウ”の噂が広まるにつれ、あの大コウモリもそういうモンスターだったのかもしれないと考えを改め始めていた。

「にゃーにゃにゃがにゃにゃにゃ」『落し物、預かってたよー』

「うわっ　なに？　なに？」

「この子なにか喋ってるーっ　かわいいー」

女生徒の手の海から抜け出したコウはニーナの前に歩み出ると、肉球な猫の前足をひよいと差し出す。ニーナはなんだろうと思いつつその前足を手の平で迎えた。すると

「えっ！　これって……」

「なになに？　どうしたの？」

友人が覗き込んだニーナの手の上には、少し表面のくすんだブローチが乗っていた。

「にやにやにやーう」『確かに返したからねー』

驚きと困惑の表情で固まっているニーナに一声掛けたコウは、背後から迫る無数のわきわきしている手を掻い潜って廊下を駆け出した。きやあきやあと追いかけて行く女生徒達。それらの騒ぎを見送りながら、ニーナはポツリと呟く。

「コウちゃん……」

幼馴染から貰ったプレゼント。ダンジョンで失くしてしまった筈のブローチを、どうして”校舎猫のコウ”が持っていたのか。そして何故、自分に届けてくれたのか。もし、考え違いで街の何処かに落としていたのだとしても、猫のコウが自分に届けてくれた理由が分からない。

「……まさか」

名前のせいかな、そんなばかなと思えるような突拍子もない馬鹿げた考えが頭を過ぎる。

「猫のコウちゃんって、実はコウモリのコウちゃんと知り合ってたとかっ！」

廊下の先で猫がスツ転んだ。

07話：這い寄る灰色の川

今日の仕事を終えて部屋で寛いでいるエルメールの所に、書類の束を抱えたりシエロが訪ねて来る。何時ものお誘いではなく、学校行事に関する打ち合わせのようだ。窓際に浮かんでいるコウはそのまま二人の話に意識を向けた。

「明後日からの合同訓練強化合宿なんだけど、今回は西側の山麓を使う事に決まったよ」

「西側か……あそこは度々変異体が目撃されていた筈だが、討伐は済んでいるのか？」

「麓一帯はね。山奥まで入らなければ問題ないと判断したみたいだよ」

「一昨年前もいいかげんな判断で生徒に重傷者を出したのではなかったか？」

安全基準の認識が甘いのではないかと、訓練学校上層部の危機管理意識に対して不満を口にするエルメール。

訓練学校の恒例行事として毎年、一番下の初心者クラスから卒業間際の修行者クラスまで、希望する生徒達を対象に野外キャンプでの合同訓練を目的とした強化合宿が行なわれているのだが、よく怪我人を出すという事で悪名高いイベントなのである。

しかし、それほど危険な行事だと知れ渡っているが故に『あの合同訓練強化合宿キャンプを経験した』という事がステータスとなるらしく、参加希望者は後を絶たない。それなりに厳しい訓練ではあるが、生徒達の触れあいを中心とした親睦会の色も濃い。主に男女間の。

「まあ怪我をするのは大抵、若気の至りが原因だしね、しっかりと見張っていれば大丈夫だよ」

合同訓練での出会いに野外キャンプというシチュエーション。普段とは違う特別な環境に高揚し、一晚の経験とばかりに夜間こっそりキャンプから離れて不埒な行為に及ぼうとした生徒が夜の山や森を侮って迂闊に踏み入り、獰猛な獣に襲われるような事故が大半だ。

「ふん。その点、お前は大胆だったというか、馬鹿だったというべきか……」

「う……あの時の事は忘れてくれよ」

少し昔を思い出して意地悪く笑うエルメールに、リシエロは情けない声を出す。そこへ、散歩に出かけていた猫が窓からひよいと部屋に飛び込んで来た。窓際で浮いているコウに『にゃ』と一鳴きしてお座りをする。

「どうやら猫にはコウの姿が視えているらしい。『おかえり』と声を掛けつつ、コウは猫に憑依した。」

「そうだコウ、お前も一緒に行くか？」

「にゃにゃー』『行く行くー』

「そうだね、君が居てくれれば色々心強い」

「にゃっにゃにゃがにゃー』『薬とか一杯あるよー』

この日、猫も交えた強化合宿キャンプの打ち合わせは夜遅くまで続いたのだった。

合同訓練強化合宿の当日、バラツセの街より少し離れた場所に位置する山の麓にキャンプ地を設けて訓練場の設営作業を進める訓練学校生徒の第一陣。主に初心者クラスの生徒がテント張りを担当し、修行者クラスの生徒は付近を整地して訓練用の案山子などを立てて行く。

水や食糧は馬車に十分積まれているが、一応狩りによる調達も訓練内容に入っている。講師は四人で生徒数は三十人。今回の合宿に参加できなかった参加希望者は、また後日別の組で来る予定だ。

強化合宿キャンプの訓練場が概ね形を成してきた頃、荷物置き場の脇で”猫とブローチと大コウモリ”について話す初心者クラスのニーナと、彼女の幼馴染で修行者クラスのルカベル。

「確かに、俺が君に贈ったモノだな……」

「でしょ？ わたしも何がどうなってるのか気になっちゃって」

講師エルメールの連れて来たコウの名を持つ猫が、何故ダンジョンで失くした筈のブローチを届けてくれたのか。大コウモリのコウちゃんとの関連はあるのか、一つのブローチをめぐる謎は彼等の冒険者魂を擲る。

「こらそこ、何をサボっている」
「わっ エルメール先生」

設営作業は殆ど終わっているとはいえ手持ち無沙汰なら他を手伝えと、早速いちゃついているカップルを見つけたエルメールは注意を促す。ニーナは先生に叱られたとあたふたしていたが、ルカベルは猫とブローチの事が気になった。

「エルメール女史」

「ん？ どうした」

ルカベルは思い切ってブローチの事を話し、猫コウについて訊ねてみる事にした。

「なるほどな……」

二人の話を聞いたエルメールは腕組みをしながら頷く。コウの名前に纏わるエピソードについては、絵を使ったコミュニケーションとコウが僅かに覚えた文字で大まかな内容を把握していた。ちなみに、コウが最初に覚えた文字は自分の名前だったりする。

少し考え、名付け親となった少女ニーナや、この少年ルカベルには教えても構わないかと、エルメールはコウの存在について語り始めた。あまり公にするのは憚られるが、おそらくそのコウモリは”コウ”であると。

多くの人に知られる事となった例の魔獣犬も中身はコウであった

と教えられ、二ナはそんな事もあるんですねーと素直な反応を見せる。

一方で幼少の頃から冒険者の両親に連れられて色々な所を旅して回った経験により、他の訓練生達に比べると冒険者として精通しているような素振りを誇示していたルカベルは、世の中にはまだまだ自分の知らない事が沢山あるのだなあと、己が慢心を自覚したようだ。

二人の生徒と話している講師の所に、修行者クラスの纏め役生徒が設営完了の報告にやってくる。山麓に沢山のテントが並び、訓練場として整地された一帯では炊事の準備も始められていた。そして話題の中心となっていた件のコウはというと

『猫ぱーんち！ 猫ぱーんち！』

設置された訓練用案山子の肩に登り、革兜の顔に猛ラッシュを浴びせて遊んでいた。

初日は訓練場の設営と野営の準備だけで、本格的な訓練は明日からになる。陽も落ちて辺りが暗闇に包まれる頃、強化合宿キャンプ地ではテントの傍で幾つかの焚き木が燃え盛り、交代で火の番をする生徒達の姿が垣間見られた。これも野営訓練の一環である。

「このように、焚き木の枝もイザという時の武器になる。掴むのが

間に合わない場合などは相手に向かって蹴飛ばすなり、剣で弾くなり」

焚き木の間をゆっくり歩いて周りながら、講義を行なうエルメル。月と星の輝く夜空から視線を下ろしていくと、山の形に切り取られたような闇が聳えている。そこには暗闇の中で活動する多くの生命が様々な形で共存しているのだ。

夜の山中に蠢く夜行性の動物達は、山の麓に集まった多くの人間の気配と火に怯え、警戒し、或いは興味を持ち、木々の奥から様子を窺いに来たり、別の場所へ移動を始めたりと活発な動きを見せていた。

「よし、今日はこれまでとする。各自焚き木の番を怠らないよう順番に休め。以上」

今日の講義を終えて講師用の大テントにやって来たエルメルは、見張りに就く同僚講師に挨拶してテントに入った。

中ではリシエロが簡易テーブルに向かって書類とにらめっこをしており、その隣で猫が丸まって寝息を立てている。コウ自身は”睡眠”を必要としないそうなので、テント内の何処かに浮かんでいるのかもしれない。

「どうしたりシエロ、難しい顔をしているな」

「ああ、明日からの訓練方針についてちよっとね」

強化合宿では野外訓練ならではの自然環境を利用した訓練内容として、薬草採取にその調合、木の実採りから罫を使った狩りによる食糧調達、飲料水の確保などなど冒険者には必修スキルともいえる基本的な技術の実践訓練が行なわれるのだが。

「何か問題があるのか？」

「問題というか、心配事というか……」

この辺りに現れていた変異体について情報のお返しをしている内、少々気持ちに引つ掛かる事があるのだという。確認されている変異体は狼が元になったと思われる猛獣型の群れで、少し山奥まで入った所では蛇型も目撃されていた。

麓に屯していた猛獣型の群れは討伐隊に追い払われているので、火の炊かれる人間の多いキャンプに近付いて来る事はないだろうと見られている。蛇型もわざわざ山奥から下りてくるとは思えず、故に、今回の合同訓練は山の奥まで踏み入らなければ危険は少ないと考えられていた。

「麓近くでは普通の動物が活発に動いている気配も確認されてるんだけど、どうもそこが気になっちゃって」

「普通の動物が居るという事は、近くに変異体や魔物の類が存在しないという事だからな」

安全が確保されている証ともいえるのだが、リシエロは何かが気に掛かるらしく、先程からこの近辺一帯に関する情報を集めた書類とにらめっこをしているのだ。『何かを、見落としてはいないか？』と。

「ただの杞憂ならいいんだけどね」

「お前はそういう部分で危険を察知する能力が高いからな、何かあるのかもしれない。私も一緒に考えてみましょう」

翌日。見張りに就いていた講師は大テントの中で休息に入り、リシエロとエルメールは生徒達の訓練を指導する準備に入る。結局リシエロの気掛かりを晴らせる答えは見つからないまま、訓練は予定通り開始される事になった。

まだ薄暗い夜明け前から、案山子の並ぶ訓練場にて打ち込みを続ける初心者クラスの生徒達。彼等を担当するリシエロは時折指導を交えつつ、覚醒しきっていない寝惚け眼のボンヤリした意識で下手な打ち方をしてしまい、手首を傷めたりする生徒の治療にあたっている。

すっかり目を覚ましている修行者クラスの生徒はより実戦的に二人一組での打ち合いを行っており、こちらはエルメールが指導していた。

猫はというと、テントの並ぶ一帯や訓練場の周りをウロウロと歩き回り、山側の茂みなど木々の間に注意を向けながら行ったり来たりしていた。昨日のリシエロとエルメールの話を聞いていたコウは、彼なりに考えて二人をサポートすべく付近のパトロールをしているのだ。

『テントの裏通り異常なしっ 次は案山子通りだ』

きびきび働いているつもり気持ちは猫の身体にも伝わってか、尻尾がふんっふんっとして揺れている。時々草むらの虫が目の前をぴよーんと横切り、その都度ジャンプアタックしてしまうのは猫の性が強烈に働いた為だろう。が、コウの任務（という事になっている）に支障はない。

「もたもたするな！ 食い終わったら訓練場に集合だ！ 食い終わらなくても集合だ！ 遅れた奴はその場で腕立て100回だ！」

「ひいっつ」

「エルメール女史、鬼だー」

夜明け前の早朝訓練が一段落し、慌しく朝食を済ませるとそのまま朝の訓練に追い立てられる。初日のどこか浮ついた雰囲気でもノンビリしていた空気など一気に吹き飛ばされ、本格的に厳しい強化合宿の合同訓練が始まった。

「よし、ではまず能力別に班を分ける。メンバーで相談して班長^{リーダー}以下それぞれの役割を決めろ」

朝からは初心者クラスと修行者クラス混合の班を組んで行動する。予め作成しておいた各生徒達的能力判定書に従って班分けを行ない、その中で役割は生徒達に相談させて自主的に決めさせるのだ。

「決まったら一斑と二班は集団戦の訓練だ、修行者クラスの者は初心者クラスのメンバーを指導してやれ。残りの班は私について来い」

集団戦訓練の班をリシエロに任せたエルメールは、三班から五班までを引き連れて山へと向かう。これからそれぞれ食糧調達や薬草採取、罾の種類から仕掛け方、解体法などの指導を行なう。

強化合宿の方針として明日以降の生徒達の食事は訓練による狩りで賄われる事になるので、獲物の獲り方指導には皆、真剣である。

「あそこの枝に布を結んであるのが見えるか？ あの木より奥へは

行かないように注意しろ。では各班、調達開始！」

号令と共に山へと踏み込む生徒達。薬草は料理の調味料にも使われるモノから山菜そのものなモノまで様々な種類があり、毒を持つモノも混じっているので扱いや選り分けは慎重に行なわなくてはならない。

「エルメール女史、あそこに山ウサギが居ますけど、直接狩るのは駄目なんですか？」

「いや、構わん。腕に覚えのある者は仕留めてみる」

「エルメール先生、猫ちゃん^{ネコ}が山猫に追いかけてますけど……」
「うん？ ああ、大丈夫だ。気にせず採取に励め」

修行者クラスのメンバーは他の班と競うように山ウサギを追い始め、初心者クラスのメンバーは街で見かける野良猫と比べて一回りは大きく、しかし狩りに適したスリムな体格の山猫から木々の合間を逃げ回っている猫^{ネコ}を気にしながら薬草や山菜を集めている。

『うひゃーっ ああ猫、食べる気満々だー！』

ガサガサガサつと落ち葉を巻き上げながら縦横無尽に走り回る猫。コウは身体のコントロールを宿主に任せて精神体を半分ほど出すと、迫る山猫の目の前に手を翳すなど追跡妨害をして猫の逃走を手伝っている。

山猫は良い肉をつけた美味そうな街猫に食い気半分、身体から人間に似た妙なモノを生やしている事への興味半分で追い回していた。時折その妙なモノが攻撃っぽい動作をするので回避行動を取ると、

その隙に爪の射程外へと逃げられる。その為、山ウサギよりも動きの鈍い街猫をなかなか捕らえられずにいたが、それはそれで追い掛けるのが面白い。山猫はこの珍しい獲物の狩りを楽しんでいた。

『猫君つ エルメールさんの所へ逃げよう!』

宿主から『それがいい』と言うような思念を感じ、コウを乗せた街猫は山の柔らかい黒土に爪を立てながら急旋回、訓練生達の集まっている方向へと駆け出す。実はこの追いかっこ、イザとなればコウが山猫に乗り移ることで事無きを得られる出来レース。

山猫は狩りを楽しんでいるつもりだが、スリリングな狩られる側として本当に楽しんでいるのは街猫の方であった。

と、その時。突然ピタリと動きを止めた山猫は警戒するよ
うに木々の奥をじっと見詰め始め、やがて身を翻すと何処かへと走り去ってしまった。山猫が去ったのち、数瞬遅れて街猫もその気配に気付き、毛を逆立てて身を低くする。

木々の向こう、山奥の方から感じる冷たい気配。街猫の中に入ったコウは、エルメールの足元まで駆け寄ると警戒を促した。

「どうした、コウ?」

「にやにやにやーにやがにやが!」『何か大きな生き物が近付いて来るよ!』

猫^{コウ}を追い掛けていた山猫の姿は無く、山の奥方向を前足で指しながら何かを伝えようとにやがにやが言っている猫^{コウ}を訝んだエルメ
ールは、木々の合間に目を凝らして耳を澄ます。そこでふと違和感に気付いた。

「鳥の鳴き声が聞こえない……？ それにこの音は……　っそうか！」

「昨晚リシエロがしきりに気にしていた『なんらかの見落とし』。その正体が分かったエルメールは、急いで生徒達に退避を呼び掛ける。」

「全員作業を中止してこの場から離れる！　訓練場まで走れ！」

「一体何事かと戸惑いの表情を浮かべた生徒達は、剣に手を掛けて臨戦態勢に入っているエルメールの姿に慌てて走り出した。」

「エルメールも猫と共にじりじりと退り始める。最初、合宿キャンプ地となるこの山麓を訪れた時は気付かなかった違和感も、一度気付いてしまえばハッキリと認識できる。」

「今は不自然なほど静まり返っている鳥の鳴き声や動物の気配だが、昨夜から今朝に掛けては夜行性の動物が活発に活動していた。」

「麓近くには多いと思ったが……そういう事が」

「エルメール！」

「生徒から事情を聞いたリシエロが駆けつけ、エルメールと並んで臨戦態勢を取りながら周囲の状況を観察し始める。」

「他の講師も起こすよう生徒達に言ってきたんだけど、一体なにが？」

「昨夜お前の言っていた”見落とし”の正体が分かった」

「この一帯に屯していた変異体の群れは追い払われた。だからといって、今まで餌食となっていた普通の動物達が急に増える訳ではない。」

人間に対しては変異体よりも慎重で臆病な行動を見せる普通の動物達が、なぜ朝になっても直ぐ近くで山ウサギを見つけられるほど麓付近に多く集まっていたのか、その理由。

パキパキと木の折れる音がして、青々と茂る葉を付けた大きな枝が落ちてくる。二人と一匹が見上げると、木と木を繋ぐ極太のロープか吊り橋の如く長い胴を宙に這わせた大蛇が、巨大な鎌首を向けてちろちろと二又の舌を覗かせていた。

「追い払われた猛獣の変異体が、山奥で活動を始めたら……どうなる？」

「はは……餌が無くなるね」

麓と山奥で棲み分けが出来ていた猛獣の変異体と大蛇の変異体。人間に追い払われた群れは麓に獲物が集まっても、それを獲りに下りる事を躊躇する。結果、群れで活動する猛獣の変異体に餌場を荒らされた大蛇の変異体が、麓に集まっている餌を獲りに山奥から這い出て来た。

元々巨大な体躯に育つ蛇が変異体になる事で更に巨大化してしまった大蛇である。この山の主とも呼ばれていたようだ。

『でつか！ なっが！ 凄いなあ二十メートルくらいありそう』

猫視点でなくとも大き過ぎる大蛇の変異体を見上げたコウは思わず感嘆の声をあげるが、その声に気付く者はいない。数本に渡って木に巻きついている黒と灰色の斑模様がズルズルと流れ始め、大蛇はゆっくりと地面に下りる。

と思ったら巻き付かれていた細めの木が途中でへし折れてしまい、ポトポトポトツと一気に落ちて来た。

「アレに勝つ自信はあるかい？」

「逃げ足ならな。コウ、飲み込まれるなよ？」

「にゃっ」

そういうと、二人と一匹はぐるりと回れ右をする。そして

「走れ！」

「退却だねっ」

「にゃーっ」

一目散に逃げ出したのだった。

08話：猫と大蛇と子犬と少女

悲鳴や怒声が響く山麓の合宿キャンプ地を、黒と灰色の斑模様に乗られた巨大な蛇の変異体が、胴体に火の玉やら氷塊やらを受けながら大木のような巨体をくねらせてズゾゾと進む。その鈍重そうな見掛けに反して中々に機敏で、人が小走りする程の速度で這いまわるのだ。

そこらを徘徊している獣の変異体などが数匹現れる程度ならば引率の講師達だけでも十分に対応できるのだが、流石にこれ程の大物が相手となると、生徒達を避難させるのにも一苦労であった。

「纏まって動け！ 決して班から逸れるな！」

「魔術を使える者はテント側から攻撃して注意を惹くんだ！ 馬車に近付かせるな！」

エルメールとリシエロがある程度の戦闘経験を持つ生徒を指揮して大蛇の誘導を試み、他の講師二人は残りの生徒達を馬車で避難させる為に馬を繋ぐ作業を進めている。

「落ち着いてしっかり狙え！」

的が大きいので魔術も飛び道具も当て易いのだが、実戦慣れしていない訓練生達は蛇独特のぐねぐねとした動きをこの大きさで直視する事に生理的嫌悪感や恐怖心で萎縮してしまい、命中率は芳しく

無い。

そんな中、訓練生の中では一番実戦経験が豊富なルカベルは、手製のスリングを使って危なげなく大蛇に石飛礫を見舞っていた。

「ルカベル、お前が一番安定しているな。付いて来い、奴を山側に誘導するぞ！」

「はい！」

ルカベルを引き連れたエルメールは大蛇の尻尾方向に周りこみながら石飛礫で頭部を狙うよう指示を出す。この種類の蛇は毒を持っていなかったと記憶しているが、変異体相手に通常生物の知識はあまり当てにならないので、接近戦には注意が必要だ。

「こゃー」

「コウ？ 危ないぞ、生徒達の所へ避難している」

何時の間にか足元に居た猫はエルメールの肩に飛び乗ると、大蛇に向かって狙いを定めるように姿勢を低くとった。

「お前なにを まさか、乗り移る気か？」

「こゃっ」

コウがどのようにして対象の生物に憑依するのか、原理までは不明だが、その手順は絵を使ったやりとりで視覚的に説明を受けている。『それならば』と、エルメールは猫が大蛇の頭部へ近づけるよう作戦に修正を加えた。

当初の予定では大蛇を山側に誘い込んで足止めをしつつ、一旦全員で安全な場所まで撤退し、冒険者協会の精鋭や日雇いの冒険者達を集めて総出で討伐を行なうつもりだったのだが、コウが例の魔獣

犬のようにこの大蛇も支配できるなら、その方が安全だ。

「エルメール！」

「リシエロ！ お前も援護に加われっ 大蛇の頭を狙う！」

突然無謀な行動に出始めるエルメールに慌てたりシエロは、援護用の術を練り上げながら駆け寄って来た。

「無茶だ！ 僕らの装備じゃ倒せっこないっ」

「倒すのではない、一時的に無力化させるのだ」

「無力化って……そうか、コウをあの大蛇に
「にゃ〜っ」

察しの良いリシエロの呟きに、エルメールの肩から『そうだよ』と答える猫^{コウ}。大蛇の頭部付近にも憑依の入り口となる穴の存在を感じとれたので、一定距離まで近づけられれば乗り移る事が出来る筈だ。

「なるほど、でもそれなら態々危険を犯して蛇の正面に近付かなくても、猫^{コウ}を蛇の頭近くに投げればいいんじゃないかな？」

あれほどの巨体だ、頭なり胴体なりにしがみ付く事は猫にとって造作もないだろうと指摘するリシエロ。

「……その手があったか」
「にゃ？」

ルカベルを筆頭にした誘導組をリシエロが指揮して大蛇の気を惹

き、蛇の頭が彼等を向いた瞬間を狙って背後から駆け寄ったエルメールは、掌に乗せた猫を大蛇の頭部目掛けてぶん投げた。

それは蛇の察知能力か本能か、背後より急速接近してくる”何かの気配”に気付いた大蛇はぐるんと首を回して振り返ると、飛んできた小動物を大型の動物でも丸呑み出来そうな大きな口を開いてパクリと受け止めた。

「あ

「あ

エルメールとリシエロが同時に声を失い、固まる。

「食べられたー！」

「こ、コウー！」

思わず剣を振り翳して救出に動いたエルメールの前に大蛇の鎌首がめつと降りてくると、その大きな口が開いて猫がころりと吐き出された。特に外傷もない様子の猫はプルルイツと身体を振るわせて軽く毛繕いをする、大蛇を見上げて「にゃ」と一鳴き。

まだ壊れていないテントの傍までトコトコと移動し、そこで本格的な毛繕いを始めた。不意に訪れた長閑な光景に戸惑うエルメール達。猫が毛繕いをしているという事は、猫の中に今コウは居ない。動きの止まっている大蛇を振り返る。

「…………コウか？」

そう訪い掛けると大蛇の額に緑色の石が浮かび上がり、エルメールに肯定の意思を示したのだった。

その後、連絡を受けた冒険者協会バラッセ支部からの応援部隊が午後になって現場に到着。要請したのは討伐用の精鋭部隊や日雇い冒険者ではなく、猛獣など大型の動物を飼育する為に使う大きな檻で、運んで来たのはガシエの率いる防衛隊であった。

「こりやあまた……すげえ大物にクラスチェンジしたもんだなあ？

コウよ」

「シャ〜シャシャ」『ガシエ、久し振りー』

檻を開く準備や怪我人の治療などが行なわれている現場の喧騒を他所に、部下達の目を盗んでこっそり大蛇コウに話しかけているガシエ。コウが他の生物に憑依して生きる特殊な存在である事を詳しく知っているのは、直接会話をしていた祈祷士リンドーラや、コウと同じ居生活を送っているエルメールにリシエロ、二人から話を聞いているガシエ、他は訓練生のルカベルとニーナだけである。

ガウイーク隊の一件以来、バラッセの街のダンジョンに”魔獣犬コウ”のようなモンスターが現れる事は無くなったので、一般的にはあの魔獣犬を支配していた『集合意識とは別の知的存在』は消滅したものであるという認識で定着している。

「やっぱコウの事は伏せとくのか？」

「ああ、態々教えてやる事もなかるっ」

「上の連中に知られたら知られたで、また色々とコウが面倒事に巻

き込まれるだろうからね」

コウを見捨てた街の統治者や協会上層部に思うところもあるエルメール達は、なるべくコウの事は公おおやけにしない方針で意見の同意を図ると、今回の大蛇捕獲は一時的にモンスターを服従させるマジックアイテムを使って捕らえた事にしようと言裏を合わせる事にした。差し当たり、コウは正体を隠す為に額の緑石を引っ込めておく。

「隊長ー！ 檻の準備できましたー！」

「おう、分かった」

平台に檻を載せた専用馬車の傍から呼ぶ部下に答えたガシエは、それじゃあ大蛇を檻に収めようかと歩き出し、エルメールもその後続く。リシエ口は怪我人の治療を手伝いに行くと言ってテントの方へと小走りに駆けて行った。

「いくぞ、コウ」

「シャ」『うん』

体長約12ルウカと計測された大蛇の変異体。コウの知る単位に表すと凡そ18メートル。巨体過ぎて上手く動かせないのも、エルメールに下顎部分を引いてもらう事でどうにか真っ直ぐ蛇行している。

その姿は傍から見れば、エルメールが大蛇の頭を肩越しに撫で付
けながら歩いているようにも見えた。

”大蛇を従えたエルメール女史”を目にした一部の生徒達が、とても納得したようにうんうんと頷き合う。

「やっぱりああいうのがしっくりくるよな」

「正直、猫は無いと思ったけど、大蛇ならばうちりだよ」

「あれこそエルメール先生だ」

「……お前達」

びきびき。

とぐろを巻き巻き檻に収まる大蛇^{コウ}。大蛇の扱いに関しては協議の結果、街の出資で冒険者協会が飼育する事に決まったらしい。巨大蛇による家畜の捕食シヨールのような感じで良い客寄せが出来るとして。

「使わなくなった闘技場があるだろ？ あそこを蛇の飼育場兼、シ

ヨールの舞台として整備してるとさ」

「相変わらず儲け話に関しては仕事が速いんだな、協会は」

昼過ぎに防衛隊から伝送具で詳細を聞き、夕刻には受け入れ態勢を整えて舞台の準備まで進めているという話に呆れ半分なエルメール。

「しかし、こんな檻で大丈夫か？ この大蛇が本気で暴れたら、持たないように思うが」

「だよなあ、俺もまさかここまでデカイとは思わなかったし」

「シャ？」

檻から飼育場に移すのも大変そうだという事で、コウには街の飼

育場に入るまでこのまま大蛇を支配してしてくれた方が助かる事を話すと、コウもそれを了承した。一足先に街へ戻る事になるが、運良く鳥にでも憑依できれば、またココまで飛んで来る事もできる。

そんな訳で、大蛇コウを乗せた専用馬車は護衛の防衛隊半数と共に翌朝早く強化合宿のキャンプ地を出発し、バラツセの街へと帰還した。道中の街道に入ってから、巨大な蛇を積んだ馬車の檻に道行く旅人達が皆驚いて振り返り、宣伝効果もバツチリだ。

街に到着してからも冒険者協会の施設に入るまでの間、檻の周りには常に人だかりが絶えない状態で、大蛇コウが右をみれば『キヤー』左を見れば『ワー』上を見れば『オオー』といった具合に大騒ぎだった。

闘技場を改築して造られた特製の飼育場に放される大蛇。周囲の壁には内向けにぐるりと格子の板が張り出しており、大蛇の脱走を妨げる。にゅーっと鎌首もたを擡もたげて覗き込んだ壁の向こう側には、階段状に並ぶ観客席らしき設備が見えた。

『さて、これからどうしようかな』

張り出した格子の板に顎を乗つけて立てた胴体をぶらんぶらんさせていたコウは、壁の縁から吠え掛かっている子犬を見つけたのでそちらに身体を伸ばす。飼育員の人達が何やら騒いでいるようだが、気にせず子犬の近くまで頭を寄せると、コウはその子犬に憑依した。

『よし、これで街中を自由に動けるぞ』

支配を解かれた大蛇はキョロキョロと周囲を見渡し、『何だこころは』とばかりに飼育場の中をうろつき始める。

ついさつきまで大人しかつたのに急に落ち着きがなくなった大蛇を見て、飼育員達はマジックアイテムによる服従の効果が切れたのだらうと判断したようだ。これからは用心して接するようにしなければと気を引き締めていた。

一方、子犬に憑依したコウは準備中の札が掛けられた”巨大蛇の捕食ショー”の舞台となる元闘技場施設を抜け出し、街の通りを適当に歩いていった。この子犬、頭に小さなリボンを付けて、首に綺麗なスカーフが巻かれており、毛並も良く手入れされている。

子犬の意識から感じ取れた限り、誰かの飼い犬である事が窺えた。他人の飼い犬なら長く憑依している訳にもいかないなど、他に乗り移れそうな個体はいないか辺りを見回したコウは

「ここに居たのねファスター、やっと見つけたわよ？」

と、子犬の名前を呼んだ少女にひよいつと後ろから抱き上げられた。見上げれば歳の頃はニーナ達と同じくらいだが、ふわつとした美しい金髪に澄んだ碧眼、高級そうなドレスを纏い、整った顔立ちは幼げでありながら何処か大人びて見える。

「まったく、一人で何処かへ行つては駄目でしょう？」

「アリスー？ もう行きますよー？」
「はい、お母様。 直ぐ行きます」

通りに並ぶ高級馬車の窓から控え目な声が響き、アリスと呼ばれた少女は子犬をよいしょと抱き直すと、馬車に向かって歩き出した。

「さあ、行きましょう」

何処か他所の街に住む貴族の令嬢だったらしく、少女を乗せた馬車はそのまま大通りを抜けて街を出る門へと走り出す。近くに手頃な動物が居なかつたので、少女の腕に抱かれている子犬コウも一緒に街を出る事になってしまった。

『うーん、困ったなあ……黙っていなくなったら、またエルメールさん達に心配かけちゃうし』

バラッセの街の西門にて、訓練学校生達の強化合宿キャンプ地から引き上げてきた残りの防衛隊は門の出入り口で門番に制止を掛けられ、ぶー垂れていた。何でもこの街の統治者と親しい間柄にある由緒正しい貴族家の馬車隊が通るので、優先的に道を開けるようにとの御達しが出ているらしい。

「まったく、こっちは仕事帰りだっつーのによ」

「まあ、仕方ないんじゃないですか？ 相手は高名なお貴族様らしいですから」

暫らくすると黒塗りの豪華な高級馬車が列をなしてやって来た。細かい装飾がさり気無く表面を飾る立派な車体も然ることながら、馬車を引く馬も相当に良い血統を持つのである。事を窺わせる素晴らしい毛並。

あれ一頭で幾らくらいになるだろう等、部下達と庶民的な話題を交わっていたガシエは、直ぐ傍で響いた犬の吠える声に振り返った。今正に通り過ぎようとしていた一台の高級馬車、その窓から顔を出している子犬を見て、ガシエは思わず目を見張る。

門を出る所でガシエ達の姿が見えたので、子犬は馬車の窓から顔を出して一吠え。『ん？』と振り返ったガシエによく見えるよう、子犬の額に緑石を出現させた。

「あつ」

というガシエの表情を確認し、後はエルメール達に説明してくれるだろう事を期待して、コウは宿主となる子犬のフアスターや、その飼い主であるアリス嬢たちと共にバラッセの街を後にするのだった。

09話：お嬢様と子犬

バラッセの街から街道を西に向かい、馬車で二日ほど移動した先の山間を抜けると、広大な平原の広がる一帯にクラカルの街が見えてくる。グラントール地方で最も広い平野地帯に栄える農業と畜産が盛んな街。長閑でありながら活気溢れる大きな街であった。

クラカルの街に入った馬車隊の列は、街の中心区画にある高い堀に囲まれた大きな屋敷の正門を抜けて広く閑静な敷地内を通り、やがて宮殿のような建物の前で停車。馬車のまま通過できそうな程に大きい両開きの扉前から、使用人達が列をなして出迎える。

「さ、着いたわ。部屋に戻ったら毛の手入れをして貰うのよ？」

「ファスター」

「アウ」

『大きい家だなあ、貴族の人の家ってみんなこんな感じなのかな？』

あまり子犬を支配せず、殆ど乗っかっているだけの状態で二日間の旅を過ごしたコウは、子犬の主である少女アリスの家の規模に感嘆の声を上げていた。バラッセの街の訓練学校校舎より大きいかもしれない。

一つ前の馬車から控え目な色調のドレスを纏った妙齢の婦人がゆっくり降り立ち、直ぐ脇に控える初老の男性が恭しい挨拶で迎える。

「御帰りなさいませ、奥様、お嬢様」

「買い付けた嗜好品は明日から使うように。美術品は何時もの部屋に運んでおきなさい」

「畏まりました」

アリスの母である奥方は執事に要件だけ申し付けると、さっさと自分の部屋に籠るべく侍女を引き連れて行ってしまった。子犬のフアスターを抱いて玄関の扉を潜ったアリスは、無駄と知りつつも執事に父の事を訊ねてみる。

「お父様は？」

「旦那様は朝から行政院の方へ出掛けておられますので、まだ御戻りになられておりません」

「そう……今日も忙しいのね」

二階に上がったアリスは自室に向かう廊下の、途中にある部屋に立ち寄った。アリス付きの侍女が扉を開くと、この部屋を管理している使用人の男が出迎える。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「フアスターの毛並が随分と乱れてしまったわ、リボンとスカーフも取り換えておいてね、ランドン。湯浴みは夜からいいわ」

「畏まりました」

広々とした空間にフカフカの絨毯が敷き詰められ、沢山のクッションを重ねた高級そうなソファー、天幕付きの小さなベッド。なんとこの部屋はファスターの為に用意された犬小屋ならぬ犬部屋であった。ペット用の浴槽も完備している。

『凄いなあ、ファスター君セレブじゃないか。……セレブってなんだっけ？』

コウが貴族の生活スケールに驚いたり記憶の整理などしているうち、ファスターは世話係のランドンに預けられた。アリス嬢からファスターを受け取ったランドンが丁寧に抱き上げると、ファスターはグーッと唸り声を上げる。

「駄目よ？ ファスター、大人しく良い子にしてなさいね？」

そう言っただけ、三度ファスターの頭を撫で付けたアリスは、着替える為に飼育部屋を後にした。

扉が閉じる直前まで尻尾をパタパタ振っていたファスターは、アリスの姿が見えなくなると尻尾を丸めて震え始めた。丁寧に抱き上げていたランドンが何時ものように片手で子犬ファスターの首根っこを掴み上げると、無造作にソファーへと放り投げる。

積み上げられたクッションに突っ込みながら着地したファスターはそのまま蹲って大人しくなった。

『なんだ？ なんかわだぞ？』

急に雰囲気が変わった世話係の様子に、コウは子犬ファスターの感情から情

報の読み取りを試みた。そこから何となく拾えたイメージを纏めると、どうやらこの世話係は影で日常的にペットへの虐待を行なっているようだ。

「っち、犬の美容に使う金でどれだけの人間を食わせられると思っ
てやがる」

ぶつぶつと悪態をつきながらも手際良く道具を揃えると、ソファ
ーで大人しくなっているファスターの毛を整えていく。

彼は自身が仕えるこの家の主を嫌っている。憎んでいると言っ
ても良い。表の顔では恭しく従順に振る舞い、裏では歪んだ感情でお
嬢様のペットに八つ当たりの虐待を働く毎日。そんな方法でしか鬱
憤を晴らせない事に、彼は日々苛立ちを募らせていた。

暫らくすると普段着のドレスに着替えたアリスが飼育部屋を訪れ
た。今日の帰宅に合わせて友人とお茶会をする予定を立てていたの
で、何かと友人に人気のあるファスターも同席させるのだそうなの。
やって来たアリスに尻尾を振って出迎え、その胸に飛び込んだフ
アスターは世話係に威嚇を始める。

「ランドン、あなた相変わらずファスターに唸られてるのね」

「やはり身体を洗われるのが嫌らしく、中々懐いて貰えないよう
でして」

困ったように微笑みながら話すランドン。

「そっ……、困ったものね」

アリスはそれだけ言うと、リボンとスカーフも新しくブラッシングも済ませたファスターを連れて一階ホールへと下りていった。

庭園に用意されたお茶会の席にて、ファスターはアリスの友人であるご令嬢達に構われてご満悦のようだ。犬種が大型犬なので、成長した姿がとても楽しみだと少し長めの毛を撫でられている。

『アリスも可愛いけど、友達も美人さんばかりだなあ』

煌びやかなお嬢様方に囲まれ、コウも何だか楽しい気分になってきた。ちよつとファスター君と変わって貰おうかな〜等と考えていると、背中を撫でていた令嬢が『あら？』と、手を止めて毛の付け根部分に目を凝らす。

「どづかしましたの？」

「ここ、赤くなっていますわ。虫に刺されたのかしら」

「まあホント、何だか痛そうですね」

わさわさと毛を掻き分け、赤くなった部分を観察するお嬢様方。ファスターは撥ったそうにしている。常に子犬と共に居るコウは世話係のランドンが乱暴にブラシを立てていたのが原因だと知っているが、どうにかして虐待の事をアリスに伝えるべきかと迷う。

「……後で獣医に軟膏を塗って貰いましょう」

少し腫れているのか炎症を起こしている部分をそつと撫でたアリ

又は軽く溜め息を吐いた。

お茶会もお開きとなり、アリス達は屋敷の一階ホールにやって来た。友人達の帰宅準備が整うまで談笑して過ごしていると、床に鎮座していたファスターが突然ぱつと立ち上がったて駆け出した。

「おおつとつと、飛びついたら危ないぞ？ ファスター」

「あら、セロード。これから庭の手入れかしら？」

「はい、お嬢様。そろそろ次の季節の花を植える予定です」

庭師の助手をしているセロードという若い使用人。少し線が細く、素朴で優しそうな雰囲気を持ったこの青年にはファスターも懐いている。やがて馬車の用意が出来たとの知らせが来たので、アリスはファスターを彼に任せて友人達の見送りにホールを出て行った。

「アウト アウト」

「よしよし、今あげるからちよつと待つてな」

後ろ足で立ちながらセロードの膝に前足を付いて尻尾を振っているファスターに、セロードはポケットから何時もお菓子を取り出した。ファスターが彼に懐いているのは、実は何時もこうしてお菓子を貰えるからだったりする。

「お嬢様にはナイシヨだぞ？」

「アウト ハグハグ」

『……うん？ こついつのつて、犬とかに食べさせちゃ駄目なんじやなかったっけ』

ファスターが嬉しそうに頬張っている干しぶどう入りのお菓子を
見て、コウは自分の記憶にある『犬に与えてはいけないモノ』とい
う知識に引つ掛かった。とはいえ、自身の持つ記憶は恐らくココと
は違う別の世界の記憶。この世界の常識とは違うのかもしれない。
しかし

『なんだろう？ ファスター君は嬉しそうなんだけど……』

お菓子を食べているファスターに向けられたセロードの目は、世
話係のランドンがファスターを見る目に似ている。

そう思ったコウは精神体を半分以上出した状態でセロードの言葉
に意識を向けた。この世界の言葉を、それを口にした相手の意思か
ら認識して理解するコウは、言葉に乗って放たれた意思と一緒に零
れてくる僅かな思考を拾ってその内容を読み取る事が出来る。

「美味しいかい？」

優しげに囁くセロード。その言葉の奥にある感情を、零れた思考
から拾い上げた。

まだピンピンしてるな、犬の身体に良くないって聞いた食べ
物を混ぜてるのに……もっと量を増やそうか

『……』

セロードから読み取れた本音には、お嬢様や伯爵様に逆らえない
ので、お嬢様のペットに復讐しているようなきらいが窺えた。

実は彼やランドンだけでなく、先程のお茶会の最中などでも傍で世話をしていた使用人がアリス嬢に対して悪意を向けていた事を思い、この家はおかしいと感じるコウ。使用人のだれもが内心で家の主を疎んでる。

暫しの癒しタイムだったお茶会の席で友人達と接する姿や、バラツセの街から旅して二日間に見知ったアリス嬢の人柄には、特に人から恨まれるような要素が見つからない。

お菓子を食べ終えたファスターの頭を撫でて庭園に出て行くセロードを見送り、入れ替わりにホールへ戻って来たアリス嬢に目を向ける。

『うーん、両親とかに原因があるのかなあ……？』

ひょいと抱き上げられたファスターと共にお嬢様アリスの腕の中に納まったコウは、腕組みなどして唸るのだった。

夕刻頃。

アリス嬢はお稽古事の為、ファスターを連れて飼育部屋を訪れた。ファスターは部屋の中から扉の前でぶんぶん尻尾を振っている。アリスに行かないで欲しいと必死でアピールしている意思が、コウには感じ取れた。

「では、夕食の世話も任せるわ」

「畏まりました」

しかしファスターの意思が伝わる筈も無く、扉は無情に閉じられる。部屋の前から足音が離れて行くと、凍り付いたように動かなくなつて微かに震え始めるファスター。貼り付けていた笑顔を落としたランドンは無表情にそれを見下ろす。そして徐に足を引くと

「さつさと 行けよっ」

そう言つてファスターの脇腹を蹴飛ばした。小さくキャンと鳴いて怯えながらのろのろと歩き出し、もう一度尻を蹴られて天幕付きベッドの中へ脱兎の如く逃げ込むと、縮こまってブルブル震えている。

「ふん」

と、一つ鼻を鳴らしたランドンは餌の準備を始めた。ファスターは震えながらもその様子に耳と鼻をピクピクさせている。高級品な餌である事に加え、虐待に対するストレスもあつてか餌の時間だけは一時の食欲が恐怖心に勝るらしい。視線は銀の餌皿に釘付けだ。用意が整つと合図の鐘を鳴らす。アリス嬢が一人で世話をしていた頃からの習慣で、これを合図に食べるよう躡けられている。

物凄い勢いでがつがつ食べるファスター。食べている傍をランドンが通ると、殆ど反射的というか反応的にヴーツという唸り声が出る。それが気に障つたのか、軽く蹴飛ばすランドン。

だが、餌に夢中なファスターは食べるのを邪魔された事に踏ん張りながら『ガウツ』と威嚇をしてしまう。

「がっじゃねえ糞犬がっ さっさと食え」

舌打ちしたランドンはそう言ってもう一度蹴った。途端、ファスターの引き裂くような悲鳴が響き渡る。

「な、なんだっ」

当たり所が悪かった。踏ん張った姿勢を取っていたファスターの足先に、ランドンの靴の爪先付近にある裏側が引っ掛かり、手入れ前で少し伸びていた爪を直撃。結果、爪が根元近くまで割れてしまったのだ。

急に大声でキャインキャインと泣き喚き始めたファスターに慌てるランドン。

「いきなり何なんだ、いままでこんな事なかったのに」

それ程強く蹴った訳でもないのにと焦りながらファスターの状態を調べた彼は、割れた爪に気付いて舌打ちする。そこへ、鳴き声を聞きつけたアリス嬢が何事ですかとやって来た。使用人の下女と下男に、他の使用人とは少し雰囲気の違い護衛役の男二人を引き連れ
ている。

「どうも何処かに引っ掛けたようで、爪が割れてしまったようです…… 申し訳ありません」

そう説明して頭を下げるランドン。ファスターはひよこひよここと前足のびっこをひきながらアリス嬢に擦り寄っている。

「つまり、爪の手入れを怠ったのが原因という事ね」
「……申し訳ありません」

頂垂れるランドンをじつと見詰めたアリスは、廊下に控えさせている使用人に振り返って『獣医を呼びなさい』と指示を出す。下女が頭を下げた離れると、次いで下男に工具を持ってくるよう言い付けた。

「工具……で御座いますか？」

「ええ、金槌のようなものがあればいいわ」

アリスの足元でキューンと鳴くファスターから顔を出しているコウは、金槌など何に使うのだろう？ と疑問に思いつつ成り行きを見守っている。そうして下男が工具を持ってくると、アリス嬢はランドンにファスターの爪を割った代償を払わせると言って護衛役に指示を出した。

「右手の中指ね」

「……っ お、お嬢様！」

屈強な護衛役の男がランドンを押さえつける。割れた爪と同じ指の爪を叩き割ろうというのだ。顔面蒼白で御許しをと請うランドン。工具を持って来た下男は、恐々としながら金槌を屈強な護衛役に渡した。

『あーこういうのが原因かな？』

コウはファスターの中に入って支配すると、片方の前足を上げて走り難そうにしながらランドンの所へ駆け寄った。床に押さえ付けられている手の所に陣取ってきやうんきやうんと抗議。

「ファスター？」
「きゅうーん」

その行動に、この場の誰もが訝しむ。表情から一切の感情が抜け落ちたような、整った顔立ち故にまるで人形のように冷たい雰囲気
を纏ったアリスがファスターのつぶらな瞳を見詰めながら言った。

「お前の爪が割れたのはこの世話係ランドンの怠慢のせいよ？」
「くーん」

「赦せというの？」
「わん」

人の言葉を理解しているかのように振舞うファスターの姿に驚き
つつも、アリスは冷え切っていた感情が浮上して来るのを感じた。

「……そう、ファスターがそういうなら」

護衛役の使用人も下男も子犬ファスターの行動に驚いていたが、一番驚いて
いるのはランドンだった。紛いなりにも一年以上世話を務めてきた
のだ。自分を庇うファスターに対して本当に庇っているのかという
猜疑心もあったが、この子犬が今までこんな行動をとった事はない。

やがて獣医が来た事を下女が知らせに来た。彼女は部屋の異様な
雰囲気について何があったのかと困惑顔を浮かべると、下男にヒソヒ
ソと詳細を聞き出している。

「この子に感謝なさい」

ファスターを抱き上げたアリスは、ロンドンにそう言い放ついと、応接間に向かうべく部屋を出て行った。ロンドンはただただ呆然とした様子でそれを見送ったのだった。

掛かり付けの獣医から治療を受け、『二、三日で痛みも引くでしょう』と割れた爪を取り払って傷口を舐めないよう片足を包帯と靴下で固められたファスターを連れて、アリスは自室へと戻って来た。

『ここがアリスの部屋かあ』

流石にお嬢様の部屋ともなると豪華仕様な飼育部屋とはまた比べ物にならない広さと高級感に感嘆するコウ。常時控え室で待機している使用人がお世話をしに現れるが、アリスは彼女達に外すよう言い付けると寝室へと赴いた。

広いお屋敷の中にあつて、ここは一人で落ち着いて考え事の出来る唯一の場所。ベッドに腰かけ、ファスターを膝に乗せたアリスは小さく溜め息を吐く。

「足は大丈夫？」

「わう」

「……あなた、本当にファスターよね？」

「……わう」

若干視線を彷徨わせる子犬の姿に、アリスは目を丸くするとクスリと笑った。それは自嘲するような笑み。自分はきつと疲れているのだろうと省みる。もうずっと以前から、精神的に疲れて来ているのだと。

実の所、アリス嬢はペットが虐待されている事や、使用人達が自分を影で蔑んでいる事を多少なりとも知っていた。庭師の助手の青年が犬の身体に良くないお菓子を与えている事にまでは気付いていないが、統治者である父の所業で恨まれている事は知っている。

「私ねファスター、今日は覚悟を決めていたのよ？」

使用人達が抱えるディレトス家への恨みによる悪意や反撥心に対して、彼等が普通の業務で犯す些細なミスなら赦すが、今回のようにペットへの虐待などでミスをした場合は、彼等が向けてくる憎悪に見合った懲罰を与えて支配してやると、彼女なりに決意しての行動だったのだ。

ファスターの爪が割れた事件は苛烈な罰を与え始める事への切っ掛けになる筈だった。

まだまだ多感な時期にある少女は、屋敷に居ながら自分や両親に向けられる悪意と憎悪に、これから先も気付かぬ振りをしてながら過ごして行く事は耐えられない。母のように日がな一日自室に籠もる生活も考えられない。

ならば、こちらから攻勢に出て彼等に自分の立場を解らせるしかないと考えたのだ。

『そうだったのか』

アリスの独白に彼女の本当の気持ちを知ったコウは、この大きな屋敷の中で孤立無援な少女を何とかしてあげたいと思った。バラツセの街で培った冒険者の心得と、自身に内在する異世界の記憶が持つ知識を頼りに、自分と子犬ファスターに出来る事を考える。

『まずは屋敷の中でアリスの味方を探す事、からかな』

10話：ディレトス家の難題

夜明け前。アリスの寝室にてシートから這いだした子犬^{コウ}は、まだ眠っているアリスにシーツの端を啜えて掛けなおすとベッドを下りた。昨晩は夕食後も飼育部屋に預けられず、ここで休む事になったのだ。

『さて、まずは情報収集からだ』

コウはエルメール達に教わった冒険者の心得に習い、最初にしなければならぬ大事な行動として情報収集による下準備から始める事にした。この屋敷で働く一番下っ端から執事長まで、全ての使用人と会って思考を探り、アリスの味方を選別する。

ひよこひよここと片方の前足を上げながら部屋の中を移動したコウは、使用人の準備室を覗き込んだ。ここは簡易調理場としてお茶の用意をしたり、使用人達が食事をしたりする場所で、専属の使用人達が詰める控え室と繋がっている。

準備室では一人の使用人がお茶の準備を進めており、用意されているティーカップには見覚えがあった。

『アリスのモーニングティーかな？』

ふと、視線を感じた使用人が振り返ると、扉の隙間から小首を傾

げるような格好で覗き込んでいる子犬と目が合った。その愛らしい仕草に思わず微笑みを浮かべ、軽く首を傾けて挨拶する使用人。

コウはひらひらつと尻尾を振って答えた。この人はお嬢様アリスのペツトに悪意を向けたりはしないようだと思いつつ観察を続けているとお茶の用意を整えたその使用人は一度しゃがんで床の埃を一つ抓み上げ、カップの中に放り込んだ。

『あらら……』

この使用人を要注意人物カテゴリにチェックして準備室の前から離れたコウは、来た時と同じくひよこひよここと歩きながらアリスのベッドに戻った。前足の片方が不自由な状態でもファスターの身体能力は中々に高く、ぴょんぴょんとベッドの上に飛び上がる。

ファスターが飛び乗った際の揺れに刺激されたのか、目覚める寸前のまどろみにあったアリスが目を覚ました。

「ん……ファス、ター……？」

「わわう」「おはよう」

ぼんやりとした瞳で愛犬の毛並みを撫でたアリスは、意識の覚醒と共に昨晩の事を思い出してハツと固まる。誰にも相談できない胸の内を愛犬ファスターに話した時、それに応えてくれた存在が居たのだ。あれは夢だったのではないかと、恐る恐る訊ねるようにその名前を口にした。

「……コウ？」

「わう」「うん」

昨日の夜、コウは文字と絵による意思の疎通を図り、諸々の事情

も交えつつ自分がファスターの身体を借りている存在である事を明かすと、アリスの味方探しをしたい趣を伝えていた。

突然ベッド脇の机上に重ねてある紙を一枚抜き出し、羽ペンを啣えてたどたどしい絵や文字を書き始める愛犬の姿に驚いたアリスは最初、コウと名乗る存在に警戒を見せていたが、バラツセの街に滞在していた時に聞いた”魔獣犬コウ”の噂を思い出した。

聡明な彼女は短いやり取りでコウの事情を理解し、危険な存在ではないと判断した。少なくとも、自分に害意を向けてくる存在ではないと。ファスターの意識もちゃんと存在している事を聞いて安心したようだ。

夢では無かった事に幾分ホツとした表情を浮かべたアリスが半身を起こした時、使用人が目覚めのお茶を持ってやって来た。

「おはよう御座います、アリスお嬢様」

「おっと、もう来ちゃったか」

別に毒が入っている訳でも無いのだが、流石に床の埃入りお茶だと知りつつ放っておく訳にはいかない。コウはお茶を手にとろうとするアリスの腕に前足を乗せて止めた。

「ファスター？」

飲むなというように前足で制すると、じつと使用人を見つめるファスター・コウ。一瞬の驚きから居心地悪そうに表情を硬くする使用人。ファスターを見て、使用人を見たアリスはお茶を下げさせる。

「今日はいいわ、下げて」

「は、はい……お嬢様」

若干青褪めながらぎこちなく下がっていく使用人。それを見送り、コウに説明を求める視線を向けたアリスの手元に一枚のメモ書きがされた紙が現れる。

挿絵付きのメモには『ゆか つち カップ はいる』と単語が並べられ、使用人風の人物が床から何かを拾い上げてカップに入れる様子が描かれていた。

「……なるほど、そういう事だったのね」

時折口の中がじやりじやりする時があったのだが、そんな嫌がらせをされていたのかと朝から気分の滅入るアリス。ぽいつとベッドの上に放り出されたメモ書きの紙がふつと消え、代わりに『ありすがんばる』と書かれた紙が出現した。

「ふふつ ええ、負けないわ。今日から一緒に頑張りましょう」

気を取り直してファスターなコウに微笑んで見せたアリスは、そろそろ侍女がやって来る頃かとベッドから起き出したのだった。

ちなみにこのメモを出す伝達法、インク瓶の蓋を開けようとしたコウが一旦自分の存在する次元に瓶を呼び込み、手で蓋を開けてから元の場所に戻す方法を使って蓋の開閉をする度に机の上から瓶が消えるという怪現象を起こした際、アリスに突っ込まれて気付いた方法である。

「どつという仕組みなのか分からないけど、インク瓶をあなたがいる

場所に持って行けるのなら、紙とペンも持って行けるのではないの？」

『あ、そうか』

といった具合に。

アリスの父、バーミスト伯爵は昨日から行政院に出掛けたまま仕事詰めになっているらしく、母も部屋に籠りつきりなので、アリスは今日も両親と顔を合わせる事無く静かな朝食を終えた。

家族三人で食卓についていたのはもう何年前の事だろうか、顔には出さず懐古に耽る。そんな気持ちを振り払い、食堂を出たアリスは扉脇に控えている執事と呼ぶ。

「セバス」

「はい、お嬢様」

「屋敷で働く使用人や侍女たちのリストが欲しいのだけど」

「それは……人事別の記帳がありますので複写すれば直ぐにでもご用意できますが」

ではそうして頂戴と、後で部屋に持つてくるよう言い付けてアリスは自室へと戻る。何処か普段と違う雰囲気のアリス嬢。昨日の飼育部屋での一件を聞いていた執事のセバスは、お嬢様が何を始めようとしているのか気になった。

一方、アリスの部屋でファスターに餌を食べさせていたコウは手持ちの紙にメモを書き込みながらこれからの行動方針を纏めていた。現段階ではつきりしている要注意カテゴリ入りの人物は三人。世話係のランドンに庭師助手のセロード、そして先程の使用人。

様子見はお茶会の時に悪意を向けていた使用人かと当たりをつける。とにかく屋敷中の人間を観察してチェックして行こうという方針で固めるが、その為には自由に動きまわる必要がある。アリス自身の協力も必要不可欠だ。

『最初は安全な拠点の確保からだよね』

まずは身近な所からという事で、アリス付きの侍女や使用人の思考を拾って味方を探す。一日中アリスと一緒に行動したり、ファスターから抜け出たコウが部屋の何処かに浮かんで待機、誰も居ない部屋で使用人達がどのような言動をとるかを確かめ、信頼できる者を選び分ける。

どのみち足の怪我があるので一人で屋敷内を歩き回るのは包帯と靴下がとれてからだ。

三日ほど掛けてアリスの身の周りで悪意を持つ人物を洗い出し、細かい人事入れ替えてアリス付きの侍女や使用人を味方で固める。アリスが執事に用意させた屋敷で働く者のリストはかなり役立った。そして

「もう大丈夫そうね」

「わわう」『そうだね』

「私の留守中、ファスターの事もお願いね」
「わづ」『うん』

前足の痛みも治まってファスターの包帯が取れたので、コウは本格的な調査を始める事にした。自室に居る時は安心して過ごせる環境を得たアリスは、以前より気持ちに余裕が出来たようだ。今日は毎週通っている貴族学校に登校する日らしい。

四日ぶりに飼育部屋を訪れるアリス。学校に行っている間など外出中はこの部屋にファスターを預けておく。ランドンは解雇されておらず、あの日から様子見の状態である。緊張気味にお嬢様を迎えるランドン。

子犬の中でファスターの意識は奥に隠れてしまっているので、今はコウが身体を支配している。

「部屋の扉は何時も開けておくように、ファスターの出入りを妨げては駄目よ」

「は、はい……畏まりました」

「じゃあ、行ってくるわね？ ファスター」

「わづーん」『いってらっしゃい』

微笑んでファスターの頭を一撫でしたアリスは、コウにしか分からないように小さくウィンクすると、貴族学校へと出掛けて行った。

『さあ、それじゃあ始めようか』

所在無さ気になっているランドンは一先ず捨て置き、コウは屋敷の

中を歩き回って調査に乗り出すべく行動を開始する。早速部屋を出て行くファスターを、ランドンは複雑な面持ちでただ見送った。

一階ホールで掃除をしている下女達の傍を通り、執事の控え室を訪れるも留守だった。

『うーん、どこに行ったのかなあ』

コウが使用人部屋の並ぶ廊下をウロウロしていると、執事の控え室を覗き込むファスターの姿を見ていた掃除人の下女が『執事さんなら庭園に居たわよー』と声を掛けた。勿論、ペットが執事を探しに来た等とは思っていない。ただそれっぽく見えたので声を掛けてみただけだ。

同僚の下女が微笑ましいといった感じで面白そうにしていたが、ファスターが『わん』と答えて庭園の方へ向かうのを見て顔を見合わせる。

「今のつて、言葉が分かったのかしら？」

「さあ……でも返事をしたように見えたわよね」

「でも、ワンちゃんが執事さんに用事？」

うーんと唸る下女達だった。

庭園に向かう途中、丁度庭の手入れを終えて戻って来たセロードと鉢合わせた。要注意人物二号のチェックを付けられている人物である。

「やあ、ファスター。足はもう治ったみたいだね」
「わうー」

彼はファスターの態度に何時もと違う余所余所しさを感じて少々訝しんだが、包帯をしている間はずっとお嬢様と一緒にいたのだ。多少の久し振り感で人見知りっぽくなっているのかもしれないと流した。

「ほら、お菓子だよ」
「わう」

ふりつと一度尻尾を振って素通りするファスター。コウが支配している意識下でファスターの食べたそうな意思を感じたが、コウは『これは食べちゃ駄目だぞー』と教える。お菓子をスルーされたセロードはあれ？ と戸惑った。
干しぶどうの量を増やしたのが拙かったかと顔を顰める。或いは、ここ数日の間に貰い食いをしてはイケないとお嬢様に躡けられたかそんな事をつらつらと考えていると

「うおんっ わわう」 『ねえ、セロード』
「え？」

「わうっ わわう、わんわんっ わうん」 『そういつの、止めた方がいいよー』
「ファスター……？？」

廊下の先から振り返り、何かを語りかけて来るように吠えるファスター。ただ子犬が吠えているだけなのに、セロードは何故だか諭されたような気分になって首を傾げた。ファスターの声に乗って届けられるコウの意思は、人の無意識化に響いて受け止められる。

復讐の道具としか見ないようにしていた子犬に語り掛けられた事で、ファスターが一個の生命である事を思い出してしまったセロードは去来する罪悪感に呻く。実際のところ、彼の人柄は見掛けのイメージ通りで元々腹芸などこなせるタイプの人間では無い。

一度良心の呵責を覚えてしまうと、際限なく罪の意識に苛まれて酷く落ち込んでしまう内罰傾向にある青年なのだ。

「……リマ……僕はどうしたら……」

何やら考え込んでしまったセロードを残し、コウは庭園へと出て行った。

屋敷の表に面する広々とした庭園と違い、裏手の庭園は中庭的で落ち着いた雰囲気のある空間が広がっている。

『執事さんは何処かな?』

花壇の花々や木の下に山と積まれた落ち葉など見ながら良く手入れされた芝生をさくさく歩くうち、建物と塀の隙間に人の気配を感じたのでコウはそちらへと向かった。

「ふむ、アリスお嬢様がねえ」

「どうにも気になってしまってます」

「まさかお嬢様が探りを入れているとも考えられねえしなあ」

そんな話し声が聞こえたので壁際から覗き込んでみると、執事のセバスと庭師の爺さんが何やら難しい顔をして向かい合っていた。

『アリスの事を話してる？』

セバスは今の屋敷とデイレトス家の現状を把握しており、奥方様やお嬢様の事で心を痛めている。セバスと旧知の仲である庭師のハルバードもその事で色々と動いており、時折二人で相談し合っていた。

クラカルの統治者であるデイレトス家当主、バーミスト伯爵は勤勉で人柄も良く、情にも厚くて思いやりのある人物だ。なのに何故、一部の使用人達から恨まれているのか。それは誤解や濡れ衣による悪評が原因であるらしい事までは掴んでいた。

二人はその原因を作り出している人物を探っているのだが、中々特定出来ないでいる。

「行政院で幹部を務める貴族メンバーの誰かだとは思いますが、中々尻尾を掴ませねえ」

「何れ劣らぬ名家揃いですからね。下手に突付き過ぎると藪蛇所では済みませんし」

なにやら随分と重要そうな突っ込んだ内容の話に、コウはもつと近くで聞いてみようとして踏み出す。すると、音を立てた訳でもないのに『誰だ』と気配に気付いて振り向く二人。只の執事と庭師ではなさそうだ。

「おや、ファスターですな」

「お嬢様は今日は学校だったな。そういえば、ファスターもおかしな行動をとっているそうだが？」

ハルバードはここ最近、使用人達の間で囁かれているファスターの噂についてセバスに話を振った。『何時の間にか物陰にいて使用人達の仕事振りを観察している』とか『何か不備をやらかすとお嬢様に報告している』など。高位魔術士が持つ使い魔の類じゃあるまいしと肩を竦める。

コウは執事セバスと庭師ハルバードの思考を拾い、二人の本音を探ってみた。

ファスターには早く立派に成長して貰い、アリスお嬢様を心身ともに護っていただかなければ

なんかの切っ掛けで賢くなったとかかねえ、まあお嬢様の力になってくれるなら何でもいいが

『この人たちは味方みたいだ』

この二人からは間違いなくお嬢様アリスの味方であると判断できるような思考が拾える。コウが二人にも協力してもらおうかなー等と考えている間、セバスとハルバードは自分達の事を観察するように見つめてくるファスターに違和感を持った。

「おい、この子犬は本当にお嬢様のペットのフアスターか？」
「その筈ですが……」

近くに人がいない事を確かめ、二人の傍まで移動するコウ。周囲を見渡したりというその仕草が一人一人つぼく、二人は益々怪訝な表情になる。そして足元まで来たフアスターが前足で地面にたどたどしい文字を書き始めた事に驚きの目を向けた。

” ありす たすける きょうりよく ほしい ”

顔を見合わせるセバスとハルバード。

「お前、一体……」

” ぼく なまえ コウ ありす ともだち ”

アリスにした説明より幾つか能力や事情を伏せつつ、コウは二人に協力と情報提供を要請した。

その頃、アリスが通う貴族学校。

友人達とのお喋りを楽しんでいるアリス。普段よりも若干明るい様子のアリスに、友人達は何か良い事でもあったのだらうかと興味をそそられているようだ。そんな彼女達に声を掛ける若い貴公子が数人。

「やあ、お嬢様方。ご機嫌如何かな？」

「良かったら僕らと一緒に食事でもどうだい？ 宜しければその後のお付き合いも是非」

「まあっ 学び舎でそのような事をつ」

「如何わしい殿方達ですわ」

きやいきやいと騒ぐお嬢様方。貴族学校の校舎では割とよく見掛けられる光景である。普段から厳しい礼儀作法に縛られて抑圧された生活を送っている令嬢達にとって、他者との比較的自由な触れ合いが許されている学校内での生活は良い息抜きになっているのだ。

「アリスも行きますわよね？」

「あ、ごめんなさい。今日は用事があるので早く帰らなくてはならないの」

アリスはそう言って詫びると、食事会という付き合いを断って帰宅の準備を始める。友人達は何時も家に帰りたくなさそうにしていたのに、やはり何かあったのかなあと噂するのだった。

帰途に就いたアリスは馬車の中で焦れる想いを募らせていた。早く帰ってフアスター・コウと屋敷内の問題に取り組みたい。明確な味方と目標が出来た事により、今までアリスの心を占めていた暗雲は掃い飛ばされた。生きる活力が漲り、気分が晴れてワクワクする。

「……うふふ。こんな気持ちになれるなんて、彼には感謝してもし

足りないわね」

アリスはここ数年、感じた事のなかった高揚感に心を弾ませていた。

11話：渦巻く事情

帰宅したアリスは屋敷に入るなり真っ直ぐ飼育部屋に向かった。が、そこにファスターは居なかった。部屋で待機しているランドンによれば、朝、アリスが出掛けてから直ぐに部屋を出たきりまだ戻っていないという。とりあえず着替えなくてはと一度自室に戻るアリス。

「ここにも居ない」

ちょっと不安になりながら廊下に出た所で、掃除に上がってきた下女が『ファスター様なら庭園に出て行かれましたよ？』と教えてくれた。実に些細な事ながら、これもアリスの周辺で活動出来る者を選定した効果が現れている。

以前の人事状態であれば知っていても教えなかったり、嘘の情報を伝えたりされる確率が高かった。アリスは下女に礼を言うと庭園に向かった。

「ファスター？」

「わっっ」

庭園にやって来たアリスは、庭師のハルバードと一緒にいるコウを見つけて戸惑いの表情を浮かべる。実をいうと、アリスはこの庭師の事が少々苦手であった。

顔が怖いせいもあるが、幼少の頃、花壇に植えられたばかりの花を摘んだ事で叱られて以来、あまり近付かないようにしているのだ。

「くつくつ、まーだあの時の事を根に持つてるんですかい？ アリスお嬢様」

「んな……っ なんのこトかしら」

「わっはっはっ」

「なにを笑ってるのっ 失礼よ！」

「わわうわうー」『この人は味方だよー』

警戒の眼差しを向けながらじりじり移動するアリスに駆け寄ったコウは、彼女にしか見えないようにメモの切れ端を見せた。

庭師のハルバードと執事のセバスはかなり頼りになる味方である事をたどたどしい文字で訴えている。ちなみに、セバスは仕事で屋敷に戻っているので今ここにはいない。訝しみながらも、コウがいうのならと信用するアリス。

ファスターを抱き上げたアリス嬢が二人？ にしか分からない小さなやり取りを済ませた事を確認したハルバードは、徐に訊ねる。

「ファスターの中にいるコウってのは、どういう存在なんです？」

「え？ コウの事、知っているの？」

大まかな事までは聞きましたかと話すハルバード。その口ぶりから、コウが自身の事情についてはあまり詳しく教えてない事を悟ったアリスは、それに習ってよく分からないと誤魔化した。最近突然

ファスターの中に現れたのだと。

「ふーむ。お嬢様に魔術や呪術の才能があつたりしたのかねえ」

はぐらかされた事を知りつつ、ハルバードはしんみり呟く。基本的にアリスのような上流貴族の立場にある者は、雇い主として以外に冒険者家業とは無縁である。中には自ら率先して冒険者の道を歩む貴族出の者も居るが、そういう人間は一般的に変り種として見られている。

会話が途切れ、何となくそわそわし始めるアリスに、ハルバードは肩を震わせながら言った。

「やーっぱ根に持ってやすね？」

「ち、違つと言つてるでしょう！」

「わうわうー」『仲良いねー』

その後、熟年庭師と少し話をして長年の蟠り^{わたがま}などを解かし、屋敷の環境改善に務める協力を取り付けたりしながら自室に戻って来たアリスは、コウに今日の活動で得た情報も聞きつつ現在分かっている内容を確かめた。

「やはり、お父様の仕事に関係があるのね」

バーミスト伯爵に纏わる悪評は不特定多数の人間に表立って囁かれる一般的な統治者批判といった類のモノではなく、それらに關係する当事者達が内に秘めるような怨恨じみた性質のモノであるらしい事を聞いた。セバスやハルバードが内密に動いて調べる内に幾つ

か掴んだという。

この屋敷に雇われている使用人には元々大きな農場を持つていたり、それなりの財産を築いていた元豪商の家系という裕福な暮らしをしていた者が多い。何らかの事情で土地を手放したり、事業に失敗するなどして路頭に迷う事になった彼等を高待遇で受け入れている。

クラカルの街の統治者として、自分の治める街で生活基盤を失った元上流層の住民を救済する意味で優先的に雇っているのだ。

では何故そんな人々に恨まれるのか。どうやら彼等が財産を失う事になった裏に、伯爵の策略があったと思われるらしい。具体的な内容としては、行政院の権力を笠に不正な手段を用いて財産の接収に応じさせたりした事が挙げられる。

「そして、それらの事をお父様の所業であるかのように画策した者がいる……という事だったわね」

「わっ」

伯爵が彼等を雇い込んでいるのは、手元に置いて監視する為だとか、家族や一族への牽制の為と思われる。また、世間に対する体裁の良さを取り繕う意味で利用しているとも。

セバスやハルバード達は『バーミスト伯爵の策略』に関する噂を何者かの画策であると断定し、伯爵に矛先を向けさせている元凶がいる筈だとして行政院に関わる貴族幹部を探っているようだ。

街の統治者という立場に居る以上、少なからず下々の人達から恨みや妬みを買うような場合もあるだろう事はアリスも理解していた。それ故に、父親の仕事関係で恨まれているらしい事までは何となく

分かってはいたが、まさかそれが誤解や濡れ衣の類だとまでは思っていないかった。

”善き” 政務者が必ずしも”良い” 政務者だとは言えない例とはハルバードの言だ。

「あなたを連れて行けば……、何か分かるかしら」
「わう？」

コウを行政院に連れて行く事も考えるアリス。 と、そこへ、
家主の帰宅を告げる馬車と鐘の音が鳴り響いた。

ファスターを抱っこして部屋を出たアリスは、使用人達が列をなして出迎えの準備を整えている玄関ホールへと向かう途中、階段脇でセロードと鉢合わせた。若干頬を引き攣らせながら会釈するセロード。彼は伯爵を出迎えたく無かったのでコツソリ立ち去ろうとしていたのだ。

彼が行なっていた事についても既にコウから報告を受けているアリスは、良い機会なので彼が抱える事情、ディレトス家に対する恨みの詳しい概要を聞きだそうかと考える。

「セロード、後で話があるから、私の部屋へ来るように」
「は、はい……お嬢様」

何処かぎこちない様子のセロードを残し、アリスは父を出迎えに玄関へと向かった。

「お帰りなさい、お父様」

「おおアリス、今日も可愛いよ。良い子にしてたかね？」

軽く抱き締めて頬つぺたすりすり。ムギユツと挟まれたファスタ
ーが身じろぎすると、バーミスト伯爵は子犬の頭も優しく撫でる。

「もお……お父様ったら、何時まで子ども扱いするつもりなのかし
ら」

「はっはっは、アリスにはまだまだ子供でいて欲しいからね」

今年で十六歳になるアリスはそろそろ婚約者を迎えるのに良い年
頃。最近は仕事先でもちよくちよく良家から嫡男の売り込みが掛け
られるようになり、伯爵としては仕事であり構ってやれない内に
愛娘が嫁いでしまう事を憂慮している。

「ところで、スーリアは部屋かな？」

「ええ、お母様は相変わらず引き籠もっています」

そうかそうかと頷いた伯爵は妻の御土産にと王都から取り寄せた
嗜好品を持って部屋へと向かう。そんな父の大らか過ぎる在り方を
改めて認識しつつ溜め息交じりに見送ったアリスは、ふいに思い出
したハルバードの言葉が腑に落ちた気がした。

「善き”政務者が”良き”政務者とは限らない、か……」

自室に戻って来たアリスは早速コウに父の事を聞いてみた。出迎えたアリスに対して父が何を考え、想っていたのか。ただ見たまま接したままだったのか、実は内心で色々熟考していたのか。部屋に籠ったままの母に対しても、何か思う所はなかったのか。思考を捨てたコウによれば

『アリス たいせつ しんぱい させたくない スーリア たいせつ しんぱい しごと かぞく りょうほうたいせつ』

アリスの考えなど及びも付かないような熟考とまではいかずとも、一応それなりに考えてはいるらしい事は分かった。今日の早い帰宅も仕事が一段落したからではなく、家族と過ごす時間をとる為の帰宅であるようだ。

ただ、屋敷に勤める一部の訳有り使用人達については、何処まで現状を把握しているのか疑問が残る。

「やはりお父様とも一度しっかり話さなくてはいけないわね。でもその前に」

「お嬢様？ 庭師の助手がお嬢様に呼ばれたと言ってますが」「そう、では隣室に通して頂戴」

セロードから話を聞き出すべく、アリスは自室の中に用意された応接間へと向かった。

お嬢様の部屋に呼ばれたセロードはおどおどと落ち着かない様子でふかふかの高級ソファーに腰を沈めながら帽子を弄っている。そこへ、応接間の扉を開いて使用人が入室し、続いてペットの子犬を抱えたアリス嬢が現れた。ぱつと立ち上がるセロード。

掛けなさいと促されて再び座り直すセロードと、テーブルを挟んで対面に腰かけたアリスの前にお茶が用意される。アリスに人払いと暫らく外すよう言われた使用人がお辞儀をして退室して行った。お茶を一口含んだアリスは、おもむろに問い掛ける。

「単刀直入に訪うわ。あなたは何故、ディレトス家を怨んでいるの？」

「！……っ な、なにを仰っているのか……」

「隠さなくてもいいの、あなたがファスターにお菓子をあげていた事は知ってるわ。犬に与えてはいけないモノを混ぜたお菓子を」

「……………」

アリスと目を合わせられず、俯き加減で膝上の帽子を握り締めていたセロードは、やがて観念したのかファスターに対する行ないを謝罪すると、この屋敷に来る前の生活について、自身が抱える事情、家族の事を話し始めた。

セロード・キャスタの生家。当時キャスタ家はそれなりに大きい農地を経営しており、市場ではそこそこの利益を上げる中堅グループの一家にも数えられた農家だった。

「僕には、九つ年下の妹がいました」

貴族の血を引く祖母に似ていたらしい妹リマは、農家の娘として

は同世代の子達の中でも随分と美しい容姿に恵まれ、気立ての良さや親しみ易さから市場で作物を捌く売り子としても評判が良かった。それ故か、度々中流貴族の子息辺りに目を付けられる事もあり、年頃のリマを屋敷に雇いたいという申し出を向けられてはお断りの対応をするのが日常という毎日を送っていたそうだ。

その中には行政院に席を置く上流貴族も居て、特に御執心な様子を見せていた者に農地管理の役職に就いているリッチ・バルク・フエザード男爵がいた。

「ある日、家の出荷する作物に”虫に荒らされていて品質が悪い”という悪評が立ちました」

実際には多くの農夫を雇うことで常に高品質を保っていたのだが、悪評の影響が市場で作物が売れなくなり、他所の街に売ろうにも品質が改善されるまでは取り引き自体を禁止するという行政院からの通達がなされた事で、大量の従業員を抱えるキャスタ家の農地は事実上経営が破綻した。

農地は行政院に接收される形で買い取られ、それぞれ他の農地経営者や貴族の希望者に分割譲渡されていった。雇っていた農夫も半数近くが解雇されたが、セロードの両親は買い取られた農地の代金を解雇された者達に分け与えて退職金としたので、殆ど手元に残らなかつたらしい。

そして現在、キャスタ家夫妻はフェザード家管理となった農地で働いている。リッチ男爵は夫妻を生活に不自由しない程度の給金で雇う条件として、リマに屋敷で働くよう持ち掛けたのだ。両親想いのリマはそれを受け入れた。

庭師修行で家を出ていたセロードが知らせを聞いて隣街から戻った時にはもう、全てが終わった後だった。

「だけど……僕は納得できませんでした」

悪評の立ち方や取り引き禁止の通達、管理能力を問われての農地買い上げなど、行政院が行なった一連の処分の不審を懐いたセロードは、意義を申し立てて不正行為の調査を訴えた。しかし、当然の如く門前払いで追い返されてしまう。

取る物も取り敢えず戻って来ていたセロードは行く当ても無く、庭師の修行も中途だった為に働き口も見つからず、されど両親の負担になる訳にもいかずと途方に暮れる事になったのだが、妹のリマがリッチ男爵に口添えし、男爵からの紹介でディレトス家に雇われる事になった。

「……そう、そんな経緯があったのね。でも、そこでどうしてお父様に怨みが向くの？」

「フェザード家の屋敷でリマ……妹と会った時に聞いたのです、リッチ男爵が誰かと話しているのを」

「いやあこの度は本当に何と感謝して良いやら、あの娘のみならず農地まで都合して頂けるとは」

「ああ、伯爵には私からも礼を言っておく。例の娘の身内だったか？ 彼の事も任せておけば良い。貴殿は後の処理を」

そんな会話を聞いた後日、リッチ男爵からディレトス家、バーミスト伯爵の屋敷に庭師助手として働き口を紹介されたのだ。

この屋敷で働く使用人達の中には自分と同じ様な成り行きを経て土地や財産を失った者達が集められており、その誰もが伯爵に不審を懐いていた。自分達がこの屋敷に雇われているのは、不正を触れ

回られないようにする為の監視目的ではないか。

また、上流階級から一転一文無しになってしまった自分達に救いの手を差し伸べて見せる事による世間への善人善政アピールを狙っているのではないか。そんな疑いを持っているのだそうだ。

「つまり、あなたの場合はあなたの妹を狙うフェザード家の要請に、行政院で最高位のディレトス家が手を貸したと思っているのね？」

「……はい」

訳有りの使用人が増える度に募っていく不信感。明確な証拠も示されないまま疑いはやがて確信に変わり、憎悪が復讐心を産む。始めはささやかだった彼等の小さな意趣返しは、何度も繰り返される内に徐々にエスカレートして行き、遂には今の現状にまで至ってしまった。

アリスはファスターに視線を下ろす。その内心では染み出すような不安に苛まれていた。もし、父が本当にそれらの不正に加担していたとしたら、自分はどうするのだろう、どうすればいいのだろうかと。コウの能力を使えば、真偽は簡単に暴くことが出来るのだ。じっと見上げてくるファスターのつぶらな瞳。その奥に潜むとても心強い味方に勇気付けられたような気がして、アリスは顔を起す。

「あなたの事情は分かったわ」

「あ、あの……お嬢様」

「ランドンを呼んで頂戴、あなたは下がっていいわ」

「……はい」

セロードは話を聞いて俯いていたアリス嬢の事を気にしながら、

静かに部屋を後にした。

夕刻　　ディレトス家の食堂にて。

「大丈夫です奥様。私達がずっとお傍についていますから」
「アリスお嬢様も伯爵様もいらっしやいますし、心配ありません」

侍女達に宥め賺すかされるようにしながら食堂にやって来たバーミス
ト伯爵の妻、アリスの母であるスーリアは、顔色の優れない様子な
がら久方ぶりに食堂のテーブルにつく。その周りを侍女達が固めて
おり、屋敷の使用人は昔から仕えている者や執事以外近づけさせな
い。

自室に籠り始めてからは普段の食事も全て部屋で済ませていた彼
女は、娘アリスにどうしてもと引っ張り出されて渋々食堂に足を運
んだのだ。

「そんな状態では落ち着いて食事も出来ないわ。あなた達は少し外
して頂戴」

「し、しかしお嬢様……」

「アリス、彼女達は私の」

「大丈夫よお母様、今ここに居る給仕や厨房で作業している料理人
も全て私が選定してあるわ」

アリスの何時になく積極的な行動に母スーリアは戸惑い気味だっ

だが、バーミスト伯爵は家族が揃って食事をする機会を得られた事を喜んでいた。食卓に家族三人が揃うのは随分と暫らくぶりである。伯爵にも促され、不安気な奥方から離れて食堂の壁際に控える侍女達。

スーリア 伯爵夫人は新しい使用人達より向けられる悪意を視線から敏感に感じており、時々伯爵にも相談していたのだが、伯爵は彼等の境遇を考えてまだ奉仕活動に慣れてないだけだよと夫人を宥めていた。無論、陰湿な嫌がらせが行なわれている等とは思ってもいない。

多少なりとも彼等があまり良い想いを懐いてない事は感じていたものの、だからといって手を差し伸べた相手に悪意を向けるような事は無いと思っているので、妻の訴えを真剣に取り合わなかった。

行政院の仕事が忙しい事もあり、屋敷内の事にまで気を回してられない伯爵は、現状の深刻さを理解していないのだ。

執事のセバスもそれとなく伯爵に伝えてはいたようだが、彼も目に見えて分かるような形でのそういった行動を目撃していた訳ではなかったのだ、今ひとつ主張に押しが弱かった。そんな流れの中、影で繰り返される行為がエスカレートしていたとも言える。

食事が一段落し、何処かきこちない家族の団欒が始まるうとした所で、アリスは徐に切り出した。

「実は今日、お父様やお母様に無理を言っただけで食卓に揃って頂いたのは、大事な話があったからなの」

「ほう、なんだね？」

妻がバラツセで仕入れて来たお茶を口にしながら寛いでいる伯爵は、興味深そうに愛娘の言葉に耳を傾ける。が、続けて語られたアリスの言葉にスーリアは身を硬くし、伯爵は困惑の色を浮かべた。

「屋敷の現状、一部使用人達のデイレトス家に対する怨恨について話さなければならぬ事があります」

騒然とする一同。食堂にいる使用人や侍女達は勿論、セバスも驚きに目を瞪る。

アリス嬢が屋敷を取巻く一部使用人達の悪意に対して何か行動を始めた事はフアスターの中に存在する”コウ”に協力を要請され、庭師ハルバードからも直接お嬢様とそういう話をしたという事を聞いてはいたが、こつも急性に動くとは予想外だった。

「アリス。^{スーリア}母の事が心配なのは分かるが、使用人の怨恨などという言葉を経々しく口にしてはいけないよ」

『子供がそんな心配をしなくてもよい』と伯爵は取り合わないようにしようとするも、その反応は想定済み。予め話すべき事を組み立てておいたアリスは突っ込んだ内容で父を議論に惹き寄せる。

アリスがペットの世話係であるランドンの爪を叩き割ろうとした事を告げると、流石に表情を険しくする伯爵。

「私はもう彼等の悪意に気付かぬふりをしながら過ごす事はできません。お父様が今の現状を放置するなら、私は自分やお母様、この家を護る為に彼等の悪意に見合った厳しい処置をとる事も辞さないと明言します」

「セバス！ お前はアリスに何を吹き込んだのだ！」
「いえ、私は……」

執事に矛先を向ける伯爵に、アリスはすかさずフォローを入れる。

「セバスに聞いたのではないわ、お父様。寧ろセバスは今まで一言も悪意を持つ彼等について話してくれた事はなかった」

つまりアリス自身がそれを感じ、悪意による被害を被っていた事を告げられて、伯爵は言葉を無くす。そこまで酷い状態だったのかとスーリアに目を向け、継る様に見つめ返されて愕然とした。妻の訴えは、彼女の気にし過ぎだと思っていたのだ。

食堂に沈黙が広がる。その時、アリスは膝に乗せたファスターの顎下からペロっと出現している紙切れにそっと視線を落としていた。

”はくしゃく しらない うらなし おどろき こうかい ぎもん”

コウに伯爵の思考を拾ってもらい、父が潔白である事を確認してほっとするアリス。妻や執事の話にきちんと耳を傾けて来なかった事を後悔しているらしい。件の使用人達に関する事情についても、単に財産を失って困っている人という程度の認識しか持っていないかったようだ。

「しかし、彼等を放り出すような訳には……」

戸惑いながら苦悩する伯爵に、彼等を追い出すつもりも必要もないと告げるアリス。話の主導権を握ったアリスは、これまでに調べ

て明らかになった事実も交えて推論を展開させる。

問題は彼等がディレトス家に怨みを向けている点にある事を挙げ、彼等の怨みが実は何者かの画策で誘導されたモノであるという疑い。

「それは、セバスもそんなような事を言っていたな？」

「はい。ただ、確証はありませんでしたので……」

「それについては、使用人から聞き出した興味深い話があります」

ここで、アリスはゼロードの話を出した。名前は伏せながら彼の家族が路頭に迷うまでに辿った経緯を説明し、彼と同じく行政院による不審な裁定を受けて財産を失い、この屋敷に雇われる事になった使用人達が、行政院で最高位に就くディレトス家に疑いを持ち始めた事。

同じ境遇の者が増えていくに従って募り過ぎた疑いは何時しか確信に変わり、悪意と憎悪が復讐という形で現れた。

「恐らくこれが、今の現状を作り出した原因だとも思います」

「それを……独りで突き止めたというのか……」

子供だとばかり思っていた愛娘アリスから思わぬ現実を突きつけられ、呆然と訊ねる伯爵。アリスは一人ではありませんと首を振った。セバスも内心で驚きながら、コウが手伝ったのであろう事に納得していた。

「お父様に罪を擦り付けている者がいます。それも、行政院の幹部に就く」

「待ちなさいアリス」

行政院で不正が横行しているというアリスの指摘に、これ以上はこんな場所で話す内容ではないとして止める伯爵。夫と娘の話について行けなかった夫人は、オロオロと両者の間に視線を彷徨わせている。侍女や使用人達はアリスお嬢様の変わり様に驚きつつも、只管彫像と化していた。

「では、後ほどお父様の部屋に行きますね」
「……………うむ」

席を立ったアリスは優雅に礼をすると、ファスターを抱いて食堂を出て行った。後には何ともいえない重い雰囲気が残される。

難しい表情を浮かべて唸っていた伯爵は、不安気な視線を向けているスーリアに大丈夫だよと微笑み掛けると、今日はもう休むようにと促した。彼女は僅かに期待の籠った眼差しを夫に向け、自らが信頼できる者だけで固めた侍女達に囲まれながら自室へと引き揚げていった。

「セバス」
「はい」

「私の目が節穴だった事は兎も角として、娘に何があったのだろうか？」

あれは一体誰の入れ知恵なのかと訪う伯爵に、セバスは”コウ”という存在を思い浮かべながら少し考え、答えた。

「アリスお嬢様は、とても心強い御友人を味方に付けられたようです」

12話：暗雲のち快晴

その夜、バーミスト伯爵の自室には執事のセバスや庭師のハルバードも呼ばれ、食堂での一件について話しながらアリス嬢が来るのを待っていた。かなり込み入った話になるだけに人払いも済ませている。やがて、扉を控え目にノックする音が響く。

「お父様、参りました」

「ん、入りなさい」

伯爵の自室を訪れたアリスはファスターを胸に抱き、後ろに庭師助手のセロード・キャスタと世話係のランドン・エイラントを従えている。かなり緊張している様子の二人は縮こまった体勢で伯爵に挨拶を向けた。

「まあそう硬くなることはない。まずは君達の事情を聞こうじゃないか」

伯爵からそう促され、セロードとランドンは自分達が内面に抱えている事情や、デイレトス家に懐いていた猜疑心について打ち明けた。農地経営をしていたキャスタ家と同じく、ランドンの家も農園を営んでいたそうだ。

エイラント家は採れた果物などを市場に出す一方、余剰分を貧しい人々に無償で分け与えたりしていた。ある日、行政院から出荷量

の報告と農園の採取量が合わないとして調査員が派遣され、業務を一時凍結されてしまう。

「お金の無い人々に配っていたという主張は『そんな慈善事業は取り締まりはしないが認められていない』等として違法行為の認定を受け、無償配布は市場で公平な商売をしている者に少なからず損害を出し、街の税収にも影響を及ぼしたとする行政院の審判によって農園は接収された。」

「うーむ……それが事実なら確かに横暴な行為だが……」

伯爵はここ数年、土地の売買を巡って売主から委託を受けるなど、行政院による分割管理が頻繁に行われていた事は知っていたが、それぞれの取り引きについて細かい人事にまでは目を通していなかった。その土地がどういった経緯で委託されているかについては把握していなかった。

彼等が身を落とす前の状態と、身を落とした原因。彼等の財産は何処へ消えたか。農地や家畜などの資産は行政院でも複数の部署が絡み、大勢の役員が担当して満遍なく振り分けているので、誰がどんな意図で何を得たかまでは分からない。

「富の分配で甘い汁吸ってる奴はごまんと居やすからね、これを調べるのは容易じゃない」

「恐らく、そういった行いを主導する黒幕に辿り着かないよう、得る者の人数を多くして偽装を図っているのではよう」

ハルバードの言に同意したセバスがその裏に隠されているであろう策略を読んで補足すると、伯爵はその策略に穴が空いた事を指摘した。

「ここへ来て綻びが出た、という事だな」

アリスがセロードから聞き出した妹^{リマ}の一件が、暗躍者の正体を暴く鍵となる。伯爵達はフェザード家のリッチ男爵から何らかの手掛かりが掴めそうな手応えを感じていた。

仕事をする漢の顔をした父という普段感じられない珍しい空気に少し置いて行かれ気味だったアリスは、話の流れからここぞと切り出した。

「お父様、私を行政院に連れて行って下さい」

アリスの申し出に目を丸くした伯爵は、また何を言い出すのだと呆れる。屋敷の現状を変える為に活動し、これだけの成果をもたらせた事には正直な気持ち驚きと称賛を持って評価するが、ここから先は一屋敷や家族の問題に収まらず、政治的な駆引きと判断が必要になる世界だ。

流石に子供の出る幕ではないとして却下しようとした。しかし、セバスやハルバードがアリスの申し出に対して賛成に回った。

「お嬢様に仕事場を見せてやるのもいいと思いやすけどね、偶には」

「社会見学の一环としてなら問題ないと思われませう。伯爵の御令嬢という事で強い関心を持っておられる方々も居りますし」

「う……むっ」

良家との縁談話については実際、持ち掛けられる事も多くなって来ている今日この頃。そういった意味合いを仄めかせて連れ歩けば、

家の資産がどうのこうのという多少突っ込んだ生々しい内容の会話になっても怪しまれる事はないでしょうと推すセバス。

それでお嬢様に良い相手でも見つければ一石二鳥であるというハルバードの弁には複雑な顔をした伯爵だったが、説得の効果はあったようだ。

「分かった。明日、連れて行く事にしよう」

渋々だが、伯爵はアリスに行政院へ連れて行く事を了承するのだった。

翌日。

クラカル行政院の中央棟にて、娘を見学に連れて来たバーミスト伯爵の周りには『遂に御令嬢のお相手探しか!?!』と多くの貴公子や貴族紳士が集まり、伯爵と御令嬢アリスに挨拶やらアピールやらで愛想を振り撒いている。

そんな中、薄いピンクのドレスに色を合わせた小さなリボンを整った容姿の耳元で揺らし、まるっとした子犬を胸元に抱いた愛らしい姿で注目を浴びているアリス嬢は、紳士達と言葉を交わしながら相手の思考を読み取ったコウに逐一報告して貰っていた。

” ゆうこう ちい ほしい いえから ”

” ゆうこう アリス このみ ことも すき おとな きょうみ ない ”

” ふつう めんどろ つきあい きょうみない”

” ゆうこう アリス きになる いえがら あとつぎ せきにん”

ごく普通思想を示す者から何やらちよつと危ない者、やけに切実な者や建て前の付き合いだけで挨拶に出向いている者など、反応も様々だ。

周りの人間に悟られないよう、抱いているファスターの背中付近にこそつとメモ紙を出現させている為、終始俯き加減で大人しく、話し掛けられたり新しい人物が前に立つ度に、下を向いて視線を逸らしてしまう引込み思案の恥ずかしがりやな少女だと認識されているアリス。

実はコウが活動中である事を知らない伯爵からもこつそり”猫を被っているのだろうか？”等と思われていたりする。

「御初に御目に掛かりますアリス殿。わたくしフェザード家のリッチと申す者、是非お見知りおきを」

「えっ あ、はい……こちらこそ」

思わぬ相手の登場に一瞬呆けてしまい、慌ててメモ紙確認に顔を伏せる。アリス嬢が他の者に対するのとは明らかに違つ反応を見せた事に何か勘違いでもしたのか、リッチ男爵は勝者の笑みで周囲の面々を見渡したりしている。

” ゆうこう ちい ほしい アリス きょうみある”

リッチ男爵が父に対して友好的な心情を持っている事を意外に思ったアリスはしかし、一つ考え方を変えてみればセバスの言っていたように男爵も不正行為の黒幕に辿り着かないよう”得る者”に数えられた内の一人に過ぎないのかもしれないと納得出来る。

「あの……お父様、少しリッチ男爵とお話をしたいのですが」

「ふむ、そうか。ではサロンの方で休んできなさい。リッチ男爵、暫らく娘の相手をして貰えるかな？」

「え、ええっ お任せ下さい！ ささ、アリス殿こちらへ、サロンまで案内致しますぞ」

「ちらりと伯爵に目配せしたアリスは、セロードの話に出て来る”リッチ男爵と話していた怪しい人物”を探る為、うきうきした様子のリッチ男爵に誘われてサロンへと向かった。

「そうですか、リッチ様はご自分で農地の経営もしていらっしゃるのですね」

「ええ、質も収穫量も中々に良いと評判で王都からも買い付けられておるのですよ、はっはっは」

行政院で農地管理の役職に就いているリッチ男爵は王都の業者とも繋がりが高く、暗に顔が利く事を仄めかしてフェザード家の将来性をアピールしている。アリスは農地や人脈の話題を振ることで会話の内容を誘導し、コウに男爵の思考から目的の人物を探って貰おうとしていた。

しかし、男爵の内面は如何にアリス嬢に気に入られるかで占められており、中々目当ての情報を探り出すことが出来ない。

『うーん、もっと直接的なキーワードを思い浮かべるようにしないと駄目かなー』

コウは少し考え、アリスに話題振りの指示を出す。ファスターの

背中にスツと出現したメモ紙を見て『成る程』と小さく頷いたアリスは、早速その話題を振ってみる。

「そういえば、家で働いている庭師の身内がリツチ様の屋敷で働いているとお聞きしましたわ」

「あ、ああつ リマの事ですな。いやあ実は彼女の両親が農地の経営を破綻させましてな、行政院が引き取った農地と共に彼女も雇ったのですよ」

彼女の両親も元の農地に雇って働かせているのだと、男爵は自分の慈悲深さをアピールする。バーミスト伯爵が慈善家である事はよく知られているので、その娘である御令嬢にはかなりの好印象を狙えるだろうという期待を胸に、当時の事を振り返った。

このチャンス、必ずモノにしなくては！ しかしリマの兄を伯爵に任せた事が吉と出た訳か、クトール子爵にはまた礼金を贈らねばな

『……！ 拾えた、これかな？』

リツチ男爵の思考から”クトール子爵”という人物を探り出したコウは、その事をアリスに伝える。

「まあっ リツチ様はお優しい方なのですね」

「いえいえ、人の上に立つ者としては当然ですよ、はっはっは」

適当におだてて男爵を持ち上げたアリスは、そろそろ家に帰らなければならぬのでバーミスト伯爵の私室まで送って貰い、そこで礼を言っ別れた。男爵は手応え有りとばかりに上機嫌で自分の部署へと戻って行ったのだった。

「お父様」

「おお、アリスか。リッチ男爵はどうだったね？ 確かに彼は話し易い相手だとは思いますが、他にも接してみなければ分からない事は多いぞ？」

ニコニコとした穏やかな表情ながら目は笑っていない伯爵。私室には補佐の秘書やら使用人などの人目と耳があるので、ここで話せる事ではないと理解したアリスは、伯爵の言葉に合わせて『もつとよく考えてみます』等と答えると、今日はもう帰宅する趣を伝える。

伯爵の傍まで寄って挨拶を交わす際にそつとメモを渡してから私室を後にするアリス。メモにはクトール子爵の名が記されていた。

「さあ、後はお父様の報告待ちね」

「わうわう」『おつかれさま』

屋敷に戻る馬車の中で、自分が思ったより緊張していたらしい事に気付いたアリスは強張って硬くなった肩を解しながら身体の力を抜いた。膝上からもたれ掛かっているファスターの重みが心地良い。

「わう、わわう」『疲れてるね、これどうぞ』

「？ なあに？」

ひよいと前足を差し出すファスターのお手を受け取ると、手の平にポトリと現れる薬瓶。冒険者達の間で取り引きされている滋養強壮剤である。普通、貴族の令嬢が口にするようなモノではないのだ

が、コウにその辺りの概念という知識はなく、アリスは割と好奇心の強いお嬢様だった。

「……別に身体に悪いモノじゃないし、飲んでも大丈夫よね？」

「わっわっわー」 『元気になるよー』

「くくり。」

「……… 凄く、不味い」

「わっわっ？」 『そうなの？』

身体は回復したが顔色が悪くなるアリス嬢であった。

屋敷に戻ったアリスは一応セバスとハルバードにも今日の行政院見学で知り得た情報を伝え、クトール子爵という人物について話してみた。

「クトール・グラス・コルデン子爵ですな。確か王都から移り住んできた方だと記憶していますが」

「そっぴいや駐留軍施設の寄付者名簿でよく見る名前だな」

ハルバードの言葉に小首を傾げるアリス。なぜ庭師が駐留軍施設の、所謂王都から派遣された正規軍が入る施設への寄付者名簿など知っているのか。アリスの表情にそんな疑問を読み取ったハルバードは、『古巣ですから』と言って笑みを見せた。

クラカルの街はグランダー地方の中でも広大な平地が広がる美しい土地で、農業と畜産が盛んな食糧生産拠点のような街。有事の際には真っ先に狙われる土地柄ゆえに領主を通さず王都から直接派遣された正規軍が駐留しており、街軍も充実している。

遊牧の家畜を護る為、付近の変異体や魔物は定期的に討伐されているので、グランダー地方では有数の安全な街である。ハルバードは駐留している正規軍の元幹部で、退役してからはバーミスト伯爵の側近としてこの屋敷に身を置いている事を明かした。

「そ、そうだったの？」

「他の者にゃナイショですぜ？」

ただの庭師ではなさそうだとは思っていたが、まさか正規軍の元幹部だったとはと驚きを隠せないアリスだった。

夕刻になり、伯爵が屋敷に戻るとセバスやハルバード、アリスも伯爵の自室へと集まって今日の成果を話し合う。伯爵は業務の最中にそれと無くクトール子爵が関わっている仕事を調べてみたが、これといって不審な点は見つからなかったようだ。

「まあ、公式文書にそれと分かるような痕跡は残さないでしょうな」「子爵の活動を探るとなれば、相応の密偵が必要になりますが……」「当然こちらの動きにも警戒はしてあるだろうからな、内密に揃えるのは難しい」

クトール子爵が黒幕だったとして、彼の行動を監視したり不正の証拠を見つける為に動くとなると手持ちの諜報員では心許ない。必要な人材から集めなくてはならず、その動きも悟られないようにともなれば迅速な行動は更に難しくなる。

活動範囲が行政院の外であれば他所の街で準備を進める事も出来るが、クトール子爵も行政院で総務部の高い役職に就く幹部貴族なのだ。少数の手練を使って地道に調べるしか有効な手立てが浮かばないと重苦しく溜め息を吐く伯爵達。

その時、一人議論から置いて行かれていたアリスが口を開く。

「あの、お父様……私に良い手があるのですが」

「ん？ クトール子爵は既婚者だから、リッチ男爵のようにはいかんぞ？」

それにこの件は行政院の内外に拘かわらず、多くの貴族が絡む不正行為を探る事になるのだ。調べようとすればまず間違あいなく危険を伴うであろう事は考えるまでもない。娘をそんな危険に関わらせるつもりは無いと伯爵。

「いえ、そうではなく」

アリスは昼間の内にコウと相談し、必要であればコウの能力を遺憾無く使って今回の件を全面解決に導けるよう協力して貰える約束を取り付けていた。その為にはコウの事を伯爵達にもある程度は話しておく必要がある。

あまり教え過ぎると、その力の有用性ゆえにコウを取り上げられてしまい兼ねないというアリスの不安もあり、多少の虚実を交えながらコウに出来る事が伯爵達に説明される。ファスターの身体を使つて。

「じ、これは……」

娘のペットである子犬ファスターがテーブルの上に下ろされると、ファスターはテーブル上に置かれていたカップを消したり、挨拶の書かれたメモ紙を出したりして見せた。ある日、突然ファスターの中に現れた存在。人語を理解し、物体を何処かへ収納したり引き出したりする能力を持つ。

「この子なら、誰にも怪しまれず行政院の中で活動できます」

一時的に他の動物や昆虫にも乗り移る事が出来るので、対象の尾行から私室に侵入しての証拠集めまで何でもこなせるというアリスに、伯爵は娘が屋敷の状態を正常化する為に行動し、アレだけの情報を纏め上げる事が出来た”入れ知恵”の犯人が分かったと納得した。

セバスやハルバードに視線を向けると、二人もそこまでは知らされてなかったらしく同じような表情でファスターを見詰めている。とりあえず、自分だけ除け者にされていた訳ではなかった事にちょっとホッとする父親な伯爵であった。

行政院の中で活動し易いよう、ハルバードが庭園で集めた小型の昆虫やトカゲ類を籠に入れ、ついでに伝書用の鳥なども用意して仕事場に向かうバーミスト伯爵。アリスは普通の子犬に戻っているファスターの散歩などをさせている。

伯爵の潔白と裏事情の一端を知らされたランドンやセロードを始め、屋敷の一部使用人達は揃って伯爵や伯爵夫人スーリア、アリス嬢に詫び

を入れる事となった。その上で、彼等からディレトス家の動きが外部に洩れないよう屋敷全体にディレトス家の一切について緘口令が敷かれている。

「しかし、何かこうワクワクする話ですな。政務の駆引きとかはあまり得意じゃありませんが、こういう戦いも血が騒ぐと言いやしよ
うか」

「そういえば、随分と楽しそうに虫を集めてらしたわね」

庭園でファスターを遊ばせているアリスは、傍らで花壇の手入れをしているハルバードの言葉に肩を竦めて見せる。

『この虫は羽音がしないから隠密性が高い』とか『機動力ならこの小さい蜘蛛が最強だ』とか言いながら土を引っくり返している姿はまるで子供のようだったとアリスは振り返る。小さいトカゲがハルバードの手の平から跳ねたのを見て悲鳴を上げた事を笑われたのは不覚だった。

「コウは上手くやっているかしら」

駆け寄って来てはごろごろ転がってまた駆け出して行く元気なファスターをあやしなから、アリスは行政院の建つ方角の空を見上げた。

行政院の最高幹部会議から私室に戻る廊下を歩いていたバーミス

ト伯爵は、サロンで複数の幹部貴族達と寛ぐクトール子爵を見つけ、そちらに足を向けた。服の襟裏にはコウの憑依した小さな虫を潜ませてある。

「おおつ、これはバーミス伯爵。貴殿も休憩ですか？」

「いや、何だか良い香りに誘われてね。クトール子爵は茶の趣味も良いようだ」

「いやはや恐縮です。実は妻が仕入れた品でしてな」

「ほう、家の妻もよく茶葉の買い付けをしておるよ」

和やかな談笑を交わしながらクトール子爵に近付いた伯爵は、襟裏から静かに飛び立った虫が子爵の服の襟裏に入り込んだのを見届けると引き上げに入る。ここで幹部貴族達と交わしている話にも手掛かりが含まれているかもしれないのだ。

「どうです？ 一口試して行かれますか」

「そうしたいのは山々だが、まだ急ぎの仕事がありましたな。我ながらまったく忙しい限りだよ」

そう言っつて伯爵はこの場を立ち去った。

「伯爵も真面目な方だから、根を詰めなければ良いが」

「ですなあ。しかし子煩悩な面もあるようで」

「先日は御令嬢を連れていらっしやったようですね、リッチ子男爵が気に入られたらしく浮かれておりましたぞ」

「……ほう、それはまた面白い」

クトール子爵は談笑を続けながら内心でバーミスト伯爵の行動について考えを巡らせていた。先程声を掛けて来た事には何か意味があったのか、或いは単なる気まぐれか。昨日は時折献金させている家の一つであるフェザード家から、何やら礼金と称した臨時献金があった。

どうも以前に都合してやった農地のおまけに付いてきた娘、リツチ男爵的には娘の方が本命で農地がおまけだったようだが、その娘の兄をディレトス家に放り込んだ事が御令嬢の感心を引く事に役立つらしい。

『穿った見方をすれば、半人前アレの庭師に何かを吹き込まれて探りに来た、と考えられなくもないが……』

リツチ男爵から自分の名前が出る事は無いとも言いつれぬ。今はコネを使って王都の高級官僚にクラカルの次期統治者として推薦して貰えるよう要請を出している大事な時期だ。下手に動いてボロを出しては元も子もない。

統治者の立場を手に入れてしまえば多少の綻びは行政院最高位の権力でどうとでもなる。

念の為、表に出ると不味い書類の整理でもしておくかと、休憩に託けた幹部貴族達との交流による根回しを切り上げたクトール子爵は、自分の執務室へと向かった。不安要素は早めに摘み取り、計画推進の補強に余念の無い子爵だったが

『人に見られたら困る書類がー、案外早く証拠が集まりそうかな？』

襟裏に潜んで思考を拾う小さな虫には全て筒抜けだった。

元々王都に屋敷を構える上流貴族だったクトール子爵は、王宮官僚上がりの老獪な貴族紳士等がひしめく王都で神経をすり減らしながら成り上がるよりも、どこか適当な領地にある大きな街で統治者をやるほうが好き勝手しやすく、楽で儲かるという考えからクラカルに下って来た。

現統治者がバーミスト伯爵のような”善人”であった事も、この街を選んだ理由だ。与^{くみ}し易いという判断である。

自分がクラカルの次期統治者として推された場合、支持に回るよう行政院の下部組織に属する中流貴族や、街に駐留している正規軍の上級将校などに働き掛け、施設への寄付に賄賂を添えての根回し。勿論、王都のコネにも相応の裏金を流している。

賄賂費用の捻出はリッチ子爵にしたように土地の接收と譲渡などで儲けさせた貴族から広く浅く、負担にならない程度の献金をさせているのだ。

執務室に籠もってそれら資金の出入りを記した最近の書類を纏め、一旦行政院を出て自宅の屋敷に戻ったクトール子爵は自室に置いてある”結界金庫”にて厳重に保管。金庫の鍵も鍵付の引き出しに仕舞って自室を後にする。

「あら？ 旦那様、今日はまたお出掛けですか？」

「ああ、まだ仕事が残っているのだな」

メイド長にそう言って屋敷を出た子爵は再び行政院へと出掛けた。行った。

『いつてらっしやい』

先程まで子爵がバタバタしていた部屋の窓からその姿を見送る小さな虫。コウが憑依している粒っぽい虫は、子爵が書類を仕舞っていた結界金庫に近付いた。この金庫は主に呪術士が使う結界技術を使った呪術式の金庫で、馬鹿馬鹿しい程に高価だがそれに見合うだけの性能を誇る。

並みの攻撃ではビクともしないし、正規の鍵を使わずに開錠するのは実質不可能。城の天辺から投げ落とそうが火炎魔術で焼こうがゴレムに踏み潰させようが、結界を破れる程の力を加えない限り壊せない。

その昔、売り込みに来たエイオア商人の謳い文句に時の国王が本当に試して証明した事で有名になり、そのまま商品の宣伝文句となっている。

『この天板にある窪みに石を詰め込むのかな？』

試しに祈祷士のアミュレットを置いてみたが、特に反応はなかった。正規の鍵となるペンダントは反対側の壁際にある机の鍵付引き出しの中だ。コウは机の鍵を取りに行こうとして、何となく精神体の腕を結界金庫に突っ込んでみた。

『あれっ 素通り？』

頭を突っ込んで中を見ると、裏帳簿な書類の束が沢山積まれている。どうやら精神体そのものは結界の影響を受けないらしい。また一つ、自分の在り方が明らかになったなあ等と思いつながら、コウは結界金庫の中にある書類の束を手元に喚び寄せる。

どの書類が重要なのかコウには選別出来る程の知識が無く、故に『とりあえず全部持って行こう』という事になった。一切の痕跡を残さず結界金庫の中身が消えた為、裏金工作の活動を控えていたクトール子爵も随分後になるまで金庫の中身が消えている事には気付かなかったのだった。

クトール子爵の屋敷を出てふよふよと空中を漂い、屋敷近くの通りで佇む男の近くまで移動したコウは、ハルバードの部下らしいその男の肩に乗っている鳥に乗り換える。その男はただ命令された通り、肩に乗せていた伝書鳥が飛び立つのを確認すると、静かにその場を立ち去った。

『おおー、やっぱり鳥は凄いなあ。でもこれ、自分で飛ぶのは難しいぞうだ』

きちんと訓練を受けている伝書鳥なので行き先を伝えればその場所まで飛んでくれる。バラッセのダンジョンでコウモリに憑依していた時は殆ど滑空でしか飛行経験のなかったコウは、本物の鳥による飛行に暫し魅了された。

虫に憑依しての飛行はどちらかといえれば浮遊に近かったので、地上に行く生き物とは比べ物にならない速度での移動は爽快だ。やがて目的地であるディレトス家の屋敷が見えて来る。敷地内の庭園を駆け回るファスターの姿が見えた。

『鳥君、あのワンコの所までお願い』

「ピコイ」

くるりと翼を翻して急降下。空から降りてくる鳥を見上げて足を止めたファスターの頭上へと舞い降りると、コウはファスターに乗り移った。ファスターからは嬉しそうな意思を感じる。コウを歓迎しているようだ。

コウを運び終えた伝書鳥は再び空へ舞い上がると、何処かへと飛び去って行った。

「ファスター？」

さっきまで有り余る体力を発散するように駆け回っていたファスターが、庭園に降りて来て直ぐに飛び去った鳥を見送るように空を見上げては大人しくお座りしている姿に訝しむアリス。だが直ぐにコウが帰って来たのだと思い至った。

「コウ？ 戻ったの？」

「わう、わうわうー」『うん、ただいまー』

人間染みた仕草で振り返りながら応えるファスター・コウを、アリスは笑顔で迎えた。

この日、普段よりも早めに帰宅したバーミスト伯爵は自室でセバスやハルバードを交えて書類の整理を行っていた。

最初はアリスも部屋にいたのだが、コウがテーブルの上に出した

書類の束を二、三枚捲ると伯爵は顔色を変えて退室するよう促し、アリスも父やセバス、ハルバード達の様子に何かを感じ取ったらしく、大人しく自室に引き揚げた。

「しかし、なんというか……」

「密偵としては非常に優秀、どころではありませんな、コウ殿は「優秀などと言う以前に、ありえんだろう……これは」

コウが持ち帰った書類の束は危険極まりない宝の山であり、劇薬の山でもあった。どうするんだコレと言わんばかりに書類の束をぽんと叩く。

何せクラカルの街で行政院に所属している多くの中流から上流の貴族達のみならず、王都の高級官僚や元駐留軍将校として滞在経験のある現王宮勤務の正規軍上級将校に至るまで、あらゆる人物に係わる裏金の流れや非合法な取り引き内容が記されていたのだ。

「使い方を誤れば、国が傾きやすね……」

「それ以前に我がデイレトス家自体が消し飛び兼ねんぞ」

「幾つかの情報は見なかつた事にしておいた方が宜しいでしょう。手元に置いておくのも危険です。コウ殿に預かっていて貰うのが最善かと」

クートル子爵を告発する為に必要な書類や、握っていれば色々とデイレトス家の強みになる書類を選び分けてその他の危険な書類は破棄。

「といつても燃やすには惜しいので、部屋に呼んだコウに『くれぐれも取り扱いには気をつけてくれ』と念を押して洒落にならない価値を持つ書類の束を預かって貰う事になった。コウは預かった書類を一纏めにして”取り扱い注意”の札を付けると、異次元倉庫の一

角に保管したのだった。

クトール子爵の不正行為について証拠固めをした告発書を王都の行政府に送ってから数日、王都からの呼び出し状を受けた子爵が次期統治者への推薦状を受けられるものと喜び勇んで出掛けて行った。ちなみに、クトール子爵を告発する書にはそれを担当する司法官僚の裏金情報や違法行為を記した書類を付け加え、『こちらで処分しておきます』という手紙を添えておいたので、告発書を揉み消される心配はまず無い。

一気に片を付けたいバーミスト伯爵は、クトール子爵が街を出たのを見計らって行政府の不正取り締まり一斉捜査を行なった。

元々誰が何時、何処で誰と、どんな不正に関わったかという情報は例の裏帳簿の山から細かい所まで把握済みである。取り締まり捜査は実にスムーズに行なわれ、数々の不正が暴かれては多くの貴族達が罰せられていく。

ただし、殆どは余剰分となった土地の返還やそこその罰金を課すだけに留めておいたので、不正に関わっていた多くの貴族達による反撥も少なく、一般民達の関心もそう悪い印象になる事はなかった。

実際、然程の財産を持つでもない一般の住民はこれといった被害を受けていない事もあり、ほぼ他人事である。

不正な接収が確認された土地財産などは元の所有者に戻す処置がとられた為、ディレトス家の使用人からは何人か退職者が出る事になった。

奪われた土地が戻ってディレトス家を出る事になった使用人達からは心からの感謝と謝罪が告げられ、今後の事業が軌道に乗った暁には必ず売り上げの何割かをディレトス家に寄与する事が約束された。

「お嬢様、妹のリマです」

「リマと言います。兄がお世話になりながら大変御迷惑をお掛けしました」

セロードが屋敷を出る事になった日、彼はフェザード家から解放された妹を連れて挨拶にやって来た。リッチ男爵はどちらかというのと小物タイプで、キャスタ家の農地とその娘を手に入れられるよう根回ししてやるぞと持ち掛けられて乗った口のように。

多少の罰金とキャスタ家への農地の返却。娘も解放するよう処断され、泣く泣くリマを手放したらしい。リマに対する想い入れはそれなりにあったようだが、アリス嬢に気に入られたと勘違いをした時の反応を見るに、あまり節操は期待できない人物だったと言えるだろう。

「セロードは、庭師を辞めるの？」

「はい、戻って来た農地を管理しなくてはならないので、妹と両親を手伝おうと思ってます」

「そう、頑張ってね」

諸々の事情で土地が戻らなかつたりした者にも資産返還の保障がなされ、ディレクトス家に残つて働く者は完全に姿勢が反転した。

感謝と恩返しので働くようになったので屋敷の中は温かい感じに。部屋に籠もりがちだった伯爵夫人のスーリアも心穏やかに過ごせる今の環境に少しずつだが社交性が回復し、時折庭園のお茶会にも顔を出せるまでになっていた。

「とても、温かいわ」

「わうわう」『よかつたね』

ファスターを胸に抱いたアリスの心は喜びに満ちていた。

13話：新しい朝

不正取り締まり一斉捜査による混乱は少なく、行政院の総務部辺りで少々大きな人事異動などがあった他は、庶民や貴族の間でも酒の肴に話題の一つとして数えられる程度で治まった今日この頃。

貴族学校のサロンにて友人とのお喋りに興じていたアリスは、定時の鐘が鳴ったのを聞くと早々に帰宅の準備を始めた。

「あら、アリス。今日も早い帰宅ですね？」

「最近はお茶会にも誘ってくれませんか……なにかお家に問題でも？」

「ううん、家はとても平穩よ。色々用事が出来てしまって、御免なさいね」

そう言つて挨拶もそこそこに校舎を出て行くアリス。友人達は以前よりも明るくなつたが付き合いが悪くなつたと、彼女の事アリスを気に掛ける。

「なんだろうね、もう僕達みたいな中流貴族じゃ相手にしてられな
いって事かな」

「ええ？ そんな事はないだろう、彼女は身分で付き合いを変えたりしないだろ」

「そうよっ アリスは平民上がりの私にだって普通に接してくれる

「のよ？」

「でも……最近あまり家にも呼んでくれませんかよね」

以前は毎週のようにお屋敷の庭園でお茶会を開いていたのに、ここ最近はお嬢がバラツセの街から帰って来た日に一度お呼びされてそれきりだ。そういえば　と、彼等の一人が両親から聞いた話を思い出す。

「少し前に家の父殿から聞いたんだけど、バーミスト伯爵が行政院にご令嬢を連れて来たって言ってたなあ」

「アリスを行政院に？」

「その頃からじゃないか？　終業の鐘で直ぐ帰っちゃう様になったのは」

「うーん、やっぱり何かあったんだろうか」

皆して首を傾げあうアリスの友人たちであった。

一方、屋敷に戻ったアリスは真つ先に飼育部屋を訪れてファスターを引き取ると、そのまま自室へと連れて行く。ランドンはまだ屋敷で働いており、返還された農園を家族が元の状態まで回復させる間、稼ぎ頭として働くことを許されている。

当然の事ながら、ファスターに対する以前のような虐待はきつちり謝罪した上で決して繰り返さない事を誓っていた。世話係として誠実に完璧な手入れをこなしているの、最近ファスターから威嚇されなくなった。

自室に入って手早く着替えを済ませたアリスは係りの侍女達が退室する中、ベッドにちょこんと座っているファスターを抱き上げる。

「コウ、今日は何が変わった事はあった？」

「わうわうー」『いつもどおりだよー』

「ううん、わうわうーでは分からないわ。さあ、今日も文字の書き取りでお話をしましょう」

「わう」

最近のアリスはこうして日がな一日、ファスターを通してコウと過ごしている。部屋で読み書きとお喋り、庭園での散歩を日課にした平穏な毎日。

「行きましょう、コウ」

何処へ行くにも

「コウはどう思う？」

何をするにも

「ねえ、コウは」

いつもコウと一緒に連れているアリス。何かとコウを頼るようになったアリスは、コウを通して他者の内面に触れているうちに以前のような社交性が影を潜め、次第に友人達との付き合いも減ってあまり人と話をしなくなってしまった。

他人の考えている事や胸の内を知る事が出来る、それは必ずしも良いことばかりではない。一度他人の心を知ってしまったと、常に相手からのような関心が向けられているのかばかり気になってしまい、不安の種となって他者との触れ合いが億劫になる。

まだまだ多感な時期にあるアリスにとって、身内以外の人間との触れ合いはとても煩わしくて怖いモノになっていた。

『うーん、やっぱりこれは駄目なんじゃないかなあ』

これから先ずっと一緒にいて傍で支えになるというのも構わないが、今のままではアリスにとって良くないと思うコウは、自分に対する彼女の依存傾向を憂慮して距離を置くことを考えた。

「さあコウ、今日はもう休みましょう」

就寝の刻　アリスはファスターを飼育部屋に預けず何時ものように自分のベッドへ招く。ぴょんとベッドに飛び乗ったコウは、そのままネグリジェ姿のアリスと向かい合った。じつと見上げてくるファスターに、どうしたの？ と小首を傾げるアリス。

パサリと、メモ紙が現れる。そこにはしっかりした文体でこう書かれていた。

” 別れよう ”

「……………え？」

アリスは目が点になった。その反応に、片言の単語から短文ばかり使っていたコウは端折り過ぎたかと新たに書き直したメモ紙を出

す。

”ボクは屋敷を出ようと思う”

「ええ？ ど、どうして？」

”このままだと、君は駄目になってしまふ”

不安がるアリスに友人達との触れ合いをもっと大事にするよう促し、お互いに気持ちの分らない相手と話し合う事も大切だと説く。明確に自身を示す肉体を持たないコウは、世界に個人としての立場を持つことが出来ない。古い祭壇の傍で意識を覚醒させた時からここまで、ずっと借り物の姿で存在して来たからこそ言える。人が人として人の世界に居られる事は、とても幸せなことだ。

屋敷には執事や庭師セバス
タルバードのような心強い味方もいる。困ったときには彼等が相談に乗ってくれるだろう。

”アリスの成長を、ボクのせいで妨げたくないんだ”

「コウ……」

多少なりとも、今の自分の状態に自覚があつたアリスは強く反論することが出来なかった。

「屋敷を出たら……もう、あなたとは会えないの？」

”そんな事はないよ、また会える日も来ると思う”

またファスターの身体を借りる事になるかもしれないし、別の身体で会うかもしれない。それが何時になるかは分からないが、何か

の折でクラカルに立ち寄った時は必ず顔を出しに来ると約束するコウ。一晩じっくり説得したコウの提案を、アリスは渋々受け入れた。

翌早朝。コウは例の捜査で用意して貰っていた伝書鳥に憑依すると、アリスの部屋の窓からまだ薄暗い夜明け前の空へと飛び立った。眠そうなファスターを胸に抱いて静かに見送るアリス。

住人が寝静まっているディレトス家の屋敷でそこだけ明かりの灯る窓辺にて、朝焼けの空を見上げながら手を振るアリスを視界に収めたコウは、屋敷の周りをくると旋回してそれを別れの挨拶にすると、東の空へと進路をとってクラカルの街を離れるのだった。

「 런던、もう起きてる? 」

「 お嬢様……? 今日はまだ随分とお早いお越しで 」

何時もは朝食の時間頃になってからファスターを預けに来ていたアリス嬢が、今日は明け方にやってきたので意外そうな表情を見せる 런던。しかもファスターはだっこされた腕の中で珍しく寝息を立てている。

「 今日からファスターの世話に少し苦労すると思うけど、よろしくね 」

「 あ、はい、畏まりました 」

ファスターをペット用ベッドに寝かせたアリスはそつと飼育部屋を後にする。その後ろ姿が少し儂げに見えて、何かあったのだろうかと気にするランドンはとりあえず執事長の控え室へと足を向けた。

寝着に上掛けを羽織った格好で独りぶらりと庭園を訪れたアリスは、陽が昇る前から花壇の手入れをしていたハルバードに声を掛けられた。

「おや、今日は一人なんですかい？ 珍しい事もあるもんだ」

「コウは……居なくなつたの」

『お別れしたの』と寂しそつに呟き、明るくなり始めた東の空へ視線を向けるアリス。

「へえ、あんまりベタベタし過ぎて愛想でも付かされたんですかいつて、あぶねつ あぶねえですから！ 鍬くわを振り上げねえてくださいよっ」

「お嬢様、右手を中程にして左手は端を持つと振り回しやすいですよ」

「セバス！ てめえ！」

何時の間にか庭園に出て来ていたセバスが、鍬を構えながらにじり寄っているアリス嬢にアドバイスなど出したりする。屋敷の入り口にランドンの後ろ姿が見えた。

鍬を振り回すお嬢様から逃げ回る庭師を眺めながら、執事セバスはお嬢様アリの状態を察してくれたのであろう”コウ”の事を想う。

「重ね重ね、彼には感謝せねばなりません……」

ぶらんと揺れるミミズを手にしたのし歩いて来るハルバードから
鍬を放り出して逃げてきたアリス嬢に、セバスは耳寄りな情報を伝
える。

「お嬢様、バラツセの街に在住している訓練学校の講師がコウ殿に
詳しいという話を聞きました。手紙など書かれてみては如何でしょ
う？」

「バラツセの街？ ……そうね、私もコウと話した事があるわ」

確かその講師の家では猫の身体で世話になつていたと聞いた。街
でフアスターに乗り移つたのは偶然だったとも。もし、コウがバラ
ツセに戻るのなら本人と手紙のやり取りをする事も出来るだろう。
クラカルの街にも冒険者協会の支部があるので、そこを利用すれ
ば安定した定期連絡を期待できる。

「その講師の名前は？」

「確か、エルメールという方だったかと」

元軍人の冒険者で訓練学校に講師として勤める女性剣士。アリス
はそのエルメールという人物に宛てて手紙を書く事にした。

クラカルの街から東へ、馬車で半日ほどの地点を飛行するコウを

乗せた伝書鳥。この一帯は山間部が広がっているので、眼下に見える景色は殆ど青々と緑の生い茂る山々や灰色の岩山ばかり。その間を縫って切り開かれた幾つかの細い街道が、解れた糸のように走っている。

バラッセの街に帰ろうかと考えながら飛んでいたコウは、上空から見える遠く地平線の付近に薄っすらとそれらしい街の影を見つけた。馬車で二日掛かった距離でも鳥なら一日で着けそうだ。

訓練生のキャンプ地はどの辺りだろうかと視線を巡らせるうち、ふと、ごつごつした岩山が連なる一帯で崖沿いの山道を行く馬車が見えた。

『おや？ あれは……』

二台連なつてゆっくり進む馬車の回りを武装した集団が固め、後方から追い縋る獣の群れと対峙している。先頭の馬車は街中でもよく見掛ける極一般的な貴族が利用する型の馬車だが、その後ろを走する馬車はふた回り程大きく、屋根にも武装が取り付けられていて見た目もゴツイ。

どうやら先頭を行く馬車の護衛をしているようだ。追い縋る獣の群れの中には一際大きいのが二匹混じっている。狼に似た頭にねじれた黒い角、熊のような体躯を持つ白い毛並みに覆われた魔物。コウは伝書鳥に意思を伝えて急降下して貰うと、魔物の一体に狙いを定めた。

「もう少し速度を上げさせる！ デイス、屋根に上がってカレンを

補佐しろ！」

「はいっ」

「隊長、右側から来てるぜー？ 突っ込もうか？」

「角熊の片方を足止め出来るまで待て」

馬車を護衛している一団の隊長が矢継ぎ早に指示を出す。今回請けた仕事はある商人貴族を少し離れた隣街まで護衛するという内容だったのだが、急ぎの件という事で安全な街道を外れて山道を進んでいた所、魔物をボスに持つ変異体狼の群れに襲われたのだ。

使用人の乗る馬車が壊されてしまった為、荷物を担いだ使用人達が主を乗せた貴族用の馬車にしがみ付き、或いは傍を走って逃げている。護衛隊の馬車にも負傷者を収容しており、既に満員状態。あまり速度も上げられないので交戦しながらの移動が続いていた。

変異体の狼だけなら普段は討伐を専門にしている彼らがここまでの非常事態に陥る事などなかったのだが、運悪く強烈な破壊力と僅かばかりの知恵が働く魔物、“角熊”^{つのみま}が二体も混じっていた事により最初の急襲で馬車の一台が破壊され、現状のような危機に追い込まれている。

角熊は付かず離れずの距離を保って追跡しながら、時折、変異体狼を嚇^{けしか}けて襲撃のタイミングを計っているようだ。その時、護衛隊馬車の屋根から前方を見張っていた部下が警告を発した。

「前方に吊り橋！ ヤバイですよ隊長、あれじゃ一台ずつしか通れない！」

「ちっ 橋の前で防衛線を敷くしかないか……だが突っ込んで来れると不味いな」

「うちの馬車を壁際に寄せて崖側を開けましょう。犬共は崖を使う

として、問題は角熊ですね」

一般の馬車に比べればそれなりに丈夫な作りであるとは言え、体長三メートル近い怪物の攻撃に耐え切れる程ではない。破損程度ならまだしも、こんな人里離れた山道で大破などさせられてしまつては目も当てられない。

「先に負傷者を連れて徒歩の使用人達を渡らせろ、それから護衛対象の馬車だ。カレンとデイスはそのまま屋根で待機、レフも上がつてくれ」

自分達の馬車を壁にしつつ、角熊の攻撃に曝されないよう遠距離攻撃を行なえる部下を馬車の屋根に待機させ、変異体狼が馬車の下を潜ってくる事のないよう補強版を並べて防護壁を作る。山道の三分の二程を塞いで崖側を開き、ここを通ろうとする狼は殲滅するか崖下へ突き落とす。

「隊長！ 吊り橋の向こうに狼が！」

「くそっ リーパ、ダイドと行け！」

「あいよっ」

血の気が多そうな剣士が寡黙そうな闘士と共に吊り橋の方へ走っていく。護衛隊馬車の近くで防衛線を守る手勢の編成を組み直しながら悪態を吐いている隊長のガウイクに、副隊長のマンデルが魔物付き変異体狼の群れについて考察を向けた。

「伏兵か……どうやらこの辺りを根城にしてる群れのようですね」

「ああ、まったく小賢しい知恵を付けやがって」

とにかくここで凌ぎ切るしかないと思物を構えたガウイク隊長に、馬車の屋根にいる射手から気の抜けるような声が掛けられた。

「たいちよー、なんかーヘンですよ〜?」

「何だカレン……いや、何があつたデイス」

「あ、あのそれが、角熊の片方が急に」

「なんかねー、ケンカしてるよー?」

角熊の頭近くに急降下した伝書鳥から後方を行く一体に乗り移つたコウは、早速その身体の支配を試みた。

多少なりとも知恵を使えるだけの高い思考力を持つ角熊は、これまでに憑依した動物や変異体と違って意思への干渉に対する抵抗も強かったが、コウの高度な思考に触れた途端、萎縮するように奥へと引っ込んでしまった。なのでコウの支配は魔獣犬の時のように全身まで及んだ。

文字通り自分の手足のように角熊を操れるようになったコウは、馬車隊を追う変異体狼を蹴散らしに掛かる。

「なんだ……?」

「仲間割れ、ですかね?」

突然、群れの狼を蹴散らし始めた角熊は、もう片方の角熊と激しい戦いを始めた。変異体の狼達は群れを統率していたボス同士が戦いを始めた事で獲物を追うどころではなくなり、ウロウロと周囲を歩き回る。何処かへ撤退していく数匹のグループもいるようだ。

「今の内に残った犬共を殲滅しますか？ 角熊も討伐すれば、良い臨時収入にはなりますが」

「……護衛対象の安全が優先だ」

依頼主の馬車も吊り橋を渡り終えた。ガウイク隊長は「退くぞ」と呟いて踵を返すと吊り橋に向かう。マンデル副隊長も馬車を引く馬を先導しながらその後が続いた。

吊り橋の前で陣取っていたゴツイ馬車が橋を渡って行く様子を確認したコウは、自分が憑依している魔物と同格の魔物を相手に戦闘を続けながら、以前から考えていた戦法を試して見る事にした。

ダンジョンでやっていたように無抵抗で倒されてから憑依し直すという手もあるが、ちゃんと戦って勝つ事も大事だと思ったのだ。タイミングを見計らい、異次元倉庫に保管してある沢山の武器から適当なモノを選んで出現させる。

突進して噛み付きと思いきや口に生えた剣で一突き。爪で薙ぎ払わんと振るう腕の先に戦斧を出して強烈な一撃。少々派手過ぎる暗器攻撃。

摩訶不思議な攻撃を繰り出す相手に、こりやタマランと角熊は尻尾を巻いて逃げ出した。その魔物に統率されていた変異体狼は後に続き、コウが支配している魔物に統率されていた変異体狼は戸惑った様子で逃げた角熊と角熊なコウとの間に視線を彷徨わせる。

が、やがて角熊コウに人間の気配を感じ取り、逃げた角熊を追って岩山の奥へと消えていった。向こうを今後の統率者と定めたようだ。

『行っちゃったか。本当はちゃんと倒しておかないと駄目なんだろうなあ』

いずれまたここを通る誰かが襲われるかもしれない事を考えると心配だが、当面の目的は達成できたのでよしとするコウ。吊り橋の方を見ると、既に馬車隊の姿は無く護衛隊も含めて一人も見当たらない。橋も落とされていないようだ。

『そういえば、さっきの馬車を護つてた人達って』

彼等には見覚えがあった。彼等のゴツイ馬車から運び出されていた怪我人の姿も結構多かったように思うし、先頭を行く馬車の回りをへるへるになりながら走っていた使用人風の人達の事も気に掛かる。この山道の先で疲れて困っているかもしれない。

『滋養強壯剤とか回復薬とか一杯持つてるしなあ……役に立てるかも』

どうにもお人好し傾向にあるらしい”彼”^{コウ}の本領が発揮され、気になったコウは彼等の後を追ってみる事にした。頭の上に下りて来た伝書鳥にアリス宛ての手紙を託し、コウは吊り橋に向かってのっしのっしと歩き出したのだった。

14話：旅は道連れ世は情け

岩山の崖沿いに伸びる山道で、少し幅の広くなった場所にて休憩と怪我人の治療、馬車の修理などを行なっているガウィーク隊。怪我人の殆どは護衛対象である商人貴族の使用人達だ。獣の群れに追われながら結構な距離を走らされた事もあってか相当に疲れている様子が窺える。

「隊長、怪我人に使う薬が足りません」

「トリスンが深手の者を優先的に治癒してますが、もう魔力が底をつくって言ってます」

「薬の予備は？」

「備蓄分も全て使い切りました……フランチエの話だと、この辺りには薬草になる草も無いそうですから、街に着くまで補給も……」

部下からの予想以上に悪い現状報告に頭を掻きながら息を吐くガウィーク。この山を下れば目的の街まで半日程度で到着出来る予定だったのだが、使用人の馬車が無いので半数は歩きになる上に怪我人を抱えた状態を考えると、丸一日は掛かってしまうだろう。

それでも通常の街道を使った場合に比べれば幾分早く辿り着ける。問題はもう一度獣の群れや盗賊の類から襲撃を受けた場合だ。

「流石にこの状態だと護りきれないぞ」

「下手をすれば、隊員に犠牲が出るやもしれませんな」

副隊長の言に、ガウイクは重々しく頷く。そこへ、馬車の上で見張りを担当していた若い隊員魔術士のデイスが、何やら戸惑った表情で報告にやって来た。

「あの、隊長……あれ」

「ん？」

「なんだ？」

デイスが指差した山道の先に視線を向けると、少し張り出した岩の陰から白い体毛に覆われて黒い角を生やした狼のような頭が、ちらつ ちらつ と顔を覗かせている。

また変異体狼の襲撃かと慌てて周囲を警戒するが、特にそれらしい気配はない。ガウイク隊長は角熊の討伐が可能な隊員を呼び寄せた。

「リーパ、来い！ マンデルはリーパの補佐、カレンは二人を援護しろ」

「おお？ なんだなんだ、敵か？」

「あの岩陰だ、犬共が潜んでいるかもしれないから注意しろ」

「あー、さっきケンカしてたクマちゃんだー」

血の気の多そうな剣士リーパが剣を抜きながら駆けつけ、マンデルが的確な指示を出して目標を伝える。カレンは何時も通りのマイペースだ。三人の討伐隊が岩陰に近付くと、さっと離れて行く角熊モンスター。

偵察でもしていたのだろうかと首を傾げつつモンスターの居た岩陰の裏に回ると、そこには大量の薬瓶が並んでいた。

「なんじゃこりゃ?」

「おー、クスリがいつぱいだー」

「触るなカレン、リーパは周囲を見張れ。隊長! フランチエを寄越してください」

薬士を呼んで鑑定した結果、変哲の無い普通の回復薬である事が分かった。魔力水や傷薬など各種含めて五十個近くある。ふと見ると、もう一つ向こうの岩陰からじゅつと顔を出して様子を窺っているモンスターの姿。怪しい事この上ないが、背に腹は変えられない。

「……なんだかわからんが、拾っておこう」

モンスターの置いていったらしい回復薬で怪我人の治癒と術士の魔力も回復する事が出来た彼等は出発の準備に取り掛かった。とりあえず予備の車輪や板切れなど馬車の修理に使う材料を組み合わせて簡単な荷車を作ると、馬車に繋いで荷物などを積んでいく。

護衛対象の乗る貴族用馬車とガウィーク隊の武装馬車、それに簡易荷車で全員を乗せて運ぶ事が出来る。徒歩組みを連れて進むよりはマシな速度で移動を開始。後ろを振り返ると、例の角熊モンスターが距離を置きながらついて来ているのが見えた。

「どうします? あれ」

「一応、警戒はしておけ」

周囲の岩肌に捻くれた細い木や草花の姿が目立ち始めた頃、馬車

隊はようやく山道を下りきり、森を抜ける街道に乗る事が出来た。一行は岩山を背に森の入り口を見渡せる位置で休憩に入る。

炊事の準備が進められる中、山道の方から響いたばさばさガサガサという音に振り返ると、件の角熊が山道の途中から飛び降りて生い茂る木々の中へと分け入って行く所だった。近くの木にとまっていたらしき鳥がギャアギャアとけたたましく騒ぎながら飛び去っていく。

「向こうには何がある？」

「確か、川が流れていた筈です。この先で街道と交差してるので、橋がありますね」

付近の地形情報に合わせて街道の情報も挙げるサポート上手な副隊長^{シデル}。角熊のよく分からない行動に唸るガウィークは、警戒だけ怠らないようにしておけば良いかと馬車隊の状況チェックに戻った。

一方、馬車隊が休憩している場所近くの森に分け入った角熊^{コウ}は、この角熊に与える食事を探して木々の間を進んでいた。

角熊の意識から食べられる物とそうでない物を選び分け、木の実などをもいでは口に放り込みつつ”肉”を探す。暫らく進むと、そこそ幅のある川に突き当たった。角熊から魚が好物であるらしい意思が浮かび上がる。

「魚かゝ、獲れるかな？」

道具も何も無い状態で魚を獲るにはどうすれば良いか。コウはエルメル達から習った食糧確保の術^{すべ}について記憶を探ってみたが、

知っているのはいづれも何らかの道具を使う方法だった。角熊のこ
ついでには知識にあるような道具を作るのは困難だ。

『うーん……ん？ この方法は……異世界の知識かな？』

出所のハッキリしない”魚獲りの技術”に関する記憶があったの
で、それを試してみる事にする。暫らく川辺を歩き、張り出した岩
がないか探索。底の方に魚が隠れていそうな手頃な岩を見つけると、
異次元倉庫から丈夫そうなハンマーを取り出した。

『セーのっ』

両手で扱う鋼鉄製ハンマーを片手で軽々振り上げる角熊の豪腕を
持って、その岩をぶつ叩く。ガスンツという強烈な音がして岩に亀
裂が走った。数瞬後、衝撃で気絶した魚が隠れていた岩陰からプカ
リと浮かび上がる。そのまま流されて行く魚をひよいひよい掴んで
無事に食糧を確保した。

『うん？ 生でいいの？』

早く食べたいと要求する角熊の意思に応え、少し支配を緩めて食
事をさせるコウ。他の魔物も同じかどうかは分からないが、どうや
ら喰らう事に関しては恐怖心が抑制されるようだ。角熊はコウに対
して萎縮する意思を感じさせながらも、食事に没頭している。

その後、何度か場所を変えつつ同じ漁法で獲った魚を胃袋に納め
た角熊は、満腹感に満足したのか再び意識の奥へと引っ込んだ。

『食っちゃ寝モンスターか……』

余った魚は保管しておこうかと喚び寄せを試みたが、ぴちぴちし

ている間は喚ぶ事が出来なかつた。どうやら固有の魂を持つ生物は喚び寄せられないらしい。

絶命して魂が離れ、屍骸となった魚はそのまま異次元倉庫に喚び込む事が出来た。何時まで鮮度が保てるのか分からないので時々状態を調べる事にしようとする手近な距離に保管したコウは、馬車隊の様子を見に戻る。

ガサゴソと木々や草むらを掻き分けて元来た道を辿り、岩山の入り口付近まで戻ると、ちょうど馬車隊も出発しようとしている所だった。

「隊長」

「ああ、気付いている。何処までついて来る気なんだかな」

山道添いの岩陰からこそつと顔を覗かせている角熊に肩を竦めつつ、とりあえず出発しようとするガウイク隊長。そこへ、若手魔術士のデイスが今度は困った表情を浮かべながらやって来た。

「あの、隊長……カレンさんが見当たらないんですけど」

「うん？ カレンなら台に上がっていた筈だが」

ガウイク隊の馬車を振り返ると、見張り台の手摺りにカレンの弓と矢筒が置かれたまま持ち主の姿がない。

天才的な弓の使い手である女射手のカレンは、猫っぽい愛らしさを思わせる容姿とグラマラスな身体つきも中々に魅力的な妙齡の女性なのだが、中身にアホの子的な緩さを持つ少々困った方向でバランスの取れてしまった娘である。

「ええいつ また何処をほつき歩いてるんだ、あいつは」

辺りを見渡し、岩山の壁とかそこらの木に登っていないかを確かめたその時

「えいつ つーかまーえたー！」

「グオツ？」 『えっ？』

「お、おいつ カレン！」

「デイス、トリスン達を呼べ！」

岩陰に隠れていた角熊の首に飛びつくようにして腕を回すカレンの姿。接近されていた事に気付かなかつた角熊^{コウ}が驚いて立ち上がるのと、流石に慌てたガウィークが武器を抜いて飛び出した。マンデルはデイスに治癒術士達を呼ぶよう指示を与えてガウィーク隊長の後に続く。

「カレン！ 離れろっ」

「だいじょうぶだよーたいちよー。このコ、おとなしいよ？」

愛剣である魔法剣”風斬り”を向けて角熊を威嚇するガウィークの緊張感をまるっと無視するカレンは、自身の倍程も身長がありそうな角熊の首にぶら下がりながら、のほほんとそんな事をのたまう。頭を抱えたくなるガウィークはしかし、カレンの言葉に一考の余地も認めていた。

彼女が優秀な祈祷士や呪術士を多く輩出するエイオアの出身だからという訳ではないのだろうが、ぽやっとした言動とは裏腹に人の本質を見抜く眼は非常に鋭く、まるで本能の如く信頼できる相手と出来ない相手を選び分ける。

どれだけ誠実に取り引きを重ねようと、彼女が信頼しない（懐か

ない）相手は損得尽くの関係止まりで、隙を見せると足元を掬われかねない場合が殆どだ。実際、国家間の紛争に関わった時など、カレンの”信頼できる人を見抜く本能”の選定眼で隊が救われた事は少なく無い。

角熊の角に手を掛け、肩に足を掛けてよじよじと登り始めるカレンに対し、落ちないように気を使ってかさつと下から手を回す角熊の姿を見て、ガウイクは「カレンの選定眼は魔物にも及ぶのだからか？」と真剣に考えてしまった。

「隊長！ 何事ですかっ」

「おー？ カレンの奴、なにやってんすか？ ありゃ」

「見ての通りだ、カレンが懐いた。レフ、お前の意見が聞きたい」
「……調べてみる」

向けた魔法剣は下ろしあぐねてそのままに、集まって来た隊のメンバーにも意見を求める。カレンと同じくエイオア出身で、参謀役を任されている攻撃術士のレフイーティアは翳した杖の先端を撫でながら解析系の魔術を練り上げる。

彼女の持つ杖は”流動の御手”と呼ばれる特殊な杖で、魔力の流れを操り、あらゆる術の制御を補助してくれる呪法の杖だ。攻撃系魔術が専門の彼女にも治癒系や呪術系の基本的な術を行使する事ができる。

本職に比べると些か精度は落ちるが、レフの解析は角熊の中に別の存在を感知した。

「……あの角熊はおかしい、本体の意識が表に居ない」
「どづい事だ？」

「……強い自我を持つ別の存在が本体を支配している」
「別の存在？ なんらかの術で服従や魅了の効果を受けているって訳じゃないのか？」

ガウイーク隊長の疑問に対し、レフ参謀は角熊の状態をバラツセのダンジョンに存在していたとされる『集合意識とは別の知的存在による被支配』が最も該当する状態であると思われるとの推測を示した。

「バラツセの知的存在だつて？」

「魔物の支配……」

思わず顔を見合わせるマンデル副長とガウイーク隊長。目的を果たせず大赤字を出した苦い記憶が蘇える。街ぐるみの客寄せインチキモンスターと判断して討伐した魔獣犬、アレを支配していたとされる”知的存在”なるモノが本当に実在するのか俄かには信じ難い。

「んー？ よく分かんねえけど、アレは味方つて事でいいんすか？」

「ええっ！ モンスターの魔物ですよ、アレ」

「まあー魔物だけだよ、カレンが懐いてて参謀が知的なんたらが居るっつーんなら、そーなんじゃねーの？」

魔物が人に味方するなんてありえないと訴えるトリスンに、難しい事を深く考えないリーパは示された事実のみを挙げて結論を口にする。そんな彼等のやり取りを余所に、カレンは角熊コウの肩から隊仲間チに手を振りながらとんでも無い事を言い出した。

「ねーねー、このコもつれていこうよー、あたしこのコにのっていきー」

「……獣避けにはなる」
「うーむ」

ここまでのやり取りの間、この角熊がカレンを肩に乗せたまま大人しくしている時点でレフの示した”知的存在”とやらに支配されているという推測の信憑性は高く、魔物としても強力な部類のモンスターなので連れ歩けば小物のモンスターが寄って来ないというメリットもある。

「反対する者もいるだろうが、確かに現状ではメリットの方が大きいな」

目的地の街に到着するのは恐らく夕刻を過ぎて夜頃になるだろう。たとえ街道であろうと、夜間の森を抜けるのは獣の群れや夜盗の類から襲撃を受ける危険を伴う。角熊が使役獣や召喚獣代わりになるのなら十分心強い。

「連れて行くんですか？」

「ああ、アレからカレンを引っがすのも大変だろうし、レフの解析結果もある。それに、そろそろ出発しないと不味いしな」

護衛対象である仕事の依頼主が気忙しそうに、魔物を前にして話し込むこちらの様子を窺っている。

どのみち山道からの行動を見た限り、放っておいても勝手について来る可能性が高い。ならば、こちらの想定する範囲内に収めておいた方が何かあった場合にも対処がし易いというモノだ。

「しかし、バラッセの冒険者に味方する魔獣犬も本物だったんです

かね？」

「どうだろうな」

街ぐるみの客寄せインチキモンスターでなく本当にそういうモンスターがいたのなら、王都の魔術研究棟にいる変態博士にでも教えてやれば良かったかもなど、ガウィークは時々魔術道具などを都合して貰っているお得意さんの事を思い浮かべながら呟いた。

「リーパとダイドは前の馬車に張り付け。デイス、カレンに弓と矢筒を渡してやれ。レフは台に上がってくれ。出発するぞー！」

キビキビと指示を飛ばしたガウィーク隊長の号令が響く。カレンに弓を受け取らせる為に中腰となっていた角熊コウマが立ち上がると、武装馬車の屋根も悠々と超える巨大な体躯に、デイスがひえっと後退った。

「クマちゃん、よろしくねっ」

「グオウー」『よろしくー』

あれよあれよという間に彼等の仲間につっぱり込んでくれた女射手カレ手を肩に乗せ、角熊コウマは上機嫌でごつい馬車の後ろに続く。エルメル達と強化合宿のキャンプ地へ行った時や、大蛇となって街まで運ばれた時、そしてアリス達と二日間の旅をした時にも感じていた物足りなさ。

冒険者の旅への憧れ。これまでは何れも乗り物などで運ばれるだけだったのだが、今回はしっかりこの世界の大地を踏みしめて、借り物だが自分の足で歩いて旅する事が出来るのだ。

『なんだかワクワクするなあ』

貴族用馬車と仮設荷車、武装馬車に徒歩の角熊を加えた馬車隊は森の街道を進み始めるのだった。

15話：気まずさと焼き魚

途中二度の休憩を挟みながら森を抜ける街道を走り続けた一行は、ほぼ予定通りの夕刻過ぎに目的の街へと到着した。ガウイク隊の護衛任務はここで終了となる。

「あー終わった終わった、酒でも飲みに行こうぜ！」

「こつという小さい街は地酒が結構いけますよね」

隊のメンバーと共に食事がてら酒場に雪崩れ込む。一気に人口密度が上がった酒場内で給仕の娘が忙しそうに走り回っては、偶に尻を狙って伸びてくる酔っ払いの手を叩き落としている。

部下達が寛いでいる間も、ガウイクとマンデルはレフも交えて今回の仕事で得た利益を振り分け、次の仕事や調達する装備の選定など細かい作業に務めていた。受け取った報酬からは破壊された馬車一台分を天引きされたので、儲けとしては微々たるモノ。

手持ちの薬品などを全て使った為、補給分も考えると余計に薄利な結果となってしまうた。例の角熊が置いたと思われる薬がなければ赤字になるところであった。あの薬瓶の山は一体何処から出たものなのか？ という疑問は浮かんだが

「隊長ー！ 副長も参謀も辛気くせえ顔してねーで飲みましょーぜー！」

「この山菜のツマミ、中々ですよ！ ナツハトームの香辛料が使わ

れてるみたいで」

「やれやれ……」

「ま、偶にはつき合ってやりますか」

部下の突撃と酒場の喧騒に忘れられた。

ガウイク隊が酒場で寛いでいる頃、街近くの森に隠れているコウは街の水源となつている湖の畔で魚釣りを試みていた。

角熊の手で細かい仕掛けを作る事は無理だが、棒の切れ端に糸と針をつける程度の簡単なモノなら材料を異次元に喚び寄せた上でコウがそれらを組上げるといふやり方にて製作が可能。釣り自体なら物を掴む事が出来る角熊にも難しくない筈。

「……って思つただけで、やっぱ無理があつたか。魚が怖がつて近付いてこないっばいなあ」

釣りのスタイルそのモノは目論み通り実現できたのだが、肝心の魚が掛からないのではどうしようもない。人生について考え事をする時のポーズとしてなら使えそうだ。などと冗談染みた事を考えていると、街の方向から近付いて来る人の気配に気がついた。

「誰か来る……?」

釣竿を仕舞い、生い茂る草木の隙間に身を潜めたコウは、街道脇

から続く森の小道に視線を凝らした。

「クマちゃん、どこにいるのかな？」

両手に肉刺しを持ったカレンが湖に繋がる森の小道をてくてく歩く。角熊にも料理を食べさせてあげようと届けに来たらしい。そんなカレンに、街から後をつけて来た三人組の無頼漢が纏わり付く。

「いよう、ねえちゃん」

「こんな夜中に一人で森をうろつくなんざ自殺行為だぜ？」

「んー？」

カレンがガウィーク隊の一員である事を知っていれば、彼等も手出ししよう等とは考えなかったであろう。間の悪い事に、三人組はこれから酒場に向かおうか娼館で遊ぼうかと相談していた所で、肉刺しを両手に通りをふらふら歩いている彼女を見掛けて目を付けたのだ。

猫科を思わせる釣目気味で小生意気風な顔立ちに、少し酒も入っているのかボンヤリ上気した表情はとても艶っぽく、出る所ははちきれんばかりに出て引っ込むところはキュッと締まっている身体つきは大変そそられる。

ぽけーっと振り返るカレンの背後から三人組の一人が抱きついた。

「ひゃっ」

「おほう！ イイ身体してるぜー」

両手が塞がっているカレンの身体を弄る男はそのまま服の下に手を入れると、期待通りの柔らかくて張りのある豊満な乳房を揉みし
だく。

「やあんっ あたしそういうオシゴトのヒトじゃないよー？ そんなコトしちゃダメなんだからー！」

と、少しばかりおつむの足りてない子のような反応も彼等の
征服欲を刺激し、ますます盛り付かせてしまう。三人組がカレンを
近くの草むらに引き摺り込もうとしたその時、木々の間からぬうつ
と現れる巨大な影。全身を覆う少しくすんだ白い体毛、狼の頭部に
黒い角。

「あ、クマちゃん」

「ひいっ！」

「っ、角熊だあ！」

「魔物だ！ 魔物が出たー！」

こんな人里近くで遭遇する筈の無い大型モンスターの出現に泡を
食った無頼漢の三人組は、一目散に逃げ出した。

湖の畔で適当な岩に腰かけ、カレンに貰った肉刺しをちびちびと
齧る角熊コウ。角熊の意識から表に出たそんな意思を感じたが、カ

レンと二人きりの状態で支配を解く訳にはいかない。

宿主の意思からしか空腹などを感じられないコウは、食感も薄く味は分ならずとも”食べる”という行為を通じて生命維持の営みを実感していた。

「クマちゃん、それだけじゃ足りないよね？」

「グオル」

カレンが持つて来てくれた肉刺しは一刺しでも大人の拳三つ分程の大きさで、平均的な体格の成人男性でも二刺し食べれば十分腹を満たせるだけの量なのだが、角熊の身体からすればつまみ食い程度で物足りない。

「じゃあ、おサカナとつてあげるね」

ふんふんと鼻歌など歌いながらブーツに仕込んである組み立て式の携帯弓を取り出したカレンは、手際よく組み上げた弓を湖に向けて構える。『魚つて弓で獲れるのかなー？』と様子を見守っていたコウは番えられた矢に巻き付くような魔力が籠められていくのを確認した。

熟練した射手が扱う強力な射術技。カレンが放った矢は湖面に小さな飛沫と僅かばかりの波紋を残しながら水の抵抗も無視して突き進み、湖底近くを行く巨大な淡水魚に命中した。数瞬の後、翔け抜けた矢の通り道に残る魔力の膜が弾けて派手な水飛沫が上がる。

この射術技は籠められた魔力が矢本体に掛かる物質的な抵抗を緩和させる皮膜となり、雨や風の影響を受け難くする効果を持つ。極めれば今回カレンがやったように、水中に打ち込んでも暫らくは水の抵抗を受けない程の効果が得られる。勿論、ここまで極めるのは並大抵の事ではない。

『カレンって凄いなあ……』
「クマちゃん、てつだつてー」

浮かび上がった大きな魚に糸付きの矢を放つて手繰り寄せていたカレンは、獲物が大き過ぎて引き上げられないと協力を要請した。カレンが仕留めたのは目測で体長約133ペイルほどもある大物。コウの知る単位で表すなら凡そ二メートル近い巨大魚であった。

角熊の腕力でも少々腰を入れなければ持ち上がらない巨大魚をどこらしよと陸に引き上げる間、カレンはテキパキと木枠を組んで焚き木の準備を整えている。とりあえず丸焼きに出来るよう近くの大木から手頃な枝を拝借し、魚に刺して火に掛けた。

「やつけるっかな〜やつけるっかな〜、おっさかなおいしくやつけるっかな〜」

「ヴァルヴァルヴァー」

満遍なく火が通るよう横長の焚き木をつついて火力の調節をしているカレン。楽しそうに歌うカレンに、コウも何となく合わせてみる。すると、カレンは嬉しそうに笑って見せた。そうこうしている内に、魚の焼ける香ばしい匂いが辺りに漂い始める。

『こつこつのも、何だか温かくていいなあ』

一方、街の酒場。

「本当だって、ありや間違いないく角熊だったぜ！」

「あんなデカイ奴、普通は山奥にでも行かなきゃ出くわさねえよ」

直ぐ近くの森に角熊が出たと騒ぐ冒険者が傭兵崩れのような風体の酔っ払い三人組。酒場の一角で彼等の話す声を聞いていたガウイク隊の面々は、誰もが岩山からついて来てカレンが懐いた例の角熊を思い浮かべた。

ガウイク隊と同じように仲間同士で固まっている酒場内の冒険者や傭兵団らしきグループは、騒ぐ彼等に半信半疑の目を向けている。

「そういえば、カレンが森に行った筈だが」

「角熊アレに餌を持っていったらしいですが……そこを見られたんでし
ようかね？」

ヒソヒソと言葉を交わすガウイクとマンデル。様子を見に行っただ方がいいのではと心配性のトリスンが提案した時、やいやい話し続ける三人組の会話が耳に引く掛かる。

「ところで、逃げる時あのネーちゃん見なかったよな」

「食われちまったんじゃねーか？」

「ああ、なんか魔物が出たって事、分かってねえ感じだったもんな
あ」

勿体ねえ勿体ねえと嘆き笑いをする三人組。

ガタツと椅子を鳴らした寡黙そうな闘士のガイドが、戦闘用グロ
ーブを装備しながら席を立つと、足早に酒場の出入り口へと歩き出

した。隣で飲んでいたリーパが声を掛ける。

「おいおいおいダイドっ どこ行くんだよ」

「森」

「おい待てって！」

「待たん」

彼は隊内でも人一倍カレンの事を気に掛けている。ぶっちゃけ惚れているのだが、話を聞く内に居ても立つても居られなくなったらしい。

おいおい言いながら愛剣を装備したリーパが彼の後を追う。同じ席に並んでいたデイスがオロオロしながらその背中とガウィーク隊長達に視線を向けると、マンデル副長の隣にいたレフ参謀も立ち上がる。

なし崩し的にガウィーク隊の中心メンバー全員が席を立ち、酒場の外へと向かう事になった。

「おー討伐隊が退治に向かったぞ」

これで安心だとかなんとか言いながら見送る三人組。他の冒険者や傭兵団グループは出遅れ感も然ることながら本当に角熊が出たのか否かも怪しいだけに、席を立つ者はいない。高みの見物でガウィーク隊の帰還を待つ事にしたようだ。

酒場でそんな騒ぎが起きていた頃、湖の畔では一人と一匹が食後

のノンビリとした一時を過ごしていた。

「うーん、もう食べられないー」

「ヴォルヴァル」『こっちも満腹みたい』

巨大魚の丸焼きはカレンを即満腹にし、角熊の胃袋も十分に満たす事が出来た。骨に残った身を啄みに来ている夜行性の小さな鳥達を眺めながら、カレンは角熊コウの膝で丸くなる。

「クマちゃん……」

「ヴァル？ ヴォルヴォアヴァル？」『カレン？ こんな所で寝ると風邪引くよ？』

角熊の毛は割と硬質なのだが、モサモサの体毛は寝心地が良いらしく、暫らくするとカレンから寝息が聞こえ始めた。

『あらら、寝ちゃったよ』

流石に夜が明けるまでこのままという訳にもいかない。どうしたモノかと悩みつつ、コウは爪で傷つけないように注意しながらそつとカレンを抱き上げると、ガウィーク隊の誰かがカレンを探しに来る事を期待しつつ、街の入り口まで目と鼻の先な場所まで運ぼうと森の中を歩き出した。

「おいガイド待てつてのに、そんな殺気立ててちゃ大人しいモンも刺激受けちまってだなー」

普段から物事を難しく考えずシンプルに判断するリーパが、ダイドの抱えているであろう不安や心配による行動は返って事態をややくしくする場合がある等と宥めていたところ、ダイドは唐突に足を止める。勢い余って背中に頭突きをいれてしまいうりーパ。

「なんだよっ 急に止まるなよ」

「この匂い」

森に入る脇道の入り口に焼き魚の匂いが漂ってくる。二人に追いついたガウイークが声を掛けた。

「カレンが魚でも焼いてやってるんじゃないか？」
「隊長」

確か角熊は魚も食べる筈だと、隊員が揃った事を確認して森へ踏み入ろうとしたその時、脇道の奥からのっそりと近付いて来る白い影に気付いたガウイーク隊メンバーは殆ど反射的に警戒態勢をとる。その影はカレンを抱きかかえた角熊だった。くたりと弛緩したカレンに一瞬ギクリとするが、眠っているだけだと分かりホッと胸を撫で下ろす。角熊がその長太い腕でカレンを差し出すと、ダイドが丁寧に受け取った。

「おいダイド、落つことすなよ？」

「……落とさない」

『この人、なんかもの凄く緊張してるみたいだけど、大丈夫かな？』

少し小首をかしげるように身体を傾けている角熊は、カレンやダイド達を気遣って覗き込んでるようにも見える。薬瓶を置いていたり、人に慣れていたり、凡そ自分達の知る大型モンスターの魔

物とは違い過ぎる在り方をしている角熊。

一つ息を吐いたガウイークはこの不思議な角熊を見上げると、特に意図した訳ではなかったが心に浮かんだ疑問を呟く。

「お前、本当に何者なんだ？」

その呟きに、角熊はガウイークを見た。不可解そうな表情のガウイーク隊長。直ぐ傍にマンデル副隊長が付き従い、後ろでレフ参謀も静かに控えている。コウは少し考え、角熊の額に祈祷士のアミュレットである緑石を出現させた。

「なっ！ お、お前……」

目を見張る面々。ハラリと、自己紹介の書かれたメモ紙が角熊のモサツとした毛の集まる胸元付近から迫り出して来る。

「コウ……？ お前は、コウという名なのか？ あの魔獣犬を支配してたつていう」

「グアウ」『そうだよー』

肯定の意思を示し、預かっていたカレンの携帯弓を渡して湖畔の方へ戻って行く角熊^{コウ}。ここは脇道への入り口なので目立ってしまう。一度振り返り、またねーと手を振ってコウは森の中へ姿を隠した。木々の間に消えて行く角熊^{コウ}の巨体を見送り、なんだか気まずい思いをしながらガウイーク達は一旦街へと引き上げる。

「まさか、あの時の魔獣犬だったとは……」

「俄かには信じられません、と言いたい所ですが……この紙、それに」

「……あの緑石は祈祷士のアミュレットで間違いなかった。恐らく、

バラツセで見たモノと同じ」

凍結の畏の発動を担当したレフが、石から感じる波動も同じ感覚だったと言いつける。あの時、果敢にも威圧に対抗してきた地元の冒険者らしい女剣士に向けられた批難の眼を思い出し、盛大に溜め息を吐くガウイーク。

「はあ~~~~、なんてこつたよ」

「もしあの存在、”コウ”が本当に街で集めた噂通りの存在だったとしたら、少々厄介な悪評を抱えてしまったかもしれない」

再びバラツセの街に滞在する時期を予定より延ばすなり、統治者や協会を通じての根回しが必要だとレフ参謀も進言する。街に戻って宿泊している宿に入るまでの間、ガウイーク隊の上位メンバーは皆が沈黙して微妙な雰囲気にも包まれていた。

「隊長達、どうしたんだろう？ カレンさんに何かあったのかな？」

「なんか気まずそうな難しい顔してたよね」

「うーん……」

デイス達若手メンバーや見習い、隊の雑用係を含めた下っ端達は、酒場の隅に陣取りながらしきりに首を傾げ合っていた。

16話：盗賊団の討伐依頼

冒険者協会の支部は機能や規模に差はあるものの、仕事の斡旋所として大抵の街に存在する。護衛任務の稼ぎが少なかったので次の街へ移動する前に何か適当な依頼を探していたガウイク隊は、この街まで護衛してきた商人貴族から大きな仕事があると紹介を受けた。

「盗賊団の討伐ですか……」

「ああ、まあ君らの専門じゃないのだろうが、単独でやる訳ではないからな」

近隣の集落を荒らして回る盗賊団の討伐依頼。最近、他所の地を追われてきた盗賊達が徒党を組んで活動しており、この街から少し離れた場所にある神殿跡の廃墟を根城にしている事が突き止められた。冒険者協会の調べでは、凡そ五十人近い規模の集団と化しているらしい。

討伐に参加するのは街軍を中心に傭兵団や冒険者グループが三団体、フリーの傭兵も何人かいるが、何れも無名の団体なので”戦斧と大蛇”のメダルを持つガウイク隊の参加は歓迎された。

この日、宿泊している宿の一室に集まったガウイク隊のメンバーは、仕事内容の確認と活動方針などを話し合っていた。対人戦は魔物を相手にする時以上に危険度が増す為、慣れていない若手メン

バーには補佐をつけてやる必要がある。

特に今回の場合は討伐対象である盗賊団の規模が少々大きいので、見習い付近の者は連れて行けない。

「現場への移動には街軍の馬車を使う事が決まっている。従って、見習い組や雑用係は街での留守番を頼む」

「指揮役としてヴィードとフランチェに残って貰う。後は全員参加という方針だが、何か質問は？」

「しつもん、クマちゃんもつれていくの？」

カレンの質問に顔を見合わせたガウィーク隊長とマンデル副長は、とりあえず”コウ”の事については午後から別途で話し合うと答えた。中身はどうかであれ角熊は真正銘の魔物なので、何時までも街近くの森に隠しておく訳にもいかない。

今後も行動を共にするのであれば、魔物を連れている事に対して周囲を納得させられるだけの理由を用意しなくては、隊の信用にも関わる。

盗賊団の討伐任務に関する隊内の話し合いは幾つかの確認事項を整理して終わり、昼までに各自装備の点検や手入れ、必要物資の調達などが行なわれた。そうして一旦、昼食を挟んで森に出掛ける隊の上位メンバー達。

角熊コウに関しては隊が使役している事にして連れて行くかどうかという案が出ており、他に良いアイデアも浮かばないので本人と直接話を
して意思の確認を図ろうという事になっていた。

「ヴォール」『いいよー』

了承の意が書かれた紙をニユツと出しながら提案を受け入れるコウ。なんともアツサリした返答に脱力するガウィーク達。ちなみにカレンはまた角熊コウの肩に登っている。

コウを連れ歩くにあたっては、角熊コウがただの魔物ではない事を示す目印として何か身に付けた方が良さだろうという話になり、コウは額の緑石というトレードマークを主張してみたがこの巨体では目立たないので却下。

ガウィーク隊の所属を表す為に隊の馬に着せる馬鎧の一部を改造して装備させてみようという事になった。結果、鎧を装備した角熊などという何とも奇妙な姿が出来る。結果、鎧を装備した角熊

「クマちゃん、おもくない？」

「ヴォヴァール」『ぜんぜん、大丈夫だよー』

当のコウはガウィーク隊員御揃いの紋章入り鎧を着た事で一つの集団組織に所属した事を実感し、テンションが上がっていたりする。モンスターを連れたモンスターの討伐集団という珍しい団体が出来上がった。

「ともあれ、問題の一つはこれで片付きましたな」

「だな……ああ、そういえばコウ」

「ヴァール？」

あの大量の薬瓶は一体どうしたのかと、ふと思いついて出所を訊ねてみるガウィーク。聞けばダンジョンで拾い集めたモノだという仲間になったという意識から隠し事の敷居を下げたコウは、ダンジョンで拾ったモノを異次元に喚び寄せて保管している事を教えた。

「ヴァヴァルヴァー」『こんなのもあるよー』

異次元倉庫から大型の戦斧と重戦士用の幅広な盾を取り出してみせる。思わず目を見張るガウイク隊の面々。鎧を装備して戦斧と重盾を持った体長三メートル近い大型モンスター。討伐専門の戦闘集団にして『ちよつと戦いたくないぞ?』と思わせる魔物戦士が誕生した。

さておき、改めてコウが例の魔獣犬であった事を再認識したガウイクは、隊を代表して言うておかなければならない事を口にする。

「その、すまなかつたな」

ガウイク隊長の謝罪を、コウは快く受け入れた。もとより、冒険者に討伐されてなんぼというモンスター生活が長かったコウに被害者のような意識は無い。

盗賊団の討伐に参加する他の冒険者達にも角熊コウの事を周知させる為、ガウイク隊の主だったメンバーが角熊コウと共に街に入る。この街の有力者と深い繋がりのある例の商人貴族に掛け合い、使用人達に山道での出来事を口外しないよう根回しも済ませてある。

始めは門番の衛兵や通りを行く街の住人達に驚かれはしたものの、鎧を装備している姿が野性味を薄めて理性的に映るらしく、おっかなびつくり見物に寄って来た者が角熊の毛に触ったりしている内に警戒心も解されていった。

カレンが肩に乗っていた事も、角熊コウマに対する恐怖心を和らげる効果があったようだ。

討伐に参加する傭兵団や冒険者グループも概ね”戦斧と大蛇”のガウィーク隊が使役しているというなら大丈夫だろうと、今回の仕事に角熊コウマを同行させる事に対して強く反対を表明する者は殆どいなかったのだが、フリーの傭兵として参加している三人組が難癖をつけて来た。

「だってよう、おかしいだろう！ この前見た時は鎧なんて着けてなかったし、大体なんで森に隠してたんだ」

「今日になって急に”実は隊で使役してました”ってのが引っ掛かるよな、角熊の使役獣なんて聞いた事ないし」

「魔物だろ？ 一つ使役の効果も切れるかも分からねえのに、せめて鎖ぐらいいは付けとくべきだろ」

まだ動物としての部分を残す変異体と違い、意図的に製造された存在である魔物は製造の趣旨によって使役可能なモノと不可能なモノとに分かれるが、野生化した魔物が人に懐く事はまず無いと謂われている。

危なくて信用できないと訴える三人。確かに「なぜ今まで森に隠していたのか」とか、「使役不可能な筈の魔物をどうやって使役しているのか」などの疑問も残り、彼等の主張には少数意見とて無下には出来ない部分もあった。

しかしそこはエリート集団でもあるガウィーク隊。こういった手合いのあしらい方や躲し方も心得ている。魔物の討伐を専門にしているからこそ魔物の生態にも詳しい。一般的に知られていないよう

な魔物を使役する方法も知っている。が、そんな貴重な情報をほいほい公開する訳が無い。

といった方向性の主張で猜疑を躲す。

「直ぐに街へ入れず森に置いた事も、これは極秘事項なので教える事はできん」

示された疑問の内容には殆ど答えず、上位ランクのメダルを保持する集団という信頼性を盾に相手の主張を封じ込めに掛かる。件の三人においては無名の傭兵である事に加えて弱みもしっかり握っているのです、それを使うのだ。

「所で、角熊に餌をやりに行っただうちの隊員がお前達に絡まれたと聞いたんだが……カレン、この三人に間違い無いか？」

「そーだよー、あたしそういうオシゴトのヒトじゃないよーっていったのに、あのヒトあたしのオツパイもんだんだよーっ」

ブンブンツと怒って見せるカレン。あの時は暗くてよく見えなかったが、確かにカレンがああ晩の娘だと分かった三人組はビシリと固まった。

「それでそれでっ あたしのコトをくさむらにひっぱっていきこうとしたんだよーっ でもクマちゃんがでてきたらにげちゃった」

「……………」

あの夜、角熊が出たと彼等が酒場で騒いだ一件はここに集う者達の記憶に新しい。周囲から冷ややかな視線を浴びる破目になった三人組は、居心地悪そうに沈黙したのだった。

討伐の決行日。

夕刻を過ぎる頃に街を出発する街軍の馬車隊。盗賊団のアジト急襲は深夜に行なわれる予定だ。現場に向かう馬車の中で最終的な打ち合わせを行なう各グループの隊長達。アジトへの突入はガウィーク隊と傭兵団が担い、冒険者グループやフリーの傭兵達は外を警戒する事が決まっている。

「しかしやはり敵戦力の正確な内訳が分からないのは少々やっかいだな」

「魔術士も何人が確認されているからな。寄せ集めの集団とて、それなりの街軍に匹敵する力は持っていそうだ」

「人質の存在も不安材料の一つですね」

「まあ、契約では無視していいって事になってはいるが……」

そうそう割り切れるモノではないからなと、それぞれ自分達の部下を思い憚る隊長達。襲われた集落からは何人が攫われた者もいるらしいのだが、その生存が確認されても救出する義務は無く、討伐を優先して犠牲を出しても構わないという契約内容になっていた。

とはいえ、殺戮歓迎な戦闘狂集団でもない限りその条件をそのまま適応しようと思う輩はそうそう居ない。今回の討伐に参加している者達は人質を死亡させてもペナルティーが付かないという程度の認識で意見を合わせていた。

街道を外れて夜の平野を進む討伐隊を乗せた街軍の馬車隊。五台ほどが連なる車列の後ろを巨大な影がのしのし歩く。

徒歩で車列に加わっている角熊のコウである。最後尾の馬車に乗る傭兵団所属の呪術士が移動補佐の術を掛け続けてくれているので、そこそこ速度が出ている馬車にも問題なくついて行く事が出来た。

偶に馬車の車輪が窪みに嵌まるなどのアクシデントが起きても角熊の腕力を持つてすれば簡単に抜け出せるので、当初は討伐隊の参加者達からそれなりに警戒の眼差しを向けられていた角熊^{コウ}も、目的地までの行程を半ばほど過ぎる頃には皆からの信頼を得ていた。

『おや？ 誰がいる』

角熊自身の夜目はそここの視界しか利かないのだが、コウは明かりの無いダンジョンのような真つ暗闇でも遠くまで見通すことが出来る。

馬車隊の進む先に見える岩陰に複数の人影を見つけたコウは、ガウィーク隊の乗る馬車の隣まで走ると、窓からメモ紙を放り込んでその趣を知らせた。馬車の中から『クマちゃん』というカレンの甘え声が聞こえたが『後にしろ』と誰かに窘められていた。

ゆっくり速度を落とし始める馬車隊。ガウィーク隊が先頭を行く馬車の街軍士官に問い合わせてみた所、その人影は盗賊団のアジトを見張る偵察隊である事が分かった。

そろそろ目的地のアジトが近い為、ここからは歩きになる。全員が降車し始める中、街軍の指揮官は偵察隊からの報告を受ける。

「任務ご苦労、敵の様子はどうだ？」

「特にコレといった動きはありません」

盗賊団のアジトになっている神殿跡の廃墟。偵察隊の話では周辺に見張りの姿もなく、数日前に何処かから戻って来たらしい武装集団が入って行ったきり不気味に静まり返っているのだそうだ。

それをどう判断するか。ガウィーク隊や傭兵団は罫の可能性を考え、フリーの傭兵からも何人か同じ訴えを挙げる者がいた。だが指揮権は街軍にある。とりあえず神殿跡が見える位置まで進んでアジト周辺の様子を探ろうという事になった。

「あれか……」

「聞いてはいたが、実際に見ると中々に厄介な砦だな」

絶壁に彫り込まれたような神殿跡。元々高い岩山の崖下にあつた洞窟を魔術で刳り貫いて造られたと言い伝えられる古い神殿は、地形からして天然の要塞と化している。入り口は正面の一箇所しかなく、そこへ至るまでは見通しのよい緩やかな坂を上って行かなければならない。

「中に繋がる抜け道とかは見つかってないんだっただな？」

「古い探索記録で調べた限り、そういった隠し通路は確認されていない。もっとも、今あそこを根城にしてる連中が造っているかもしれないが」

ここ数日、付近を探索した偵察隊もそれらしい出入り口は確認していないという。回り込んだり密かに近付いたりという事が出来ない以上、闇に乗じて正面から行くしかないのだが、篝火の一つも焚かれず見張りの姿も見えない事にどうにも不審が募る。

「隠れ潜んでいるのだから、こんなモノなのではないか？」

「うーむ」

街軍の士官は例え待ち伏せ等の罠があつたとしても、殲滅目的で来ているのだから諸共喰い破ればよいと鼓舞してみせた。そこへ、ぬうつと顔を出す角熊に思わず仰け反る街軍士官と傭兵団の団長達。内心の苦笑を隠しながら何かあつたのかとガウィーク隊長が応対する。

「どうした？ コウ」

「ヴォルルヴアル」

身振り手振りで意思を伝えている”振り”をして見せながら、ガウィーク隊長にしか見えない角度でメモ紙を出す。コウには崖の中腹付近、神殿上部の屋根にあたる部分に沢山の人影が見えていた。弓らしきモノを構えた十数人の姿。

「やはり待ち伏せが」

と、その時、ヒュウヒュウという風を切る音を捉えたガウィークは射掛けの襲撃だと警告を発した。

「！っ 全員姿勢を低くしろ！ 矢が来るぞ！」

一斉に姿勢を低くとりながら岩陰に隠れたり盾を構えたりして回避行動に入る討伐隊。目立つ角熊には矢がプスプス刺さっているが、硬質の体毛と丈夫な皮膚に阻まれて深くは刺さらず掃えば落ちる。とりあえず、コツソリ異次元倉庫に保管するコウ。

「こちらの動きを把握されているな」

「ええい仕方ないつ 全軍突入せよ！」

「おいおい、マジに言ってるのかよ」

街軍士官の無謀な号令にリーパが口を出す。血の気の多い傾向にある彼とて攻め時と退き際くらいは心得ている。詳細の分からない敵に先手を取られた状態で相手側のテリトリーにまで踏み込むなど自殺行為だ。それこそ自ら罠の中に飛び込んでいくようなモノである。

「長く留まるのは危険だ！ 一旦退く事を提案する」

「我々もガウィーク隊に同意する、このまま突入しても無駄に被害を増やすだけだ」

「指揮権は我々にある、ここは契約に従って貰おう」

功を焦っているのか単なる突撃馬鹿なのか、ここまで来て怖気づいたとは言わさんと強行策を推す街軍士官に、ガウィークも傭兵団長もこれは何を言っても聞かないタイプだと諦めた。こういう仕事をしていれば任務上で困った上官をいただく事も、実際よくある事なのだ。

闇色に塗られた矢が夜空から降り注ぐ平原の一角にて、一応防御しているのか頭に両手を乗つけた角熊ユウが背中に沢山の矢を受けながら一人？ 平然と突っ立っている姿に、現状を打破する突破口を見出すガウィーク隊長。

「コウ！」

「ヴァル？」

ガウイクは作戦を伝えるべく、角熊^{コウ}を手招きして呼び寄せた。

17話：神殿前の戦い

降り注ぐ矢が散発的になり始めた頃を見計らい、討伐隊の中では現状で最も防御力の高い角熊^{コウ}を神殿跡から見渡せる緩く開けた平原の坂道まで偵察に走らせる。特に怪しいと思える箇所を重点的に調べながら設置型の罾や伏兵が潜んでいないか探って貰うのだ。

「やれるか？」

「ヴァヴァル」『まかせてよ』

幅広の重盾と通常は両手で使う戦斧を装備してのしし平原に歩き出す角熊^{コウ}。神殿跡の上部からは相変わらず矢が飛んで来ているが、防具に覆われていない部分でさえダメージの通らない角熊が、しっかりと盾を翳しながら進んでいるので足止めにはならなっていない。

オマケに付近一帯を照らすのは星空と月明かりによる僅かな光源しかなく、幾らか大きいとはいえ灯りも持たずに歩き回る角熊は神殿の屋根からも捉え難いようで、狙いも甘々だ。暫らくすると矢の無駄を悟ったのか、飛んで来なくなつた。

コウはほぼ真つ暗に近い平原の坂道を上りながら、ガウイクに示された”怪しい場所”を見て回る。

『あ、罾発見。壊しておこう　てりゃっ』

土と草で巧妙に隠された拘束型の罾を戦斧で叩いて破壊した。所々に不自然な土の盛り上がり方をした場所や、よく見ると草が編み

込まれていたりする箇所があり、それらの罖を見つけては戦斧で粉砕して行く。

偶に踏んづけたりして発動させてしまうが、人間用の罖なので角熊には殆ど効果が無い。

遠目からは大きな灰色の影が平原の坂道一帯を移動しながら時折もそもそと何か作業をしている姿しか見えず、盗賊団側は罖が解除され捲っている事に気が付かなかった。

後方の坂下から討伐隊の皆が様子を見守る中、罖の処理をしながら坂を上っていたコウは、ふと見えない壁にぶつかる。

『あれ？ なんだろう……』

ぐるりと周囲を見渡すも、特に変わった様子は見られない。多数の罖があつた事を除けば普通の開けた平原だ。前方にはまだ後二十メートル程の距離を置いて絶壁に掘り抜かれた神殿跡が見える。灯りも無ければ人の姿も見えない。だが、何故かここから先に進めないのだ。

『あ、もしかして結界かな？』

角熊の身体から精神体の頭を出して見えない壁に伸ばしてみると、先程まで灯りも無く人影も見えなかつた坂上の神殿跡前に篝火やら丸木作りのバリケードやらが並べられ、その後ろに盗賊らしき大勢の人影が控えている姿を発見した。

結界の外からは見えない盗賊団の待ち伏せだ。これは危ないと、コウは一旦報告に戻る事にした。

迎撃エリアに設定していた平原の坂を右へ左へウロウロしながら

上つて来て途中で引き返して行った大きな影について、結界の向こうに潜む盗賊達は待ち伏せがバレたのではないかと囁きあう。

「それよりさっきのアレは角熊じゃなかったか？」

「武装した角熊とかありえないだろう」

「いや、新しい種類の召喚獣かもしれんぞ」

盗賊団の一隊を指揮している魔術士が討伐隊に魔術道具を専門に扱う職である魔導技士がいるのかもしれないと警戒を促がした。ゴームや召喚獣を駆使する魔導技士は支援職でありながら幅広い方に活躍できる上級職。それなりの実力者でなければ就く事は難しい。

「今度の討伐隊は片田舎の街軍だけじゃなさそうだな」

「ああ、この辺りで稼ぐのもそろそろ潮時かもしれん」

盗賊達の間でそんな会話が交わされていた頃

コウの知らせにより結界の存在とその向こうに待ち伏せがいたという情報を得た討伐隊は急遽作戦会議を開いていた。街軍士官もガウィーク隊がそこまで正確な情報を掴んだと主張する以上、このまま無理に突撃しろとまでは言えない。

「神殿の見える一帯を丸々隠せるとなると、そこそ腕の立つ祈祷士が居ると見て間違いないな」

「ええ、結界前で無防備になった所へ奇襲を仕掛けるといった策でしよう」

「途中の罠は隊列を乱したり撤退時の混乱を狙ったものか」

「あのまま突入していたらと思うとゾツとしますね」

ともあれ、まずは結界をどうにかして取り除く必要がある。余程強力なモノでも無い限り、魔術士や呪術士が結界を構成している魔力に干渉して負荷を掛けることで破壊する事ができる。但し、結界を張った術者が結界に使った力以上の力が必要である事は言うまでも無い。

同じ祈祷士であれば、負荷による破壊ではなく中和して解除する事も可能だ。この場合は術者の力は同程度で十分である。

「問題は、討伐隊に参加してる祈祷士が居ない事だな……」

「うちの呪術士とそちらの魔術士を合わせれば結界の破壊に必要な力は得られるでしょう、しかし危険過ぎますな」

結界の破壊に動けば当然、相手もそれに合わせて攻撃を仕掛けて来るであろう事は推測できる。ただ何時、何処からどのように仕掛けて来るかは分からないので、魔術士だけで行かせるのは論外ながら護衛を付けても危険度は然程変わらない。

全軍で防御を固めながら結界前まで進み、そこでも防御を固めて魔術士を守りつつ結界を破るといふ手もあるが、相手側にはこちらの行動が筒抜けなのだから、それこそ一網打尽にされるような危険に曝され兼ねない。

相手が見えないので結界の向こうから攻撃されるとほぼ回避不能。進軍に合わせて巨大な岩を転がされるだけでも大被害を受けるだろう。

「まあ、そんな大掛かりなモノが無くても、結界破りに集中してる術士を護衛の隙間から突付くなんて難しくはないだろうからな」

討伐隊にもう少し戦力があれば、多少の被害は覚悟しつつ複数の隊で広範囲に渡って同時に攻略を仕掛けるという方法もあるが、結

界に対処できる人材が少ない現状ではそれも使えない。

「さて……どうしたものか」

考え込むガウィーク隊長とマンデル副長。冒険者グループのリーダーからは、やはり一度退いて必要な人材を揃え直した方が良いのでは？ との意見が出ており、各傭兵団の団長達もその意見には賛成しているが、街軍士官は今回の任務で討伐を果たす事に拘っている。

「今回を逃せば、奴等に逃げられるかもしれん！」

「そうは言ってもなあ、無理なモノは無理なんだから仕方がないだろう」

「それをどうにかするのが貴殿等の役目じゃないか！」

「んな無茶な」

議論が行き詰まりを見せ始めた時、ガウィーク隊参謀のレフが少ない人材で確実に結界を破れる方法があると提案した。普通の方法ではなく、色々と秘匿したい術が絡むので身内だけで相談したいという訴えに席を外すガウィーク隊以外の面々。

「で、方法つてのはもしかしてコウのアミュレットか？」

「……そう。彼の持つアミュレットの力を利用すれば、単独でも結界の破壊は可能」

レフの示した方法とは、彼女の持つ呪法の杖、“流動の御手”を使って祈祷士のアミュレットが持つ“結界破りの力”に同調させた魔力を練り上げ、それを適当な武器に付与しながら結界を斬り裂くという内容だった。

「しかし、それだとお前を結界の近くに連れて行かなきゃならんな」
「弓に付与して矢で穿つ訳にはいかないのか？」

魔力の扱いならカレンも相当な腕を持つので、安全で且つ確実なものではないかと問うも、レフは首を横に振る。

「……結界破りに同調させるには常に魔力の制御が必要。矢では無理」

「うーむ」

「コウが魔術でも使えればなあ」

「ヴアル？」

車座になつて膝をつき合わせているガウィーク隊メンバーの中で、一人輪の上から顔を覗かせているコウが小首を傾げる。魔物の中には魔術のような力を持つモノも存在するが、角熊がそういった力を使ったという話は聞かない。

会話の流れからレフの持つ杖を扱う事が出来れば問題が解決するらしいと理解したコウは、杖の使い方について訊ねてみた。

”魔力の制御ってどうやるの？”

「……魔力の波動を感じ取り、杖の先端に通しながら強弱と波動の幅を整える。魔力に敏感でなければ無理」

コウのメモ紙を使った質問に細かく答えるレフ。律儀な奴だなあとガウィーク達が苦笑する。どのみち杖の使い方を理解しても魔力の扱いに長けていなければ、魔力を集めたり特定の効果をもたらせる術式に編み上げて行使したりという”魔術”を扱う事は出来ない。

「……魔力の付与には灯りの魔術行使が最低限必要な条件」

そう言っただけでレフは手の平に小さな光源を出して見せる。これは魔術を扱う者なら誰にでも出来る基本的な術だ。見よう見まねで大きな手を上に向けてヴォルヴォル言っているコウ。隣にくっ付いているカレンが魔力の集め方を『ココロであつめるんだよ』とアドバイスしている。

宙空を満たす神の力。万物に宿る創造の源を呼吸と共に体内に取り込み、念じる事で魂を通して諸現象を喚び起こす顕在の道標として精製する。という、魔力の扱い方に関するレフの講義は、コウには難し過ぎてよく分からなかった。だが、コウは魔力を視認する事が出来る。

『ああ、こうすれば集まるのかあー。という事は、これをこうやって、こんな形に揃えれば……』

カッと眩しい閃光が辺りを照らし出す。角熊の大きな手の平に強烈な光を放つ光源が出現した。それに驚きながらも周囲に警戒の目を向けるガウイーク隊のメンバー達。少し離れた場所から傭兵団や冒険者のグループが何事かと様子を窺っている。

「コウ！ 光を落とせ、敵に位置を悟られる！」

「ヴォアル」『ごめん』

神殿跡からは距離を置いているので先程のように矢が降って来る事は無かったが、今の光は恐らく神殿跡の盗賊達にも見えたであろう。

「お前、魔術使えたのか？」

「ヴォール」

”今覚えた”とメモ紙を出し、レフの術を見よう見まねで魔力の形を整えてみたらああなつたと釈明するコウ。魔力を視認する事が出来ると聞いたレフは、それならば”結界破りの力”に魔力を同調させて武器に付与する事も、視覚的に可能なのではないかと提案する。

「ふむ……やれるか？ コウ」
「ヴォヴァル」『やってみる』

レフに借りた呪術の杖、”流動の御手”を使って祈祷士のアミュレットが纏う”結界破りの力”に波動を合わせた魔力を練り上げると、戦斧に満遍なく巻きつけていく。以前、湖の畔でカレンが矢に魔力を巻き付けている所を見ていたので、それを参考にした。

「ヴァルルー」『できたよー』

「レフ、どうだ？」

「……完璧」

通常、術士達が武器などに魔力の付与を行なう時はイメージで魔力をコントロールしながら巻きつけて行くので結構まだらになり易く、隙間無く綺麗に纏わせるには相当に熟練した魔術士でもなければ難しい。

だが、魔力を直接視ながらコントロール出来るコウの付与はこれ以上無いほどに完璧だった。

結界を破る方法を見出したという事で、討伐隊はガウィーク隊を

中心に今後の作戦行動を練り上げる。街軍士官も討伐を成功させられるのならば、一時的に指揮権を預けてガウィーク隊の作戦案を受け入れた。

そうして再び結界の前に立った角熊^{コウ}は、杖の力を借りながら戦斧に結界破りの魔力を付与していく。

「おい、見ろよっ さっきの奴だ」

「やっぱり角熊じゃないか？ アレ」

「確かに見た目は角熊だが……鎧を装備して戦斧と杖を持った角熊とか、わけが分からんぞ」

「やはり召喚獣だな、恐らくさっきの閃光は召喚する際の光だろう」

魔導技士の使う召喚獣は強力だが稼働時間に難がある。先程引き返して行ったのも、稼働限界が来て偵察結果の報告に戻ったのかもしれない等と分析する盗賊の魔術士。再びやって来たのは再召喚して偵察の続きを行なっているのだろうと博識を披露する。

結界に護られた一帯で油断しきっている盗賊達が『珍しい召喚獣』を話題に駄弁っていると、件の角熊が結界の向こうで戦斧を振り上げた。

「ヴォルアアア」『セーのっ』

コウは結界破りの魔力を纏わせた戦斧を振りかぶると、一気に薙ぎ払って結界の効果を斬り裂いた。水面に映った景色を薙ぎ払ったかの如く、静まり返った神殿跡前の景色がぐにやりと歪んで本当の姿を曝け出す。

入り口付近から点々と続く篝火に、ズラリと並んだバリケード。

その周囲に三十人は下らないだろう数の盗賊達が待ち伏せている。

「なっ！ 結界が破られた！」

「やべえっ 頭に報告しろ！」

「くそっ あの召喚獣を狙え！ 敵の本隊が来る前に叩くんだ！」

盗賊達は結界が破られた事に混乱しつつも、魔術士の指揮で一斉に攻撃を始めた。流石に至近距離からの弓や魔術による攻撃には角熊の丈夫な身体でも耐え切れないので、重盾を装備して攻撃を防ぐ。コウはじりじりと後退しながら先ほど覚えた灯りの魔術を行使する。日用品的には小さく絞ったモノをランプの中に入れたりして使うのだが、光の効果を自重しない使い方もあるのだ。

『そーれ』

眩しい程の光を放つ光源を空に向かって放り投げると、光源は照明弾となって周囲を照らしながらゆっくり降り降下を始めた。坂下からも盗賊達の姿が露わになり、ガウイーク隊は敵の中でも特に厄介な者から仕留めに掛かる。

「カレン！」

「はい」

ガウイーク隊長の指示で弓を構えたカレンは盗賊の魔術士に狙いを定めると、矢に魔力を纏わせながら放った。例の射術技による効果で容易くバリケードを貫通した矢が、狙った魔術士の身体を射抜く。パツと木片が飛び散り、盗賊の魔術士が身体をくの字に曲げて吹っ飛んだ。

指揮官を失った盗賊達は動きがバラバラになり、正面で盾を構えている武装した角熊よりも坂下から迫る街軍や傭兵団の影に脅威を覚えて標的を切り替えたり、別方向から矢を射掛けながら迫り来る冒険者グループに気を取られたりと攻撃が乱れ始める。

『それ、もう一個』

最初の光源が地面に落ちる前に二つ目の照明弾を打ち上げるコウ。明かりが途切れず、神殿の屋根付近に潜んでいた盗賊の射手も下からの狙い撃ちを警戒して建物の中に退避している。

さらに、冒険者グループとは別の方向から忍び寄ったフリーの傭兵達が、バリケードの向こう側へ斬り込んだ。出発前に揉めた例の三人組の傭兵も果敢に突っ込んで行つては、息の合った連係攻撃で盗賊達を蹴散らしている。

それらの動きに合わせて一気に坂を駆け上がり始めた街軍と傭兵団に、盗賊達は我先にと逃げ出した。

「盗賊共が神殿跡に逃げ込むぞ！」

「入り口の罠に注意しろ！ 無闇に突っ込むな！」

逃げ遅れた盗賊が投降したり、その意思を示す間もなく討伐されたりして血に染まる神殿跡前。街軍の工兵がバリケードを解体して場所を開けると、集まった討伐隊から突入する部隊の編成が行なわれる。

「コウ、良くやったな」

「クマちゃん、かっこよかったよ」

「おめー中々やるじゃねーの」

「ヴォルルー」『てへへー』

作戦の指揮を執っていた為、傭兵団や街軍より少し遅れて坂を上ってきたガウィーク隊。その皆から口々に褒め称えられ、仲間認められる喜びを実感したコウは照れた。レフ参謀に杖を返し、また何か術を教えて貰おうかなーなどと目論んでみる。

束の間の休息　と表現するには少々血生臭い戦いの現場にて、盗賊達の死体を踏み越えながら談笑する討伐隊の各グループ。これから神殿内部に突入して逃げ込んだ盗賊の残りを制圧、盗賊団の親玉を捕らえるか仕留めるかすれば任務完了だ。

ガウィーク隊も突入する予定なのでそのまま神殿の入り口付近に集まっている各傭兵団員や街軍兵士の部隊に合流しようとするが、冒険者達も交えて何やらざわざわと騒いでいる。

「どうした？　何か問題でも？」

「ああ、あんた達もちよつと見てくれ」

ガウィーク隊長に声を掛けられた街軍兵士がそう言っつて神殿の入り口を指し示す。トンネル状の狭い入り口は大人が三人も並ぶとギョウギョウ詰めになる位の幅しかない通路が、五メートル程奥へ伸びた造りになっている。

元々あつたらしい木の扉は既に朽ち果て、通路の真ん中辺りに鉄の格子で出来た柵が取り付けられているのだが、この柵に問題があった。

「……人質か」

「恐らく、というか間違いなく」

「協会側は、奴等がこうする事を分かかってあんな契約内容にしたって事か？」

「各地の盗賊が寄り集まって出来た盗賊団だからな、何処かに前例があつたのかもしれない」

突入部隊の隊長達が集まり、入り口のトンネルを塞ぐ柵に縛り付けられた人質の姿に眉を顰める。あまり正面に立つと柵の向こうから矢などが飛んでくるので、ちらつと覗き見て直ぐに顔を引っ込めた。確認した限り人質の数は四人。

衣服を剥ぎ取られた若い女性がまるで木板のように鎖で張りつけられており、その中には年端のいかない娘の姿もあった。彼女達の身体を盾に柵の向こうでは盗賊達が弓や槍を構えているので、迂闊に近づけない。救出は難しく、こちらからの攻撃も躊躇われる。

流石に街軍士官も人質の事は考えなくて良いと分かつてはいるものの、気にせず行けとは言えないでいた。しかし

「だが……このまま籠城されても結果は同じか」

柵に縛り付けられたまま数日掛けて苦しみながら死ぬか、討伐に巻き込まれてあっけなく死ぬか。どのみち助からないのなら、なるべく早く楽にしてやる方が、彼女達の為にもなるのではないか。街軍士官の自分に言い聞かせているような言葉に、今回は反論の声も上がらない。

と、その時、ヒュンヒュンという矢の翔ける音がして皆の注目がそちらを向く。入り口の前に立つた角熊^{クマ}目掛けて射られた矢が、当

たったり外れたりして足元に落ちたり、後ろの平原に消えていったり、腕や肩に刺さったりしている。

暗闇でも遠くまで見通せるコウは、柵に縛り付けられた彼女達の姿をしつかり捉えていた。所々赤黒く、紫色に変色しているのは痣だと分かる。切り傷や擦り傷も多く、頬や唇が腫れ上がった女性。潰れた鼻から出血した跡が首筋や胸元に張り付いて固まり、ぐったりしている女性。

アリスやニーナ達と同じ年頃にみえる女の子は、女性のシンボルともいえる膨らみかけの先に鈴の付いた輪っかを通していた。鎖の付いた首輪を付けられ、時折柵の後ろから引っ張られて呻き声を上げている。

盗賊達は入り口の前に佇む角熊クマを挑発するように、彼女達に付けられた首輪の鎖を引いては掛かって来いと野次を飛ばす。無数の矢を浴びながら、コウは胸の内に何かモヤモヤとしたモノが浮かび上がってくるのを感じた。

意識の奥に引っ込んでいた角熊の意思が、コウのそれに共鳴するように活発になる。

『あれは、きつと、とても悪いコトだ』

それは、”怒り”や”嫌悪”の感情だった。

「クマちゃん？」

コウの気配が変わった事を敏感に感じ取ったカレンが声を掛ける。

「グルオオオオオオオオオオ！」

「く、クマちゃん！ だめ！」

カレンの制止も届かず、真っ直ぐトンネルに突っ込んで行ったコウは、人質が縛り付けられている柵の両端をガシヤリと掴む。怖ろしい怪物が牙を剥きながら迫ってきた事で、人質の彼女達は早々に意識を手放した。

角熊^{コウ}が突っ込んで行った事に内心ほつとするような複雑な思いでそれを見詰める討伐隊の面々。誰も進んで最初に人質を手に掛けようとは思わない。なので、あの角熊が人質ごと柵を取り除いてくれるなら、色んな意味で助かると。

手出しできまいと挑発していた盗賊達は、召喚獣を喚び来てたなら人質効果も期待できないと槍や剣での迎撃態勢をとった。

「くそつ 化け物め！」

「突け突け！ 柵が壊される前に刺し殺せ！」

「コレだけ近けりゃ刃だつて通るだろ！」

至近距離からの直接攻撃には流石に角熊の身体も耐え切れない。次々と柵の向こうから鎧の隙間目掛けて突き込まれる槍の穂先を受けながら、コウは渾身の力で柵を引っ張る。

コウの闘争心に刺激された角熊本体の意思が浮上し、身体のコントロールに協力してくれた事で角熊が本来持つ力が開放される。メキメキと、鉄柵の枠が埋め込まれたトンネルの壁に亀裂が入り、引

き千切られるように柵が傾き始めた。

「グルオオオオオオオオオ！」

「うわ、こりゃ駄目だっ」

「柵が壊れるぞ！」

「逃げろっ！」

柵が破壊されたなら直ぐに討伐隊が雪崩れ込んで来る筈だと、盗賊達は更に神殿の奥へと退いて行く。柵を通して身体に突き刺さっている槍や剣を邪魔だとばかりに喚び寄せて放り出したコウは、最後の一踏ん張りで柵を引き千切った。その柵ごと人質を連れ帰るコウ。

「よし、突入だ！ 盗賊共を制圧せよ！」

入り口が開けた事で、よくやったと突入を開始する街軍士官と突入部隊。コウはふらふらと入り口脇まで運んだ柵をそつと下ろす。

「ヴォ…………ル…………ヴァ…………」 『はやく、この人達に治癒を』

すぐさまトリスンが彼女達の治癒にあたると、傭兵団からも神聖術士が手伝いを申し出た。ダイドとマンデルが柵に縛り付けている鎖を外しに掛かり、冒険者のメンバーが身体を覆うシーツを用意してくれる。

彼女達の無事を確認しつつ、血を流し過ぎて力の抜けた角熊クマはその場でゆっくりと倒れ臥した。

「クマちゃん！」

角熊の傷は深く、この場にいる治療術士の中では最も高い力を持つトリスンの治療術でもどうにも無らなかつた。傭兵団の神聖術士はトリスンよりも高い治療効果を持っていたが、神聖術士の術はその性質上、魔物を癒す事が出来ない。

ガウイク隊に使役されていた魔物の角熊。だが、その魔物らしからぬ行動に皆が親しみを感じ始めていた。そんな角熊コウの死という現実には、討伐隊の仲間としてここまでやって来た傭兵団や冒険者グループ、フリーの傭兵達も、それなりに感傷を覚えるようであった。

突入した街軍部隊から応援要請があり、甲いの意味も兼ねながらガウイク隊も制圧に加わる。カレンはコウの傍に付いていて構わないと、突入メンバーから外された。

倒れ臥した角熊の傍で優しく毛を撫でているカレン。そこへ、一羽の鳥が舞い降りた。態々クラカルから後を追ひ、ずっと付いて来てくれていた事に礼を言うコウ。やがて角熊が息を引き取ると、コウはその伝書鳥に憑依した。

角熊は魂が離れる際、コウの『無理させてごめんね』という意思に、”面白かつた”というような意思を返して魂の還る場所へと旅立った。

盗賊団のアジトは、それから間もなく制圧された。

18話：王都への旅路

一夜明けた神殿跡前。

朝靄の中、撤収準備を進める討伐隊と捕らえた盗賊達を護送する応援の街軍兵士が平原の坂下で馬車を誘導しながら忙しく動き回っている。そんな喧騒から少し離れた坂の上、神殿跡の傍ではガウイク隊による角熊の隊葬が行われていた。

今回の討伐任務で最も活躍したのは角熊コウであったと言える。そして討伐隊から出た唯一の戦死者でもあった。

コウ自身は不滅の存在である事をガウイク隊の誰もが理解しており、本人も今は伝書鳥に憑依してカレンの肩に乗っている。従って、隊の仲間から死者が出た時のみ行なわれるこの隊葬は、角熊の為の葬儀であった。

そんな坂上の光景に好奇の視線を向けていた街軍応援部隊の若い兵士が、休憩がてらボヤキ半分に軽口を叩き合う。

「しっかし、たかが使役獣に隊葬なんてやるもんかねえ普通」

「やっぱ”戦斧と大蛇”なんてメダルを持つクラスにもなると、常人とは感覚が違うんじゃないか？」

「たく……こっちは朝駆けで撤収準備させられてるっつーのに、エリート集団は楽できていいよな」

街軍兵士達の口さがない噂話を、偶々通り掛かって耳にした討伐隊の一員が咎めた。

「おいつ お前ら何処の所属だ」

「現場で血い流してねえ奴が知った風な口きいてんじゃねえぞコラ」

まだ返り血も乾き切らない革鎧姿の三人組、強面な傭兵に凄まれた街軍の若い兵士は、恐々としながら作業に戻る。それを舌打ちで見送り、三人組は坂上のガウイク隊を一度見やって撤収の馬車へと足を向けるのだった。

街に帰還した討伐隊は人々に祝福の拍手で迎えられた。絶望視されていた人質も半数以上が無事に救出されたという事で、今回の討伐に参加した傭兵団や冒険者グループ、フリーの傭兵達は軒並み冒険者協会からの評価を伸ばす事となった。

ガウイク隊の角熊が戦死した事はそれなりに残念がられる雰囲気も感じられたが、人の死に比べると使役獣に対する人々の反応は淡泊だ。

報酬を受け取り、次の仕事に向けて色々と準備を整えるガウイク隊。留守番組だったメンバーが武装馬車に荷物を積み込みながら普段より口数の少ない隊の雰囲気気を気に掛ける。

「なんか、馬車の後ろが物足りないな……」
「カレンさんが元気ないんで、よけいに暗い感じですよね」

隊の下位メンバーや雑用係達がそんな話をしながら作業を進めている頃、ガウィーク達上位メンバーは宿の部屋で休憩をとっていたり自己鍛錬に励んでいたりと、酒場で飲みながら情報収集を行っていたりしていた。

ガウィークとマンデルが飲んでいる所へ、討伐任務を共にした街軍士官がやって来る。

「やあ、今回は諸君らのお陰で良い結果を得られた、改めて礼を言わせて貰おう」

「どうも」

盗賊団の主導者は神殿跡の奥にある枯れた井戸に抜け道の脱出口を用意していたが、突入が早かったので捕らえる事が出来た。入り口の柵に人質を縛り付けての防戦は主導者達が逃げる為の時間稼ぎだったのだ。

柵前に集められていた盗賊達はその役割を教えられておらず、捨て駒として迎撃に使われていたらしい。

街軍士官が功を焦っていたのは、今回の討伐で手柄を立てれば王都の正規軍に編入してもらえる話があったからだという。今回の盗賊団討伐で功績を認められ、王都に向かう事になった元街軍士官は上機嫌でそんな事を語った。

「王都か……俺達もそろそろ顔を出しに行こうかと思っていた所だ」
「ほう！ だったら丁度いい、王都まで護衛をしてくれないか？」
「一緒に行こうじゃないか」

元街軍士官から王都までの護衛を依頼されたガウイークは『まあ、それもいいか』と受ける事にした。対象が軍関係者なら一般人の護衛に比べて少しは楽が出来るだろう。

王都にはガウイーク隊のお得意さんであり、色々魔術道具などを都合してもらっている知り合いの魔導技師が居る。奇妙な発明品ばかり作ってはよく騒ぎを起こすせいで『変態博士』などと評されているが、腕は確かだ。ガウイークは彼にコウの事を紹介してみようと考えていた。

出発準備を整えて街を出るガウイーク隊の武装馬車と、その後が続く元街軍士官も乗せた一般の馬車が三台。四台の車列は一路クラカルの街を目指し、そこで長旅に備えて水や食糧を多めに積んでから王都に向かう街道に乗る予定だ。途中、幾つかの街にも立ち寄る。

「プレイヤーちゃん」

「ぴょん」

伝書鳥の柔らかい羽毛に頬をすりすりしているカレン。まだ若干元気の足りない様子だが、コウの献身的？ な慰めにより幾らかは気持ちさが回復したようだ。

具体的には肩に乗って頬や首回りを羽でこちょこちょしたり、寝転んでいるカレンの身体の上を歩き回ったりというアニマルセラピ

「な触れ合いだったりする。」

街を出て半日ほど街道を進み、川を渡った所で一行は休憩に入った。クラカル方面から来た馬車隊も川原で休憩しており、ここは中継地として旅人達の丁度よい憩いの場となっているようだ。

ガウィーク隊の護衛に便乗して王都に向かう旅人達が最近の王都を話題に噂話などを交わしている。この頃は城の出資で彼方此方の街から優秀な人材を集めているらしいという。

「戦争でも近いのか？」

「そんな話はきかないな」

「王位の継承問題絡みとかじゃないか？」

「ああ、三人いる王子の二人が結構争ってるらしいって話な」

現在グランダールを治めている王はまだ若く、割としっかりしているようだから当分は大丈夫だろう等と評しあう旅人達。正規軍の駐留しているような大きな街では王子達の継承者争い等という滅多な噂を口にする事は憚れるが、ここは役人の目も無い街道脇の川原だ。

そんな彼等の噂話を耳にしたガウィークは、レフやマンデル達と食事をとりながら自分達の知る王都の情報に照らし合わせて噂の信憑性を測りつつ、そこに隠された真相を探り出す。

「人材集めをしているというのは、恐らく第一王子の事でしょうな」

「あの王子様が王位継承権で揉めるとか想像つかん」

「……揉めたいのは寧ろ第二王子」

第一王子は冒険好きでよく城を抜け出しては自ら集めたパーティーを率いて何処そのダンジョンを探索したりモンスターを討伐したり、時には身分を隠して冒険者協会の仕事を引き受けたりというような事をやっている行動派の王子だ。

既に”双剣と猛獣”というガウイク隊の一つ下、ランクで言えば七位にあたる四番目のメダルを有しており、腕の方も中々である。

「またぞろ何処かのダンジョンにでも挑む気なんだろうかね」

「結構入れ替わりが激しいみたいですからね、あの王子の隊は」

優秀な人材を金にモノをいわせて集めては難易度の高いダンジョンに挑み、名声を上げている第一王子の率いる冒険者グループ。だが雇われ者気分で参加している者が殆どで、一儲け済ませれば抜けてしまうメンバーが多い。

リーダーが公務も担った第一王子であるという都合上、活動が不定期になってしまう事も固定メンバーが付き難い原因の一つであるようだ。

「……隊員の引き抜きに注意が必要」

「うちは目を付けられてますからねえ」

ガウイク隊の上位メンバーを引き抜かれる心配はしていないが、これから伸びそうな見習いなどの下位メンバーはグラントールの第一王子から直接『俺と一緒に冒険しようぜ!』等と誘われれば、ふらふらと付いて行ってしまってもおかしくない。

「ははは、違うない」

休憩を終えて川原を後にしたガウィーク隊の護衛する馬車隊は街道を順調にひた走り、一行がクラカルの街に到着したのは日も暮れて夜の帳が下りる頃だった。ここからは定期的に王都と街を往復している正規軍の一部隊と行動を共にする予定である。

護衛対象の元街軍士官は正規軍の馬車へと移る事になるのだが、他の街からも元街軍士官と同じように何らかの功績を認められて正規軍への編入手続きで王都に向かう者達は何人かいるようだ。

「出発は明後日だ。王都までの道程に備えて皆、明日からしっかりと準備しておくように」

「以上、解散！」

ガウィーク隊長が短く予定を告げ、マンデル副長の号令でガウィーク隊のメンバーは姿勢を崩して緊張を解いた。宿の部屋へ向かう者や買物に出る者、馬車の掃除を始める者など、皆それぞれ思いの自由行動に入る。

クラカルの街は冒険者向けに夜でも開いている店が結構多い。買物に出るメンバーの中には頭に鳥を乗つけたカレンの姿もあった。

『今日はもう夜遅いし、明日にでもアリスの所へ寄って行こうかな』

カレンの頭に乗って買物に付き合っている伝書鳥コウは、明日の予定などを考えながらアリスに渡す手紙を異次元倉庫で書き綴る。ガウィーク隊と共に行動して目にしたモノや経験した事を纏めると中々ボリュームのある内容になった。

『日記をつけるのもいいかな?』

旅の出来事やこれから巡る各地の様子を記して行けば、自分史としても中々面白い本になりそうだと考えたコウは、紙とインクを大量に仕入れて置く事を予定に組み込んだ。

翌日。買い物があったというコウにレフが付き添い、貴族用の品を扱う店で上質の紙とインク等を購入。ガウイク隊の面々はコウがお金を持っていた事に少々驚いた顔を見せたが、ダンジョンでアイテムを拾い集めていたのならお金の類も拾っていて当然かと納得した。

コウが所持しているお金は主に”ギルド通貨”と呼ばれるコインで、冒険者協会の影響が強いグランドールで多く流通している。ギルド通貨より少し価値の劣る”帝国通貨”も幾つか混じっていて、こちらは隣国ナツハトームで主に使われているモノのようだ。

ちなみに、コウの買い物には最初カレンが付き添うと名乗りを上げていたのだが、値段の交渉や必要な商品を選ぶ事に関して非常に不安が残るという事で皆が反対し、代わりにレフ参謀が付き添う事となった。拗ねたカレンは現在、宿の部屋に籠もって絶賛不貞寝中である。

『あとでカレンのこと慰めてあげないとなあー。』 と、あれは…

…アリスかな?』

昼下がり、街の宿場通りからディレトス家の屋敷へと飛んだコウは庭園でお茶会をしているアリスと友人のお嬢様方を見つけた。フアスターもいるようだ。ちゃんと以前のような友達付き合いが出来ているアリスの姿に気持ちを綻ばせつつ、お茶会のテーブル付近に舞い降りる。

「あら？ 鳥さんが」

「伝書鳥のようですわ」

「でも、手紙を持ってませんわね？」

ひよいとアリスの肩に乗る伝書鳥^{コウ}。椅子上でお嬢様方に撫でられていたフアスターが『久し振り！』とでも言うように尻尾を振っている。すりつとアリスの頬に羽毛な頭を擦り付け、羽でこちよつと擦ってアピールすると、その行動にハツとなるアリス。

普通の伝書鳥はそんな行動を見せない。アリスは小さく確かめるようにその名を口にする。

「……コウ？」

「ぴゅい」『そうだよー』

コウが広げた羽の裏にメモ紙を出して”ひさしぶり”と伝えると、アリスの表情が喜びに輝いた。

「お友達なの」

「まあ！ 伝書鳥のお友達なんて素敵」

「アリスは動物に好かれやすいのですわね」

お菓子を啄んだり肩から肩へ飛び移ったりしてコウはお嬢様方を
楽しませる。アリスから彼女達が何を想っているかなど訪われる事
もなく、友人達とアリスの仲は良好のようだ。

やがてお茶会も終わり、友人達を見送ったアリスは部屋に戻って
窓を開けると伝書鳥なコウを迎え入れた。フアスターはベッドで布
玉と格闘して遊んでいる。

「てつきりバラッセの街へ帰るつもりだと思っていたのに、あなた
からの手紙が届けられた時は何事かと思っただわ」

岩山で角熊に憑依したコウが伝書鳥に託した手紙には『暫らく世
界を放浪するかもしれない』というような内容が書かれてあった。
コウは屋敷を出た後で何があつたのかを掻い摘んで話す　という
か、昨日の内に書き綴っておいた一連の軌跡を並べた。

それを興味深そうに読むアリスは、ふと思いついて机の引き出し
から手紙を取り出す。

「これ、エルメールという方の手紙よ」

「びゅりりり？」『エルメールさんの？』

コウの事を話題に何度か手紙のやり取りをしているという。上流
貴族の令嬢と訓練学校の講師という通常は接点を持つ事の無い二人
最初の二枚ほどは社交辞令的なやりとりがなされているが、三枚目
辺りからは年頃の少女と年上のお姉さんが話すような内容になっ
ていた。

エルメールの近況にも触れており、向こうもリシエロやガシエ達

と上手くやっている事が分かって、コウは何となく安心した。

「ねえコウ、あなたも彼女に手紙を書いてみてはどう？」

「ぴゅーい」『うん、ボクも考えてた』

コウ直筆の手紙はアリスの手紙と一緒に冒険者協会支部から送って貰える事になった。

” そろそろ隊の皆の所へ行くよ ”

「そう……、また街に寄った時は会いに来てね？」

” もちろん。ただ、どんな姿してるか分からないけど ”

無害な動物の姿をしている時であればこうやって簡単に会う事は出来るが、『どう見ても危険生物』な姿で屋敷に向かえば大騒ぎになってしまうとコウ。

「うふふっ そうね、庭師が部下に召集を掛けてしまっわね」

アリスは笑って同意した。

エルメール達への手紙を託し、ディレトス家の屋敷を後にしたコウはガウィーク隊の宿泊する宿へと戻ってきた。高窓から宿内に入ると、宿の使用人が突然室内に飛び込んで来た鳥をびっくりした様

子で見上げている。

食堂広間に集まっていたガウィーク隊のメンバーが『あれはうちの隊の伝書鳥だから』と告げると、納得して仕事に戻っていった。

「ピイちゃん、おかえり」

「ぴ」

一応声を掛けてくれるカレンだが、まだ拗ねているらしい。ぴよんぴよんとテーブルの上を移動してカレンの膝に乗ったコウは、アリスからおみやげに貰ったお菓子を出した。上流貴族のお嬢様方を虜にしてやまない高級サブレ。

上品な甘さと香り、なめらかな口溶け。蕩けるカレン。　ダイドの目付きが何だか危ない。

「ピイーちゃん、すきっ」

「ぴゅい」

「……………」

「おい？　ダイド、意識あるか？」

カレンの蕩けた表情にオーバーヒートしたらしいダイドを突付いているリーパ。気が利くデイスが水を持ってくる。少し賑やかになった広間を離れ、コウはレフ参謀の部屋へと向かった。今朝、買い物の際に魔術の基本を教えて貰えるよう話しておいたのだ。

「ぴゅりりー」『きたよー』

「……………入って」

口数も少なくレフ入室を促がされ、部屋に通されたコウは夜晩くまで魔術の勉強をして過ごすのだった。

19話：魔導文明の都

冒険者協会バラッセ支部の近く、馴染みの大衆食堂に顔を揃えたエルメール、リシエロ、ガシエの三人は、先日クラカルの街から届いた手紙を話題に話し合っていた。

「コウからの手紙だった？」

「ああ、例の貴族家で世話になっている間に随分と文字の読み書きを学んだようだ」

「へえ、凄いじゃないか」

しっかりと書かれたコウの手紙には、筆跡にまだ拙かった頃の面影が残っていた。コウがクラカルの街で統治者の力になった事や、その後どこかへ旅に出たらしい事など、アリス嬢との手紙のやり取りでコウの活動と足取りは概ねエルメール達にも伝わっている。

現在は王都に向かっていているそうだ。コウの元気そうな近況が聞けて安心したと語るエルメール。

「その割には、随分と複雑な顔をしてるな？」

「うむ、それが」

手紙にはガウィーク隊と行動を共にしているらしい事が書かれてあり、エルメールとしては胸中複雑なのだと言う。

「ガウイク隊って、例のアミュレット狙った集団？」

「ああ、そうだ」

「ふーむ、なんともコウらしいっていやあコウらしい気もするんだが」

『確かにな』と、エルメールは気持ちに引つ掛かりはあるものの、ガシエのいう『コウらしさ』は否定できない。ガウイク隊の一員となった経緯も手紙に書かれていたが、動機や行動がバラツセのダンジョンにいた頃と変わらない。そんなコウの在り方に納得してしまふ。

「手紙の日付からすると、そろそろ王都にも着いている頃か」

「王都かあ、あそこもでかい街だからコウには色々珍しいかもな」

ガウイク隊とグランダール正規軍の馬車隊がクラカルの街を出発して六日目、順調に旅を続けた一行は無事王都トルトリユスに到着した。

四方を険しい岩山で囲まれた平地に多くの建築物がひしめき合い、岩山を繋ぐように築かれた重厚な外壁により難攻不落の要塞都市でもあるトルトリユスは、非常に高度な魔導技術による文明を栄えさせている。

正規軍部隊の馬車隊は三重の街門で行なわれるチェックも短く一足先に正規軍本部施設へと向かい、ガウイク隊や一般の馬車隊は積荷やら乗員やら王都に入る為の審査で暫らく足止めされている。

一応それなりに名の通っているガウィーク隊は一般の旅人や冒険者グループに比べると審査内容も甘めに優遇されてはいるが、やはり多少の時間は掛かるようだ。隊の伝書鳥として審査をパスしたコウは一飛び王都の上空へ舞い上がると、空からトルトリユスの街並みを見渡した。

『うわー、凄いなあ……大きい建物が沢山並んでるよ。あのてっかいのはお城かな?』

何処から何処までが城なのか、或いは全部ひっくるめて王宮なのか、如何にも城っぽい形をした建物の中頃からは大きな屋敷が連なり、それらが全部繋がっている。城を中心とした建物群は城壁と堀で囲まれており、城下街との境界がはっきりしていた。

城下街の建物もバラツセやクラカルに比べると大きなモノが目立つ。

『なんか飛んでるなあ あれは、見覚えがあるような……? この見覚え感って異世界の記憶みたいだけど』

王都の空にはコウモリのような羽を広げてその背に人を乗せた爬虫類、いわゆる飛竜が何匹か飛行しており、他にも地上とロープで繋がった乗り物らしきモノが浮かんでいる。コウの記憶から”飛行船”という名前が浮かぶ。

『凄い進んでる街って感じがする』

暫らく上空を旋回していたコウは審査を終えたガウィーク隊の馬車が王都入りするのを見計らって降下、御者台脇のランタンにとまった。

ガウィーク隊は一旦団体向けの馬車置き場に隊の馬車を止めると、

長期滞在する為の宿を借りに行く参謀組が宿場通りへと繰り出し、今回の任務報酬を受け取りに行く副長組は冒険者協会中央本部のある通りへと向かう。残りの隊員とガウィーク隊長は留守番組で隊の馬車を護る。

「とりあえず宿が決まったらコウ、明日辺りお前に　　というかお前を紹介したい人物がいるんだが、構わないか？」

”　いいよー、前に言ってた変態博士な人？”

「ああ、その変態博士な人だ。つっても本人に会ってそれを言うなよ??。」

多くの研究員魔術師が日々新しい魔術や技術の研究に明け暮れている魔術研究棟において、各施設に所属する魔術士達の間でも”変態博士”の呼び名で定着している人物だが、本人はそう評される事に納得していないのでヘソを曲げられると厄介だと笑う。

ちなみに、魔術師と魔術士の違いは国家や組織に従事する公的立場から専門家として弟子や生徒などの教え子を持つか否かで呼び別けられる。剣士のエルメールは訓練学校で冒険者の講師をしているが、彼女が剣術専門の講師になれば剣師と呼ばれるといった具合だ。

「サータちゃんもゲンキにしてるかなー」

留守番組で馬車の見張り台から足をぶらぶらさせているカレンが”変態博士”の話題を聞いて、博士の助手をやっている友人を思い浮かべた。

冒険者協会中央本部で報酬を受け取ったマンデル副長は大掲示板に張り出されているフリーの依頼票をざっと見流し、条件別依頼表や告知書などの張り紙をチェックして最近の情勢や何か良い仕事でもないかと情報を集める。

「副長、副長、こんなのが張られてるぜ」

「ん？ ああ、今年ももうそんな時期だったか」

普段は冒険者協会に来ても退屈そうに副長の後をぶらぶらついて歩くだけのリーパが、珍しく指し示した張り紙を見て納得するマンデル副長。王室より認可されている事を示す印の入ったその張り紙には”勇者たちよ集え！ 英雄は君だ！”の煽り文句。

「武闘会だけ武闘会！ 賞金もギルド金貨で五十枚とか、すげえ！」
「ふむ……例年の三倍はあるな」

参加しよーぜと興奮するリーパを捨て置き、マンデルは旅人達の間で最近の噂によく上がっていた第一王子の人材集めが絡んでいると睨む。王都にある闘技場では定期的に大なり小なりの武闘会が開かれており、毎年今頃の時期になると王室主催の大きな武闘会が開催される。

「あまり大きな大会はリスクも高くなるからな、参加の許可は隊長と相談してからだ」

「おう！ ちゃんと説得してくれよなっ　ダイド、お前も出たいだろ？」

「興味はある」

マンデル副長はバトルジャンキー一歩手前な血の多い部下と

暑苦しい部下のコンビに肩を竦めながら冒険者協会を後にするのだ。
った。

宿場通りに並ぶ宿の中でも主に団体客層の利用を中心に営業している大型宿。ガウイク隊の借りた宿泊区画にて、大広間に集まった隊員達はこれからの予定などを話し合う。ふかふかの絨毯が敷き詰められた床で、皆それぞれ楽な姿勢に崩しつつ車座になって寛いでいた。

広間には大人数用のソファも設置されているのだが、旅での野宿生活が長いとこつちの方が楽になるらしい。

「隊長とカレンさんは明日アンダギー博士の所に行くんですよね？」
「ああ、コウを紹介しようと思ってな」

酒とツマミを口にしながら答えたガウイクが視線を向けた先には、うつ伏せに寝転んだカレンの背中を伝書鳥コウが鳥足で踏み踏みマツサージしている。

「隊長、リーパが武闘会に出たいと言ってますが……どうします？」
「優勝賞金がギルド金貨五十枚だけ、五十枚！ 全員で出ようぜ隊長！」

「無茶言うな。しかし五十枚か……」
「……他所の戦闘集団も王都に集まって来ている。恐らく、武闘会を目的にしている所も多い」

確かに賞金は魅力だが参加する顔触れ次第では無駄に怪我だけして終わる可能性もあり、隊員を出場させるなら参加者に関する情報

収集から始める必要があった。

無名の戦士などは自身も相手も実力未知数という認識で出てても特に問題はないのだが、ガウイーク隊のようにある程度名の通った集団になると隊の主力は誰かとか、戦術はどうかなど、色々と周りから分析される対象にもなる。

ガウイーク隊の近距離における攻撃力はリーパとダイドが中心的役割を担っており、距離を置くならレフとカレンが、補佐はデイスやトリスン、防御力にはマンデルとヴィードが要となる布陣で活動している事は、既に他所の集団にも知られているのだ。

攻略法を研究して来る相手に実力勝負の無策で挑むのは無謀である。

「まあ、その辺りは様子を見ながら考えよう」

「え〜、俺の参加だけでも許可しといてくれよお」

「オレも出る」

「あー分かった分かった、とりあえず明日からの予定に武闘会の下調べを入れておく」

そんな調子で、依頼遂行時外のノンビリした穏やかな隊会議で王都の夜は更けていく。

トルトリュス行政政府の管轄下にある魔術研究棟区画。ここには魔

術に関する各種研究施設が建ち並び、日々多くの魔術師達が実験に研究にと勤しんでいる。朝陽を反射して緋色に輝く研究棟群から少し離れた広場のような場所にぼつんと建つ研究所らしき建物。

壁や屋根から歯車が生えており、煙突だかなんだか分からない管が無数に伸びる独創的な外観、周囲の研究施設と比べて異彩を放つその施設の入り口には『アンダギー魔導兵器開発所』という看板が掲げられている。

「ここは相変わらずだな、前より更に混沌としている」

「おもしろいお家だよー」

「ぴゅいぴゅい」『凄いい外観だね』

アンダギー博士の研究所にやって来たガウィークとカレン、その頭に乗っている伝書鳥コウは前衛芸術的オブジェの塊な研究所を見上げる。ガウィーク達が暫らくそうしていると、研究所の出入り口から木桶を持った白衣の若い女性が現れた。

「はあ、やつぱり水道設備は博士が作ったのじゃなく正規のモノを使わないと駄目ねえ……あら？」

「サータちゃん、オハヨー」

「カレンちゃん！ それにガウィークさんも」

「やあ、博士はいるかい？」

彼女は魔術研究棟に所属する見習い魔導技士で、自ら進んでアンダギー博士の助手をしている割と奇特な人物である。

魔導技術の発達により王都の生活水準は他の街々と比べてかなり発達しており、上水道や下水道も街の隅々まで整備されて一般民向けの水道設備や魔導調理器なども売りに出されている。

照明機器なども殆どが魔導化され、通常の生活において薪や油といった燃料が使われる事は少ない。

研究所の中へと案内されると、概ね予想通りの光景が広がっていた。

足の踏み場も無いというほど散らかっている訳ではないのだが、ズラリと並んだ研究机の上に何やら多くの管が絡み合った細長いオブジェが置かれているかと思えば、うつすら明滅する水晶玉のようなモノが台の上に乗せられていたり。

その隣には毒々しい模様の植物が鉢植えで花を開いており、更に向こうの卓上では色んな形をした沢山の研究用フラスコの中で色とりどりの液体をぐつぐつと沸騰させている。

天井には騒がしく回転する無数の換気用らしきプロペラ。これが止まったら大変な事になりそうだ。統一感の無い研究部屋の力オスな光景を暫し呆然と眺めるコウ。

サータ助手が奥の部屋にいる博士に呼び掛ける。

「博士？ ガウイクさん達がいらっしやいましたよー」

「ああん？」

少々しわがれたような声で答えたお爺さんと呼んで差し障り無い年代に見える白衣の男性が背中を丸めながら奥の部屋から顔を出した。王都行政府魔術研究棟魔導兵器研究開発部所属魔導技師アンダギー博士である。

「おう！ 小僧か、久しいのう。元気にやっとなるか」

「お久しぶりです」

「ハカセもゲンキそうだねー」

「カレンも相変わらずええ乳しとるのう、またでかくなつたか？
クワツカカカカ」

カラカラと笑うアンダギー博士はその節くれだつた手をカレンの胸に伸ばしてサータ助手に叩き落とされた。前に来た時と変わらぬ光景に、まだまだ元氣そうだと肩を竦めて見せながら安心したような表情で笑うガウイークであった。

「ほう、集合意識とは別の知的存在とな？」

「ぴゅりり」『こんにちはー』

比較的マシな環境の応接間にて、中央のテーブルに乗る伝書鳥コウを挟んで向かい合うアンダギー博士とサータ助手に、ガウイークとカレン。ナツハトーム産の甘辛いお茶を啜りながらコウの存在について話に耳を傾ける博士は、幾つか質問を投げ掛けた。

「お主は、自分を何者じゃと思うね？」

”よく、わからないです”

「ふむ、生前は冒険者であつたかも知れぬという事じゃが……魔物に憑依する事には特に忌避を感じぬのじゃな？」

”そうですね、魔物って呼ばれてる彼等も内面は他の動物と大差無いようにも感じましたし”

「なるほどのう」

「何か、分かりましたか？」

「さっぱりじゃ」

「……さいですか」

予想していたとはいえ、重々しく頷きながらのその答えにガクツと肩を落とすガウイク。コウの存在については詳しく研究しなければ考察のしようが無いとする博士は、コウの正体よりもその能力に興味を示した。

あらゆる動物や魔物に憑依して操る事が出来る能力も然ることながら、物体を異次元へ喚び込んで保管する能力を研究解明する事が出来れば世紀の大発見、大発明にも繋がる。

「話を聞いた限り容量にも限界が無いようじゃし、物質を異次元へ移動させる方法……是非とも仕組みを知りたいのう」

「まあ、本人にもよく分かってないらしいですからね」

” うん、出来る事に気付いただけで、どうなってるのかはよく分からない”

「そうか。うむ、その辺りはまた折をみて調べるとして、サータや「はい博士」

「倉庫に封印してあるアレは使えると思うか？」

「え、アレですか？ そうですね……確かに、魔物にも憑依出来るのならアレにも可能かもしれません」

アンダギー博士の真剣な問いに暫し脳内で検討したサータは、頷いて答える。それに頷き返しながら何やら怪しい笑みを浮かべ始め

た博士に、また何を企んでいるのかとガウイークがツッコミを入れた。

「博士、言つときますがコウは一応うちの隊員ですからね？ 紹介はしましたが妙な実験とかに付き合わせるつもりはありませんよ？」
「妙とはなんじゃい！ ワシの研究実験は他の追隨を許さぬ独創的で崇高なモノなんじゃぞっ」

「自分で崇高とか言わないで下さいよ……恥ずかしいなあ」
「独創的というより、独走状態なんですけどね……割りと明後日の方向に」

昔馴染みと助手に突っ込まれてムキーンとエキサイトする博士。それを見て笑いながらお茶菓子を頬張っているカレン。これも昔から変わらない、この研究所での光景であった。

『仲がいいんだなあ』

20話：変態博士と魔導兵

「アンダギー博士は一応“魔導兵器研究開発部”に所属している身なのだが研究棟に向かう事は無く、普段は博士にだけ特別に用意されたこの研究所に籠もっている。博士の作る物は独創的といえは聞こえは良いが、いつも何処かズレていて暴走したり爆発したりと問題を起こし、発想や着眼点、博士自身の持つ技術は凄いのだが使えないモノが多い。」

だが、国王が博士の事を気に入っているので好きに研究する事が許されているのだそう。

「ハカセってオーサマとトモダチなんだよねー？」

「うむ、まあ今で言う上の王子と似た様な感じでの、前国王時代にはよく研究室に遊びに来ていたモノじゃ」

「この国の王もちよつと変わり者だとか言われてたからなあ」

「結界金庫の逸話は有名ですよね」

研究所の奥にある倉庫へ向かいながら、通路の両脇に並べられた甲冑を観察するコウ。各間接部分に強い魔力の光が集まっており、それぞれが一筋の魔力で繋がっている。甲冑の頭から頭へ飛び移りながら一体ずつ繋がった魔力の糸を追うコウに、博士が注意を促した。

「それは警備用魔導兵の試作品群でな、魔術の力に偏り易い召喚獣

の代わりに考案してみたのじゃ。あまり突付くでないぞ?」

最近博士が凝っているのは新しい使役型魔導兵器の開発だ。魔導技士の主戦力でもある召喚獣は本物の生き物ではなく魔力と触媒で形作られた擬似生命体で、召喚場所を選ばず持ち運びにも便利な呪術式触媒型が主流だが稼働時間が短く作り出す為のコストも掛かる。博士の試みは召喚獣の元となる術であるゴーレムの技術に、動物を服従させたり手懐けるなどして扱う使役獣の要素を取り入れて融合し、別系統に進化した技術を確立させる事であった。

召喚獣の柔軟性と使役獣の安定性を兼ね備えた魔導兵の開発。廊下に並ぶ試作魔導兵はそれら研究の成果と軌跡である。

「命令系統が不安定なので暴走しちゃうんですよ」

「ぴゅーい」『なるほどー』

「そんな危ないモン並べておこなよと指摘したいぞ」

「危なくない召喚獣などおらんわい。クワツカカカカ」

ちなみに、三度ほど暴走した魔導兵を取り押さえる為に正規軍騎士団が出動する騒ぎになったが、国王は一体の魔導兵でそれだけの力を示せたのは大儀であると喜んでみせたそうだ。

「それで、コウに何をさせるつもりなんです?」

「なあに、ちょっとしたプレゼントじゃよ」

交換条件付きの贈り物をプレゼントとは呼ばないのでは? とうガウィークの突っ込みは流された。やがて到着した奥の倉庫前にて、サータが鍵となるペンダントを扉に翳すと皮膜のように扉を覆っていた半透明の結界が消える。結界金庫と同じ仕組みが使われているらしい。

そうして開かれた扉の先には、物々しい雰囲気を醸し出す封印装置の魔導機器に埋もれるかの如く、棺桶のような枠の中で鎮座する甲冑っぽい姿があった。

「こいつは……これも、魔導兵ってやつですか」

「うむ、だがコヤツは他のと少々毛色が違っておつてな。 どう

じゃコウ、お主のいう”穴”は見えるか？」

” 見えます、この甲冑って生き物ですか？ ”

「一応、擬似的な生命体じゃな。他の魔導兵も召喚獣の仕組みをベースにした擬似生命体じゃが、コイツは肉体の構築から行なつておる」

召喚獣は形態の維持や命令の判別など一個体の頭脳を司る中枢部分に、擬似人格を付与できる呪術品を触媒として使い、大量の魔力で構築された身体を動かしている。

博士の作った試作魔導兵は、通常の召喚獣が魔力で構築している身体の部分に適当な甲冑を使い、甲冑を身体として動かす為の魔力を甲冑に仕込んだ魔導器で常に補給し続ける事で稼働時間の限界を無くそうとしたモノだ。

だが稼働時間を長くした結果、召喚獣方式に潜む様々な問題が浮き彫りになった。最初に暴走した魔導兵は魔力で構築された身体ではない甲冑の身体を己が身体であると正確に認識出来ず、どこかを動かそうとする度にその部位へ込める魔力の過剰供給が起きて制御不能に。

腕を挙げるだけの動作、足を踏み出すだけの動作という単純な動作一つ一つに必殺の威力が込められてしまい、甲冑が耐え切れず崩

壊した。

次に作られたのは甲冑の中に或る程度魔力で構築した身体を通す事により身体を正確に認識出来る改修型だったのだが、通常は長くても十分の一日程度しか維持できない擬似人格を一日、二日と維持するうちに、擬似人格がアイデンティティークライシスを起こしてしまうという問題が明らかになった。

自己崩壊で消失する場合が殆どだが偶に破壊衝動を覚えて暴れ回る事もあり、正規軍騎士団が出動したのはこの時である。

擬似人格を単純化したり、思考制限など特殊な調整を施す事も考案したが、何れもハイレベルな呪術士の力が必要不可欠な上に、そこまで繊細な調整が必要な仕様ではとても戦闘など荒事に耐えられない。ついでに通常の触媒より値が張ってしまうようになるので却下した。

そこで発想を変えた博士は大元の技術であるゴーレムの仕様に立ち返り、基本的には単純な命令しか聞けないがそれを補って余りあるハイスペックな身体を持った新型ゴーレムの研究開発に切り替えた。そうして作り上げたのが、この奥の倉庫に封印されている複合ゴーレムである。

「コイツには様々な魔物の血肉から生み出された素材が使われておつてな、魔導器に頼らずとも自力で魔力を集める事が出来るのじゃ」

謂わば生体魔導器として常に身体を維持し続ける事ができる生きた甲冑だという。

「理論上は半永久的に活動できる仕様になつとる」

「またそんな無茶なモノを……よく許可が出ましたね」

「実は無許可じゃ」
「……」

最早突っ込む気力も湧かないガウィークを余所に、博士はこの複合ゴーレムの問題点を説明した。それは問題というよりも欠陥では無いかと言えるような致命的な内容で、元々あまり複雑な命令には対応出来ない仕様であるゴーレムの技術を使っている為、自己修復や身体の維持など能動的な擬似生命活動を行なう事に命令を判別する受動認識枠を全て使ってしまう、外部からの命令を受けて活動する事が出来ない。

要するに、通常はゴーレムの持つ処理能力の六割程が身体の維持や制御に使われ、残り四割で命令を認識したり実行したりするのだが、この複合ゴーレムは特殊な身体の維持制御に処理能力の九割近くを使ってしまったので起動中は常時待機状態のまま他に何も出来ないのだ。

「は？ それじゃあただ生きてるだけの甲冑じゃないですか」
「うむ、まさにそのとおりだな、このままでは素晴らしい力を秘めているかもしれない高価な生き人形に過ぎんのじゃよ」

触媒の擬似人格を埋め込んで動かす事も考えたが、潜在能力が試作魔導兵の比ではないので流石に暴走させると厄介どころでは済まない。安定した制御法が確立されるまでは封印しておこうという事にしていただそうだ。

「……なるほど、コウに動かしてもらおう事で安全に性能実験が出来るという事ですか」

「如何にもじゃ！ で、どうじゃコウよ、実験に付き合ってくれらならこの複合体はお主にくれてやって構わんぞ？」

「ぴゅりっぴゅりり」『ちよつと試してみます』

ちんぷんかんぷんな難しい長話に立ったままユラリユラりと舟を漕いでいるカレンの頭からひよいと飛び立った伝書鳥コウは、封印装置に繋がれている複合ゴーレムの肩にとまって憑依を試みた。伝書鳥から抜け出し、複合体の中へと吸い込まれるように精神体を滑り込ませる。

「サータ、封印装置の結界を切れ」

「はい、博士」

複合体の身体を固定していた結界が消え、背筋を伸ばした姿勢で座っていた複合ゴーレムは肩の力が抜けたように弛緩して背中を丸めると、ずいと顔を上げながら徐に起き上がった。

「おおっ 動いた！」

「上手く憑依出来たようですね」

「おー」

『なんだか凄く馴染む感じがする……元々の意思が無いからかな？』

二メートル近い体躯に封印装置で埋まった倉庫内は狭すぎるらしく、中腰になつている複合体は、両腕を軽く持ち上げたりしながら指の動きなどを確認している。

「しかし何ともアツサリした覚醒じゃのう、もっとこうフシューっと口から煙を吐いたり魔力の衝撃波を起こしたりせんものか」

「博士の作ったものでしょうが……」

「いやいや、憑依による支配なぞ精神的な異物の混入みたいなモノじゃからな、副作用とかそういうのをイメージしておったのじゃが」「寄生魔獣じゃないんですから……」

コウが憑依しただけで本体に一々そんな劇的な変化が起きていては伝書鳥も堪ったものではないだろう。ともあれ、仕様上の問題から長らく封印されていたアンダギー博士の非公式作品である複合コーレムは、コウの憑依によって日の目を見る事となった。

「とりあえずじゃ、今日は軽く動作実験でもしておいてくれんかの？」

アンダギー魔導兵器開発所は魔術研究棟の研究施設群から少し離れた場所に設けられた広場の中に建っている。

この広場や研究所は博士の為にだけに作られた特例区でもあるのだが、これはアンダギー博士が国王から特別勲章にされているという意味合いが無くもないが、概ね博士の発明品による他の研究施設への被害を抑えるための処置であった。

歯車が回転して研究所の屋根に取り付けられた鐘が鳴り響き、アンダギー博士の魔導兵器実験が告げられると、広場に面する周囲の研究施設から一斉に防衛魔術が展開された。実験の度に施設の壁を破壊されては堪らんという教訓から得られたある種の災害対策である。

薄っすらと防御結界の掛かった研究施設の窓から広場の様子を窺っている研究員魔術士達は、アンダギー博士とサータ助手の隣に並ぶ冒険者風の男と、同じく冒険者風で肩に鳥を乗せたグラマラスな

女性を見て『誰だろう?』と軽く噂する。

「あれは、ゴーレムにもみえるが……魔導兵かな?」

「また新しいのを作ったのか? 擬似人格の制御問題は解決したんだろうか」

「いや、確か機動性重視のゴーレムを作るとか言ってたらしいぞ」

またぞろ走り出したら止まらない暴走ゴーレムが施設群に突っ込んで来るのでは無いかと評し合う研究員魔術士達。彼等と同じ危惧を懐いたのか、新しい魔導兵の実験らしいという事で自主的に出勤してきた正規軍騎士団が広場の入り口で待機を始めた。

「クワツカカカカ、良い具合に注目されておるのう!」

「警戒されてるようにはしか見えないんだが」

「うふふ、大体いつもこんな感じですよ」

「ハカセって、にんきものなんだね」

倉庫から封印装置の枠ごと台車で外まで運び出された複合体は、装置と繋がっていた管が全て取り外されたのを確認すると、ゆっくり地面に降り立った。憑依による複合体の支配は魔獣犬や角熊の時よりも更に深く全身に及んでいる。

「具合はどうじゃ?」

” 凄く馴染んでいます ”

「ふむふむ、ではちょっと歩き回って見せてくれるかの」

” じゃあ、広場をぐるっと回ってきますね ”

見た目は重そうな甲冑姿だが意外と軽やかに踏み出した複合体は、研究所前から広場の端まで歩き、そこから小走りになって徐々に速度を上げていく。

やがて人が全力疾走するような姿勢で走り始めると、様子を窺う研究員や待機している正規軍騎士団からも感嘆の声が上がった。

基本的に多少の知性を兼ね備える召喚獣と比べて、命令を聞くだけのゴーレムは動作もぎこちなく反応も鈍いのが当たり前で、一番長く稼働していた試作魔導兵もここまでスムーズな動きを見せるには至らなかった。

どうやら機動力重視のゴーレムを開発していたらしいという話は本当のようだと、見事な走行姿勢を保ちながら早馬の如く速度で走る新型魔導兵らしきゴーレムを称える研究員魔術士達。走るゴーレムが何の役に立つのかという問題は、使い手の運用次第なので言及されない。

「わーっ はやいはやい」

「うーむ……確かにあの巨体である速度は脅威だな」

「移動時のバランスは良好じゃな」

「見た感じでは自分の身体のように扱っているようですね」

小さくぱちぱちと拍手しながらピョンピョン跳ねているカレンの隣でガウィークは戦闘力の程度を推し測り、アンダギー博士が複合体各部の稼働状況に問題が無い事を確かめると、サータ助手は憑依による複合体の被支配率を動作の滑らかさから分析する。

コウを憑依させた複合ゴーレムの基本動作実験は成功したと言えた。

複合体で広場を走っているコウは、自分の手足のように動かせるこの身体に少し違和感を覚えていた。厳密に言えば生き物ではないこの複合ゴーレム。擬似生命体だからだろうか、魔物や動物に憑依している時と微妙に感覚が違うのだ。

「うーん、なんだろう？　なんか変なんだよなあ」

広場を一周して左手に博士の研究所とカレン達の姿を見ながら、前方に研究施設群へと続く通りの入り口を確認。そこに陣取る正規軍騎士団を捉えた時、騎士の一人が甲冑の一部を脱いで着け直している光景にピンと来た。

「あ！　もしかして」

ズザザッと、足を踏ん張って急停止したコウは複合体から半分以上精神体を抜け出すと、今思い付いた事を試してみた。

突然動きを止めた複合体に、何か不具合でも出たのかと駆け寄って行くアンドギー博士やサータ助手に、ガウィークとカレンも続くやっぱり暴走でも起こすのではないかと警戒しながら注目する研究施設の研究員魔術士や正規軍騎士団の面々。

「どうしたのじゃ、どこかに問題でも」

と、声を掛けた博士の目の前で複合ゴーレムの巨体が唐突に消えた。思わず足を止めるアンドギー博士とサータ助手。ガウィークは素早く周囲を見渡して目を凝らし、カレンはぼけーとした表情で

小首を傾げながら複合体コウが立っていた場所を見つめている。

すると、カレンの肩にとまっていた伝書鳥がピユイと鳴いて飛び立ち、複合体の消えた付近に着地。もう一度羽ばたいて今度は研究所の近くまで飛ぶ。そこでスイツと翼を翻して上昇を見せた瞬間、ズシンという着地音を響かせて複合ゴーレムが姿を現した。

「な、なんじゃ？」

「瞬間、移動……？ いえ、空間転移でしょうか……？」

「いや、違う。今のは多分……コウと伝書鳥が運んだんだ」

「おおーぴいちゃんスゴイ」

コウは複合体に入った時、憑依という形式をとってはいたものの、他の動物や魔物に憑依した時と比べてある程度勝手に動く身体を意のままに操るといふ感覚が無く、まるで着ぐるみでも着て動かしているような感覚に違和感を感じた。

それは身体に憑依しているというよりも、服のように身体を着ている状態である事に気付いたのだ。複合ゴーレムは擬似生命体でも固有の魂を持っていない”動ける甲冑”という武器に分類されるが故に、道具として異次元倉庫に保管可能な事が分かった。

『わー、これはきつと持ち運び便利だよ』

本人は『いいこと思い付いちゃった』程度にしか考えていなかったが、博士達を始め実験を見物していた研究施設の研究員魔術士や正規軍騎士団の騎士達は、空間転移したとは思えないような複合ゴーレムの時間差瞬間移動に唖然としていたそうなの。

21話：博士の贈り物

グランダール正規軍の騎士団が装備する甲冑には全て対魔術処理などが施され、微量ながらあらゆる身体能力を向上させる効果が付与されている。甲冑とセットで支給される規定装備品の武器類にもそれぞれ個人の戦闘スタイルに合わせた補助効果が付与されるなど、周辺国の中でも特に充実した装備品の力もあつてか、精強な軍事を誇る隣国ナツハトームからの侵攻を過去から現在に至るまで幾度と無く跳ね返して来た。

夕暮れに影を濃くする王都トルトリユス魔術研究棟区画の一角にて、正規軍騎士団の一部隊と対峙する一体の巨人。生き物のように脈動する甲冑巨人の傍らで怪しげな雰囲気醸し出す老者がニヤリと不気味な笑みを浮かべると、白衣の裾をマントのように翻してザツと手を翳す。

「さあ、奴等にお主の力を見せ付けるのじゃあ！」

「ヴオオオオ」

甲冑巨人の声帯から重低音の唸り声が響き渡り、箆手のようなその両手に魔力が集中し始める。膨れ上がった魔力の塊は特定の流れに編み上げられ、魔術としての効果を紡ぎ出す。やがて仄かに発光し始めたそれを騎士団の部隊に向けた甲冑巨人は、術の完成と共に解き放った。

一瞬の閃光。広範囲に渡って一帯を包み込んだ光は騎士達や近くにいたガウイークとカレン、サータ助手も巻き込み、皆の体力を回復した。

「ほう、確かに凄い」

「つかれがとれたねー」

「魔力の集束率は見事としか言い様がありませんね」

騎士達からも中々質の良い回復魔術だと評価する声が聞かれる中、アンダギー博士が両手をワナワナさせながら叫んだ。

「ちっがーうー！ ワシのイメージしとるのはもっところピカッと来てチユドーンっていうっ わかるじゃろ！？」

「ウゴ？」

うきやーと喚く博士をまあまあと宥めているサータ助手。甲冑^ウ人は小首を傾げるようにしながら胸元に『どうしたの？』と光の文字を浮かべた。

これはコウとの意思疎通にその都度メモ紙を出されるのも面倒だという博士が、サータ助手の手解きでコウに覚えさせた空中に文字などを描き出す装飾魔術の一つである。ちなみに、コウの本体である精神体のみ状態でこれをやると宙空にいきなり文字だけが浮かぶ。

回復魔術は以前レフから教わったもので、治癒魔術と違って怪我の回復にまでは至らない初歩的なものだが、術式の編み込みがしっかりしているので中々の効果を得られていた。

昼間のうちに一通りの動作テストを終え、謎の空間転移についても複合体を異次元倉庫に収納していたと説明された博士は、収納出

来るモノと出来ないモノの条件などからも異次元倉庫の仕組みを解明する研究に役立つとして、生きた魚は収納出来なかった事など細かい仕様を聞き出した。

その中でコウ自身が魔術を特殊な視点から扱える事を知った博士は装飾魔術を教えてコミュニケーションの円滑化を図り、せっかく騎士団が出張って来ているのだからと、コウが憑依した複合体からの魔術行使も試しておこうという流れで騎士団を実験に参加させた。そして冒頭の対峙という構図に繋がる。

「まーったく浪漫の無い奴ぢゃ、攻撃魔術の一つも覚えておらんとは」

「騎士団を攻撃しぢゃまずいでしょ」

「なあに、ここの騎士共は甲冑に対魔術処理やら何やら施してあるからの、ちよつとやそつと吹っ飛ばしても大丈夫じゃ」

複合体に秘められた強大な力の一端は確認できたものの、中身のコウが大人しくて困るとボヤク博士。そんな強力な身体を簡単に与えて、もしコウが危険な存在だったらどうするつもりだったのかとガウイークが訪う。

「うん？ カレン嬢ちゃんが懐いとるのなら危ない奴なわけがないじやろが。クワツカカカカ」

博士はそう言って笑った。隊員なまの事をよく理解してくれている博士に、ガウイークの頬も緩む。

「まあよいわい。コウ、その身体は今日からお主のモノじゃ」
「ヴォルル」ありがとう

「ついでにお主を冒険者協会に登録するよう手続きも進めておいてやるう。ワシの名を使えば一発じゃ」

「え、コウをですか？」

流石に突拍子のなさ過ぎる話だと目を丸くするガウィーク。博士の柔軟で独創的な発想には慣れているサータ助手も、実体の掴めない謎に満ちた存在といえるコウを冒険者として登録しようという博士の考えが読めず疑問を向ける。

「ここまで確固たる自我を持って存在しとるのじゃ、本人も元は人間だったと自覚しとるのじゃろ？」

正体不明である事は兎も角として、身を立てるにも己が立場を示せる証があつた方が便利だろうという事で、名を『コウ』それ以外は不明。ダンジョンの探索中に身体を失い、複合体に意識を移植された元冒険者。そんな素性をでっちあげて登録するのだと計画を語る博士。

「冒険者として活躍するもよし、傭兵として戦功を上げるもよし、世界中に”魔導技師アンダギー博士”の名を轟かせるのじゃ」
「ヴォヴォオオ」ボクが冒険者に……？」

博士達が話し込み始めたので実験も終わったようだと騎士団部隊は撤収を始め、思わぬ提案を受けたコウはガウィークと顔など見合わせる。複合体で冒険者協会に登録されれば、コウは明確に自身を示す肉体で在り、この世界に個人としての立場を持つ事が出来るようになるのだ。

その時、コウの前に歩み出たカレンが複合体を見上げながら問い

掛けた。

「それでいいの？」

普段と変わり無い口調だがやけに真剣味を帯びた言葉。この場に
いる皆はカレンの問い掛けに八テナ顔を浮かべたが、コウは相手の
言葉から意思を読み取れるのでカレンの問い掛けに籠められた意味
を理解できる。複合体の胸元に光の文字が浮かび上がった。

” うん、今までは借りモノの身体で、この身体も貰いモノだけど、
確かにボクの身体だよ”

「わかった、じゃあこれからは”コウちゃん”って呼ぶね」

これまでカレンはコウに対して気持ちを向けていても、一度も”
コウ”と呼んだ事はなかった。それはカレンなりのルールというか
けじめというか、配慮、思いやりの類。その名も身体も貰い物だが
借り物ではない、コウがコウ自身として在る姿を得たとき、初めて
コウの名を呼ぶ。

「どこかに異常が出たら点検に来るがよい。王都にいる間は実験に
協力してもらおうぞい」

そんな訳で、アンダギー博士に紹介されたコウは博士から身体と
立場を贈られる事になるのだった。

王都に来て数日。ガウイーク隊は武闘会の参加に向けて下準備を始めており、出場させる隊員の選別や情報収集などの活動に勤しんでいる。

コウは冒険者登録手続きが進められる間、アンダギー博士の魔導兵器研究開発実験に協力する傍ら、王都にあるダンジョンの探索も行なっていた。王都にあるダンジョンは正規軍の訓練にも使われる広大な地下遺跡で、利用には許可書が必要だ。

様々な実験生物なども放されているので他の街にあるダンジョンとは出現するモンスターの趣向も少し異なっている。自由に使えるダンジョンと比べて冒険者の遺品なども少なくなる為、お金やアイテムはあまり手に入らない。

浅い階では実験生物が撒き散らした分泌物などの素材や、ダンジョンの環境に生える魔法植物の採取などが探索目的のメインとなる。それらは魔法薬の材料になるのだ。

博士を通じて得たダンジョンの利用許可書は一階と二階までの探索を許可するモノである。一人の冒険者として活動できる事が嬉しいコウは、ガウイーク隊のカレン、レフ、フランチェと其々日替わりでペアを組みながら狩りや採取の探索を楽しんでいた。

「いいかい？ コウ、この地脈草は青く光ってる奴が採取対象だ、赤いのはまだ濁ってるから放置だよ」

「ヴオヴオウウ」わかった”

今日はフランチェと共に一階の地底湖付近に生えている草の採取に来ている。地脈草はダンジョンの魔力を吸い集め、不純物を取り除いた魔力水を精製する魔法植物である。

薬士であるフランチェと複合体コウのペアは傍から見れば非常に不安定なパーティーに感じられた。戦闘中に薬を使うには殆どの場合一旦敵から距離を置かねばならない。

前衛の攻撃手をコウが担当して戦闘に向かないフランチェが後衛で回復役を務めた場合、攻撃手が敵から距離を置く度に後衛と並ぶ事になるので、回復役がその都度危険に晒されてしまうのだ。

が、その実コウは攻撃も回復もこなせるので引率するフランチェを引率されるコウが護衛するという変則的な役割構成になっていた。

「あんたの場合は便利な倉庫があるようだから鞆は必要ないとして、依頼で集める時はこうやって束にして、袋詰めで渡すんだ」
「ヴォウヴォウ」なるほど」

採取した草を束ねて軽く結び、魔力水の染み込んでいる花冠を上にして採取用の袋に収める。冒険者になって最初に受ける依頼は大半が採取関係なので、フランチェとの探索はいつかこの先コウが一人で冒険者協会の依頼をこなすようになる日が来たなどに役立つだろう。

冒険者協会中央本部の建つ王都の冒険者通りには、協会と縁のある高級武具店や大衆食堂が軒を連ねている。その通りにある酒場にて、上位メンバーが集まったガウィーク隊は数日後に予選を控える武闘会について話し合っていた。コウは街猫に憑依してカレンの膝に乗っている。

「コウも武闘会に出てみるか？」
「みゃ？」

正式にコウの冒険者としての登録が済んだので、ガウイク隊の一員として参加してみてもどうかと勧めるガウイク。昨日登録したばかりのコウはまだ冒険者としての実績評価が低く個人枠の出場条件には足りないが、グループ戦でなら参加可能だ。

「俺やダイドは個人戦で出るけどよ、隊長と副長と参謀、それにカレンがグループ戦に出る予定なんだと」
「デイスはまだ未熟。ヴィードは向いてない」

三人から六人パーティーでのグループ戦。上位メンバー候補のデイスは今回のような大きい大会の対人戦に出るには今一つ実力不足で、守備特化気味なヴィードは基本攻め姿勢となる武闘会のルールに戦闘スタイルが合わないのだという。

「……召喚獣の使用も許可されているから、貴方がいれば心強い」
「みゃみゃーん！」 おもしろそう！

「コウちゃん、出るの？」
「みゃうー」 出てみたい”

街猫の首回りを覆う脂肪を楽しそうにムニムニと揉んでいるカレンの首筋に、尻尾を引っ掛けてふにふにしたりしつつ、コウは武闘会への参加を希望した。特別戦が好きという訳ではないが仲間と一緒に何かをするのは楽しいし、競い合うのも面白そうだとワクワクするコウ。

「よし、じゃあグループ戦のメンバーは俺とマンデル、レフにカレン、それにコウで決まりだな」

明日からは連係や陣形にコウをどう組み込んで活かすかという訓練と戦術構築に取り掛かる方針で固め、今日はこれにて解散と相成った。銘々が席を立てて部屋に戻るなりカウンターで飲み直すなりと自由行動に入る。ふと、ガウイクが思い出したように振り返った。

「ああそつだコウ、博士が次の実験は夜に行なう予定だと言ってたぞ？」

「みゃうみゃ？ みゃうみゃうみゃみゃーうみゃ」 “そうなんだ？ わかった、次は夜八カセの所へ行ってみるよ”

「ああ、ん、街猫のコウちゃん可愛いっ」
「みぎゃっ」

うみゃうみゃ話す猫が可愛い過ぎると堪らず抱き寄せるカレン。むぎゅ〜と豊満な胸に抱かれたコウは思わず空気を吐き出したのだった。

22話：迷い蝶

応接間と呼ぶには少々絢爛な雰囲気で、あまり慎ましさの感じられない豪華な調度品の並ぶ私室にて対峙する壮齡の女性と白衣の老人。長いキセルをくるりと反して煙草盆に灰を落とした女性が若干強めの語調で言い放つ。

「お断りだね、うちの娘達こにそんな危険な真似させられないよ」

「いやいや、危険はほぼ無いんじやよ。ただ使えるかどうか分からないだけなの」

これだけ出すから誰か紹介してくれんかと棒状に纏めたギルド金貨をテーブルに立てる。通常一本に付き十枚で纏められるギルド金貨の束が三本。王都の下街に庭付きの家を建てられる程の金額である。

「幾ら積まれようと、うちは」

「やります！」

金貨の束を前にしても態度を変えず、老人を追い返そうとした女性の後ろから、お茶の用意をしていた下働き姿の少女が声を上げた。

「っ！ サヤ、あんた何を言っ……！」

「おおっ 君、やってくれるかね」

「まちなって、勝手に話を進めるんじゃないよ！ この娘はダメだ」
「お願いします！ わたし、お金が必要なんです！」

魔術研究棟の施設群を抜ける通りを一体の甲冑巨人がノシノシ歩く。ここ最近よく見られる光景で、付近を巡回する警備の兵も『ああ、今日は実験の日か』といった様子で見送り、誰何を向ける者はいない。夜間に訪れたのは珍しいが、怪しい者ではないので誰も気にしなかった。

やがて通りの先にある広場に出た甲冑巨人は、管と歯車が混沌と絡み合うオブジェの塊と化した研究所に入って行く。

「ヴオヴオーウヴオオ」ハカセー来たよー”

「あらコウ。博士は今ちよつと外出してるのよ、もう少し待ってね」

今日は複合体に備わっている予備機能実験を行なうという事で、博士は実験場となる場所まで交渉に行っているらしい。暫らく待っているとは広場の研究所前まで馬車で乗り付けた博士が帰って来た。黒塗りの豪華な馬車。博士は車窓から身を乗り出しながら声を掛ける。

「おおつ 来ておつたかコウ。早速じゃが街へ出るぞい、サータも準備は出来ておるな？」

「はい、博士」

大きな鞆を抱えて小走りに出て来たサータが博士の隣に乗り込む

と、馬車はゆっくり走り出す。

「少々目立つかもしれんが夜間の並走性能実験に丁度良いわい、宣伝も兼ねて隣を付いて来てくれるかの」

「ヴオウウ」はーい”

馬を脅かさないうよう、馬車の車体より少し後方につけて並走するコウ。石畳を叩く蹄鉄と車輪の音にゴーレムの足音が混じり響く。

やがて行政府区画の門を潜って城下の街へと下りて来たコウ達は、夜間でもまだ少し人通りの多い王都のメインストリートとなる中央通りを若干の注目も浴びつつ駆け抜けて行った。

そうして辿り着いたのは、中央通り沿いから一つ奥の道へ入った場所に建つ一軒の大きな館。見上げれば厚いカーテンの掛かった窓が沢山並び、薄っすらとした明かりを確認出来た。一般通りの宿にしては全体の雰囲気が少々豪華で、且つ妖しげな雰囲気に包まれている。

館の正面には入り口らしき紅紫色をした大きな扉が半開きになっており、壁際では黄色を基調とする露出の高い艶かしい衣装を着た女性が行く男性方に媚びた仕草で声を掛けている。扉上部にある看板には『胡蝶の館』と書かれていた。

「ヴオオウ？」 ”ここは？”

「娼館じゃよ。さて、前からは入れんじやろうから裏に回るぞ、こつちじゃ」

馬車を降りたアンダギー博士はサータ助手を伴って館の裏手へと歩き出し、コウも後に続く。『胡蝶の館』とはグラन्दール国内のそれなりに環境の整った街なら何処にでも開いている半国营遊興施

設で、法に則って経営される娼婦の館である。

「ここで働く彼女達は”蝶婦”と呼ばれ、表で客引きをしているのは館の中で一番下っ端の蝶婦となる”黄蝶”達だ。」

「今日の実験は複合体の生殖器官がちゃんと機能するか否かを見るのじゃ」

「肉体を持ったあなたに性的欲求が生まれるかどうか、観察の対象になるわ」

「ヴオオオ……」『性的欲求……』

「まあ、器官と言っても普通に管がくつついとるだけで、排泄その他の機能までは無いがの」

とにかく特殊な素材で組上げた擬似生命体なので、色々な要素を実験出来るよう様々な機能を搭載したらしい。何故ゴーレムや召喚獣の類に生殖器をつけよう等と考えたのかを問えば『需要があるからじゃ』と答える博士。

「擬似生命体にも色々な使い道があるのじゃよ」

「普通は戦闘用ゴーレムで試そうなんて人はいませんけどね」

「ヴオオオウー」なるほどー”

コウは博士達の思考から戦闘目的以外の用途で使われる召喚獣の情報を拾う事が出来て納得する。女性型召喚獣の研究や開発は随分進んでいるが、男性型召喚獣の研究はあまり盛んではないらしい。人気の無い分野にこそ邁進しようとする所が”博士らしい”といえはらしかった。

館の裏手に回ると大きな馬車でもそのまま入れそうな搬入口が開いており、シンプルで光沢のある銀色のドレスを纏った壮齡の女性

が、長いキセルを手に口元から煙を漂わせながら立っていた。彼女は館の蝶婦達を取り仕切る女主人で、皆からはマダム・サリーナと呼ばれている。

「待たせたな、部屋の準備は出来ておるか？」

「フウー　そいつかい？　生きたゴーレムってのは」

「身体は複合ゴーレムじゃが中身はれっきとした人間じゃよ、名はコウじゃ」

「ふうん　ちとデカイね……」

ゆったりとした仕草も色っぽく、流し目な視線でコウを観察するサリーナは『本当にモノは大丈夫なのか』とか『万が一の時は身元引き受け人になってくれるのか』など、博士に色々確認の問いを投げ掛けては、フウーっと煙を吐き出している。

「はあ、まったく……あの娘も幾ら報酬がいいからって、こんな仕事引き受けることあ無いのにねえ」

気が進まなさそうな様子で煙と共にそんな呟きを吐き出したサリーナは、ぼくと突っ立っているコウにちよいちよいと指で呼び寄せる合図を向けると、大きく背中を開いたドレスから艶かしい肌を晒しつつ館の中へと入っていく。

「よし、いくぞコウよ」

「まずは全身の洗淨からですね」

「ヴォウウ」はーい”

搬入倉庫の一角を仕切って特別に作られた実験室にて”茶蝶”の衣装を纏った少女がそわそわと落ち着かない様子で魔導技師アングー博士と実験ゴーレムの到着を待っていた。茶蝶の衣装は彼女がまだ客の取れない実習中で下働きの身にある事を示している。

少女が複合体性交実験の被験者に名乗りを上げたのは、単純に提示された報酬の大きさが理由だった。博士が提示した報酬額ほどの大金があれば胡蝶の館を出て下街に家を買う事も出来る。

これまでに稼いだ分も合わせれば、この世界で静かに慎ましく生きて行くのに十分な資金を得られるのだ。

「サリーナさんにはお世話になったけど、やっぱり普通の暮らしがしたいもんね……よし、頑張れわたし！」

ぐつと両手に握りこぶしなど握って自身を鼓舞していた少女は、実験室に現れた巨漢ゴーレムに思わず腰が引けてしまった。

「……だ、大丈夫よね……？」

博士達に連れられて実験室となる部屋にやって来たコウは、ベッド代わりの台座に腰掛けている少女に違和感を覚えた。グラウンダーに住む人々とは明らかに違う彫りの浅い顔立ち。人種的な違いを感じるその容貌に、コウは親しみのような印象を感じた。

「この娘が今回の実験に協力してくれる蝶婦見習いの　えー、なんじゃったかの？」

「沙耶華さやかです、皆からは沙耶って呼ばれてます」

「ヴォヴォーウ……ヴォウ？」　「こんばんはー……んん？」

台座から立ち上がった黒髪の少女と挨拶を交わす。彼女の名前を聞いたコウは、その響きにも親しみのような既視感にも似た違和感を懐く。なんだろう？　と首を傾げているコウに、とりあえず台座へ上がるよう指示を出した博士は実験の準備を始めた。

実験といつても行為に至るまでと、最中に複合体内を巡る魔力の流れを観測して記録するだけという内容だが、ここで記録した測定情報は後々の召喚獣開発の糧となる。

「サヤ？　顔色が良くないね、気が変わったんなら止めとくかい？」

「いえ、大丈夫です」

マダム・サリーナが心配そうに声を掛けるが、沙耶華は気丈に笑って見せた。

仮設実験室には複合体と幾つかの管で繋がれた魔力観測用の魔導機器が並べられ、アンダギー博士とサータ助手の他にもイザという時の為に胡蝶の館お抱えの治癒術士が待機しており、サリーナも館の主として実験を見守る名目で留まっている。

従って沙耶華はゴーレム相手に研究者の二人と館勤めの治癒術士と館主の見ている中で行為に及ぶ訳であり、流石に恥ずかしさが込み上げて今更ながら躊躇してしまう。だが、今回のチャンスを逃せ

ばいつか蝶婦として客を取る生活に突入してしまうのだ。

今はまだマダム・サリーナの温情か、普段はお手伝いのような下働きの仕事と、時々会いに来るバカ王子の相手をする程度で済んでいるが、この先”黄蝶”に昇格すれば他のお姉さま方達と一緒に店の前に立って客引きをしなくてはならない。

「ええい、ここで怯んでどうするわたしっ ファイトだ！」

沙耶華はこの国の人々には分からない言葉、恐らくはこの世界に存在していないであろう故郷の言葉で、小さく自分を励ました。その小さな呟きに、管で機械と繋がれたゴーレムが反応する。

「ヴオオ、ウヴオヴオウ？」 今の、なんて言ったの？

「え？」

突如、胸元に光の文字を浮かび上がらせて問い掛けるように唸るゴーレム。先ほど挨拶した時にも唸りながら文字を浮かべていたので、何か話し掛けられているらしい事は分かるのだが、まだ文字の読み書きが拙い沙耶華は文字の内容を読み取れず戸惑いに小首を傾げた。

「ええと、困ったなあ……わたしこっちの文字はまだよく分からないんだけど……」

そう呟きながら、沙耶華は壁際の博士達に助けを求める視線を向けようとして、次に浮かんだ文字の羅列に一瞬思考が固まる。

「日本語！？ それ、ひらがな……うそっ あなた日本語が分かるの？」

”あ、やっぱりこのもじでつうじるんだね”

コウは沙耶華の呟きに何時もの”言葉に乗った思考”を読み取るという感覚ではなく、直接その意味を理解出来た事に一瞬思考が混乱した。

知らない言語から意味を理解していた筈なのに、知らない筈の言葉と知っている言葉が入り混じった事で思わず、彼女の呟きの意味を訊ねてしまった。それに対して戸惑うように紡がれた言葉に、コウはそれが自分の中の欠けた記憶に刻み込まれている言葉である事を認識した。

実感は薄くとも”知っている”と確信できる異世界の文字で話しかけると、彼女はハツキリと反応したのだ。

その言葉は日本語と言うモノらしい。

「うーむ、こりゃあいったいどうした事じゃ？」

突然、耳慣れない異国の言葉と、見た事もない文字とで会話を始めた被験者の少女とコウに、アンダギー博士はポリポリと頭を掻きながら首を捻る。サータ助手はマダム・サリーナに説明を求めたが、サリーナは肩を竦めて見せるばかり。

「彼女は呪術士や祈祷士の術を？」

「知らないね、ただあの娘が術士とかじゃないのは確かだよ。あの言葉だって意味は分からないが、時々独り言で耳にするからねえ」

ゴーレムや召喚獣の制御に影響を与える呪術語の類ではない事を

確認したサータは、博士を促がしてコウに話し掛けた。興奮気味に会話をしていた沙耶華は我に返って恥ずかしそうに顔を伏せる。コウからは彼女の事についての驚くべき情報が語られた。

「異世界からの来訪者とな？」

” うん、上手く説明できなくてややこしいから今まで黙ってたんだけど、多分ボクも同じ所にいたんだと思う”

沙耶華がこの世界に現れたのは一年ほど前の事だった。元の世界で旅客機の墜落事故に遭い、気がつくところの世界にいた。王都のダンジョンで目覚め、モンスターに追われていた所を訓練中の騎士団に保護されたのだという。

見慣れない服装で丸腰の少女はダンジョンの探索許可書も身分を証明するモノも所持しておらず、言葉も通じないという事で暫らく取り調べを受けた後、グランダーに害意無しと判断されて遭難者に指定。温情で王都民として受け入れられた。

しかし当然の事ながらこの世界には身寄りもなく、冒険者をやる程の力も知識もなし、意思の疎通さえも片言という状態ではまともな働き口も見つからない。仕方なく健康な若い女性であれば誰でも登録して働く事が出来る胡蝶の館で蝶婦をする事になったのだそう。

異世界から来たという話は上手く伝わっておらず、グランダーと同じくらい魔導技術の進んだどこか遠い国から転移事故でも起こして跳んで来たのでは？ と認識されているらしい。

「ふーむ、興味深い話じゃな。コウよ、同時通訳は面倒じゃろうから後で書類に纏めて提出してくれんかの？ 実験は一旦中止じゃ」

博士はコウに沙耶華ともつと話をして色々聞き出しておくように指示すると、マダム・サリーナと何やら相談を始めた。自身も沙耶華と同じ異世界人だった可能性を示したコウは、他にも同じように異世界から来た人間がいるかもしれないという話題で会話を盛り上げる。

” さやかはおうとからでたことはないの？ ”

「うん、街の外って危ないんでしょう？ わたし冒険者とかそういう素質ないから、街からは怖くて出られないわ」

” そっかー ”

「もし他にもわたし達みたいながいるなら、会って見たいわね…
…もしかしたら、帰り方とか分かるかもしれないし」

コウはその特殊な在り方から冒険者として世界を巡り、同胞探しの旅をする事も出来るが、ごく普通の一般人でしかない沙耶華には少々酷だろう。ベッド代わりの台座の上で二人がそんな話をしていく時、博士はサリーナから沙耶華の事について詳しい事情を聞きだしていた。

「ほう、あの王子がのう」

「サヤはあんまり気がなさそうにしてるけどね、それが返って王子様の気を惹いちゃってるみたいでさ」

沙耶華が取り調べで騎士団施設の一角に保護されていた頃、” ダンジョンで発見された謎の美少女 ” という触れ込みに興味を懐いた

冒険大好き王子、第一王子のレイオスが度々彼女の所を訪れており、一時は王宮区画である城下の屋敷群に招いて部屋を与えていたりしたらしい。

取り調べと審査を終えて王都民に迎えられ、城下の屋敷群を出た沙耶華が胡蝶の館に入った今でも時々会いに来ているという。

当の沙耶華は屋敷群で取り調べを受けながら過ごした期間に貴族令嬢達からの執拗かつ陰湿な嫉妬攻撃に曝されて辟易していたので、レイオス王子の事は適当にあしらっている。が、その素っ気無い態度がまた王子を惹き付けている事に気づいてない。

マダム・サリーナはレイオス王子が沙耶華を気に入っている事に配慮し、沙耶華には下働きの仕事と王子のお相手しかさせていないそうだ。勿論、単に沙耶華と王子を応援しようという意味だけではなく、この館みせに対する第一王子の覚えをよくしておく為の処置でもある。

「しかし異界の存在に世界移動か……異次元倉庫、何か別次元への干渉に関する手掛かりが掴めるやもしれんな」

「さっきの話、本気なんだろうね？　ちゃんと面倒見れるのかい？」
「案ずるな、それでも養子の一人や二人普通に育てて来た経験もあるわい」

クワツカカカと笑う博士は、サータ助手と胡蝶の館お抱え治療術士を立会人としてマダム・サリーナが用意した書類にサインを入れた。

”蝶婦見習いサヤカ”の身元を引き受けるという保証誓約書。養子縁組みではないが、これにより沙耶華の身元はアンダギー博士によって保証される。同時に、その身柄は博士の元へと預けられる事

が決まった。

「さて、サヤカ嬢や。ワシがお主を引き受ける事になったでな、明日からはワシの研究所に住まうが良い」

「えっ！ い、いつのまに……」

”ハカセはいいヒトだよー”

懐かしい故郷の言葉に触れて感傷にふける間もなく、沙耶華にとって身元引き受けの話は寝耳に水だが、マダム・サリーナが許可したのであれば逆らえない。これは胡蝶の館に入るときの契約なのだ。身元引き受けを申し出る者が現れた場合、館主が見定めてその可否を決める。

「いや〜しかし思わぬ所で面白い研究対象が見つかったのう、クワツカカカカ」

「か、解剖とかされないよね……？」

”だいじょうぶだよー、たぶん”

「絶対って言うてーっ」

コウを通じて異世界人である事が伝えられた沙耶華は、博士が身元引き受け人となって胡蝶の館から出る事になった。今後は博士の元で研究所の御手伝いと研究対象になりながら、元の世界に還る方法を探す。

見た目もちよつと不気味なアングギー博士に恐々とする沙耶華は、私物の整理とお世話になった館の人達へお別れの挨拶に回っている。コウが沙耶華とのお話を纏めてサータ助手に提出すると、今日はこれでお疲れ様という事でそのまま解散となった。

『さて、まだみんな集まってるだろうから、顔出しにいいこうかな。ボクも隊のメンバーだもんねっ』

胡蝶の館を後にしたコウは適当な路地にいる猫に憑依すると、複合体を片付けてガウィーク隊の集まっている酒場を目指した。武闘会の予選が近いので毎晩作戦や情報の分析などが行なわれており、コウもグループ戦参加メンバーとして連係の打ち合わせ等に意見を出すのだ。

「コウちゃんのえっちい〜」

”えー、なんでー？”

今日の実験は中止になってしまったが、胡蝶の館とある少女に出会った事を話したコウは、何故かカレンに指でつつんさせられてしまったのだ。

23話：武闘会の予選前日

新型ゴーレムの実験準備を進めているアンダギー博士の研究所では新しく増えた研究対象兼お手伝いの少女が、同じく研究対象である複合体のゴーレムとお喋りをして過ごしていた。

「それでね、その人って本当は王女様なんだって」
”へー、いろいろあるんだねー”

博士の研究所に住み込んで働くようになった沙耶華は、実験でやって来るコウとよく待ち時間などに話をする。博士曰く、同郷の者同士で他愛無い会話を続けていれば、何かの拍子にコウの欠けた記憶が蘇えるかもしれないのでどんどん話さないとの事。

沙耶華がこの世界に来てから出合った人達や経験した事などを話している時、ふいに来訪者を告げる鐘が鳴った。ごてごてした外装の研究所も出入口の扉だけはシンプルな作りになっており、開閉によって小さな鐘が鳴る仕掛けが施されている。

あまり頻繁に開け閉めするとカンカン喧しい事になる扉がノックもそこそこに開かれ、研究所に入って来たのは少年のようなあどけなさも残す精悍な顔立ちに、豪華で細かい刺繍が入った煌びやかな服装の青年男性。

「まさか博士に引き取られるとはな……枯れた老人がお前の好みなのか？」

彼は沙耶華の姿を見つけると開口一番、そう言い放った。

「気付いたら何時の間にか話が決まってたんです、人を老い専みたいに言わないで下さい」

「わしゃまだ現役じゃぞ」

沙耶華は何時ものように応対し、部屋の奥で計測器を調整している博士が抗議する。青年の名はレイオス。グランダール国王レオゼオスと、王妃エリシユオーネとの間に生まれた第一王子その人であった。

レイオスは博士の抗議を聞き流しつつ沙耶華と向かい合っている複合体を見上げると、値踏みするような視線を向ける。

「これが噂の新型ゴーレムか、中身が人間というのは本当か？」

” こんにちはー ”

「なるほど、文字で意思の疎通をするわけか。面白いな」

「サヤちゃんと同郷の人らしいんですよ？」

サータ助手が王子にお茶のお持て成しをしつつ複合体の中にあるコウについて説明する。性交実験の被験者に沙耶華が名乗りを上げた事で、この世界とは異なる文明を持つ別世界が存在しているらしい事など、中々に貴重な事実が幾つか明らかになった。

「性交実験……？」

「ええ、この複合体には生殖器が備わっていますから、その機能実験を行います」

「なにっ コレとやったのかー！」

出されたお茶に口を付けながらサータの話に耳を傾けていたレイオスは、思わず沙耶華に詰め寄る。

「コレじゃなくてコウちゃん。実験は中止になったからしてませんっ」

少し顔を赤らめた沙耶華がきつぱり言い切ると、レイオスは『そうか』と安堵の表情を見せた。

コウと沙耶華のお話はレイオス王子も交えて最近の王都を話題に互いの近況を語り合う。レイオスは沙耶華が胡蝶の館を出た事に関して博士の身元引き受けを評価していた。やはり働いている場所が場所だけに、いつ他の男を客として　と考えると、気が気ではなかったようだ。

「そういえば、コウちゃんは実験に来ない時って何してるの？」

”ボクはガウィークたいのみんなとくんれんしてるよ”

「今のは何と答えたのだ？」

沙耶華がコウの書き出した異世界の文字の内容を伝えると、レイオスは表情に若干の鋭さを浮かべた。

「ほう、お前も武闘会に出るのか」

コウがガウィーク隊から武闘会に出る事を聞いて、レイオスはそちらにも興味を持つ。もし複合体コムポジットが使えるゴレムなら是非とも自分の隊に引き入れたい。沙耶華とコウの両方を手に入れる良い方法

でもないものかと考えてみたりする。

『ロゼスなら何か良い手でも思いつくんだらうけどなあ』

王宮の大多数から誤解されている聡明な弟の事を思い浮かべるレイオス。言葉に乗った思考から相手の胸の内を読み取れるコウは、その思考に悪意や害意を感じられず、レイオス王子の事を良い人っぽいと認識した。

王子の沙耶華に対する気持ちも『興味がある』程度ではなく『何時も一緒に居たい』といった感じで、沙耶華に本気の好意を懐いているらしい事が分かる。

一方の沙耶華は王子様の気まぐれで面倒な貴族令嬢達に睨まれるのも迷惑だという具合にレイオスが本気で自分を好いているとは思ってない。そしてレイオス自身は、沙耶華が自分の気持ちを信じてないというか、そこまで本気である事に気付いてないという事に気付いている。

沙耶華のレイオスを見る目は達観で、レイオスの沙耶華を見る目は情愛だ。

「コウや、そろそろ実験を開始するぞい」

「ヴォウウ」はい

今日の実験は細い木板の上を移動する姿勢制御実験なのだが、コウが動かしている複合体には簡単過ぎるので、片足で跳ねて移動するという通常のゴーレムではまず不可能な動きを試す実験が行なわれる。

また後でねーと沙耶華に手を振ったコウは、のっしのっしと研究

所前の実験広場へと歩き出した。

「……………んっ……………ちょっと、まだコウちゃんが……………」
「背中に目は付いていない」

ちらりと精神体だけで振り返ると、背後でレイオスが沙耶華の唇を奪ったりしている。が、これは胡蝶の館に入る以前からのいつもの行為。ぼしよぼしよと小声で抗議する沙耶華と構わずその口を塞ぐレイオス。

二人のやり取りから読み取れたお互いの気持ちは『ハイハイ、唇吸いたきゃお吸いなさいな』と若干醒めた様子の沙耶華に対して、レイオス王子は『届け、俺の気持ち！』と心の叫びを籠めている。すれ違ってるなあと思うコウ。

『教えてあげた方がいいのかなあ……………でもなあ』

アリスの一件から無闇に他者の心の中を伝えたりしない方が良いという教訓を得たコウは、そういった行為を自重している。カレンに対するダイドの気持ちなども 彼の場合は隊内でバレバレではあるが 見て見ぬ振りをしているのだ。

温度差のある口付けを交わす二人を尻目に、コウは片足跳び実験へと赴くのだった。

ズツシンズツシンと広場に複合ゴーレムの足型など残して実験を終え、午後からはガウイク隊の訓練に参加するコウ。王都を囲う重厚な壁の外周、険しい岩山の麓となる外壁の裏側など、人目に触れない場所で陣形や連係攻撃の訓練が行なわれている。

「へえ、レイオス王子に会ったのか」

「まあ気さくな王子様ですからねえ」

「あたし、てのうらにチュってされたコトあるよ？」

「……私もされた」

あの王子も恐らくグループ戦に出てくるだろうと皆で話題にし合う。レイオス王子が率いる冒険者グループは訓練なども城の敷地内でやっているらしく、詳しい情報が集められない。メンバーも一流所を揃えて来るのは間違いないので、一番の難敵になりそうだ。

ガウイク隊の陣形はガウイク隊長とマンデル副長が前衛、レフ参謀とカレンが後衛、コウは双方の補佐に動けるよう真ん中に陣取る。

陣形の中心は本来司令塔となるガウイクの立ち位置なのだが、まだ前衛を任せられる程コウは集団戦闘に慣れていない。角熊の一件で経験を積んでいるとはいえ、未だその実力は未知数なのだ。参加メンバーの都合上こういう配置になった。

しかし、隊のナンバー1とナンバー2の背後に複合ゴーレムの巨体が控える陣形は中々に威圧感を稼げる。その更に後方から攻撃術士と射手が狙っているのだから、後衛を護る壁役としても最適だ。対戦相手にはかなりの重圧プレッシャーを与えられるだろう。

「コウには序盤から魔術を使わせますか？」

「相手にもよるな、出来れば隠し玉にしておきたい所だが」

「……ひとつ、提案がある」

レフがコウの役割に攪乱も入れようと提案した。適当に小さな虫など用意してコウの身体にくっつけておけば、複合体を異次元倉庫に隠して虫に憑依する事で戦場を自由に移動する事が出来る。上手く使えばゴーレムが複数の魔術を使うこと以上の隠し玉になる筈だと。

「ふむ。あまり常用はできんが、効果は期待できるかもしれんな」

特殊な存在であるコウにしかできない戦法になるので、ガウイクはそれに頼り過ぎないように限定的なやり方として戦術に組み込む事を考えた。武闘会のルールの攻めの姿勢が基本となる為、通常はコウを軸にしてレフとカレンの援護を受けながらガウイクとマンドルで斬り込むスタイルになる。

「よし、とりあえずこの構成で幾つか試して、後は個々の動きを合わせていこう」

「……了解」

「おーっ」

「ヴォー」 ” おー ”

夕暮れまでガウイク達と訓練を続けたコウは、そろそろ宿に引き揚げるといふ事で草むらにいた適当な甲虫を見つけると、複合体を異次元倉庫に片付けて虫に憑依、レフのフードにくっ付いた。

複合体がガウィーク隊と一緒にいる所をあまり見せないようにする事も、既に始まっている情報戦略の一環となっているのだ。

「コウちゃん、ネコは？」

” 近くにみつけたらね ”

街の野良猫はそうそう何時も簡単に憑依させてくれる訳ではない。犬や猫には精神体であるコウの姿が見えているので、憑依対象が油断しているか、こちらに興味を持つなどしてその場に留まってくれないければ憑依可能な距離まで近づく前に逃げられてしまうのだ。日替わり猫の抱き心地を楽しみにしているカレンは『そっかー』と残念そうに呟いたのだった。

武闘会予選前日。

各地より集まった無名の戦士や有名冒険者グループ、武勲に名高い傭兵団などが名を連ねる武闘会の対戦表。予選の組み合わせが闘技場前の掲示板に貼り出されると、多くの参加者達が自分の対戦相手を確認めては続行か棄権かを選び、早くも勝敗が決まっていく。棄権の申し出があればその都度対戦表が書き換えられるので、この日の内に十四度の新しい対戦表が貼り出された所でようやく其々の対戦相手が確定した。対戦表の発表と貼り出しはもっぱら予選の予選とも言える。

ここから先は参加費用が掛かり、本選に入れば棄権は不可。一応、

故意に相手を殺めない事が規定に入っているので、運が悪くなければ敗北しても怪我だけで済む。

もつとも、怪我の程度は重傷から冒険者として再起不能に至るまで悪い方向に様々ではあるが、大抵は同業者や世間から向けられる自分達への評判にも関わるので、そこまで酷い事には滅多にならない。

掲示板前にはガウィーク隊長とマンデル副長の姿もあった。

「うちの相手は”紅狼傭兵団”か」

「正統派の中堅傭兵団ですな、まあ無難な所でしょう」

二人が対戦表に有名なグループがあればチェックしておこうと掲示板を眺めていると、やはりレイオス王子の率いる冒険者グループ”金色の剣竜”があった。名前の由来は伝説級の称号である”黄金の剣と竜”のメダル取得を目的としているからだとか。

他にも幾つか要注意グループをチェックして宿に戻るガウィーク達。

「一つ、面倒な所がありましたね」

「ああ、ヴァロウ隊な……あそこは当たりたく無いモノだ」

ガウィーク達が警戒するヴァロウ隊は、ガウィーク隊と同じ”戦斧と大蛇”のメダルを持つ討伐集団である。ただし、ガウィーク隊が魔物の討伐を専門にしているのに対し、ヴァロウ隊は盗賊団など人間相手の討伐を専門にしている。

傭兵団と違う所は冒険者協会で仕事を引き受けるなどして討伐を行なうのではなく、自主的に盗賊達を探し出しては討伐する集団である所。盗賊団から奪った財宝をそのまま報酬として懐に入れているので、戦功と共に悪評も高い。

一般的な世評と冒険者協会の仕事に関する功績とは切り離されて評価される為、戦闘殺戮集団として悪評高くともこなした仕事の分だけ評価されての”戦斧と大蛇”を持つ戦闘集団。そういう意味ではガウイク隊よりも戦闘力は高く、非常に手強い相手だといえる。

「まあ王子の所も大概反則染みてるんだから、向こうと当たってくれりゃあ助かる」

「ははは、違いありませんな」

ガウイク達が闘技場に出掛けていた頃、いつものようにアンダギー博士の研究所を訪れたコウは、明日からガウイク隊の一員として武闘会に出場するので暫らく実験の協力に來られない趣を伝えました。博士達もその事は既に承知していたので、頑張つて来いと励まします。

「しっかりと活躍してワシの名声に貢献するのじゃ。どれ、一つ餞別をやるっ」

こっちゃん来いと研究所の奥にある屋内実験室に呼ばれるコウ。

「ヴオヴオウ？」 “これは？”

「サヤ嬢の異世界に関する証言からイメージを得て作った魔導兵器

じゃ、持つて行くがええ」

「多分、複合体あなたにしか扱えないでしょうけどね」

博士が異世界の情報を元に作ったという魔導兵器。箱状の物体を抱えたコウは、何となく知っているモノであるような気がした。欠けた記憶が反応するような感覚。長めのベルトが付いており、これを肩に掛けて腰こした撓めに構えながら使うモノらしい。結構重い。

「本体の魔導器で精製した火炎玉を前方の複数に纏めた管から順次射出する仕組みなんじゃがの、ちーとばかり反動が酷くてのう」

最初は一本の管から一発ずつの火炎玉を射出する機構で進めていたのだが、細い管から射出する火炎玉は威力が低く、沙耶華の話に聞いた魔導技術も用いずに高威力を誇るといふ異世界の武器には遠く及ばない。とても兵器と呼べる代物ではない仕上がりになったそう。

そこで負けてなるものかと奮起した博士は、得意分野である魔導器の改良に着手。沙耶華の持つ僅かな知識から爆発によって威力を高めるといふ点に着目し、魔導器の中で小規模の爆発を起こして火炎玉の射出速度を上げる試作内燃魔導器を開発した。

だが、一発の火炎玉に十分な威力を引き出せるまで出力を高めた結果、射出する際の爆発に魔導器本体が耐えられなくなってしまう。ならばと本体の強度を連続使用に耐えられるまで上げてみると、今度は持ち運びが困難な程の大きさと重量になってしまったのだ。

これでは攻城戦などに使われる大型魔導砲を小さくしたダケのよ
うでインパクトに欠けるうえ面白みが無いという博士の嗜好により、
こういう異世界の射出系武器で良いアイデアは無いものかと沙耶華
に意見を求めてみた所

「うーん、そういうえばあのゾンビ映画で怪物が使ってた……えーとですね」

沙耶華の知る某有名ゲームが映画化された作品の中で見たと言つて示されたアイデアにより、複数の内燃魔導器を搭載して複数の管から連続で火炎玉を射出するという仕様の魔導兵器が出来上がった。

威力もインパクトも十分だが、最終的に酷い反動だけは残ってしまつたそうだ。

「台座に固定しての屋内実験しかしておらんが、品質は保証するぞい。一応試し撃ちはして行くがよい」

「とても狙いなんて付けられないから、味方の居る方向に使つては駄目よ?」

「ヴォウウ」はい

これはガウィーク達も知らない博士達からの贈り物。連係の訓練は一応昨日までで終えてしまつていたので、使用するにはよく状況を見定めてから使うようにしなければならない。

『そうだ、ガウィーク達の言ってるボクだけの”隠し玉”にしよう』

そうしようそうしよう」と『いい事を思い付いた』といった雰囲気
で内燃魔導兵器を異次元倉庫に仕舞うコウなのであった。

24話：紅狼傭兵団との対戦

冒険者協会から贈られるメダルには脱初心者クラスのモノから熟練者クラスのモノまで様々な種類があり、熟練した冒険者である事を示す証で多くの集団や個人が取得できるメダルに”剣と猛獣”がある。紅狼傭兵団はその”剣と猛獣”のメダルを持つ中堅層の傭兵団であった。

「相手はあのガウィーク隊だ、まともに戦っても勝ち目は薄い」

「主力二人が個人戦に出るって話だからな、恐らくグループ戦では隊長と副隊長が前衛に出てくるだろう」

武闘会の予選でガウィーク隊と当たる事になった彼等は、現在闘技場の戦士控え室にて作戦の微調整と最終確認をしていた。紅狼傭兵団の隊長と参謀がテーブル上で敵味方に見立てた小石を駒として並べ、全体の動きを補足する。

「そこで、こういう戦法をとる」

「一度しか使えない奇策だが、上手く行けば最初の奇襲で確実にどこちらか片方は討ち取れる筈だ」

「後は援護の無い方から数で押す訳か、速攻が決め手になるな」

「そろそろ時間だ、行こう」

ほぼ一か八かの博打的な作戦に賭ける紅狼傭兵団のグループ戦参

加メンバーは、戦いの舞台へと上がるべく控え室を後にした。

王室主催であるこの大武闘会には予選から名のある戦士達が武を交えるとあって、王都の住人は勿論、近隣の街や村などからも多くの人々が観覧に押し寄せる。

こういった大きな大会ではしばしば後に世界で名を馳せるような無名の戦士が活躍を見せる事もあり、メンバー募集中の集団にとっても優良な人材発掘の場になっていた。

「ヴオオオウオ」 凄い人だなあ”

「本選はもつと多くなるからな、今から慣れておけよ？」

半分ほど地下に掘り下げられた円形で掘り鉢状の闘技場。四箇所の入場口があり、対面の二箇所が地下にある戦士の控え室と繋がっている。残り二箇所は闘技者用とは別に猛獣や馬車などを通す為の広い大型通路で猛獣の通路は奥の檻に、馬車の通る通路は闘技場の外まで続く。

硬めの土や砂で敷き詰められた戦闘区域は縦横200ルウカ。コウの知る単位で表すなら凡そ九万平方メートルという広さを誇る。

対戦する両者が入場口から現れると、闘技場の進行官が予選の開始を告げる口上に声を張り上げた。

「これよりー！ 王室主催、トルトリユス大武闘会のー！ 予選を執り行なうー！」

観客席から一際大きい歓声が響き、ガウイーク隊のグループと紅

狼傭兵団のグループが所定の位置に付く。

ガウィーク隊は複合体^{コウ}を中心にガウィークとマンデルが前衛、レフとカレンが後衛でそれぞれ等間隔に間合いを取った。対する紅狼傭兵団は前衛四人、後衛二人という構成で密集陣形を取っている。双方の距離は初期位置で66ルウカ、凡そ百メートルといった所だ。

「ガウィーク隊のあれって召喚獣か？」

「いや、新型のゴーレムらしいぞ」

「何でも元冒険者だった人間の人格を持っているとか」

「協会の冒険者名簿に登録されてるんだってな、例の変態魔導技師博士が絡んでるって話だ」

予選の第一戦から見に来ているような観客は各団体に関する情報にもそれなりに聡い一般人が多く、彼等はこの頃街でよく見かける複合ゴーレムに対してもある程度の情報を掴んでいた。

偵察も兼ねて見物に来ている冒険者グループや傭兵団の人間も、ガウィーク隊で隊員として扱われ、冒険者協会に一冒険者として登録されている一風変わった新型ゴーレムには注目しているようだ。

やがて試合開始の合図が告げられる。先に動いたのは紅狼傭兵団だった。全員が軽装の鎧に片手剣と小型の盾を装備したスタイルで揃えている紅狼傭兵団は、前衛四人が横一列になったまま後衛も一緒に真っ直ぐ突っ込んで来ている。

「どつやら向こうは速攻を狙ってるようすな」

「レフ、固まっている所へ範囲魔術を撃ち込め、カレンは敵が散らばらないよう左右を攻めろ、コウはそのまま待機だ」

ガウイク隊は前衛の二人が若干内側に寄って後衛二人の射線をあける陣形を取り、遠距離攻撃で相手の出方を窺う。距離的にまだ魔術の有効射程外なのでレフは魔力を練りながら待機中。カレンは弓を構えて狙いをつけた。

こういつた試合に使われる矢は先端に円柱形の筒を被せたような特別製の物が使われ、円柱の先についた僅かな突起が突き刺さる以外は殆ど打撃攻撃になるよう殺傷力が削がれている。

ちなみに突起の長さは1ペイル、約一・五センチ程しかないので、甲冑を着けていなくてもほぼ軽傷で済む。

カレンから放たれた矢が紅狼傭兵団の前衛四人を牽制するように風切り音を鳴らしながら両端を掠めて行き、コウを挟んだ反対側でレフが範囲魔術を行使すべく杖を構えて魔力を編み始めた。

「よし、作戦通り行くぞ！ ゴーレムは無視して構わない、狙いはあの魔術士だ」

小走りで一定距離まで詰めて来た紅狼傭兵団はガウイク隊の攻撃術士が魔術の行使に入ったのを確認すると、全力突撃に切り替えた。射手の攻撃に注意しながら陣形を崩して密度を疎らに開き、個々がバラバラに動いているように錯覚させる。

最初に固まって行動したのは範囲魔術の行使を誘う為の策であり、絶妙なタイミングで散らばって見せる事で効率の悪さを演出して範囲魔術の行使を躊躇させたのだ。

そうして攻撃系範囲魔術を使うと味方を巻き込んでしまう距離まで詰めた所でガウイク隊の前衛に三人一組で斬り掛かり、ゴーレムが援護に出て来るのを待つ。

紅狼傭兵団の奇襲染みた速攻突撃戦法に対し、ガウイークとマンデルは背中合わせに陣取ってひたすら攻撃を捌きつつ防御に徹する。カレンとレフの援護は位置的に攻撃の性質や射線が限定されてしまい、特に威力を抑えた攻撃魔術の援護は殆ど効果が上がらないでいた。

「コウちゃんっ おねがい！」
「ヴオオウ」

コウはカレンの射線を遮らないようレフの正面方向からガウイーク達の援護に向かうべく走り出す。武器はどれを使おうかと異次元倉庫に並ぶ戦斧やら鉄槌やらを選んでいると、コウが動いた事を確認した紅狼傭兵団は次の段階へと作戦を進めた。

「今だ、行け！」

ガウイークと打ち合っていた紅狼傭兵団の団長が指示を出し、踵を返した二人の団員が盾を構えながらカレンに向かって駆け出した。実戦であれば小型の盾などカレンの射放つ矢の前には厚紙も同然なのだが、試合用の矢なら軽装の鎧と盾で十分防ぐことができる。

足を狙って飛んでくる矢は跳ねて躲し、身体は盾と鎧で護りながらほぼゴリ押しで距離を詰めて行くのだ。カレンを狙う二人の紅狼傭兵団員に気を取られたコウは迎撃に向かうべきかと足を止め、そちらへ踏み出そうとしたその時

「よし、次だ！」

更に二人、ガウィーク達と打ち合っていた傭兵団員が最初の二人とは逆方向からレフを狙いに身を翻して走り出した。残った傭兵団長と副団長は二対二での対峙となったガウィークとマンデルを牽制しながらガウィーク隊の内側へと浸透して行く。

紅狼傭兵団はガウィーク隊の前衛が後衛の援護に行けないよう時間稼ぎをすれば良いのでまともにやり合う必要は無く、実力で劣っていても牽制しながら逃げの一手で暫らくは凌ぐ事ができる。その間に団員四人で後衛の二人を狙うのだ。

射手も攻撃術士も接近されてしまえば近接戦闘職に太刀打ち出来ない。例え格上の集団であろうと、その力関係に変わりは無い。後衛の二人を落としてしまえばゴーレムを入れても三対六と圧倒的優位に立てる、そこからは堅実に攻めて数で押せば勝利は確実だろう。

ほぼ紅狼傭兵団の作戦通りであった。

「ヴォ、ヴォウ？ ヴォオヴォ……」 あ、あれ？ どっちに行けば……」

カレンへの攻撃阻止に向かおうとしていたコウはレフを狙って真っ直ぐ向かって来る傭兵団員に戸惑い、再び足を止めた。このまま向かって来る傭兵団員を迎え撃てば、カレンを狙っている二人の迎撃に間に合わなくなる。かと言ってカレンの援護に向かえばレフが無防備に。

どちらを優先すべきか判断しきれずオロオロしている様子のコウを尻目に攻撃目標へと直走る紅狼傭兵団員。人間の人格が宿っているらしいとはいえ、やはりゴーレムはゴーレムかとコウに向けていた警戒意識を若干、攻撃術士の動向に割く。

「コウちゃんっ レフちゃんをおねがい！」

自分の方は何とかするからと言うカレンの指示を受け、コウは背後をすり抜けて行こうとする傭兵団員に向き直るが、もはや武器を出して攻撃する暇は無い。なんとか食い止めなくてはと動いたコウは、咄嗟に足を引っ掛けようとした。

しかし焦って急激な動作をしようとした為かイメージと身体の動きにズレが生じてしまい、しゃがみ切る前に引っ掛け用の足が出た。

「ヴァ」「あ」

「ぐはっ！」

「なっ!？」

間が悪かったのか良かったのか、通り抜けようとしていた傭兵団員の位置とタイミングが合ったらしく、左横蹴りとなってまともに入った。ゴーレムの蹴りを喰らって真横に吹っ飛んだ傭兵団員はゴロゴロと二、三度転がって動かなくなった。気を失ったらしい。

並んで突進して来ていた傭兵団員は思わず防御体勢をとるが、この場合はそのまま走り抜けるのが正解で足を止めた彼の選択は間違いだ。

コウは『武器を使うよりも直接殴った方が早い』と判断すると、引っ掛ける為に出して蹴りになってしまった足を軸に身体を引き寄せながら、防御体勢をとっている傭兵団員に左腕を振り上げた。

ワアツと会場が沸く。

下から掬い上げるようなパンチを貰った傭兵団員はゴーレムの身長に腕の長さを足して更に一人分程の高さまで空中へと跳ね上げ

られた。

殴り飛ばされたというよりも振り上げた腕の先に引っ掛けるような形で放り投げられた傭兵団員は、落下の衝撃が原因で動けなくなった。しかし見た目は完全に強烈なアッパーカット。観客達の間では『顔が潰されたのではないか』等とざわめきが上がっている。

「なんだあのゴーレムは」

「やたら動きが早いぞ、まるで人間みたいじゃないか」

偶然とまぐれでどうにかレフを狙って来た相手の迎撃を果たせたコウは、今度こそカレンの援護に走り出した。

レフも護身用に練っていた魔力をカレンに迫る傭兵団員への牽制に回してコウの迎撃を援護する。カレン自身の正確に相手の足を狙える弓の腕もあってどうにか接近されるのを抑えている所へ、飛び込んで来たコウが壁となって立ちほだかる。

通常、ゴーレムと言えばもっとノツソリと動くモノのだが、見事なフォームで全力疾走して来た複合ゴーレムの姿に観客も偵察グループも皆が度肝を抜かれた。

王都内を巡る博士の実験で運動性能の高さもある程度は周知されていたとはいえ、ダッシュをかますゴーレムなど普通は想像出来ない。

「いいぞコウ、その調子で行け！」

足止めの牽制でじりじり下がる相手を押し込んで来たガウィークが紅狼傭兵団の団長と激しく斬り結びながらコウに声を掛ける。

ガウィークの励ましに『接近格闘型と思わせられれば後の試合でも有利に事を運べる』という思考を読み取ったコウは、何かそうい

うイメージにぴったりな行動は無いかと考え、浮かび上がった異世界の記憶からその構えを実行した。

きゅつと脇を締めて握った拳を眼前に構え、すたーんすたーんと軽やかにステップを踏む。ゴーレムの身体ではズシーンズシーンと重々しいが、先日の片足跳び実験で『飛び跳ねる』という動作に馴染んでいたが故の『慣れた動き』を演出できた。

沙耶華に見せたなら『ボクシング?』と訊ねるであろう異世界の拳闘スタイルだ。

「ヴォツヴォツ」『しゅっしゅっ』

と、軽くジャブなど出してみせるが、複合ゴーレムの腕でやると”ぶおんぶおん”とか風切り音を鳴らしている高速パンチ。当たったら痛いでは済まなさそうだ。後衛を急襲する作戦でカレンまで後少しという距離に詰めて来ていた傭兵団員は完全に足を止められてしまった。

「うおっ あのゴーレム、闘士の真似事まで出来るのかよ!」

「だからあんなに動きが早いのか」

「普通のゴーレムにあんな動きさせたらすぐ自壊しちまうぞ、よく身体が持つもんだ」

「一体どんな素材で作られてるんだらうな?」

観客席では召喚獣やゴーレムに詳しい者達が複合ゴーレムの動きから推測できるハイスペックな仕様に感心を示し、今後あの型がゴーレムの主流になるなら触媒の値段と稼働時間に問題を残す召喚獣は廃れていくかもしれない等と、触媒暴落の可能性について話し合われていた。

実際はコウが貰った複合体を主流にしようにも一体製造するのに

必要な素材や技術、製造期間などを考えると高位召喚獣の高級触媒を二十体分ほど購入した方がまだ安く付くという出鱈目なコストが掛かるので、あと数年は触媒市場に大きな変動が起きる事は無いだろう。

ともあれ、後衛を急襲してそこから崩すという作戦が失敗した事により、完全に勢いを殺がれた紅狼傭兵団は残った団員で陣形を立て直すも、堅実に立ち回るガウィークとマンデルの連係にレフとカレンの援護が加わり、どんどん押されて劣勢に。

特に、時折突っ込んできそうな足音を響かせる異様に素早いゴレムの重圧には警戒から動きを乱され、紅狼側を悩ませた。

これは単にボクシングのステップなど踏みなれてないコウが時々バタバタと足踏みをしてしまっているだけなのだが、そんな事とは知らない相手はフェイントでプレッシャーをかけられていると感ずる。

「く……っ やはり実力者集団に小手先の策は通用しなかったか」「この上は出来るだけ粘って我々の実力を何処まで印象付けられるかだ」

格上を相手にどれだけしつかり戦えるのかを示す事は、今後の仕事にも影響する。派手な攻撃など手の内を見せないガウィーク隊は堅実に着実に個々の実力差のみで紅狼傭兵団を追い詰めて行き

やがて最後の一人が討ち取られた。

既に明らかとなっている戦いの結果とそれを称える歓声の中で、進行官より試合の勝敗が告げられる。

「そこまで！ 勝者、ガウイク隊！」

紅狼傭兵団を下したガウイク隊は予選を危なげない勝利で飾ったのだった。

「ヴォヴァアア」 勝ったー

25話・ヴァロウ隊との対戦【前編】

武闘会の試合は隔日で行なわれる。昨日、紅狼傭兵団との予選を戦ったコウはアンダギー博士の研究所で複合体の機能に異常が出ていないか、各部の検査を受けていた。

”まだうまくたしまわれなくて、ちょっとオロオロしちゃったよ”
「そう？ コウちゃん、結構活躍してたと思うけど」

沙耶華も試合を観戦していたらしく、検査中はコウの話し相手になっっている。研究所での御手伝い作業にもすっかり慣れたようだ。と、そこへ来客を告げる鐘が鳴り、何時かのようにレイオス王子がやって来た。沙耶華はお茶の用意をしにそそくさと席を外す。

「コウは検査中か」
「ヴォウウ」 ”こんにちはー”

レイオスも昨日の試合は見ていたそうで、まだ実力を見せていないであろうガウィーク隊と、隊の中では新参者であるコウ自身の働きについて話題を振る。

「まだ戦い慣れていないように感じたが、あんな動きをすればその身体に相当な負荷が掛かったのではないか？」
”念の為に検査してるけど、大丈夫みたい”

「複合体は特別製じゃからの、あの程度の動きでそうそうガタなぞでんわい。クワツカ力力力」

検査で複合体の疲労度などを調べている博士は、自信満々にそう言って笑う。実際、複合体の状態は極めて正常且つ良好で、何処にも異常は見つからなかった。

次の試合でも複合体の高性能を見せ付けてやるのじゃーと何故か高笑いしている博士に、レイオスは先ほど入手したばかりの情報を伝える。

「本戦でガウィーク隊と当たる相手がヴァロウ隊に変わったようだぞ」

「なぬ？ 小僧達の相手は確か西方から来たどこぞの冒険者集団ではなかったか？」

”今朝みんなが集まった時、ヴァロウ隊と当たらなくて助かったって言ってたよ？”

「そのグループが罰金を払って棄権した。本戦開始前だったから承認されたそうだ」

なんでも酒場でヴァロウ隊の隊員と揉めたらしく、その喧嘩で冒険者集団側のグループ戦参加メンバーが怪我を負ったらしい。罰金の半額はヴァロウ隊が負担しており、喧嘩もその場で揉めた事以外の他意はなさそうだ。

急遽対戦表の組み換えが行なわれ、予選で敗退したグループの中から本選復帰希望者を抽選で繰り上げ、ヴァロウ隊と対戦する予定だったグループはその繰り上がり本選出場グループが対戦する事にヴァロウ隊の対戦相手には同格であるガウィーク隊が当てられた。

これは明らかに格下となる繰り上がり出場のグループをガウィーク隊に当てる事は、他のグループに対して公平性に欠けるという理由からの組み合わせらしい。観客は喜びそうだが、ガウィーク隊にとってはいい迷惑といった所である。

「順当に勝ち残れば、次は俺達と当たる事になるな」

含みを持たせた言い回しで反応を窺うように視線を向けるレイオス。しかし、コウは作戦が変わるなら早く皆の所に戻って話し合いをしなければとそわそわしている。

「コウちゃん聞いてないみたいですね」
「……」

お茶を持って来た沙耶華がそう言ってカップをテーブルの上に置いた。どうやらコウには功名心や対抗心、闘争心といった感情があまり深くはないらしい。

複合体観察からそんな傾向を感じ得たレイオスは、とりあえずソファーに身を沈めながら沙耶華を膝に引っ張り込んで癒される事にした。

「ちよっ わたしまだお仕事が」

「お前はいつも働いているな」

少し荒れていないか？ と、沙耶華の手を取ったレイオスは唇など押し当ててみたりするのだった。

コウがレイオス王子から聞いた情報を知らせにガウィーク隊の宿泊している宿に帰って来て直ぐ、武闘会の主催からも使者が遣わされた事で隊員が非常招集され、個人戦の予選を突破したリーパとダイドも交えながら対ヴァロウ隊戦について作戦会議が行なわれた。

「向こうも予選では全く手の内を見せていないからなあ」

ガウィークの魔法剣”風斬り”や、レフの呪法の杖”流動の御手”と同様に、ヴァロウ隊も色々と特殊な武器を持っている事が分かっている。尤も、ガウィーク隊には隠し玉の宝庫のような存在のコウが居る訳だが。最初は様子見で相手の出方を見るところでも、少しの気も抜けない。

「多分、全力でやる事になるだろうな」

「コウはタイミングを見計らって武器の装備を考えてくれ」

恐らく魔術が使える情報ぐらいは把握されていると思うので、相手の知らない事を効果的に使うのだ。

何処からとも無く武器や防具を出し入れできるコウの特殊な能力については、試合では勿論、博士の公開実験でもまだ見せていない。素手の見た目がそのまま丸腰であるとは限らない事を武器にする。

「ヴァロウ隊の構成はまず司令塔である隊長のヴァロウ、彼は戦士だが特殊な弓をメインに使う」

矢が自動装填される連射性に優れたナツハトーム製の機械式連弓で、攻撃目標の指示にも使っているらしく、直接攻撃も援護もこな

す。

「あの機械弓はとにかく連射力が半端じゃないので注意が必要だ」
「あれってすごくおもしろいよねー」

次に副隊長の女剣士、彼女の使う剣は衝撃波を放つ魔法剣である事が知られている。振るわれた剣を剣で受け止めただけでも、その際に放たれる衝撃波でダメージを負ってしまうので、まともに打ち合う事は避けなければならない。

「隊長の”風斬り”で対抗するのが無難でしょう」
「だな」

ヴァロウ隊の前衛はその女剣士と、盾持ちの重戦士が主に務めているようだ。他は隊の上位メンバーである戦士と魔術士、あと呪術士らしき黒装束の少女。確認出来ている範囲で特に注意すべきなのはヴァロウ隊長の機械弓と女剣士の魔法剣といったところだ。

「向こうは対人戦闘の専門家ですからねえ」
「まあ、そういう意味じゃあこっちにコウが居るのは強みでもあるな」

「ヴォウ？」
「ボク？」

普通の人間に出来ない事が出来る点。普段あまり人外の類を相手にしていない集団なので、そこは付け入る隙になるだろうとの事。
陣形は全員の距離を開け過ぎずダンジョン探索時の感覚で適度に固まって行動する方針で決め、特にレフとカレンを狙われないようにコウには二人の壁役を頑張ってもらおう。

「あとは実際に剣を交えてからだな」

翌日。

今大会でも特に注目される一戦。有名討伐集団同士の対戦という事で闘技場には沢山の観客が押し寄せていた。ヴァロウ隊とガウィーク隊の試合は午後からになるが、午前の部にレイオス王子率いる”黄金の剣竜隊”の試合があるので朝から人出は多い。

レイオス王子の試合は開始して直ぐ終わってしまう場合が殆どなので、ある意味、手の内を読めないとも言える。

それというのも、メンバー全員が特殊な効果を持つ武具を装備しており、序盤から景気よくそれらの力が振るわれるので対戦相手は成す統べなく蹂躪されてしまうといった具合に。

優勝候補の試合を観察する傭兵団や冒険者グループの偵察達も、あれには効果的な対応策が思いつかないとお手上げ状態だ。

「流石、伝説級の称号を目指そうってだけはあるな」

「正直ガウィーク隊には勝っても王子の隊には勝てる気がしませんね」

勝者としての歓声を浴びながら戦士の控え室へと戻っていくレイオス王子達を観客席の一角から観察していたヴァロウ隊の副隊長、女剣士のストウアと、彼女が指揮を執るときは常に行動を共にしているヴァロウ隊の護り手、重戦士のカルヴァンがそれぞれ感想など

述べ合う。

午後からの試合に備え、二人はヴァロウ隊が宿泊している宿へと足を向けた。残りの試合には特に見るべきモノも無い。

「ガウィーク隊の隊長には、やはり副長が当たりますか？」

「ああ、恐らく向こうからそう立ち回ってくるだろう」

「こちらの魔法剣”崩波折り”に接近戦で対抗できるのはガウィーク隊長の魔法剣”風斬り”だけであろうと読めるなら、無理に奇を衝く事は無い。裏を返せば接近戦で”風斬り”に対抗できるのは”崩波折り”だけという事になる。きっちり実力勝負で戦えば良いのだ。

「あの魔導兵を押し立ててくる可能性は？」

「無いな。確かに面白いゴーレムではあるが、あれは後衛を護る為の壁だろう」

本物の強者を相手取って戦える程の実力は備えていないと看破するストウア。丈夫である事はあるまでもなく、柔軟性や素早さには目を見張るものがあるが、素早く動く事が分かっているのなら幾らでも対処法はある。

臨機応変に動ける人間の方がよほど手強いというのが彼女の持論であった。

「向こうの副長もオールラウンドに戦える実力者のようだぞ？」

「ふっ 隊長や副長には指一本触れさせやしませんよ」

ストウアが戯れに向けた比喻に対して、ヴァロウ隊の守護盾を自負するカルヴァンは不敵にそう言ってみせた。

大入り満員な午後の闘技場観客席。昨日までは空席が目立った貴族専用の特別席も紳士淑女で埋まっており、進行官の口上にも力が入る。

「これよりー！ 王室主催、トルトリユス大武闘会本選午後の部ー！ ガウイーク隊とヴァロウ隊のー！ 試合を執り行っー！」

一際大きな歓声があがり、両グループが闘技場に姿を現した。双方が配置について陣形を整える間、観客達の興味はガウイーク隊の複合ゴーレムとヴァロウ隊の機械化連弓に注がれている。貴族達の座る特別席にはレイオスに連れられた沙耶華の姿もあった。

「あ、コウちゃんだ。大きいから目立ってるけど……狙われないかしら」

「この戦いでコウが前に出る事はないだろう、恐らく後衛の護りに徹する筈だ」

レイオスの予測通り、ガウイーク隊は後衛の射手カレンと攻撃術士レフがあまり距離をあけず壁役となるコウの近くに立ち、前衛のガウイークとマンデルも同じ幅で並ぶ。相手に対して縦長な陣形を取っている。

対するヴァロウ隊は剣士ストウアと重戦士カルヴァンが最前列に構え、中列の真ん中に機械弓持ちの戦士ヴァロウ。ほぼ同じ列で少

し外側に位置をずらして戦士と魔術士が並び、最後尾には呪術士らしき少女の姿があった。

やがて開始の合図が告げられ、注目の一戦が始まる。

双方共に相手の出方を窺う静かな立ち合い。膠着した様子見の状態からまずヴァロウが射掛けた。

ナツハトーム製の機械化連弓でも最高級品であるピネー級。機械弓本体に装着する矢箱は通常で三十本、拡張して五十本まで矢を収められる。次々と弦に自動装填される矢を引いては放つという動作を繰り返し、通常の弓では考えられない速度での連射を実現するのだ。

ヴァロウ隊から放たれた先制の矢は僅かな間に五発。後衛はコウが完全に壁となっているので本人は勿論カレンとレフにも被害は無い。マンデルは盾を構えて矢を防ぎ、ガウイクはとりあえずマンデルの影に入つてやり過ぎした。ちなみに、毎秒一発程の速度である。

矢が必殺の武器にならない試合ではあまり攻撃の効果は望めないが、連射性を印象付けてやり辛く思わせる心理的な効果は狙える。

ガウイク隊からもレフの攻撃魔術やカレンの矢で反応を窺い、相手の防御力や対処力が推し測られる。そこそ強力な攻撃魔術がヴァロウ隊中列に控える戦士に盾で防がれた事から、見た目は無骨な普通の大盾だが対魔術処理の施された装備である事が明らかになった。

暫らく地味な心理戦が続いて観客は不満気な様子。だが、ヴァロウ隊は既に仕掛けていた。

「 リト、準備はできてるか？ 」
「 大丈夫です、丁度安定しました 」

冒険者協会で仕事を受けると、内容によっては高価な伝送具が貸し出される場合がある。” 対の遠声 ” という離れた場所にいる者同士で会話が出来ると特殊な呪術式伝送具なのだが、ヴァロウ隊はこの伝送具の中でもとりわけ性能のよいモノを隊内で所持していた。

四対の遠声によって隊長のヴァロウや副隊長ストウア達と同時に通信している主力メンバーの中でも、一番後方に控える見た目は気弱そうな隊員のリトアナーゼが、ヴァロウ隊長からの確認に準備が整った事を伝え返す。

ヴァロウ隊が対の遠声を使って仲間と交信し合っている事は、外からでは分からない。

「 頃合だ……行け、リト 」
「 はいっ 行って来ます！ 」

エイオア出身の呪術士であろうと認識されている彼女だが、実は呪術士に直接戦闘力を持たせた珍しい職種とされる ” 影術士 ” であった。

自身の幻影を作り出してその場に残すと、呪術の部分結界で姿を隠しながら闘技場の壁際を大回りして相手の背後から近付き、無防備な後衛を奇襲で仕留める。影術士は暗殺と後方攪乱のプロフェッショナルだ。

ヴァロウが後衛を狙った連射などでガウィーク隊員の注意を自分達に惹きつけ、ゴーレムの後ろに隠れている攻撃術士と射手をターゲットにしたリトの奇襲を援護する。闘技場の壁に辿り着いたリトは足音も砂埃も立てず滑る様に移動を始めた。

もつと派手にやれと不満を垂れている観客も、あと少し経てば驚きの歓声で沸く事になるだろう。ヴァロウはそんな予測を思い浮かべながら機械化連弓の弦を引く。影術士の隠行術。結界に隠された彼女の姿は誰にも見つける事は出来ない。

普通ならば。

『あれ？ なんだらう？』

コウは闘技場の壁際で湯気のように揺らめく魔力の流れを見つけて首を傾げた。壁際をすーっと移動してくるアーチ状に揺らめく魔力の帯。丁度背後にレフが陣取っていたので文字を出してその事を伝えてみると、それは恐らく影術士の隠行術ではないかという返答があった。

魔力を視認出来るコウは結界に身を隠して移動する影術士の、結界を維持する為に放っている僅かな魔力を捉えてその接近を察知したのだ。警戒するレフ達だったが、迎撃しようにも相手の魔力を感じられる程近付かれなければ正確な位置を把握する事さえ出来ない。

流石にそこまで距離を詰められるのは危険なのでコウが迎撃に出る事に。ヴァロウが連射で放つ矢も相変わらず飛んで来ており、対策として幅広の重盾を出すコウ。平均的な身長の人を丸々覆えるような盾を二人掛かりで支えて降り注ぐ矢から身を護る。

「おもいー」

「……重い」

「ヴォヴァアウ」すぐ戻ってくる”

レフとカレンには暫らくこれで凌いでもらおう。一部の観客席では何処からあんな大きな盾を出したのかとざわめきが上がっていたが、遠目に気付かなかっただけで元から背中にも担ぐなりしていたのでは？ という説で落ち着いた。

観客の大多数はそんな事よりもこの膠着した戦いに対して変化を求めており、ガウイーク隊の一風変わったゴーレムが動いた事で何か新しい展開を見られるのではないかと皆からの期待が向けられている。

「なんだ、どうしたコウ！」

突然隊列から離れ、闘技場の壁に向かって走って行くコウにガウイークが声を掛けるも、説明している暇は無いと判断したコウは背中に”あとで！”と浮かべながら紅狼傭兵団との対戦でも見せた全カダッシュを掛けた。

壁際を移動する小さな結界に向かって一気に距離を詰めたコウは、結界破りを纏わせた腕で掃い取るように難いだ。すると空間が歪むようにその一帯だけ景色がぶれ、ヴァロウ隊の最後尾に居る筈の黒装束を纏った少女が現れた。

「ひえっ ば、バレちゃった！」

隠行術を見破られて焦る影術士リトアネーゼ。ヴァロウ隊の後方に控えていた彼女の幻影がすーっと薄くなって消える。非常に珍しい影術士の術が見られた事で俄かに沸き立つ観客達。

同時に、それを見破ったコウに対しても結界を無効化する機能が付いているのかと複合ゴーレムの計り知れない潜在能力に驚嘆している。

「あ、あうあう……」

壁を背にして巨漢ゴーレムと対峙するリトは小さな身体を壁に押し付けながらズリズリと横に移動して距離を取ろうと試みているが、足が震えているせいか上手く逃げ出せないでいる。ように見える。

チイツ　まさか結界が破られるなんて、一体どういうゴーレムなんだコイツは……とにかく隙を見て核部分でも潰せば……

怯えた素振りにはほぼ演技であり、弱々しい見た目は相手に攻撃を躊躇させたり油断を誘う彼女の武器でもあった。人道的な信条を持つ相手には特に効果的である。

しかし、コウには相手の胸の内が筒抜けなので、怯えて見せながらゴーレムや召喚獣の急所となる部位を探っているリトの思惑はバレバレだった。

『なるほどー、外見もそういう武器になるのかー』

なにやら学習しているコウ。彼女の思惑はともかくとして、見た目が細く身体も弱そうな事には変わらない。コウは加減して攻撃しようとして手を伸ばした。

「ひつ　た、たすけて……」　　あーくそ、ゴーレム相手じゃ効かないか？

「ヴオウウウ」『なるほどー』

壁に頭をぶつけないよう、リトの頭部を護りながら身体に一撃。

「あ”う!”」

軽く身体が浮く程度のボディーパーブローを打ち込まれたリトは『やっぱダメか』という思考をこぼしながら気を失い、ズルズルと崩れ落ちた。

この一連の出来事、傍目からは”術を見破られて結界を破壊された事により、無力となってしまった非力な少女の頭を鷲掴みにしたゴーレムが壁に押さえつけながら容赦ない攻撃を叩き込んだ”ように見えた。どよめく観客席。

「隊長つ リトがやられた！」

「ああ、分かっている」

ヴァロウは対の遠声による部下からの通信に応えながら、ゴーレム相手には心理的な防壁も通用しなかったかと舌打ちした。人間の人格を持っているからといって、必ずしも人間らしい行動を取るとは限らないのが、或る意味人間らしさでもあるのだ。

「仕方ねえ、やるぞ！ ストウア、指揮を執れ」

「了解！」

奇襲と攪乱で楽に行きたかったが仕方が無いと、ヴァロウ隊は予定していた戦法に切り替える。隊長のヴァロウが連撃態勢にはいつたので、副隊長のストウアが細かい指揮を束ねに掛かった。

ガウィーク隊と同じように狭い範囲で固まっていた陣形を開き、攻勢に出るべく左右に展開し始めるヴァロウ隊。

「隊長の連撃と同時に仕掛ける。あのゴーレムには注意しろ、前衛は私とカルヴァンで叩く、残りは後衛を狙え」

やがてヴァロウの機械化連弓による凄まじい連射攻撃が始まった。

26話・ヴァロウ隊との対戦【後編】

絶え間なく放たれる矢の牽制によりヴァロウ隊の突撃に合わせるしかなかったガウィーク隊は、受け止める形で迎撃に入った。

「コウ！ 早くレフ達の所へ戻れ！」

盾を構えているマンデルの後ろからコウに指示を出したガウィークは、飛び出すタイミングを図りながら魔法剣”風斬り”に魔力を通してその力を纏わせる。自身の相手はヴァロウ隊副隊長、女剣士のストウアだ。

斬り結んでいる間もなるべくヴァロウを正面に捉え、背を向けないように立ち回らなければ危ない。

やがて間合いを寄せて来たストウアに先制で斬り掛かるガウィーク。互いの剣の性質上、ガウィークは常に先手を取ってストウアの剣を弾き続けるように”風斬り”を振るう。相手の攻撃を受け止めると衝撃波を浴びてしまうので、躲すか逸らすかして避ける必要がある。

ガウィークとストウアの剣戟が火花を散らす隣では、マンデルとカルヴァンによる鏢迫り合いが始まっていた。こちらは両者共に装甲の厚い鎧で固めているので矢の牽制はあまり気にせず戦える。

前衛が激突している間、ヴァロウの矢はガウィーク隊の後衛に降

り注ぐ。ヴァロウ単独による射掛けとはいえ、機械化連弓の連射は放たれた矢が対象に届く頃にはもう次の矢が放たれているので、本当に絶え間ないのだ。

「ヴォヴァア」ただいまー！」

レフとカレンの所に戻って来たコウは重盾を受け取ると、ヴァロウの連射攻撃に合わせて突入して来た戦士と魔術士を相手取る。降り注ぐ矢から壁となってレフとカレンを護るコウは二人の傍から離れられないので、カレンの援護とレフの攻撃魔術、コウの護りで対峙するのだ。

ヴァロウ隊の戦士と魔術士は、ヴァロウの連射による援護を受けながら戦士が対魔術処理の施されている大盾で魔術士を護りつつ一定距離に陣取って突撃する隙を窺い、魔術士は戦士の後ろから攻撃魔術を飛ばして射手と攻撃術士を狙っている。

前衛と後衛でそれぞれ攻防が行なわれ、その両方に援護の矢を放って干渉できるヴァロウは与えられる影響こそ僅かながら、この戦いの場を支配しているといえた。

マンデルとカルヴァンの激突は攻守にバランスの良いマンデルの的確な攻撃と、とにかく防御力に秀でるカルヴァンとのどつき合いの削り合いでほぼ互角の戦いを繰り広げ、互いにジリジリ消耗していく。

だが内心に余裕があるのはカルヴァンの方であった。彼は今現在、戦いの場を支配しているのは隊長のヴァロウであると理解しており、このままマンデルと共倒れになっても試合には勝てると睨んでいる。そしてマンデルは同様の理由で少しづつ焦りを募らせていた。

ガウィークとストウアの剣戟は”崩波折り”の衝撃波を浴びないように立ち回るガウィークの攻めが、少しづつストウアを押し始めていた。何とか反撃に転じたいストウアだったが、”風斬り”による高速剣術の猛攻を防ぐのに精一杯で中々”崩波折り”の力を発揮できない。

『 やはり手強い 』

『 梃子摺ってんな、一発いつとくか？ 』

『 頼む 』

通信でヴァロウに合図を送ったストウアは、一旦跳び下がって距離を取りながら地面に衝撃波をぶつけて砂塵の煙幕を張った。追撃の動きを見せていたガウィークは視界を奪われて一瞬怯む。そこへ、ヴァロウからの連射が打ち込まれた。

「っ！」

相手と距離を置けばヴァロウの矢が飛んでくるであろう事は読めていたが故に、尋常ではない反応速度と”風斬り”の性能でそれらを叩き落すガウィーク。

「すげえ！」

「あのタイミングで矢を全部叩き落とすなんて……」

砂塵の向こうから射掛けられた矢を叩き落すという神業に観客が沸いた。尚も続く矢の連撃をガウィークは危なげなく捌いていく。が、その隙を付いて攻勢に出るストウア。

「信じられん事をする奴だな」

感心しながらタイミングを計って回り込んで来たストウアが”崩波折り”を振るった。

「くあつ！」

下から斬り上がる一撃を”風斬り”で受けながら横に跳んで矢と衝撃波を躲そうとしたガウィークは、躲しきれなかった衝撃波のダメージを受けて呻く。更に畳み掛けてくるストウアから振り下ろされた一撃を横への一閃で叩き逸らした。剣戟とは別の衝撃音が耳元を掠める。

今度は躲しきる事が出来たようだ。そのまま追い打ちに行こうとするガウィークに対して、再び後ろへ跳んで距離を取るストウア。これを追えば先程の二の舞、矢と衝撃波の連係を浴びる事になる。

素早く判断を下したガウィークはストウアと反対側に跳ぶと、鏢迫り合っているマンデル達の影に退避して矢の射線から逃れた。

「咄嗟の機転や状況判断も的確、流石は一流と名高いガウィーク隊長」

称賛するストウア。ヴァロウもこの連係攻撃をここまで見事に回避されるとはと舌を巻く。実質二対一の攻防なので戯れの語り掛けに応えている余裕など無いガウィークだったが、それでも不敵な笑みを返して見せた。

絶え間なく飛んでくる矢に警戒しながら戦士と魔術士を相手取る後衛組。あまり接近すると戦士に回りこまれてレフとカレンが狙われるので、コウ自身は盾を構えてその場から動かず警戒態勢を維持している。

距離を置く相手魔術士にはカレンとレフの遠距離攻撃しか攻撃手段が無いのだが、カレンの弓やレフの魔術も相手戦士の対魔術処理が施された大型の盾で防がれ、双方共に散発的な撃ち合いを続けるほぼ膠着状態。

前衛組の向こうから射掛けられる矢は中々正確に飛んで来てはコウの身体に弾かれている。偶に時間差で真上から降って来る事もあり、角度をつけて射分けているようだ。よく見ていれば躲せるものの、矢に気を取られていると戦士の突撃や魔術士の攻撃をまともに受けてしまう。

「なかなかけつちやくつかないねー」

「ヴオウウ」 そうだね”

「……状況が芳しくない」

前衛の戦いも拮抗しているようだが、このまま互いに削り合いながら消耗を続ければ完全に無傷状態のヴァロウが控えている分、ヴァロウ隊が有利である。あまり長丁場になると序盤で倒した影術士が回復して戦闘に復帰するかもしれない。そうなれば流石に厳しいだろう。

『うーん』

コウは何か打開策は無いかと考える。自分が攻撃に出るとレフとカレンが危険に晒される。試合なのでカレンとレフのどちらかを犠

性に相手の戦士を倒せば、護りの無くなった魔術士も楽に倒す事が出来るという考え方が出来ないコウ。その時、ヴァロウの放つ矢が途切れた。

どうやら矢が切れたらしく、新しい矢箱を機械化連弓にセットし直しているようだ。

『ボクも飛び道具が使えたら……博士に貰ったアレは狙いが付けられないし、盾で防がれたら同じだしなあ』

何か良いアイデアは無いものかと異次元倉庫の道具を漁りながら自身の記憶を探っていると、とある防具を見て思い浮かんだ定番な遠距離攻撃法。”定番”というイメージはその記憶にある光景から感じとれた付属する感情のようなモノより得た表現である。

「ヴォウウ、ヴァウウ」レフ、カレン、ちよつといい？」

「どうしたのー？」

「……なに？」

矢の雨が止んでいる今の内にと背中にくっそり文字を出して作戦を伝えるコウ。カレンとレフに連続攻撃を依頼。戦士を牽制して動きを止めて貰いつつ、コウは戦士の影に隠れた魔術士を狙える位置へと走り出す。

「なんだ……？」

射手と攻撃術士を護っていたゴーレムが急に斜め前方に向かって走り出した為、前衛の援護に行くつもりなのかと推測したヴァロウ隊の戦士は突撃の機会を窺って連続攻撃が途切れるのを待つ。背後の魔術士も戦士の影から反撃の準備に魔力を練り始めた。

相手戦士と魔術士を真横方向から捉えられる位置まで走り出たコウはそこで急制動、異次元倉庫より重甲冑の籠手を取り出すと

『ロケットパンチ！』

魔術士目掛けて投げ付けた。”ロケット”が何なのかは記憶にもハッキリしないが、何か凄い勢いのあるモノだというイメージはあった。

「なにっ！」

風を切りながら飛んでくる鈍い灰色の”グー”。まさか腕を飛ばしてくるとはと予想外過ぎて驚き、戦士は反応が遅れた。反撃の攻撃魔術を練っていた魔術士も意表を突かれて回避が間に合わず、重甲冑の籠手は魔術士に直撃。もんどりうって倒れる魔術士。

しまったと振り向いて固まったその一瞬を狙い、コウは戦士に向かって猛ダツシュ。

「ヴオオオオ」『それーーっ』

「っ！」

一気に距離を詰めると、ゴワンツという衝突音を響かせつつ重盾でぶん殴った。幾ら完全武装の戦士でもこんな重量のある盾で勢いを付けて殴られては一溜まりも無い。

これにより、流れはガウィーク隊に傾き始めた。

後衛を脅かす要素が大幅に減ったので前に出るコウ。ガウイークとストウアが激しく斬り結んでいる脇を通り抜け、ヴァロウに一部へこんでいる重盾を構えて連射攻撃を防ぎつつ殴りかかる。

「ちっ やってくれるぜ！」

槍に持ち替えて迎撃態勢を取るヴァロウ。機械化連弓の牽制が無くなった事でガウイークとストウア、マンデルとカルヴァンの戦闘にカレンとレフの援護が入る。ヴァロウ隊は完全に形勢不利な状況へと追い込まれた。

「ヴァアウウ」『この人、強いなあ』

重盾を絡め取って弾き飛ばしたヴァロウはパンチが届かない距離を保ちながら膝や足首を正確に狙い打つ。走り込みながらのパンチが空を切り、強烈な突き込みを足首に決められてバランスを崩したコウは倒れながらも身体を捻りつつヴァロウの方へ飛び込んで浴びせ蹴りを狙う。

ズシンと派手に土煙を上げて倒れこむ巨体。回避は出来たもののその外見からは予測もつかない攻撃に、ヴァロウはヒヤリとさせられた。

「っーか、あんなもん喰らったら首の骨がいかれちまう」

起き上がるうとしたコウの首筋に強烈な一撃を入れて仰向けに転がし、全身を突付き回す。庇う動作を見せればその部位を重点的に攻撃。

コウは身体中をチクチク突付いて来るその槍を掴もうとしたが、素早く引っ込められた。そしてまた起き上がるうとすると、重心を崩すような一撃で転がされる。起き上がれないように押さえつけながら何処か弱い部分が無いかを探っているのだ。圧倒的な実力差を実感するコウ。

だったら転がったまま攻撃だとばかりに、コウはごろごろと横に転がって距離を詰めた。

「だぁーっ くそっ なんなんだコイツは！」

足を払われてはたまらんと頭方向に避けるヴァロウ。そこへ、カレンの放った矢が飛んできたのでクルリと槍を返して払い落とす。その動作で槍の攻撃範囲から逃れたコウは今度こそ起き上がる事が出来た。

下手に突進すると転がされるのでジリジリ間合いを詰めて行く事に切り替えたコウは、じりじりとにじり寄ってはプレッシャーを掛ける。

そんな攻防が続いている内にレフの魔術攻撃による援護でカルヴァンが倒れ、マンデルはヴァロウに翻弄されながらも踏ん張っているコウの応援に駆けつける。

ガウイークとストウアの戦いはカレンの援護もあり、当たれば強力な一撃必殺の”崩波折り”に、高速剣術の”風斬り”が手数で押し勝った。

「コウはそのまま進め！ マンデルは左から、俺は右から攻める！」
「了解」

「ヴォウウ」はい”

「ちきしょーっ！」

最後に残ったヴァロウは激闘の末、コウとマンデルとガウィークの三人掛かりにカレンの援護で打ち倒した。

「そこまでー！ 勝者、ガウィーク隊！」

進行官の勝敗を告げる声が響き、闘技場にひととき大きな歓声が上がった。

「手強かった……」

「実戦だったらどうなっていたか分からんな」

大の字に倒れてゼイゼイ言っているヴァロウの周りにヴァロウ隊のメンバーが集まり、彼等の直ぐ傍で座り込んでいるガウィーク達もやれやれと一息吐きながら呼吸を整える。カレンが砂塗れになっているコウをハンカチでパタパタと掃っていた。

特に明確な交流を図るでもなく試合後の余韻に浸る時間を同じ場所と共に過ごした両グループは、やがて其々の控え室へと引き上げていく。

「またな、ガウィーク隊。戦場に出るなら一緒にやろうぜ」

「ああ、国家の紛争に絡む時は是非友軍で居たいね」

互いに今後も敵対しない事を望むという意味を含ませながら、両者は背中を向け合い試合場を後にするのだった。

27話：金色の剣竜隊との対戦

ヴァロウ隊との試合翌日。ガウィーク隊のメンバーは疲労を癒す為それぞれ宿で休んでいたり、買い物で街をぶらついたりと思っているに過ぎている。コウは例によってアンダギー博士の研究所で検査を受けていた。

「うむ、特に問題無いようじゃな。流石はワシの作品じゃ、クワツカカカカ」

複合体の疲労具合や欠損している箇所が無いかを調べていた博士はそう言っただけで自画自賛すると何時もの調子で笑って見せた。

「ああ所でコウよ、例の魔導兵器じゃが面白い仕様を思い付いたんでちょっと出してくれんか」
「ヴォウ？」

博士の要望で異次元倉庫から魔導兵器を取り出すコウ。異世界の概念を参考にして作られた内燃魔導器搭載、火炎玉連続射出機。ただ武器として使われた事はないが、内燃魔導器から射出される火炎玉は見習い魔術士が放つ火炎魔術並の威力を叩き出す。

無論、その程度の威力ではモンスター相手でも精々魔犬クラスの変異体を追い散らせられれば良いくらいだ。大層な仕掛けを施してまで組み込まれた武器としては失敗作と言っても過言ではないのだが、威力は低くとも絶え間なく射出し続けられる牽制力こそがこの武器

の特徴である。

「ちよいちよいと弄って来るからの、サヤ嬢と話してもしながら待
つとるがええ」

「ヴォウウ」はーい”

応接間で沙耶華と雑談に興じるコウ。話題はやはり武闘会の事で、
昨日の試合や明日の決勝について語られる。

”きのうのひとはつよかったよー”

「苦戦してたねー。でもコウちゃんって、結構容赦ないよね？」

緒戦で影術士を倒した時の事を指摘する沙耶華に、あれはちゃん
と加減したと説明するコウ。しかし客観的にはどのような印象で見
られていたかなど周囲の反応を教えられ、コウは『え〜、なんで〜
?』と身体を左右に揺らしてみたりする。

”まちでひととすれちがうとき、みんなよけてくれるのって……”

「あははっ それ、絶対怖いと思われてるからだよー」

”え〜〜〜っ”

ぐりんぐりと身体を揺らすその仕草が巨体なのに子供っぽくて
可愛いと、沙耶華はコウとの雑談を楽しんでいた。そんなこんなで
有意義な時間を過ごしている内にお昼を知らせる鐘が鳴り響いたの
で、沙耶華は昼食の準備に取り掛かる

”きょうはれいおすおうじこないね？”

「レイオス様？ そういえばそうね」

最近はいつも朝の内に顔を出していたのだが、今日は現れない。明日の決勝を戦う事になるガウイク隊員のコウと、試合前に顔を合わせないよう配慮しているのかもしれない等と、魔導兵器の調整が終わった事を知らせに来たサータ助手がレイオス王子の事を推察してみせた。

”明日はレイオス王子の所と対戦か？”

「強いわよ？ 王子の”金色の剣竜隊”は」

「殆ど試合開始した直後に終わっちゃってますよね」

「あれだけ装備も人材も一流で固めておればのう、クワツカカカカ」
持てる力を余す事無く使っているので瞬殺常勝できて当たり前じやと博士は笑う。派手好きな博士はレイオス王子の妥協も自重もしない圧倒的な力を存分に振るう最強部隊な戦いっぷりは結構気に入っているようだ。

”勝てるかな？”

「わはは、流石に小僧達だけでは無理じゃろ」

「腕はガウイクさんの方がレイオス王子より少し上でしょうけどね」

金色の剣竜隊は中心的なメンバーにグランダール正規軍の騎士や宮廷魔術士が所属しており、各人の練度は当然高く基本的な組織力からして一般の冒険者グループとは比べ物にならない。その上、装備も超一流のモノばかり。

防具なら対魔術処理や回復補助効果、重量軽減などの付与された甲冑。武器ならガウイクやストウアが所持しているような特殊効果の付与された魔法剣など。その他、移動補佐やら魔力を底上げする各種装飾の類など、全員が高価な装備品で身を固めているのだ。

「一応レイオス様の試合も全部みたけど、殆ど反則って感じだったよ?」

” そんなにすごいのかー”

ちなみに、剣師でもあるレイオス王子の愛剣は魔法剣”風断ち”。これは”風斬り”の上位にあたる魔法剣で、真空を纏って空気の抵抗を受け振るう事が出来る他、風系の魔術などを打ち消す効果がある。得物の相性からしてもガウィークには分が悪い。

「まあワシ的にはお主にも活躍して貰いたいところじゃがのう、あまり無理せず程々に暴れて観客共を沸かせてやるがええ」

博士はそう言って新たな機能を取り付けた魔導兵器の使い方をレクチャーするのだった。

翌日、武闘会決勝戦の日。ここ数日ですっかり通い慣れて馴染んだ感のある戦士の控え室にて、試合前に最後のミーティングを行なっているガウィーク隊の出場メンバー。隊長ガウィーク、副長マन्दル、射手カレン、攻撃術士レフ、そして複合体コウの五人。

「今日の相手はレイオス王子だ。昨日も話した通り、この試合に作戦は無い」

「ハッキリ言っただの隊相手に有効な対抗策なんて無いに等しいからな。従って、速攻と後は各自の判断に任せる」

本大会で金色の剣竜隊と戦ったグループは何れも相手に一太刀すら浴びせる事無く敗退している。確認されている攻撃パターンはまず攻撃術士より複数同時に放たれる火炎弾に、剣士が放つ魔法剣の光弾。この遠距離攻撃に合わせて突撃する闘士の攻撃と、戦士の援護。

大体これで片が付く。レイオス王子とその傍に付き従う重戦士は殆どその場から動いた事は無いが、金色の剣竜隊を纏める隊長と副隊長である二人は実力も隊内でナンバー1とナンバー2である事は知られている。

「持てる力を全て出し切っても大丈夫な相手だ。皆、怪我をしない程度に全力で行こう」

レイオス王子達を怯ませるくらいの勢いを見せてやろうと締め括り、ガウィーク達は試合場へと控え室を後にした。

「これよりー！ 王室主催、トルトリユス大武闘会決勝戦ー！
金色の剣竜隊とガウィーク隊のー！ 試合を執り行っー！」

進行官の口上と共に両グループが姿を現すと、闘技場に割れんばかりの歓声上がる。ヴァロウ隊と戦った時以上の人出と歓声に暫し圧倒されるコウだったが、直ぐに慣れて意識を試合に切り替える。

『あ、レイオス王子だ。いつもと雰囲気が違うなあ』

金色の剣竜隊はメンバーの外見から既に他の冒険者グループや傭兵団とは違っていた。戦士の甲冑や攻撃術士の戦闘服など、防具の

デザインも貴族服のように趣向を凝らした気品溢れる優雅な出で立ちで、爪先から兜の天辺までピカピカに磨き上げられている。

無数の傷とへこみだらけな装甲に手入れ用の油でくすんだ革ベルトというよく見る一般的な冒険者スタイルとは掛け離れた存在。ガウィーク隊も有象無象のグループに比べれば割と良い装備で固めた実力者集団なのだが、次元が違っていた。

レイオス王子が観客席の一角を見上げて剣を掲げるように振るうと、より大きな歓声が沸き上がった。観客の声援に応えた行為にも見えるが、彼がアピールを向けたのは見上げた観客席の一角、貴族用特別席に座る一人の少女に対してである。

「今のつて、サヤちゃんへのアピールよね」

「あんな所からよく見つけられますよねー」

「カツカツ それだけ惚れられておるといふ事じゃろう」

一見怪しげな老人にも見える白衣の魔導技師や、同じく白衣を纏った女性と並んで座る黒髪の少女。沙耶華は博士とサータ助手の言葉に肩を竦めて見せた。そして金色の剣竜隊からガウィーク隊へと視線を移し、その頭一つ抜きん出た巨体の存在感で目立っているコウに注目する。

「コウちゃん、大丈夫かな」

「心配せんでもあの中じゃ彼奴が一番丈夫じゃよ、何処か壊れてもワシが直ぐに修理してやるわい」

そう言って、博士はクワツカカ力と笑った。

響き渡る歓声の中、試合開始の合図が告げられて武闘会を締め括る最後の試合が始まった。試合開始早々、放射状に弧を描きながら飛んで来る七つの火炎弾と真っ直ぐ撃ち込まれる光弾がガウィークを襲う。

「どわっ やっぱ最初に狙われるのは俺か！」

少しでも引き付けて仲間に反撃のチャンスを作れるよう斜め前方へと躲しながら走り出すガウィーク。ほぼ同時に正面から接近してくる闘士と戦士をマンデルが迎え撃ち、レフとカレンがそれを援護する。コウはいつも通り二人を護る壁役として陣形の中で待機中。

相手闘士はマンデルの正面に踏み込んで直ぐ横に跳び、背後に回り込みながら攻撃するように見せかけてそのままコウ達の方へ向かってきた。闘士の動きに合わせて突進した戦士がマンデルと鏝迫り合いに入る。

「コウ！ 行ったぞ！」

普段の役回りが行動に染み付いているマンデルは、相手戦士との攻防で押されながらも仲間に指示や警告を出して隊員を補佐する。

大柄な割りに素早い動きを見せる如何にも闘士らしいがっちりした身体つきの男が、戦闘用グローブの装着された拳を構えて突進して来た。迎撃態勢を取るコウ。

身体を左右に振りながら突っ込んで来た闘士はコウの突き出した

パンチを低い姿勢で躲すと、複合体の脇腹目掛けて左右の連打を放った。ハンマーで岩を叩いたような硬質な音が響く。一瞬身体の動きが鈍った事に、コウは複合体がダメージを受けた事を確認した。

コウが反撃のパンチを繰り出すも、簡単に躲しつつカウンターが狙えるタイミングをワザとずらしながら普通に一撃つつ打ち込んでくる。闘士にはかなりの余裕を持って攻撃している様子が窺えた。

「ふむ、まあこんなもんか」

何度目かのパンチを繰り出したコウにカウンターのアッパーブローを叩き込んで仰け反らせた闘士は、そのまま脇を通り抜けてガウイクを援護しているカレンに狙いを定める。強烈な一撃でよるめいたコウが体勢を立て直した時にはもう闘士の間合いにカレンが捉えられていた。

「わわっ」

「失礼、お嬢さん」

素早いバックステップで距離を取ろうとするカレンだったが、あつという間に踏み込んで来た闘士の一撃を脇腹に受ける。

「カハッ」

「ヴァウア！」『カレン！』

手加減はしているであろうものの、軽く身体を浮かせて横に飛ばされたカレンは蹲るように倒れ伏した。その直後、カレンに駆け寄ろうとするコウの巨体を避けるような軌道を描いて複数の火炎弾が通り過ぎて行く。

「っー」

「ヴァウ！」 『レフ！』

相手攻撃術士から放たれた七つの火炎弾がレフに襲い掛かり、”流動の御手”で強化された防御魔法が三つまではどうにか防いだものの、残り四つの火炎弾が次々と着弾。小柄なレフの身体は強風の渦に巻かれて振り回される小枝のように弾き飛ばされた。

闘士に翻弄されて壁の役割を全く果たせなかったコウは、ロープから白煙を上げなら倒れるレフを呆然と見詰める。

ワアっと上がる歓声に振り返ると、隊の前方で光弾を放つ剣士の攻撃を引き付けていたガウィークが重戦士とレイオスの連係攻撃に倒され、相手戦士と切り結んでいたマンデルも剣士からの光弾による援護で崩されて、そこを一気に攻め落とされた。

「ええええつ ガウィークもマンデルも……みんなやられちゃった！」

博士達やガウィーク隊の皆でさえレイオス王子の隊に勝つのは無理だろうと言ってはいたが、ヴァロウ隊と戦った時のように激しい戦いを経た上でそれでも勝てなかったというような展開を想像していたコウにとって、ここまでアツサリ追い詰められるなど予想外の事態であった。

啞然とするのも束の間、カレンを仕留めた闘士が戻って来たので気を引き締める。こうなればせめて一人だけでも”金色の剣竜隊”の隊員を倒して一矢を報い、ガウィーク隊の意地を見せねばと、コウは拳を握り締めた。

「お？ やる気か？」

目的を果たしたので仲間と合流しに自陣へと戻る所だった闘士は、ゴーレムらしからぬ動きで殴りかかってくるコウにそう呟くと、前に踏み込んで攻撃を躲しつつ複合体の腹部に戦闘用グローブの一撃を打ち込んだ。並みの戦士ならその一発で沈められている程の威力。だが、複合体の丈夫さに加えてコウが痛みを感じない事もあり、身体の動きに鈍りを覚えながらも攻撃を続けるコウ。

「ヴァウアア！」『全然当たらない！』

コウの攻撃は尽く空を切り、或いは逸らされ、腕を一振りする間に三回は闘士からの重い打撃を受けてしまう。その都度、複合体の動きが一時的に鈍るので尚更当たらない上にカウンターが狙われ易く、何度もその衝撃でよろめく。しかし丈夫なので倒れない。

「さて、俺はそろそろ引き上げさせて貰うとするか」

そのうち闘士は最初の突撃で一緒に飛び出した戦士と交代して自陣の方へ戻って行った。コウの相手に飽きたのではなく、闘士の役割は後衛を急襲して無力化する事。戦士の役割はその援護なので、コウを仕留めるのは元々相棒の戦士が担っているのだ。

攻守のバランスが取れた基本に忠実な戦闘スタイルの戦士がきつちり盾を構えながら迫る。コウは戦斧を取り出して斬り掛かった。しかし、当たらない。コウの攻撃を斧頭が届くギリギリの間合いで躲した戦士は、すかさず踏み込んで手首を狙った斬り上げで腕を浮かせると、返す刃で戦斧の柄を強打する。複合体の大きな手から、しっかりと握られていたであろう戦斧がいとも簡単に叩き落とされた。

レイオス王子の周りを固める金色の剣竜隊員達は、いきなりゴーレムの手に大型の武器が出て来た事に関して何か腕に仕掛けでもあ

るのか、或いはそういう魔導具でも持っているのだろうかと考察しながら、先鋒役の戦士とコウの戦いをノンビリ眺めている。

観客達の間でも『こりゃ勝負にならないな』と、金色の剣竜隊が最後にあの特異なゴーレムをどう仕留めるのか、或いはゴーレムが何処まで粘れるのか見物しようという空気が流れ始めていた。

二本目の槍を弾き落とされたので二本目の武器となる鉄槌を戦士に向かつて振り下ろすも、横に避けながら被せるように剣を振り下ろす戦士に鉄槌の先を打たれて勢いが付き、地面を叩いた瞬間に柄と手首を素早く横薙ぎにされる。またしても武器を払い飛ばされた。

「ヴオウツッ!」「このっ!」

そのまま殴り掛かるコウだったが、戦士は盾でパンチの軌道を逸らしつつカウンター気味に突きを放つ。喉元を突き上げられたコウは大きく仰け反って一步、二歩と後ろによるめき、そこで踏ん張って体勢を立て直すも更に追い打ちの逆袈裟が右脇腹を強打した。直ぐに殴り返そうと拳を突き出すコウ。しかし戦士は既に間合いの外まで下がって体勢を整え、次の一撃を狙っている。

「ヴオウオオ……」「うっ、当たらない……」

もどかしいような何とも言えないやきもきした気持ちに呻くコウ。その時、コウの背後で倒れているカレンが脇腹を押さえて蹲ったまま囁くように声を掛けて来た。

「コウちゃん……ムリしちゃだめだよ?」

苦しそうにしながらもコウを気遣うカレン。少し離れた場所には杖を握ったままのレフが仰向けに横たわり、対峙する戦士の向こう側にはガウィークやマンデル。其々離れた場所で倒れている仲間の姿をみて、コウの気持ちにもやもやが沸く。

『なんか悔しい』

”悔しい気持ち”を深く感じ、理解したコウは『このまま負けられない』と、何か良い手は無いか考え始めた。

一方、金色の剣竜隊側は中々に強力な一撃を何度と無く浴びているにも関わらず未だ倒れる様子の無いコウの丈夫さに、どう攻略しようかと思案中であった。ダメージが蓄積し過ぎて崩壊させてしまつては具合が悪いので、部位破壊によって動きを止める方針が挙げられる。

「全壊でなければアンダギー博士が修理できる筈だし、大丈夫だろう」

「では、右足の一本でも壊しておきますか」

レイオス王子と重戦士を残して剣士、闘士、攻撃術士がコウの攻略に加わり、まるで魔物の討伐を思わせる様相を呈してきた布陣に観客達もどつやら締めに入ったらしいと、この戦いの終結に期待する。

博士達の隣で観戦している沙耶華は終始一方的に攻撃を受けているコウの様子をハラハラしながら見守っていた。

「コウちゃん、大丈夫でしょうか……？」

「うーむ、流石にアレだけ喰らうと如何な複合体でもかなりのダメージを受けとるじゃろうなあ」

「表層の装甲皮膚も、そろそろ限界が来ている様子ですね」

試合が終わったら直ぐ研究所に運んで検査と修理をしなくてはと博士達は話す。複合体は放っておいても自己修復する仕様になってはいるのだが、実際に大ダメージを受けた状態から想定通りの回復がみられるかどうかはまだ実証されていないのだ。

試合場では金色の剣竜隊の戦士、剣士、闘士に三方を囲まれ、包囲の外から時折放たれる攻撃術士の火炎弾に耐えているコウが両手に握った戦斧と鉄槌を振り回して一人で戦っている。

簡単に叩き落されないようにという工夫で両手に武器を持ったコウは同時に振るったり交互に振るって攻撃と牽制を試みるが、やはり尽く躲されてしまう。そうして集中的に足を狙った攻撃を受けるうち、身体の動きだけでなく足の動きも鈍り始めた。

複合体は攻撃を受けた場所を瞬間的に硬化して衝撃や斬撃を防いでいるのだが、同じ箇所が強力な攻撃を受け続けると流石にダメージを抑えきれなくなる。身体の彼方此方に異常が出始めた事を感じたコウは必死に考えを巡らせた。

『このままじゃダメだ』

エルメール達やガウィーク達からも教わった冒険者の心得、基本を思い出し、回りをよく見て冷静に考える。味方は皆倒れているの

で、立っているのは『敵』だけだ。今なら狙いの付けられない博士に貰った魔導兵器を使っても大丈夫だろう。

闇雲に攻撃しても無駄である事は十分に理解した。それならばと、コウは自分なりの作戦を考える。まずは包囲を抜け出す為に魔術の行使から。武器を片付けて手の平に魔力を集めると、以前にも照明弾代わりに使った事のある光源を作って適当な相手に投げ付けた。

コウが魔術行使の動きを見せた事で、包囲していた彼等は一瞬警戒を見せて動きを止める。追い詰められて切り札を出して来たのかもしれないと、コウの放った魔術に対してすぐさま防御魔術の障壁を張り、飛んできた光球を打ち消しに掛かる攻撃術士。しかし、何事も起きない。

「なんだ？」

「単なる光源のようですね、攻撃魔術の類ではありません」

「って事は、目眩まし？」

「搦め手まで使うのか、面白い奴だなあ」

目眩ましで怯ませた隙に包囲から脱出したコウを評し合う金色の剣竜隊員達。つくづく柔軟性のある奴だとコウの将来性を語るなど余裕を崩さない彼等だったが、突然ドンドンドンドンと連続する小規模な爆発音と共に無数の火球が飛来した事で緊張を高めた。

「今度は何だ！」

「これは……初級クラスの火炎魔術ですね。あの箱から撃ち出されているようですが」

「例の博士の発明品ってやつか？」

「威力は大した事ないが、この量は凄いな」

攻撃術士の防衛魔術を打ち破れる程の威力はなく、彼等の装備に施された対魔術処理の効果で火炎玉は次々と弾かれる。流石に甲冑から露出している部分に当たればそれなりに痛いので、これほどの連続射出に曝されれば防衛体勢を取らざるを得ない。だがそれだけだ。

牽制の効果はあるが殆どダメージにならない魔導兵器の弾幕攻撃に対し、とりあえず盾を持つ戦士が先頭に立つて進み始める。

魔導兵器による攻撃もイマイチ効果が無い事を悟ったコウは次の手を考える。牽制の役割は果たせているのだから、全く効果が無いという訳ではないのだ。構えた盾で火炎玉を派手に弾き飛ばしながらじりじり寄せて来る戦士と、その後方で待機している残りの三人。火炎玉の弾幕は広範囲に渡って打ち出されているとはいえ、有効射程はそれほど長くない。当たっても大して効いていない様子だが回り込もうとする動きを見せない事に、コウは彼等の油断を感じ取る。恐らく戦士がこの弾幕を止めてから再び包囲するつもりなのだろう。

これだけ一方的にやられては侮られるのも無理からぬ事ながら、コウはそこにチャンスを見出した。一对一の状況を作り出せても、ともに戦っては勝ち目が無い。それならば、少しでも効果のある攻撃を用いて意表を突き捲ればいいのだ。

コウは魔導兵器に新しく付け加えられた切り替えスイッチを確認すると、弾幕を張りながら猛然と突撃を開始した。反動が大きいので走り難いが、それでも十分な速度が出せる。集中攻撃を受けた右足はまだ大丈夫なようだ。

火炎玉を乱射しながら突進してくるコウに対して、流石にあの勢いと巨体で体当たりされては堪らんと盾を翳したままヒラリと避け

る戦士。そうしてすれ違い様に一撃入れようと戦士が剣を構えた瞬間、足を踏ん張って急停止したコウが身体ごと振り返る。

「ヴォア！」『ここだ！』

スイッチを”連続射出”から”一斉射出”に切り替え、至近距離から撃ち放つコウ。これは博士が沙耶華から聞いた武器の特徴で、ショットガンの概念を再現したモノだ。ズガガガアンという凄まじい爆発音が響き、戦士は甲冑から無数の白煙を上げて引っ繰り返った。

但し、ダメージで倒れた訳ではないようだ。控え目な威力とて複数の火炎玉を至近距離から一度に浴びせられればバランスくらいは崩す。

『えーとえーと、そっだ！ 踏むっ』

直ぐに立ち上がるうと半身を起こしかけた戦士に対し、コウは踏みつけ攻撃を見舞った。ズシンツという重い音と共に甲冑が陥没し、あまりの衝撃に戦士は気を失った。

闘技場に戦慄が走る。観客席からは歓声よりもまず戸惑いの声が上がった。

「おい、あのゴーレム一人倒したぞ……」

「まさか金色の剣竜隊からやられるヤツが出るとは」

幾ら油断があったとは言え、あの反則染みた超エリート集団から倒される者が出るなど想像だにしていなかったのだ。観客のざわめきに包まれる闘技場。その時、自陣の後方で戦いの成り行きを見守

っていたレイオス王子が動いた。

「驕る者は必ず足元を掬われる、父上の言つとおりだな」

「レイオス王子……」

「少々遊びが過ぎたようだ。代償は払った、終わらせるぞ！」

魔法剣”風断ち”を抜き放ち、攻撃の号令を掛けるレイオス。金色の剣竜隊による本気攻撃が始まる。

最初に飛び出したのは闘士だった。魔導兵器の一斉射出による面攻撃を左右に跳びながら尽く躲すと、懐に入り込んで脇腹に強烈なブロー。重い魔導兵器を抱えたままでは反撃もままならないので一旦異次元倉庫に片付けたコウは、闘士との格闘戦に三度挑む。みたひ

闘士が戦闘用グローブの中に装着している腕輪は腕の疲労を癒し続ける戦闘補助の腕輪で、絶え間なく攻撃を繰り返しても殆ど腕が疲れないという特殊な装飾品である。コウが反撃の為に振り被った腕にも攻撃を被せる事で、闘士は相手の攻撃そのものを潰して封じる。

打ち合うどころか一方的に打たれるコウ。その猛烈なラッシュで身体に異常が発生し始めた事を感じたコウは、試合前、複合体の身体に何匹かくつつけておいた小さな虫の一匹が頭に張り付いているのを確認すると、精神体で抜け出して複合体を片付け、小さな虫に憑依した。

ぐらりと弛緩したように体勢を崩したゴーレムが突然消えてしま

い、左右のパンチが空を切って連打を止めた闘士は『破壊してしまつたか?』と戸惑った。しかし欠片も残ってないのはどうかと訝しむ。

「召喚獣なら分かるんだが……」

「気をつける！ 奴は空間転移するという噂もあるぞ！」

副長の重戦士が油断するなど警戒を促がしたその時、闘士の背後にゴーレムの巨体が現れた。

次の瞬間、闘士の身体が宙を舞う。小さな虫で闘士の後ろに回りこんだコウは複合体を出して憑依すると、殴り合いでは全く太刀打ち出来ないで背後を取った一瞬を捕まえ、空中へと放り上げたのだ。大柄な闘士を軽々と投げ飛ばす複合体の腕力に、観客からどよめきが沸く。

「そう来たか、だが……っ！」

空中で身体を捻って体勢を整えた闘士は、眼下で低く腰ダメに拳を構えて力を溜めているコウの狙いが分かり、しまったと身体に力をいれた。同じくコウの構えの意味を悟った剣士と重戦士が阻止に動こうと踏み出す。しかし

「なにっ！」

重戦士はマンデルとガウィークの急襲を受け、剣士は氷塊の魔術攻撃と正確に足先を撃つ矢の攻撃に止められた。落下中で回避不能状態の闘士に、コウは渾身の一撃を叩き込む。

戦士も闘士もコウの攻撃は尽く躲したり逸らしたりして捌いていたので正面から戦っても無傷でいられたが、アンダギー博士がつく

り出した究極の魔導兵である複合体の攻撃。当たればその破壊力は凄まじい。

甲冑が砕けて6ルウカ、凡そハメートル近く吹き飛ばされた闘士は殴られた衝撃と地面に激突した衝撃で意識も吹き飛ばされた。

ここへ来て、回復したガウィーク隊が一斉攻勢に出た。”流動の御手”を扱うレフは治癒術士の真似事もこなせる。コウが踏ん張っている間に、意識の戻ったレフは細々と仲間の遠隔治癒を行なっていたのだ。

カレンが攻撃術士を狙い、レフもタイミングを合わせて攻撃。レフは相手術士の使った複数火炎弾を”流動の御手”で模倣して四つまで作り出す事が出来た。防御魔術でそれらを防ぐ攻撃術士にコウが魔導兵器を発射する。

火炎玉の弾幕と模倣火炎弾で防御魔術を破られた攻撃術士は、頭部のサークレットにカレンの放った矢の一撃を受けて崩れ落ちた。脳震盪を起こしたらしい。だがその直後、相手剣士の放った光弾がレフを襲う。攻撃態勢で防御手段を講じてなかったレフは再び倒れた。剣士は次にカレンを狙って剣を構える。

ガウィークの高速剣術に付いていけず翻弄された重戦士は只では倒れんと捨て身の攻撃を見せてマンデルと相打ちになり、ガウィークは重戦士の援護に来たレイオス王子と切り結ぶ。

「流石はガウィーク隊、やはり侮れん！」

「油断のツケは高く付きましたな！」

とはいえ、コウがあそこまで踏ん張ってくれたから回復と反撃の糸口がつかめたようなものとガウィークは含む。

”風斬り”と”風断ち”の激突は上位剣である”風断ち”の効果で”風斬り”の高速剣術が封じられ、剣の腕はガウイクの方が若干勝っていたが、何しろ装備の性能が違う。徐々に押されて行ったガウイクは結局レイオス王子に打ち負けてしまった。

コウは光弾を放つ剣士を魔導兵器で牽制しながらカレンを護れる位置へ移動しようとしていた。そこへ、ガウイクを打ち負かしたレイオスが突進して来る。”風断ち”の威力は脅威なのでレイオスに魔導兵器を向けて突進を止めるコウ。

しかしそれによって弾幕から逃れた剣士がカレンの討ち取りに動く。対魔術処理も施し、回復効果付きの甲冑で身を固めた光弾を放てる剣士に、通常装備の射手では歯が立たない。

暫らく逃げ回っていたカレンだったが、ダメージも疲労も残った身体では直ぐに息が上がる。とうとう光弾の餌食となった。

斯くして、一方的な展開から乱戦に持ち込まれた金色の剣竜隊とガウイク隊の試合は、どちらが勝つか分からない混沌とした様相を呈しながらレイオスと剣士対コウの戦いが繰り広げられる。

コウは魔導兵器でレイオスを牽制。ダメージには出来ないがある程度動きを封じる事は出来る。反対側から迫る剣士に対し、右腕で抱えた魔導兵器でレイオスの牽制を続けながら、左手に武器を掴む準備をしつつ迎撃態勢を取った。

光弾を放ちながら突っ込んでくる剣士。魔導兵器をレイオスから逸らすと一気に距離を詰められるので、狙いはレイオスのままだ。コウにはあまり光弾による攻撃の効果がないので、剣士は直接攻撃に向かつて来た。腕を振るう動作をするコウ。

「武器の出現に気をつける！」

レイオスが剣士に警告を促がす。武器を出して薙ぎ払うコウ。直前に警告を受けた剣士はすんでの所でコウの薙ぎ払いを躲すと、そのまま腕に一撃して武器を落とさせた。

この攻撃で左腕に異常が発生したらしく、飛び込んで来た剣士を捉えようとしたが上手く動かせない。そして脇腹に一突き。闘士との戦いで装甲皮膚がダメージを受け過ぎていた為、弾ききれずに剣先が少し突き刺さる。その態勢から光弾を放つ剣士。

「コウちゃん！」

「むっ、今のはかなりのダメージになっておるぞ」

「複合細胞の培養槽も必要になりそうですね」

観客席で試合の行方を見守る沙耶華は傍目からも満身創痍になりつつあるコウの身を案じ、博士とサータ助手は複合体の受けたダメージを見積もると、修理するに当たって準備の目処をつける。

剣先の刺さった部分より直接体内へダメージが通った事で身体に異常が発生し、複合体の動きが大きく鈍る。光弾を放った反動で半歩下がった剣士は更に攻撃を仕掛けようとした所へ、コウがクルリと回れ左をして身体を向けた。

魔導兵器による火炎玉の連発を至近距離で浴びるも、防具が優れているので殆どダメージにはならない剣士は、防御しながらコウの背後へと回り込む。更には弾幕が途切れた事で一気に距離を詰めてきたレイオスが迫る。

これは決まったか？ と誰もが思い浮かべた。

コウは咄嗟に魔導兵器を足元に向けて撃ち放つ。土煙が上がって視界が遮られるが、位置は把握しているので構わず突っ込むレイオス。土煙の壁を穿つ”風断ち”がその先にある標的を捉える。手ごたえあり。

土煙が晴れると、レイオスの剣はコウの背中の右腰辺りに突き刺さっていた。

「……？」

だがレイオスは『何故背中を向けているのか？』という所に引っ掛かる。その答えは、足が宙に浮いた剣士の姿にあった。コウは土煙を起こして全方位の視界を遮った瞬間、真後ろにいる剣士を掴んでいた。

「ヴオオオオツ」

コウは掴んだ剣士を持ち上げると、レイオス目掛けてぶん投げた。横っ飛びで避けるレイオス。思いつ切り投げられた剣士は地面で二度ほどバウンドすると、派手に土を巻き上げながら転がって止まった。起き上がって来る様子は無い。

ざわざわざわと観客がざわめく。戸惑い、驚愕、期待。様々な感情を孕んだ歓声が波のように広がり、膨らんでいく。

「お前がここまでやれるとは予想外だった」

気が付けば一対一の最終決戦。満身創痍なコウとレイオスの対峙”風断ち”を構えるレイオス。どうすればいいか考えるコウ。実力差はハッキリしている。複合体の身体に小さい虫はもう付いていな

い。 全身ボロボロの巨人と勇ましい王子の対峙する構図に沸く観客。

もう素早い動きが出来ないほど全身にダメージの影響が出ているコウは、僅かな動作で効果的な攻撃を繰り返す方法を考え、閃いた。

『よし、一か八かだ』

ざつと両腕を交差するコウ。警戒するレイオス。更にざつと前傾姿勢を取りながら腕を斜め上へと突き出すコウの姿に、何の構えか分からないが何かするつもりらしいと観客達は注目する。

正面で対峙するレイオスからすると隙だらけで、本当に何を狙っているのか分からない。特に魔力も感じられない。例の魔導兵器は地面に転がっているし、武器を出すにしても、この奇妙な態勢ポースから直ぐに振るえるような武器は思い当たらない。

慎重に行くなら回りこんで攻撃する所だが、戦いのクライマックス。いかにも勝負に出たといった様子で構える相手を前に正面から行けないでどうするか。というレイオスの性格が後押しする。”風断ち”を振り翳したレイオスは堂々正面から挑んだ。

コウは伸ばした腕の先から身体を支配できるギリギリまで精神体を出して距離を稼ぐと、突っ込んでくるレイオスにタイミングを合わせてそれを出した。複合体の伸ばした腕の先。何も無い空間に突如出現し、約一メートル程の落差を持って落ちて来る鋼色の巨大な影。

ゴン

「ぶっ」

重盾の直撃を受けるレイオス。というより、いきなり現れた盾に顔面から突っ込んだ形だ。

『今だ！』とコウは右腕を振り被り

「ヴオオオオオオオ」

ゴガアアンと派手な打撃音を響かせながら重盾の裏から盾ごとレイオスを殴り飛ばした。

衝撃は大分吸収されたが、体勢が体勢だっただけに完全な不意打ちとなった。ガランガランと喧しく転がる重盾。背中から試合場の砂に突っ込んで転がり、起き上がってこないレイオス。

ざわめく会場。

進行官の緊張気味な声が響き、試合の終了と勝者が告げられる。

「し、勝者――！ ガウイク隊――！」

ガウイク隊が金色の剣竜隊を破って優勝という快挙。まさかの結末に、静まり返っていた闘技場は割れんばかりの拍手と歓声に包まれたのだった。

武闘会の決勝戦が行なわれた翌日。試合で深いダメージを負った複合体は自己修復機能の実証実験も兼ねて修復過程を研究観察する為、暫らくアンダギー博士の研究所に預けられる事になった。

検査と修理も兼ねて試合後すぐ博士の研究所を訪れていたコウは、昨日から研究所の一室にて実験の手伝いなどをしている。

「おはようございます博士。朝ご飯の支度、出来てますよ」

「おおう、もうそんな時間か」

「ヴォウウアウ」 おはようー沙耶華”

徹夜で研究室に籠もっていた博士とコウは、朝食の時間を告げられて一段落つける。流石にこの老体で徹夜はこたえたと腰やら肩やらをコキコキ鳴らしている博士。コウは眠る必要がないので平気のようだ。

「昨日からずっと観察してたんですか？」

「うむ。回復速度が早いからの、目を離す暇も無かったのじゃよ」

内部の修復状況は観察し終えたので今後は表面の装甲皮膚がどの程度まで傷を消せるか、削られた装甲を元の状態まで回復できるのか否かを調べるのだと説明しつつ、博士は食事をとりに研究室を後にした。

「コウちゃんは大丈夫？」

「ヴォウヴォヴァウウ」もつほとんどなおっちゃってるよ”

観測装置に繋がれて実験用の台に横たわる複合体^{コウ}。所々に激しい戦いの傷痕が残っているが、小さい傷は殆ど消えてしまっているようだ。装甲皮膚を貫く程の傷を受けた場所にだけ、その痕跡が確認出来る。

「そつか……コウちゃん、昨日は凄かったね」

「ヴォウウ」えへへー”

コウの状態に安堵した沙耶華は暫らく武闘会やガウィーク隊の事を話題にコウと雑談を楽しんだ後、出掛ける準備があるからと言って研究室を後にする。

「ヴォアアウ？」どこかいくの？」

「うん、ちよつとレイオス様の所にね」

落ち込んでいるかもしれないので慰めに行くのだという。沙耶華はレイオスから王宮群区画に出入りできる許可を与えられており、それは今でも有効だ。レイオスが何処にいるかも大体分かるそうなの

「あの人、ああ見えてデリケートな所があるからねー」

レイオス第一王子様にその寵愛を得んと群がる貴族の御令嬢様方。双方共に少々荷が重かろうと、溜め息など吐いてみせる沙耶華の言葉から思考を読み取り、王宮群でレイオス王子と彼を追う令嬢方の予測しうる擦れ違いの有り様を想像して『なるほど』と相槌を打つコウ。

「じゃあ行つて来るね」
「ヴァアヴォウウ」” 行ってらっしゃーい”

普段着の街服より少しお洒落で質素なドレスを纏った沙耶華は馬車を使わず徒歩で王宮群へと向かう。魔術研究棟区画の通りを抜けて王宮群区画の入り口に辿り着くと、顔見知りの門番が沙耶華に気付いて声を掛けた。

「よう、サヤじゃないか」

「こんにちはー」

「変態博士の所に引き取られたって聞いたけど、元気そうだな」

「変態って言ったら可哀相ですよ」

和やかに門番と挨拶を交わして門を潜った沙耶華は、レイオスが憂鬱な気分にいる時などによく訪れていた場所へと足を向けた。沢山の屋敷が連なって巨大な立体迷路を作り出している王宮街ともいうべき広大な居住区。

ベンチの設置された広場や小川が流れている場所もあるが、ほぼ全域が室内である。暫らく住んでいた事のある沙耶華もほんの一部分しか把握していないので、知らない道に入ると迷子になる自信があった。

「近道、近道つと」

中心の王城を第一層として一番外側が下級貴族達の住む第八層。

間に公園や広場を挟んで第六層が中級貴族達の多い区画。そこを過ぎるとまた公園や広場のある第五層に辿り着く。

この辺りになると廊下も普通の石畳から大理石のように磨き上げられた床石に変わり、さらに上の層へ上がれば絨毯の敷かれた通路が続くようになる。沙耶華の目的地は第五層に点在する小さな公園のガゼボ（あずまや）であった。

沙耶華が広場沿いの廊下を歩いていたら時、大人数で移動する姦しくも煌びやかな一団と鉢合わせた。少々懐かしく、しかし再会を祝せない相手。沙耶華が王宮群に住んでいた頃にレイオス王子の寵愛云々で散々絡んできた中級から上級貴族令嬢のお嬢様方だ。

「あら？　どこの下女が迷い込んだのかと思えば」

「まあ、皆さんご覧になられて？　こんな場所に蝶婦がいましたよ？」

「卑しい売女を入り込ませるなんて、門番は何をしているのかしら」「きつと浅ましく誘惑なさったのですわ」

内心、うわちゃ〜と天を仰ぎたい気分の沙耶華は静かに会釈して立ち去ろうとした。しかし回りこまれてしまった！　彼女達がそれぞれ引き連れている侍女と使用人の集団が気の毒そうな視線を向けている。

「何処へお行きになるつもりなのかしら？」

「帰り道はあちらですよ？」

「いえ、用事があるので……失礼します」

通せんぼするように正面で並び立つ彼女達の脇を通り抜けようと、廊下の壁際に寄る沙耶華。するとまたしても正面に回りこみ、壁に

手など付いて行く手を阻むリーダー格の御令嬢が、気品溢れる優雅な笑みを浮かべながら沙耶華を見下す。

『めんどくさー……』

内心のうんざりした気持ちを表に出さず、強引に突破しようか遠回りをしようかと逡巡する沙耶華は、ふと廊下の向こうから歩いて来る人物に気が付いた。少年の従者と護衛の騎士を連れ、王族を示す衣装を身に纏った若い男性の姿。

「そこで何をしている」

「え？ ス、スアロ様！」

廊下を塞ぐように固まっている令嬢達の一団に怪訝な表情を向ける彼は、スアロ第二王子殿下その人であった。野性味のあるレイオス王子とは対照的に優男風で、良く言えば理知的に見えるが、醸し出す雰囲気は若干神経質そうな印象を感じる。

スアロ王子に気付いた御令嬢達はさっそく媚を売るべく笑顔と挨拶を向けているが、少しばかり齒切れは悪い。

何しろこのスアロ王子、レイオス第一王子との対立が表立って噂されている上に、当人達はともかく其々の背後についた門閥家が日々派閥の争いを繰り広げているので、下手に片方へ肩入れすると対立派閥の門閥家にも睨まれてしまう恐れがあるのだ。

故に彼女達も思い切った売り込みが出来ないでいた。王位継承者として確定している第一王子には寵愛を頂くべく積極的に攻勢を掛けるが、第二王子には親しくして頂く程度に留めて置くのがベターといったところである。

お嬢様方の意識がスアロ王子へ向いている隙にこれ幸いとこの場を立ち去ろうとする沙耶華。令嬢達の中に立ち去る沙耶華を気にする者は居なかったが、スアロ王子は花々の控え目なアプローチを捌きつつ、沙耶華の姿を目の端で追っていた。

『あの娘……まだ使えるかもしれんな』

お昼頃。伝書鳥を肩に乗せたカレンが研究所にやって来たので、コウは伝書鳥に憑依して複合体を離れた。ガウィーク隊は武闘会の賞金で皆の装備を一新する事にしたらしく、それぞれ注文の品が完成するまで王都でのんびり休暇を過ごすのだそう。

カレンが博士を訊ねて来たのは魔導具の調達や武具の製作依頼。それにコウのお迎えだ。王都の下街で買い揃えられる物は一般的な小道具までで、特殊効果を持つ武具の類はこうしたコネを使い、顔の利く魔導技師に依頼して直接購入した方が安くて確実なのだ。

「あたしの弓もあたらしくするんだよー」

「ぴゅーい」 そうなんだー”

時々王都のダンジョンにも下りる予定なので、コウも任意で参加すると良いというガウィーク隊長の伝言を受け取ったコウは、久しぶりにダンジョンのモンスターに憑依するのもいいかなーなどと考えてみたりするのだった。

夕刻、研究所に帰って来た沙耶華は休む間もなく夕飯の支度に取り掛かる。コウはガウイーク隊の所に戻っており、博士は複合体を検査している部屋とはまた別の研究室に籠って何やら製作しているようだ。

「ゆっくりしてていいのよ？ サヤちゃん、王子のお相手で疲れてるでしょう？」

「……サータさん、今なにか変な想像とか含んだでしょ……？」

やましい事はしてませんよとジト目を向けながら野菜を洗う沙耶華に、サータはホントかしら〜とからかったりしている。とそこへ、見慣れた伝書鳥が舞い込んできた。

「あれ？ コウちゃん？」

「びゅり」 そうだよー”

博士から夕刻頃に研究所へ来るよう言われていたというコウは、小さい容器に伝書鳥用のお水など貰いながら光の文字を浮かべた。ついでにガウイーク隊で使う魔導具なども製作済みのモノを受け取って帰る予定だという。

「おう、来ておったのかコウ」

小腹が空いて夕食の材料をつまみ食いに出て来た博士が、丁度良いので研究室まで来るようにと促がす。ちゃんと調理したモノから食べて下さいと沙耶華に叱られながら野菜っぱい何かをポリポリ齧りつつ研究室へ戻って行く博士と、その後を追うコウ。

頭や肩には諸々の事情で乗れなかったようだ。

魔導技師としての魔導具製作研究室。広いテーブルの上には作り掛けの魔導器や触媒となる色々な鉱石、用途不明な工具らしきモノなど。研究用テーブルというより作業台といった雰囲気卓上に並ぶ幾つかの道具の中から、博士は先程仕上がった魔導具を取り出した。

「ぴゅい？」それは？

「召喚獣の核となる部分、いわゆる”召喚石”しょうかんせきじゃよ。使い方を教えるでな、よく見ておくのじゃ」

博士が召喚石に魔力を流し込むと、触媒として調整された召喚石に刻み込まれている召喚獣の姿が形作られていく。通常、召喚獣用の触媒には呪術による擬似人格の付与を行なうため、相応に質の良い素材が求められる。

核部分となる触媒は必ずしも鉱石である必要は無いが、一般的には入手が容易で使い勝手も良い魔力の籠もった宝石や骨などが多く使われているようだ。今回、博士が調整した召喚石には魔導兵の技術を併用しており、擬似人格の代わりに形態維持の制御を強化されていた。

「まあ、元々片手間で研究しておったものなんじゃが、お主の身体に丁度良いのではないかと思ってる」

やがて召喚石を核として現れる年の頃は12歳くらいの外観を持った黒髪の少年。魔力で構成されて人の形を成す少年型召喚獣であった。コウは以前、複合体の性交実験で胡蝶の館を訪れた時に知っ

た戦闘目的以外の用途に使われる召喚獣の事を思い出す。

「作るだけ作ってみたんじゃが、どうじゃ？ 憑依できるかの？」
「びゅいびゅり」 やってみます”

沙耶華の容姿も参考にしてある為か異国人風の顔立ちで、静かに佇む少年型召喚獣の首裏に”穴”を確認したコウは、伝書鳥びいちゃんを肩に留まらせて憑依を試みた。人間に憑依を試した時は上手くいかなかったが、この少年は人間の姿をした擬似生命体の召喚獣。

意外とすんなり身体に入る事が出来た。ぼーっとしていた少年の瞳に生気が宿る。

「お、宿ったか。どんな具合じゃね？」
「複合体ふおぐうてあみたくにいやうごかせますいうおめあすい……ああれうえ？」

何時も通りに声も出しながら文字を出そうとしたコウは、形を成していない言葉が出た事に驚く。だが博士に聞いたところ、召喚獣は元々人型でなくとも言葉を介してのコミュニケーションを図れる仕様なのだと教えられた。

あうあうと唸っているようだった声は何度か発声練習を繰り返すうちにどうにかきちんとした言葉が紡げるようになった。

「これでみんなとことばでおはなしができるー」
「ふむ、どうやら憑依には問題ないようじゃな」

検査中の複合体は通りを歩くだけで目立つ上に、狭い店内には入れないなど街中での活動で色々と不便な面もあるので、普段はこの姿で過ごすようにしていれば普通に買物も出来る。生活環境も一変する事になるだろう。

召喚獣は稼働時間に問題があるが、この少年型はコウが憑依して

動かすことを前提に作られているので形態の維持に特化させてある分、長く姿を保つ事が出来る。コウ自身が維持に必要な魔力を集められるので魔力補助の触媒も必要なく、稼働時間の問題はそれで解決済みだ。

既に複合体を冒険者として登録しているので複合体が本体、こっちが仮の姿という少々奇妙な事になってしまっているが、複合体の検査が終われば少年型召喚獣で普段を過ごし、イザという時は召喚を解除しつつ複合体を取り出して憑依するというスタイルになるだろう。

傍目からは少年がゴーレムに変身するというような光景が見られるかもしれない。

「ハカセありがとー」

「うむうむ。早速サータヤサヤ嬢に見せびらかしてやるのじゃ」

ちなみにこの少年型召喚獣の外観は研究の進んでいる女性型召喚獣で最も人気の高いモデルの召喚石を改良したものだ。そのモデルを作ったのが実は博士である事は内緒である。

比喩ではなく、デザインしたのが博士だと分かれば利用者が萎えるという意味で、販売元から秘密にしておいて欲しいと要請があったとかなかったとか。

衣服も召喚獣の身体の一部なので魔力の接続を切り替えれば脱着や着替えが可能になっており、現在登録されているのは少年用の街服と貴族服。あと元が女性型召喚獣だった名残で女物のドレスが一緒に混じっている。博士曰く、書き換えるのが面倒だったので放置したとの事。

街服姿の少年コウが沙耶華達の元を訪れた。

「さやかさやかーみてみてー」

「え？ だれっ？」

「あら、この子……召喚獣？」

研究所の奥からトテトテと駆けて来た見知らぬ男の子を見て沙耶華は目を丸くするが、魔導技士としての実力を備えるサータは直ぐに召喚獣である事を見抜いた。

「ええっ！ コウちゃんなの！？」

「うん、ハカセがまたつくってくれたんだよ」

コウは日本語を口にする事にも挑戦してみたが、外国人がローマ字読みするような片言口調になってしまふ。どちらの言葉も舌足らずな話し方になるのは、まだコウが喋る行為に慣れていないのだからとサータは推測した。

実際のところ、何かを喋ろうとするコウから自然に出てくる言語は日本語が基本になっているのだが、召喚獣はこの世界の言語を基本に合わせて作られているので舌の動きなどにズレが生じているのだ。要は上手く舌が回らない状態なので、サータの推測も一部当たっている。

「きゃーかわいいーっ」

「むぎゅゆ」

思わず抱き締める沙耶華。と、その時、来客を告げる鐘が鳴る。昼間、お気に入りの場所で沙耶華の励ましを受けたレイオス王子が

どうにも無性に会いたくなったらしく、やって来たのだが

「だれだ、それは」

沙耶華と抱き合う少年を見て声を硬くした。

「この子はコウ君です」

「コウ……だと？」

沙耶華が少年を庇うようにギュッと抱き締めている姿が何だか面白くないレイオスはしかし、コウの名を聞いて強張った表情を怪訝なモノに変える。そこへ、ようやく夕食の席に現れた博士が簡素に説明を入れた。

「ワシが作った男性型召喚獣じゃよ。この場合は少年型じゃな」

「何故またそんなモノを」

「需要があるからじゃ」

主に三十代後半の貴婦人達から『こういうのが欲しい』という要望が匿名のアンケートに多く寄せられているという。そういえば博士はそっち方面にも精通していたなと溜め息な気分のレイオス。

「それは……さぞかし儲かる事だろう」

「なんじゃ、お主もそっちが趣味なら作ってやろうか？」

「いらんっ 俺はサヤカがいれば良い」

「どさくさに何言ってるんですかっ」

コウを隣に座らせている沙耶華の反対側へ徐に腰を下ろすレイオス。サータ助手が手際よくレイオスにもパンとスープを用意する。この日のアンドギー魔導兵器開発所はいつもよりちょっぴり賑やかな夕食会になったのであった。

29話：屋内庭園

少年型召喚獣な身体を手に入れて数日、ガウイク隊の中でもマスコットのな存在になりつつあるコウは今日も研究所にやってくる。少年姿でガウイク隊の所に帰った日は暫らくカレンが離してくれなかったほど気に入られてしまい、ダイドの胃を痛めつけたりしていた。

この頃は朝方カレンに弓を習い、昼間は研究所を訪れて沙耶華とお話をしたり博士の研究を手伝ったり。夜はレフと魔術の勉強をするといった生活サイクルが出来上がっている。

「あらコウ」

「こんにちはー」

研究所に入るとサータが何やら荷物を纏めていた。何時もの白衣ではなく、余所行きっぽいドレス風な服を着ている。普段より静かな研究所内。博士や沙耶華の姿が見えない事に小首を傾げるコウ。

「博士とサヤちゃんなら今日は研究棟の方に呼ばれてるから、夜まで帰って来ないと思うわよ？」

「あれ？ そうなんだ」

「急な呼び出しだったみたいだけど、博士の発明品の事で交渉があ

「るみたいね」

博士の研究や発明品の中で幾つか公式に採用が検討されているらしい。沙耶華を連れて行っているのは異世界の知識を参考にした発明品が関係しているからだと言いつたサータは教えてくれた。

「サータもおでかけ？」

「ええ、王宮に用事があるのだけど、あなたも来る？」

そう言いつて荷物を押し込んだ鞆を抱えるサータ。王宮群に興味があったコウは喜んで付いて行く事にした。すーっと染み出すように街服姿から貴族服姿に衣装チェンジする少年コウ。

「へーんしーん」

「便利ねえ」

着替えの手間が大幅に省ける召喚獣の外観を切り替える機能に、サータは羨ましそうな視線を向けるのだった。

馬車で王宮群区画に向かうサータとコウ。今までは犬や猫、鳥など小動物に憑依しての乗車ばかりで、普通に人として馬車の利用をした事がなかったコウは楽しそうにしている。やがて王宮群区画の門を抜けて建物の入り口前へ到着した。

「やねつきの街みたいだ」

「うふふ、広いでしょう？ 離れると迷子になるから、気をつけてね」

下級貴族の住む第八層区画は下街ほどではないが人通りも多く、広い廊下が遠くまで続く光景はさながら地下迷宮の様な雰囲気醸し出している。尤も、見通しのきく廊下はこの入り口付近のみで、沢山の屋敷が連結されて出来た王宮群は内に進むほど複雑な迷路と化する。

屋内広場や公園が設けられた第七層を通り抜け、中級貴族達の居住区が並ぶ第六層でサータが用事の一つを済ませに一軒の家というより部屋を訪ねる。その間、コウは第五層の公園を散歩しながら時間をつぶしていた。

第七層の公園では遊んでいる子供達の姿もちらほら見られたが、第五層の公園は静かで長閑だ。天井の大きな窓から太陽光を取り込んでいる屋内公園は等間隔に光の帯が下りており、光と影のコントラストを描いた光景は幻想的でもある。

「きれいだなあ」

そのうち用事を済ませたサータが戻って来たので次の場所へ向かうべく、この場を後にした。

第四層から上級貴族の屋敷や中庭が連なるようになり、この辺りからは下の層と比べてより高級感を漂わせる雰囲気作りになっていく。廊下や壁、天井に至るまで細かい装飾が施され、磨き上げられた床には一部絨毯なども見られる。

そんな廊下を並んで歩くサータとコウは、幾つかの角を曲がった

所で廊下の先に数人の小集団を見つけた。侍女や護衛らしき騎士を引き連れてこちらに歩いて来る少女の姿。薄い黄色調のドレスに王族である事を示す衣装を纏っている。

サータが廊下の端に寄って会釈すると、コウもそれに習って頭を下げてみた。ペこり。そのまま通り過ぎるかと思われた集団は、王族の衣装を纏ったドレスの少女がサータ達の前で立ち止まり、声を掛けてきた。

「……あなた、アングギー博士の所にいる助手の魔導技士ね？」

「サータと申します、エルローゼ様」

恭しく答えるサータにじつと視線を向けている彼女は、グランダール第一王女のエルローゼであった。実はスアロ第二王子の実妹でもある。エルローゼはお供の者達に少し下がるよう言い付けると、若干声を潜めつつサータに問い掛ける。

「博士があの子……サヤを引き取ったと聞いているのだけれど、今は何をしているのかしら？」

「サヤの事でございますか？ 彼女には研究所で家事手伝いの傍ら博士の発明にも協力して貰っております」

サータとエルローゼの会話を隣で聞いているコウは、沙耶華の事を色々と聞いたそうにしているエルローゼの奥歯に物が挟まったような訊ね方が気になり、彼女の思考を読んでみた。

「はあ、まったく……ようやく落ち着いたと思えばまたこんな……どうしてあの子はここの周囲を引つ掻き回すのかしら」

侍女や護衛が聞き耳を立てているのであまり突っ込んだ質問が出

来ないジレンマを抱えるエルローゼは、沙耶華が胡蝶の館を出て王宮群の近くである魔術研究棟区画に上がったことでレイオス王子が会いに行き易くなった事態にやきもきしている。

この事で兄がレイオス王子に対して何か画策するかもしれないと気にしているようだ。沙耶華に対してはあまり友好的ではない雰囲気だが、敵意も然程は感じない。コウがそこまで読み終えた時、サータとの話が終わったらしく彼女達はそろそろと去っていった。

「今の方は第一王女のエルローゼ様と違って、スアロ第二王子殿下の妹君よ。お二人ともご側室のリーザ様からお生まれになったの」「おひめ様かぁ、おうじ様ってさんにんいるんだったね」

「あら、よく知ってるわね」

「まえに聞いたことがあったし、サヤカといろいろ話してるからね」
王宮にいない王女様がいる事も知ってるよーと自分の王都に関する知識を披露するコウ。その姿は背伸びしようとしている少年のようで、サータは微笑ましい気持ちになるのを抑えきれない。

しかし、外見と素直な反応や口調などから本当に小さい子供のよくな印象を受けるが、コウは決して子供ではない事もよく分かっていた。それ故、子供に話すような内容ではない話題を振ってみたりする。

「レイオス王子とスアロ王子の対立は色々込み入った事情が噂されててね、少し問題になっているのよ」

見た目や考え方、性格の違いといった単純なモノではなく、二人の出生に秘密があるらしい等という中々危険なお話であるのだが、当のコウは興味があるのか無いのか、普段通りの様子で『なるほど

』と王子兄弟に関する裏話的な予備知識を吸収していくのだった。

王宮群の第三層は門閥家の屋敷が各家の中庭を挟んで並ぶ区画。この層に住むとある貴婦人の元へ届け物の用事でやって来たサータは、暫らく話し込むので付近の散歩でもしてきてはどうかとコウに勧める。

「中庭は自由に歩いて良い事になっているけど、周辺の建物には許可無く足を踏み入れないように気をつけてね？」
「はい」

少年コウを見る目が何処となく妖しい三十代くらいの貴婦人と何やら交渉を始めるサータ。コウは先程と同じく仕事の邪魔にならないよう、中庭に出て散歩を楽しむ事にした。

第五層の全体を埋める公園に比べると各屋敷の中庭が繋がっているという事で多少狭く感じる第三層の中庭群だが、なだらかな傾斜も含む綺麗に手入れされた芝生の広場に美しいガゼボがポツンと建っていたり、木々を一箇所に集めて小さな森のような空間を演出し、さり気無く花々で囲ったベンチが設置されていたりとバラエティにとんだ景観が広がっている。

まるでテーマ別に整理されたようなそれらの庭は一つ一つが結構な広さを誇るのだ。『何処から回ろうかな』とコウは周囲をぐるりと見渡し、小さな橋の掛かる小川の上流にある森っぽい所を探索してみる事にした。

「あ、魚がおよいでる」

小川沿いに上流を目指して背の高い草を掻き分け、木々の密集している場所へと分け入ったコウは、ふと目の前に開ける小さな空間を発見した。表からは見えない、奥まった場所に立つ木の下に作られた憩いの場らしき空間。そこには木椅子に腰掛ける一人の青年の姿があった。

「おや、ここにお客さんとは珍しいね」

子供達が公園に作る秘密基地のような、如何にも手作り感が漂う木板を張り合わせて作られた憩いの場で寛ぐ青年は、そう言って柔らかない笑みを向けた。

「ぼくはロゼス。君は何処から来たんだい？」

「ボクは」

サータ助手のお仕事について来て今は散歩中である事を説明するコウは、青年の名前に何処かで聞いたような？ と小首を傾げる。

「ああ、アングギー博士の所の……。それにしても君、よくここを見つけたね」

「かわぞいに歩いてたらここにたよ？」

「あははっ 確かに川沿いには違いないけど、普通は庭師でもなければこんな所へは入って来ないよ」

下街の子供達ならありうるけれどロゼスは笑う。木々の間に鬱蒼と茂った大人の身長ほどもある背の高い草が周囲を厚く囲むこの

場所は、意図して草むらに分け入るような事でもしない限り辿り着けない。そしてこの層に暮らす住人でそんな事をする者は子供を含めてまず居ない。

「ところで君、名前は？」

「ボク、コウっていいいます」

「コウ……？ 博士の関係者でコウという名はレイオス兄さんから聞いた事があるけど、確かゴーレムの身体を持つって話だったよな」

「あ、それボクのことだよ　って兄さん？」

レイオスを兄と呼ぶロゼス。彼は実はグランダールに三人居る王子の一人で、三番目の王子だという。コウは彼の名に聞き覚えがあったのは以前、研究所でレイオスの思考を読んだ時に拾った情報だという事を思い出した。

ロゼス第三王子はスアロ第二王子と同じく側室より生まれた王子だが、スアロ王子と比べて支持者が付くでもなく派閥が出来るでもなく、王族としての敬意こそ払われてはいるものの、ほぼ誰からも期待されていない窓際王子であった。

権力争いから一番遠い所にいるようだが、本人は今の環境に満足しているようだ。

「そうか、君が例の……色々な姿を持っているんだね。改めてよろしくコウ君、知り合いになれて嬉しいよ」

「こちらこそよろしくー」

ロゼス王子の秘密基地ならぬ秘密の憩い場で握手を交わす二人。コウはとても人当たりの良いロゼス王子と暫らくお話などして過

す事に。沙耶華の事やレイオス王子の事、博士の事から王様の事まで色々な話を聞かせて貰う。

王宮群で暮らしていた頃の沙耶華とレイオス王子の話など、二人の事情を表面と胸の内から知るコウにとって興味深い話題もあった。

レイオスが沙耶華に執着を見せ始めた頃から門閥家貴族達の間ではスアロ王子を支持する層とレイオス王子を支持する層とで対立が深まり、当人達そっちのけの衝突が起きたりしてはしばしば怪我人を出す事もあったとか。

「表立って暴力沙汰になる事はあまりなかったけど、裏では色々拗れてみたいだよ」
「なるほど」

コウが見た目や口調に感じられる印象ほど子供ではない事を見抜いているのか、ロゼスは中々に突っ込んだ裏事情的な内容を話す。

沙耶華が胡蝶の館に入った事でレイオスがあまり会いに行けなくなる、二人を取り巻く王宮群に漂っていた貴族令嬢達の情念も落ち着き、彼女達を利用しようとしていたスアロ派とレイオス派の争いも治まっていたのだが、この頃はまた再燃の兆しを見せ始めているらしい。

「スアロおうじとレイオスおうじは仲わるいの？」

「どうかなあ、二人が直接いがみ合ってる訳ではないからね。ただ、スアロ兄さんの周辺にちょっと怪しい人影が見える気がするねえ」

『冒険王に俺はなる！』と言って憚らないレイオス王子のカリスマ英雄志向に対し、スアロ王子は『真の統治者に必要なのは武と功ではなく知と文である』という持論を元に政務官を自身の支持者に加えて権力の足場固めをするなど、密かに王位継承権を狙っている

と囁かれている。

だがその活動の裏で、どうやらスアロ王子に入れ知恵をしている存在がいるらしいという噂も聞かれるのだそう。

「これから少し騒がしくなるかもしれないね」

ロゼス王子はそう言って話を締め括った。

随分長く話し込んでしまったのでそろそろ戻る事にしたコウは『またおいで』とここに来る許可をくれたロゼス王子と別れて秘密の憩い場を後にした。

中庭の出口に向かっていたコウが庭と廊下の境目に差し掛かった時、これから散歩にでも出ようとしていたのか先程の薄黄色調ドレスに王族の衣装を纏ったエルローゼ王女と出くわした。

「あら、あなたさっきの……」

少し急いでいるような雰囲気彼女は、廊下の方から響く『姫様ー?』という彼女を探しているらしい侍女達の声に一度振り返ると

「ちょっと一緒にいらっしやい」

コウの手を取って中庭の何処かへと駆け足気味に走り出した。

「どうして?」

「いいから、黙ってついて来なさいっ」

廊下から死角になる場所へと移動して木々の陰に身を隠したエルローゼは侍女達が追って来ないのを確認すると、隣で同じ様にちよこんとしゃがんでいるコウに声を潜めながら問い掛ける。

「あなた、最近入った従者かしら？ 博士の所にいるならサヤとレイオス様の事を教えなさい」

「どんなことを？」

「どんなって……だから、その、レイオス様とサヤの様子とか……どんな事を話しているかとか……」

高圧的な態度を保ちながらしどろもどろになるエルローゼ。コウが思考を読むと、彼女の抑圧された胸の内が強い思念に乗って垣間見られた。レイオス様の事が好き。でもサヤはスィーダの事もあつて嫌いになれない。そんな想いが流れ出る。

彼女の想うスィーダという名の女性は沙耶華からも聞いた覚えがあつた。

「レイオスおうじのコトが好きなんだね」

「っ！？ よ、余計な詮索はしなくていいのっ」

慌てふためく姿に微笑ましさを感じて和んだコウは、研究所でのレイオス王子と沙耶華の様子を語って聞かせた。

沙耶華自身はレイオス王子の事をさほど想っていない感じ、というより本気で好かれてると思っていないみたいだという事。逆にレイオス王子は沙耶華に心惹かれて仕方が無い様子である事など。

「あなた、レイオス様の気持ち分かるの？」

「なんとなく」

そう答えるコウに、エルローゼは同姓である事や子供だからこそ
の素直な気持ちで相手の空気を感じ取ってるのかもしれないと納得
する。

コウはこの身体の見ただ目で何かを認識、判断されたいしい事を感じ
取るが、都合が良さそうなのでそのままに。何気に武闘会でウア
ロウ隊の影術士から学んだ”外見を武器にする事”を実践していた
りするのだった。

大体の内容を話し終えると、木々の陰から出て廊下に戻るコウと
エルローゼ。中庭への入り口付近で集まって姫様搜索の相談をして
いた侍女や護衛の騎士達が駆け寄ってくる。

「姫様！ お一人で行動なさるのは控えて下さいまし、皆が心配い
たします」

「ええ、気をつけるわ」

「あの……そちらの子供は？」

「偶々ここにいたので案内をさせただけよ」

アンダギー博士の助手が連れていた従者と思しき少年に訝しむよ
うな視線を向ける護衛の騎士を気にしなくて良いと下がらせ、コウ
に向き直ったエルローゼは、今後コウが自分の周囲で動き易くなる
よう処置を施す。

「あなたの事が気に入ったわ。これから時々王宮に来て話し相手を
しなさい」

暗に情報収集の駒にする事を示すと、門番や警備の兵には話を通しておくとして告げてエルローゼは去って行く。そろそろと後ろに続くお供の侍女達は『エルローゼ様に気に入られた少年』として、コウに好奇と興味の視線を向けていた。

コウはコウで王宮群に新しい話し相手が二人も出来たと内心で喜んでいたりする。エルローゼ達を見送ったコウは今度こそサータのいる部屋まで戻ろうと廊下に入った。すると、何処からともなくサータが現れた。

「さあ、今日の用事は全部済んだわ。研究所に帰りましょう」

「はい」

「ふふっ エルローゼ様に気に入られたみたいね？」

「はなしあいてになるようにって、また来てほしいって言われたよ」

そんな話をしながら帰り道に行く二人。この時、コウに読むつもりはなかったのだが、一瞬ちらりとサータの思考から”第一段階は成功ね”という呟きが拾えた。コウはそれを今日王宮群に来た仕事に関する呟き思考の類だろうとして、特に気にしなかったのだ。

「齢五十も半ばを過ぎてそろそろ引退かと囁かれている宰相トルマージ。彼の主宰で開かれる定例会議は各門閥家当主が集まり、議題に挙げられる問題について日々話し合いが行なわれている。」

「その席にて、会議の終わりに雑談めいた雰囲気の中で語られるスアロ王子とレイオス王子の確執。王室の安泰を考えるなら二人の対立は好ましくないという意見。」

「正式な議題にするには双方の支持者による派閥の根が深く、間違はなく紛糾して話し合いにならない事が予想される為、こういった形で双方の支持者に身を置く者達への自重を促がす牽制として話題が振られていた。中立派の苦肉の策とも言える。」

「だが、主宰を務めるトルマージは王子達の対立に関して話題を出すこと自体に否定的な態度を示した。」

「私としましては、あまりそういった事を周りが口にすべきではないかと」

「宰相殿は王子達の対立をこのまま見過ごせとおっしゃるのか」

「スアロ王子殿下が展開して支持を広げている持論は、まるでレイオス王子が時期国王に相応しくないという物言いにも取れる」

「このまま放置しておくとお二人の対立はますます大きくなるのでは？」

何か対策を講じた方が良いのではないかという出席者達の声に対し、宰相はとにかく周りが必要以上に騒ぐ事の無いよう警告すると今日の会議をお開きとした。さっさと退出する者達がいる一方で、不満を残す者達は一塊になってひそひそと密談を交わす。

そんな会議室の光景を一瞥しつつ、宰相トルマージは会議室を後にした。

深夜。王宮群の中枢、第一層となる王城の一角にて、スアロ王子の自室を訪れている仮面を付けた魔術士らしき風貌の男が今日の門閥家定例会議で王子の対立について意見が出ていた事などを説明し、今後の活動方針について見解を述べる。

「末端の貴族を含め既に四割近くの支持者を得ておりますれば、今後の支持者を増やすにおいてあまり目立たない方がよろしいでしょう」

スアロ王子は半年ほど前よりこの仮面の男から王宮で足場固めを行なう為のアドバイスをを受けていた。王族の自室に侵入して自身を売り込んで来るだけの事はあり、彼のもたらす情報は非常に精度が高く、成り行きの予測も正確だった。

一時期、支持者同士の対立が激化して問題になり始めた時も、レイオス王子が執着する娘を胡蝶の館に送るなどの工作を成功させて事態の沈静化に貢献している。当時あれほど騒ぎが拡大したのは、

件の娘がレイオス王子の寵愛を得たとして双方の支持者が狂乱を始めた事にある。

レイオス派は何処の馬の骨とも知れない娘、読み書きはおろか言葉すらまともに通じない異国の娘を妻に娶るなぞトンでもないと反対する者が少なく無く、どうにか別れさせようとあの手この手の画策を始めた。

スアロ派はレイオス王子の王族としての評判を下げるチャンスとばかりに二人の仲を煽る企みに腐心し、コレに貴族令嬢連合が加わって互いに自分達の目的に利用しようと策略合戦が始まってしまい収拾が付かない状態になって行ったのだ。

「以前の時は支持者達の暴走で色々と活動にも支障が出ていたが、こちらの地盤も固まっている今なら然程の混乱も起こるまい」

貴族達の注目を更なる支持者集めから逸らせる方法としてスアロは沙耶華を利用出来ないかと考える。レイオス王子と沙耶華が関係を持つ事については、沙耶華が胡蝶の館に入った事で反対派が若干だが減っている。

何故減ったのかと言えば、国王レオゼオスの側室で第三王子と第二王女を生んだ元蝶婦であるアイラの存在が影響していた。

素性の分からない娘だった沙耶華は蝶婦になる事で一応の”素性”を立てると、今や色んな意味で有名な魔導技師アンダギー博士に身元を引き受けられて微妙なれど確かな立場を得た。

しかも異世界からの来訪者であるらしい等というレオゼオス王に気に入られそうな経歴まで明らかになっている。

「兄上はあの娘に随分入れ込んでいるようだ」

「では、何か手を考えましょう」

仮面の男はそう言って会釈すると、部屋の隅を覆う闇に溶け込むように消えた。

同じ頃。王宮上階の廊下沿いにあるテラスで語らう二人の貴婦人。王妃エリシユオーネと元蝶婦の側室アイラ。

控え目で大人しく、少し身体の弱いところがあるエリシユオーネとは対照的にバイタリティー溢れる女傑的なアイラは、よくエリシユオーネの世話を焼く形で一緒にいる事が多い。

家が没落して蝶婦になる以前、令嬢だった頃からレオゼオスと直接面識のあったアイラは、エリシユオーネとも友人関係だったりする。夜の王宮群庭園を眺めながら雑談に興じる二人。そこへ、通り掛かったリーザが声を掛けて来た。

「こんばんは、ご一緒しても宜しいですか？」

第一王子レイオス、第二王子スアロと第一王女エルローゼ、第三王子ロゼスと第二王女スィーダの母達が顔を揃える。この三人が茶会などを共にするのは珍しい事ではなく、レオゼオス王の庇護の下に理想的な関係を築いていた。少なくとも、表面上は。

王妃と側室、三人の母親は最近の王子や王女達の事を話題にしても、やはりレイオス王子とスアロ王子の対立には触れない。

「そういえば、先日の武闘会でゴーレムの一撃を受けていたようだ

けど、身体は大丈夫だったのかしら」

「ふふ、あの子は父親に似て丈夫なので、問題ないみたいですよ？」

レイオス王子の事を気にするアイラに、エリシユオーネはクスツと笑ってそう答える。するとリーザがレイオス王子の動向について例の異国の娘に熱を上げているらしいという話がまた王宮内で広まっていると、沙耶華の事を話題に振った。

「先日も王宮の上層に呼びつけていたらしいと侍女たちが話していたのを聞きましたわね」

「まあ、女癖まであの人に似たのかしら」

「以前のような騒ぎにならなければ良いのだけれど……」

苦笑するエリシユオーネに、割と一途な感じはするけれどとアイラがフォローなど入れたりする。そんな穏やかな夜のお茶会であった。

王都での活動範囲を王宮群の上層にまで広げたコウは、早朝はカレンと弓の練習。手取り足取りべったりで教えてくれるカレンと練習を始めると、近くでダイドもマツスルなトレーニングを始める。それをリーパやデイス達がいやにや眺めるといふ光景が展開される。

その後、研究所に向いて沙耶華とお話をしたり、博士の創作意欲を刺激したりして昼までを過ごす。博士は先日魔術研究棟に呼ばれた件で内燃魔導器を使った自動射出機の連射性能が着目され、魔

術の行使が苦手な一般兵士に手頃な飛び道具として持たせられないかという上からの依頼で射出機に改良を加える研究に取り組んでいる。コウの魔導兵器にも逐一反映されるので、地味にバージョンアップを重ねていた。

昼頃から王宮群上層の中庭にある秘密の憩い場でロゼスとお茶など嗜みながら難しいお話をしてみたり御土産にお菓子を貰ったりと、ほぼ毎日通っている。沙耶華と顔見知りな王宮群の入り口に立つ門番にもすっかり馴染みの少年になってきた。

隔日で第三層の中庭に下りて来るエルローゼとも会話を楽しんでいる。

「そう、あの博士は今そんな研究をしているのね」

「きのうも騎士の人たちがきていろいろ話してたよ」

当初レイオスの事ばかり訊ねていたエルローゼは、沙耶華の事や研究所での出来事などを聞くうち徐々に博士の発明研究にも関心を向けるようになり、冒険者向けの魔導具の話からレイオス絡みで冒険者の活動に関しても興味を示し始めていた。

夕刻まで王宮群に滞在し、夜はレフと魔術の勉強をして過ごす。

そして皆が寝静まる深夜から明け方に掛けて、コウは一人街の外へ出ると、以前ガウィーク隊の皆と訓練をした外壁裏の空き地で攻撃魔術の練習をしたりするのだ。コウの王都での生活は概ねこんな感じであった。

その日、何時ものように研究所にやって来たコウは複合体の検査が全て終わったと聞いて引き取る事にした。装甲皮膚の細かい傷もすっかり消えている。研究所前の広場で試し憑依をして調子を見た後、今日はガウィーク隊が王都のダンジョンに下りる日なのでついて行く事に。

「しばらく話し相手ばかりしておったからナマっとるじゃろ、存分に暴れてくるのじゃ」
「ヴオウ」 うんっ”

王都のダンジョンには薬士のフランチェに連れられて地脈草などの採取に訪れた事がある。特に危険なモンスターも出てこない浅い階での活動だったので、バラッセの街のダンジョンに居た頃のような戦いはまだ経験していない。複合体での実戦経験を積むのに丁度よさそうだ。

正規軍特別訓練施設の近くにある王都のダンジョン前には訓練に赴く正規兵の部隊や探索許可書を貰った冒険者グループに混じって、ガウィーク隊のメンバーも集まっている。今日の探索に参加するのはガウィーク隊の中でもまだまだ未熟な若手である魔術士のデイスや、見習いの者達であった。

ズシンズシンと足音を響かせながら現れた複合体コウに、馴染みのガウィーク隊メンバーは『良く来たな』と笑顔で手を振って歓迎し、居合わせた余所の冒険者グループや正規兵部隊の者達は先日の大武闘会で一躍有名になった噂のゴーレムの登場に興味を惹かれているようだ。

「よし、揃ったな。今日は地下三階まで下りる予定だ。攻撃主はデイス、お前が務める。他は訓練通りやって自分の役回りを見極める

んだ」

ガウイク隊長から出発前に役割分担などの指示を受け、王都のダンジョンである地下遺跡へと足を踏み入れる。ちなみにコウの役割はやっぱり壁役なのだが、イザとなったら近接戦闘から攻撃魔法や回復魔法もこなせる万能型の便利屋だ。

尤も、まだ成長途中段階なので現状の実力では器用貧乏以上、万能未満といったところであった。

一階に下りた所で正規兵部隊は正規軍しか入れない訓練用エリアへと移動を始め、冒険者グループは採取の仕事で来ているらしく実験動物の分泌物や地脈草の取れる部屋を目指してひらけた通路を進んでいった。ガウイク隊は更なる地下へと繋がる階段のある場所に向かう。

王都のダンジョンに現れるモンスターは他の街などにある一般的な出入り自由のダンジョンと違い、殆どが魔法によって生み出された実験生物の類なので、ほぼ魔法しかいないといえる。

稀に迷い込んだネズミやコウモリなど小動物の変異体もいるが、実験生物のひしめく環境が繁殖に適さないらしく数が増えない為、滅多に遭遇することは無い。

そして、王都のダンジョンが他のダンジョンと大きく違う点は”集合意識”による魔物の意思統率という支配がなされていない事だ。端的に言えば、王都のダンジョンには”集合意識”が存在しないのである。

集合意識の影響により単なる自然の洞窟が危険なモンスターの巣窟になってしまった場所と違い、王都のダンジョンは遺跡を利用して人為的に作られた地下迷宮なのだ。

「ミラーが二体とヘビグモ一体だ、どう処理する？」
「ええと、まずヘビグモの本体から」

ガウイークの補佐による問い掛けにそう答えながら攻撃魔術の行
使に入るデイス。だがガウイークは半分正解だと内心で呟き、コウ
に目で合図を送る。”護れ”の合図を受けたコウはデイスが魔術を
放った瞬間、前に出て盾を構えた。

「あ」

その意味を理解してからデイスは自分の判断ミスに気付いた。
”ヘビグモ”を狙って放たれた攻撃魔術は”ミラー”の横入りによっ
て吸収され、三倍返しの攻撃魔術が撃ち返される。それらを尽く盾
で防ぐコウ。

魔法生物のミラーと合成魔獣のヘビグモ。ヘビグモは八頭蛇蜘蛛
が正式名称で、蜘蛛の身体から八本の蛇が生えたような姿をしてい
る。蜘蛛の本体が非常に素早く、八本の頭のうち一本は毒を持つ。
毒を持つ頭には斑模様の色が付いているので、先にそれを潰せば比
較的安全なモンスターでもある。

ミラーは丸い肉塊のような塊が三つ、管で繋がった奇妙な姿の魔
法生物で、魔術をぶつけるとそれを吸収して同じ種類の魔術を撃ち
返してくる。吸収した分だけ元の魔術より威力は落ちるが、三つの
丸い本体から其々一発ずつ撃ち返される為”三倍返しのミラー”と
呼ばれている。

面白い事に、治癒魔術をぶつけても同じように撃ち返してくるの
で立ち回り次第では大いに役立つ。物理攻撃には滅法弱いが、接近
戦を挑む場合は丸い本体から一つずつ潰すようにしなくてはならな
い。うっかり管を切断すると切り離された本体が爆発するので結構

危ないのだ。

「ああいう構成の場合は先にミラーの管を撃ち抜いて誘爆を狙うのもいい」

「す、すみません……」

ガウイクが立ち回りのアドバイスなど行なっていると、ドーンという爆発音が響いた。コウが接近してきたミラーを盾で押し返ししながら斧で薙ぎ払ったのだが、その際管から切り離された本体が爆発したのだ。

「ヴォウアウ」びっくりした”

「あー、先に教えておくべきだったな」

通常なら全身鎧を装備した戦士でも軽く吹き飛ばされる程の威力があるのだが、丈夫さに関しては折り紙つきの複合体で且つ大きな重盾まで構えていたコウは、爆風に揺らぎもなかった。先程から足に噛み付いているヘビグモをぺいっと蹴飛ばして皆の所に戻る。

「よし、ミラーが一体と手負いのヘビグモだ。上手く処理してみせろ」

「は、はいっ」

デイスと見習い達は改めて戦闘態勢に入ると、アドバイスを活かした戦いに集中するのだった。

三階へ続く階段のある場所まで来た時、ガウイク隊のパーティーは通路の隅にボンヤリと発光しながら浮かぶ白い大きな塊を見つけた。

「ヴォウウア」何か浮いてる”

「ボーか。いい所で遭遇したな、捕獲しよう」

「ヴォウ？」 “ボー？”

”ボー”とは通称で正式名称は”治癒クラゲ”。直径一メートル程の水クラゲのような魔法生物で、ダンジョンの中を浮遊しながら漂っている。攻撃性は無く、餌を与えると治癒の光粉を放つ。見つけた時は紐をつけて連れ歩く事で回復係りの負担を減らす事が出来る。

治癒の光粉は効果が無差別なので後衛に置きつつ、戦闘終了後に餌を与えるのがセオリーだ。時々モンスターが連れ歩いている事もあるので、その場合は先に仕留めるか突っ込んで行って奪い取るかという二択になるが、大抵は奪取が選ばれる。

新鮮な餌ほど光粉の量も多く、偶に治癒光粉の結晶である治癒石を出す事があるのでそれを目当てに探索している冒険者もいるらしい。地上に連れ出す事は出来ないが、入り口付近まで連れてきてこれから探索に向かう冒険者パーティーに譲るといいう使い方もある。

死ぬと液状化して消える為、素材も特に良い物は取れないので率先して狩られる事はない。謂わばラッキーモンスター。ちなみに”

ボー”の通称は『ボーー ……』と鳴くから。

『そんなモンスターもいるのか』

ボーに紐をくくり付ける作業を見習い達に指導しながら教えてくれたガウィークの説明に感心するコウ。憑依できるのかな？ と憑依の入り口となる”穴”を探してみたが、ボーにはそれらしい”穴”が見つからなかった。

『もしかしたら、生き物じゃないのかもかもしれないなあ』

その後、地下三階で順調に探索訓練を続けたガウイーク隊は昼過ぎ頃には地上に引き上げ、今日の反省点などをミーティングして解散となった。コウも幾つか学んだ事があり、どうやら王都のダンジョンにしか生息していない魔法生物全般が憑依不可らしい。

「さて、宿に引き上げるとするか。コウはどうする？」

「ヴォヴァ　　”　ボクは　　”

ふっと複合体が消え、召喚の光と共に少年コウが現れる。

「おつきゆうぐんに行ってみるよ」

「そうか」

こつちが本体じゃないのか？ と常々思い始めた気持ちを込めつつ苦笑するガウイークは、元気に駆けて行くコウ少年を見送るのだった。

王宮群の入り口にやってくると、何時もの門番が声を掛けてくれる。

「よう、今日は遅かったな」

「みんなとダンジョンに行ってたんだ」

「へえ、そいつは頼もしいな」

はっはっはと笑う門番は、実は少年コウが召喚獣で複合ゴーレムの中身と同一の存在であるという事を知らない。彼に限らず、王宮群で少年コウを見知っている使用人や侍女達、衛兵の中でもコウの正体を知る者は少なかったりする。

わざわざ触れて回る必要もなく、コウの事を知っているレイオスやロゼスも会うのは研究所やら秘密の憩い場などあまり人目に付かない閉じた場所なので、会話の内容から知られたりという事も無いのだ。

博士がその場の思い付きで身体を作って与えたりした事も正しい情報が広まらない原因になっており、見た目や言動の子供っぽさに加えて”アンダギー博士の所に仕える従者らしい”という認識が只の子供だろうという判断を生んで思わぬ”謀報の目”も欺いていた。

第三層の中庭を目指してトテテと廊下を駆け抜けるコウ。時折擦れ違う使用人達は、エルローゼ王女と呼ばれている何時もの少年かと微笑まじげな様子でそれを見送る。普段と変わり無い、ここ最近の王宮群で見られる穏やかな光景。

「おそくなつちやつたなあ」

ようやくエルローゼとお話をする中庭に到着したコウは、少し奥まった場所にあるベンチを目指す。エルローゼがコウとの会話をあまり人に聞かれたくないという事で、周囲を木と草に囲まれ、傍に小川も流れる花々に囲まれたベンチを密会？の場所に行っている。

「あ、いた」

「あ、来た……遅いわよ！　いつまで待たせるつもりなのっ」

ベンチの前でうろつくと歩き回っていたエルローゼはコウを見つけるとぱつと顔を綻ばせたが、直ぐ不機嫌な顔に戻った。が、これは何時もの事なのでコウは気にせずお話に入る。

「きょうはダンジョンに行ってたんだよ」

「ダンジョン？　どうしてまたそんな危険な場所に……？」

コウが修理と検査を終えた複合体のリハビリがてら、ガウイーク隊のメンバーと探索に行つて来た事を話そうとしたその時、ざくざくと地面を歩く足音が近付いて来た。その方向を振り返ると、フリードを目深に被つた黒いローブ姿の男が立っている。

「……？　何者です、ここは暫らく立ち入りを禁じているわ。直ぐに去りなさい」

「ふっ」

エルローゼが立ち去るよう言い付けると、男はニヤリと笑みを浮かべて手に握つた何かを翳す。コウはそれが”召喚石”だと気付いた。魔力を流し込まれた召喚石が発光しながらその中に刻まれる召喚獣の姿を形作る。

やがて発光が治まると、そこには槍のような鋭い角を額に持つ一角狼型召喚獣の姿があった。

「！？　刺客……っ」

「いかにも」

さつと青褪めて後退るエルローゼに一角狼を嚇ける黒いローブの刺客。低い態勢から飛び出した一角狼はエルローゼ目掛けて突進す

る。硬直して立ち竦むエルローゼの細い体軀をその鋭い角で貫かんとした瞬間、間に割って入る者がいた。

「コウ！」

見開かれたエルローゼの瞳に、小さな身体を角で貫かれたコウ少年の姿が映る。少年を串刺しにした一角狼がガールと唸りながら首を振り上げると、人形のように持ち上げられた少年の身体はそのまま草むらへと放り込まれた。

「クク……大人しくしていれば巻き込まれずに済んだものを」

「あ……ああ……なんてことを！」

「自分の心配をする事だ」

じりじりと震える足で下がって行くエルローゼを追い詰める一角狼。今度は外さないと狙いを定める。

「恨むなら野心を持った兄を恨むんだな」

「兄……？ あなたは、まさか」

恐怖と困惑に驚愕が入り混じった表情で男を睨むエルローゼ。一角狼が飛び掛かる。そこへ、草むらから飛び出したコウが一角狼の横面に体当たりをかました。角の狙いが逸れてベンチの背凭れを貫いてしまった一角狼は、後ろ足で踏ん張りながら引き抜こうともがいている。

エルローゼを庇って黒いローブの男の前に立ちはだかる少年。その身体には穴があいたままだ。

「なんだ、このガキ……」

コウの存在に異常さを感じ取ったのか、少し怯んだ様子で一步退くローブの男。

「コウ！ 無理しちゃダメッ あなた刺されたのよ!?」
「だいじょうぶ、さがってて」

そう言っ腕を空に翳したコウが発光する。頭上に伸ばした腕の先からなるべく高い位置まで精神体を抜け出すと、召喚獣の実体化を解除。この時、身体を構成していた大量の魔力が一気に四散する影響で眩しい光が放たれた。エルローゼやローブの男も思わず閃光から顔を背ける。

そしてコウは異次元倉庫から複合体を取り出して憑依。ズシンという重い響きと共に閃光の中から現れるゴーレムの巨体。

「な、なに!」
「うそ……」

少年がゴーレムに変身した!? そんな驚きも束の間、ようやくベンチの背凭れから角を引き抜いた一角狼が、どちらをターゲットにすれば良いのかと召喚主に問いを向ける。ローブの男は一瞬迷ったが、当初の目的であるエルローゼ王女を傷つけるよう指示を送った。

「ガアルルル!」

エルローゼ目掛けて矢のような勢いで突進する一角狼だったが、武闘会での戦いを経て一回り成長したコウと複合体には十二分に捕捉可能な動き。足元を素早く駆け抜けて行こうとする一角狼の首根っこをがっしと捕まえたコウは、そのまま高々と掴み上げると

「ヴオオオオオオ」

ズシイイン　と地響きを伴う渾身の力で地面に叩き付けた。大きく陥没したクレーターの底で、ダメージが許容量を超えた一角狼は召喚が強制解除されて閃光と共に四散する。後には一粒の召喚石が残った。

「……コウ、あなた」

「ヴオアウ？」　大丈夫？”

「え、ええ……私はなんとも無いわ」

「ヴァウオオ」　さっきの人、逃げちゃったね”

言われてハツとなり、周囲を見渡すエルローゼ。黒いローブの男はいつの間にか姿を消していた。召喚獣と複合体の戦闘による轟音などから異常事態に気付いた警備兵やエルローゼの御付きの者達が現場に駆けつける。コウは念の為、複合体のままエルローゼの傍に控えた。

残された召喚石は護衛の騎士達に渡され、持ち主などが調べられる事になった。

白昼堂々、王宮群の上層で起きたこの事件により、第一王子が第二王子の妹王女を狙って警告か？　という噂が実しやかに囁かれる中、王子達の対立激化を危ぶむ声が王宮中で広まりを見せ始めている。

「さて……少々予定と違ったが、概ね計画通り。次は」

この事態を仕組んだ者が、王宮の何処とも知れない暗闇で独り呟いた。

31話：実験部隊

第二王女エルローゼが王宮群内で何者かに襲撃されるという騒ぎが起きた日の夜、騎士団が総出で犯人捜しを行なっている一方で急遽集められた定例会議の出席者達が、普段の会議では表立って取り上げられる事のなかった王子達の対立について意見をぶつけ合っていた。

とりわけ中立派としてレイオス派、スアロ派の双方に自重を促がすよう牽制していた勢力からの懸念が強く、由々しき事態が起きた事に対して『そら見たことか』と、問題に触れないよう執り成していた宰相に突っかかる者もいる。

しかし宰相トルマージは普段と変わり無く、落ち着いた対応と言えば聞こえは良いが、その実のらりくらりと云った雰囲気疑問や追及を躲しつつ紛糾する会議を収める事に努めていた。

「私としましては、事件の概要がはつきりするまでは静観しておくのがよろしいかと」

王子の対立を煽る者の仕業である可能性を指し、乗せられないようにと注意を促がす宰相。この会議も事態についての話し合いが目的で開かれたのではなく、事件に関してあまり騒ぐなという王からの御達しを伝える為のモノであった。

「王は傍観なさるおつもりなのだろうか……」

グランダールの行く末を憂う門閥家の一人がそう呟いた。

王宮群の中心に聳え建ち、王都トルトリユスの全域を見渡せる城の最上階付近、王の間のテラスから西方の地を眺めている熟年男性。国王レオゼオスに、王妃エリシユオーネが声を掛ける。

「大臣達が騒いでいますよ？」

「構わん。この程度の工作でどうにかなるような息子達ではない」

ふつと口の端に笑みを持たせつつ、鋭い眼光を持つ瞳は真っ直ぐ西の大地を見詰めている。その隣に並んで同じ方角を眺めるエリシユオーネは微かに眉を寄せながら問う。

「やはり、また？」

「ああ、じきに動きを見せるだろう」

自身の考えを理解している妻の問いに肯定を返すレオゼオス。彼が見詰めるのは西の帝国ナツハトム。何度と無くグランダールの大地に侵攻を試み、その都度領地を奪われたり奪い返したりという戦いの歴史を重ねて来た相手である。

レオゼオス王の代になってからは魔導技術を発展させたグランダールの連戦連勝で、国境での小競り合いは偶にあるものの最近は侵攻の気配も無く、平和が続いていたのだが

「私の代で決着を付けておきたかったのだが、向こうもそう簡単に折れてはいられないか」

西方からの吹き荒ぶ風に戦の気配を感じ取るレオゼオスは、そう呟いてマントを翻した。

王宮での騒ぎを余所に魔術研究棟の研究者達はいつも通りで、普段と変わりなく自分の研究に没頭している。アンダギー博士も例に洩れず、研究所前の広場では窓枠を掲げて兵士の後について歩く複合体の姿を観察するという研究を進めていた。

あれはいつたい何の実験なんだ？ と広場の様子を見物に来ていた騎士達が揃って首を傾げている。

改良に改良を重ねて性能を向上させた内燃魔導器とそれを内蔵した自動射出機、その名も『魔導小銃』。沙耶華が持つ異世界の知識より生まれた魔導兵器は魔術士の杖を水平にして杖先を相手に向けるような構え方で使う飛び道具で、見習い魔術士が放つ火炎魔術より低い程度の威力しかなかった火炎玉も今や安物の革鎧クラスなら撃ち抜ける程の威力を誇る。

博士は軍に魔導小銃を導入させるに当たって十分な威力を持つ魔導小銃を単に一般兵の手頃な飛び道具とするのではなく、弓兵部隊のように魔導小銃を専門に扱う部隊を用意するという発想を提案し、即日レオゼオス王より許可が下された。

新たな兵種設立に向けて実験部隊が編成され、研究所前の広場でその運用法を模索していたところ、魔導小銃を持って走る兵士を見

たコウが何か記憶に引っ掛かると訴えた。

「どこかで見たとがあるような気がするんだけど」

「ふむ、とりあえず覚えている事を教えてくれんかの。何でも良いぞ」

博士にそう促がされたコウは欠けた記憶にある光景から四角い枠の中で魔導小銃に似た武器を持つ甲冑の戦士が鉄の巨人と戦ったりしている様子を描き出した。博士はそこから甲冑を纏って火を噴く魔導兵器らしき武器で戦う戦士達の姿を窓から見下ろしているような構図を再現。

コウに窓枠を正面に掲げてそこから覗き込むようにしつつ、実験部隊の一兵士について歩き回る事で自身が持つイメージを刺激するという方法を用いて記憶の発掘作業を行っていた。そこへ、昼食の準備が出来た事を知らせに沙耶華が研究所から顔を出す。

「博士ー、そろそろお昼ご飯の時間ですよ　って、コウちゃん何してるの？　それ」

「おう、飯か」

「ヴァウオウ」　なにかおもいだしそうなんだ”

一先ず休憩という事で実験部隊の兵士達には軍施設へ昼食をとりに戻らせ、博士は研究所の食堂に向かう。コウは少年型に身体を変えると、自分が描き出した参考図を沙耶華に見せて何か思い当たるモノは無いか尋ねてみる。

「こんなかんじのなんだけど」

「……これって、テレビゲームじゃない？」

「てれびげーむ？　げーむ……ゲーム……あ　」

覚えのある言葉の響きに、コウはこの世界で目覚めてから恐らく初めて人の姿を見たバラツセのダンジョンでの出来事を思い出す。憑依していた大ネズミが矢に射抜かれた時、初心者グループっぽい彼等を最初に目にした時に思い浮かんでいた幾つかのキーワード。

「ゲーム！ そうだよ、ゲームだっ」

”ゲーム”というキーワードから様々なイメージが浮かび上がったコウは少年型召喚獣を解除して再び複合体に憑依すると、忘れないうちにイメージの中にある攻撃法や移動法をメモに記したり、実際に試してみたりし始める。

「博士に見せなくていいの？」

「ヴォヴァウ」あとでみせる”

なにやら魔術を行使しようとしているらしく、魔力を集めながら地面に足を投げ出してドスンと座り込んでいる複合体コウの姿は子供が砂場で遊んでいる風にも見え、沙耶華は微笑ましい気分にくスツと笑った。

研究所内の広間で博士達が食後のお茶を楽しんでいる所へ、もはや恒例のようにやって来たレイオス王子。今日は珍しく護衛らしき人物を二人ほど引き連れている。やはり例の事件が関係しているのだろうか、来訪者にお茶を用意しながらボンヤリ考える沙耶華。

「俺の部下をお前の護衛につける」

まずはそのお茶に手を付ける前に沙耶華の手を取って口付けるレイオスはいきなりそんな事を言った。

エルローゼの件でスアロ派か、スアロ派の報復を装う何者かの襲撃があるかもしれないので身の回りに気をつけるよう沙耶華に注意を促したレイオスは、金色の剣竜隊から闘士と戦士を護衛に付けるという。直属の腕利きであるこの二人が護るなら安心というわけだ。

武闘会では前衛コンビとして活躍した闘士と戦士。金色の剣竜隊の中でも固定メンバーとして長い彼等は沙耶華とも面識があった。軽く会釈する二人に沙耶華も応える。

「でも、わたしなんか狙ったりするのかしら……」

「暫らくは王宮群に近寄らないようにしろ、用事があれば俺が出向く」

「王子様を呼びつける訳にはいかないでしょ」

「呼べ。お前が呼べば俺は必ず行く」

んな無茶なと沙耶華は肩を竦めて見せるが、レイオスは至極本気である。そろそろこの想いにも気づいて欲しいモノだと焦がれつつ、沙耶華の指に口付けてからお茶を口にす。手は離さない。

相も変わらずなアプローチを受けている当の沙耶華はといえば、こういったスキンシップはもうレイオスと会う時はセットになっているモノという認識になっていた。しかしながら、慣れても馴染みきれないのでやはり赤面してしまう。

そんな沙耶華のいつまでも初々しい反応は一々レイオスの心を攪り、ますます想いを募らせる。普段から細かい気配りで察しも良く、昂れば見返りも求めず何だかんだと受け入れてくれる沙耶華の優しさは、レイオスにとって至高の癒しでもあった。

「ところで表のコウだが、アレは何の実験をしているのだ？」

沙耶華の護衛役に連れて来た部下達から微妙な視線を送られ始めたので今日のところは自重する事にしたレイオスは、話を変えるネタに研究所前で複合体のコウがやっている実験らしき何かを指して怪訝そうに訊ねた。

「窓枠か？ なんでもサヤ嬢達の世界にある娯楽製品が関係しているらしくてのう」

「いや、窓枠の事は兵達に聞いていたが……今さっき見た時は付与系強化魔術らしい術でよく分からん事をしていたぞ？」

通常、付与系の強化魔術は武器に纏わせた魔力に何らかの効果を発現させたり、或いは自身の身体に直接魔力を纏って防御効果を上げるなど徒手空拳のような格闘スタイルに様々な強化効果を乗せたりという使い方をするのだが、レイオスが見たコウは下半身に魔力を纏いながら地面に滑り込むという意味の分からない行動を、試行錯誤的な雰囲気です首を傾げつつ繰り返していたそう。

「なぬ？ そんな実験わしや聞いとらんぞ？」

「あ、そういうえはお昼ご飯の時にコウちゃん、何か思い出したみたいな感じでしたけど」

「そういうコトは早う言わんか！ ええい、こうしてはおれんっ」

慌しく席を立つ博士はコウが異世界の何を思い出して何を試みているのか、好奇心を全開にしながら駆け出して行った。

研究所前の広場ではコウが何度か失敗しつつも、脚部に纏わせた魔力によって接地面に風の膜を帯びる効果を得る事で、滑り込んだ時のスライディング距離を伸ばす事に成功していた。だが、それはまだコウが目指している姿には至ってない。

「ヴオヴァアウ」こんな感じで、地面をすべるように移動するんです”

先程研究所から飛び出してきた博士に参考図を渡してイメージを伝えたコウは、記憶に思い描く移動法の実現にアドバイスを求める。

「ふむ……座った態勢での高速移動か。何故立ってはいかんのか……姿勢制御の問題か？ いや、足の裏だけでは十分な浮力と推力が得られんという事か。それに加えて安定性にも問題が多そうじゃ。となると、これなら魔導輪が使えるか……？」

『ちよつと待つとれ』と言って研究所に駆け込み、倉庫から幾つかの魔導器と道具を持ち出して来た博士はその場で何やら組み立て始めた。博士の独特な発想によって作られる発明品の殆どは、技術の高さとは裏腹に使い道が無くお蔵入りになっているモノが多い。

この”魔導輪まどうりん”という発明品は、馬車や荷車を現在の標準的なモノからより高度な魔導技術を使ったモノに進化させようと考えて足回りに着目。車輪の代わりに魔導器を使って車体を浮かす事を試みた実験作である。

ソリ板に複数の魔導器を搭載して必要な魔力を集めながら、効果範囲を絞る事で強力な風の膜を生み出す魔導輪は博士の目論み通り車体を浮かす事には成功した。だが、浮かした馬車に乗り込もうと手を掛けるとそのままスーツと押し出してしまふ。

氷上に置いた丸石の如く馬車はあつちへふらふらこつちへふわふわと安定しない。馬で引いても真つ直ぐ走る事ができない。角でも曲がるものなら思いつ切り内側にぶつかつたり遠心力に振り回されたりと、馬からも『引き難い!』とばかりに嘸きを不満を訴えられる有り様。

走行時の振動などは殆ど抑えられるのだが、走行を安定させる為には車輪を付けねばならず、それだとわざわざ浮かせる意味が無かつた。

車体の重量軽減に使う事で車軸に掛かる負荷を抑えて積載量を水増しするという利用法も検討されたが、コストに見合う程の効果は得られず。結局、魔導輪は”何時ものお蔵入り発明品”となり、長く研究所の倉庫に眠っていたのだ。

「モノ自体は悪く無い出来ながら使い所がなかつたんじゃが、直接身体に装着するという発想はなかつたわい」

今なら当時より魔導器の小型化も進んでおり、本体を浮かせる為の物と風の膜に一定方への流れを作る為の物を使った推進力も追加出来る。博士はコウの参考図を元に即興で装着型の試作自走魔導輪を組み上げると、さっそく複合体コムポジットの身体に装着した。

「尻の下に二枚と脰脛部分ウデヒに一枚ずつ、制御はお主が直接魔力の出力を弄るとええ。まあ、問題は思い通り動けるか否かなんじゃが」「ヴオヴァアウ」 やってみます”

実験部隊の兵士達が食事から戻って来る頃、研究所から出て来たレイオスは広場で土煙を上げながら滑るように移動している複合体コウの姿に興味を惹かれた。研究所を訪れた時にやっていた滑り込みをそのまま継続して移動しているように見える。

「なんだあれは」

「なんでも異世界の記憶にある移動技法らしいぞ。見た限り姿勢もそこそこ安定するようじゃし、魔導小銃と相性がいいかも知れん」

窓枠を掲げて後ろをついて行くという記憶の発掘を促がす実験から思わぬ移動技術に繋がり、これは実験部隊をより特殊な存在へと導けるチャンスだとばかりに博士はこの装着型の移動装置、新型魔導輪の開発に強い意欲をみせた。

とりあえず、完成したら金色の剣竜隊にも配布するよう依頼してレイオスは王宮群へと帰って行った。

この日の午後は博士が新型魔導輪の開発に掛かりきりとなってしまうたので、実験部隊は適当に魔導小銃を使った戦術について話しあったり、弓や魔術との棲み分けについて議論してみたりと駄弁りながら過ごす事になった。

時々研究室から試作品が二号機、三号機と運ばれてくるので、くじで決めた誰かが装着。駒のように回転して目を回したり、壁に激突したりしながら問題点を洗い出して研磨し、完成度を高めていく。

そうして夕刻も過ぎようかという頃、試作八号機を装着した実験部隊の兵士が、広場を縦横無尽に走り回りながら標的の案山子に魔

導小銃の火炎玉を撃ち込んでは一撃離脱するという動きを成功させた所で、新型魔導輪の完成が告げられたのだった。

「よっしゃ！ これは新しいぞ、早ようお披露目して皆の驚く顔がみたいわいっ クワツカカカ！」

「お疲れ様でした博士、私は上に報告と正規登録の申請書を出してきますね」

実験部隊の兵士達は兵舎へと引き上げ、クワツカカカと高笑いをしている博士に新しい装備品の正式採用を申請する書類を手にしたサータが告げる。その脇では少年型になっているコウと沙耶華が今日これからの予定について話し合っていた。

「コウ君は、今日は泊まるの？」

「うん、まどうりんのさいしゅうちょうせいがあるからね」

また夜通し研究実験に及ぶなら夜食の準備も必要だからと、沙耶華は食糧庫の状態を確かめる。こういう細かい気配りがレイオスを惹き付けてやまない魅力の一つでもあるのだ。

新型魔導輪は個人が携帯できる移動用の道具として非常に優れた汎用性を持つ。速度は馬の半分にも満たないが甲冑でそのまま走るよりはずっと速く、音も静かなので偵察にも使える。魔導小銃共々グラウンドル正規軍で正式採用される事となった。

これにより莫大な富と名声を約束された博士は密かに”異世界シリーズ”と銘打ったこれらの発明品によって懐に入るお金の何割かを、沙耶華とコウにも分け与える事にしたのだった。

翌日。コウはまだ正式採用の発表がされていない新型魔導輪の初期開発分をモニター目的で譲り受けると、ガウィーク隊の皆に配って使い方をレクチャー。以前、武闘会に向けて連係訓練をした場所で使い心地を試していた。

リーパやカレンは操縦の飲み込みも早く、新しいおもちゃでも手に入れたかの如く面白がつて乗り回している。デイスは上手く曲がれず何度も壁に激突していた。ガイドは無難に乗りこなしているようだ。レフは黙々と走らせては時折派手なターンを決めている。楽しいらしい。

ガウィークも直ぐに使い方を覚えると、魔導輪の機動力を隊の戦術に組み込めないかと検討してみたりする。

「ダンジョンでも使えるかもしれないな」

そこへ、情報収集で街の中央通りまで出ていたマンデルとヴィードが戻って来て皆と合流した。二人の表情から何やら芳しくない情報を得たらしい事を感じ取ったガウィークは、魔導輪で走り回っているメンバーを見渡しながら声を潜めて報告を聞く。

「悪い知らせか？」

「ええ、少し気になる事が」

最近、王都で”暗部同盟”の動きが活発化しているらしいとの情報。

暗部同盟。別名”闇ギルド”。冒険者協会に所属出来ない犯罪者や食い詰めた者などに仕事を斡旋する地下組織。主に違法な仕事を請け負い、暗殺家業なども手掛けている事が一般的に知れ渡っている。各主要な街に連絡員が滞在しており、本拠地はエイオア地方にあると謂われる。

「王宮の騒ぎと関連が？」

「どうでしょうね、その所は分かりませんが」

隣国ナツハトームがグランダールに侵攻する際、諜報や工作でタイミングを計る場合に暗部同盟を使っていた事はよく知られている。王宮群での事件など、グランダール上層部の動きを睨んでまたぞろ仕掛ける時期を探っている可能性もあるとマンデルは読んでみせた。

「だな……。まあ、この国の上層部も暗部同盟の動きには気づいているかもしれないが、一応レイオス王子には知らせておくか」

もしまたナツハトームとの戦争が起きた場合、ガウィーク隊も正規軍の手が回らない街の防衛などに協力する事になる。王国から冒険者協会に依頼が行き、協会から援護要請が下るのだ。断る事も出来るが、その場合は理由如何で隊の評価にかなりの影響が出てしまう。

国家間の紛争にはあまり関わりたく無いのが本音なれど、ランクの降格などという不名誉は避けたいので依頼されれば受けるしかない。

「あんぶどうめい？」

「ああ、王子に気をつけるよう伝えてくれればいい」

「わかった、あんぶどうめいがうごいてるから気をつけるように、だね」

隊で使用した魔導輪のデータを持って研究所まで出向く少年コウに伝達を頼むガウィーク。アングギー博士の耳にも入るようにして置けば、万が一王宮の上層が暗部同盟の動きに気付いていなかったとしても博士経由で国王レオゼオスまで情報が届く筈だ、と。

「あんぶどうめい、あんぶどうめい……どっかできいたような気がするんだけどなあ」

今から行けば丁度レイオス王子がいつも顔を出す頃に到着するだろうと博士の研究所へと向かうコウは、その道中”暗部同盟”の名をどこで聞いたのかについて考える。そして気がついた。

『ああつ アリスの所のアレだ！』

コウは深夜から明け方などの暇な時間に異次元倉庫の整理などして、以前クラカルで手に入れて預かる事になった取り扱い注意な禁断の書類の中に”王都で暗部同盟と頻繁に取り引きしている者を記す書類でその名を見た事があったのだ。

これらの書類はアリスの父、バーミスト伯爵からくれぐれも扱いに気をつけるよう念を押されていた危険な書類で、伯爵達が見なかつた事にしたモノの一部である。

王宮に身を置く身分の高い御仁が暗部同盟を使って裏で暗躍している事を示す書類など、下手に触れれば比喻ではなく物理的に首が飛ぶ。

『後で名前とかも調べておこう』

今日は昼過ぎからロゼス王子の憩い場を訪ねる予定なので、王子から色々聞き出せるかもしれない。王宮群を騒がしている問題が解決すれば、エルローゼ王女もまた第三層の中庭まで下りて来られるようになるだろう。

博士の研究所を目指しながら考えを纏めたコウは、魔術研究棟区画の建物が見え始めた王都の通りをバタバタと駆け抜けて行った。

強力な回復効果の付与された腕輪と、戦士が何時も甲冑の裏に忍ばせていた懐剣。それに一房の黒髪。二つの装備は何れも希少且つ高価なモノで、同じ物を用意しようとすれば相当な財力とコネが必要だろう。そして何よりもこの黒髪。

レイオスはこの色と髪質を持つ人物を王都に一人しか知らない。

「サヤカ……」

部下二人の装備品に沙耶華のモノと思しき黒髪が添えられた手紙には王都の地下に広がる遺跡の一角を示す地図が挟まれており、その場所まで一人で来るよう要求が書かれていた。脅迫状である。

護衛に付けたあの二人が裏切りを働くとは思えない。となれば、彼等ほどの手練を仕留めて白昼堂々魔術研究棟区画から沙耶華を拉致出来る程の腕利き、恐らく要人誘拐を専門にしているような集団が関わっていると思われる。当然、王宮内に内通者がいるのだろう。

沙耶華の黒髪と脅迫状を懐に仕舞い、地図を握り締めたレイオスは、魔法剣”風断ち”を装備すると足早に自室を後にした。

32話：暗部同盟

王都トルトリユスの地下にある広大な遺跡は、グランダールの魔導文明を発展に導いた”古代の遺産”が幾つか発掘されており、調査と探索が済んだ区画を訓練場として利用したり、優良な一般冒険者達に許可書を発行するなどして開放している。

開放されている区画は隠し部屋などもほぼ全て調査済みだが、稀に長い間稼働していなかった罫の類が何かの拍子に作動し、そこから新たな通路や部屋が発見されるような例もある。そういった場所には”古代の遺産”が眠っている場合もあり、発見すれば手に入れた者に取得が許されるので、余所の街のダンジョンに比べてモンスターからの実入りが少ない王都のダンジョンには宝探し目的で挑む者が多い。

訓練場として利用されている区画より更に奥へと進むと、関係者以外立ち入り禁止の未探索区画に入る。調査の済んでいない区画はどんな罫や或いは怪物が潜んでいるか分からないので、専門家の部隊が少しずつ探索を進めて安全を確保して行くのだ。

そんな未探索区画の奥にある一角、少し開けた部屋になっている場所で部下からの報告を待つ仮面をつけた魔術士らしき風貌の男が、足元に転がる人質の様子を見下ろした。一定の呼吸を繰り返していた身体が僅かな身じろぎから不自然に動きを止めている。

「起きたのなら普通にしている。寝たふりなどしても隙は窺えんぞ」

尤も、隙を突いた所でどうにかなるモノでも無いがと嘲笑う仮面の男を、沙耶華はゆっくりと見上げた。

「ここは……？」

「地下遺跡の未探索区画。下手に動き回れば迷って一生出られなくなる。大人しくしている事だ」

一年前、沙耶華がこの地下遺跡で目覚めた時は余所行きの服で着の身着のまま、飛行機が墜落して海に投げ出された筈が薄暗い石の回廊に倒れていて混乱した。クラゲのような白い怪物に追われて逃げ惑っている所を、訓練中だったグランドール正規軍の騎士団に助けられたのだ。

今回は買い物をしに街へ下りようと魔術研究棟区画の通りを護衛の闘士、戦士と共に歩いていた所までは覚えているのだが、何故またここで目覚める事態になっているのか、何があったのか思い出せない。

「随分と落ち着いているのだな」

「……混乱して状況を理解してないだけです」

改めて周囲を見渡そうと身体を起こし掛けるが腕が動かず、そこで初めて自分が後ろ手に縛られている事に気付く。お腹に力を入れてよいしょと起き上がった沙耶華は、すぐ近くに倒れている護衛役の二人を見つけた。

ピクリとも動かない二人に一瞬青ざめるが、呼吸はしているようだ。外傷も見当たらず、気を失っているだけだと分かり、ほっとする。

はっと驚いたり、ぱっと輝いたり、さっと翳ったり、ほっと安堵したりと、心情に合わせてころころ表情の変わる沙耶華を面白そうに観察していた仮面の男は、そのうちレイオス王子が迎えにくるの心配しなくていいと言って反応を見た。

勿論、その後ここで死んで貰うが　と内心で付け加えながら。

「君を助けたくば一人で来るよう手紙を出しておいた」
「いや、無理でしょうそれ」

幾らなんでも要求が無茶過ぎる。大体一国の第一王子がちよつと気に入ったからといって然したる後ろ盾がある訳でもない女一人を助ける為に、単身で危険に飛び込むような真似をする筈が無いし、周りがさせない。そう言っつて肩を窄める沙耶華。

「わたしなんか攫つても意味無いですよ」

「そうかい？　手紙には人に知らせたり、要求を無視すれば君の身体を毎日一部づつ送り届けると書いてあるのだが」

仮面の男は沙耶華の背後にしゃがみ込むと、後ろ手に縛られた華奢な腕から手の指をそつと撫でる。ゾクリと沙耶華の背中に悪寒が走った。

「綺麗な指だ。足の分も入れれば二十日は持つかな？」

「……」

黒い手袋の繊細で冷たい布地の感触が沙耶華の首筋から頬へと流れて耳朵を撫でる。

「可愛い耳だ」

顎を掬い上げるように男の方を向かされると、親指の腹が鼻先をつつく。

「鼻は少し低いかな」

そのまま唇に下りて来た指がぐるりと上唇と下唇を撥った。

「唇と舌は一緒がいいかい？」

そして喉元を撫でながらすーっと下りて来た手が胸元に侵入しようとする。硬直していた沙耶華は我に返ると身を抜って振り解いた。

「やめて！」

「くつくつく」

おもちゃを見るような男の眼に、沙耶華の意識が冷えていく。この男はいとも簡単に他者の命を弄ぶ。そんな死の気配に萎縮する沙耶華は、不安な気持ちのせいだろうか、周囲から無数の視線に曝されているような気がして身を震わせた。

ふと仮面の男が振り向くと、壁際の隅にある影から染み出すように現れる黒装束。思わず息を呑む沙耶華。その黒装束から何事か報告を受けた仮面の男はニヤリとした笑みを沙耶華に向けると、レイオス王子がこちらに向かっていている事を告げた。

一方その頃、研究所でガウィーク隊の新型魔導輪に対する反応について纏めた書類を博士に提出したコウは、レイオス王子も沙耶華も居ない事に首を傾げる。サータに聞いてみると、沙耶華は朝方に護衛を連れて買い物へ出掛けたようだが、まだ帰って来ていないのだという。

王子も顔を出しに出来ない事からして、何処かで二人して道草しているのでは？ との事だ。

「そつかあ、じゃあ先にロゼスおうじにあつてこようかな」

「レイオス王子が来たら暗部同盟の事は伝えておくわ」

「うん、よろしくー」

ぴょんと椅子から飛び降り、コウは研究所を出て王宮群へと向かった。

コウがロゼス王子の憩い場を訪ねている頃、王宮群中枢層の一角にあるスアロ王子の私室では、従者が中庭で拾ってきたという手紙を前に眉を寄せている第二王子の姿があった。

「……なんだこれは」

手紙を見つけた従者の少年は拾った手紙の中身を見て驚愕。誰かに知らせなくてはと思い、慌てて自分のご主人様に届け出たのだが、手紙の内容が内容である。スアロ王子の不可解そうな様子に、もしかしたら誰かの悪戯だったのではないかと心配になってきていた。

「あ、あの、スアロ様」

「護衛隊の責任者に会ってくる」

「あ、で、でも……もしかしたら悪戯かも」

「一応確認をとる。お前はアンダギー博士の研究所へ行つて来なさい」

従者の少年を沙耶華の安否確認に向かわせるスアロは、王宮群の要人警護を担う部署へと足を向けた。

秘密の憩い場でロゼス王子から暗部同盟について詳しい話を教えて貰っているコウ。最初、暗部同盟の名が出された事に少し驚いた様子を見せていたが、コウが見た目どおりの子供では無い事を既に確信しているロゼスは普段と同じく突っ込んだ内容を話してくれる。

真つ当な冒険者としてもやっていけない道を踏み外した犯罪者が多く所属する闇の組織、と一般的には捉えられているが、権力者同士との争いの影で暗躍する汚れ仕事を専門に請け負う組織としてその歴史は古い。権力者の栄えるところに闇組織も在り。共に支えあう関係なのだ。

「一般人の生活にはあまり関わりの無い組織だけど、国や民衆を支配する統治者の立場にとっては彼等も欠かせない存在なんだよ」

如何に使い、従わせ、良い関係を築くか。一方的な従属を求める事はまず不可能、下手に飼い馴らそうとすれば寝首を搔かれる事に

なるが、味方に付ければ大いに役立つ事は歴史が証明している。彼等と上手く付き合える支配者は栄光を掴める。光と影は表裏一体なのだ。

「まあ、彼等に頼らず栄光を手にするレオゼオス王みたいな例外も居るけどね」

「なるほどー」

コウはバーミスト伯爵等が見なかつた事にした書類にある王宮の偉い人が暗部同盟と多くの取り引きをしても、それは別段おかしい事ではないという事を学んだ。勿論こつそり行なわれている事だからして、そういう秘密に迂闊に触れるのは危険であることに変わりはない。

となれば、暗部同盟との取り引きが盛んな事実よりも、どんな取り引きが行なわれているのか、誰が何を依頼しているのが重要になる。

例の書類だけでは誰が何時、幾ら報酬を払ったかなどしか記されていないので、詳しい取り引き内容を知るには暗部同盟そのものを探らなくてはならないが、本拠地の詳細すら分からないのではどうしようもないという事だ。

「おつきゅうのさわぎがおさまったら、またエルローゼおうじよともお話できるようになるかなーって思ったんだけどなあ」

「それで暗部同盟の話題を出したのかい？ 確かに、グランダール貴族の中でも利用している人は結構いると思うけどねえ」

そんな話をしていた時、この憩い場に立ち入る者がいた。普段は草葉の影から見守るように息を潜めて姿を隠しているロゼス王子の護衛役。

いつも離れた場所からロゼス王子と周囲の人間を観察している一見すると只の警備兵に見える目立たない男がロゼスの傍までやってくると、傳いて何かを耳打ちした。珍しく表情を硬くするロゼス王子。

「どうしたの？」

「うん……何か問題が起きたようだね」

王宮群の廊下では其処彼処に固まって密談を交わす貴族達の姿が見られる。その輪の中には先日、沙耶華に絡んでいた令嬢達の姿もあった。彼女達が話題にしているのは今現在、王宮群で急速に広まっている噂。

レイオス王子が何者かに攫われた沙耶華を追って、危険なダンジョンの深部へ一人で赴いてしまったという暴露話。

「またあの娘絡みですわ」

「でも、今回はレイオス様を狙った策略だとか」

「やっぱり、先日のエルローゼ様の事件と関わりが　　！っ」

噂話をしている者達がハッと視線を向けた先には、眉間に皺を寄せて神経質そうな表情を更に気難しく飾り、一層近寄り難い雰囲気纏っているスアロ王子がつかつかと廊下を行く姿。

後ろに続く護衛の騎士も厳しい表情ながら気後れ感を漂わせ、事の発端となった従者の少年などはオドオドと落ち着かない様子だ。

例の手紙の真偽を確かめようとしたスアロ王子の指示によって王宮群を巡回する警備兵から報告が集められたのだが、レイオス王子

や沙耶華の所在が確認されなかった事で二人が本当に王宮から居なくなっている事が事実となった。

更に、レイオス王子の私室からは指定場所の記された地下遺跡の地図が見つかり、何故かそのタイミングで王宮群のあちこちにこの話がばら撒かれた。何者かが意図的に情報を掴ませ、流している。スアロ王子は現状をそう判断した。

「何が狙いだ……」

「スアロ様？」

「兄上を誘い出す為にあの娘を攫った者は、何の目的でこれらの事件を引き起こし、且つ公にしようとしたのだ？」

殆ど独り言の様な呟きに、護衛の騎士は答えられない。今回の出来事をエルローゼ王女の襲撃事件とも結びつけて考えるスアロ王子は、一連の騒ぎを起こした者の狙いを探る。

双方の支持者による対立と抗争が引き起こした暴走などでは無い。何か明確な意図による別の目的があるとの確信。

「これは私と兄上の対立という構図を利用した何者かの策略だ。……フェーズに探らせるか」

スアロ王子は今回の事件でレイオス王子が暗殺される可能性も視野にいれながら、これらの出来事の裏で暗躍する者の正体を探り出す為に、何かと心強い腹心である仮面の男フェリスを調査に当たらせる事も考えた。現在、彼にはロゼス王子の周辺を探らせている。

「アレが戻り次第、私室で待つよう伝えておくように。私は父上に会ってくる」

王宮群と王城を隔てる城門前で護衛の騎士と従者の少年にそう言い付けたスアロ王子は、城門を潜ると城つきの護衛と共に上層階へ上がっていった。王宮群での護衛役である騎士は従者の少年と顔を見合わせると、軽く肩など竦めながらスアロ王子の私室へと向かうのだった。

レイオス王子が地下へ下りてからどのくらい経過しているのか、コウから話を聞いて王都のダンジョン入り口に集まったガウィーク隊は、王子と沙耶華の救出に動く金色の剣竜隊と合流した。王子の私室で見つかったという地図の複製が、ガウィーク隊にも配られる。

グランダール正規軍の騎士団からも救出部隊が編成されているようだ、組織立った行動に束縛される軍に比べると上からの命令無しで即座に動ける冒険者グループの方が幾分か身軽でフットワークも軽い。

整列を始める騎士団を尻目に、ガウィーク隊と金色の剣竜隊は斥候の如く少数編成で地下遺跡へと下りていく。

「この地図がフェイクという事は？」

「あり得るが、今は確かめる術も余裕も無い」

「とにかく進んでみるしか無いわけか」

「ぴゅりっぴゅりり！」　ボク、先に行くね！」

カレンの肩から地図を覗き込んでいた伝書鳥コウは、未探索区画の地

図を中心に円陣を組んで軽く打ち合わせをしていた両隊員に向けてそう告げると、ダンジョンの通路へと飛び立った。『今の状況で彼ほど優秀な斥候は居まい』とコウの活躍を期待するガウィーク達。

その様子を闇の中から見詰める者がいた。ダンジョンの入り口付近で影に潜み、救出部隊の動きを監視していた黒装束の男は、ガウィーク隊と金色の剣竜隊が未探索区画に入った事を確認すると”対の遠声”を使って仲間へ情報を送った。直ぐに騎士団の部隊も階段を下りて来たので、部隊の規模や構成を伝えると見つからない内に影の奥へと身を隠す。

「 作戦は予定通り進行中 」

「 よし、そのまま監視を続ける 」

入り口に配置している部下からの報告を受けた仮面の男は満足そうに頷くと、不安げな表情を向けている沙耶華に邪気の無い、しかし慈悲も無い笑みを向ける。事態が彼等の思惑通り進んでいるらしい事を感じ取った沙耶華は、不安げな表情を更に曇らせた。

この時、入り口付近に溢れる騎士達から身を隠す事に専念していた黒装束の男は、ガウィーク隊と金色の剣竜隊が少し通路を進んだ先で別行動に入った事に気が付かなかった。

正式発表前の新型魔導輪を装着しているガウィーク隊のメンバーは、早速その機動力を発揮する。

「 先に行く! 」

「 すまん、頼む! 」

未探索区画方面の通路を二人一組の三列編成で滑走していくガウイク隊。先頭に行くカレンは光源付きの矢を放って前方の状態を確認し、レフも後方から隊の周囲を明かりで照らして魔導輪での走行に安全を図る。金色の剣竜隊は駆け足でその後続いた。

救出部隊が地下遺跡の未探索区画に進軍を始めた頃、城の上層を訪れたスアロ王子は、玉座の間にて父王レオゼオスにここ最近立て続けに起きた一連の事件について意見を求めていた。

「一部ではお前の仕業ではないかという意見も出ているようだが？」
「冗談を」

レオゼオス王の戯言を軽く往なして本題の意見を促がすスアロ王子に『相変わらず真面目な奴だなあ』と肩を竦めて見せたレオゼオス王は、玉座に座り直しながら現在、王宮で暗躍していると思われる勢力について外敵の存在を仄めかした。

「それは……やはりナツハトームですか」
「ほう、お前も察しをつけていたか」

「あの国は未だ明確に我々の国土を狙っていますから、私と兄上の対立などという美味しい状況を見過ごす筈はありますまい」
「なるほど、そこまで考えた上での行動か」

スアロ王子の、王宮内での支持者集めによる地盤固めは将来の王位継承、戴冠を睨んでのモノである事はもはや疑いなく、故に第一王子であるレイオス派からの反撥を招き、中立派からは権力争いによる国の乱れを懸念されている。というのが、グランダール王宮の現状を指す一般的な見方である。

「……糾弾なさらないのでですか？」

「うん？ 何をだ？」

「私が兄上を差し置いて王宮に自分の地盤を築こうとしている事に對してです」

「はっはっは、随分と直球で来たな」

じつと視線を逸らさず見詰めて来るスアロ王子に、レオゼオス王はにひひと聞こえて来そうな意地悪っぽい笑みを浮かべながら言った。

「お前がレイオスを気に掛けている事は知っている」

「っ！」

スアロ王子の目が僅かに見開かれ、動揺を表す。レイオス王子とスアロ王子、二人の出生にはある秘密があった。明け方の早朝と昼下がり、同じ日に生まれた二人だが、実は先に生まれたのはスアロ王子の方だったのだ。

当時、エリユシオーネとリーザの出産に立ち会った者達は内々で相談し、正妃であるエリユシオーネの産んだ子を第一王子として発表した。リーザの産んだ子は妾腹だという理由で第二王子として扱われ、この事は二人が十歳になる頃まで隠蔽されていた。

ナツハトームとの戦でトルトリユスを離れていたレオゼオス王も、

それを知ったのは第三王子ロゼスが生まれた時であった。

レオゼオス王は事実を公表して是正する事を考えたのだが、既に物心も付いている二人の関係を鑑みるに、今更立場を入れ替えても王宮に余計な混乱を招くだけだとするリーザの申し出もあって、レイオス王子とスアロ王子の立場はそのまま据え置かれて現在に至っている。

「レイオスもあれで結構不器用な奴だからなあ」

「本人は、自身の意図を見抜かれている事も分かってやっている節があります」

王位の継承問題にもあまり関心がないように振舞うレイオス王子の冒険者かぶれな行動。あれは本来なら正当な王位継承者となる筈であった”兄スアロ”を意識しての行動では無いかと読んでいるスアロ王子。レイオスは王位継承権を譲るつもりでいるのだと。

実は、スアロはレイオスの事を心配して日々サポートに回っているのだ。沙耶華の事も父王に気に入られそうな経歴が明らかになったので、レイオスの立場にとってプラスになると判断していた。対立の演出は反レイオス派を一箇所に集めておく為の方便。

いずれ出生の秘密を知る者、知った者が王権に取り入ろうと色々な画策を仕掛けて来るであろう事を見越しての防波堤作りの一環であった。

「お前に王位を狙う気が無いと知ったら、旅にでも出掛け兼ねんな」
「私は、レイオスに王位継承権を譲らせる気はありませんよ」

その為にも、今現在王宮周りで起きている事件の黒幕を早急に見つけ出し、レイオスの暗殺を阻止しなくてはならないのだが、現状

は芳しくない。万が一、レイオスが今回の事件で暗殺に倒れるような事に至った場合を考え、スアロはレオゼオス王の意向を確かめに
出向いたのだ。

自身の活動や思惑を全てお見通しだった事には流石に脱帽とい
った所である。

「まあ余り思い詰めるな、アレはそう簡単に倒れるタマでは無い。
王宮に潜り込んでいるネズミに関してはアイラ達も動いている」
「それは……まさかロゼスも絡んでいると？」

「ふっふっふ、お前の腹心でも掴みきれなかったか？ 実は例の娘
が現れた時から周辺を探らせていたのだがな」

「な、まさか」

沙耶華に関しては仮面フェースの男の工作によって彼女を胡蝶の館に送り、
支持者同士の争いの種を遠ざけた事で王宮の混乱を鎮めたというの
がスアロの認識だったのだが、実は沙耶華の”胡蝶の館入り”には
レオゼオス王からの働き掛けもあったのだ。

第三王子ロゼスの母で、元蝶婦の側室”金蝶のアイラ”。彼女と
親しい同期だった女性が、現在胡蝶の館で館主を勤める”マダム・
サリーナ”。

マダム・サリーナの元には第二女王スイーダが預けられており、
彼女の護衛として館の従業員を装った諜報員が王宮より派遣されて
いる。胡蝶の館は王都の城下街に置かれた王宮と直接繋がりを持つ
諜報の拠点でもあったのだ。勿論、その事を知る者は少ない。

「あの娘を匿う場所としては最適だったという訳ですか」
「まさかアンダギーが身元を引き受けるとは思わなかったがな」

レオゼオス王が仕掛けた王宮での黒幕探りは、アンダギー博士から聞いた例のコウという存在が持つらしい”相手の思考を読む能力”を見越してロゼス王子やエルローゼ第一王女に接触させる事で、周辺に怪しい動きをする者が忍び寄っていないか探るといったモノだった。

レイオス王子とスアロ王子の対立に乗じて何かを起こしたい輩が居た場合、既に立場が決まっている結束も固い双方の支持者を煽るよりも、近しい人間を誘導して第三勢力を作り出した方が引つ掻き回し易い。

一般的にはノーマークとされている第三王子や、第二王子の妹君が対象に狙われるであろうと読み、サータ助手を使ってコウを近付かせた。

直接エルローゼに危害を加えるという強行手段に出て来たのは予想外だったが、暗躍者側にとって大きな混乱を起こす必要が出来たか、その時期が来たという表れだろうと、レオゼオス王は事件に関する見解を述べる。

「護衛を遠ざけて置いたのは少々油断が過ぎたかとは思ったがな」

息子の集めた精鋭部隊を殆ど一人で倒して武闘会で勝利をもぎ取った存在なのだ。コウという者の在り方を聞いていたので、心配はしていなかったという。

「大きな混乱を起こす必要や時期が来た……今回の誘拐騒ぎも、その流れで起こされたモノだと？」

「恐らくな。エルローゼの事件で王宮群の警備が厳しくなっただろう？ 連中も動きが取れなくなって焦っているのかもしれない」

これら暗躍者の勢力が外敵だった場合に備えて国境付近の状況にも注視しており、ナツハトーム側の動きを監視している。

「これだけの事件を起こすには、相当数の作業員と協力者が必要でしょう。内通者の存在に関しては？」

「ああ、そつちはトルマーヅにやらせている。ロゼスから面白い資料が上がって来たらしくてな、主犯の特定は時間の問題だろう」

宰相トルマーヅには両王子の対立という構図を殊更煽り立てる者を探らせていた。中立派を装って王子達の対立に懸念を示すというポーズを取りつつ積極的にその話題を上げていた者を調べていたのだが、その中から暗部同盟の手の者に利用されていた者や、知りながら協力していた者が何人か突き止められた。

実はコウがクラカルの街で入手した禁断の書類に暗部同盟と頻繁に取り引きをしている個人を記した名簿があり、コウから渡されたロゼス経由でそれが提出されたのだ。

彼等の工作は広く浅く、要求の希薄な所が巧妙で、ただ議論の席で王子の対立を問題視して話題にするよう促がすだけのモノなど、一見すると混乱を呼び起こす為の工作どころか、国が乱れる事を憂う者が賛同者を募って匿名でささやかな投資をしているようにも感じられ、工作を依頼された側に警戒心を懐かせない。

多くの貴族に裏金としてばら撒かれた工作資金の出所がこの名簿によって明らかになり、そこから王都で暗躍する暗部エージェントを探り出して王宮群に潜り込んでいる者を燻り出す。スアロ王子に売り込んで腹心を務めている”フェーズ”も、実はこうした流れでついさつき特定されたばかりだった。

「ま、まさか……フェーズも暗躍者側」

「いや、お前の腹心はシロだ。あれは組織を抜けて来た者らしい」

暗部エージェントでも優秀な者は組織から仮面を頂き、暗部名を名乗る事が許される。これは冒険者協会という所のメダルのような物だ。フェーズは純粹にスアロ王子の持論に賛同し、配下として働きたいと願って暗部同盟と袂を分けた元暗部エージェントであるらしい。

「暗部同盟から派遣されている仮面持ちのエージェントは二人確認された。片方は先日出国したようだがな」

「では、もう一人は」

「現在の所在は不明。暗部名は”ジャツジ”という者だそうだ」

地下遺跡、未探索区画の一角にある部屋状に開けた薄暗い通路。中央より少し先に光源の入ったランプが並び、床に倒れている二人の部下と、正面に座り込んでいる後ろ手に縛られた沙耶華の姿を逆光に照らし出している。

「レイオス！」

「無事か」

普段は立場を主張して様付けで呼んでくる沙耶華だが、余裕が無いせいか初めて会った頃のように呼び捨てで名を呼ばれた事をレイオスはこっそり喜ぶ。抜き身の”風断ち”を鈍く光らせながら一歩

ずつ近づいていくと、周囲の壁から染み出すように複数の人影が現れた。

そして何時の間にか沙耶華の隣に立っている仮面の男。

「ほらね、やっぱり一人で来ただろう？」

「……」

「貴様……サヤカに触れるな」

沙耶華の髪を梳かす仮面の男を睨みつけるレイオス。『おやおや』といったジェスチャーでぱっと手を離して見せた仮面の男は、ラフな足取りで数歩レイオスの方へ踏み出すと、徐に自己紹介をする。

「御初にお目に掛かる王子、我が暗部名はジャッジ。ああ、見知り置く必要はない、態々御足労頂いて恐縮だが」

ジャキツと広げた両手に暗殺用の短剣がせり出すと、周りを囲む複数の黒装束も一斉に短剣を構える。

「ここで永遠に御休み頂くゆえ」

そう言つて短剣の片方を沙耶華の首筋に向けるジャッジ。

「勿論、その魔法剣は手放して頂ければありがたい」

「甘えるな、下郎」

”風断ち”に真空の刃を纏わせたレイオスは臨戦態勢をとると、殺気を放つ暗殺者達に威圧を向けながら言い放った。

「俺の首は貴様らの命ほど安くは無い。沙耶華に手出しすれば貴様

等全員生きて返さん」

「この娘とそこに転がる部下二人は生かして返すと約束しても？」

「ふっ 信用すると思うのか？」

完全に覚悟の決まっている眼で見据えながらじりつと一歩踏み出すレイオスに、この手の交渉は無意味と悟ったジャツジは影に潜む部下に合図を送ろうとした。多勢に無勢でもまともに戦えば甚大な損害は免れない。だが暗殺術に特化している彼等には奥の手があった。

レイオスの部下の中でもかなりの手練である闘士と戦士を反撃の間も与えず制圧した切り札。それが振るわれようとしたその時

「びゅりり」

一羽の鳥が、緊張と殺気漂う空間に飛び込んで来た。

レイオスが暗部同盟の暗殺者と対峙している現場へ一足先に辿り着いたコウは状況を理解すると、まず沙耶華の護衛の二人を呪縛から解放しに動いた。闘士と戦士は首裏に装着された輪っか型の呪術具で意識を切り離されており、死んだように眠っている。

コウの視点からは、この二人の傍や周囲の壁際でアーチ状に揺らめく魔力の靄が幾つか確認できた。これは武闘会でヴァロウ隊と戦った時に見た影術士の技、隠行術で姿を隠している者がいるのだ。

「ただの鳥か」

確かガウイーク隊が飼っている伝書鳥だったかと、割っていた警戒をレイオスに戻し、隠行術で姿を隠している部下にレイオスを急襲するよう攻撃指示を出そうとしたジャツジは、目を覚ます筈の無い闘士と戦士が突然意識を取り戻した事に慌てた。

拘束用の呪術具が外れたのかと、近くで監視に付かせている部下に確認するよう促がす。

「まさか、さっきの鳥が……！」

だが、更に驚くべき事が起きた。クルツと天井に向かって上昇する鳥。次の瞬間、ズシンと地響きを立てて現れる複合体の姿。

目を覚ましてから状況に戸惑いながらも沙耶華を護る位置へと移動していた闘士と戦士。その二人を狙う見えない筈の黒装束が、複合体コウゴによって何人が殴り飛ばされる。

「な……あのゴーレム、何故っ 一体どこから」

「くつくつく、良い所を持っていくな、コウよ」

「ヴォウウア」 助けにきたよー”

「コウちゃん！」

想定外の事が立て続けに起き、混乱して一瞬硬直したジャツジに斬りかかるレイオス。間一髪、飛び退いてそれを躲したジャツジは隠行術を使って姿を隠す。レイオスは適当にその辺りの空間を斬り付けながら突進すると、沙耶華の傍まで駆け抜けた。

「待たせたな、怪我はないか」

「レイオス……どうして」

何とも言えない複雑な感情を表情に浮かべている沙耶華の拘束を解いたレイオスは、黒装束達に向き直る。コウから武器を受け取った闘士と戦士も、レイオスと沙耶華を護るべく臨戦態勢に入った。

二人が不覚を取ったのは王宮群に潜り込んでいた複数の黒装束が隠行術で近付き、沙耶華に意識を切り離す呪術具を使って昏倒させた瞬間、気を取られた二人にも呪術具を使う事で無力化したのだ。

たとえ隠行術を駆使していても、臨戦態勢にある二人には近付けば気配で気付かれる。護衛対象を利用した完全な奇襲と不意打ちだった。

「戦えるか？」

「万全とは言えませんが、どうにか身体は動きます」

「流石に姿の見えない相手をこの数は厳しいか」

「王子の期待に添えずの不覚、ここで挽回したい所ですが……飛び道具でも使われると厄介ですね」

黒装束達が次々と姿を消していく。彼ら暗部同盟の工作人員は基本的に影術士で構成され、全員が隠行術を修得している。

ヴァロウ隊に居たりトアネーゼのように一般的な冒険者グループに所属する者で影術士をやっている者は珍しいが、その性質上、暗殺家業を生業にしている者達の間では最も妥当な基本職ともいえるのだ。

『少々予定と違ったが、結果は同じ。レイオス王子を暗殺してこの任務は終わりだ』

戦士の懸念した通り、隠行術で結界に身を隠すジャッジは小型のボウガンを使って仕留めようと”対の遠声”で部下達に指示を出していた。同士討ちにならないよう包囲陣を横陣に組み直し、一斉射

撃すればそれで終わる。

しかし、彼等の動きは魔力を視認している複合体コトに筒抜けであった。周りをぐるりと囲まれている状態だとレイオスや沙耶華達を護りながらではイマイチ使い難かった魔導兵器。横一列になつてくれるなら非常に狙い易い。

スツとレイオス達の前に出たコウが、異次元倉庫からヴァージョンアップの重ねられた魔導兵器をガシヨンと取り出す。『お、あれか』と、見覚えのある箱型武器に闘士が肩眉を上げる。

沙耶華はこんな反響しそうな場所で使えばどれ程の爆音になるのかと慌てて耳を塞ぎながらお腹にも力を入れた。

「ヴオオオオ！」 発射ー！」

複数の射出口から連続して撃ち出される火炎玉。以前は『ドンツドンツドンツ』という太鼓を叩くような射出音だったのが、魔導小銃の開発で改良が反映された魔導兵器は威力のみならず連射力もアップしており『ヴウウウウ』などという唸るような射出音は、元となった武器のイメージに近付いていた。

「な、なんだこれは！」

「隊長！ 結界がっ 術が破られます！」

大量の火炎玉によつて結界に負荷が加えられ、次々に撃ち破られる隠行術。魔導兵器による掃射は最前列で横陣を組んでボウガンを構えていた黒装束達を、文字通り一掃して見せた。ジャツジの狂い始めた計画と受難はまだ続く。

こうなれば損害を度外視して数で押すかと突撃命令を下そうとし

た所へ、飛来した光源付きの矢が頬を掠めて部下の一人に突き刺さった。ガウイーク隊が到着したのだ。

「ばかな！」

幾らなんでも早過ぎるとジャツジは焦る。一応ここまでのルートにモンスターは出て来ないとはいえ、普通に歩いて一刻以上は掛かる距離がある。入り口の監視より報告を受けてまだそんなに経っていない。

レイオス王子がダンジョンに入ってからスアロ王子の従者が手紙を見つけるまで十分な時間を置いていたし、地図を見つけて直ぐに後を追って来たとしても、王子の暗殺阻止には到底間に合う筈の無いタイミングで仕掛けたのだ。

馬でも使ったのなら別だが、途中には狭い通路や階段もあって馬を入れられるような場所ではないし、そんな報告も来ていない。レイオスが暗殺され、目撃者の無いままその日の内に死体を見つけれれる事が理想だったのだが、これで作戦が破綻した事を知るジャツジ。

混乱する黒装束の集団に斬り込んで行くガウイーク隊。カレンとレフはこの部屋の隅から弓と魔術で援護しつつ、ガイドとマンデルが二人を護り、ガウイークとリーパはレイオス達のいる場所まで駆け付けた。

「い無事で？」

「ああ、来てくれて助かったぞ。しかし、よくこの場所が分かったな？」

「スアロ王子の従者があなた宛の脅迫状を拾って、王子が色々調べたんですよ」

私室から見つかった地図に記されている場所を目指して魔導輪で飛ばして来たというガウィークは、金色の剣竜隊や騎士団の部隊もこちらに向かっていると現状を説明した。

「脅迫状？ 手紙や地図なら俺が持っているが……」
「え？」

レイオスが懐に仕舞っておいた手紙と地図を見せると、一瞬言葉を詰まらせるガウィーク。思わず神妙な表情で顔を見合わせる。

「どうやら裏がありそうだな」
「ですな」

そうして二人の視線は黒装束の集団を指揮している仮面シヤッジの男に向けられる。

「く、ここまで形勢が崩されるとは……っ」

影術士は元々接近戦に向いてない呪術士がベースになっているので直接戦闘力はあまり高くない。数の上でこそまだ勝っていたものの、最大の強みである隠行術は即座に魔導兵器で撃ち暴かれる。

おまけに部屋の両隅をカレンとレフが確保しているので、対面の壁際に立つガウィーク達に挟まれた彼等は包囲されてしまっている状況だ。コウの掃射で隠行術を封じられた黒装束達は、乱戦であつというまに制圧された。

「！っ 仮面の男を捕らえろっ 奴を逃がすな！」

何とかこの場から脱出しようと試みたジャツジだったが、出口となる通路に入った所で足を止める。

「王子！ 御無事ですか！」

「良い所に来たな！ そいつを捕らえろっ」

祭儀用の如く磨き上げられた豪華な甲冑に特殊な力を秘める武器で固められた、凡そダンジョンの探索には場違いな壮麗っぷりを醸し出している精鋭部隊。勿論、見掛けだけではなく実力も本物。仮^ジ面の男は遅れて到着した金色の剣竜隊に捕らえられたのだった。

沙耶華達を救出した一行は騎士団の到着を待って拘束した黒装束達を引き渡すと、地上を目指して乱戦のあった部屋を後にする。

「王子様が先頭に立つちゃだめでしょー」

「お前を救う役を他の者に譲る気はない」

これからは護る役も譲りたくないのですと傍にいるなどと、道中で何時ものように口説き始めるレイオス。王宮に戻れば今回の事件絡みで色々忙しい事になるだろう。今はゆっくりイチャイチャさせてあげようと生暖かく見守るガウィーク隊や金色の剣竜隊の隊員達。

コウは沙耶華の心が少しだけレイオスの好意を信じてみようと思

いている傾向を読み取り、そういう成り行きを表す言葉を思い浮かべる。

「雨ふって地よければすべてかたまってさいわいだねっ」
「え、なにそれ？」

色々混じっていた。

33話・陰謀の黒幕

コウ達が王宮群に戻ったのは夕刻過ぎの事だった。沙耶華とレイオス、金色の剣竜隊にガウィーク隊が地上に戻り、その後から騎士団部隊が身柄を拘束した黒装束の集団を連れてぞろぞろと引き揚げて来る。

王宮群では伝令の走り回る姿や、警備兵達が集まって何やら話をしている光景が見られた。

「随分と騒がしいな、何かあったのか」

「え？ わたし達の事で騒いでるんじゃないか……？」

「いや、これは違う」

兵達の纏う空気に何か別の問題が起きているらしい事を感じ取ったレイオスが近くの警備兵を捕まえて事情を聞こうとした所へ、仮面を付けた男が現れた。思わずビクリと警戒する沙耶華。

フェーズと名乗った仮面の男は自身をスアロ王子の元で働く元暗部である事を明かすと、王の間で国王達が待っている事を伝えた。

「ナツハトーム軍が国境を越えようとしています。今回の一連の事件との関連も交えて説明を行なうと」

「……そうか」

レイオスが若干表情を険しくしながら頷くと、フェーズは一礼し

て去って行った。それを見送り、徐にガウイク隊を振り返ったレイオスは労いの言葉を掛ける。

「皆ご苦労だった、後でお前達の宿泊する宿に褒賞を届けさせよう」
「そいつは有難いですな、それじゃあ我々はここで」

余計な事は聞かないのが無難だと心得るガウイクは、お疲れ様と引き揚げに掛かる。事件のあらましについてはまた後日にでも、内容の一部を伏せたりしつつ明かして良い所までは説明がされるだろう。ナツハトーム軍の動きに関しては街で情報収集に走る事になる。

ガウイク隊は王宮群の門に向かい、騎士団部隊は黒装束の集団を収容施設へと連行していく。そしてレイオス達は王城へと足を向けた。

「では行くか」

「え、わたしも？」

「今は離したくない」

沙耶華の肩を抱いたまま、金色の剣竜隊を引き連れたレイオスは王宮群の中枢層へ向けて廊下に踏み出したのだった。

一方、王宮群を出たガウイク隊は博士の所へ寄っていきこうと魔術研究棟区画に向かっていた。

「頼んでおいた魔導具の残りを引き取って、こいつの追加注文だな」

「予備も揃えておきたいですね、しかし結構高く付きそうですが」「さっきの様子だとナツハトムとおっぱじめるんだろ？ 援護要請が来た時に要望すりゃいいんじゃないの？」

「……実験部隊が活躍すれば、魔導輪の価値は上がる。一般的には手に入らない装備になる可能性もある」

量産型モデルが正規軍専用の装備になった場合を考え、手に入れるなら早いほうが良いというレフの進言もあり、今の内に博士とのコネを使って幾つか入手しておこうという方針がとられた。

新装備について皆で相談していた時、ふとカレンが気付く。肩にとまっている伝書鳥は会話に参加せず、毛繕いなどしている。つまり中身がコウではない。

「あれ、コウちゃんは？」

近衛達が入り口を固める王城の上層階。王の間に上がるのが初めての沙耶華は緊張している。

今まで遠目に見た事はあったものの、直接近くで顔を合わせたレオゼオス王は表情や雰囲気こそ人のいい熟年のおじさんといった感じだが、その身より滲み出る強烈なオーラはこの人物が支配者である事を実感させる。なんとというか、「大きい」のだ。

この場にはレオゼオス王の他にも第二王子スアロや第三王子ロゼス、宰相トルマージに正規軍上級将校達といった面々が顔を揃えていた。しかし王の印象が強過ぎてあまり目立っていない。そのレオゼオス王がずいっと顔を寄せてきたので、思わず仰け反る沙耶華。

「ふーむ？」

「な、なんでしょう？」

「なんの真似だ父上」

「いやなに、随分と変わった虫を付けているのだなと思ってな」

沙耶華との間に割って入るレイオスが慥然とした表情を向けるも、飄々と返すレオゼオス。沙耶華は”虫”という言葉に『わたしの事！？』と一瞬焦るが、肩の辺りに光の文字が浮かんだ事で目を丸くする。

”あ、みつかつちゃった”

「ええっ　ここに、コウちゃん！」

ふよふよと沙耶華の服の肩口から飛び立つ小さな虫。次の瞬間、召喚石の光と共に黒髪の少年が現れた。王の間に興味があったコウはレイオスとガウィーク達が話している隙に近くを這っていた虫に憑依して沙耶華の服に張り付き、ちゃっかりついて来ていたのだ。

『なにしてんのーっ！』と沙耶華はコウが王の間に忍び込んだ事に慌てているが、レオゼオス王に咎める気は無いらしい。

「まあよいよい、その珍しい客人も一緒に聞くといい」

スツとレオゼオス王が合図すると、宰相トルマージの秘書官が事件の背後関係について判明した事の説明を始める。

レイオス王子とスアロ王子の対立を殊更煽っていた者や、そういった話題に乗るよう根回しをしていた者の何人かに怪しい素振りが見られるとして調査を進めていたのだが、コウからロゼスを経由して提出された暗部同盟との取り引き者名簿を照らし合わせる事で活動の中心となつている人物を探り出す事ができた。そうして内通者

が明らかになった事で暴かれた暗部同盟の策略計画と、その背後にいる黒幕の存在や目的。

暗躍者は当初レイオス王子とスアロ王子の出生の秘密を利用して側室リーザに取り入ろうと計画していたが、詳細を調べるうち王子達の秘密を秘密のままにしておくよう望んだのがリーザ自身であった事が分かり、下手に接触すれば工作が明るみになる危険があると判断して断念。

何か良い争いの元は無いかと最近の王宮群に見られる王子達の動向が探られ、半年前に理想的な騒ぎを起こしたある少女の存在が浮かび上がった。レイオス王子が連日通い詰めるほど入れ込んでいるという元蝶婦の少女。

沙耶華を拉致して誘き寄せたレイオス王子を暗殺し、レイオス派とスアロ王子の対立を激化させつつロゼス王子も絡める予定だったのだ。

「ロゼスも対象にされていたのか」

「あはは、僕が継承者争いに加わったら、王宮はさぞかし混乱しただろうね」

今回、沙耶華を誘拐した目的はレイオス王子の暗殺を図りつつ、それがスアロ王子の仕業であるように見せかけてレイオス派からの糾弾を呼び込み、グランダール王宮を未曾有の混乱に陥れる事だ。

発端をレイオス王子からのスアロ王子に対する警告、所謂エルロ―ゼ王女襲撃事件であった事を印象付けてレイオス派とスアロ派を激しく対立させ、ある程度まで混乱が進めばそこにロゼス王子を担ぎ出して引つ掻き回すのが凡その計画内容であった。

第一王子暗殺の疑いを向けられる第二王子と、今まで見向きもされていなかった至極潔白な窓際王子が継承権を争うとなれば、レイ

オス派は元よりスアロ派からもロゼス王子の支持に動く者が多く現れていたであろう事は想像に難く無い。

誰からも期待されていないという事はそれだけ能力なども低く見られている訳で、王子の後ろ盾を宣言して戴冠まで漕ぎ着けたなら、それはそのまま王族の権威を手中にするも同然となる。それこそ我も我もとロゼス王子の後援を申し出る家が後を経たなかっただろう。

「そうして王宮が混乱した隙に付け入る機会を狙っていた黒幕が、ナツハトーム帝国という訳だ」

「繋がりが明らかにな？」

「明確な証拠があがった訳ではないがな、計ったようなタイミングで軍を動かして来たぞ」

騎士団部隊がレイオス達の救出に地下へ向かって直ぐ、国境を警備する西の砦からナツハトーム軍に越境の動きありと緊急警報が出された。その後、西の砦とは連絡が途絶えている為、現在は空挺部隊の飛竜を偵察に飛ばして状況の確認を急いでいる。

グランダールの北西には国境沿いにエイオア領も跨ぐ大きな湖が広がり、ナツハトーム軍は南部から内陸まで延びる湾と大湖の間隙に出来た回廊からグランダール領への進軍を行なう。西の砦はこの回廊を睨む位置にあり、ナツハトームの侵攻を迎え撃つ最前線基地であった。

ここ数年のナツハトーム帝国はレオゼオス王統治下のグランダールに連戦連敗を喫してから国境での小競り合いはあるものの、本格的な侵攻の動きは見せず国内産業の強化などに力を注いでいる事が確認されていた。

特に機械化技術の発展には力を入れており、恐らくはグランダーの魔導技術に対抗すべく機械化兵器の開発に注力していたのだからという見方でグランダー軍上層部の意見も一致している。

「軍事力の底上げが成ったので侵攻を再開しようかと狙っていた訳か」

王宮群で起きた一連の事件。その裏に隠されていた暗躍者による策略の概要、凡そのあらましが語られた所へ伝令からの報告が上がってきた。

「申し上げます。先ほどナツハトム軍が国境を越え、アリアトルネに侵攻。現在街軍と協力して国境警備隊が応戦中との事です」

「常駐させていた正規軍はどうした」

「それが、アリアトルネの正規軍は皆の救援に殆ど出払っている状態だと」

ナツハトムとの国境に近い街アリアトルネは西の砦から南へ半日ほどの場所に位置し、砦に物資を供給するための拠点的な役割をしている街だ。ここを落とされると西の砦が孤立してしまう。

「偵察隊の報告によれば西の砦は半壊し、黒煙が上がっている状態で……」

敵軍に大型攻城兵器らしき物体を確認したとの報告も入っているらしい。砦からの応戦は続いているが、外壁が崩された状態で何日も立て籠もるのは厳しいと考えられる。

「あの街を取られるのは不味い、直ぐに応援を出せ」

レオゼオス王は皆が持ち堪えているなら空挺部隊による支援を行いつつ、援軍を派遣して街の防衛に当たらせるよう指示を出す。兵員の輸送には魔導船が使われる。輸送部隊や援軍を指揮する為、ここに集まっている何人かの将校が王に一礼して慌しく王の間を後にした。

そして入れ替わるように新たな報告があげられる。王城の上層階にある王の間という場所柄上、伝令からの報告は一度城の側近を介して伝えられる事になり、効率が悪い。

「そろそろ軍司令部に移動した方がいいか」

息子達に事件のあらまじや黒幕の事など伝えるべき事も伝え終えた事だしなど、丁度いい位置にあったコウの頭に手を乗せてぼんぼんと撫でつつ場所を変える事を告げるレオゼオス王。何故か沙耶華が恐縮したりしている。

「申し上げます。隣国エパティタから南方よりナツハトームの軍艦と思しき艦隊が迫っているとの報告が来ております」

「エパティタの南だと？ ふむ……そう来たか」

王の間を出ようとしていたレオゼオス王はもたらされた報告にそう呟いて立ち止まると、少し考え込んだ。後に続いていたレイオスやスアロも顔を見合わせて『何時の間にあんな場所から』とナツハトーム軍の動きについて語り合う。

沙耶華に手を引かれているコウは、聞いた事の無い地名だったので「エパティタ」について沙耶華に尋ねてみた。

「え、ええと……わたしもあまり詳しくなくて」

「エパティタ国はグランダールの東南にある小国群の一国、グラン

「ダールの衛星国だよ」

答えに詰まる沙耶華に代わってロゼス王子が教えてくれた。グラ
ンダール領の東南に突き出た半島には街単位、部族単位の小規模な
国が幾つか連なり、それらの小国の中でグランダールと国境を接す
る比較的大き目の国がエパティタ国である。

首都ペンタを中心に北と南にそれぞれ港街があり、西の国境付近
にはパルスという街があるのだが、この街は国境を越えた先にある
グランダール側の国境の街、バラッセとは交流が深い。

「バラッセのおとなりさんかあ」

「コウ君が目覚めた街？」

「うん、おせわになつた人たちがいるんだ」

立地的にグランダールという大国に護られて来たエパティタ国に
はナツハトーム軍に対抗できるほどの力は無く、艦隊の規模次第で
は東南の半島が丸々制圧されてグランダールを挟撃する為の拠点と
もなりかねない。

レオゼオス王の懸念に対し、伝令内容を伝える側近は港街の漁師
が情報源らしいと前置きした上で、艦艇数を二十隻程度であると報
告した。

「詳細な内訳は不明ですが、目撃した者の話から殆どが輸送艦であ
ると思われます」

「となると、多く見積もっても1500人程度の兵員か」

半島を制圧しての挟撃作戦ではなく、エパティタを通過してバラ
ッセの街方面からの後方攪乱的な侵攻を企んでいるようだと思われ
レオゼオス王は、クラカルに駐留させている正規軍をバラッセに差し

向ける方針で指示を出した。

国王以下、この場にいた王子達や将校は軍司令部へと赴き、沙耶華とコウは博士の研究所へ帰される。ここからは軍の作戦など国家の存亡に関わる重要な政策会議にも触れるので一般人は立ち会えない。レイオスも沙耶華に口付けをしてから抱き寄せていた腕を渋々解放した。

何時もは口付けられると直ぐに眼を逸らしてしまうのに、今日に限ってはじつと上目遣いで見つめる沙耶華。

「……もう一度深く口付けてから」
「いいから早く行ってください」

色んな意味で顔を赤くした沙耶華に叱られながら送り出されるレイオスなのであった。

34話：機械化部隊

レオゼオス王より非常事態宣言が発令されて戦時体制に移行した王都トルトリュスは街の要所から魔導船の技術を使った浮遊陣地が空へと上げられ、防空態勢をとりつつ各陣地間を小型の魔導艇で移動する空中回廊が作り出されている。

飛竜の発着場も王都上空に設けられるので非常に運用効率が高い。ここから各方面に偵察隊の飛竜が飛ぶ。

冒険者協会中央本部は伝送具でグランダール国内にある協会支部に開戦の報を伝え、情報の共有と更なる収集に動いている。

街の人々は年配者ほど『ああ、久し振りだなあ』と浮遊陣地を見上げながら概ね慣れた様子で落ち着きを見せ、若い人は怖がっている者とはしゃいでいる者との反応が分かれた。

” ナツハトームは国境に面した砦に戦力を集めて見せながらグランダールを海からぐるっと迂回してエパティタの港街ラパに上陸した”

” パルスを占領してバラッセに侵攻を始めるらしい、恐らくそこからグランダールの食糧庫とも言えるクラカルを攻める作戦だろう”

冒険者協会から状況を伝え聞いた傭兵や冒険者達が酒場で肩を寄せ合いそんな話をしているところへ、小奇麗な格好をした十二歳前後に見える少年が重厚な木の扉を全身で押し開けて店内に入って来

ると、テーブルの間をトコトコと歩いて行く。

普段の賑やかなれど平穏な酒場と違い、戦争で傭兵募集を当て込んで各地からやって来た荒くれ猛者集う現状の殺伐とした酒場には場違いな少年。またその異国情緒も溢れる整った容姿はあどけなさの中に妙な色気があり、そっちの気を持つ紳士の目も引いている。

そんな猛獣の群れの中を行くひよこな少年は、この酒場内で最も近づき難い集団の元へと足を向けると、その集団の一員であるグラマラスな女性にむぎゅっと抱き締められた。

様子を窺っていた余所者組の客達からは『女につかまった!』と囁きあうヒソヒソ声も聞かれるが、事情を知っている地元の客達は何時もの光景だとして羨ましげな視線を向けつつ酒の肴にしている。

「みんなと思つたら、王の間までついて行つてたのか……」

「コウちゃん、叱られなかった?」

「べつに怒られなかったよ?」

椅子に座ろうとしたがカレンの膝上に抱っこされてしまったコウは柔らかい二対の背凭れに身を預けながら王の間で聞いた王宮群での一連の事件について、凡その内容を話した。そしてナツハトーム艦隊の遠征軍がバラッセに迫っているらしい事を心配する。

「バラッセか……クラカルから援軍が出るそうだな」

「昨日の段階で動きはあつたようですが、再編に時間が掛かっているようですね」

訓練学校などの施設やダンジョンのあるバラッセの街には普段から手練の冒険者が多く滞在しており、退役軍人などの熟練者もいる

ものの、街軍の規模は小さく大半は未熟な若者や既に引退して隠居している者達ばかり。戦時で即戦力として使える人材は少ない。

「たぶん、ぼうえい隊のガシエたちやエルメールさんたちも戦うと思うんだ」

「あの時の女剣士か」

そういえばヴァロウ隊の副長に雰囲気似ていたなと思いつく。ウイーク。何時ぞやの悪評を掃うには絶好の機会でもあるのだが、ガウイーク隊にはグランダー軍から冒険者協会を通じて皆の近くにある街、アリアトルネ防衛の支援要請が来ている。

エルメール達の事が心配だというコウに、ふむと考えを巡らせたガウイークはそれならばと一計を案じた。

「コウにはガウイーク隊の代表としてバラッセに行つて貰おう」

ガウイーク隊長の提案により、隊から代表でバラッセの防衛に派遣される事となったコウは、王都でお世話になった人達の所に挨拶をして回っていた。既にガウイーク隊のメンバーはアリアトルネの防衛支援に向けて魔導船に乗り込み、今朝早くに出発している。

皆との別れ際、カレンが旅の無事と再会を祈つてコウの頬に祝福のキスを与えると、レフからも反対側の頬に祝福を与えられた。

「コウちゃん、ぜつたいまたいつしよに旅しようね！」

「……貴方には、まだ教えていない事が沢山ある」

「うん、みんなもがんばってね。またいつしょにぼうけんしよう」

アンダギー博士の研究所では、サータがおでこを合わせて『元気
でね』とハグをした。沙耶華も照れながら頬つぺたを合わせて『気
をつけてね』とハグをする。博士もハグをしようとしたが何故か宙
を舞ったお盆からお茶が降って来て白衣が汚れたので急遽着替えに
席を外した。

「やっぱりこういう別れの場面は美しくないといけないと思うのよ」
「あはは……」

” うっかり” 手を滑らせたらしいサータの咳きを聞かなかった事
にした沙耶華は汗を一筋、苦笑した。

「でも……コウ君の行く街って結構遠いんですね、随分掛かるんじ
やないですか？」

「そうね、でも今は非常事態だから軍が協力してくれるわ」

「ふつうなら十日以上かかるんだけど、空をとんでいくから一日か
二日くらいでつくって言ったよ」

「コウ君、軍隊と戦うんだよね……」

武闘会の試合や王都の地下遺跡でコウが戦う所は見ている沙耶華
だが、戦争という大きな舞台に不安を募らせる。そこへ『渡す物が
あるから待つとれ』と言って着替えに席を外していた博士が荷物を

積んだ台車を押しながら戻って来た。

「なあに、心配せんでもワシの発明の塊と化しとるコウなら軽くナツハトームの連中を蹴散らして来るわい、クワツカカカ」

博士は饒別だと言って複合体専用^{まどろっこしい}に製作していた”魔導槌”^{まどろっこしい}をくれた。自己修復機能を持つ打撃武器という、相変わらず変な方向に進化した大型鉄槌で、ハンマーの形をした先端には片方に先の尖った鋼鉄の槌が付いており、これには複合細胞を融合させてあるらしい。

反対側には内燃魔導器を利用した推進装置が付いていて、柄の部分にあるスイッチで点火する。爆発力の排出によって先端を一気に加速させるという、とても生身では使えない危険な代物だ。

「性能に関する詳細な情報が必要じゃからして、必ず提出しに来るよように」

「うんっ ありがとう」

王宮群の中庭ではこんな時でも秘密の憩い場で寛いでいたロゼス王子が、コウのバラツセ行きを聞いて王城の上層階、エルローゼ王女のいる所まで連れて行ってくれた。上層階にある広いテラスでお茶を嗜んでいたエルローゼは突然の訪問に気を悪くするでもなくテールに招く。

「そう、あなたも戦いに行くのね」

少し表情を翳^{かげ}らせながらコウの前髪をそつと撫でたエルローゼは、

『戦神の御加護がありますように』と祝詞を紡いだ唇でコウのおでこに祝福を与えた。周りにいる侍女や使用人達が声無き声でキヤーッというような反応を見せているが、敢えて視界に入れていない。

「もてもてだね」

「えへへー」

ロゼス王子と中庭まで下りて来たコウはバラッセまでの行程を確認すると軍施設のある区画へと向かう。その道すがら、バラッセの街に関する情報でロゼス王子の知るダンジョンの噂話なども教えて貰った。

「そついえば、バラッセのダンジョンは最深部に”生命の門”という秘宝があるらしいって話を、前にレイオス兄さんから聞いたよ」
「ひほうかあ〜」

レイオスは『何れ俺の隊で探索に行こうと思っている』と話していたそうなの。

「君の友人達によろしくね、また会おう」

「うん、ここまで送ってくれてありがとう」

軍施設から魔導艇で王都の上空へと上がり、浮遊陣地の飛竜発着場まで運んで貰ったコウはロゼス王子に手を振って別れた。バサバサと羽音を鳴らして下りて来た伝書鳥が直ぐ傍の手摺りにとまると、コウは少年型召喚獣を解除して伝書鳥に憑依する。

飛行速度と航続距離を重視した無人の偵察飛竜に伝書鳥の状態で

乗せて貰い、クラカルまで一直線に飛んだあと、そこから伝書鳥でバラッセに向かう。コウが精神体で飛竜に触れて『よろしくね』と意思を伝えると、”まかせろ”と返って来た。

グランダールの各方面から帰還した者やこれから偵察に飛び立つ者、王都トルトリユスの上空を偵察兵の搭乗する飛竜が飛び交う中、伝書鳥コウを乗せた偵察飛竜がクラカルの街を目指して飛び立った。

王都を飛び立った偵察飛竜がクラカルの街上空に着いたのは昼下がりを過ぎる頃。街上空で旋回する偵察飛竜の背中から伝書鳥コウが飛び立つ。

「ぴゅりりり」「ありがとう」
「キョー」

クラカルの街に降りていく飛竜と声を交わした伝書鳥コウはそのままバラッセの街を目指して東へと翼を向けた。

「どうしやした？ お嬢様」
「竜が飛んでいるわ」

足元でじゃれる子犬のファスターをあやししながら額に手を翳して空を見上げているディレトス家令嬢、アリスの視線の先を、一頭の飛竜が旋回しながら降下している。

駐留軍施設のある辺りへと降りていく姿を認めた庭師ハルバードは、ナツハトームとの開戦に関係しているであろう事を推測した。

「ありゃあ偵察飛竜ですな、王都から飛んで来たやつでしょう」

バラッセの街へ送る援軍の編成に手間取る駐留軍の様子でも見に来たのかもしれないと眼を細めるハルバード。

「王都……コウは王都にいるのよね」

少し前にゴーレムの冒険者として正式登録されたという不思議な存在。名づての討伐集団と行動を共にしているらしいコウの事を心配するアリスは、遠く離れた王都の地にいるであろう友人に思いを馳せる。

アリスの足元では、さつきまでじゃれていたファスターが東の空を見上げてお座りしながら尻尾を振っていた。

ガウィーク隊と行動を共にし始めた岩山を眼下に飛び続けること暫らく。山間の向こうに靄の掛かった街の姿が浮かび上がる。夕刻前の西日に照らされるバラッセの街は、防壁の一部が崩され街の一角から黒煙が上がっていた。

『伝書鳥君、急いで！』

「ピュリリッ」

エパテイタの港街ラパに上陸したナツハトームの遠征軍は港街を占拠してそのまま国境の街パルスに進軍すると、パルスを拠点とすべくラパから戦力の輸送を行なう間、斥候部隊でバラッセの街に侵攻。牽制で戦力や反応を測っている。

「思ったより脆弱ですね。隊長殿、これなら我々だけで占領できるのでは？」

「無茶をいうな副長。辺境とてグランダール領の街だ、パルスのようにはいかん」

斥候部隊を指揮する隊長は分かっていて態と言っているのである。副長の戯言に付き合いながら、あともう少し攻勢を強めれば占領は兵力の関係で無理でも突入までは持つていけそうな手応えを感じていた。

「まあ、後で楽が出来るよう仕掛けておくか。戦車を出せ」

「了解しました。戦車隊！ 前へーっ」

副長からの号令を受け、ナツハトーム軍の機械化部隊で運用される対拠点制圧用新兵器”機械化戦車”が姿を現した。

35話：門前の攻防

崩れた防壁の隙間から敵軍の動きを監視していたガシエ達防衛隊は、ナツハトーム軍の新兵器と思しき物体の登場に門前を護るエルメール達へ警戒を呼びかけた。

「また何か出て来たぞ！」

「あれは、ナツハトームの機械化戦車だね。動力の核はゴーレムの技術らしいよ」

「奴等、あれで門を破る気か」

破城槌の付いた箱型の機械化戦車。盾や甲冑の装甲で固められている武装馬車にも似たその戦車は固定式の機械化連弓が複数搭載されている。

現在バラツセ側は街軍と冒険者協会支部の関係者から手練勢が総出で応戦している状況なので、門が破られて敵部隊の侵入を許すと街中での迎撃に人が足りなくなる。その状態で敵軍の本隊が制圧に乗り出せば為す術もなく占領されてしまうだろう。

戦車の後方からは大型投擲器による火炎樽攻撃が続き、爆発と炎の雨に曝されるため門前に兵を置く事が出来ない。防壁の上から投石と射掛けで攻撃するが、戦車には全く効果が見られなかった。

「びくともしねえな」

「こちらにも大型兵器があれば良かったのだが……」

「無いもの強請りしても仕方ないね。とりあえず、あの戦車は構造上あまり大きな穴や段差は越えられないみたいだ」

門の前に大穴を空けるのは難しいが、長い木材でも落としてバリケードにすれば破城槌が届く前に足止め出来るのではないかというリシエロの提案に、ガシエは部下を呼び寄せようとした。しかし、それを遮ってガシエを呼び付ける怒声が響く。

「おい！ 防衛隊の指揮官は何処だ！ 奴め、逃げ出したのではあるまいな！」

「はいはい、俺はここですよー総指揮殿ー」
「何故そこに居る！ 勝手に持ち場を離れるな！」

現在バラツセの街軍で総指揮を任されているグランダール正規軍の古い軍服を着た老齢の男が指揮杖を振り回しながら喚いている。

街軍に所属する元正規軍人の彼は、その昔一軍の指揮を執った事があるという経験を買われて統治者の意向により今回の事態に対する防衛の総指揮に抜擢されたのだ。

しかし如何せん命令する事には慣れていないようだが、その能力には疑問が残ると内心で評価を下すエルメール。防壁の足場から下りて来たガシエに指揮官たる者の振る舞いについて語り始める総指揮に、エルメールは声を掛けた。

「総指揮殿、敵軍が破城槌を付けた戦車で迫っている。門前に木材を落として足止めをしたいのだが、兵を動かしてくれないか？」

「馬鹿者！ 防壁の修理にも使う木材をむざむざ棄てるやつがあるかっ 第一冒険者風情が軍に指図するな！」

「ではどのように足止めを？」

「ふんっ 足止めなど必要無い、あんな虚仮脅こぼせしの玩具など歩兵で組み付いて引っくり返してやれば良いのだ」

こちらから打って出よと主張する総指揮に、エルメールは門前の現状について問題点を挙げた。敵軍の投擲器による火炎樽の攻撃が防壁にまで届いている為、外に兵を置く事が危険である事。戦車には機械化連弓が複数搭載されており、近づく事は困難である事。

また相当に重量もありそうなので、上手く組み付けても横転させるのに難航すると推測され、そこを敵軍から狙い撃ちにされる危険もある。

「そんな事はやってみなければ分かん！ いや、やらねばならんのだ！」

「御老体、考え無しに兵を消耗させるつもりなら今すぐ総指揮を降りては如何か」

「っ！ な、なんたる非礼！」

総指揮が怒鳴った瞬間、それを掻き消すようにズシンという大きな衝突音がして門の扉が軋んだ。機械化戦車による破城槌の一撃が門を叩いたのだ。もう一度勢いをつけようと後進して行く戦車。それを援護するように火炎樽が飛んできて門前で爆ぜた。

「内輪揉めをしている場合ではないな、ガシエ！ 足止め用の木材と起重機の用意を頼む！」

「勝手な指示を出すな！ 工兵部隊を組織しろ、次の突撃に合わせ門前に展開し、あのガラクタを転がしてバリケードに使ってやれ」

「正気か！ 門を開ければあの戦車が突入してくるぞ！」

「だからソイツを転がしてバリケードに使えば良いと言っているの

だ！」

激しく対立する街軍総指揮と冒険者勢代表のエルメール。門の外では戦車の再突撃に合わせて火炎樽の攻撃が収まっている。ガシエとしてはエルメールの安全策を取りたい所だが、街軍の指揮下に入っている以上命令無視は出来ない。

「雇われ者は辛いねえ」

ここは間をとって足止め用の木材で持って戦車に組み付き、横転させるといふ作戦を試みる事にした。

「大丈夫なのか？」

「何とかしてみるさ、戦車が扉に突っ込んだら開けてくれ。上から援護を頼む」

ガシエ達防衛隊に街軍の工兵が数人加わり、門の裏側で木材を抱えて待機。機械化戦車の破城槌による次の一撃を待つ。防壁の上には防衛隊の活動を援護する為、弓隊が姿勢を低くしながら配置に付いた。

「くるぞ！」

ズシーンという衝突音と共に重厚な門の扉が軋む。衝撃で一瞬開いた中央部分や地面の隙間から木片の混じった塵の煙がパツと舞い上がり、扉の表面を補強している鉄板の止め具が幾つか弾け跳ぶ。

「今だ！」

「開門！」

再び勢いをつける為に後進し始めていた戦車はいきなり門が開いた事で急制動を掛けた。時間差で門扉の門が開閉機構でも壊れたのかと、街への突入に走行装置を”前進”に切り替えた所で門から飛び出して来る街軍らしき兵士の接近に気付く。

「敵兵接近！」

「連弓による迎撃は？」

「距離が近過ぎます」

「敵兵、車体に接触！」

ガリゴリと車体の下に何かを差し込んでいる音が車内に響き、息を合わせる掛け声と共に車体が少し揺れた事で相手の狙いを理解した戦車長は思わず笑いをこぼす。

「はっはっは、奴等こいつを引っくり返すつもりでいるぞ」

「グランダールの概念には無い拠点制圧兵器ですからね。無知なのも仕方ありません」

「軽く蹴散らしてやりますか」

ゴーレムの技術を自走用動力に使ったナツハトーム製機械化戦車は軍用武装馬車をベースに過剰装甲で防御を固めた五人乗りの動く特火点^{トーチカ}。通常の馬では重過ぎてまともに引く事も出来ない程の重量がある。

車両の前後には接地面を鉄で補強されたギアのようなイガイガした形の幅広な車輪があり、それが斜めに傾いて地面を削りながらそれぞれ逆方向に回転する事で車体を急旋回させて取り付いているバラツセの街軍兵士を蹴散らす戦車。

車体を覆う硬い装甲や破城槌で横薙ぎにされて撥ね飛ばされるガシエ達防衛隊。防壁の上から大型投擲器付近の敵兵を牽制していた弓隊に援護射撃を続けるよう指示を出して兵達の動揺を抑えるエルメールは、総指揮に防衛隊の救出と戦車の陽動を呼び掛けた。

「総指揮殿っ 早く彼等の救出を！」

「なぜ作戦通りに動かん……っ どうして命令どおりできんのだ……！」

「総指揮殿！」

「彼はダメだエルメール、僕らで陽動を引き受けるからガシエ達の救出を頼む」

冒険者協会の手練勢と共に戦車の背後へ回り込む動きを見せるリシエ口。そういう役回りは本来自分の仕事なのにと愚痴を呟きながら救出に分隊を調えたエルメールは飛び出すタイミングを見計らう。

新たな部隊の接近を察知した戦車がそちらを追うように車体先端の破城槌を向ける。しかし戦車はリシエ口達を追わず、扉が開かれたままの街門へと向き直った。そして門前の道の両脇に倒れる防衛隊とその救出に出向いた弓兵の分隊を無視して街への突入を始める。

「いかん！ 街に入り込まれるぞ！ 誰か戦車の足止めをっ」

街中の重要施設などに被害を受ける可能性も然ることながら、この状況で戦車が門を潜ってしまえば大型投擲器からの火炎樽攻撃が再開され兼ねない。弓隊の牽制も続いているが、敵兵からの射掛けによる狙い撃ちは阻止出来ても投擲器の稼働を阻止するまでには至

らないのだ。

「うおのれナツハトームの蛮族共めが！」

「そ、総指揮殿！ おやめ下さいっ 危険です！」

ガリゴリガリと独特の走行音を響かせながら門を潜ろうとする戦車に剣を向けて立ちはだかったのはかつてのグランダール正規軍騎士団部隊長、老兵の総指揮だった。下がらせようと縋りつく部下を振り払い、古風な”突撃の構え”を取ると正面から機械化戦車に突っ込んで行く。

「バカな事を……っ リシエロ！ ガシエ達を頼む！」

陽動部隊に防衛隊の救出を任せたエルメールは戦車を追って走り出す。

「下がれ総指揮殿！ 無茶をするな！」

「偉大なる故郷グランダールの地を汚す蛮族共に我が誓いの刃にて裁きの鉄槌を――」

今は廃れた風習である討伐の口上を述べながら突撃する総指揮。

そんな老兵を踏み潰さんと速度を上げる機械化戦車。破城槌に貫かれるか、戦車に撥ね飛ばされる総指揮の姿がエルメール達の脳裏に浮かぶ。もう間に合わない。誰もがそう覚悟したその時

何処からか鳥の鳴き声が響いた。

凄まじい轟音。砕けた木片が宙を舞い、陥没した地面から広がる

衝撃波が砂塵を吹き散らす強風となって吹き荒れる。一瞬、土煙の中に見えたのは後部を大きく浮かせてバウンドした機械化戦車の姿。束の間の静寂に何事が起きたのかと注視する者達の間で全ての動きが止まる。

衝撃波に吹き飛ばされて尻餅をついた総指揮が見上げたのは、碎けた破城槌を踏み潰して仁王立ちしている巨大な甲冑のような後ろ姿。

「ヴオオオオオ」『間に合ったー』

一方、車両前部に搭載していた破城槌を踏み抜かれて大きく車体を揺らされた戦車内では、強かに頭をぶつけた搭乗員達が状況の確認を急いでいた。結合部が破損していたので前部の装着機構を切り離し、動力に問題が無い事を確認すると一旦後退しながら事態の把握に努める。

「何があつた？ 敵の投石器か何かか？」

「いえ、アレを……どうやらあのゴーレムから攻撃を受けたようです」

「……見た事のない型だな、高位の魔術士か魔導技士でも居たか」

細い覗き窓から甲冑のような巨漢ゴーレムの姿を確認した戦車長は、近くにゴーレムを喚び出した術者がいる筈だとして戦車を突貫形態から対人攻撃形態に切り替え、ゴーレムを避けて街へ突入する指示を出した。

人型のゴーレムでは車両型ゴーレムでもあるこの戦車の機動力に

ついて来られない。不意の一撃で破城槌と車両装備の一部を破損したが本体にダメージは無く、機械化戦車の本領である拠点制圧兵器として街中の敵兵力を殲滅して回るのだ。

建物の破壊は難しいが街を防衛する兵達なら束になって掛かろうが戦車の敵ではない。攻撃魔術に対しても対魔術処理の施された装甲は高い防御力を誇る。装甲の隙間から鋭い刃と回転する丸鋸状の刃がせり出し、戦車はまず近くにいる街軍兵士に狙いを定めた。

人間を解体する為の機械。金属の擦れ合うギヤリギヤリガリゴリという何とも嫌な音を立てながら動き出す刃と装甲で固められた戦車は、総指揮の周りに集まっている街軍兵士に向かって突進する。しかし、素早く正面に周りこんだ複合体コウが車体前面の刃を壊して受け止めた。

「！っ 何をやっている、ゴーレムは避けると言っただろう」

「た、確かに避けましたが……ゴーレムの動きが早過ぎて うわっ」

ガンツと外装を殴りつけられ、車体が揺れる。更にガンガンと連続して打撃音が響き、戦車の装備を担当する乗員から対人攻撃用の武装が破壊されているとの警告が発せられた。

「正面及び側面回転鋸、全機破損！ 棘刃も次々折られて……ああっ 上部連弓も破損！」

「くっ なんて器用なゴーレムだ……撤退するぞ！ このままじゃ装備を根こそぎやられてしまう！」

ガリゴリとギア状の車輪を回転させて後退を始める戦車。しかし複合体は戦車上部面に搭載されている機械化連弓をつかんで車体に

乗り上げると、移動する戦車の上から攻撃を続ける。邪魔な機械化連弓を全て引っこ抜き、天井を思いつ切り殴りつけた。

エルメールの目前を通り過ぎる機械化戦車。ゴーレムにガンガン殴られながら門の方へと後退して行く。総指揮の様子を確かめたエルメールは門前へ踵を返すと、救出作業をしている部隊に街中へ退避するよう呼び掛けた。

「急げ！ 戦車が撤退すればまた火炎樽がくるぞ！」

門を出た戦車は蛇行しながらゴーレムを振り落とそうとしているが、ゴーレムは上部の剥がれ掛けた装甲を掴んで離さない。そして大きく振り被った右腕が振り下るされ、天井を突き破って深々と突き刺さった。蛇行していた戦車の動きが止まる。

どうやら動力の核に致命的な一撃を与えたらしく、動かなくなつた戦車の後部が開いてそこから搭乗員が逃げ出していく。

「おおっ あのゴーレム、戦車をぶつ壊したぞ！」

煙を吐く戦車の上に立ち、尚も破壊活動を続けるゴーレムと逃げ出していく搭乗員の姿を見た誰かが叫び、救出部隊と共に街中へと退避中の街軍兵士や冒険者勢から歓声が上がる。

「投擲器に動きあり！ 急いで退避を！」

戦車の搭乗員を狙い撃ちにしようとしていた防壁の上にいる弓隊の一人が、大型投擲器の動きに気付いて警告を発した。正面の街道

から脇にそれた平地に陣取る大型投擲器より、撃ち上げられた火炎樽が弧を描いて壊れた戦車の近くに落下。戦車の残骸とゴーレムが炎に包まれた。

『おつとつと、燃えちゃっう燃えちゃっう』

機械化戦車から表面を覆う装甲板や車内の荷物入れらしき空間に入っていた携帯食のようなモノ、動力装置の燃料であろうゴーレムの触媒鉱石など色々回収しては異次元倉庫に移していたコウは、戦車が炎に包まれたので複合体を片付けてやり過ごす。

『さつきチラツと見えた人って、エルメールさんだったよね』

コウは鎮火してから少年型になって街に入る事にしようと考え、炎と煙の中に浮かびながら戦車から回収した戦利品を整理する。装甲板は何かに使えるかもしれない。携帯食は棒状の干し肉や乾いた果物らしきモノが入っていた。触媒鉱石は普通に魔力の籠った安物の鉱石だ。

『グランダール軍の携帯食より質素だなあ。入れ物に仕掛けがないから、長持ちするモノじゃないとダメなんだろうなあ』

ちなみにグランダール正規軍の携帯食は入れ物が魔導製品で保温や保冷、保湿効果を持ち、密封性も優れている為そこそこ新鮮な食料を入れておける。

ふと見ると、夕暮れの平地で大型投擲器周辺に集まっているナツハトーム軍が陣地の構築を始めていた。

36話：帰郷と再会

命からがら自軍に逃げ帰ってきた戦車長以下搭乗員達は僅かに垣間見た街の様子について聴取を受けている。戦車が破壊されたので一旦攻勢を止めたナツハトーム軍の機械化斥候部隊は、ここに陣地を敷いて本隊の到着を待つ事にした。

少々強力な召喚獣相手でも耐えられる仕様で設計されていた戦車が壊された事に、かなり質の高いゴーレムを用意していたようだと言分析する斥候部隊の隊長。

「相手のゴーレムも潰したから痛み分けか」

「流石に魔導関係は強いですね、グランダールは」

「本隊と残りの戦車はどうなっている？」

「ようやく荷揚げが終わったらしく、今こっちに運んでいる最中です。四台揃えばもうゴーレムだろうが召喚獣だろうが止められませんよ」

若い副長はそう言ってバラッセの一部崩壊している防壁や焦げた半開きの扉に視線を向ける。ここで一台潰されたのは勿体なかったが、その一台と大型投擲器だけでこれだけの被害をもたらせたのだ。突入用の戦車と遠征軍本隊が来れば、こんな街など一溜まりもあるまい、と。

「そうだな。本隊の到着までここで陣を張りつつ投擲器で牽制しておくか。野営の準備だ、夜襲に注意するように」
「了解しました」

夕闇に包まれ始めたバラッセの街。門前に散らばっていた瓦礫も撤去されて、門扉はすっかり閉じられている。負傷者の治療と部隊の再編成が行なわれている中、街の様子を見て回っていたエルメルは門前に戻って来てガシエやリシエ口達と合流した。

「ガシエ、怪我はいいのか？」

「ああ、掠り傷だあんなもん」

破城槌に撥ね飛ばされたダケだからなと笑うガシエ。それよりも総指揮が臥せってしまったので指揮が少々混乱しているのが問題だという。戦車が街に侵入した時は焦ったが、殆ど何も出来ずに撤退していったので今の所は被害も少なくて済んでいる。

「いいタイミングで現れたよな、あのゴーレム」

「街に滞在してる一般の冒険者が手を貸してくれたのかもしれないね」

「ああ……誰が投入したゴーレムだったのか分からないが、助かった」

その時、門扉に何かがぶつかるような音が聞こえた。ハッと緊張した表情で顔を見合わせたエルメル達はナツハトーム軍の偵察か何かかと声を潜めて門扉から距離を取り、耳を欹てる。トントンと扉の外からノックするような音。そして

「エルメールさん」

「ん？」

「子供？」

「あけてー」

今度は怪訝な表情で顔を見合わせるエルメール達。防壁の上に陣取る見張りに問い合わせたが、位置的に上からだと言角になる門扉の正面に居るらしく、ノックと呼び掛け主の姿が確認できないという。

とりあえず警戒しながら少しだけ扉を開いてみると、そこには異国人風の顔立ちで黒髪の十二歳くらいに見える少年が立っていた。

「子供だね、ずっと外に居たのかな」

「よく無事だったものだ」

遠くに見えるナツハトーム軍陣地の篝火に注意を向けながら中へと誘うエルメールとリシエロ。二人の無事な姿にホッとすするコウ。久し振りに会えた二人が相変わらず一緒にいる事が何となく嬉しいコウは、まずは何から話そうかと考えていてふとガシエの姿も見つけた。

「あ、ガシエだ」

「お？ 俺の事も知ってるのか」

「ボク、コウだよ」

ほらっとな例のアミュレットを出して首に掛けて見せるコウ。

「なにっ」

「なぬっ」

「ええっ」

驚きの三重奏。

「もしかして、元の身体に戻れたのか？」

「あ、まだ話してなかったっけ」

複合体の事は冒険者として登録した事を既に知られているが、少年型召喚獣の事はまだ手紙に書いていなかった事を思い出す。コウはこの身体もアンダギー博士に貰ったモノで、街中での生活を送る際に使っている事を説明した。

「！っ まさか、さっきのゴーレムはお前だったのか」

「うん、おおいそぎで飛んできたんだけど、まにあって良かったよ」

そうだったのかと、先程の戦車とゴーレムの戦いを振り返るエルメール達。ちいさな少年と門前で和やかに言葉を交わす彼等に、周囲の街軍兵士や冒険者勢は不思議そうな視線を向けていた。

「また、お前に助けられたな」

「えへへー」

深夜。

街軍施設としても使われている統治者の屋敷の大広間にて、中央のテーブル上に広げられた街とその周辺を描き出した地図を中心に集まっている街軍士官や冒険者協会の手練勢、それにバラッセの統治者貴族。

彼等はナツハトームの遠征軍による攻撃に今後どう対処していくかを話し合っていた。王都の迅速な指示によりクラカルからの援軍も向かって来ているので、あと二日ほど持ち堪えればナツハトームの遠征軍は規模からして撤退せざるを得なくなるだろう。

「ナツハトーム軍の狙いはここを拠点にクラカルを脅かす事で西の国境から来る本隊を援護する事にあると考えられる」

「正規軍の戦力をこちらに割くよう仕向けるという訳か」

隣国エパテイタの港街ラパに上陸したナツハトーム艦隊の遠征軍が国境の街パルスに集結させている兵力は当初の予想より少なく凡そ1000人規模と見られ、兵士の代わりに戦車や大型投擲器など機械化兵器が多数導入されている。

「防衛に当たって一つ提案、というより統治者殿に要望がある」

「何かね？」

「総指揮を代えて頂きたい」

会議の席でエルメールは元正規軍士官だったという老兵の彼を能力に疑問が残るので総指揮から外して欲しいと要請した。あまりにキツパリ言い切るエルメールに、会議の出席者達から戸惑いとも憤りともつかないざわめき上がる。ちなみに本人は今臥せっている

ので不在だ。

「しかし、彼は防衛の任務を果たしているではないか？」

「今回は運が良かっただけです。戦車の侵入を許し、無駄に兵を散らす所でした。……ガウイーク隊から派遣された応援が間に合わなければ、彼自身も無事では済まなかったでしょう」

「ふーむ……いや、しかしなあ……ああ、こうしよう。冒険者協会からの部隊は君が独立した勢力として指揮を執るといい」

「街軍と別系統の指揮で連絡しろと？ それでは現場が混乱するだけです」

件の老兵を総指揮から外す事に渋る統治者。かの御仁に何か個人的な思い入れでもあるのだろうかとエルメールは訝しむ。

「いやいや、持ち場は予め完全に分けて置くようにするから、それで上手く調整してくれ」

「何故そこまで彼の登用に拘るのです？ 兵達の命を預かる以上、納得の行く説明が無ければ受け入れられません」

統治者の屋敷で防衛構想について話し合われている頃、コウは街の避難所の一つとなっている訓練学校の校舎でニーナやルカベルと再会していた。訓練学校の生徒達は街の巡回や配給その他の手伝いをやっているようだ。

「ええーっ 本当にあなたがコウちゃんなの？」
「ボクだよー」

「っていうか、人型の召喚獣ってすごく値が張る代物の筈なんだけど……王都の魔導技師って豪儀なんだなあ」
「ハカセはお金持ちだからねえ」

校舎の一角で語り合う三人と一匹。さっきまでニーナの膝で丸くなっていた校舎猫のコウは、少年型コウの膝で丸くなっている。起きた。

「あ、エルメールさん」

「ここに居たかコウ。お前達、夜番か？ 無理はするなよ」

「はい」

「エルメール女史は会議帰りですか？」

足元に『ニヤー』とすり寄って来る校舎猫の裏顎を撫でるエルメールは、統治者の屋敷で行なわれた防衛構想についての話し合いと人事問題について少々揉めた事に愚痴をこぼす。結局、街軍の総指揮は件の老兵のまま回復次第指揮に復帰させる事で通された。

「全く、あの統治者は……こういう状況でも本質は変わらんらしい」
「何かあつたんですか？」

「ああ、少しな」

会議の席で総指揮の解任を訴えるエルメールに対し、統治者は件の老兵をレオゼオス王より宜しく頼まれている相手なのでとぶつちやけてそれ以上の議論を封じた。エルメールの訴えに賛同していた他の者も、国王の名を出されては引き下がるしかない。

どういった経緯であの御仁がバラツセで街軍の顧問を務めるようになったのかは明らかにされなかったが、要は国王に対する媚び売りなのだ。エルメールは統治者を批難する。

「おまけにコウがガウィーク隊の代表で来た事を挙げて、何時ぞやの保護申請を却下させた事まで正当化する始末だ」

ガウィーク隊が機械化戦車を撃退した強力なゴーレムを送ってくれたのは魔獣犬コウの討伐を黙認した事が絡んだ結果だとして、当時協会に所属する冒険者や一般住民からも抗議を受けた失策を長期的な利益を見据えた判断であったと言って憚らない統治者に憤るエルメール。

尤も、エルメールも統治者の方針に懐疑的であった事を理由にコウの事を半ば隠蔽していたような状態だったので強く反論できなかったらしい。

「まあまあ、すぎたコトは水にながそうよ。あんまり怒るとケンコウとビヨウに良くないそうだよ？」

「……一応お前の事なのだがな」

はあっと溜め息を吐いて気持ちを切り替えたエルメールは改めてコウとの再会を祝し、来訪を歓迎すると、明日からの防衛に関して決まった事柄などを説明した。基本方針はクラカルからの援軍が到着するまで持ち堪える。

具体的な行動はやはり街の防備を固めて侵入を阻止する事。特に例の機械化戦車は入り込まれると厄介だ。

「ナツハ टीम軍は隣街パルスに集結させている戦力でここを狙って来るようだ。戦車もコウが潰したあれ一台だけではあるまい」

「あれって、けっこうじょうぶだったよ」

「あの……エルメール女史、コウがナツハトーム軍を追い払ったって話は」

まだ複合体姿のコウを見た事が無いニーナとルカベルは、何人もの街軍兵士を蹴散らしたという機械化戦車を相手にこの小さな少年がどうやって戦ったのか想像できないでいた。折角なので二人にも「一応”本体”という事になっている複合体を披露しておく事にするコウ。」

眩しい光を残して少年型の召喚獣を解除したコウは、異次元倉庫から複合体を取り出して憑依する。

「ヴオウオオ」こんなんだよー”

「っ……!!」

「……っ」

ズシンツと地響きを立てて現れた巨漢ゴーレムに驚く二人。ルカベルは硬直しながら見上げ、ニーナは尻餅をついた。校舎猫のコウは気にせず壁際で毛繕いをしているのだった。

コウがバラツッセの防衛に帰郷して三日目。街門の防壁から見えるナツハトーム軍の陣地に大きな動きがあった。

昨日の夜、パルス方面から来たらしきナツハトーム軍の隊列が確

認されていたのだが、篝火に照らされながら陣地に入っていく様子を監視していた見張りの話しによれば、隊列の中で運搬される大型投擲器に混じって機械化戦車の姿も何台か見えたという。

夜が明けると陣地に聳え建つ大型投擲器の数が二基から十基に増えており、防壁からは見えないが陣地後方に上がる炊事のモノと思しき立ち昇る煙の量や範囲から相当数の兵力が集まっている事が推測された。

「あの数の投擲器だけで街が壊滅しそうだな」

「実際に稼働しているのは半分も無いと思うよ」

最初に建っていた投擲器の傍には撃ち出す為に必要らしい資材が積み重ねられていたが、今現在確認出来る投擲器で傍に資材が置いてあるのは四基しかない。他はまだ準備が出来ていないのか、或いは威嚇用に組み立てて置いてあるのかもしれないとリシエロは分析してみせる。

「まあそれでも、四基あれば十分脅威だけどね」

昨日は二基の投擲器から時折思い出したように飛んで来る火炎樽の攻撃だけで街の東門防壁は既にボロボロ状態。初日に崩された部分や門扉は木材と石材で補強を重ねているが、突き崩されるともはや崩壊は免れない。

「包囲されていないだけマシだな。今日を持ち堪えれば援軍が到着する筈だ」

クラカルからの援軍が街に入ればナツハトーム軍によるバラツセ

の制圧は限りなく不可能に近くなる。後から後から援軍を送り込めるグランダー側に対して、ナツハトームの遠征軍は敵地に拠点を構えたまま現兵力だけで対抗しなくてはならないのだ。

「向こうもそれは分かっている筈……恐らく今日は全力で街を取りに来ると思う」

リシエロは大量の大型投擲器が意味する所に敵の狙いを読む。バラッセの街を制圧後、直ちに街の各所へ設置する事で一時的に街を要塞化してクラカルからの援軍を撃退し、その後も増援を呼び込みながらグランダーの背後を脅かす存在として戦況に影響を与える。

「つまり、クラカルを脅かす為の攻撃部隊ではなく、占拠した街を拠点にひたすら防衛してプレッシャーを与えるのが目的の戦略部隊か」

「そう考えると、遠征軍の内訳にも納得出来るんだ。敵陣へ一気に切り込んで来る部隊にしては編成が長期戦を想定してると思う」

東門の傍に仮設された冒険者勢の防衛司令本部のテント内で、バラッセの街とその周辺を記した地図の上に駒を置きつつ説明するリシエロがそこまで話した時

「ちよつと良いかね」

「え？」

声を掛けられて振り向くと、そこには部下を連れた総指揮の姿があった。若干表情を険しくするエルメールだったが、極めて自然な動作でリシエロの手が彼女の手に重ねられた事で感情を宥められ、沈黙が維持された。

総指揮はリシエロの説を聞いて二、三の質問をすると、ふむと頷

いて街軍の司令部施設へと去って行った。腰の低い部下がペーパーとエルメール達に頭を下げ下げ総指揮の後を追う。

「……なんだったのだ？」

「うーん、なんだか憑き物がとれたような感じだったね」

リシエロの的確な表現に同意しつつも、エルメールは少し雰囲気が変わった総指揮の事を訝しんだ。

37話：バラツセ防衛

まだ朝の緩慢とした空気が残るバラツセの街並み。非常事態にある現在は日常に見られる生活の喧騒も無く、門の周辺には殺伐とした緊張感が漂う。そんな一時ひょとの静寂を破る監視役の声が警戒を叫ぶ。

「敵陣に動きあり！」

炊事のモノと思しき立ち昇っていた煙が消えて投擲器周辺に敵兵の姿が目立ち始めていたのだが、遂に行動を開始したらしく平原の向こうから現れる機械化戦車が二台と、その後ろに続く兵士の隊列、目測で凡そ500人程の部隊が確認された。

510

「来たか……。コウ、そつちの準備はいいか？」

「ヴオウウア」”大丈夫だよ”

防壁を補強する部隊に混じって木材を抱えている頭一つ飛び抜けた複合体コウが、光の文字を出して応える。戦車の突入前に投擲器による攻撃があると睨んだエルメールは、たとえ防壁が崩壊しても容易に瓦礫を踏み越えて来られないよう、戦車の足止めを図る作戦で挑む。

敵兵の突入時には投擲器の攻撃も止む筈なので、足止めした戦車はコウに任せ、敵兵は弓隊で削りながら街軍が直接戦闘で食い止める。

今回は総指揮も特に口出しして来ない。尤もそれは、例の会議で統治者が提案した通り指揮が別れている為、街軍を動かす総指揮はエルメールが指揮する冒険者勢に口出しする権限が無いからとも言えるのだが。

「敵軍！ 前進を始めました！」

「投擲器より飛来物接近！」

警告を発して即身を屈める監視役。直後、シウルシウルという風を切る音が近付いて来たかと思うと、防壁の外で爆発が起きた。投擲器による火炎樽攻撃が始まったのだ。四基の投擲器より順次放たれる火炎樽の攻撃で絶え間ない爆発が続く。

大型投擲器はこちらからの火矢による射掛けが届かない位置に設置されており、飛来する火炎樽も風向きによつては防壁に届くというギリギリの距離なのだが、それだけに何かの拍子で防壁を越えて来る恐れもあるので油断は出来ない。

防壁の影に息を潜め、暫らく続く爆音に皆が恐々としながらも『バラツセを護りきれば次はエパティタの解放だろうか』等と話し合っていたその時、早馬を駆る伝令がガラガラに空いた中央通りを疾走して来ると、東門前に陣取る冒険者勢や街軍の防衛隊に警告を發した。

「西門より戦車接近！」

ナツハトーム軍は昨夜パルスより進軍して来た部隊が陣地入りする時、そのまま別働隊が西門を狙える位置へと動いていた。陣地側で篝火を焚いて投擲器の運搬などを見せる事で注意を引き付け、そ

の際に夜の闇に乗じて街の西側まで回り込んでいたのだ。

西側は今日あたりクラカルからの援軍が来ると分かっている、ナツハトーム軍も下手をすればグランダール正規軍に背後を突かれかねない西門に兵を当てて来る事はないだろうと見られていた為、少し手薄になっている。

伝令によれば西門に向かってきているのは機械化戦車二台のみで、他に兵は見当たらないらしい。

「援軍が来る事を前提にした布陣の裏を突いて来たね、相手はこの一戦に賭けてるよ」

「我々が東門に防衛力を集中して来ると踏まえた上での策か、中々やってくれる」

東門側には投擲器による攻撃と戦車に歩兵も加わっている、こちらから人数を割くことは厳しい。どうすべきかと逡巡するエルメール。その時、老兵の総指揮が自身の部下に命令を出して街軍兵士の部隊分けをすると、ガシエ達防衛隊や兵士数人を残して工兵部隊を編成した。

「西門には儂が行こう。こちらは君に任せる」

「総指揮殿……？」

先日までと比べてやはり明らかに雰囲気の違い、総指揮はそう言っ
て街軍兵士の半数をエルメールの指揮に預け、工兵部隊を引き連れ
て西門へと向かう。その古い軍服姿の背中を複雑な表情で見送るエ
ルメール。

「コウ」

「ヴァウ？」　「うん？」

「こっちは我々だけで持ちそうだから、総指揮殿の援護を頼む」
「ヴォヴァアウ」わかったー」

総指揮と工兵部隊を乗せた馬車を追って魔導輪で滑るように移動するコウ。東門を護る冒険者勢や街軍兵士達はその見慣れない移動法に興味を惹かれるも、間隔を開けて爆発する火炎樽攻撃で防壁の一部が欠け落ち始めた事に気を引き締める。

「今日を耐え抜けば我々の勝ちだ！ 奴等を追い返すぞ！」
「オオーー！」

冒険者勢と街軍兵士達はエルメールの鼓舞に応えて氣勢を上げた。

かつて延々と続く終わりの見えないナツハトームとの戦^{いく}で長きに渡って戦場に身を置き、小競り合いから中規模の戦いで指揮を担い、グランダール正規軍の騎士団で常勝の部隊長として武勲を重ねていた老騎士バスクレイ。

当時の若き獅子王レオゼオスが王位を継ぎ、王の政策で次々と開発される魔導製品が兵器として投入されて戦場の様子も様変わりを始めた頃、自身の老いを自覚するバスクレイは後継者を育てようと一人の部下を自分の補佐に任命した。

その若い部下は元冒険者の成り上がり者という事で他の騎士達からあまり良く思われていなかったのだが、バスクレイは彼の指揮官

としての素質を見込んで自分の持つ戦術や知識などを教え込み、若い部下も乾いた土が水を吸うかの如くそれらを吸収して行った。

ある日、バスクレイ達の部隊が展開している地域で大規模な会戦が行なわれる事になり、レオゼオス王が出陣して来た。

その会議の席で、未だグランドール軍の全体にまでは浸透しきっていない魔導製品を使った兵器、魔導装置を搭載した武装馬車や特殊な武具を装備する部隊の仕様が説明された。効率的な運用法と勝利する為の作戦などが話し合われて意見の募集が掛けられたのだ。

バスクレイは新しい兵器を使った作戦を考えてそれらを取り纏めると、若い部下に自分の考えた作戦案を話し、意見を求めるなどして詳細を詰めていった。

今回の会戦で手柄を立てれば、彼も共に昇進して部隊を指揮する立場に上げられる筈だと睨むバスクレイは、この戦いを最後に部隊長の席を譲るつもりでいたのだ。

翌朝、珍しく晩くまで若い部下と酒盛りを交わしたバスクレイは盛大に寝過ぎ、慌てて会議に向かおうとしたが王の軍部隊は既に出撃した後だった。若い部下の姿も見えず、陣地に残っている者から話を聞くと国王軍部隊と共に出撃したと聞かされた。

若い部下はバスクレイの立てた作戦を自分の発案としてレオゼオス王に提案し、国王軍部隊に同行。激しい攻防の末、ナツハトームの大軍を退けたレオゼオス王は会戦の勝利に貢献したとして作戦の発案者を大いに評価した。

この会戦で大敗を喫したナツハトームは各地の侵攻を中断し、暫らく膠着状態が続く事になる。グランドールが事実上の勝利を収め

ただ。

それから暫らく経ち、バスクレイの部隊は部下の一人を欠いたまま戦勝に沸く王都へ数ヶ月ぶりの帰還を果たした。

古株の同僚から王宮群の中庭で連日開かれていた戦勝パーティーに誘われ、気乗りがしないまま出席した彼は、その席で元部下の姿を見つけて詰め寄り、例の作戦の事で問い詰めようとした。しかし

「長く戦場に身を置いていた貴方だ。少し疲れているのでは？」

嘆かわしそうに一笑に付す元部下の答えに、バスクレイは愕然とする。その場にいた他の貴族達も”若き英雄”の側にあつた。

国王軍と一足先に王都へ帰還していた元部下の彼は、会戦の勝利に貢献したという名声とレオゼオス王の評価を嵩に王宮群での人脈作りに勤しみ、多くの味方を作っていた。ずっと戦場にいたバスクレイの理解者は部隊の古株だけで、この絢爛な場所には一人も居ない。

信頼していた、自分の後を継がせようと思っていた部下に裏切られた事を知り、強いショックを受けたバスクレイはその場に倒れた。これがちよつとした騒ぎとなり、レオゼオス王の耳に入る事になる。

その後、間もなく騎士団を引退したバスクレイは長く軍に貢献した功績が認められ、王より労いの恩賞としてバラツセの街で軍事顧問の地位を賜わり、静かに余生を送る事になった。

だが、中庭で倒れた時からバスクレイの世界は色を失い、意識は常に靄が掛かったように霞み、心は霧に包まれていた。

その霧が晴れたのは先日。 ナツハトームの戦車に特攻を仕掛けた際に何処からとも無く現れ、戦車を退けた巨漢ゴレム。甲冑を纏う騎士にも似たコウの後ろ姿を見上げるバスクレイの脳裏に、古い記憶の情景が浮かび上がる。

かつて悪ガキだった自分に剣や戦術を教えてくれた地方部隊の隊長騎士。昔は騎士も冒険者や盗賊と見分けが付かないような無頼漢な振る舞いをする者が多く、儀や誇りを重んじる貴族ばった騎士などは王宮に近い一握りの者達だけだった。

裏切りや騙し合い、化かし合いが日常茶飯事な環境にありながらも、その隊長騎士は己が信念と実力の下、自分の在り方を曲げなかった。

「なあ、クレイ。他の誰が何であろうと、自分は自分でしかないと
思わないか？」

「なんだよそれ、意味わかんねーよ」

「はっはっは、俺は何処まで行っても俺だし、お前は何かあっても
お前だつて事さ」

「だから意味わかんねーつてば、そんなの当たり前じゃんか」

少年 バスクレイはそんな騎士に憧れていたのだ。懐かしい記憶に埋もれ、暫らく臥せていた彼は、長い精神的な塞ぎから立ち直った。野心家の若者が自分を利用して成り上がった。それだけの事だ。寧ろ自分の作戦立案力にそれ程の効果があつた事を実証されたといえる。

西門前に辿り着いた総指揮と工兵部隊は、門を守っている警備隊から状況を聞く。門扉は既に何度か破城槌による体当たりを受けているらしく、補強用の木材が歪んだ扉を支えている。あまり長く持ちそうにない。

「敵は戦車だけか？」

「はい、やはり敵兵の姿はありません」

「既に門を支える両脇の石柱にも亀裂が見られます。破られるのは時間の問題かと……」

「うむ……。では破られる事を前提に対処を考えよう」

総指揮バスクレイはそう言って機械化戦車を退ける為の作戦を考える。そこへ、ガウィーク隊から派遣されたという強力なゴーレムが地面を滑るようにしながらやって来ると、身体の前面に光の文字を出した。

”手伝いにきたよー”

「……それだ」

バスクレイは加勢に来たコウを見て閃いた。

バラツセの西門に何度目かの体当たりを敢行するナツハトーム軍

の機械化戦車。門の向こう側で多くの兵が動き回っている様子を感じとり、恐らく必死で門扉を補強してバリケードでも築いているのだらうと推測する四号戦車長は、五号戦車に合図を送って加速をつけて貰う。

破城槌を付けていない五号車が背後から押す事で勢いを増した四号車は、両脇の石柱に亀裂も見え始めた門扉に突撃する。衝撃に備えていた搭乗員は先程までの衝撃とは明らかに違う突き抜ける感覚に、遂に門を破ったと確信した。

「よし、突入成功！ 対人攻撃形態に移行後、まずは東門へ向かう」

「前方に複数台の馬車を確認！」

「側面にも車列を確認しました！」

「馬車を使った即席の防壁か。構わんっ 粉碎してやれ！」

東門の防衛に戦力を集中するあまり西門が手薄になっていた所までは読み通り。少ない兵力で効率的にバリケードを敷く方法として馬車を防壁に利用した機転には称賛出来るが、機械化戦車を止めるには薄い。四号戦車長はそうほくそ笑むと前進の指示を出す。

前方を塞ぐ馬車に破城槌がめり込み、メキメキと音を立てて馬車が横滑りする。が、そこで止まった。戦車から響いていたガリゴリという独特の重い走行音が、カカカカッと何かを連続で叩くような軽い音に変わる。

「なんだっ どうした！」

「制御不能！ これは……歯車輪が滑って」

「油です！ 石畳に油が撒かれていて進めません！」

バスクレイが仕掛けた策は門前の石畳に油を撒いてワザと扉を開き、その場所に誘い込んだ戦車を馬車で囲んで動きを封じる事だ。重石を積んだ馬車を素早く指定の場所に配置する作業には複合体コウの力が大いに役立つた。さらに

「よし、火を放て！」

馬車に挟まれて動けず、車輪を空転させている戦車に油を染み込ませた草束を投げ付けると、それに火を放った。多少の火炎攻撃にも耐えられる造りになっている戦車だが、投げ付けられた草は狩などで穴倉アナクラに潜む獲物を燻り出すのにも使われる煙草で、たちまち煙に包まれる。

「ヴォウアウ」 ” よいしょっと ”

戦車は何とか脱出しようと車体の旋回行動を試みるが、両脇にも重石積載の馬車を置かれてしまい隙間を埋められていて動けない。そこへ、もう一台の戦車が救出に飛び込んで来た。装甲の隙間から突き出た回転鋸が馬車の車体を切り刻んでいく。

そして煙と炎にまかれている破城槌付き戦車の後部を接続機らしき機械で繋ぐと、全力で後退して行った。

「門扉を閉じよ！ 火を消して馬車を移動させるのだ！ 工兵とコウは場所が開き次第、穴掘りの準備を！」

キビキビと指示を出すバスクレイ総指揮。態勢を整える為に後退して行った戦車が再び突入して来る前に次の策へと取り掛かる。

焼け残った馬車を閉じた門扉の前に移動させてバリケードに使い、これを破って突入して来る事を計算に入れつつ今度は石畳を剥がし

て穴を掘るのだ。戦車の車輪がある程度耕して行ってくれたので、その部分から効率よく掘っていく。

「急げ、深さは1ルウカもあればよい。落ちた戦車が這い上がってこられないよう、穴の形状には注意しろ」

「ヴオウオアウ」 ”ボクも掘るー”

コウが穴掘りに加わると瞬く間に大穴が出来上がる。何故か掘り返した筈の土が殆ど出ないという不思議な掘り方だったが、あの機械化戦車が丸ごと納まる程の穴が出来た。戦車の造りからして、一台目が穴に落ちれば二台目がそれを踏み越えて来るような事はないだろう。

最初とは随分と様子の違った形だが、バスクレイ総指揮が主張していた敵の戦車をそのままバリケードに使うという発想が形になった。

「ご苦労だった、コウ。こちらはもう大丈夫だ、東門の援護に向かってくるくれ」

「ヴァヴァウ」 ”わかった”

すっかり頼れる指揮官ぶりを発揮しているバスクレイに促がされ、コウは魔導輪を装着するとエルメール達の援護に向かうのだった。

ナツハトームの遠征軍本隊が攻め寄せている東門は投擲器による

火炎樽攻撃と機械化戦車の突撃によっていよいよ防壁の崩壊が迫っていた。

「防壁から離れる！ 崩れるぞ！」

「敵兵に射掛けの動きあり！」

「射ち返せ！」

コウが戦車からもぎ取った機械化連弓は防壁に近い建物の窓に固定されており、ここに陣取る弓兵が牽制の矢を放つ。

ナツハトーム軍から射掛けられた矢が防壁の裏側に降り注ぎ、何人が退避の遅れた者が負傷したが大半は崩壊する防壁から離れていた。被害は少なくて済んだ。しかし、ここで戦車の突撃を受けて門扉と防壁の一部が遂に打ち崩された。

「戦車は瓦礫に阻まれて暫らくは入って来れまい、敵兵が雪崩れ込んで来るぞっ 迎撃用意！」

「よっしゃ、出番か！」

手錬の冒険者勢と防衛隊のガシエ達が出ると、それぞれ崩れた街門と防壁前に分かれて迎撃態勢をとった。やがて突撃の氣勢を上げながら現れるナツハトーム軍の兵士達。一番乗りを果たした兵士に建物の上から放たれた機械化連弓の矢が突き刺さった。

「街に入れるな！ 押し返せ！ 瓦礫の撤去を阻止するんだ！」

「エルメール！ 戦車の連弓から攻撃が来るぞっ そこはヤバイ！」

瓦礫で進めずとも戦車に搭載された機械化連弓に射手が取り付き、固定砲台のように狙ってくる。盾を装備した街軍兵士が壁を作って指揮官であるエルメールを護るが、複数の機械化連弓から射ち放た

れる矢の連射力は凄まじく、盾が耐え切れない。

エルメール達が建物の影へじりじりと後退すると、迎撃部隊の冒険者勢と防衛隊にも連射攻撃が向けられた。

「うわっ　こりややべえ！」

「先に戦車の射手を何とかしないと……っ」

ナツハトーム軍は迎撃部隊の動きが封じられている隙に瓦礫の撤去に取り掛かっており、このままでは戦車と敵兵の侵入を許してしまう。

射掛けと魔術攻撃で撤去作業の妨害を試みるが、戦車は攻撃魔術の直撃を受けてもビクともしない上に攻撃を受けると10倍返しとばかりに機械化連弓の連射を集中してくるので、こちらからの攻撃はどうしても単発になってしまい、牽制の効果もイマイチ上がらない。

「不味いな……どうにかして戦車の攻撃力を削がなくては」

その時、門扉前に陣取る戦車の機械化連弓が何かに気付いたように通りの奥へ向かって矢を射ち始めた。エルメール達はその方向に視線を向けると、通りの向こうから滑り込むような態勢で滑走してくるコウの姿があった。

「ヴオヴオヴァーウ」　エルメールさん

「コウ！　西門の護りはどうした！」

集中攻撃による矢の雨をビシバシと弾き飛ばしながら滑り込んで来たコウは西門の状況を伝えると、向こうは概ね片付いたのでこちらの援護に戻るよう言われて来た事を説明する。

「ヴオウアウオ？」 壁が崩れてるよ？」

「ああ、こつちは少し芳しくない状況だ……お前には敵の矢が通じないようだな、アレを沈黙させられないか？」

「ヴオウア？」 壊せばいいの？」

「そうだな、戦車が動けなくなれば当面の危機は脱せる」

『分かった』と頷いたコウは崩れた門扉と防壁の周辺を見渡し、味方が巻き込まれない位置にいる事を確認して異次元倉庫から内燃魔導兵器を取り出した。そして二台の戦車とその周りで瓦礫の撤去作業をしているナツハトーム兵を目掛けて引き金を引く。

ヴウウウウウウという唸るような射出音を響かせながら10倍返し of 機械化連弓に100倍返しの火炎玉を浴びせ掛けるコウ。次々と着弾しては土煙と火花を上げる火炎玉。戦車の装甲には弾かれて派手に飛び散っているが、その凄まじい射出量にナツハトーム軍は浮き足立つ。

連弓に取り付いていた射手は勿論、瓦礫の撤去をしていた兵達もこれは堪らんと防壁の裏に退避したり戦車の影に身を隠す。

再び魔導輪を装着して滑走で距離を詰めるコウは牽制用の内燃魔導兵器を異次元倉庫に仕舞うと、博士に餞別として貰った”魔導槌”を取り出した。戦車は装甲を引っぺがして殴れば割と簡単に壊れる。ならばこの魔導槌を使う事で装甲ごと叩き潰せるのではないかと考えたのだ。

まず狙うのは戦車の車輪部分、側面下部に見える歯車のような形をした車輪を目掛け、振り被った魔導槌を振り下ろしながら柄部分のスイッチを押して内蔵されている内燃魔導器に点火。

ヒュゴウオツという笛のような音と共に爆発の排出によって加速

した先端の槌が戦車の装甲を穿ち抜いた。

「側面の装甲が破られました！ 前部歯車輪破損！」

「くそっ なんて怪力してやがる！ 全速で後退しろ！」

残った後ろの歯車輪で後退しようとする戦車。コウはノッシノッシと背後に回り込むと、徐に振り上げた魔導槌を同じ要領で振り下ろす。後部の装甲が大きくへこみ、歯車輪が引っ掛かってガリガリと音を立てながら止まった。

「三号車がやられた！」

「搭乗員の救出と車両の回収だ！ あのゴーレムをどかせろぞっ」

もう一台の戦車が一旦後退して破城槌を向けると、三号車の機械化連弓をもぎ取っているコウに突進を仕掛けた。コウはどうしようかな？ と少し考え、ぶつかる直前に複合体を異次元倉庫に片付ける。

破城槌がゴーレムの巨体を捉えたと思われる瞬間その姿が消えたので、ナツハトーム軍兵士からは仕留めたかと歓声が沸く。

コウの暴れっぷりに目を丸くしていたエルメールは、敵軍が崩れている今の内に自軍の建て直しを図れるよう動いた。先日の戦いでもコウは戦車を潰してから突然姿を消し、後にひょっこり現れている。コウが不死の存在である事を知るエルメール達に不安は無い。

「負傷者を回収して後方に退げる！ リシエロの部隊で治癒を頼む！ ガシエ達は防壁の穴を塞げ！ 残りは門扉を警戒だ！」

門扉前は壊れた戦車の車体が上手い具合に道を塞いでいるので防衛隊の戦力を崩れた防壁に回したエルメールは、戦車の残骸を乗り越えてくるナツハトーム兵の動きに警戒する。

ドンツ と、いきなり戦車の天井を覆う装甲が吹き飛んだ。

破城槌でゴーレムに突進して味方の戦車を救出に動いていた戦車だ。何事かと敵味方からの視線が集中する中、戦車の後部扉が開くと転がるように飛び出してくる機械化戦車の搭乗員。

戦車は”ドンツ”とか”ガンツ”とかいう打撃音を響かせながら暫らく車体を揺らしていたが、やがて側面の装甲が弾け飛んで腕が生えた。

「なんだそれは」

敵味方の兵達が共に思い浮かべた心の叫び。次の瞬間、天井を突き破って現れた”あの”ゴーレムの姿にナツハトーム軍は驚愕し、バラッセを防衛する冒険者勢や街軍防衛隊は歓喜した。

コウは戦車の接近に合わせて精神体になり、そのまま車体をすり抜けて内部に侵入すると、そこで複合体を出して憑依。内側から暴れて破壊したのだ。いきなり車内に現れたゴーレムに定員オーバー状態の中で暴れられた戦車搭乗員の驚き様は、もはや気の毒としか言い様が無い。

戦車を破壊されて突進力を失ったナツハトーム軍がバラッセの防衛側に押し返され始めたその時

「クラカルより援軍到着！」

西門より駆けつけた伝令から良い知らせが届けられたのだった。

38話：再びバラッセの地下へ

クラカルの街からグランダール正規軍が援軍に駆けつけた事でバラッセ攻略を断念したナツハトームの遠征軍は、展開していた投擲器を片付けて引き揚げに入っていた。それを横目に、バラッセの街軍や冒険者勢は防壁と門の修理を進めている。

現状ではクラカルからの援軍を合わせても街道脇の平地に敷かれた陣地に集結しているナツハトーム軍の方が若干兵力も多いので、無理に打って出る事はせず、相手の撤収準備を傍観している形だ。

こちらの兵力が十分に集まってから改めてエパティタの解放に進軍するよう指示が下るだろうと兵達は予測していた。

「ナツハトームとの国境にある砦は大変な状態らしいね」

「ああ、やはり敵の本隊は向こうから来ていたそうだ」

王都や周辺の領内にいた腕利きの傭兵団やら冒険者グループが軒並み雇われては、西の砦と国境近くの街を防衛する戦力として投入されているという戦況情報が冒険者協会から発表されている。

エパティタの解放にも冒険者勢として協力が呼び掛けられるだろうと今後の展開など予測し合いながら軍人の姿が増えた街の通りを行くエルメールとリシェロは、ダンジョン前の公園になっている場所に見知った姿を見つけた。

通りに面したベンチに杖を立てて腰掛ける日向ぼつこの老人と、その隣で届かない足をぶらぶらさせている黒髪の少年。

『もはや儂のような老兵が出張る時代ではない』

戦いが終わった後、援軍の正規軍指揮官に街軍の指揮を引き継がせたバスクレイはそう言って総指揮を降りた。憑き物が取れたようなサツパリとしたその表情は、穏やかだが少し老け込んだようにも見える。

「それじゃーまたね、おじーちゃん」

「うむ」

ベンチからひよいと飛び降りたコウがエルメール達に気づいて駆け寄ってくる。その向こうから軽く笑みを向けてきた老人に、エルメールも会釈を返した。

「コウ、さつき戦車を調べていた正規軍の者から残骸が足りないと
言われたのだが……」

「あ、ボクがいつこ持つてるよ？」

博士のお土産にするのだという。それならば仕方ないと納得するエルメール。高名な王都の魔導技師アングイー博士の噂は、遠くバラッセの街まで届いている。その集大成を表したような存在となっているコウと連れ立ち、エルメール達はダンジョン前の公園を後にした。

通り沿いのベンチに独り腰掛けるバスクレイは、若い冒険者三人組の後ろ姿をただ静かに見送るのだった。

グランダールの北西に広がる巨大湖とナツハトームの内陸部まで伸びる湾との間を通る国境回廊、その最前線を護る西の砦。

ナツハトーム軍の新型兵器による急襲に半壊した姿を曝しながらも砦としての機能を保ち、敵軍の侵攻を妨げる要所として未だ多くの戦力を残す西の砦は、アリアトルネの攻撃に向かった敵軍の背後を突いて後続部隊を分断するなど、その健在ぶりを誇示している。

この砦を任されている司令官、数年前にナツハトームとグランダールの勝敗を決定付けた大きな会戦で自軍の勝利に貢献したとされる若き策士ユタ・サラルは、とある騎士団部隊長”常勝のバスケレイ”の元で補佐官を務めていた男であった。

数年前、戦勝パーティーの席で起きた一つの騒ぎ。聡いレオゼオス王はそこからナツハトームとの決戦で採用されたユタの作戦に関する真相を知った。だが、戦功を上げた若い士官の作戦が他者のアイデアだったからという理由で断罪する訳にはいかない。

レオゼオス王は心折れた老兵には静かに余生を過ごせる環境を与え、野心溢れる若い士官には名誉の転属を言い渡す。

西の砦の司令官に任命されたユタは出世だと喜んだが、実際そこは最前線の激戦地であった。常に細かく連絡を取り合い、人員の入れ替わりも激しいので人脈作りなどの工作は出来ない。そんな事をする暇も余裕も無い過酷な職場。

前任者を後方の街に下げてまでの抜擢なので期待に添えなければ左遷も確実と匂わせ、逃げ場を塞ぐ。使える野心家は王宮で飼い殺すよりも使い潰すくらい勢いで使うという王の采配である。

その結果が今回の粘り強い攻防にも繋がった。

ユタは過酷な防衛任務に従事する内、何度も自分と砦の危機を救ったのが元上司の老兵より教わった戦訓や戦術ばかりで、自分のアイデアなど入る余地も無い、寧ろ繰り返し指導され、反芻して叩き込まれた事を思い出して正確に実行する事で生き延びて来られた事実と向き合う内、野心に取り憑かれて出世欲に走った自分の矮小さを実感して少しずつ変わっていった。

「司令、王都から派遣されたという応援の部隊が開門を求めていますか」

「正規軍か？」

「いえ、ヴァロウ隊という冒険者集団のようです」

「ヴァロウ隊か……確か、かなり腕利きの対人戦闘集団だったな」

現在、西の砦は正面にナツハトームの侵攻軍による砦攻略部隊が展開しており、周辺地域を遊撃部隊が巡回している状況だ。

砦の応援に雇われて無事に辿り着けたのは今の所ヴァロウ隊だけだったが、後方の街アリアトルネにはガウイク隊も来ていると聞き、態勢を立て直せられれば今回の侵攻も押し返せそうだと見通しを立てる。

「そういえば、ガウイク隊がバラツセに送った複合体はナツハトームの遠征軍撃退に貢献したらしいですね」

「バラツセか……」

かつて自分の立身に利用した上司の事を思い出す。今更合わせる顔など無いが、あの人が街軍の顧問をやっているのなら撃退できて当然だなど、ユタは懐旧の念に望郷のような感情を懐きながら自嘲した。そこへ、砦内に響き渡る敵襲の報せ。

「さて、こっちも頑張るか」

西の砦で若い司令官が敵軍の迎撃に気持ちを引き締めている頃、バラッセ防衛の役目を果たせたコウは街でダンジョンの最深部にあるという秘宝、”生命の門”について調べていた。冒険者協会支部にある資料室を使わせて貰っている。

「ダンジョンって流行でつくられてたのか」

各地に点在するダンジョンは何処かの魔術士が魔法生物の実験をする為に作ったのが最初だと言われている。

変わり者の大魔術士が資財を投げうって地下迷宮を作り、財宝目当てに訪れる冒険者相手に実験動物や魔法生物など、所謂『創作生物』を睨けて性能実験に使った事から始まり、そこから多くの英雄や富豪が生み出されたという。

噂が噂を呼び、やがて地下迷宮の話はとある娯楽に飢えた酔狂な貴族の耳に入った。その貴族は自分の統治する街にダンジョンを作らせ、宝石や金貨を隠し、捕獲してきた獣や魔物を放してそれを冒

険者協会から各地に宣伝。冒険者達を呼び込んだ。

腕に覚えのある者から単に金に困っていた者まで、色んな人間がその街を訪れてダンジョンに挑み、ある者は財宝を手にし、ある者は獣の餌食となってその所持品をダンジョンの財宝に加えた。

冒険者相手の商売人も増え、一地方の小さな田舎街でしかなかったその街には連日多くの人々が訪れるようになってたちまち大きな街へと変貌を遂げた。この大成功を受けて貴族達の間で迷宮ブームが起きたのだ。

規模の大きい良い稼ぎの見込めるダンジョンはその街の活性化にも繋がるという事で、大きな街には大抵ダンジョンが備わっている。

「バラッセのダンジョンはちょっと違うんだなあ」

バラッセの街にあるダンジョンは貴族達の迷宮ブームより以前に作られた、魔術士や研究者達による実験場としての色が濃い。集合意識の存在が初めて確認されたのも実はバラッセのダンジョンが最初で、そういう意味では由緒正しい地下迷宮である。

最深部に存在すると云われる秘宝”生命の門”については諸説あり、不老不死を可能にする呪術装置だという説や、魔物を生み出す魔術装置であるとする説、はたまた異世界に通じる時空門が開いているという説まであった。

とあるダンジョンでは最下層で見つかった禍々しい魔力の放出源である魔術式らしき装置を外に持ち出した所、そのダンジョンから魔物や変異体がいなくなつたという報告もあり、この装置が”生命の門”の諸説の一つに数えられているらしい。

ちなみにその装置はエイオア国政府が管理しているそうなの。

「コウは”生命の門”に関する諸説の中でも、”異世界に通じる時空門が開いている”という説が気になった。沙耶華の存在で自身が異世界から来たらしい事はハッキリしているのだ。ではどうやってどうして自分はこの世界に現れたのか。」

「後はじっさいに行って見てしらべないと分からないかな……」

以前、沙耶華とも語り合った異世界に関する話。他にも自分達のような異世界人は居るのか、帰る方法はあるのか。コウは王都へ戻る前に”生命の門”について詳しく調べてみる事にした。

ナツハトームとグランダールの戦争が続く中、戦争に与しない冒険者達は平時とあまり変わりなくダンジョンの探索などを行なっている。

バラッセの街のダンジョンは三階に設置した休憩所で四階以降の探索が容易になり、多くの冒険者を呼び込めると睨んでいた統治者の思惑は思わぬ方向からあてが外れていた。

三階で活動する冒険者が増えて以降、魔物の動きが以前よりも狡猾になり、危険度が上がってしまったのだ。

一階、二階はさほど変わらないが、三階と四階以降の魔物や魔獣は徒党を組むだけでなく、待ち伏せや不意打ちの奇襲、幾つかのグループで連係して攻撃してくるなど、冒険者側も一つのグループだけでは対処しきれないような状態になっていた。

折角三階付近での活動時間が延ばせても、以前より危険度が上がっているので四階以降の探索は返って難しくなっている。

集合意識が余程最深部に近づけたくない理由があるのだろうと、秘宝の信憑性が高まってここを訪れる冒険者も若干増えはしたものの、その難易度の高さに深い探索を諦めて余所へ流れてしまう者も多い。

「ひさしぶりだなあ」

少し開けた空間にぽつんと建つ高い鉄柵に囲まれた小さな祠。ダンジョンの入り口までやって来たコウは一度ぐるりと柵の周りを回り、地下への階段へと踏み出す。

始めはどこかの冒険者パーティーに混ぜて貰おうかと考えたコウだったが、目的地が最深部でアイテムの回収なども視野に入れている為、一人の方が動き易いと判断した。

馴染みのある地下通路を少年型召喚獣の身体で進み、地下二階への階段前で大ネズミを見つけたので召喚を解除して大ネズミに憑依した。ダンジョンでは何が起きるか分からないので、複合体を使うのは自力で移動できなくなった場合や緊急の時だ。

地下二階の通路の隅をしたたたと駆け抜ける大ネズミ。三階への階段を目指して角を曲がった瞬間、突如現れた鋭い牙にガブリと身体を噛み千切られた。何処かで戦闘を行ってきたらしき手負いの魔犬が二匹、大ネズミの屍骸に喰らい付く。

「グルル……」

ふと、何かに反応するように魔犬の片方が顔を上げると、喰い掛

けのネズミをそのままにこの場を立ち去って行く。残されたもう片方の魔犬は先程まで群れ仲間だった魔犬から人間の気配を感じ取って警戒するが、獲物を残していつてくれたので食事を優先した。

『そういえば、魔犬に憑依するのって初めてだったよね』

以前は結局、二階で魔犬に憑依する事無く三階で魔獣犬に憑依したのだ。魔犬の意識は魔獣犬ほど希薄ではなく、フアスターに憑依した時とよく似た感覚だった。変異体だが中身はある意味”普通の犬”なのだろう。

食事の途中で支配して移動させたので不満そうな意思が燦っていたが、ナツハトーム軍の戦車から拝借した携帯食の干し肉を束で与えると嬉しそうな意識が伝わってきた。普通に食べ物で餌付けできそうだ。

機動力の向上により一気に通路を駆け抜ける魔犬コウ。戦時の影響かダンジョンの難易度が上がっている為か、ここまで冒険者の姿は見えないが、拠点となる休憩所に行けば人が集まっているかもしれない。

地下三階への螺旋状に下りる階段を過ぎて通路に出た瞬間、足元から粘菌が絡みつき、複数の魔獣犬から襲撃を受けた。待ち伏せをしていたらしい。三階に漂う集合意識の気配は以前にも増して濃く活発化しているような雰囲気を感じさせる。

なるほどこんな調子では探索も大変だと納得するコウは、とりあえず複合体を出して憑依、この場にいる魔獣犬と粘菌を蹴散らしに掛かった。ズシンと粘菌を踏み潰しながら現れた巨漢ゴーレムの豪腕が振るわれ、吹き飛ばされて壁に打ち付けられる魔獣犬。

「ヴオオオオ」 『それー』

次々と飛び掛かってくる魔獣犬を魔導槌の練習がてら薙ぎ飛ばす。文字通り、魔導槌で打たれた魔獣犬は薙ぎ倒されるといふよりも飛んでいくのだ。

暗い洞窟のような通路に攻撃推進用内燃魔導器から放たれる爆発の炎が光の軌跡を残して弧を描くと、そのたびに飛び散った肉塊が床や壁、天井を叩き、辺りを鮮血に染めていく。

暫しの後、何かが発射したかのような惨状を曝す地下三階の通路入り口付近にて、戦利品を異次元倉庫に移したコウは奇跡的に無事だった魔犬に憑依し直すと、複合体の暴れた痕跡を残してこの場を後にした。

39話：休憩所と魔獣犬

バラッセのダンジョン、地下休憩所前。

地下四階への階段に向かうには休憩所を通った方が近道なので、コウはここで魔犬と別れる事にした。魔犬の身体から出て干し肉を与えると、魔犬はふりふりと尻尾を振って上の階へ戻るべく通路を引き返して行った。

「またねー」

「ヴォンッ」

たしつたしつと魔犬が床を蹴る爪の音が遠ざかり、暗闇に包まれた一带に静寂が訪れる。その闇を切り裂くように召喚の光が通路を照らし出し、出現する少年型召喚獣。祈祷師のアミュレットを胸に下げ、コウは完成した休憩所に初めて足を踏み入れた。

アミュレットは少年型でダンジョン入り口の結界を通過できたのでこの結界も通り抜けられる筈だが、一応、念の為である。

冒険者の拠点、地下三階の休憩所はコウの予想に反して賑わいもなく閑散としていた。十数人のグループが疲れた様子で備え付けの椅子に腰掛けたり、近くの壁にもたれるなどして身体を休めている。

行商用のスペースにも空きが目立ち、拠点の建設中によく見られ

た薬売りや武器防具、食料を取り扱う商人の姿もない。道中が危険過ぎて商品の仕入れも安定しない為、ここで商売を続けるのは割りに合わない判断されたのだ。

寂れた空気を醸し出している殺伐とした休憩所をてくてくと歩く少年コウ。その”どう見ても場違い”な存在に、その辺に転がって休んでいた冒険者グループの一人がぼかんとした表情を向ける。

「おい……ここの結界は永久浄化されてる筈だよな」

「ああ、確かその筈だ」

「幻覚が見える気がするんだが……俺、ダンジョンの魔力に中てられてねーよな？」

「その幻覚が子供だってんなら、お前は正常だ。……俺が正常ならば、だが」

周囲からの訝しむような視線を余所に、コウはかつて資材置き場だった中央ホールを通り抜けると、そのまま休憩所の反対側入り口から通路に出て行った。偶々この場に居合わせた冒険者達は皆、幽霊でも見たかのような様子で顔を見合わせるのだった。

休憩所を素通りしたコウは少し進んだ所で丸ネズミが飛び掛かって来たので、そのまま召喚を解除して丸ネズミに憑依した。そのうち魔獣犬がガブリとやりに来るだろうからその時にでも乗り換えようと予定を立てて丸い身体をちよろちよろ走らせる。

そうして角を三つも曲がらない内にガブリと来た魔獣犬の群れの一匹に憑依すると、他の数匹を残して一目散に駆け出した。

コウは地下三階も概ね探索し終えているので、四階に下りる階段を目指して一気に駆け抜ける作戦に出たのだ。当然後を追って来る元群れ仲間の魔獣犬達。魔物でパーティーを組んでいたらしき粘菌や丸ネズミは置いて行かれてしまっている。

暗闇が続く洞窟ばった通路を迷いなく疾走するコウの前方に、冒険者達の灯す明かりが見えた。

「足音……っ 魔獣犬だ！」

「襲撃か！ くそ、ここまで来て……」

「みんな……私の事は、もういいから……」

「何言ってるんだっ 弱気になるな！ 生きて帰るんだ！」

手負いの冒険者グループが壁際にもたれる重症の魔術士を励ましながら迎撃態勢をとり始める。七人いた仲間は治癒術士と前衛の戦士、支援の射手を失い、四人になってしまった。

仲間の遺体を背負いながら進む彼らは、あともう少しで冒険者の拠点である休憩所に辿り着けるといふ所で魔術士の一人が深手を負ってしまい、立ち往生していたのだ。

現状で戦える仲間は盾役の重戦士と攻撃術士に魔術士の三人。彼らは攻撃主を魔術士に特化させた編成のグループだった。護り手が一人しかいない為、近付かれたら終わりだとして専制の攻撃魔術が放たれる。

通路の奥から猛然と駆けて来る一匹の魔獣犬。専制の火炎弾をひ

よいと躲したその魔獣犬は、続けて放たれた氷塊弾もひらりと躲す。更に放たれた火炎弾もぴょーんと躲して、これでもかと撃ち込まれた氷塊弾をべしゃつと伏せて躲した。

「す、素早い」

「なんだあの魔獣犬はっ」

やたら素早い動作で悉く回避された攻撃魔術は全てその魔獣犬の後ろから迫っていた別の魔獣犬達に命中しており、五匹ほどいた群れはいつの間にか先頭を駆けて来た一匹と、遅れて来たもう一匹の二匹だけになっていた。

これは最初の素早い奴さえ何とかすればイケるかもしれない。彼らがそう思った時、その素早い魔獣犬がもう一方の魔獣犬に攻撃を仕掛けた。仲間割れか？ と戸惑う冒険者達。集合意識に支配されている筈の魔獣や魔物には有り得ない行動だ。

基本的に猪突猛進な魔獣犬らしからぬ動きを見せる素早い魔獣犬は、高く跳躍して相手の首根っこに喰らいつくという空中殺法を披露すると着地時に身体を捻って踏ん張り、首投げのように相手魔獣犬を投げ飛ばした。

「うわっ！」

投げ飛ばされた魔獣犬がこちらに飛んで来たので思わずメイスで叩き落す盾役の重戦士。攻撃術士が止めの火炎弾を至近距離から撃ち込んで仕留めた。残るはあの奇妙な素早い奴だけだと向き直り、暫しばかんとする三人。

魔獣犬がお座りして尻尾を振っているのだ。

「コウ……？ その魔獣犬、コウじゃないの？」

「え？ 魔獣犬コウって、前に噂になつてたつて言う……あの？」

壁際にもたれる手負いの魔術士は、お座りしている魔獣犬の額に緑石を探した。

「ほら、額を見て。あの緑石、コウの証だわ」

「ホントだ……気づかなかつた」

「でも、確か討伐されたんじゃないか？」

「また新しく生まれたとか……」

どうやらトレードマークの緑石はまだ有効だったようだ、冒険者グループの様子を観察していたコウは彼らが警戒を緩めた事を確認すると徐に近付き、怪我をしている魔術士を治癒するのに必要な薬瓶などを出した。

「ヴァウヴァフ？」 下の階に行つて来たの？」

「えっ？ あ、ああ……一応、五階の終点まで探索に下りてんだ」

五階の最深部まで下りられるグループなどそう多くはない。彼らは光の文字を浮かべて話し掛けてきた魔獣犬コウに面喰らつて戸惑うも、貴重な薬を分けてくれた礼としてコウに四階や五階に関する情報を教えてくれた。

四階は集合意識の支配力とダンジョンを覆う魔力が強く、現れるモンスターは骸系むくが多い。手練の冒険者グループでも長く探索する

のは厳しいとされる難所だが、モンスター全般が半分朽ちた肉体を引きずりながら蠢いているので、完全に骨と化しているモノ以外は動きも鈍く対処は難しくないそうだ。

加えて、ダンジョンの魔力を蓄積した甲冑や武器などが集合意識に操られて彷徨っていたりもしており、これは集合意識を討ち被えばそのままお宝として取得出来るので、四階は武器類が多く手に入る稼ぎ所の階でもある。

無論、それら武具の大半はここで命を落とした冒険者達の遺品なのだが、地下四階まで下りられる冒険者の遺品なだけに高価なモノも多い。

そして地下五階。基本、この階には現れるモンスターを含めて生物は存在しない。掃除係りの粘菌や地脈草のような植物がかかるうじて”生き物”である他は、魔力で動く骸骨や無機物ばかりが徘徊する。

これまで地下五階を探索して生還したグループは少なく、殆ど詳しい情報が語られる事もなかったが、冒険者の拠点が出来てからはこの階の探索者も増えた関係で情報も出回るようになり、その何れの情報源からも等しく”亡者の階”だと評されている。

また、床や壁、天井には人の手が入っており、王都の地下遺跡など各地で見つかる古代遺跡の様式である事が生還した冒険者の証言と学者達の研究で確認されている。五階の終点とは地底湖を指すらしい。

「ヴォヴァヴァウ？ ヴァウヴァフ？」 地底湖が最深部で行き止まりなの？ 生命の門は無いの？」

「なんだ、ダンジョンのモンスターでも知らない事があるんだな…
…生命の門って秘宝が本当にあるのかは俺達にも分からないが」
「ちよつと前に地底湖を調べたグループが居てね、何でも水中に通路の先がまだ伸びてるらしいよ」

「多分、このダンジョンの最深部は水没してしまっているんじゃないかな」

相当大掛かりな軍隊クラスの遠征部隊で水中の探索から行わなければ、真の最深部に辿り着くのは不可能ではないか？ という結論が出ていると、彼らはバラッセのダンジョンに関する上位冒険者達の間での共通認識を教えてくださいました。

「ヴァファー、ヴァウヴァファー」 ありがとう、気をつけてねー」

怪我を負っていた魔術士も回復し、これから仲間の遺体を担いで休憩所に向かうという冒険者グループと別れたコウは、四階へ下りる階段を目指して通路に駆け出した。

時折、遠くから響く戦闘音に耳など傾けながら階段前に辿り着き、地下四階に下りると、僅かながら集合意識による魔獣犬への干渉が強まった感じがした。コウの支配に対抗出来る程では無いが、三階で感じる単調で微弱なモノよりは強制力が高い。

『これ、複合体とか少年型召喚獣を出しっぱなしにしてたら操られるくらい強いかも』

冒険者達から聞いた地下五階へ下りる階段を探して凡その方向を定めると、コウは四階の探索を開始した。

徘徊するモンスターに朽ちた死体や朽ちかけの死体が多いせいか、四階の床や壁は表面が湿気てぬらぬらと滑ぬめっており、足元に注意しないと転倒してしまう。この階の通路を全力で駆けるなど、通常なら危険極まりない行為である。

ズシャーつと派手に転んで前方からゆらゆらと近付いていた骸戦士を巻き込み、そのまま骸戦士が起き上がる前に再び駆け出す魔獣犬コウ。事前に聞いていた通り、この階のモンスターは全体的に動きが鈍い。

骸戦士達の腐り掛けた肉塊は攻撃に対する衝撃吸収の防御効果も持ちながら、機動力を奪う枷にもなっている。

コウはとりあえず骸戦士に遭遇するとそのまま突撃してローリングアタックをかまし、転ばせてから即逃げるといった戦法で迅速に対処していた。いい感じに突撃の衝撃が緩和されるので魔獣犬の身体に傷も付かない。

代わりに色々直には触りたく無いモノが付着し捲くっているが、魔獣犬たいけんの身体なので問題ない。当の魔獣犬の希薄な意思も、意識の奥でなんだか楽しそうにしているので問題ないのだ。 という事にしておいた。

そんな調子で半日近くは経過しただろうか、幾つか武器や防具なども入手しながら遂に地下五階へと下りる階段まで到達したコウは、ここで魔獣犬と別れる事にした。ここから先は餌となる丸ネズミが居ない事に加えて、終点の地底湖からは少年型召喚獣が複合体を使

う事になる。

コウが支配を解けば再び集合意識に支配されて人間を襲うだけの存在になってしまいが、餌の無いフロアで餓死させたり地底湖で溺死させるよりはいいと判断した。

これはモンスターという存在に対するコウの認識が一般的な冒険者と違い、魔獣犬を人間の敵で討つべき害獣とまでは見做していない事の表れでもある。

階段前で魔獣犬から抜け出し、暫く様子を見守っていると、ぼーっとしていた魔獣犬は何か気付いたようにふと顔を上げて宙に浮かぶ精神体のコウを見る。

「……………」
「……………」

やがて集合意識に支配されたのか、のそのそと歩き出した魔獣犬は四階通路の暗闇に消えていった。魔獣犬が立ち去った後、周囲にモンスターの姿が無い事を確認して複合体を出したコウは、地下五階へと続く階段に踏み出したのだった。

40話：生命の門

地下五階、王都の地下遺跡と雰囲気のよく似た造りになっている通路を魔導輪で滑走する複合体^{コウ}。暗闇の中で蠢く骸骨を避けながら、或いは弾き飛ばして粉碎しながら終点の地底湖を目指して駆け抜ける。

滑走しながら魔導槌を掲げ、時々内燃魔導器に点火して加速を得るといふ走行法は、ついさっき骸骨の群れに先制攻撃の奇襲を仕掛けようとして偶然発見した。

『この方法は帰ったら博士に報告しよう』

アングギー博士なら魔導槌の推進装置を利用して魔導輪に新たな加速装置でも付けてくれるかもしれない。そんな事を思いながら徐々に魔導槌のスイッチを押して点火。急加速した複合体^{コウ}は前方に固まっていた骸骨集団を滑走キックで粉碎して突破した。

亡者の階と評される五階はどこもかしこも骨だらけで、そこら中に散らばっている骨の欠片には大量の魔力が染み付いている。これらは触媒として使える為、五階まで下りて来る冒険者は無理に奥まで探索に行かず階段近くの骨を収集して持ち帰る事も多い。

四階の肉付き骸戦士は動きが鈍い代わりに耐久力は高く、五階の骨だけになったモノは若干脆いが動きは素早い。魔力で構成された身体は骨と骨の間に隙間があっても関係なく動く為、各部の欠損を

判断し辛いのが難点である。

腕がないと思っただら実は離れた状態で繋がっていたりするので地味に厄介だ。殆ど撥ね飛ばしながら進むコウにはあまり関係のない注意点だが。

時々骨も拾ってみたりしながら通路を進んでいると、冒険者達からも聞いていた”下り坂”に差し掛かった。なんでも三方から中央の開けたホールに続いているらしく、そこが終点。所謂水没している地底湖であるらしい。この辺りには彷徨う骸骨の姿もないようだ。

『ここかあ〜』

坂を下り切ると王宮群にある大ホールのような空間が広がる。コウが滑り降りてきた下り坂の通路と同じ作りの通路が反対側の正面と右側からも伸びている。闘技場の観客席を思わせる階段状の床が左側一帯に広がっており、その先は暗い水面に覆われていた。

水辺には焚き木の跡などが幾つか見られ、ここを訪れた冒険者達が休憩をとる場所として使っていた事をうかがわせる。水は良く澄んでおり、おそらく飲み水としても使えそうだ。複合体で広い階段状の床を下りて行き、腰まで水に浸かる。

『魚とかはいないのか……』

そのまま下り続けて水の中にすっぽり沈み、改めて周囲と階段の先に視線を向けたコウは一番深い所が劇場の舞台のようになっている事に気付いた。その舞台から更に奥へと続く入り口が見える。

『ここってやっぱり客席なのかな？』

水中で少し身体が軽くなった感覚を楽しみながらゆったりと跳ねるように舞台の所まで下りたコウは、奥へと続く入り口に向かった。覗き込んでみると普通の廊下っぽい通路が伸びており、広い間隔で左右の壁に小部屋の入り口が並んでいる。

何時ごろ水没したのか、水の底に隠されたこの通路の小部屋には大量のお宝といえる品が殆ど手付かずの状態で残されていた。

コウは一部屋ずつ調べながらじっくり探索を続けて行く。時折、魔物化した骸骨の姿も見掛けるのだが、彼らは水中での活動に対応していないらしい。

バタバタと骨の手足を動かして侵入者を攻撃すべく複合体コウに近付こうとするものの、その場に浮かんで踊っているようにしか見えな
い。その姿はホラーだが実に滑稽だ。

『でも、何十年も何百年もこんな場所で蠢いてるのって、なんだか寂しい感じがするなあ』

生き物では無い、恐らくは自意識も持たない存在とはいえ、一応人の姿をした元人間の成れの果てである骸骨が水没した暗い部屋の中で誰にも知られず彷徨い続けている姿に”哀愁”を覚えたコウは、なるべく戦斧で叩き壊していく事にした。

バラバラに散らしてしまえば、魔力が蓄積しても再び骸戦士として集合意識に利用される事はない。古い金貨や装飾品、宝石類などを異次元倉庫に運び込みながら、水中ダンス状態の骸骨戦士を集合意識より解放して回る。

そうして通路に並ぶ小部屋を粗方探索し終えたコウは、舞台から続く通路を突き当りまで進んで一番奥にある部屋に入った。

『ここは何もないな』

数体の骸骨がワサワサと動いているだけで特に目立つモノは見当たらない大部屋。正面に上りの階段が見えるので、部屋の骸骨を散らしてから階段を上っていく。

長い階段は途中で水面を抜けて更に続き、出口まで上りきると水没した階段状の床を見下ろせる高い壁の上に出た。見渡せば焚き木の跡が残る水辺の開けた空間に、正面と左右から下り坂の通路が繋がっている。

『あそこから滑り降りて来たんだっけ、ここは舞台の上の天井かな？』

下からでは分からなかったが、地下五階のダンジョンはこの天井部分からまだ先へと続いているようだ。この高さならロープを掛けて上り下りできるかもしれない。

休憩所に戻ったら他の冒険者達にも教えてあげよう等と考えつつ、コウは未踏区域へと足を踏み入れた。

地下五階の奥は地底湖前までの通路と比べると若干埃っぽく、そこから中に散らばる砕けた骨やら激しい戦闘の痕跡などが見られない分、少し寂しい雰囲気を感じなくも無い。

冒険者が訪れない以上、骸骨戦士の素材となる者もないのでも静かだ。あまり痛んでいない通路は起伏も少なく魔導輪での滑走もスムーズで、コウは地底湖前の通路と同じように魔導槌を掲げて加速に使いながら閑散とした通路を駆け抜けた。

『……………？』

ざわざわと、何か近く居るような気配がする。コウの視点は濃い魔力が通路の先から流れ出ている様子を捉えていた。ダンジョンを覆う魔力の源泉が近い。魔導輪を片付けたコウは一步步歩いて魔力の流れ出す部屋へと近付いていく。

オマエハ……

『え？』

部屋の入り口に立ったコウは何処からともなく響いて来た声に立ち止まる。それは一方向からではなく、周囲全体が声の発生源であるかのような感覚。流れ出る魔力の光が揺らぎ、もう一度声が響いた。

コノヨノ コトワリノ ソトニアルモノ…… オオ…… スバラシキ アリカタ…… エイエノ タイゲンシャ

『この声、魔力から……？ いや、違う……これは 集合意識だ！』

コウは自分が元々知るモノと言語の違うこの世界において、言葉に乗って届く思考を読み取る事で意思の疎通を図っている。一帯から響くこの声は思考そのモノで直接語り掛けられており、その相手はこのダンジョンで魔物達を支配している集合意識であった。

ワレガ モトメテイタ スガタ エイエノ イノチ エイエ
ンノ ソンザイ

圧力が増したような魔力の奔流を押し分けて進むコウ。魔力の光で溢れる部屋の中には、何処かで見ることがあるような祭壇風の石

塔が、強い存在感を醸し出しながら中央の台座に鎮座している。

『これが、生命の門？』

石塔の表面には幾何学模様が浮かび上がり、複雑に絡み合った魔力の帯が放出と吸収を繰り返しながら循環している。それはまるで呼吸をしているようだった。

エイエンノ イノチ ムゲンノ カノウセイ

集合意識の語りかけとも独り言とも付かない呟きを意識に浴びながら、コウは石塔に触れてみた。その瞬間、流れ込んでくる様々な情景。石塔に刻まれた一人の魔術士に関する記録と記憶。

”自身をより高次元な存在へと再構築させる”

不老不死を得んと研究を重ねたとある魔術士が生涯をかけて作り出した魔術式融合装置。他の生命の魂を取り込んで糧とし、自身を進化させようという目論みを実行する為、財宝を目当てに多くの優れた人間が集まるダンジョンを利用した。

貴族達の迷宮ブームに目を付け、ダンジョンコーディネーターとして自身を売り込んだ魔術士は各地のダンジョンで死んだ人間の魂を集めて凝縮する呪術装置の実験を繰り返し、最終的にバラッセのダンジョンを自分自身の進化を行う場所を選んだ。

呪術装置の実験で集めたデータを元に作られた魔術式融合装置は、自らの魂と直結して迷宮で回収した魂を取り込む装置だったのだが、生命操作は彼が予想していた以上に難しく、様々な不確定要素に対

応じきれず装置は暴走。

異次元に干渉して作り出していた魂の通り道へ逆流現象を起こし、ダンジョンに広がる取り込み範囲側に自分の魂が流れ出してしまった。ダンジョンを覆う魔力と集合意識は、この装置が維持する魔術士の残留思念のようなモノである。

『そういう事だったのかあ……………』

エイエンノ ソンザイ カラダ………… オマエノカラダガホシイ

集合意識の存在する余所のダンジョンは、恐らく実験で設置された呪術装置が今も稼動しているのだろう。

バラッセのダンジョンの集合意識と違い、集められた死者の魂から溶け出した憎しみや怨念など強い負の感情が魔力の影響を受けた対象の闘争心や殺意を刺激していると思われる。

また、集められる魂は人間のモノだけとは限らないので、魔物の魂から染み出した要素が魔力に溶け出し、その影響を受けた獣が変異体になっているとも考えられる。

何処かのダンジョンの最深部で発見され、エイオア国政府が管理しているらしい”禍々しい魔力を放出していた”という装置が、その呪術装置なのかもしれない。

カラダ カラダ………… エイエンノ イノチ ケンキュウノ カン
セイ

『どうしよう…………この装置、壊しておいた方がいいのかな。でも壊すと魔物や変異体が居なくなるかもしれないだよね』

単純に考えるならば、装置を破壊するなり持ち出すなりして世の中から危険なダンジョンを一つ駆逐する事は良い事だ。

しかし、バラッセの街に限らずダンジョンはそれを管理する街にとって重要な収益源にもなっている。ダンジョンを訪れる冒険者、

彼らを相手に商売をする者。ダンジョンでしか採取できない特殊な植物や素材などなど。

『……勝手にダンジョンを潰すと、怒られるよね……でも』

集合意識に操られる多くの魔獣犬や骸戦士。他者の魂や精神といった領域にまで踏み込んだこの研究と実験の成れの果ては、生命に対する冒涇だ。コウは明確な理由や確かな理屈も浮かばないまま、何故かそんな風に想った。

「ヴオウウ……」

カラダ エイエインノ カラダ イノチ エイエインノ ソンザ

イ

先程から複合体の支配に干渉を仕掛けて来ている残留思念体ともいえる集合意識を己が強い自我で弾き飛ばし、異次元倉庫から魔導槌を取り出して握り締めたコウは、魔力の輝きに包まれる石塔を睨む。そして、そのままゆつくりと振り被ると

『こんな装置があっちゃいけない気がするんだ』

柄のスイッチを押し、攻撃推進用内燃魔導器に点火した。

41話：破壊と功績

夜の帳が下りたバラッセの街。東門を睨む位置に敷かれていたナツハトーム軍の陣地も既に引き払われ、大型投擲器を設置する為に立てたらしき杭などの痕跡を残す街道脇の平原には僅かな篝火の灯りもなく、静かに闇が広がっている。

「ふむ。休憩所まで行ってみるべきか……」

高い鉄柵に囲まれたダンジョンの入り口付近でランプを持ちながら逡巡するエルメール。昨日の昼頃にダンジョンへ下りたコウがまだ戻ってないと聞き、様子を見に来たのだ。

休憩所に行くならリエロやガシエ達を誘う必要がある。以前よりも危険度が増しているので、一人で下りるわけにはいかない。

「あれ？ エルメールさん」

「わあっ！」

どうしたものかと考えていた所へ急に声を掛けられ、驚いたエルメールは思わず飛び退いた。灯りも持たず武装も無く手ぶらで行動するコウはこつという場所にあつて然るべき音や気配を出さないで、ダンジョンから出て来た事に気付かなかったのだ。

当のコウはキョトンとした表情を向けながら小首など傾げている。柄にも無く『ちょっと可愛い』などと思ってしまうエルメール。

「コホンッ 無事に戻ったか、コウ」

「うん。エルメールさん、ちょっと付き合っただけで、今いい？」

「えっ！ わ、私か？」

「あ、つごうが悪いならリシエロでもいいよ？」

珍しいコウのお誘いに面食らったエルメールだったが、ダンジョンに関する大事な話があるので冒険者協会支部の上役と街の統治者に取り次いで欲しいというコウの訴えに気持ちを改め、要請に応えるべくリシエロ達にも協力を求めた。

それから暫くの後、統治者の屋敷に行政官や冒険者協会支部の幹部などバラッセの街を治める立場にある人達が集められ、コウは彼らを前にダンジョンの最深部で見たモノや自らが行った事をまず明かした。

「 というわけで、生命の門を壊してしまいました。ごめんなさい。」

今後はダンジョンから魔物や変異体が居なくなつて街の収益が減るかもしれない事を謝罪するコウだったが、統治者を始め冒険者協会支部の幹部達に見られる反応は何れも薄い。というよりも、訝しみや呆れのような別方向からの憤りが感じられる。

「統治者殿、態々こんな時間に我々を呼び出した理由は まさか今の話を聞かせる為ではありませんまいな」

「あー……エルメール君。重要な用件というのはこの事なのかね？」

昼間は通常業務と街の警戒態勢維持、夜は戦時非常態勢で増えた仕事の片付けと、ただでさえ忙しいこの時期に一体これは何の冗談だと統治者代表に詰め寄る幹部達。

彼らは目の前にいる少年が召喚獣でガウイク隊員の複合体コウと同一の存在である事をまだ把握していなかった。故に、またぞろ何処の上流貴族の子息かは知らないが、有力貴族のご機嫌取りで子供の戯言に付き合わせる為に幹部召集を掛けたのかと抗議を向けているのだ。

少し前にもクラカルから嗜好品の買い付けに来た某大貴族の家族と面会する為に重要な会議を遅らせた等の前科があるので、幹部達の視線は厳しい。

統治者は冷や汗を浮かべつつ、”街の存亡に関わる問題だ”と召集を急ぎ立てたエルメールに説明を求めた。

「はあ……。コウ、お前のもう一つの姿を見せてやってくれ」

「ん、わかった」

疲れたように促すエルメールに頷いて答えるコウ。幹部達の思考を読み取っていたコウは、彼らが今しがた説明した話を信じていない事も理解していたので、取りあえず少年型を解除して複合体を取り出し、憑依してみせる。

概ね、予想していた通りの反応が見られた。

「な、なんと……」

「噂には聞いていたが、実際に目の当たりにすると言葉が出ぬな」

「さて！ それでは今の話は……っ 魔物や変異体が居なくなるという話は」

「全て本当の話、という事になりますな」

それは困ると慌てる統治者にうるたえる行政官。冒険者協会支部の幹部達もダンジョンが使い物にならなくなれば、交易の品目や仕事の幹旋内容、訓練学校のカリキュラムなどにも見直しを検討しなければならぬ。

「と、とにかくダンジョンに冒険者を呼び込めなくなるのは困る！
どうにかその”生命の門”を修復できるのか？」

「ヴォヴァウオオ、ヴァヴァウ」核部分を壊したから、無理だと思っ

コウはそう言って彼らの前に半壊した石塔を出した。この部屋の天井ぎりぎりまで延びる先端部分が、豪華なシャンデリア風照明具の明かりを受けて青白い光を反射する。

「持って帰って来たのか！」

「ぶわはははっ 流石コウだ！」

驚いているエルメールの隣でガシエが腹を抱えて笑っていた。皆が啞然としている中、リシエロと冒険者協会支部の幹部達が石塔に興味深そうに観察し始める。

「この術式はマルシエ式を基本にバーダリク王朝の宮廷魔術式で接続されていますね」

「うむ……石塔の設計理念には古代アマリア文明の遺跡に見られる魔導概念の痕跡が窺える」

「中枢術式はカンブリテン呪術式に似た編み方が混じっているが、綴じ込みは術者のオリジナルだろう」

コウが持ち帰った石塔の残骸を調べる研究者肌の魔術士達は『この形状は 』の術式ではないか』とか『 』の 』を元にXXして

あるのかもしれない』など専門用語だらけの会話を始める。

由緒あるダンジョンの最深部から運び出された”生命の門”は歴史的建造物の研究資料としてもかなり貴重な発掘品。慎重に扱うべきだと主張する研究者達の提言に、統治者の頭の中では『街の新たな観光資源に使えるかも』という計算が成されていた。

隣国エパテイタからナツハトームの軍勢を追い出すべくバラッセの街には引き続き援軍部隊が送り込まれており、王都での傭兵募集枠に間に合わなかった傭兵集団や局地戦を好む武闘派冒険者グループなども仕事を求めてバラッセに集まって来ていた。

コウが”生命の門”を破壊した夜、休憩所にいた冒険者グループや四階付近を探索していた者達が帰還して協会にダンジョンの様子がおかしい事を報告した。ダンジョンを覆う集合意識の気配が消え、地下空間を満たしていた魔力も軒並み薄れていく。

その影響でモンスター達の動きが鈍り、魔獣犬は連携が乱れて同士討ちを始めたり、何処かへ去っていつたり、寝たり。骸戦士は次々自壊してただの骸骨に戻ったりと、今までに確認された事の無い現象が多数報告された。

そんな折、バラッセの冒険者協会支部から統治者名義で公式発表されたダンジョン事情。

”バラッセのダンジョンから魔物や変異体が居なくなる”

” 地下五階の未探索エリアにはお宝が殆ど手付かずで残っている”
” 集合意識の消滅により、地下へ行くほど危険度が下がって貴重な品が簡単に手に入る”

” 高級触媒になる魔力のたっぷり染み込んだ骨も拾い放題だ”

その話は瞬く間にグランダー全土へと広がり、今の内に探索し尽くそうと大勢の冒険者達が集まったバラッセの街はまさに最後の盛り上がりともいえる賑わいに包まれていた。

近い内に一旦閉鎖されるであろうダンジョンについては、統治者も『まあ仕方がない』と理解を見せている。ダンジョンが干上がる前のお祭り騒ぎで稼げるだけ稼いでおこうという方針らしい。

安全な街の中にあるダンジョンなだけに、ただの洞窟になってもそれはそれで地下迷宮の観光資源としてまだ使い道はある。

「後は大きな問題さえ起きなければよし。今後は一般人向けの観光名所に地下街でも作るうか」

統治者は既に次の時代へ向けての戦略と構想を練り始めていた。

街門や防壁、建物の一部などにも防衛戦の傷跡を残すバラッセの街並み。普段は割りと静かなダンジョンの入り口付近だが、現在は連日訪れる多くの冒険者や商人達でごった返している。

「隊長っ 休憩所でまた喧嘩らしいです！」

「ああん？ 三階の班はどこ行った？」

「五階で骨の争奪戦やってる連中の仲裁に出払ってるそうぞ」
「あゝあいつ等かよ……仕方ねえ、俺らが行くぞ」

ダンジョンが危険地帯だった頃よりも忙しくなっちゃった防衛隊のガシエ達は、やれやれと愚痴りながら優先通路を使って地下へと下りていく。冒険者同士の争いなどは、別に珍しい事ではない。宝を巡って取得権で揉めたりというトラブルもよくある事だ。

争いレベルで済む話ならば態々防衛隊が出動するまでもないのだが、ダンジョンの探索には悪名高い者も普通に混じっている。

他の冒険者からの強奪を目的とした、所謂”同業者狩り”の存在だ。街の外にあるダンジョンは基本的に無法地帯といえるので、そういう行いも”当たり前前の危険の一つ”としてまかり通っている。

バラッセのダンジョンでは冒険者同士での直接的な争いを禁じている為、揉め事から死人を出すような事態に至る事は滅多にないものの、その安全性故に単独でダンジョンに挑む者が比較的多く、”同業者狩り”のターゲットにもなり易い。

現在のダンジョンは単独での探索者も多いが、人自体が多いので”同業者狩り”も迂闊な行動は取れないようだ。

強引な割り込みや横取りをしようとして揉めている所に、通り掛かった他の冒険者から善意の通報を受けた防衛隊が駆けつけ、仲裁に入るなどしてダンジョンの治安が護られている。

「あー、下まで走るのだりいー。コウのアレ、防衛隊にも回してくんねえかなあ」

「そういえば、コウもそろそろ王都に戻るそうですね。彼に口利きを頼んでみては？」

「……かなり偉いさん達と親しいらしいからなあ」

ガシエは『偶にはコネツてみるか』と、魔導輪の配備について正規軍上層部に掛け合って貰えるよう、コウに頼んでみる事を考えた。

「コウ、協会にはもう行って来たのか？ 確か今日発つのだろうか？」

「あ、エルメールさん」

「ピュリリ」

表通りから外れた路地を肩に伝書鳥など乗せて歩くコウに声を掛けるエルメール。この裏道はコウが街猫としてエルメールの部屋でお世話になっていた頃によく使っていた近道だ。

「協会にはもう行ってきたよ、今日の昼過ぎにはクラカルに飛ぶつもり」

”生命の門”絡みで暫くバラツセに留まる事となっていたコウ。滞在中はリシエロの部屋に泊めて貰っていた。最初はまたエルメールが預かる事を主張していたのだが、リシエロがどうしても『自分が預かる』と言って聞かなかつたのだ。理由は推して知るべし。

「コレもらっちゃった」

「”双剣と猛獣”のメダルか……個人で手にしたのはお前が初めてだろうな」

”生命の門”の発見と回収は”集合意識”の発見に次ぐ功績であるとし、コウの話を中心に石塔^{生命の門}をダンジョン創成期の頃の中枢装置として発表した冒険者協会は、バラツセがまたしても世界で初めてダ

ンジョンの秘密の一端を明らかにしたと宣伝。

コウにはその働きを称えるべく冒険者協会よりメダルが贈られる事になった。”双剣と猛獣”のメダルはグループ単位でなければ所得が難しいとされるランクの称号である。

「戦斧と大蛇”のいつこ下のメダルだよね」

「しかし、協会もよくこの混乱した時勢の中で辻褄を合わせられたものだ。冒険者に登録された時からの依頼扱いにしたそうだが？」

「うん、いちおう冒険者協会のとくべつな依頼でたんさくして見つけた事になってるよ」

「ふむ……まあ確かに協会や街にとって有意義な人材といえるし、お前にとっても良い選択だったのかもしれない」

エイオア国政府が管理しているらしい何処かのダンジョン最深部で見つけた『禍々しい魔力を放出していた呪術装置』の後継機と思われる石塔型の生命の門魔術式融合装置はその裏付けを取る為に研究者達の間で限定公開され、とある街の統治者が管理している歴史資料館に保管されていた書類からコウの話に出てくる魔術士、ダンジョンコーディネーターが実在していた事を示す公式文書が見つかった事でバラッセより発表された研究調査結果は正しいモノであると証明された。

各街の研究機関からは素晴らしい研究成果だと”冒険者コウ”に賞賛が送られ、研究者達の間では如何にして古代の魔術士に関する足取りや細かい所まで調べ上げられたのか、という話題で頻繁に議論が交わされている。

真相は『直接本人魔術士から聞いた』というモノだったりするのだが、それがコウから語られる事はない。

バラッセの街に派遣されたグランダール正規軍の援軍第二陣が到着する頃、コウは王都に向けてバラッセの街を飛び立った。

42話：霧雲の覆う頃

夕刻過ぎ頃にクラカルの上空へ辿り着いたコウは、くるりと旋回しながら駐留軍施設とクラカルの統治者であるディレトス家の屋敷を見渡した。帰りも王都行きの飛竜に乗せて貰う事になっているが、折角なのでアリスに顔を見せて行こうかと考える。

『バラツセに行く時は急いでたから、素通りだったもんね』

アリスともまだ少年型召喚獣の姿では会っていないので良い機会だと、コウはディレトス家の庭園へと降下していった。

自室でバラツセにいる年上の友人に手紙を書いていたアリスは、コツコツと窓を叩く音に顔を上げる。薄いカーテンをそつと捲ると、窓枠の縁に見覚えのある伝書鳥がとまっていた。

「まあ、あなたは……もしかして手紙を運んできてくれたの？」

アリスはそう言つて窓を開き、伝書鳥を招き入れる。ぴゅりりと鳴いて飛び込んで来た伝書鳥は部屋の中央付近でバサバサと翼をはためかせて空中静止。鳥の足元に集束した魔力が空気を揺らして風となり、ふわりと舞った羽毛の渦から光と共に少年が現れた。

「こんにちは、アリス」

「え……ええっ!？」

鳥が少年になった! と、思わず尻餅をついて驚くアリスに手を差し伸べたコウは、この姿について説明する為にまず正体を明かす。

「ボク、コウだよ」

「え……ええっ!？」

何故かまったく同じ反応が返された。

ディレトス家の晩餐に御呼ばれしているコウ。伯爵は相変わらず忙しいらしく、食堂にはアリスとその母スーリアしか揃っていないが、スーリアの周囲は以前のように侍女で固められているような事もなく、普通の大貴族らしい肃々として落ち着いた雰囲気にも包まれている。普段と若干違つところは、令嬢のアリスが弟のような少年に直接作法を教えている微笑ましい光景が見られる事であった。

「ほら、そこはこうして……右手で抑えて」

「こうかな?」

コウは食事をとる必要も無いのだが、やはり人の姿を得たのならば晩餐会でのマナーなども覚えねばと、アリスが言葉の読み書きを教えてくれた時と同様に手取り足取り実践しながら教えてくれる事になったので、コウもそれに応えた。

一応、人型召喚獣の身体は人間と同じように一通り食料その他の

摂取も可能なように出来ている。余談だが、人気モデルであったこの型は顧客の様々なニーズに応える為、排泄の類も可能だったりする。

食事を終えて部屋に戻って来たアリスとコウは、じゃれるファスターをあやししながら屋敷を出てからの事を話題にお話をして過ごす。

「そう……、色んな経験をしているのね。でも、あなたが無事で良かったわ」

「アリスも元気そうでよかったよ、前より明るくなった感じだ」

「うふふっ コウに言われたとおり、お友達と沢山お話してるもの」

コウの膝からアリスの膝へ、暫くしたらまたコウの膝へ駆け込んで下から顎の裏をぺろしてくる落ち着きの無いファスターを宥めつつ互いの近況なども語り合った二人は、今後の事について少し触れた。

「コウは……、これからまた戦いに行くの？」

「うん、ガウイク隊のみんなが前線に出てるからね。ボクも手伝いにいかないよ」

「……そう」

見た目は年下の男の子なのに、急に”男”の顔付きを見たような気がしたアリスは、何故だか胸の奥が締め付けられるような感覚に切なくなつた。ぎゅっとコウを抱きしめる。挟まれたファスターがもぞもぞしながら尻尾を振っている。

「無茶しないでね」
「だいじょうぶだよー」

その後、一晚泊まっついていく事を勧めるアリスに夜行の便で王都に向かうからと御暇おいとまを告げたコウは、屋敷を出て駐留軍施設へと向かった。使用人のお姉さま方が何故かお菓子をいっぱいくれたので、カレンへの良いお土産になりそうだと異次元倉庫に保管する。

「あしたの朝には王都につけるかな？」
「ピュリッ」

コウの呟きに、肩の伝書鳥が応えた。

グランダーとナツハトームを陸路で繋ぐ国境回廊近くの平原地帯では、西の砦に向かうグランダーの援軍を牽制すべく砦周辺に放たれているナツハトームの遊撃部隊と、アリアトルネの街へ侵攻してくるナツハトーム軍を迎撃する為に活動するグランダーの遊撃部隊がしばしば遭遇戦を繰り返している。

特に夜間は暗闇に乗じてグランダー領の奥深くまで侵攻しようとするナツハトーム軍の強襲機械化部隊が多く、グランダー側は西の砦とアリアトルネの防衛だけでなく街周辺から領内に入り込んで来る敵軍の発見と排除にも兵力を割かねばならない。

最前線である国境回廊付近の兵力分散を避けるため国内の傭兵団

や冒険者グループを雇って戦力の補強に当てているが、ナツハトーム軍の展開する機械化部隊は機動性が高く、少々後手に回る場面が見受けられる。

暗部同盟を使ったナツハトーム側の工作を含め、砦の急襲から始まった今回の戦いはグランダールが若干押されている状況であった。

「前方に敵影発見！」

「戦車はいるか？」

「いえ、武装馬車は二台ほど見えますが　戦車らしき姿は見えません」

先日アリアトルネの防衛に遊撃隊として加わったグランダール正規軍の実験部隊。魔導輪と魔導小銃を配備した”魔導器小隊”は、その実戦能力を測る意味も兼ねて街周辺の哨戒任務に就いていた。

ナツハトーム軍の強襲機械化部隊は歩兵と戦車で編成された少数部隊である事が確認されている。流石に初の実戦投入で戦車を相手にするのは分が悪い所だが、歩兵が中心の部隊ならおあつらえ向きだと、隊長は攻撃命令を下す。

「よし、訓練通り高速で近付いて一撃離脱の繰り返しだ。全員、滑走態勢！　奇襲を仕掛けるぞ！」

魔導小銃を構えて滑走態勢に入った魔導器小隊は、号令と共に夜の平原へと滑り出して行った。

王都トルトリユスの上空に設けられている飛竜の発着所では各方面に派遣されていた偵察飛竜が帰還したり、新たな任務を受けて飛び立ったりと多くの飛竜が引つ切り無しに出入りしている。

早朝、王都に帰還したコウは発着所から伝書鳥に憑依して直接ア
ンダギー博士の研究所を訪れると、お土産の戦車を博士に引き渡し
た。

「おおうつ これがナツハトームの戦車か」

「ちよつと焦げてるけど、ほとんど壊れてないよ」

コウが持つて帰ってきた戦車の残骸はバラツセの西門でバスクレ
イ総指揮の策に翻弄されて穴に落ちた四号車だ。ちなみに搭乗員は
五号車の乗員共々バラツセで捕虜になっている。

「軍の連中も西の砦方面から鹵獲したモノを輸送する事になつとる
んじやが、彼奴ら仕事が遅くていかん」

「コウと比べたら可哀想ですよ、博士」

輸送手段が違い過ぎるのだからと軍の輸送隊を擁護するサータ助
手も戦車の構造には興味があるらしく、博士と一緒に内部の機構な
どを観察している。沙耶華は研究所の厨房で朝食の支度を進めてい
た。

「双剣と猛獣」 功績一つで並ばれるとは……バラツセの秘宝
は先を越されたな」

「あ、レイオス王子」

戦時中の現在も普段とあまり変わらず、朝から沙耶華の顔を見に研究所を訪れるレイオス。今日はコウの帰還を聞いて早めにやって来たのだという。”生命の門”について直接話を聞きに来たらしい。

「しかしアレじゃのう、”生命の門”を作った魔術士の話。王都の地下遺跡に集合意識が存在しない事の説明にもなるのう」

「ああ、王都こよでそんな実験じくなぞ許可されんだらうからな」

「他の街にあるダンジョンも殆ど無許可で設置されているんでしょ
うね」

これから各街の統治者達がどう動くのかも気になるとサータは指摘する。バラッセの例からすると、最深部の装置を止めればそのダンジョンは時間の経過と共に一定期間は危険が排除され、地下に散らばる財宝が取り放題になるのだ。

今後、少なくとも街の外にあるダンジョンは最深部を目指す冒険者達が一層増えるに違いない。

「最深部の装置破壊を禁じてダンジョン利益の実をとるか、住人の安全を優先して善行の名をとるか」

「ふっ 中々難儀な選択肢を突きつけたものだな、コウ」

「ふかこうりよくだよ」

ダンジョンの収益を当て込んでいる街の統治者達はさぞかし頭を痛めているだろう。レイオスはそう言って笑った。

アングダー博士の研究所を後にしたコウは王都の北西にある国境に近い街、アリアトルネの防衛に向かったガウイーク隊を追う為、魔導船乗り場へとやって来た。

バラッセの街に行く時は軍の協力でクラカル行きの飛竜に乗せて貰ったが、今回は使用人達を運ぶアリアトルネ行きの魔導船に便乗させて貰う事になった。

「君、本当にアリアトルネに行くの？ 船を間違えてない？」

「あら……？ でもこの子、何処かで見たとかな」

「ボク、ガウイーク隊のみんなとごうりゆうしに行くんだ」

コウが自分はガウイーク隊の一員である事をアピールすると、使用人のお姉さん方は『ああ、そういえば！』と、街で有名討伐集団の隊員達とよく一緒に歩いていた従者らしき少年を思い出して納得した。

彼女達は王宮群でも第七層から八層という下層区画で働いている使用人達なので、上層区で起きた事件などについてもあまり詳しい事までは知らない。

故に、コウがエルローゼ第一王女様のお気に入りで話相手を務めていた事とか、ゴレムに変身して襲撃者から王女を護った等と噂に聞く”謎の少年”当人である事には気付いていなかった。

武闘会での活躍などで複合体のインパクトが強いせいか、少年型の認知度は親しい間柄の人間という狭い範囲に留まっている。

「出航するぞ、皆席に付いてくれ。ああ、それと子供には誰か付き添うように」

船長の指示で使用人のお姉さん方に挟まれて座るコウ。人員輸送用の魔導船は船長の他、操舵士と見張り役に護衛の兵士を含め六人

体制で運用されており、船室は乗合馬車と同じような作りで向かい合わせの席にそれぞれ五人ずつ、詰めれば一度に十五人は乗せて運ぶ事が出来る。

操舵室の天井にある船橋に上がった船長が王都上空を覆う浮遊陣地の監視員に出航を告げた。

「魔導船定期便208、エスルア号だ。これよりアリアトルネに向けて出航する」

「確認した。現在アリアトルネは西の砦方面から敵軍の侵入部隊が多数確認されている。航路はルート3を推奨する」

「了解した。当船は南西ルートでグリデント方面からアリアトルネに向かう。以上」

「了解。航行の無事を祈る」

魔導機関を唸らせ、浮遊陣地群を超える高さまで上昇した魔導船は一路、西方の街に向けて飛び立った。

「博士ー？ お食事の用意が出来ましたよー？」

お昼になっても食堂に現れない博士を呼びに来た沙耶華が、研究所前の広場に置かれている戦車の残骸を覗き込む。戦車の周囲には魔術研究棟施設からやって来た魔術士や魔導技士も何人が集まっております、熱心に残骸を調べている。

「うつむ……」

「博士？」

「むん？ おお、サヤ嬢か　むむ、もう飯の時間か」

「何時もの事ながら随分と熱心なんですね」

今回は特に入れ込んでいるみたいと指摘する沙耶華に、博士はうむと呟いて戦車の底から這い出て来た。入れ替わりに研究棟の魔導技士がいそいそと潜り込んで行く。一番技術者の興味がそそられる中枢機構部分だが、狭いので順番に調べているらしい。

「ふーむ……不可解じゃのう」

「どうかしたんですか？」

「うつむ……、ちーとばかり気になる部分があつての」

戦車の残骸を調べた博士は、車体の造りなどに違和感を覚えるのだという。これまでもナツハトーム製の馬車や道具、兵器の類は沢山調べた事があるのだが、この戦車は旧来のモノと根本的に何かが違う。

「こいつあ純粹にナツハトームの機械技師達が発明したモノとは違うかもしれないぞ」

その構造様式など設計理念から異世界シリーズのような概念を感じ取るのだと

「え、それって……？」

「もしかしたら、ナツハトームにもコウやサヤ嬢のような異世界人が迷い込んでいるのかもしれないのう」

博士はそう言って研究所の食堂に向かうのだった。

43話：眠れる鍵の顕在

大陸南西部に広がる砂漠地帯。点在するオアシスの数だけ民族国家が存在していると言われ、それらは一つの大きな帝国によって治められている。

豊かな水源と肥沃な大地の広がる南東部への侵出を目指して纏め上げられた国、それがナツハトーム帝国であった。

「む、スイル様がお戻りになられたぞ、門を開ける」
「開門！」

グランダールが魔導寄りの技術で発展しているのに対し、ナツハトームは機械化寄りの技術を発展させている。

ただし、元々がグランダールの魔導兵器に対抗する目的で開発が進められたという経緯を辿っている為か、その技術は主に軍事用の兵器類に偏っており、また国柄上、魔術士や戦士など戦闘員寄りの冒険者が多く輩出される傾向にあった。

重々しい開閉音を立てて宮殿の大門が開かれると、騎馬隊がそのまま通過出来そうな程の広さを誇る正面の通りを磨き上げられた重甲冑に身を包む一人の戦士が闊歩して行く。その姿を目で追う兵士達は皆、尊敬と憧れの眼差しを向けている。

宮殿に入り、広い廊下を真っ直ぐ進んだ突き当たりには扉の付い

た大きな柱が並ぶ。塔のようにも見えるその柱の中でも、一際大きい中央の柱には細かい装飾の入った豪華な扉。その前で控えている老紳士が丁寧なお辞儀で迎えた。

「お帰りなさいませ、スイルアツカ様。兵達の訓練、お疲れ様です」「うむ。皆はもう揃っているか？」

重甲冑の兜の奥から少々くぐもった声、しかしそれと分かる凜とした響きを持つ若い女性の声が問う。

「はい。皆様、お待ちになられていらっしやいますよ」

老紳士はそう答えて扉を開くと、自身が仕える主に搭乗を促した。この大きな柱は半年程前の改修で宮殿に設置された機械式の昇降機である。廊下の両側には内向きに階段が伸びているが、今は非常時にしか使われていない。

ナツハトーム軍の各方面から集まった将校達が一斉に立ち上がり、入室してきた重甲冑姿の最高司令官、ナツハトーム帝国の皇帝陛下より全軍の指揮権を委ねられているスイルアツカ皇女殿下に敬礼を向けた。

「スイル將軍！」

「皆、ご苦労。早速だが現在の戦況を報告してくれ」

訓練所から直接宮殿の総司令部にやって来たスイルアツカはそう言っただけで会議の席では邪魔になる訓練用の重甲冑をばいばいと脱ぎ始

めた。司令部付きの使用人達がそれを手伝い、最高級の訓練用重甲冑が手際よく片付けられていく。

ごつい籠手の内側からは細く引き締まった健康そうな白い腕。膝を護る装甲や脛当てが外されるとスラリとした脚線美があらわになる。兜と一体になっていて胸体部分を脱いでようやく身軽になったスイルアツカは、新鮮な空気を吸い込みながら伸びをした。

汗に濡れる火照った身体を使用人から受け取ったタオルで拭きながら、大きな地図の広げられた台座の傍に腰を下ろす。

僅かな布で胸と腰周りしか覆われていないその姿は非常に露出度が高く、目のやり場に困った若い将校達をそわそわさせる。アツプにした髪を解き、赤み掛かった金髪が絹糸のように滑らかな流動で肩を撫でた所で、重鎮の将校が報告を切り出した。

ちなみに、これら一連の扇情的な行動は彼女の計算^{スイル}尽くによるモノである。

「ふむ……では、やはりグランダール側にも異世界の技術が関わっている可能性は高いという訳だな？」

「ハッ 交戦した兵の証言に技術者達の話を纏めると、ほぼ確定的ではないかと」

「魔導船なども例の書物にある空飛ぶ船そのモノと言えますし、先日の戦いで新たに投入された魔導兵器部隊」

「あれは丸つきり我々側が開発していた”滑走機”や”携帯砲”と同じ概念を持つ兵器ですぞ」

グランダー側では”魔導輪”と”魔導小銃”と呼ばれているモノ。完成度はやはり魔導器を使っているグランダーの方が高いようだ、強襲部隊の指揮を担当している将校が忌々しそうに顔を顰める。

全く同じ時期に同じ概念を持つ新しい兵器が被るなど偶然とは思えない。例の書物に関する情報と新兵器開発については厳重な管理体制が敷かれており、情報が漏れたとも考え難く、そもそも魔導技術で先行するグランダーがナツハトームで極秘開発中の機械化兵器を探って真似るとも思えないのだ。

となると、こちら側が確保している異世界人の書物と同じモノか、或いは書物に書かれてあるような知識を持つ者がグランダーにも居るのではないかと考えられる。

「その事ですが、暗部同盟の報告にもそれらしい人物の存在を示す情報があつたようです」

「ほう、詳細を掴んでいたと？」

「それが……作戦の進行状況を纏めた普段の定期報告にあつた情報でしたので、見落としていたようです」

「そうか、ではもっと詳しく調べさせよう」

丸被りした新兵器に関する発想の出所については一先ずそれ置き、国境の砦に対する戦略やエイオア国の動向、グランダー軍の動きに対する確認と対処の指示を一通り済ませ、スイルアツカ最高司令官は総司令部を後にした。

軍施設の集中する区画を抜けて離宮へと向かう廊下に入ると、控えていた侍女達がわらわらと寄ってきてはスイルアツカに皇族の衣装を着せて行く。歩みを止める事無く着衣を済ませるスイルアツカはこれから向かう場所の事について何時もの確認をとった。

「彼”は何時も通りか」

「はい。今日もお変わりございません」

護衛もこなす側近の侍女からエイオアより祈祷士を呼んでいる事などの報告を受けつつ離宮の廊下を進み、一番奥にある部屋の前に立つ。”彼”の世話係達が並んでお辞儀をする中、彼女は部屋へと足を踏み入れた。

そこそこ豪華な作りをしたこの部屋は他の部屋と違って壁に窓が無く、唯一の天窓から差し込む光も厚いカーテンで遮られているので昼間でも薄暗い。一応、要人を持って成す為の部屋ではあるが、今の状態は隔離部屋に近い印象を受ける。

入って直ぐの広間は応接間となっており、”彼”の容態を診る為に呼ばれた医者や薬士達はここで待たされる事になっていた。

「お前が今回呼ばれた祈祷士か。かなりの腕利きだと聞いている」
「御初に御目に掛かりますスイルアツカ様。エイオアの祈祷士、リンドーラと申します」

一年程前、ナツハトーム帝国の領内にある古い遺跡で発見された

一人の若者。冒険者を引退した治癒術士が一般民用の治癒施設として利用している遺跡の建物内に倒れていたその若者は、明らかにナツハトームの人間ではない顔立ちをしており、身に纏う衣服は非常に上質で、近くには高級そうなカバンと極めて精密な絵の描かれた書物が散らばっていた。

奇妙な事に、この若者は発見された時から意識を失ったままで、どんな治癒術を施しても目を覚ます事は無かったのだ。

行き倒れの遭難者として届け出を受けた治安課の担当官は、若者の身形や所持品にあった書物、見た事の無い筆記用具らしき精巧な道具などから何処か大国の貴族ではないかと考え、軍上層部に大使の行方不明者が居ないか問い合わせを行った。

その時に持ち込まれた書物や精巧な道具が偶々スイルアツカ皇女の目に留まり、彼女は皇帝の秘事録に伝わる古い言い伝えで、”異邦の地よりも更に遠く異界より迷い込みし者あらば此れ必ず確保すべし”という一節を思い出す。

何処の国から来たのか、はたまた秘事録の一節にあるような異界から迷い込んだのか、これほど精巧な道具を作り出せる技術を持つ国の人間ならば是非とも高待遇で保護し、その国と国交を開いてグランドールに対抗し得る技術の援助を求めたい。

当時、既に皇帝から全軍の指揮権を与えられ、ナツハトームの行く末を任せられていたスイルアツカ皇女は、国力の強化を図る一環としてこの若者、名も分からぬ”彼”を持って成すべく離宮に運び込んだのだ。

しかし、それから何日経っても”彼”は目を覚ます事無く眠り続けていた。スイルアツカは”彼”の治癒に時折高名な医者や術士を離宮に呼ぶ一方で”彼”の書物を調べ、そこに精巧な絵で記されている様々な兵器類を見てこれを実現できないかと考えた。

神話や御伽噺にありそうな天に広がる大地の風景と、そこに描かれた空飛ぶ船。巨大な足をつけた動く砦、城のような甲冑巨人。兵器開発の技術者達は書物から得たアイデアを活かすべく研究に勤しみ、ナツハトームの機械化兵器が開発されていった。

そして調べと探れど一向に正体の分からない出所不明な”彼”については、やはり異界より迷い込んだ者ではないかと考えられるようになっていた。この異世界人が目を覚ませば、もっと色々な知識を得られるのでは無いか

今回、エイオアから高名な祈祷士であるリンドーラが呼ばれたのも、そういった流れからである。意識不明の異国人男性を覚醒させられないか、状態を診て欲しいとの依頼。

「では、早速だがみて貰おう。こっちだ」
「はい」

奥の寝室へと案内されると、天幕付きのベッドに横たわって眠る若い男性の姿。傍に付いていた世話係が外され、部屋にはリンドーラとスイルアツカ、側近の侍女、そして眠り続ける”彼”の四人だけになった。

”彼”が異世界人であるかもしれない事は一般的には伏せられているが、治療に必要な情報としてリンドーラには色々と細かい事情もある程度まで明かされていた。

対象の心に触れてその者の本質を見抜く熟練祈祷士の能力が発揮される。

「……………」

リンドーラは”彼”の状態を視て一瞬目を見張った。その意味に気付かれないよう、”彼”の状態についてスィルアツカ達に説明を始める。魂は宿っているが意識が精神諸共存していない。この世界に現われる際、落としてきたのかもしれないと。

「今の状態では一生掛かっても自然に目覚める事はないでしょう。ですが、何かの拍子に精神が戻る事もあるかもしれません」
「祈祷術で精神を呼び戻す事はできるのか？」

「それは……世界が違うので非常に難しいですね」
「ふむ、方法が無い訳でもないという事が」

顎に指などあてながら考え込むスィルアツカに、リンドーラは無理に目覚めさせようとすると本来の精神とは違うモノが入り込んで取り憑く危険もあるので、迂闊に降神術の類は試さない方が良くと警告を促す。

「目覚めさせる事は難しいようだが、状態が判明しただけでも良しとするか。ご苦労だった、エイオアの祈祷士よ」
「あまり御役に立てず、申し訳ありません」

殊勝に頭を下げ退室するリンドーラ。”彼”の世話係が呼ばれて再びベッドの傍に控える。寝室を出る際、スィルアツカは側近の侍女に一瞬の目配せを行った。僅かな動作で承りの意を返す侍女は他の侍女達に混じっている部下に視線を送って指示を出す。

この祈祷士の動向を監視せよ　そんな内容の指示であった。

ナツハトームの王宮を後にするリンドーラは、立ち去りながら心の中で確信していた。離宮の奥深くに匿われている精神の抜けた眠れる異世界人。あれは、”コウの本体”である、と。

エイオア国としてはグランダーとナツハトーム、どちらが優勢になり過ぎて困る。現グランダーの王や次期国王とは上手く付き合っただけそうだが、ナツハトームは次代の皇帝がどう動くかまだ未知数なのだ。

今回のナツハトームによるグランダー侵攻再開はある意味、現皇帝を始め民や支分国にスイルアツカ皇女の次期皇帝としての能力を示す為のものでもある。

機械化技術を発展させ、国力の強化に尽力したスイルアツカ皇女は現在グランダーとの戦況も魔導兵器を駆るグランダー軍相手に互角か有利に進めており、その力を示した。

もし、最近なにかと活躍が噂されるコウが本来の身体に戻り、ナツハトームに今以上の力を与えたとしたら、現在の戦力バランスが大きく崩れ兼ねない。

グランダーの魔導技術とどうにか並べる程度まで発展した機械化技術だが、帝国は異世界より持ち込まれた書物を解析して参考にしただけであそこまで機械化技術を発展させたのだ。

魔獣犬の中にいた精神体のコウは記憶を失っているようだった。そのコウが本来の身体に戻る事で記憶が覚醒した場合、文字も分からない絵付きの書物からのみで進められていた帝国の機械化技術が更に洗練され、魔導技術をも凌駕するほど発展すれば ナツハトームは再び覇権を狙った侵攻を始めるかもしれない。

『コウには知らせない方がいい？ 或いは……冒険者としてエイオアに呼び込んだ方が確実？』

帰国したら評議会に報告しなければと、一つ予定を立てたりインドーラは送迎の馬車に乗り込んだ。

44話：魔導船エスルア号

グランダールの西方にある街グリデンタはアリアトルネと同じくナツハトーム帝国との国境沿いにある街だが、砦と兼用の要塞化した非常に強固な街である為、ナツハトーム軍もここには手を出していない。

地理的にも国境回廊から二日分ほど南に位置しており、攻撃対象としての優先度が低いという理由もある。

王都トルトリユスを飛び立ったアリアトルネ行き魔導船定期便208エスルア号は、このグリデンタを経由してアリアトルネに入る航路を進んでいた。現在はグリデンタまで巡航速度であと半日ほどの地点を夜間航行中である。

「あら……コウ君、まだ起きてるの？」

「うん、ちよっとね」

船室で寄り添って眠る使用人のお姉さん方に挟まれているコウ。

睡眠をとる必要の無いコウは普段、皆が寝静まっている間に魔術の練習をしたり、散歩で外を出歩いたりしているのだが、船に乗っている今は無闇に動き回る訳にもいかないので大人しくしている。

「だめよ？ 子供はちゃんと寝ないと」

そう言って自分の膝にコウを抱き寄せた彼女は包まっていた毛布

で一緒に包み込むと、やがて穏やかな寝息を立て始めた。

船室の小さな窓を見上げると月明かりに照らされながら流れて行く灰色の千切れ雲。その隙間に瞬く小さな星々。低く唸る魔導機関の稼動音に混じって僅かに聞こえる風の音。夜間航行の静かなひととき。

なんとなく懐かしさを覚えたコウは、自分を毛布で包む使用人のお姉さんの鼓動に耳を傾けながら目を閉じた。その時、風の音に何か別の音が混じった。

「ん？ なんだあの光は」

見張り役の兵が船の縁から地上の森を見下ろした瞬間、左舷前方で突然の爆発。エスルア号の船体が大きく揺れる。

「何事だ！」

「分からんっ 敵襲かもしれん！」

「見張りが一人落ちた！」

「くそっ 機関全開！ 最大速度で上昇しろっ」

地上からの攻撃らしいという事で上昇して回避を試みるエスルア号の船尾を何かが掠めて飛んでいく。シュルシュルと音を立てながら煙の軌跡を引いて飛翔する筒状の物体が二本、大きく弧を描いてエスルア号に先端を向けた。

それを見たコウの脳裏に、欠けた記憶から浮かび上がる何かのイメージと名称。

「あれは……ゆうどうみさいる？」

見る間に迫る筒状の物体は二本の内の片方が途中で失速、噴出してた煙が途切れて落ちていったが、もう一本がエスルア号の後部甲板付近で爆ぜた。衝撃で傾く船体。

更に船底付近で起きた爆発によって操舵不能になったエスルア号は船体をコマのように横回転させながら森へと落下していく。

「駄目だっ 魔導機関がやられた！」
「全員何かにつかまれ！ 衝撃に備えろ！」

護衛や見張り役の兵達は手摺りや窓枠につかまって踏ん張り、船室では使用人達が悲鳴を上げながら椅子の足などにしがみつく。この混乱状況の中、皆を護らねばと立ち上がり掛けたコウの意識に別の情景が重なった。

エンジンから煙が出てる 墜落するぞ！ みなさん落ち着いて、席を立たずにライフジャケットを

「っ……！」

その瞬間、コウの存在がぶれた。憑依による支配が解かれて少年型召喚獣のコントロールが失われる。

形態の維持に特化されているので召喚が解除される事はなかったが、ぐったりと力の抜けた身体が崩れ落ちた所を使用人のお姉さん方に抱きかかえられた。彼女達からすれば、コウは有名討伐集団ガウイク隊の従者だがまだ小さな子供なのだ。

「コウ君しっかり！」
「大丈夫だからね！」

しっかりと抱きしめて励ましながら床に伏せる使用人達。やがて森の木々に接触して大きくバランスを崩したエスルア号は煙を噴き上げながら墜落したのだった。

「やった！ 撃墜成功だ」

森に潜むナツハトームの強襲機械化部隊で”魔力探知式・筒型火炎槍”を操る特殊砲兵が歓声を上げる。

今回の戦い、ナツハトーム側は機械化戦車を始め滑走機や携帯砲のような小型火器など多くの新兵器を投入しており、グランダール領に侵入させている部隊は各新兵器の性能実験も兼ねている為、激戦区から離れた地域にも展開されているのだ。

グランダールの魔導船は兵や物資を前線まで迅速に運搬できる。陸路を行く馬車など比べ物にならないその輸送力は、ナツハトーム軍にとって常に脅威であった。

今までは空を行く魔導船に対して有効な攻撃手段もなく、折角包囲した拠点にむざむざ援軍や物資を運び込まれて持ち直されたり、魔導船から直接爆撃を受けたりと一方的にやられてしまう場面が多かったが、これで対抗手段が出来た。

開発した機械化戦車に対抗できる兵器として同時に作られた”筒型火炎槍”に一定量の魔力を探知して向かっていく機構が付けられた”魔力探知式・筒型火炎槍”の有用性が実証されたと、喜び勇みながら魔導船の落ちた場所へ向かうナツハトーム兵。

「魔導船の撃墜は俺達の部隊が初だよな！」

「多分な。これで領地が増えたら褒美に貰えるのは確実だぜ」

「俺、こつちに土地を貰ったら穀物育ててエールを作るんだ」
「はっはっはっ 気がはえーよ」

やいのやいのと浮かれつつも警戒しながら墜落現場にやって来た彼らは短剣と携帯砲を構えると、へし折れた木の傍で横転している魔導船に近付いていく。救出作業でもしているのだろうか、残骸の影でうごめく乗組員らしき姿が見えた。

「止まれ！ 我々はナツハトーム軍第11強襲機械化部隊だ！ 貴殿等は既に包囲されている！」

「武装を解除し、所属を明らかにして投降せよ！」

「グランダール魔導船定期便208エスルア号の船長だ、こつちにや怪我人しかいない」

魔導船技術の漏洩防止義務により、こつそり魔導機関の中枢部分に破壊処置を施していた船長がそう答える。

どうにか水平姿勢を保ちながら不時着しようとした魔導船は一本の太木に激突して操舵室が大破。その際に投げ出された船長はぶつかった木に引つ掛かり、折れた木がゆっくり倒れたので軽い打ち身程度に済んだが、操舵士は押し潰されて死亡。

船体に掴まっていた見張り役や護衛の兵も同じく衝撃で投げ出され、相当な高さから落ちた為に助からなかった。

「定期便だと……？」

「輸送船か？ 積荷は何だ」

「アリアトルネに送る働き手の人材だよ。なあ、あんたらに治療術士はいないのか？」

船室にいた使用人達も頭を強く打つなどした二人の死亡が確認され、残った内の半数が骨折や打撲で重軽傷を負っている。治癒を施せばまだ助かる筈だと怪我人の救助を要請する船長に促され、ナツハトーム兵が残骸の裏側に回り込むと

「あ、コウ君……気がついた？」

「あれ？　ここは……」

「よかった、何処も痛い所ない？」

「うん、ボクはだいじょうぶだけど……なんだかさつきまで別のばしよにいた気がする」

そこには小さな子供や怪我人を介抱する若い使用人達の姿があつた。船体の近くには両手を胸に交差して横たわる二人の遺体。こちらでも使用人の服を着た女性だ。

「まさか、民間船だったのか!？」

「いや、魔導船は軍が管理してるから一応軍属ではあるが……まあ、運用内容は民間の乗合馬車みたいなもんだ」

撃墜した魔導船に乗っていたのは殆どが民間人の女子供であつた事を知り、若干テンションを下げている強襲部隊の兵士達。

とりあえず捕虜として連行する事にした彼らは運搬用の車両を呼び寄せる。独特の機械音を響かせながら足場の悪い森の中を切り開くように進む戦車が現れた。

バラツセに投入された拠点制圧用の重装甲型と違い、こちらは機動性を重視した強襲機械化部隊仕様の軽量戦車である。

魔導船の残骸が調べられている間、船長と使用人達、それにコウの八人は捕虜として二台の戦車に分乗させられた。転落死した護衛や見張り役の兵と使用人の遺体はその場で魔導船の残骸と共に火葬

される事になる。

船長は遺品として乗組員の兵士から形見の品となる物を預かり、使用人達も同僚の家族や知り合いと再会できた折に返せるよう、本人が身に付けていたモノをそれぞれ預かった。

「コウ君、大丈夫？ 顔色が悪いみたい」

「だいじょうぶ、なんともないよ」

言葉少なに答えるコウは、まだ開きつ放しになっている戦車の後部扉から魔導船の残骸を見つめていた。死亡した使用人の二人は魔導船乗り場で最初に声を掛けてくれた人達だ。

どうして助けられなかったんだろう？ と自問自答するコウは、先程の現象を思い出す。

船が墜落を始めた時、コウは複合体を出して皆を護ろうと考えたのだが、突然意識を突き破るように浮かんだ情景に自身の存在がぶれるのを感じた。まるで自分が消滅するかの如く霞んでいく感覚。遠くなる音と景色。

気がつくと、横倒しになった船室で今声を掛けてくれているお姉さんの腕の中にいたのだ。そして、先程目覚めた時から何処かに意識を引っ張られているような感覚が消えないでいる。顔色が優れなように見えるのはその為であった。

「私達、どうなるのかしら……」

後部扉が閉じられた薄暗い戦車の中で、使用人の誰かが呟いた。

グランドール西方の街、グリデントに近い森上空で魔導船エスルア号が消息を絶つたのと同じ頃、ナツハトームの宮殿内を寝着姿のまま駆け抜ける皇女スイルアツカの姿があった。

薄い寝着姿で夜の廊下を駆けてくる皇女様に驚いたりうろたえたりする巡回中の兵達を捨て置き、離宮の奥部屋へ飛び込んで来たスイルアツカは世話係の侍女に事情を訊ねる。

「 ”彼” の意識が戻ったと？ 」

「 いえ、それが…… 」

今まで何の反応も示さず眠り続けていた ”彼” が、突然もがくように呻きながら腕を持ち上げる動作を見せたのだという。直ぐにそれは治まり、今はまた静かに眠っている。

「 まるで、うなされているようでした 」

「 ふむ……精神や意識の無い状態でも悪夢をみたりするのだろうか 」

それから暫くして側近の侍女がやって来たのでスイルアツカは調べさせていた事の報告に耳を傾ける。側近によれば、監視させている祈祷士にこれといった怪しい動きは見られなかったという。

「 何が原因かは分からないが、 ”彼” が目覚める予兆かもしれんな 」

また何か反応があれば直ぐに知らせるようにと、引き続き ”彼” の世話と観察を申し付けたスイルアツカは離宮の奥部屋を後にした。

「スイル將軍！　って　　し、失礼しましたっ！」

離宮を出て宮殿の自室へ戻る途中、軍施設区画に向かう廊下を走っていた若い将校がスイルアツカに気付いて声を掛けて来た、が、身体のリインも艶かしく透けて見える薄い寝着姿に目を見張ると、顔を真っ赤にしながら慌てて背を向けた。

「構わん、何があつた？」

「は、はっ　実は　　」

砦を攻めていた部隊からの急報で、グランダール側の雇った傭兵集団の急襲を受けて砦の包囲網が一部崩れているとの事らしく、大至急、応援要請が来ているそうだ。

「アリアトルネの攻略も予定が遅れているな……」

「周辺の街も防備を固めて来ましたから、強襲部隊の遊撃作戦も効果落ちてきています」

「やはり拠点を確認しなければ限界があるか」

ナツハトーム側　スイルアツカには今回の戦いで南東部への入り口である国境回廊の砦だけは押さえておきたいという思惑がある。砦は回廊に建てられた強固な門であり、その開閉によって軍隊に限らず一般の商人達が扱う穀物や日用品など流通全般に影響を与える事が出来る。土地柄上、食糧事情が厳しいナツハトームとしては回廊の往来を司る門の主導権は握っておきたい。

グランダール領の街を攻略するのも軍民含めて出来るだけ多くの捕虜を得る事で捕虜交換に使ったり、身代金をせしめて機械化兵器

開発に費やした膨大な資金の回収を図るのが主な目的である。

膨大な研究開発費、いわゆる支分国からの借金も返さなくてはならないのだ。

「せっかく稼いだ緒戦の勢いをここで削がれたくはないな、私が出るか」

「っ！ 將軍自ら砦の攻略に？」

砦の攻略に時間を掛ければ必ずレオゼオス王からの巻き返しがある。その前に攻勢を掛けて一気に攻め落とさなければならぬ。今が攻め時と見たスイルアツカは、そのまま総司令部へと足を向けた。

アリアトルネの街から『魔導船の定期便が到着予定日になっても現れない』と報せを受けたグランダー軍が冒険者協会の協力も得て航路の捜索を行っていた所、グリデンタの街より『行方不明になった魔導船エスルア号の乗組員と思われる男性を保護した』との報告が届けられた。

見張り役だった彼はエスルア号が撃墜される直前に船から落ちたのだが、幸いにも木の枝に引っ掛かって一命を取り留めていた。

そしてこれも不幸中の幸いか、戦車を引き連れたナツハトム軍の強襲部隊が十数日間も付近の森の中で活動していた為に獣や魔物の類がこの辺りから居なくなっており、森の中を单身さまよった彼は魔物や獣に襲われる事もなく生還する事が出来たのだ。

どうにかグリデンタの街に辿り着いた彼からエスルア号の事が知らされたのは、墜落から三日目。王都にその一報が入ったのは四日目の事であった。

これまでも魔導器の故障や天候に纏わる事故などで魔導船が墜落した事はあったものの、敵対者からの攻撃を受けて撃墜されるような事態に至ったことは無く、エスルア号はグランダー軍に所属する魔導船で初の被害船となった。

軍仕様の船ではなかったとはいえ、魔導船が撃墜された事実は今まで軍を活動させる各地域で制空権を欲しい俣にしていたグランダー側の優位性が揺らいだ事を示しており、急遽対策を練る為の会議が開かれた。

「今回の戦い、少々厳しくなるかもしれんな」

レオゼオス王は城の最上階にあるテラスから西の砦方面の空を見詰めると、独りそう呟いた。

45話：国境回廊にて

ナツハトーム本国に向かう第11強襲機械化部隊はグリデンタ近郊の森を抜けて湾沿いに北上し、これからナツハトーム側へ抜ける国境回廊に差し掛かろうとしていた。砦の近くを横切るので、攻略中の部隊が展開している様子を眺める事が出来る。

「前方に友軍！」

「第3機械化歩兵部隊ですな」

「アリアトルネ方面に向かった連中だな」

「確か”滑走機”を導入してた部隊だっけか？」

並走する二台の戦車上から味方部隊の武装馬車に合図を送り、互いの距離を詰めていく。戦車内に押し込められているエスルア号の船長や使用人達は外の様子が分からないので、兵達の話声から周囲の状況を窺っていた。

「よう！ そつちも砦に向かうのか？」

「俺らは捕虜の輸送だよ、あんたらは砦の攻略に加わるのか？」

「ん？ ああ、グリデンタ方面の部隊にはまだ連絡が行ってないんだな。今こつちに来てる部隊には召集が掛かってるんだぜ」

ナツハトーム軍の最高司令官、スィルアツカ皇女殿下が自ら砦の攻略に出向くとあって、グランダール領に侵攻中だった他の部隊も

その指揮下に入るべく引き揚げて来ているのだという。

「スイル將軍が御出陣するのか！？ そりゃ凄い」

戦車の上にまたがる兵士と武装馬車に乗り込んでいる兵士達そんな会話を交わしている間に、第11強襲機械化部隊にもスイル將軍の砦攻略に加わるよう指令の通達が、性能の悪い”対の遠声”の模造品から伝えられた。

砦を奪取出来ればここを拠点に出来るので捕虜の輸送も半分で済む。本国へ運ぶ予定の捕虜は見張りに兵力を割かれるのも問題なので軍属の敵兵はそのまま本国へ輸送。脅威にならない一般民の捕虜は砦攻略の間、陣後方で待機させる方針のようだ。

ちなみにこの”対の遠声”の模造品、声を届けられる範囲は正規品の半分ほどしかなく、音も小さくて聞き取り難いので互いに大声になってしまう事から、兵達の間では”対の大声”などと揶揄されている。

おかげで戦車内にいる捕虜のコウ達にも通信内容が受け答え側だけだが丸聞こえであった。

「私達、砦の所で降ろされるみたいね」

「今後の待遇が気になるわ……。この部隊の人達は紳士的だったけど、人って群れると豹変する事もあるから」

ナツハトームの兵達が話題にするスイル將軍という人物の人物柄によつては、色々覚悟しなければならぬだろうと囁き合う使用人達そんな中、コウは何処かへ引つ張られる感覚に少しずつ馴染みながら、意識が流れようとする方向に集中してその原因を探っていた。

『うーん、方角は北西かあ』

憑依して身体を得ている間はこの場に留まっていられるようだが、召喚獣から出ると一気に引き寄せられてしまいそうだ。何処へ引かれて行くのか興味はあるものの、自分の存在が消えてしまいような感覚には不安を覚える。

国境回廊に近づくにつれてぞくぞくと集まってくるナツハトームの侵攻部隊。やがて第11強襲機械化部隊は西の砦前に布陣するナツハトーム軍の陣地に入ると、そこで車両を停車させた。

スイル将軍が率いる精鋭団が来ているらしく、陣の中央に張られた軍旗の翻る一際大きなテントが目立っている。

砦攻略部隊の陣地後方に捕虜を一時収容する場所があげられ、ナツハトーム軍の侵攻部隊によって捕虜となった一般民や非戦闘員が集められると、ここでの生活について注意事項などの説明がなされた。

食事と身の安全は保障されるが、雑用など一定の労働を課せられるのだそう。集められた捕虜達を観察するコウは、自分達と同じく比較的健康そうな一団とは別に、痛々しい痣を顔に残す見るからに憔悴している様子の人達も何人か見掛けた。

ナツハトーム兵に向ける眼差しはぎらつくような恨みの籠もったモノから達観めいたモノまで様々だ。やがて見張りの兵を残して仮収容所の柵が閉じられると、捕虜達はそれぞれのグループで固まってテントに向かったり、他のグループと交流を図ったりしはじめる。

エスルア号の船長は積極的に余所のグループへ会話を持ちかけて情報収集を始めたようだ。コウも冒険者の心得とばかりにそれにおうとしたが

「もう、コウ君はちょっと目を離すと直ぐどっか行っちゃうんだから」

「移動中も殆ど寝てなかったみたいだし、まだ調子も悪そうだし…」

「テントの中なら落ち着いてゆっくり眠れると思うわ」

使用人のお姉さん方から『子供は休まなくちゃダメ』と、テントまで連行されていくのだった。

「ひとりで歩けるよー」

「だーめ」

抱っこで。

夜、皆が寝静まった頃。狸寝入りの修行を終えたコウはお姉さん方の隙間から抜け出し、テントの外に出た。砦のある方角に沢山の篝火が炊かれているので、街の近くにいるような明るさを感じる。橙色に照らし出された大型投擲器の影が地面に長く伸びて揺れ、天辺で作業をしているらしき人影を映し出す。昼間の攻防で砦から反撃を受けて何処か壊れたらしい。

「今度は第二部隊が急襲を受けたんだってな」

「ああ、またヴァロウ隊だよ」

てくてくと柵の近くを歩いていたコウは、兵士達の話し声が聞こえたので耳を敬てた。

「あいつらか……やっぱ影術士の仕業か？」

「らしいな、いつそエイオアから呪術士を呼んで簡易結界を張らせようかって話が出る」

「エイオアは協力しないだろう」

「いや、また暗部同盟を使うつもりなんじゃないかな」

我が国^{ウチ}は魔術関連には弱いからなあとボヤキのような雑談を交わしている兵士達。砦の包囲網が完成しようとする度に、ヴァロウ隊の急襲を受けて布陣の何処か一角が崩されてしまうので、中々総攻撃の足並みが揃わないでいるようだ。

どうやらヴァロウ隊の影術士、リトアネーゼが頑張っているらしい。

複合体で砦の防衛やヴァロウ隊の援護に行きたいコウだったが、召喚を解いて精神体になると何処かに引っ張っていかれそうなので少年型を解除出来ないでいた。それに、捕虜仲間な使用人のお姉さん方達の事もある。

やたらとコウを構いたがる彼女達の思考を読んで理解した事が一つ。ある意味、極限状況でもある捕虜生活という環境下。

保護者のような責任感を持って小さな子供を護るといふ行為が彼女達の不安を軽減し、それによって心のバランスも保たれている事が窺えた。コウを心配して構うのは自分達が抱える不安の裏返しでもあるのだ。

『敵を倒す事だけが戦いではないって、エルメールさんも言ったよね』

テントに戻って来たコウが寢床に潜り込もうとすると、コウを挟んでいたお姉さんがむっくり半身を起こして眠気眼で問い掛ける。

「コウ君……どこ行ってたの？」

「ちよっとおしっこ」

「そう……ああ、かぶれたら大変だわ、拭いてあげようか？」

「だいじょうぶだよー」

彼女達の心の平穏を護る為、コウは今しばらく癒し系マスケットのポジションに身を置く事にしたのだった。

コウ達が国境回廊に運ばれて二日目。スイル將軍の参戦で兵達の士気も上がっているナツハトーム軍は戦車や大型投擲器、機械化歩兵の筒型火炎槍や携帯砲、携帯炸裂弾といった新型兵器を大量に投入して砦を一気に落とさんと苛烈に攻める。

しかし、砦を護るユタ司令官もよく踏ん張っており、ヴァロウ隊を中心にした傭兵部隊での夜襲と砦防壁の突貫修復でナツハトーム側の猛攻を凌いでいた。

崩しても崩しても翌日には修復される無限防壁に、崩しても崩しても翌日には再編成される無限包囲網の攻防が続く。そんな折、近くレイオス王子が軍を率いて戦場入りするという噂が両軍に流れた。

「レイオス第一王子は”金色の剣竜隊”という冒険者グループを率いる武闘派王子ですね」

「ふむ……レオゼオス王の将器を持つやもしれぬ相手か」

『攻略を急がねばならぬ』と、スイルアツカは思いの外に堅牢で梃子摺っている砦を睨む。

本国から連れてきた自分の精鋭団は砦攻略を始めて四日ほどしか経っていないので、士気もまだ十分に高く戦闘意欲を保っているが、開戦当初から砦の攻略に当たっていた部隊にはそろそろ疲弊が目立ち始めている。

「最悪、砦を落とせず撤退する事になっても、既に目的は果たせています」

「まあ、確かにな」

戦場においても侍女のスタイルは崩さない側近に苦笑で応えるスイルアツカ。国境回廊を押さえておきたいのは確かだが、それはもつと先の事を見越しての思惑だ。

今回の戦いで得たかった本来の目的は、今現在グランダーと互角の戦況を演じている時点で達成されている。

「しかしまあ、折角ここまで来たのだ。なるべく良い形で終わらせたいじゃないか？」

「砦の兵を捕虜に出来れば、借金も一気に返せそうですね」

スイルアツカの肩の力を抜いた話し方に応じ、硬い雰囲気崩してクスリと笑う側近の侍女は、エパティタに派遣した遠征艦隊も捕虜の数が勝っている今の内にとつと引き揚げさせるのがよろしいでしょうと進言した。

「そうだな。明日もつ一当て総攻撃を仕掛けて、それで駄目なら帝都^ちに帰ろう」

「では、そのように」

十四回目の攻防が一段落した夕刻頃。火炎樽が底をついて後方に下げられる投擲器や故障した戦車の牽引、燃料となる召喚石の補給など、ナツハトーム軍の砦攻略部隊陣営では明日の総攻撃に備えて最後の調整が行われている。

当初、作戦では砦攻めと同時にアリアトルネやその周辺の街にも攻撃を仕掛けて早い段階で砦かアリアトルネを占領し、そこを拠点に国境を押し上げ、兵力を逐次投入する事で回廊を含む区域一帯を完全に掌握して帝国領に組み込む予定だった。

だが砦の堅牢さは予想以上で、緒戦の一撃にて半壊させたにも関わらず機能を失わなかったばかりか、開戦二日目で砦上空に現れたグランダール軍の魔導船より支援を受けて一夜で防壁を修繕してみせるという魔導建築技術の高さを見せ付けた。

砦の機能が失われていなかった事でアリアトルネを制圧する部隊の兵力が分断されてしまい、勢いを削がれてもたついている隙に街の防備を固められて現在の膠着状態を招いている。

「明日の総攻撃で落とせなかったら撤退らしいな」

「あゝあ、後から来た連中は勝手だよ」

「アイツ等はいいいよな、どうせ今夜もあの皇女様と
「おい、スイル將軍の悪口は不味いぞ」

侵攻第一陣の先行組に所属する兵士が数人、陣地の喧騒を離れて愚痴など交えながら自主哨戒任務をこなしていた。ぶつちやけサボっているのだが、皆攻めで野営を始めて十日近く戦場に身を置く彼らは色々と鬱積しており、言動にもそれが現れている。

そんな彼らの歩く先に、捕虜の仮収容所を囲む柵が見えてきた。大分端っこまで来てしまったなと来た道を戻ろうとしてふと視界に入った光景。テントから出て来た数人の使用人らしき若い女性達が、タオルと桶を持って僅かに傾斜した丘を下っていく。

洗濯物を抱えていないので水浴びに行くのかもしれない。あの先には小さな川が流れているのだ。

「……見張りは下っ端が一人だけか」

「ああ……ちよつと説得すりゃ済みそうだな」

怪しい眼つきで目配せし合った何人かが頷き、捕虜達の後を追うように丘の麓へと足を向ける。その場の空気から仲間の考えを察した一人が怪訝な表情になると、軽率な行動をとらないよう諫めに掛かった。

「おいおい何考えてんだ、やめとけって」

「んじゃあ、お前は真面目に働いてるよ」

「こちらら前線基地を出てから十日以上も敵地で禁欲生活させられてんだぜ」

「將軍直屬の精鋭団じゃあるめえし、品行方正な模範的兵士とかや

「つてられっかって」

疲弊した精神と享楽に飢えた彼等にとって、血の臭いも機械油臭もしない堅気の若い女性が複数人で水浴びをしている姿など、想像するだけで理性を砕くに十分だ。

「俺は行かねーからなっ 後でどうなっても知らんぞ」

「土産話は聞かせてやるよ」

「上にチクんじゃねーぞー」

止めようとした一人を残し、彼等は麓の小川を目指して丘を下って行った。

夕暮れ前のひととき。西日の色に染まる丘の斜面を下りてきた使用人達は岩場の影で水浴びの準備を始めていた。少し離れた場所では若い見張り役の兵士が黒髪の少年と向かい合っている。

「ふくん、じゃあナツハトームってたくさんの方が集まってできてるんだね」

「まあね。全部ひっくるめて一つの帝国ってのは少し違うけど、ナツハトームは宗主国みたいなもんだよ」

所々に転がる大きな巨石の一つに背を預けて、使用人達が面倒を見てくれるらしい少年の話し相手になっている若い兵士は、時折ちらちらと川の岩場に視線を向けては戻し、逡巡してはまた視線を向けるを繰り返していた。あまり会話には集中していないようだ。

そんな二人に、近付いてきた数人の一般兵から声が掛けられた。

「ようつ 若いの」

「任務ご苦労！」

「え？ あ、はい」

どこか敵^{いか}つい雰囲気醸し出している彼等の一人が見張り役の若い兵士の肩に腕など乗せながら辺りを見渡し、岩場に並ぶ使用人服の入られた桶を見つけると、顎で仲間^{あひだ}に合図を送った。徐に小川沿いの岩場へと歩き出す兵士達。

「あ、ちよつとつ 今そつちには」

「まーまーいいから、おめえはそつちで子守を頑張つてくれよ、な？」

水浴び中の女性捕虜達がいるので立ち入らないようにと訴える若い兵士の首に腕を回して肩を組んだ敵^{いか}つい兵士は、そう言つて引き寄せた黒髪の少年を若い兵士に押し付けると、二人を巨石の裏へと追いやろつとする。

「ほ、捕虜への虐待は軍規違反です！」

「虐待？ んな事するわきゃねえだろう？ 捕虜は大事な金蔓だぞ？」

後日、身代金と引き換えに返すんだからなと宥めるように言い聞かせる敵^{いか}つい兵士。黙認しろと迫る言外の圧力が、その眼差しからも読み取れる。若い兵士は熟練兵士に向けられた眼光に気圧されて反論の言葉を飲み込んでしまった。

やがて岩場の方から女性の悲鳴が聞こえてくると、厳つい兵士は自分も待ちきれないとばかりに組んでいた肩を放して駆け足気味に歩き出す。そうして数歩先から半身で振り返り、『黙ってるよ?』と若い兵士に指差して釘を刺した彼は、突然上を向いて仰向けに倒れた。

よそ見して転んだ? と一瞬目を丸くした若い兵士は、自分の直ぐ傍で手を正面に翳している少年から魔術行使の痕跡が見られた事に丸くしていた目を見張った。

「お前……」

少年型召喚獣は戦闘型ではないので、直接戦えるような力を持っていない。異次元倉庫に仕舞ってある武器類の中には一般人にも扱えそうな武器はあるものの、相手は本職の兵士である。奉仕用の身体で挑んでも太刀打ち出来ない事は考えるまでもない。

それならばと、コウは非力な身体でも扱える攻撃魔術を使って厳つい兵士の顎に風の塊をぶつけたのだ。まだまだレフ達が行使していたような強力な術には至らないが、魔力を視認出来る特性により極めて精巧な術の構築を行う事で十分な効果を得られる。

「ボク、みんなを護らないといけないから、いくね」

「えっ お、おい!」

戸惑う若い兵士が止める間もなく、駆け出したコウは小川沿いの岩場に向けて風の塊を放ち、同時に光源を作り出して空へと打ち上げた。ここで問題が起きていくぞという意味を込めた照明弾。多くの兵士が活動している陣地内、誰かが異常に気付くだろう。

「ん？」

「どづかなさいましたか？」

「コウの打ち上げた照明弾は、早速その効果を發揮していた。」

46話：新たなる道標

川縁で二人の兵士に組み敷かれた彼女は直ぐ傍で同じように襲われている使用人仲間の姿を確認しながら、何れこういう事も起きるであろうと覚悟していたおかげか、比較的落ち着いた精神状態を保っていた。

とりあえず川底の小石が当たって背中が痛いので姿勢を変えたり、しかしその動きを抵抗と見た兵士に押え付けられたりしつつ怪我だけはさせられないよう身体の力を抜く。大人しくしていれば殺される事はないだろう。

ただ一つ気掛かりなのは小川まで一緒に下りて来ていたコウの事だ。見張りの若い兵士は頼りなさそうだったし、コウを連れてこの場から離れてくれていれば良いが、よもやこの兵士達に混じっていたりしないだろうかと考えると情操的な問題で心配になる。

そんな思いを巡らせる彼女の足を抱えていた兵士が、自分の足でも滑らせたのか仰向けに転んで派手な水飛沫を上げた。

「なっ こいつ」

頭上から響く兵士の驚いたような声。視界の端を何か横切り、彼女の両腕を押えつけていたその兵士が黒髪の少年に殴り飛ばされた。続けて先に転んでいた兵士が起き上がるうとしてる所に飛び掛かり、水蒸気のような膜を纏った腕で殴りつける少年。

「こ、コウ君！」
「だいじょうぶ？」

コウは撃ち放った攻撃魔術は距離によって威力が下がっていく様子を視認していたので、自分の放つ攻撃魔術では余程近付かなければあまり効果を得られない事も分かっていた。遠距離では牽制にしか使えない。

従って相手を制するには接近戦で直接ぶつけるしかなく、本来なら武器に纏わせる強化魔術を直接腕に纏わせたコウは、若い女性の身体に夢中になっている兵士達の隙を突いて近付き、殴りつけたのだ。

ちなみに、攻撃性のある風の膜などの強化魔術を生身に纏うと、通常なら反動で皮膚がボロボロになる。

「な、なんだこのガキ！」
「気をつけるっ 魔術を使うぞ！」

両腕に纏った風の膜が小川の水を巻き込んで飛沫を散らす。最初の不意打ちと今し方の奇襲で三人まで気絶させて無力化する事が出来た。突然の乱入者に女遊びどころではなく、思わず臨戦態勢を取る残りの兵士達。

ただの子供だと思っていた捕虜から思わぬ反撃を受けた驚きに加え、せつかくのお楽しみを邪魔された事への憤りで鬱積していた不満の矛先が向けられる。その時点で、コウの目的は一応達成されていた。

「こいつあただのガキじゃねえな」
「ああ、術士なら能力さえありゃあ成人前だって軍に入隊出来るし……密偵か」

コウを敵性の脅威と判断した兵士達は得物を抜いた。規定装備の剣などは小川の縁に放り出されているので、護身用の短剣だ。息を飲む使用人達。だがコウは怯まない。

その落ち着いて相手の出方を見るような戦い慣れを感じさせる佇まいに、やはり見掛け通りの子供ではなく捕虜に紛れ込んでいた軍関係者ではないかと睨む。或いはグランダー側が雇った暗部同盟かもしれない、と。

勿論、これらは捕虜の子供を斬って咎められた時に理由として挙げるこじつけだ。

「敵兵なら排除しねえとな……」

短剣を向けてじりつと間合いを詰めて来る兵士達に対し、コウは使用人のお姉さん方を背中にも護りつつ風の膜を纏った拳を構える。

緊迫する場の空気に吞まれていた使用人の一人がハッと我に返ると、コウに逃げるよう促した。

「コウ君ダメよっ 殺されちゃうわ！」

「だいじょうぶ、こんどはちゃんと護るから」

コウはそう言うのと今の内に服を着て丘の上に戻るよう指示を出しつつ、体勢を低くとって兵士の一人に狙いを定めた。

複合体で戦う時は自分より小さい相手が殆どだが、バラッセのダンジョンに居た頃などは宿主の数倍はあるような相手と対峙する事も少なくなかったのだ。小さい身体には小さいなりの利点がある事も知っている。

短剣を構えて迫る四人の兵士に対し、コウは完全に取り囲まれる前に打って出た。使用人のお姉さん方から制止の声が聞こえるが、今は応じている余裕はない。

風の魔術を纏って自ら仕掛けて来た少年を迎え撃つ兵士は正面に構えた短剣の間合いに入り次第一突きにしてやるつかと待ち構え、直前で左右のどちらに身をかわして来ても対応できるよう中腰で膝の力を抜いて立つ。

だが、少年はフェイントを使う事も無く真つ直ぐ突っ込んで来た。やはり所詮は子供かと内心で笑いつつ、強化魔術を纏った拳を突き出して来るならまずその腕を潰してやるうとタイミングを計る。

が、彼はここで自分が無意識に前傾姿勢となっている事に気付いていなかった。ただでさえ小さい少年が更に体勢を低くして突っ込んで来るのだから、対峙する相手はどうしても前屈みにならざるを得ない。

コウの狙いは身長差による姿勢崩しだ。武闘会で金色の剣竜隊と戦った時、闘士との接近戦で懐に入り込まれた際の戦い難さはしっかり記憶に刻み込まれており、今回はそれを戦術の参考にした。

振り被った左腕で殴り掛かるように見せつつ、相手の動きに合わせて小川の水面を殴りつけるコウ。爆ぜるような勢いで噴き上がった水飛沫が兵士の顔面を直撃し、一瞬怯ませて棒立ちにさせる。

「ぶわっ なん っ」

「そこだー！」

身体ごとぶつかって行くように右のストレートを叩き込むコウ。身長差から相手の下腹部にめり込む強化魔術パンチ。想像以上に威力のある重いパンチに息を吐いた兵士は思わずガクリと膝を付く。目の前には左腕を振り被った黒髪の少年。

” あっ ” と思った時にはもう遅かった。

「ていつ！」
「ぶばっ」

強化魔術左フックをまともに喰らって横倒しになりながら派手に水飛沫を上げる兵士。次の目標を定めに掛かるコウは、振り返って一番近い相手を探す。

「コウ君っ 危ない！」
「っ！」

使用人のお姉さんから悲鳴にも似た叫び声上がり、残りの兵士に接近されている事を悟ったコウが周囲に警戒を向けようとしたその時、左肩に衝撃が走った。数舜遅れてバシヤンツと水面を叩く細長い物体。

「あれ？」

急に身体のバランスが崩れ、よろめいた所に鉄板で補強されているブーツの爪先が飛んで来てコウの脇腹を蹴り飛ばした。勢いよく水面に突っ込むコウ。更にその足がコウの頭を踏みつけると、喉元目掛けて剣先が突き降ろされた。

「この糞ガキが！ 思い知ったか！」
「あゝあ、やっちゃまった」

浅瀬に顔を半分浸かりながら軽くなった左腕を見ると、肩口の所からばっさり無くなっている。そのまま視線を上に向ければ、剣を持った兵士が興奮状態のような血走った目で見下ろしていた。どうやら一人目を殴り倒している間に剣を拾った兵士に斬られたらしい。

左腕の切断と首に致命的な刺傷を受けてダメージが許容量を超えたらしく、身体が動かせない。通常の召喚獣であればその時点で召喚が強制解除されている所だが、この少年型はアンドギー博士がコウの為に改良調整した特別製である。

形態維持を継続させつつ自己修復状態に入っているようだ。必要な魔力はコウ自身から供給されるので暫く待てば動けるようになる。とはいえ、今この場に少年コウの身体が実は召喚獣であるという事を知る者はいない。

傍目に示された現実には捕虜の使用人女性達を護ろうとした一人の少年が、狼藉を働こうとした兵士によって無残に殺されたという事実のみ。

「コウ君！ そんな……っ」

自分達で護るべき少年が、自分達を護ろうとして殺された事にショックを受けた使用人のお姉さん方が、逃げる事も忘れて呆然と座り込む。

その時

「なんの騒ぎだ、そこで何をしている」

凜とした気配を感じさせる女性の声が丘の上から響いた。どこかで聞き覚えのあるような声に兵士達が見上げると、そこには夕日を反射して緋色に輝く磨き上げられた重甲冑に身を包み、赤み掛かった金髪を靡かせるナツハトーム軍最高司令官、スィル將軍の姿があった。傍には宮殿の侍女達が着用するドレスを纏ったいつも一緒にいる側近も従えている。

川縁にほぼ全裸で座り込んでいる捕虜の女性達や武装を崩した兵士達を見渡しながら丘を下りてきたスイルアツカは、直ぐ近くにいた若い兵士に何があったのかを問い質す。

緊張のあまり甲冑をカタカタ鳴らしている若い兵士は川原の兵士達から向けられる『黙っている』という意味の目配せに気付く余裕も無く、ありのままを掻い摘んで話した。

コウに殴り倒されていた兵士が気絶から回復して目を覚ますが、スイル將軍の姿を見つけて卒倒しそうになっている。

「そうか、そこまで女に飢えていたのか……では私が相手をしてやるわ」

そう言って小川に足を踏み入れたスイルアツカは戸惑う兵士の一人に近付くと、腰に下げた愛剣で徐に一閃。さらさらと流れる水音に風を切る音と肉を叩く音が混じり、数舜遅れてその兵士の首が落ちた。

鮮血を噴き出しながら傾く身体を倒れるままに捨て置き、前へと踏み出したスイルアツカは、呆然と立つ兵士達に促す。

「遠慮するな、子供より手応えはあるぞ？」

口調は穏やかなれど一切の躊躇も無く屠りに来ているスイル將軍の眼に狂気染みた嫌悪と憤怒の気配を感じ取り、コウを斬った兵士は最早弁解は不可能であろう事を悟った。そしてふいに思い出す。

スイル將軍　スイルアツカ皇女殿下に纏わる噂話の中でも特に下世話な類のモノで、殿下の身边を固める部下に男の側近や護衛が殆ど居ないのは、実は男嫌いであるとか、同姓嗜好らしいなどの噂

に混じって実しやかに囁かれている裏話。

その昔、宮殿を抜け出してお忍びで街に下りた皇女様は、街の暴漢に襲われて乱暴された事があるらしい等というヤバイ噂。そんな経験を持つが故に、普段は男を遠ざけ、性暴力の罪人に対しては容赦がないのだとか。

「お、おおお許し　ぎゃあああ」

「ああ……その身体ではもう戦えないな、休暇をやるう」

軽い現実逃避をしている間にまた一人斬られた。入念に止めまで刺したスイル将軍がこちらを見る。次は自分の番だ。

今すぐ逃げるといふ選択が頭を過ぎるが、ここは国境回廊を越えた先にあるグランダー領なのだ。開戦から数日、散々この周辺で暴れたナツハトム兵が逃げ込める場所など何処にもない。

グランダー領でもここよりずっと遠い場所にある街やエイオアまで行けば身分を偽って旅人なり冒険者なりを装えるであろうものの、準備も無く単身で長旅に挑むなど無理がある。どうすれば生き延びられるか

『こ、こうなったら……剣の腕を示して興味を持って貰うしかない
』！

才覚ある者には平民上がりの一兵卒でも将校にとりたててくれるという実力主義で知られるスイル将軍だ。己が実力を見せつけ、屠るには惜しい奴だと思わせられれば、後は全力で詫びを入れる事でどうにか恩情に絶る。

「挑ませて頂きます！」

作戦と覚悟を決めて剣を握りなおした兵士は『うおおー』と雄叫かれ

びを上げながらスイルアツカに斬りかかった。

「うむ、勇敢だな。ナツハトームの戦士はそうでなくてはいかん」

川縁で待機している側近の侍女が僅かに身じろぎを見せたが、これは主に迫る危険に対しての条件反射のようなモノで、スイルアツカの実力を熟知する彼女は見掛け通りの落ち着き払った内心で宥め時を見計らっていた。

「だが残念だ、私の部下に下衆はいらぬ」

僅かに横へ移動しながら一閃。突進していた兵士はぶん投げられたように回る視界からスイル將軍の背中と自分の身体を見下ろし、一撃で首を刎ねられては詫びを入れる事も出来ないじゃないかと作戦の不備に気付きながら暗い水底へと落ちていった。

「スイル様、そのくらいで十分ではないかと。彼らも反省している事でしょう」

ここで側近の侍女が宥めに入った。スイル將軍の怒りを買ってしまった事に、もう命は無いモノと顔面蒼白で立ち尽くしていた残りの兵士達は、僅かな希望に縋るが如く、いつもスイル將軍の傍で控えている侍女に視線を向ける。

狼藉を働いた兵士達は先行組の一部隊に所属する者達だ。既に三人ほど斬り捨てられたが、今ならまだぎりぎり再編成せずとも攻略部隊としての運用が可能な人数を維持できる。他の部隊に対する引き締め効果も狙えるだろう。

「……そうだな。まだ明日、もう一戦残っているのだしな」

瞳から憤怒の色が消え、剣を納めるスイルアツカ。張り詰めていた空気が緩んだのも束の間、へなへなと身体の力を抜き掛けた兵士達に鋭い視線を向けて一息つく事も許さないスイル將軍は、所属部隊まで駆け足で戻れと号令を発した。

慌ててバタバタと丘を駆け登っていく兵士達の姿に鼻を鳴らすと、未だ川縁で座り込んでいる捕虜達へと向き直る。

「すまなかつたな、怖い思いをさせたようだ」

「え、あ……はい」

つい今し方、屈強そうな兵士達を次々と屠って見せた女將軍に優しく声を掛けられた使用人達は、恐々としながら頭を下げた。

どうやらナツハトーム軍のスイル將軍は悪い人ではないらしいと知って安堵する。だが、同時に去来する想い。何故あともう少し早く来てくれなかったのか。勝手な思いと知りつつ、一人の少年を失った事実が彼女達の心に重く押し掛かる。

「その勇敢な子供には可愛そうな事をした」

使用人達の心中を察してか、スイルアツカは彼女達を護ろうとして死んだ少年を手厚く葬ってやろうと言い掛けた所で言葉に詰まり、思わず目を見張った。

「よっしっしよ」

動かせる状態まで身体の修復が済んだのでむくりと起き上がるコウ。周囲にざわりとした空気が漂う。

斬り落とされていた筈の左腕もちゃんと繋がっており、コウが斬られる所を見ていた使用人のお姉さん方は『あれは見間違いだっただろうか?』と自身の記憶を疑う。

「生きているのか……? おいつ 治癒術士を呼べ!」

「あ、このからだ召喚獣だからダイジョーブだよ」

コウはそう言っただけで喉元に残っていた傷も修復してみせる。人間ではなかったのかと驚くスイルアツカは、ハツと使用人達の様子を窺い、同じように驚いている姿を見て彼女達も与り知ら^{あずか}ない事かと判断した。

何れにせよ、これほど自律的で人間のように振舞う召喚獣など聞いたことが無い。こんな普通ではない存在が今までそれと知られず捕虜に混じっていたのは問題だ。わざとナツハトーム陣営に潜り込んだのでは? という疑惑も湧く。

「お前、何者だ」

「ボクはコウ。ガウイーク隊のコウだよ」

ガウイーク隊といえば、アリアトルネに三部隊ほど張り付かせてその動きを封じさせている中々厄介な討伐集団の隊名だ。そう言えば最近聞いた事があると、スイルアツカは開戦前に収集していたグランダールの情報より関連する記憶を掘り起こす。

冒険者として登録されたという珍しいゴーレムがいて、それはガウイーク隊に所属しているらしいという話だった。

「確か、子供の姿にも化けると聞いたが……お前の事なのか?」

「あ、それボク」

別に化けてるわけじゃないよーとフオローしつつ、完全に修復さ

れて傷一つ無い身体に戻ったコウは川沿いの岩上に並ぶタオルと服の入った桶を手にとると、使用人のお姉さん方の所まで持っていく。そろそろ日も落ちて気温も下がり始めた小川の縁で、いつまでも裸にしておく訳にはいかない。

「そのままだとカゼひいちゃうよー」

「あ、ありがとうコウ君……」

コウが例の有名な冒険者ゴーレムであった事を知り、胡蝶の館を利用した事があるらしいなど諸々の噂も聞く彼女達はコウに異性を意識してしまったのか、ちょっと照れを見せながら慌てて衣服を身に纏い始めた。

その様子を観察していたスイルアツカは、唐突にこんな事を言った。

「面白い奴だ、私の下もとに来ないか？ 従うならその使用人達……いや、ここに居る捕虜達は全て解放してやるっ」

「うん？」

口の端を僅かに上げる自信に満ちた笑みを浮かべ、誰かによく似た雰囲気で見つめて来るスイルアツカ。突然のスカウトに何を言い出すのかと驚く側近の侍女や使用人のお姉さん方。

キョトンとした表情を返すコウは、スイルアツカの内心を読み取ってその意図を探るべく”お話”を試してみる。

「それって、ボクをナツハトームに連れて行くってこと？」

「ああ、ちょうど男手が足りなくてな。お前を私の直属に加えたい」

対話の言葉に乗って零れる思考の内容から、彼女の中で組み上げ

られている計画の一端を知る事が出来た。

今回のグランダーへの侵攻は帝国の安定を図る為のものらしく、本格的に滅ぼし合うつもりはないらしい。スィルアツカ皇女の即位に慎重な姿勢を見せる重鎮や対立派閥に対しての牽制と、グランダーを宿敵視する現皇帝の方針に追従を示すポーズという意味もある。

侵略と略奪で周辺国を飲み込んで大きくなったナツハトム帝国だが、いつまでもそんなやり方が通用しない事をわかっているスィルアツカ。しかし、昔ながらの武力で勝ち取れ派も多いのがナツハトムを取り巻く現状。

宮殿の中枢を占める有力家も大体そんな感じなので、スィルアツカは自分が次期皇帝に即位し、全権を握ってから帝国の在り方を改革していこうと目論んでいる。その為にあの手この手で自分の支持者を増やしてるのだ。

スィルアツカ自身はグランダーとも仲良くやりたいと思っており、皇帝になった暁には政治的な駆け引きによって両国の関係を深め、帝国を発展に導いていければと考えていた。勿論、その背景に軍事力は欠かせない。その為の機械化技術開発である。

コウをスカウトしたのは噂の冒険者ゴーレムを連れ帰る事で、砦の攻略失敗を埋め合わせる材料に使えるという判断もあるようだ。スィルアツカが胸の内に秘める想い、その真意に触れたコウは彼女の考え方に共感と興味を覚えた。

何となく、レオゼオス王やレイオス王子達と上手くやっていけそうな気がするのだ。

「ボクを仲間のみennaと戦わせたりしないなら、ついて行ってもいいよ」

捕虜の解放が条件という名目でナツハトーム陣営に寄る事となったコウ。今夜はスイル將軍の大テントに泊まるので、突然の展開にただただ戸惑う使用人のお姉さん方やエスルア号の船長と別れの挨拶を交わしに仮収容所のテントを訪れている。

自分がナツハトームへ行く事でガウイク隊の皆にも心配や迷惑を掛けてしまうと考えたコウは、船長に王都へ戻ったならアンダギ博士や沙耶華達によるしくと言伝を頼んでおく事にした。内容は博士からガウイク隊やレイオス王子達にも伝わる筈だと。

「分かった、必ず伝えよう」

「コウ君……本当にナツハトームへ行っちゃうの？」
「もう会えなくなるのかしら……」

心配そうに表情を曇らせる使用人のお姉さん方に、コウは帰って来ようと思えば何時でも帰って来られるからと微笑みかける事で彼女達が『私達のせいでは無いか』と密かに抱え込もうとしている罪悪感の欠片を砕く。

「ダイジョーブだよ、ボクは冒険者だからね」

自分の進む道は自分で決める。今までずっとそうして来たし、これからもそれは変わらない。そう言って、スイル將軍のスカウトに

応じたのは己の意思である事を明言してみせるコウ。

　　偶々同じ船に乗り合わせてトラブルに見舞われ、今日まで共に生活して来た彼女達を励まし、慰め、しっかり心のケアまで果たしたコウは、また会おうねと約束して捕虜の仮収容所を後にしたのだった。

47話：撤退戦

夜明けの国境回廊。朝靄に霞む西の砦とその周囲に布陣しているナツハトーム軍の攻略部隊。全軍の指揮を執るスイル將軍の号令により、最後の総攻撃が開始された……のだが

「うーむ」

「締めりがありませんね」

砦は相変わらず一晩で修復される強固な防壁に護られており、戦いが長引いた事で弾薬が底をついているナツハトーム軍の攻撃は火炎樽も散発的。動ける戦車も撤退に備えて折り畳んだ投擲器や人員の運搬に回されているので、突進力もぱつとしない。

今日ダメなら撤退という情報に前日の騒ぎもあつてか、砦への総攻撃はイマイチ兵達の士気も上がらずにいた。

撤退　つまりは今日で帰国できるのなら、なるべく怪我をせず無事に帰りたいという疲弊した兵士達の気持ちが見れている状態だ。元気が余っているのはスイル將軍が連れてきた精鋭団の一部くらいである。

まだこれといった戦果も上げていないので何か手柄が欲しい精鋭団の戦士達は果敢に砦へと寄せて行くが、砦に新しく配備された魔導小銃の良的になつている。先日辺りに魔導船で運び込まれたらしい。

精銳団戦士の重甲冑はグランダー軍の魔導小銃から放たれる火炎弾を通さず、致命傷を負う事は無いようだが、甲冑の彼方此方をへこまされて装甲が稼動部分に引っ掛かり、動きが阻害されるといふ事態が起きているようだ。

時折後方に下がって来ては甲冑の修理をしている戦士達の姿を眺めながら、これは駄目だなとこっそり溜め息など吐くスィルアツカ。実は総指揮たる彼女自身も今はコウの事に興味が向いており、あまりやる気が無かったりする。

昨晚、自分のテントに招いたコウと少し話をして分かった事。まだ明確にそれを示された訳でも無く、本人に確認も取っていないが、どうもコウには対話する相手の思考を読み取っている節が見られる。そういう祈祷士的な能力を持っているのか、ただ勘が異常に鋭いだけなのか。

『もし、他者の心を感じ取る力を持っているのだとしたら……』彼の傍に置く事で覚醒の手掛かりが掴めるやもしれん』

他にも帝国内で自分の支持者を増やす際、敵と味方を見分ける指針にも使える。スィルアツカ自身もある程度は人を見分ける目を持っているつもりだが、宮中で強い影響力を持つような人物が纏う偽装はその面の皮同様に厚く幾らでも重ねられる。

本当に心の底では何を思っているのか分からない海千山千の重鎮達を相手取るには、スィルアツカはまだまだ若く経験も浅い。優秀な補佐はどうしても必要になるのだ。

そんな事を思いながらチラリと脇を見やると、当の本人はスィル^{コウ}將軍御用達の大型輸送戦車の上で横になってごろごろと寛いでいる。絨毯敷きの荷台なので寝心地は悪くない。

ダラダラとした攻防が続く中、偵察隊よりグランダールの援軍部隊が魔導船団で迫っているとの緊急報告が貴重な正規品の”対の遠声”より発せられた。その旗印にはレイオス王子率いる”金色の剣竜隊”が確認されたとの事。

「駄目だな、帰ろう」

「では、そのように」

スイル將軍の決断は早く、レイオス王子が出て来たのならこまでだと全軍に撤退命令が下される。あからさまには表に出せずとも、内心『これで帰れる』と喜ぶ兵士達はとっと引き揚げに掛かった。バタバタと忙しく撤退準備を始めるナツハトーム軍。

砦側からは『やっと帰る気になったか』といった雰囲気で、当てる気のなげな魔導小銃による発砲音がまばらに響く。

仮收容所の捕虜はコウとの約束通り置いていく事になっているので、撤退の準備は前日から用意していた分も含めて速やかに整えられた。大型輸送戦車に備え付けられている壇上に立ったスイル將軍が、整列する兵士達へ向けて正式に撤退を宣言する。

「皆よく戦ってくれた。砦は落とせなかったが我々の新たな力を見せ付けるには十分であった、本作戦はこれで終了とする！」

「全軍、撤収せよ！」

壇上の脇に控える副司令官が号令を掛けると、ナツハトーム軍は一斉に撤収を始めた。

「第1攻略部隊、撤収！」

「第3機械化歩兵中隊、撤収！」

「第11強襲機械化部隊、撤収！」

次々と陣地を後にするナツハトーム軍の各部隊。機械化戦車による車列が国境回廊を西方に向けて、土煙を上げながら連なっていく。アリアトルネ方面に張り付かせている部隊は国境回廊を通らず、湾内に用意された迎えの船で撤収する事になっていた。

「上空にグラランダールの魔導船団！」

「早かったな、しかも多い。今の状況でアレに突っ込まれていたら不味かった」

「そうですね……撤退の決断が遅れていたら、危険な状態になっていたかもしれません」

全軍が移動を始めて直ぐ、東の空に現れた二十数隻の魔導船団。高高度から滑り降りるように飛行する事で速度を上げていたらしく、予想よりもずっと早い到着に結構危なかつたと安堵の溜め息を吐くスイルアツ力達。

魔導船団の約半数は砦の上空に留まり、物資や人員の補給を始めたが、残りの魔導船は撤退するナツハトーム軍の車列をそのまま追いかけて来た。爆撃でもされては堪らんと、盾を翳して防空態勢を取りながら速度を上げるナツハトーム軍。

迎撃したくても対魔導船に有効な兵器である筒型火炎槍は砦攻略に使い果たしてしまい、既に打ち止めとなっている。折角の標的の前に何も出来ないナツハトーム軍の特殊砲兵が二、三本残して置けばよかつたと臍^{ほそ}を噬^かむ。

一方、火炎槍の対空攻撃を警戒するグランダー側は急場凌ぎだが対策として船底に装甲を増やす事で防御力を固めており、重量が増えた分、水平飛行に入るとあまり速度が出せない状態になっていた。

機動力の低下により、撤退するナツハトーム軍の前方に回り込んで退路を塞ぎつつ皆の部隊との挟撃に持ち込むような戦術が使えない。代わりに考案されたのが、装甲で強化された船底の防御力を有効利用する強襲揚陸攻撃。

地面すれすれまで高度を下げた敵軍車列のど真ん中へと降下した軍用魔導船から魔導輪を装備した特殊歩兵部隊、新たに編成された魔導器中隊が飛び出した。その中にはレイオス王子の率いる”金色の剣竜隊”も混じっている。

「狙いは先頭的大型車両だ！ 第一、第二部隊は俺達の援護に回れ！ 行くぞ！」

今回の戦いはナツハトームの次期皇帝と目されるスイル將軍の戦略手腕によって、グランダーは終始押され気味だった。今後スイル將軍が正式に即位してナツハトームの皇帝となれば、グランダーのみならず周辺国の平和も脅かされる危険がある。

逆に言えば、ここでスイル將軍を討ち取っておく事でナツハトーム側に大打撃を与えられるのだ。その後は帝国皇帝の後継者争いを適当に煽って揺さぶりを掛けてやれば、国内の混乱で暫くは身動き出来なくなるだろう。

レオゼオス王も警戒するスイル將軍を討つべく、大胆な強襲作戦でナツハトーム軍の本隊に喰らいついたレイオスは一気に勝負を決めに掛かった。

「左後方より敵滑走部隊接近！」

ナツハトーム軍の先頭を行くスイル將軍を乗せた大型輸送戦車にレイオス王子の一団、”金色の剣竜隊”が追いついて来た。後続の戦車や武装馬車が進路に割り込んで行く手を阻もうとするが、それらを悉く躲しながら着実に距離を詰めて来る。

時折、爆発的な急加速を見せる金色の剣竜隊は、加速装置付きの新型魔導輪を履いていた。

あれは我が軍^{ウチ}の滑走機では真似できないなと感想など述べるスイルアツカの隣で、博士は仕事が早いなあ后感心するコウ。

魔導器で制御される風系魔術によって対象を完全に浮かせているグランダールの魔導輪とは違い、ナツハトームの滑走機は複数の小さな車輪を回して地面の上を滑るように走っているので、平坦とは言い難い地表であんな加速をさせれば間違いなく吹っ飛んでしまう。ちなみに、加速装置は魔導船にも火炎槍攻撃に対する緊急回避用に採用が決まっていた。

「これは追いつかれるな」

「スイル様、念の為に車内へ退避されては？」

万が一に備えてスイルアツカを安全な場所へ避難させようと考え、側近が声を掛けたその時、金色の剣竜隊員の攻撃術士と魔法剣を操る剣士が動いた。複数の火炎弾と光弾が隣を並走していた武装馬車に直撃し、強引に護りを崩して隙間をこじ開ける。

そこへ滑り込んで接近したレイオスは大型輸送戦車に手を掛ける

と、魔導輪の加速装置を噴かして一気に飛び乗った。

大型輸送戦車に同乗している副司令官と護衛の精鋭戦士達が一斉に抜刀して迎撃態勢を取る。

「スイル將軍を護れ！」

「相手はあのレイオス王子だ！ 討ち取れば国中に名が轟くぞ！」

「ふつ やってみるがいい」

不敵な笑みを浮かべて愛剣”風断ち”に真空を纏わせたレイオスは、魔導輪も利用した予測不可能な軌道で突進しながら薙ぎ払う。たちまち護衛の精鋭戦士達が戦車から叩き落された。

元々魔導小銃とセットで使う事を前提とした魔導輪の機動力を剣術に組み込んで接近戦で使うという、レイオスが独自に編み出した魔導剣技。魔導輪のあんな使い方は自分も考えた事が無いと、コウはレイオス王子の柔軟な発想と実行力に驚く。

「なるほど。何かと反則染みた強さを誇ると謂われる金色の剣竜隊、それを率いる冒険王子の名は伊達ではないな」

剣を抜くスイルアツカ。同じくナイフを抜いた側近の侍女が主を庇う様に前へと踏み出し、レイオスに挑む。彼女が戦場で侍女の格好をしているのは拘りもあるが、相手を油断させる効果もある。

侍女を斬る事に躊躇を覚えた相手が剣を鈍らせれば、それだけで時間稼ぎの効果も狙えるのだ。だが、レイオスは油断も躊躇も見せなかった。

「いかんつ 下がれターナ！」

普通の騎士なら引つ掛かっていたかもしれないが、一般の冒険者に混じって街で過ごしたりダンジョンに下りたりという経験を積んで来たレイオスに、そういった心理的な小細工は通用しない。

容赦なく振るわれた”風断ち”の刃が側近の侍女、ターナトリアの構えるナイフごと薙ぎ払う。直前で発せられたスイルアツカの警告に反応していたターナは間一髪でそれを避けた。

両断されたナイフが床を叩き、大きく裂けた侍女服の内側に覗く鱗鎧が一部砕かれ、飛び散る破片が宙を舞う。

「ターナ！」

「く……っ 申し訳ありません、スイル様」

「良い、無茶はするな。ここでお前を失う訳にはいかん」

滲み出る血を隠すように破れた侍女服で鱗鎧の裂け目を覆うターナ。彼女が太刀打ち出来ないとなると、これは相当に手強いぞとスイルアツカはレイオスに警戒を深める。

スイル將軍を護るべく味方の武装馬車が寄せて来ては次々と飛び移って来た兵士達がレイオスに斬り掛かるが、魔導輪で並走する”金色の剣竜隊”からの援護もあつてかまるで歯が立たない。完全に圧倒されているようだ。

周囲ではこれ以上スイル將軍の戦車に近づけさせまいと、ナツハトーム軍の各部隊がグランドール軍の追撃に応戦している。機動力の差で少しずつ本隊が離されていく戦況を確認したレイオスは、戦車の足を止めるべく動力部分に”風断ち”を突き刺した。

「動力機の位置を知られている……!?!」
「戦車の構造を解析されたか　　まずいつ」

動力の一つが潰され、大型輸送戦車の速度が落ち始めた。ここで足を止められては確実に捕捉される。まずは生還しなければ始まらない。これ以上無駄に兵士達を蹴散らされるのも、帰還後の活動に影響が出てしまう。

側近タナに撤退用の武装馬車へ移って何時でも出せるよう準備を指示したスイルアツカは、覚悟を決めると兵達を下がらせてレイオスに挑んだ。

「大将自ら刃を交えるか」

「そなたも立場は同じようなものであろう」

撤退するナツハトーム軍と追撃するグランダール軍の激しい攻防が続く中、大型輸送戦車の上で対峙するレイオス王子とスイルアツカ皇女。兵士達は命令に従って横付けされた味方の車両へと退避を始めている。

「此度の戦、女だてらに大した手腕だった。今後の両国の為にも、ここで討ち果たされるがいい」

「まだ果てる訳には行かぬのでな、その辛辣な褒め言葉だけ受け取っておこう」

苦笑で応えたスイルアツカが剣を構える。それを合図に”風断ち”を振りかざしたレイオスが魔導輪を使った移動ならではの読み難い軌道を描きながら間合いを詰めて来た。

レイオス王子の振るう魔法剣”風断ち”が相手では、この自分専用に製造された特別製重甲冑の装甲も当てにならない。そう判断し

たスイルアツカは、生きて帰る事を優先する。

左側から楕円軌道で斬り込んで来るレイオスに対し、右に構えた剣を大きく振り被って左手を突き出す。腕の一本くらいならくれてやるという捨て身の戦法。滑走状態の相手に重甲冑の全体重を乗せた一撃をぶつけて戦車から弾き落とすのが狙い。

魔導輪を使う戦法に対して、その特性を逆利用する即興の作戦だ。

だが読まれた。

正面に突き出されているスイルアツカの左腕を薙ぎ払いに掛かっていたレイオスは直前で急停止すると、両足で踏ん張りつつ体勢を維持、滑走での勢いを殺さないまま床を蹴って踏み込んで来た。

右から左へ薙ぎ払われようとしていた”風断ち”の軌道が左上からの袈裟懸けに変化する。

「くっ！」

咄嗟に振り被っていた剣を引き戻しながら体勢が崩れる事を覚悟で後ろに飛ぶスイルアツカ。そして概ね彼女の予想通り、防御に使った剣ごと重甲冑の装甲をも斬り砕く”風断ち”の一撃。装飾の施された胸当て部分が大きく裂けて弾け飛ぶ。

辛うじてその一撃は避けられたものの、背中から倒れ込んだスイルアツカの腕を踏みつけて動きを封じたレイオスが”風断ち”を裂けた重甲冑の胸元に向けて垂直に翳した事で勝負が付いた。このまま突き下ろせば、それで終わりだ。

「グランダールの冒険王子、これ程とはな……」

「良い勝負だった、ナツハトームの姫將軍」

「スイル様！」

ここまでかと、レイオスを見上げるスイルアツカに”風断ち”が突き下るされ、ターナの悲鳴のような声が響いたその時

「!?!」

一瞬、大型輸送戦車の車体が揺れ、ガキンツという金属音がして”風断ち”が止められた。というよりも、突き下るそうとした瞬間に正面から迫って来た攻撃を防ぐ為の盾として使われたのだ。

止めの一撃を阻んだ存在、籠手のような拳を突き出したそれは複合体^{コウ}だった。思わず目を見張るレイオス。

驚いたのはレイオスだけではない。スイルアツカも何故コウが自分を助けようとするのかと戸惑いを見せる。確かに自分の下へと誘いはしたが、受け入れには捕虜の解放や”仲間とは戦わせない”という条件があった。

彼が護ろうとしていた捕虜^{コウ}の使用人達の中には魔導船が撃墜された際に死傷者が出ており、彼の所属するガウィーク隊も今はグランダール側に付いて戦っている。

コウには少なからずナツハトムと敵対する理由がある筈なのだ。この状況に至って自分を庇う理由が分からない。

「……何の真似だ、コウ」

”風断ち”を構えたまま鋭い視線を向けて問うレイオス。複合体

は答えない。何時もの文字も浮かばない。何より、纏う気配が違っていた。普通のゴーレムのような無機質感に、コウではないのか？と訝しむレイオス。

「スイルをここで死なせるワケにはいかないんだ」

代わりに答えたのは、複合体の片腕に乗っている少年型だった。

スイルアツカの考える将来の計画、ナツハトーム帝国と周辺国との未来像を読み取って理解しているコウは、彼女が生きて偉い地位に就いた方がナツハトームとグランダールの双方にとって良いと考えた。

それは普通の人間ならば誰しもが持つであろう感情のしがらみに囚われない、コウの在り方そのものが表れた判断であった。

なぜ複合体と少年型が同時に存在しているのかと一瞬驚くが、博士絡みでコウの事をよく知るレイオスは直ぐに仕組みを理解した。恐らく少年型に憑依したまま複合体に自身の一部を入れて操っているのだ。だが何故、態々そんな事しているのかと疑問を浮かべる。

「何故ナツハトームに味方する」

「また今度せつめいするよ」

じつと少年型の眼を見るレイオスと、じい〜と見つめ返すコウ。

「俺を納得させられるだけの理由があるのだからっな？」

「うん、たぶん」

「いいだろう………サヤカを悲しませるような事はするなよ？」

そう念を押したレイオスは、これで何時ぞやの借りは返したからなど告げて引き揚げに掛かった。ひらりと大型輸送戦車から飛び降り、魔導輪の浮遊機構で着地して踵を返す。

「深追いはせず捕虜の救出だ！」

金色の剣竜隊から伝令にそう伝えさせたレイオスは追撃をここまですと、全軍を退かせた。

「だいじょうぶ？」

「あ、ああ………」

どういふ仕組みなのかゴーレムの巨体が消え、声を掛けて来たコウに曖昧な返事で応えるスイルアツカ。彼コウにレイオス王子と面識があつた事は分かるが、討ち取つたも同然だった敵の総大将を目前にして退かせるとはと驚きを隠せない。

「スイル様！ お怪我はっ」

「無い。心配を掛けたな」

側近のターナが駆けつける頃には普段の調子に戻したスイルアツカは、改めてコウに向き直ると礼を言う。

「とにかく、助かった。相応の礼は尽くす」

「ちゃんと偉い人になってみんなと仲良くしてくれればいいよ」

そんなコウの返事にスイルアツカは目を丸くした。そして密かに確信を深める。やはりコウは他者の心を感じ取って相手の考えを認識できるのではないかと。

『これは……とんでもなく良い拾い物だったかもしれんな』

コウ達を乗せた若干損傷の残る大型輸送戦車を先頭に、ナツハトーム軍はグランダール領から撤退して行ったのだった。

48話：エツリア宮殿

多数の支分国を抱えるナツハトーム帝国。その頂点に君臨しているのが、現皇帝ガスクラツテを頂く帝都エツリアである。国境回廊から撤退して二日目、スイルアツカ達は帝都エツリアへと帰還を果たした。

「ナツハトームって砂漠の国だって聞いてたのに、街は水にかこまれてるんだね」

「この辺りは水源が多くてな、エツリアは帝国の中でも特に水に恵まれているのだ」

砂漠地帯にある街の中では比較的海にも近く、水産業の恩恵も受けられる。街の周囲を水源に囲まれている為、他の地域よりも発展し易い環境であると同時に狙われ易い土地柄でもあったが、それ故に武力も高い水準を誇るまでに至った。

農作物を輸入に頼らず育てられるエツリアは食糧事情の厳しいナツハトーム帝国の生命線として、宗主国の座を支えているのだ。

「あの箱みたいな大きな建物は？」

「あれは兵器工場だ」

いかにも物々しい雰囲気を持つその建物は槍を立てて並べたような高い柵に囲まれており、兵装の警備員が等間隔で巡回している姿が見える。周りを囲む水路には赤茶けたような濁った水が流れてい

た。

機械化技術の発展に伴い、工業用油による水の汚染問題が課題になっていくような。水路で囲んでいるのは汚染された水が大事な生
活用の水源に流れ込まないように施した処置であるらしい。

工場は出来るだけ水源から離れたいが、重要機密となる機械技術
は余所の国には知られたくないので帝都からあまり離したく無い。

しかし帝都は水源に囲まれているので、汚染を考えるなら離れた
場所に建てるのが望ましいが、そうすると監視の目が届き難くなる
というジレンマ。次代の宗主国の座を狙う支分国の存在もあり、ナ
ツハトーム帝国は色々と火種を抱え込んでいるのが現状だ。

街の大通りに入ると、宮殿までの道のりに立ち入り禁止区画を示
す紐を持った兵士達が治安を護るべく配置され、その向こう側には
集まった大勢の民衆が帰還したナツハトーム軍の車列に手を振って
いる様子が窺える。

「みんな歓迎してるね」

「スイル様は民達からも慕われていらっしやるのよ？」

「……民衆心理を利用していただけだ。私本来の姿と民の目に映る
私の姿は随分と違うものさ」

人々の明るい雰囲気に関心を示すコウに、主を自慢するような調
子でターナが答えるも、当の本人は自嘲気味にそんな事を言う。哀
しげに眉尻を下げる側近に情け無い表情を向けられ、罪悪感を覚え
たスイルアツカは『すまん』と苦笑を返した。

「あの大きいのが宮殿？」

「そうだ。ナツハトーム中から各支分国の王族や大使達が集まる帝

国の中枢だ」

帝都の中心にあるエツリア宮殿。その周囲には広い軍施設地帯が設けられ、兵舎や訓練所などが建ち並ぶ。この敷地内にある兵器開発工場は主に例の書物に関連した武器の研究が行われる施設であった。

軍施設地帯の外側は一般民の住む城下街と工業・農業地帯が広がり、ここに建つ工場は機械化兵器でも例の書物とは無関係な武器防具類、その他の機械製造が殆どを占める。ヴァロウ隊が使っている機械化連弓はここで購入されたものだ。

街から少し南方面に下った海側の一帯では特産品となる香辛料の元になる植物が栽培されており、一応関係者以外立ち入り禁止の特別区に指定されていた。

「そつえば、コウはどんな料理が好みだ？ こつちの食べ物に合うと良いのだが」

「ボク、たべものの味とかはあんまり分からないんだ。食べなくてもへいきだし」

「そつなのか……」

一応、匂いや歯触り舌触りで判別する事は可能だが、味を楽しんだり空腹を満たすという感覚は無いのだと説明するコウ。

スイルアツカは皆前の陣地でもコウが食事をしている所は見た事が無かつた等と思いつながら、食べる楽しみを知らないのは不憫だなと憐れむ。実は睡眠も必要ないという事に気付いて眠りの悦びを知らないのは悲劇だと嘆く日も、そう遠くはないだろう。

民衆集う城下街の大通りを抜けた車列は軍施設地帯に入り、スイル將軍の乗る大型輸送戦車と後続の将校達を乗せた幹部用戦車は宮殿の大門を潜つて入り口へと続く正面の通りへ進む。一般兵を乗せた戦車は兵舎のある区画へと方向転換していった。

やがて大型輸送戦車を先頭に数台の幹部用戦車が宮殿の入り口前で停車。無事の帰還を祝う宮殿兵が敬礼で出迎えた。

「よし、着いたぞコウ。一人で降りられるか？」

「だいじょうぶ、このくらいの高さならひとつとびで」

「こういう場所では飛び降りないで下さいね」

ターナにひよいと抱えられるコウ。戦車を降りて宮殿内に入ると、宮殿兵の列を過ぎた辺りに皇女付き侍女の一団が待機している。

将校達は一足先に上層階へと上がるべく、スイルアツカに礼をして廊下の突きあたりに並ぶ扉付きの柱まで進み、その柱に埋め込まれる形で設置されている昇降機に乗り込んでいった。

ちなみに、真ん中の一際大きい昇降機柱は皇族専用なので、彼らが使つのはその左右に並ぶ通常の昇降機である。

「スイル様、御召し替えは如何なさいますか？」

「このままでよろう」

「畏まりました」

この方が戦場から帰還した事をアピールすべくインパクトも狙えるというスイルアツカに、肯いて応えたターナは待機していた部下の侍女達を下がらせた。コウを伴ったスイルアツカ達はそのまま通路の突き当たり、中央に聳える豪華な扉のついた巨大な柱へと向かう。

豪華な扉の前には、何時ものように老紳士が控えていた。

「お帰りなさいませスイルアツカ様。皆攻めの指揮、お疲れ様でした」

「うむ。今日は父上も顔を出しているか？」

「はい、マーハティーニの王子、王女様方も見えていらっしやいます」

「あゝ……分かった」

老紳士と短いやり取りをして昇降機に乗り込む一行。『こんな乗り物があるのか』と感心するコウはふと、自分の欠けた記憶から浮かんできた”エレベーター”という名称に馴染みを感じた。同時に、意識を引っ張られる感覚が増したような気もする。

巨大な柱と石造りの重厚な空間に圧倒される何処か殺伐とした玄関ホールから宮殿の上階に到着すると、途端に雰囲気が一転、細かい刺繍の入った赤い絨毯敷きに壁や天井は照明のランプで橙色に照らし出される。

控えめな装飾が施された細身の柱が等間隔に並ぶ広い空間。室内の落ち着いた空気はまるで別世界のようにであった。昇降機乗り場となるこの広間から正面と左右斜め方向に長い廊下が伸びていて、それぞれ宮殿内の各区画に繋がっているのだ。

広間に待機する使用人達がスイル將軍の帰還をお辞儀で迎える。

「トルトリユスのお城より大きいね」

「そうなのか？」

「うん。王宮群も含めたら向こうの方が五倍くらい大きいけど」

「そんなに……」

自分の生まれ育った宮殿にはそれなりに愛着もあるスイルアツカは、上げて落としたのはワザとか？ と内心でコウにジト目など向ける。家に戻った安心感からか、何処か穏やかな空気を漂わせるスイルアツカに表情を緩めるターナ。

と、そこへ、廊下の先から乱入者の如く勢いで駆け寄って来る小柄な人影があった。

「スイルお姉さまー！」

ツイテールにした金髪を揺らしながらスイルアツカの腕に跳び付いた活発そうな少女が「お帰りなさい」と嬉しそうにぴよんぴよん跳ねる。更にはその後ろから少女を追いかけて来た大柄な青年がスイルアツカの身を案じて元気過ぎる妹をたしな窺めた。

「メルっ スイルは戦場帰りで疲れてるんだから、少しは自重しな
いか」

「はあ〜い、ごめんなさいデイド兄さま、スイル姉さま」

厳かな雰囲気醸し出していた宮殿の廊下が、一気に賑やかな空気に包まれる。デイドルバートとメルエシード。二人はナツハトーム帝国内に数ある支分国の中で最も勢いのある国、マーハティール二国の王子と王女であった。

スイルアツカと同じ重戦士で大男のデイドルバートは、彫りも深めな濃い顔立ちながら一つ間違えば情夫に見えなくも無いような色気を漂わせる甘いマスクを持ち、しかし身体のごつさが軟弱な要素を打ち消しているという奇妙なバランスを保つ。

グランダールのレイオス王子とはまた違った方向に野性味のあるマッチョといった認識で彼を捉えるスイルアツカは、その妹姫で随

分と懐かれたらしく何かと自分にくっ付いてくるメルエシードの頭を撫でながらデイド王子と挨拶を交わす。

「この前の式典以来だな、そちらの征伐はもう済んだのか？」

「いやあ、奴等逃げ足だけは一級品だからなっ 折角アジトを見つけても急襲した時はもぬけの殻ばかりだ、ハツハツハ！ それより聞いたぞ？ 砦の攻略に自ら赴いたそうじゃないかっ 俺も呼んでくれれば存分に力になれたのに！」

「そうは言うがな、国内の反乱軍を抑えられるのは貴方しかないのだから仕方あるまい」

「おのれ反乱軍め！」

こんな感じで、気立ては悪くなさそうなものの少々暑苦しくお馬鹿っぽい。彼の父であるレイバドリエード王はマーハティーニを帝国の宗主国に、デイドを次期皇帝にと企む策略家の狸親父のだが、息子の彼は気付いているのかいないのか。

政治的な理由もあって表面上は親しげに振舞うも、内心ではあまり関わり合いになりたくない心情のスイルアツカ。

「スイル姉さまスイル姉さま！ 姉さまの鎧、胸元がこんなに裂けてしまっているわっ まさか怪我をしたの？」

「いや……装甲を削られただけだから、心配ない」

「でもでもっ 壊れた鎧なんて着ていると何処か引っ掛けて怪我をしてしまうかも！ 危ないから早くお着替えになった方がいいわっ ね？ デイド兄さまもそう思うでしょ？」

「うーむ、確かに破損した甲冑姿だと格好がつかんかもしれんなあ。やはり”スイル將軍”は神々しく華やかでないとなっ！」

「あ、ああ……そうだな」

兄デイド共々、妹のメルエシードもこんな調子でスイルアツカのささやかな目論みは無邪気に蹴散らしてしまう場合が多々あり、されど無碍にも出来ずと、どうにも対処に困ってしまう兄妹達なのだ。

着替えに誘うメルエシードに腕を引かれながら”ちよつと助けろ”と疲れた視線を向けて来るスイルアツカに、頑張ってくださいと応援の視線を送り返すターナ。

スイルアツカとは主と側近の枠を超えた信頼関係で結ばれているターナトリアだが、王族同士の会話に横から口を挟むなど不敬の謗りを免れない。ターナは良く出来た側近の侍女なので、後々主の不評に繋がるような行動は極力避けるのだ。

ここ最近のエツリア宮殿では珍しくないそんな光景が繰り広げられていたその時

「あら？ その子はだあれ？」

ふと『スイル姉さま』の視線の先に目をやり、何時も傍に控えている侍女の隣に見慣れない少年の姿を見つけるメルエシード。

「ああ、彼はちよつと戦場で拾って来たというか、私の直属にしようかと」

「ええっ！ スイル姉さまが男の子をお傍に!？」

公然の秘密として男嫌い知られているスイルアツカが、小さな少年とは言え身边に男を重用するとは驚いてみせるメルエシードは、スイルアツカの腕にくっ付いたまま『一体何者?』とばかりに、

ずずいと身を乗り出してコウの顔を覗き込む。

鼻先が触れそうなほど近付いたメルエシードの整った顔立ち。体温に乗って香る甘い匂い。少し釣り目気味な翠眼の瞳が興味深そうにコウの黒い瞳を捉えている。

これは彼女の使いつつもの手。身分も高く見目麗しい美少女からこんな風に顔を寄せられれば、普通の相手なら大抵の場合、照れたり怯んだりして首を引くものだ。そしてその印象が強く心に刻まれれば、苦手意識などから会話で吞まれ易くなる。

「こんにちは。ボク、コウって言います。君、なんだか美味しそうな匂いがするね？」

「……へ？」

「あ、これお菓子の匂いだ。木の実焼きのサブレかな、くちびるに甘いお砂糖でもついてる？」

「……！」

さつと頬を赤くして身を引いたメルエシードは慌てて口元を両手で隠す。まずは牽制の『顔近過ぎ作戦』で主導権を握ってコウ少年の人物像を推し測り、あわよくば自分側の支配下に取り込もうと考えていた彼女は思わぬ反撃にうろたえた。

「す、スイル姉さま！ この子危ない子ですわっ 絶対誑しに違いないです！」

「はははっ 心配ない、ちょっと浮世離れしているだけだ。コウも女性相手に匂いを話題にしたり美味しそうなんて言うモノでは無いぞ？」

「はーい」

「ほほーう、スイルが目を掛けるだけあって中々堂々としているじゃないか」

やいのやいのと話題がコウの事に移ったので此れ幸いと便乗したスイルアツカは、コウが最近巷で噂の冒険者ちまたゴーレムである事を明かし、訳あつて捕虜達の中に混じつてた彼をスカウトしたのだとコウの重用に関する経緯を掻い摘んで話した。

これから皇帝の間で今回の戦と今後の展望について説明をするので、コウの事もそこで発表する予定なのだ。

「冒険者……この子が？」

マーハティーニの兄妹がコウに注目した。そのタイミングを逃がさずターナが介入、皇帝の間へ急ぐようスイルアツカに進言する。

「うむ、そうだな。父上も待ち侘びているやもしれん」

「おおつとすまない、長く引き止めてしまったようだ。メル、俺達も親父殿の所へ急ぐぞ」

「むう……はあ〜い、兄さま。それじゃあスイル姉さまも、また後で！」

ぴよんとデイドルバート王子の腕に飛びついたメルエシード王女はそう言つて手を振り振り、廊下を去つていった。何かと騒がしい兄妹と別れ、やれやれと肩の力を抜きながら皇帝の間へ移動を始めるスイルアツカ達。

「コウのお陰で上手くやり過ごせましたね」

「ああ、全くだ。コウ、さっきのアレはワザとなのか？」

他者の考えを感じ取っている節のあるコウの事、メルエシードに

対する一連の発言が狙ったモノだとすれば、スイルアツカやターナ達の内心を察して機転をきかせたと考えられるが、もし天然だった場合はコウに対する認識で少々改めなくてはならない部分も出てくる。

「うん？ 別にふつうに話ただけだよ？」

「……そうか」

近くに置く侍女や使用人の内訳をしつかり考えなくてはならんと、コウに対する認識を聡明な子供から要警戒な男に改めてみたりするスイルアツカ達に、コウはさりと言、緩んでいた二人の気を引き締めるに十分な忠告を与えた。

「あの子の前では、あんまり大事な秘密とか口にしない方がいいよ。味方じゃないから」

その言葉に一瞬目を見張り、『そうか』とだけ呟くスイルアツカ。そつと顔を見合わせたターナも神妙な顔付きで頷いた。薄々感じているのだ。懐^{なつ}いてくるメルエシードから向けられる眼、そこに垣間見られる不思議な違和感。

あの瞳の奥には何か別の強い情念が籠められていると。

「コウ、これから向かう場所がどういう所か分かるな？」

「うん、グランダーでも王様に会った事あるよ」

皇帝陛下の前で不敬をやらさないよう大人しくしてるよーと語るコウに、スイルアツカは頷いて笑みを返す。要請されずともこちら側の立場を察してか、早速敵と味方を見分けてくれたコウに心強さを感じる。彼は求められる自分の役割を理解しているようだ。

これから赴く皇帝の間には支分国の王族を始め多くの重鎮達や将校、各国の大使達が集まっている。スィルアツカが帝国の未来を担い、導いて行く為に必要な人材と不要な人材を選び分ける絶好の機会。

「期待しているぞ」

スィルアツカの緊張を孕んだ言葉に、コウは二度目だから大丈夫だよーと軽快に答えたのだった。

49話：皇帝の間にて

エツリア宮殿上層階の中心部から更に上の階へと上がった先に、広い廊下の如く細長い部屋がある。この部屋は真ん中辺りで巨大な扉に仕切られており、扉の外側は”謁見の間”。内側は”皇帝の間”となっていた。

仕切りの扉部分から床も一段高い造りになっている”皇帝の間”は主に支分国からの大使や王族、高級官僚など国家の中枢を占める重要人物が招かれ、御前会議の場として使われる。

中心付近に演説や発表を行う壇が設けられ、それを囲む形で円状に並ぶテーブルと出席者達の席。部屋の一番奥には更に二段程高くなった壇上に皇帝の玉座があるのだ。

従って通常、皇帝に謁見する者は”謁見の間”から仕切りの扉を挟んで”皇帝の間”の最奥に見える壇上にどうにか姿を確認できる皇帝陛下に平伏して謁見が許される、という形になる。

暗殺の類を警戒しての処置でもあるのだが、この謁見者と皇帝との距離がナツハトム帝国の内情を表していた。

「 という訳で、機械化兵器の有用性は実証されましたが、本格的な運用は生産体制から考えてまだこれからという所でしょう」

各支分国の大使や国の重鎮達が注目する壇上で戦果報告を続ける

スイルアツカ。その身に纏う特別製の重甲冑に刻まれた破損跡が、戦いの激しさを生々しく実感させる。

今回の侵攻で機械化兵器による新戦力に手応えを感じたが、まだグランダールの魔導兵器とやり合うには力が足りないとして全面戦争を回避する方針を掲げるスイル將軍は、捕虜の交換と身代金をせしめて休戦に持ち込むべきだと主張した。

進行役の官僚が意見などを募り、特に反対する者もない事を確認してガスクラツテ皇帝陛下にお伺いを立てる。

「うむ。よかろう、そのように致せ。ご苦労であったな、スイルよ。見事な手腕であった」

「ありがとうございます、父上」

スイルアツカの凛々しく堂々と振舞う姿に目尻を下げる皇帝。公的な場でも父と呼ばせている所に、気の掛け具合が表れている。

レオゼオス王にやられっぱなしだったガスクラツテ帝は、一矢報いてやったとしてスイル將軍の働きを評価。身代金も入るし、新たな領土が増えなかったのは残念だが、先行きは明るいと娘の活躍に期待する。

一方、現皇帝トウホウに期待を向けられているスイルアツカの内心では「確かに帝国の未来を明るく照らして導くつもりだ。あなたの考えるやり方とは別の方法でな」などと野心染みた考えが巡らされていた。

今回の戦の落とし所と今後の方針についてはこれで決定となり、各方面への通達が行われてグランダール側との休戦に向けた交渉に入る事になる。スイル將軍の戦果報告は一応、ここまでで終わりだ。

この後は居並ぶ重鎮達を相手にした質疑応答が待っている。といっても、戦果報告の中で必要な情報は全て出してしまうので特にこれといった疑問や質問は挙がらない。

そんな空気の中、重鎮の一人である熟年の男性が拳手を向けた。彼の姿を認めたスイルアツカは『やはり来たか』と胸中に湧く警戒感に顎を引き、他の重鎮や将校達も『ああ、また彼か』といった雰囲気の視線を向ける。

「一つ、よろしいですか？」

「どうぞ、ルツカブルク卿」

現皇帝の側近周りや将校たちの間では概ねスイルアツカを支持する考えが大勢を占めるが、次期皇帝への即位に向けて足場固めを行うべく自身の支持者を増やしたいスイルアツカにとって、ルツカブルク卿は対抗派閥ともいえる存在である。

明確な対立姿勢を示している訳ではないものの、スイルアツカ皇女の即位に慎重な姿勢を見せる重鎮や一部の将校達を束ねる一派として、中心的な立場にある人物だ。

彼らは次期宗主国と皇帝の座を狙うマーハティーニと違い、同じエツリアの古参有力家から次代の皇帝を選出したい勢力なので、マーハティーニ側と協調する国内勢力とは対立関係にあった。

単純に表してしまうならば、ルツカブルク卿の一派もマーハティーニのレイバドリエード王もスイルアツカを娶らせて息子を皇帝に、と目論む有力家の面子であるといえるが。

「結局、今回の戦で領土の代わりに手に入れたのは、その子供に見える珍しい冒険者ゴーレム一体という事で、宜しいのですかな？」

部屋の隅に控えるターナの隣で、ちよこんと立つコウに皆の視線が集まる。流石に情報が早い。スイルアツカは内心でそう呟く。

一見すると単なる嫌味を言った風なルツカブルク卿の問い掛けは、コウの事を噂の冒険者ゴーレムであるらしいと予め示しつつ指摘する事で”ただの子供ではなかった”というインパクト狙いのサプライズを封じてしまうものだ。

『先手を取られたな。さて、どう切り返したモノか』

ルツカブルク卿の狙いはこの場の出席者達に対するスイルアツカ皇女への印象操作である。総指揮として国家間の神聖な戦いの場に赴きながら珍しい玩具を見つけてそちらを優先したかのように思わせるのが目的。

実際、”スイル將軍の率いた精鋭団”は今回の戦いでこれといった戦功らしい戦功を立てていない。

「直ぐに手放す事になる僻地よりは役に立つというものですよ」

とりあえず、砦の脅威を取り除けないまま回廊近辺の土地を占領してみた所で、開拓も何も出来ないうちにグランダー側に取り返されるのは目に見えているという事実を挙げて牽制してみる。

機械化兵器の実証実験は成功したといえるし、それによって今まで手の打ちようがなかった魔導船への対抗手段も確立出来た。これまで魔導兵器導入後のグランダー軍に負けっ放しだった戦いも、今回は実質引き分けにまで持ち込めたのだ。

有名な冒険者ゴーレムを味方につけられた事は、無理にグランダー領から僅かばかりの土地を得ようとする事よりも余程有意義な選択であったと主張する。

「まあ、それは良いでしょう。ですが所詮は無頼漢共の有象無象から飛び出た変り種と申しましょるか、卑しき身分なれど手練の冒険者を語るならば、せめて献上の品でも敬意を示すのが筋という所かと存じますれば、皇女殿下の従者に添えるにはいささか」

と、ルツカブルク卿は素早く矛先を変える。穴蔵タンジョンでの遺品さいほう漁りを生業とする身分の卑しき者、冒険者風情が恐れ多くも皇帝陛下の御息女に目を掛けられ、陛下の御前に参上するにあたって手土産もなしかという誇り。

これは言うなれば新参者のお披露目の席で挨拶がてら何か寄越せと要求しているようなもので、国同士の交流でならまだ有りと言え、個人個人の従者に対して国家の重鎮が向けるような言葉ではない。概ね、大人気ないというか大げさに思われるような内容なのだ。しかし、それだけに対応も難しい。そっち方面から攻めてきたかと自分自身の世評を削ってまで落とすに掛かって来たルツカブルク卿に、スイルアツカはまずいなと内心舌打ちする。

冒険者協会の影響力が低いナツハトーム国内において”冒険者コウ”の知名度はあまり高く無い。

ゴーレムの冒険者であるという珍しさの一点で目立っている状態であり、現時点でコウの有用性を理解している者はその能力の一端を知るスイルアツカ達しかおらず、その彼女達でさえ、コウの冒険者としての功績についてはあまり詳しくないのだ。

名のある冒険者を謳うならば、皇帝陛下の御前に出して恥ずかしくない献上品の一つも用意出来て然るべきという指摘は中々に的確で、これの返答如何によつては”戦功より珍しい玩具を優先した”という誇りのイメージが定着してしまう。

コウが持つ相手の思考を読み取って敵味方の判別をする能力などは出来る限り公にしたいくないが、今後宮殿でコウを連れ歩く事に対して早々マイナスのイメージを付けられるのもまずい。スイルアツカはどうか無難な返答で躲そうとした。

「戦場で出会って着の身着のままの戦場帰りですから、陛下ちちうへへの献上品を期待するのは酷というものでしょう」

「ああー……まあ、見た目通りという訳ですか」

そう言っコウに視線を向けつつ肩を竦めて見せるルツカブルク卿。そのユーモラスな仕草と物言いに、周囲から軽く笑いがこぼれる。

一方、ターナの隣で”あれは人では無いらしい”と噂されつつ注目を浴びている皇女殿下スイルアツカの従者コウは、話の流れから自分が手ぶらでこの場に居る事を無作法だとしてスイルアツカが槍玉に挙げられているのかな？ と考えた。

思考を拾った限り、ルツカブルク卿と呼ばれる熟年紳士からはスイルアツカに対する悪意は感じない。単にスイルアツカの事を認めていないというか、彼女の能力や実力に対して懐疑的で、且つ心配しているような心情が感じ取れる。

この人を味方に付けるのは大変そうだが、敵ではない。そんな風を感じたコウは、とりあえず何かお土産になるモノはなかったかなと異次元倉庫を探り、丁度良さそうなモノを幾つかピックアップして近場に寄せると、徐に口を開く。

「お宝を出せばいいの？」

不意に放たれたその一言は微かに笑い心が刺激されていた列席者

達のツボにはまったらしく、皇帝の間を覆っていた厳粛な空気を破るようにドツと笑いが巻き起こった。

「何か出せるのかね？」

失笑を装いながらそう応じるルツカブルク卿。そのやり取りに控えめながらまた笑い声が零れる。皆の注目が集まる中、コウはバラツセのダンジョン最下層から持って来た王冠を出してみた。『お近づきのしるしにこれぞうぞ』な感じでルツカブルク卿に差し出す。

細かい装飾と宝石の映える結構大きな王冠の出現に、何処から出したのかと控えめな笑いさざめく声の中に驚くようなざわめきが混じる。実はスイルアツカも驚いていたが、己が従者の行動は全て把握していると装う為には出さない。

「君は冒険者だと聞いていたのだが、どうやら手品師の間違いだっ
たようだ」

皮肉交じりに受け取ったルツカブルク卿は、ふふんと目利きをする雰囲気であつていたが、ふと何かに気付いたように動きを止めた。
「まさか……」 というような表情になり、素手で掴んでいた王冠にこれ以上指の跡をつけないようハンカチでそつと掴み直すと、真剣な顔付きで凝視し始める。周りで様子を窺っていた人々もなんだなんだ？ と、卿の様子がおかしい事を囁き合う。

スイル
娘とルツカブルク卿の何時ものやり合いを傍観していた玉座の皇帝ガスクラツテは、なにか面白そうな余興が始まったぞと目尻に浮かべた皺を濃くしつつ、顎髭など弄りながら興味深そうに成り行きを眺めている。

自分の従者らしき魔術士風の若者を呼んで王冠を見せながら何やら耳打ちするルツカブルク卿。呼ばれた若者は本来こんな場所に立てるような身分ではない為か随分緊張している様子だったが、王冠を観察して目の色を変えると興奮したように囁き始めた。

ヒソヒソ声に乗って漏れ聞こえる内容は『カンブリテン呪術式の魔術装飾』とか『文様の刻み方が現代の主流となっている物の原型』やら『魔術で鉄板の表面の少し内側を熱で泡立てて浮かび上がらせる独特の技法が使われている』など。

以前コウがバラッセの街の統治者の屋敷で聞いた”生命の門”についての考察内容とよく似ていた。研究者の若者は最後に『バードリク王朝時代のもの」と推定される。凄いお宝だ』と締め括って王冠をルツカブルク卿に返した。ざわめきに包まれる皇帝の間。

「コホンツ……コウと言ったかな。これを何処で手に入れたのかな？」

咳払いをしてコウに向き直ったルツカブルク卿が若干態度を改めながらそう問い掛けると、コウはバラッセのダンジョンで拾って来た事を告げた。卿の傍に控えている件の若者が情報を補足してルツカブルク卿を補佐する。

バラッセといえば、世界で初めて集合意識が発見されたダンジョンとして有名。最近、生命の門というダンジョン創成期頃の魔術装置が発見されて異変が起きたと聞いている。

魔物を生み出す装置が破壊された事で、ダンジョンとしての価値はなくなつたようだが、歴史的な遺産ともいえる遺跡などの建造物が地下深くに見つかつて学者や研究者達の間で騒がれており、自分も行きたい。と、最後に願望も付け加える若い研究者。

「あ、あれ壊したのボクだよ」

王冠はその部屋から見つけたもので、生命の門と同様に歴史的遺産なら冒険者協会に提出しようかとも思っていたのだが、お宝は手に入れた人に所有権が認められているし、戦争の最中で急いでいた事もあり、『まあいいや』とそのまま持っていたのだという。

この話には件の若い研究者や、冒険者協会の仕組みに詳しい者が反応した。

「さてよ？ 例の冒険者ゴーレムも、確か名は”コウ”では無かったか？」

「そ、それでは……もしや彼は学者達の間で話題になっているというあの」

基本、身分の高い人々は冒険者のシステムについてあまり詳しく無い場合が多い事に加え、冒険者協会の影響が低いナツハトームでは情報も斑まだらなので、目の前の少年型召喚獣なコウと例の噂に聞く冒険者ゴーレムとが一致しなかったのだ。

スイル將軍が連れ帰って来たのは単独で”双剣と猛獣”のメダルを得たあの冒険者ゴーレムだったのかと、皆が驚きを露あらわにする。コウに向けられている注目の視線は、この話題に入った当初に向けられていた好奇の類とは全く性質の違うものになっていた。

ルックブルク卿はえらいモノを献上されてしまったが、これは下手をしなくても国宝級に匹敵する宝。個人で所有するには価値が高過ぎるとして帝国の博物館に寄与する事を皇帝に提案。

目を掛けている娘がコウのような存在を従者に得た事で、やはり自分の目に狂いはなかったと満足気なガスクラツテ帝は『よきには

からえ』で卿の提案に応じ、コウの献上品は帝国博物館に寄与される事となった。

皇帝の間での一連のやりとりは”スイル將軍の従者コウ”を、どうやら只者ではないらしいと帝国の重鎮達に印象付けた。

「さて、みなの方。此度の戦は我が帝国の行く末に明るい展望をもたらせたと言えよう。我等の巻き返しと快進撃はこれからだ」

ガスクラツテ帝が締めに入り、列席者達は一斉に起立して敬礼を取る。戦果報告からその後の余興も含めて概ね満足した皇帝はスイルアツカに勲章と褒美を与える事を告げると、これにて閉会とした。

こうして、この日の報告会は無事に終わったのだった。

「上手く立ち回ってくれたな、コウ。どうした、疲れたか？」

「うっん、ちょっと気になる事がね」

そして、コウの帝都生活が始まるまでには、もう少し掛かる事になる。

『引つ張られる感覚が強くなって……原因が近い？』

50話：スピリット・マイグレーション【前編】

皇帝の間を後にしたスイルアツカ達は報告会の席でコウがチエツクしたであろう各人物の内面について、スイルアツカや現皇帝に対する心情の取り纏めを行う為、一旦スイル將軍の私室へと向かう。同時にコウの住む場所や身分など細かい話も詰めていくのだ。

スイルアツカ皇女の信頼を得ているとして婚約者の座を狙う有力家からはある程度の警戒を向けられる事になったコウだが、見た目が子供である事や、本体はゴーレムらしいという事から『まあ大丈夫だろう』とあまり脅威な存在とは見做されていない。

寧ろ、コウと良い関係を築く事ができれば皇女ともお近づきになって色々得られる恩恵が大きそうだと、仲良くしたがる勢力が増えそうな気配があった。『国宝級の宝などをそれと自覚なしに持ち歩いているくらいだな』と密かに囁かれている。

皇女とその側近の後に続きながらトコトコと宮殿の廊下を歩いていたコウは、ある場所に差し掛かった所で特に強く意識を引かれる感覚を受けて足を止めた。視線を向けた先には淡い青色の絨毯が敷かれた廊下が伸びている。

「そっちの廊下は離宮に続いているのだが、何か気になるのか？」

不意に立ち止まったコウに声を掛けるスイルアツカ。コウの見つ

める廊下が離宮に繋がっている事を教えつつ、今も眠り続けているであろう”彼”の事について想いを巡らせる。

皇帝の秘事録に伝わる古い言い伝え。”異邦の地よりも更に遠く異界より迷い込みし者あらば此れ必ず確保すべし”という一節。コウには後で”彼”に会って貰うつもりでいた。

スイルアツカの思考から”彼”という存在を読み取ったコウは、読み取れた範囲でその人物の特徴などを意識してみた。瞬間、浮かび上がる断片的な映像。エスルア号が撃墜された時にも見た情景が視界に広がる。

沢山の椅子が並ぶ細長い通路のような場所にて、揺れる建物の中で大勢の人々が騒いでいる。角の丸まった小さなマドに映る若い男性の顔と目が合うと

『あれは（これは）……ボクだ（俺だ）』

ピタリと填まる記憶の欠片。コウは意識が引つ張られている原因を特定した。

「ウ、コウ？ どうしたコウ」

「……！」

名を呼ばれている事に気付いてハッと顔を上げると、スイルアツカが怪訝且つ心配そうな表情で覗き込んでいる。コウはしゃがんだターナの膝上に抱えられる格好で彼女の腕に支えられていた。どうやらまた気を失った状態になっていたらしい。

「大丈夫か？ 急に倒れたので驚いたぞ」

どこか具合でも悪くしていたのかと問うスイルアツカ達に、コウは少し考えを巡らせる。欠けた記憶と知識の断片。自分が異世界人であるらしい事など、やはり今ここで話して置くべきだと判断したコウは自分の事を語り始める。

「ボクね、実はべつの世界から来た人間らしいんだ」

唐突にそんな告白をされたターナとスイルアツカは思わず顔を見合わせた。

コウが捕虜達に混じっていた事の経緯については既に話してあるが、それを予備知識としてエスルア号が撃墜された時からずっと意識が何処かへ吸い寄せられるかのように引つ張られている事、その為にこの身体から抜け出せないでいた事などを話すコウ。

「いま原因が分かったんだ。多分この先にいる、スイルたちが”彼”って呼んでる人にひっぱられてるんだと思う」

”彼”の事を話題に出されて一瞬驚くスイルアツカだったが、直ぐに思い当たる節が浮かんだ。祈祷士リンドーラの言っていた精神と意識が抜け落ちている状態だという”彼”。対するコウは本来精神体として存在し、あらゆる身体に乗り移って活動できるらしい。

話を聞いた限り、時期を逆算するとこれまで何の反応も示さず眠り続けていた”彼”が魘されるなどの動きを見せた時とも一致する。

「……お前が、”彼”の精神と意識なのか？」

「分からない。でもさっき浮かんだ記憶の情景で感じたんだ、ボクたちは同じ存在なんだって」

離宮へと続く青絨毯の廊下を見つめるコウ。一度ターナと目配せをしたスイルアツカは、予定を変更して先に離宮へ向かう事にした。元々”彼”とは会わせるつもりでいたのだ。

「よし、付いて来い。実際に会って確かめてみるといい」

身分や立場、これから住む場所など、コウに関する課題は案外早く解決する事になるかもしれない。そんな期待を胸に離宮へと続く廊下を先導するスイルアツカ。

絶体絶命の危機を救われた事に始まり、初対面や身内であっても正確に見抜く敵味方の判別。あのルツカブルク卿をも宝一つで怯ませた意外性と気転。

”彼”がコウとして目覚めたなら住む場所は今まで通り離宮暮らしで問題なく、他者の目にも触れないよう匿っておける。立場や身分も例の書物を絡める事で機械化技術の発展に貢献した者として相応に高い地位を付与する事も出来る。

コウをスカウトしてからこれまで、短い期間に得られた数々の恩恵によって無意識ながら気持ちをはたかかせていたスイルアツカは、この時、自身の判断が少し慎重さを欠いている事に気づいていなかった。

ナツハトームとグランダーを繋ぐ国境回廊。その北東部に広がる巨大湖を越えた先には水源豊かな森林地帯を抱える国、祈禱士や

呪術士を多く輩出するエイオアが栄えている。

エイオアの南にあるグランダールと国境を接する街アルメッセにて、冒険者協会経由でコウのナツハトム入りを聞いたリンドーラは『やられた』と、彼女にしては珍しく動揺の表情を浮かべていた。スイルアツカ皇女に感じていた機運を引き寄せる強さを実感する。

コウの事情に関してはエイオア評議会も然程詳しい所までは把握していない。だが調べようと動けば直ぐに情報が集まる筈だ。リンドーラは帝都エツリアの離宮でみた異世界人については報告を上げているが、”彼”とコウの関係については胸に仕舞ってある。

それとなく”冒険者、ゴーレムのコウ”を自国に呼び込めば有益だと思えますーといった論調で引き込み工作を促していたのだが、悠長なやり方では手遅れになるかもしれない。

『気は進まないけど、コウの事も報告した方が良いのかしら……』

ふつつつと悩みながら評議会会館アルメッセ支部にやって来たりリンドーラは、会議を行う祭壇の間へと足を向けた。

評議会会館には特殊な通信用祭壇が備え付けられており、エイオアの主要な街にある全ての祭壇を音と映像で繋ぐ事によって擬似議会を開く事が出来る。

各街を管理する幹部達は自分の担当する街に居ながら首都の中央評議会に対応する事が出来るのだ。

それぞれの街から祭壇の間がそのまま映し出されて一堂に会するので、音と映像だけが異様に広い議会場での議論は圧巻である。この通信用祭壇のお陰で議会決定の周知など、エイオア国内における情報伝達力は他の類を見ない。

ちなみに通信用祭壇は古代遺跡から発見された”転移装置”を解析して独自に組み上げられたもので、参考にされた”転移装置”の本物は首都の評議会本部宮殿に保管されている。

古代遺跡で見つかった転移装置自体はエイオアで明確にその稼働が確認された事はあるものの、不安定な上に制御も利かない状態。当然、実用には至っていない。

グラन्दールでも”転移装置”はまだ実験段階にあり、沙耶華の素性に転移事故云々を連想されたのも実はこの辺りの認識が絡んでいたのだった。

特殊な呪術式が付与されている四本の柱に囲まれた円形の壇上に立ち、結界を構築する事で他の街の通信用祭壇に構築された結界と共鳴して風景や音が繋がられる仕組み。

四本の柱と円形の壇という同じデザインをした通信用祭壇がずらりと並ぶ広い空間に、新たな祭壇が現れた。壇上に立つアルメッセの代表者と、祭壇の起動を担当する妙齡の女性祈祷士がこの擬似議会場に居並ぶ各街の代表者達に一礼を向ける。

「おお、どうやらアルメッセの代表も来たようだ」

「全員揃ったようですな」

「では、今日の会議を始めるとしよう」

エイオア評議会本部宮殿から繋いでいる中央の一際大きい祭壇に立つ議長が、開会を宣言した。

会議の内容はやはりナツハトムとグラन्दールの衝突について、

機械化技術の発展に伴うナツハトーム帝国の軍事力拡大と、それによる覇権主義復活への警鐘が最重要課題として一番に挙げられる。

ナツハトームが今後どう動くか分からないので、エイオアとしても警戒するに越したことは無いという意見が大勢を占めていた。

「評議会としてはグランダールとの協調を深める方針で固めたいと思っ」

「賛成の者は右手の拳手を」

採決が行われ、賛成多数で今後のエイオア評議会における方針が定められた。その後、会議の席では幾つかの案件が挙げられてはその場で対処を決定したり保留にしたりと議題が消化されていく。

そんな中、エイオア評議会本部宮殿の席に身を置く呪術士の一人からグランダールで限定公開されていた”生命の門”を詳しく研究する為、調査団の派遣と受け入れ要請の打診が提案された。

”生命の門”に関する研究者達の関心は高く、研究者肌の多いエイオアにおいてこの提案には皆が賛成を示し、後日エイオア政府としてグランダールに申し入れがなされる事となったのだった。

同じ頃、グランダールの王都トルトリウスでは西の砦から帰還したレイオス王子や、ナツハトーム軍の撤退でアリアトルネ防衛から戻ったガウィーク隊の皆がアンドギー博士の研究所に顔を揃え、エスルア号の船長達から聞いたコウの伝言を話題に話し合っていた。

「スイルアツカ皇女は将来両国の和平を望んでいる、か……」

「まあコウがそう言ったのなら、まず間違いないでしょう」

「コウは相手の思考を読んどるとい話じゃからなあ」

冒険者の国家に対する立場は原則として中立が基本だが、個人や集団が意図して特定の国家や有力者に肩入れする事は別に珍しい事ではない。

コウの乗っていたエスルア号が撃墜されたという一報を聞いてから心配そうにしていたカレンを始め他の隊員達も、無事なら良いとコウの選択に理解を示している。

しかし、明確にグランダル寄りであるガウイーク隊から作戦遂行中に敵国側へ与する隊員が出た事は風評的な問題もあつた。

「捕虜の解放を条件にしたという証言もありますし、コウにも思うところがあつたんだと思いますよ」

「やはりその辺りを指して擁護するのが妥当か」

ガウイーク隊にはコウの事で悪評が立たないよう取り計らい、現在グランダールの軍上層で拳がつているナツハトムへの報復遠征案に関しては慎重な姿勢を示す立場で行くよう方針を固めるレイオス。

「後はロゼスとスアロにも相談して調整するでしょう」

「……え、普通そつちを先にしない？」

レイオスの呟きに沙耶華が突っ込んだ。改まった他人行儀さを感じさせないその口調に、二人の距離が以前よりも近付いている事を感じさせる。

「一応話は通してあるがな、処置を決める前にガウイク達の意見を聞いておきたかったのだ」

そう言つて何時もの野性味混じりな笑みを見せたレイオスは沙耶華の額にキスを落として王宮群へと戻つていく。

レイオスの好意に対して沙耶華が受け入れる傾向を見せ始めた事で気持ちに余裕が出来たせいか、会えば何かしらアピールしていたがつつき感も落ち着き、随分リラックスした雰囲気と接せられるようになっていた。

これはこれでまた一騒動起きる火種にはなりそう等と密かに二人の様子を観察しつつ、今後の成り行きを見守っているのはサータだけではなかつたりするのだった。

エツリア宮殿から長い廊下を渡つて離宮に案内されたコウは、その一番奥にある部屋で一人の若者と対面した。

ターナと同じような鋭い気配を持つ者が混じる数人の使用人達を部屋の内と外に控えさせたスイルアツカは、コウが”彼”を目覚めさせる事を期待しながら様子を窺っていた。例え”彼”がコウとして目覚めなくとも、何かしら”彼”に関する情報が掴める筈だと。しかし

「?!」
「コウ！」

静かに眠り続けている黒髪の青年を前に、ぐらりと身体を傾かせ

てベッドに倒れ伏すコウ。そのままずると床に滑り落ちる所を、先程のように再び気を失うような事があるかも知れないと予測していたターナが支える。

だが、支えた腕の中で光を放ち始めたコウの身体はそのままスーッと消えうせてしまった。召喚が解除されたのだ。

「これは一体……」

「！ スイル様、”彼”が……っ」

コウが消えてその場に転がり落ちた召喚石を見つめながら焦燥を浮かべて呟くスイルアツカ。ターナの声に顔を上げると、視線の先で二度三度と身じろぎした”彼”が擦れた声で呻きながら目を開いた。

「うう……ど……こだ………」

よく聞き取れなかったが確かに何か言葉を発した”彼”は、直ぐまた気を失うように眠りについた。直ちに”彼”の生命維持と覚醒処置に携わって来た医療関係者が呼ばれて健康状態その他の診察が行われる。

結果 命に別状は無く、恐らくは疲労による二度寝状態にあるようだと結論付けられた。

「かなり安定していますね。私にはぼんやりとしか分かりませんが、魂の存在しか感じなかった身体に精神の気配を感じます」

お抱えの呪術士はそう言って”彼”が遠からず自然に目覚めるであろう事を告げた。幾分ほっとした表情を見せるスイルアツカ。コウから聞かされていた話では精神体が吸い寄せられるように引っ張

られているとの事だった。

「本体の傍に近付いた事で吸い込まれてしまったのかもしれないな」
召喚獣やゴーレムという疲れも痛みも知らない身体から本来の肉体に戻った事で、それまで感じていなかった疲労感が一気に押し寄せて倒れてしまったのだろう。

先程一瞬目覚めた時に感じた”彼”の雰囲気は若干の悪い予感も覚えつつ、残されたコウの召喚石を手のひらに見つめながら”彼”が再び目覚める時を待つスイルアツカは、そんな風に考えていた。

次に”彼”が目覚めたのは深夜になる頃であった。そして、スイルアツカの悪い予感は当たってしまう。

「えーと……コウ？ 私がわかるか？」

「……………」

”彼”が目覚めたという報せに飛び起きて来たスイルアツカは、ベッド上で半身を起こしてどこか呆然としている様子の若者に声を掛ける。だが返って来たのは聞き慣れない響きを持つ言語、恐らくは異世界の言葉と、他人に接する時のような余所余所しい態度。言葉が通じない。しかも自分達の事が分からないらしく、戸惑っている素振りが見られる。これには困るスイルアツカ。

「参ったな……どうした事だこれは」

「雇い込んでいる呪術士の話では、腕利きの祈祷士でもなければ意思疎通は困難との事です……」

京矢は目が覚めて暫く混乱していた。少し落ち着いた今はひたすら困惑している。

『なんだこれ……確か飛行機が墜落して海に投げ出されて……それからどうなったんだ？　ここって、外国の病院じゃないよな？』

メイドっぽい格好をした女性は看護婦だろうか。宣教師が着ている服に似た姿の年配者は医者なのか。今し方慌てた様子で部屋に飛び込んで来た目のやり場に困る薄い衣姿の若い女性は何者なんだろうか。

彼らはしきりに何か話し掛けて来るのだが、まったく言葉が分からない。どこかの高級ホテルにある一室のようなこの部屋は、とても病室とは思えない。ここが何処なのか、なぜ自分はここに居るのがサツパリ分らないでいた。

おーい

『いや、でも何処かの発展途上国とか、孤島みたいな所とかなら、こういう病院もありうる？』

おーい、おーい

『けど、どう見ても欧米人っぽい感じだし……ちよつとインド系っぽい感じもしなくもないけど……』

部屋の一角で何やら話し込んでいる薄い衣を纏った赤毛の女性とメイド服っぽい姿の女性、同じ格好をした数人の女性が壁際に控え

ている様子を横目に、彼女達は何者なんだろう？ と疑問を浮かべる京矢。

「先程から”気のせい”にして無視していた頭の奥に響く声が答える。」

あの二人は赤い金髪の方がスイルアツカで、話してる相手はターナトーリアって言うんだよ

「……スイルアツカとターナトーリア？」

ぼつりと呟かれた京矢の言葉に、件の二人が反応する。だが彼女達は京矢に話し掛ける事が出来なかった。

「ああああ！ さつきから何なんだよっ 人の頭ん中で当たり前みたいに喋りやがって！ なんか取り憑いてんのかこれっ！」

どちらかと言えば戻ってきたんだけどね

「訳分かんねえ！」

突然頭を抱えて喚き始める”彼”に驚いたスイルアツカ達は、すぐさま呪術士に沈静術を行使させる。暫くぶつぶつと呟いていた”彼”は徐々に落ち着きを取り戻すと、やがてそのまま眠りに付いた。ホツと肩の力を抜くスイルアツカ達。そして去来する不安。

「まさか、あの祈禱士リンドーラが言っていた別の何かが入り込んでしまったのではあるまいな？」

「申し訳ありませんが、私の力では測り兼ねます」

とにかく今は”彼”が落ち着くまで暫く様子を見守るしかない。

長い間眠り続けていた事を考慮すれば、体力も相当に落ちている筈

だ。起きて活動出来る時間も限られる。まずは体力作りから始めなくてはならないだろう。

「いきなり”彼”と会わせしたのは、少し軽率だったかもしれない」
「スイル様……」

コウの有能さに少々舞い上がっていた事を反省するスイルアツカは、眠る”彼”の傍に寄ると、何気なくその手に召喚石を握らせた。もし”彼”の身体から戻って来られるなら、もう一度戻って来て欲しいという思いがそんな行動を取らせたのかもしれない。

リンドーラがこの場に居れば、スイルアツカの持つ”機運を引き寄せる力の強さ”を改めて実感しただろう。”彼”の手に握られた召喚石が仄かに輝きを纏うと、空中に光の文字が出現した。装飾魔術を使った文字によるコミュニケーション法。コウの十八番だ。

「っ！ コウか!？」

”ボクだよー”

召喚石を通して届けられたコウからのメッセージは、”彼”の名前と今現在の状態。コウが京矢の中に戻った事で発生した問題について伝えるモノだった。

51話・スピリット・マイグレーション【後編】（前書き）

今回ちょっとシヨタいです。

51話：スピリット・マイグレーション【後編】

古ぼけた祭壇の傍で目覚め、蟲や小動物に憑依を繰り返してダンジョンを彷徨い、自分を視る事の出来る人との出会いから多くの人々と関わり合い、やがて地上へ飛び出し、街を渡り歩き、様々な経験^レを積んだ。

『そうか……それがお前なのか……』

ボクは君の可能性の一つなんだと思うよ

三度目の目覚め。取り乱した京矢が沈静術で眠りについてから一夜明けた昼下がり。夢の中でコウという存在と記憶のすり合わせが行われたらしく、京矢は比較的落ち着いた様子でスイルアツカ達と向き合っていた。

長く本体から離れて活動していたコウは既に”コウ”としての自我が形成されるにまで至ったうえ固定化しており、本体である京矢の心の中では異物として負荷を生み出している。

心の中に存在する別人格と記憶に違和感を覚えて慣れない本^{京矢}体。放つて置いても自然に消える可能性はあるが、負荷でどうにかかなりそうというのが京矢の抱える現状であった。

京矢が握る召喚石を通して伝えられたコウからの文字メッセージで事態を把握するスイルアツカ達。

「そういう事だったのか……」

やはりコウをいきなり会わせたのは軽率だったと改めて反省する
スイルアツカは、なんとか分離できないだろうかとお抱えの呪術士
も交えて話し合う。しかし、精神の移動など心の深遠に干渉するよ
うな分野はお抱えの呪術士にとって専門外で荷が重い。

そういった降霊術の類は祈祷士の方がより精通しているので、得
意な者も多いのではないかと進言が向けられた。

「祈祷士か……」

「また、エイオアから呼び寄せますか？」

エイオアの祈祷士で最初に思い浮かぶのは”京矢^{かれ}”の状態を一目
で見抜いたリンドーラだが、彼女には何か隠し事をしている節が見
られるので京矢とコウの事は知られたくない。スイルアツカ達がそ
んな事を思っていた時

”リンドーラさんなら力になってくれると思うよ”

スイルアツカ達の思考にリンドーラの名と彼女に対する疑惑
の想いを読み取ったコウがフォローとお勧めの提案をした。

「あの祈祷士と面識があるのか？」

”リンドーラさんは初めてボクをみつ付けてくれた人だよ”

バラッセのダンジョンで魔獣犬に憑依していた時の出会いを掻い
摘んで説明するコウ。魔獣犬の中にコウの存在を見抜き、祈祷士の
アミュレットという貴重な品を預けた事で、コウに人と接する機会
を大いに増やしてくれた人物でもあるのだ。

「そうだったのか……」

コウのお墨付きなら信用できる。そう判断したスイルアツカはリンドーラを呼んで彼女に相談する事を決めた。現在ナツハトムはグランダールとの休戦交渉に動いており、グランダール側も応じる構えを見せている。

まだ戦時下にある今、エツリア宮殿には各支分国から王族や大使達が多く集まっているが、休戦に入れば半数近くは帰国してしまうだろう。国内が通常体制へ戻る前にコウの能力で彼らを見定め、敵味方の判別をしておきたい。

その為には一刻も早くこの事態を解決しなければならないのだ。

コウの光文字とスイルアツカ達が話している間、京矢はただ静かに心の奥に向けて意識を集中させていた。

自分の中に生きる別の存在、自分の可能性の一つだというコウ。元が同一であった為か、コウに意識を向けて集中すればコウの持つ知識や思っている事が何となく分かる。

知らない筈の事を何故か知っているかのような、既視感デジャビュをもっと強くした違和感。スイルアツカ達の話している言葉やコウの描き出す文字が何を表しているのかなどは相変わらずサツパリ分らないが、コウの意識から大体の意味をニュアンス的に感じ取れるのだ。

夢の中でコウと記憶のすり合わせが行われた時、ある程度まで落ち着いて受け入れる事が出来たのは、その記憶の中に自分と似た境遇の人物が居たからだ。今はグランダールという国で割と平穩に暮らしているらしい沙耶華という名の日本人。

「はあ……日本語が恋しい」

何でもその国の王子様に見初められているそうだが、一度会って話をしてみたいなあところっそり溜め息を吐く京矢なのであった。

そんなやり取りがあつてから四日後、急遽エイオアから呼ばれた祈祷士リンドーラは十数日振りにエツリア宮殿の離宮を訪れていた。アルメッセの街に潜んでリンドーラの動向を監視していたナツハトームの密偵が使者を名乗って彼女に接触、半ば攫う様な勢いで機械化輸送戦車や機械化自走船を駆使して巨大湖を渡り、昼夜を問わず荒野を駆け抜ける強行軍で呼び寄せたのだ。

当初、アルメッセの街の路地で『至急コウの事で助けが要る』と行ってナツハトームへの同行を要請されたリンドーラは、コウと異世界人の関係を知る自分の口封じに来たという可能性も視野にいれて警戒していた。

少々強引で迅速に且つ丁寧に、そして秘密裏に、恐らくはナツハトーム軍の持つ機動力を最大に使った輸送態勢で運ばれ、訝しみ、面食らいながら再び離宮の奥にある部屋へと招かれた彼女は、そこで意識の戻った異世界人、京矢と顔を合わせた。

「これは……」

「分かるか？」

京矢の中にコウの存在を感じ取り、遂に本体への帰還を果たした

のかとナツハトームの脅威増大を懸念するリンドーラは、京矢コウに話し掛けようとして違和感に気付く。

「彼は……コウではない……？ でも確かに……」

” リンドーラさん ”

京矢の事をコウの気配は感じるものの明らかに別人であると認識したリンドーラが戸惑いの声を上げた時、京矢の握る召喚石から光の文字が浮かび上がった。

「なるほど、そんな事になっていたのですか」

コウから直接光の文字と思考の交感による説明を受けて状況を把握したリンドーラは、内心コウの情報をまだ評議会ウツギに報告していなかった事にホッと胸を撫で下ろす。

エイオア評議会としてのナツハトームに対する立場は変えられないが、コウがスイルアツカ皇女の事をそこまで買いたずらっているなら、徒に脅威論を強調して不安を煽ることは無い。

「貴女の方でコウとキョウヤを何とか分離する事は出来ないだろうか？」

「そうですね……条件次第では可能かもしれません」

少し調べさせて頂きますねと祈禱術を行使したりンドーラが京矢と向かい合った。コウと京矢がどの程度融合し、また独立した状態を保っているのかを精神エネルギーの質や量で推し測る。

その結果、コウは言わば京矢が記憶喪失状態に陥った場合に生まれられたかもしれない人格である事が判明した。

何故そうなったのかは不明だが、元々の肉体から離れて精神のみがダンジョンで目覚めるという特殊な状況が精神性の無垢さを保ち、本来の身体に影響を受ける事もないまま”コウとしての意識”が確立されていった。

子供のような幼い反応を示す性格と分別ある理性的な思考に見られる精神年齢のちぐはぐさも、元々内在している京矢の知識をベースに形成された人格を核としつつ、目覚めたばかりであるコウの意識が混ざった状態で安定したのが原因のようだ。

「私の問い掛けが分かりますか？ キョウヤ」

「えーと わかる、おもい、つたわる、コウから」

根源部分でコウと繋がっている為、集中すればコウの持つ知識や経験も既視感を強くした感覚である程度まで自分の知識として扱う事が出来る。京矢はかなりの片言だがリンドーラの問い掛けにこの世界の言語を使って応えた。

上手く伝わらない部分はコウが意識の奥からや光文字などで直接フォローしてくれるので、手探りのような状態ながら京矢とリンドーラの対話は比較的スムーズに行われた。そうして幾つかの質問などで京矢とコウの在り方を確認したりンドーラは結論を示す。

「分離は可能です」

「おおっ 出来るのか」

京矢がコウの存在を自身の心から分裂した”部分”であり、自身の”分岐的存在”として認識して認めたことで、コウは根源部分を京矢と共有しながらも単なる別人格として京矢の中に取り込まれること無く同時に存在しているのだから、根源部分を完全に切り離すことは無理でも”コウの部分”のみを抽出して別の入れ物へと移す事は出来る筈。

具体的な方法としてはコウが入っていた召喚獣の召喚石が残っているので、まずこれを起動させて暫定的なコウの入れ物に使う。

本体である京矢がリンドーラの祈禱術による精神介入に協力する事で、”分離したコウの存在を容認する”という明確に意図した精神的な”蓋”を設けてコウを再び自身の心に取り込んでしまう事の無いように処置を施して貰うのだ。

「何か準備に必要なモノは？」

「いえ、特には。条件は全て揃っていますので、直ぐにでも儀式に取り掛かる事は出来ます。後は彼自身の決意だけですな」

ベッドに半身を起こす格好で座ってボケーっとした雰囲気醸し出している京矢と向かい合い、腰を落として視線を合わせたスイルアツカはゆっくりと語り掛けた。

「キョウヤ、お前にとってはまだ突然の事で戸惑いを感じているだろうが、どうか聞いて欲しい。私にはコウの力がどうしても必要なのだ。我が国でのお前の生活は私が保証しよう。お前とコウを分離する為、彼女の儀式に協力してはくれぬか？」

「いいことで、ことわらないりゆうも、ないことに」

”『いいですよ、断る理由もないですし』って言いたいんだよー”

京矢の変な返答とコウの光文字フォローでちよつと吹き出しそうになりながら、『そうか』と嬉しそうな表情を向けるスイルアツカ。ちよつとドキリとした京矢は、コウに筒抜けである事を思い出して平静を装った。それも筒抜けなので意味はないのだが、気分の問題だ。

本人達の同意が得られた事で精神分離の儀式が試みられる事になり、人払いがされた部屋には必要最低限の者だけが残った。

コウの魔力をもって長く使われていた召喚獣の身体は、コウ自身が馴染んでいるであろう事も成功の確率を上げる要素になる。リンドーラはそう説明すると、京矢から受け取った召喚石に魔力を流し込んで石に刻まれている召喚獣を喚び出した。

数日ぶりに”少年コウ”の姿を目にしたスイルアツカが安堵にも似た想いに表情を崩すが、直ぐに気持ちを引き締める。

召喚石から溢れ出る光が人の姿を形作り、やがて一人の少年を出現させるという現象を目の当たりにした京矢は知識としてコウの記憶から知ってはいたものの、生まれて初めて見る本物の魔法に驚きを隠せない。

自分が本当に異世界に居るのだという事を強く実感する。だが、京矢にとつて”別世界”に関する驚きはそれだけで済まされなかった。

「……………え？ いまはなに？」

”『え？ 今なんて？』って言ったんだよー”

リンドーラから示された儀式の方法に思わず聞き返す京矢と、交

信用に用意された別の魔術触媒からフオローするコウ。召喚獣の中へ吐き出す形で京矢からコウを分離する。その方法として口移しを使う。

もつと単純に肉体的な繋がりを使った方が安定して且つ確実に手っ取り早いのだが、この召喚獣は少年型おとこのこに調整されているので京矢の性別にも配慮して接吻による肉体結合で精神の通り道を作るのだ。

ベッドで隣に横たわる少年型召喚獣を前に混乱している様子の京矢を余所に、召喚獣の状態を調べていたリンドーラは『あら？』と何かに気付くと、再び魔力を通して調整を図った。

人型の召喚獣が身に纏う衣服はそれ自体も召喚獣の外観を繕う身体の一部であり、幾つか種類が登録されていれば魔力の接続を切り替える事で衣服も簡単に変更する事が出来る。勿論、普通に人の着る服で着せ替えをする事も可能。

少年型召喚獣に登録されている外観の衣服はグラランダールで一般的な街服と貴族服、それに女物のドレスが一着混じっている。元が女性型召喚獣だった名残であり、アングギー博士が面倒だからと書き換えずに放置したモノだ。

「ちよっ　なんで、ドレス姿！」

「雰囲気であるかなと思ひまして」

「だす、ない、よいのこと」

”『出さなくていいです』って言ってるよー”

ぼんやりとしたと表情でベッドに横たわるドレスを纏った黒髪の少女、に見える少年型召喚獣。元が奉仕用に作られた女性型召喚獣の人気モデルだけに、その容姿は可愛らしさと美しさを兼ね備えた少女と女性の間にある独特の雰囲気醸し出している。

『う、この子にキスするのか……？ みんなの見てる前で……？』

精神介入の術に集中している祈祷士リンドーラと、少し下がって儀式の様子を見守っている皇女スイルアツカ。その後ろで静かに控える側近の侍女ターナトーリア。他、ターナの直屬らしき侍女と使用人が数人、部屋の壁際に並んでいる。

ごく普通の一般人である京矢は他人の気配を読み取るというような特殊な技量など持ち合わせてはいない。だが、それでも分かる。この部屋にいる彼女達皆から注目を向けられている。興味深そうな視線をひしひしと感じ取れるのだ。

単にテンパった精神状態からなる自意識過剰がなせる錯覚かもしれないが。

「あ、もしかしてキョウヤの国では接吻が重要な意味を持つのか？」

随分と躊躇する様子を見せる京矢に、スイルアツカが心配して声を掛けた。宗教的な理由などで接吻に重大な意味を持つなら、世界の違いを理由に改宗する事を勧めるといふ。

ナツハトームは性に関して大らかというか、余所の国からは節操がないと揶揄され兼ねないほど奔放な所があるので、もし貞操観念の高い国出身だったのであれば今後の生活にも色々と配慮を検討しなければと考えるスイルアツカ。

『極めて個人的な理由です』とコウに伝えて貰った無宗派な京矢は、ここは腹を括るしかないと言った。皆に見られるのが恥ずかしいからと尻込みする方がもっと恥ずかしい。

恥ずかしさで言うならここ数日の間に教えて貰った自分自身の方が遥かに高い威力を誇っていた。

古い遺跡で倒れている所を発見されたらしいのだが、こちらの時間でおよそ一年近くこの離宮の奥部屋で眠り続けていた間、あらゆる生命活動のお世話を使用者のお姉さん方にして貰っていたのだ。流動食の摂取や身体を拭くといった事から排泄の処理に至るまで、それはもう赤ん坊の世話をするが如くである。恐らく見られていない箇所はないだろう。

とにかく、コウと分離しなければ精神的な負荷がキツくて普通に過ごすのも厳しく、色々とお世話になっているスイルアツカ達も困るのだ。よしつと気合を入れた京矢は横たわる召喚獣をそつと抱き起こすと、横抱きにして顔を近づけた。

体温は高めでちゃんと呼吸もしており、僅かに開かれた小さな口から吐息が聞かれる。幼さの混じる容姿とぼんやり見開かれた虚ろな瞳に何だか背徳的な感覚を刺激されながら、そのふつくらとした唇に自身の唇を寄せていく。

「あ、舌は入れなくても大丈夫ですよ」

「入れません！」

集中していた為か、コウのフォローが必要ないほどスムーズな現地語で突っ込めた京矢であった。

口付けた瞬間、身体中に電流が走るような衝撃を感じた。苦痛がある訳ではないのだが、まるで血流が猛烈な勢いで全身を駆け巡るような、興奮状態にも似たなんとも形容しがたい躍動感。

耳鳴りに混じって聞こえるリンダーの『そのまま結合を維持してください』という指示に従い、抱き寄せた召喚獣の身体をしつか

り支えて接吻を継続する。時折喉を鳴らす音が聞こえるが、とりあえず今は気にしない。

やがて意識が浮き上がるようなふわりとした感覚に包まれると、胸の辺りから何かが流れ出て行く感触。船の甲板上に束ねられた口ブが凄いい勢いで海の底に向かって伸びて行くようなイメージなど思い浮かべながら、京矢はひたすら体勢の維持に努めた。

「貴方とコウを隔てる蓋を設けます。コウの事を強く意識して下さい、コウはキョウヤの事を」

京矢とコウがそれぞれ別個に存在する人間であると互いに意識する事で明確に人格を寄り分け、そこに精神介入の祈祷術によって楔を打ち込む。これが”蓋”である。

暗示のようなモノだが、両者の了解の下に立てられた楔は精神領域での境界線を示す標識として深層意識から認識される。この蓋は両者の意識が無差別に混じる事を防ぎ、京矢の人格とコウの人格を根源から枝分かれした状態で確立させるのだ。

「……はい、もういいですよ。処置は無事に済みました。これでコウがキョウヤに吸い込まれる事もなくなる筈です」

リンドーラの声にホツとしながら”肉体結合”を解除する京矢。長い接吻の影響で引いた糸は素早くシートで拭き取ってそ知らぬ顔をする。壁際の使用人さん達からの視線も気にしない。一気にしない。と頬が熱くなるのを誤魔化していた京矢だったが

「はあ……そういえばボク、男の人から口にちゅーされるのって初めてだよ」

まだ横抱きになっていたドレス姿の黒髪な少女にしか見えない

少年型召喚獣のコウが、ぼんやりした虚ろな瞳ではなく、ほんのり上気した頬に潤み掛かった瞳で見上げながら、先程まで口付けていた唇を指でなぞって見せた。

ちなみに”上気した頬”や”潤んだ瞳”はこの召喚獣かいだの仕様上の機能であつて、コウの意思とは関係なく肉体への干渉で発動する演出効果である。コウの記憶知識から一応その事も知っている京矢だが、想像するのと実際に見るのでは結構違うモノだ。

壁際の使用人達の視線が一層強まり、コウが戻った事を確認して喜んだスイルアツカは何となく声を掛け辛そうな雰囲気を感じながら今後の予定等をターナと話し合っている。ちらちらと視線を向けながら。

とりあえず、京矢はベッドに備え付けられている大きな枕に頭を突っ込んでジタバタした。

こうして、コウと京矢はそれぞれ別々の人生を歩み出した。見た目も性格も年齢すらも別人に見えるが、実質”魂の双子”と呼べる存在としてこの世界を生きる事となつたのであつた。

52話：帝都の街並み

リンドーラが帰国の途に就き、グランダールとの休戦協定が結ばれる兆しも明確になり始めた今日この頃。エツリア宮殿では噂の冒険者ゴーレムな従者コウを引き連れたスィルアツカ皇女が、各支分国の王族や大使達と個々に歓談する姿が垣間見られていた。

戦果報告の日から従者コウの姿を暫く見掛けなかったのは急激な環境の変化で体調を崩していた為、離宮で療養していたという事になっている。京矢の事はまだ公表されておらず、最近目覚めた事は離宮周りに勤める一部の人間にしか知られていない。

国内が通常体制に戻って落ち着く頃を見計らい、コウの敵味方判別によるスィルアツカの人材選定巡りが一段落してからそれとなく機械化技術発展の貢献者として発表する予定だ。

それまではスィルアツカ皇女が離宮に住まわせている”謎の客人”という立場で、なるべく素性を隠しておく方針がとられていた。

全体的に白っぽい砂色の建物が連なり、とにかく砂に覆われている雰囲気の特徴であるナツハトームの街並み。水源に近いエツリアはそれ程でも無いが、砂塵が舞い込まないよう低い建物には窓が少なく形や構造にも工夫がされている。

住人が窓から外の景色を眺めるといった光景は相当高い建物の上階にしかみられない。

「水の 問題か」
「ちかくに建てないところがあるんだって」
「けど、ちかくに建てると があるんだって」

離宮の屋上から帝都エツリアの街並みを眺めながら語らうコウと京矢。二人が会話をする時はこの世界の言葉と日本語が混じりながら更に幾つか言葉が省略されたりするので、傍から聞いていると訳がわからない。まるで暗号を使った会話のように聞こえる。

言葉が省略されるのは思考を部分的に共有して伝えたい内容が直接イメージで伝わる為、態々言葉にして表現する必要が無いからだ。別個の存在として分離した二人だが、根源部分は一つであり互いの意識は深層で繋がっている。

お互いに意識を向け合う事で、精神領域に楔として打ち込まれた境界線を示す標識である”蓋”を越える事無く、相手の領域へある程度の干渉を行う事が出来る。少々変則的な以心伝心を体現している状態なのだ。

会話の全てを意識の伝達のみで行う事もやろうと思えば可能だが、やはり言葉での会話は生きて行く上で必要であり、京矢もコウも人間である以上、人としての感覚で”言葉を使つての会話”は大事にしたい。 人で無くなればどうなるか分からないが。

今話題にしていたのは機械化技術の発展に伴う水の汚染問題と、技術の秘匿を維持する上で兵器工場を街の近くに建てなければ都合が悪いのだが、街の近くに建てると水源汚染の問題があつて工場を増やす事が憚られる。

しかし工場を増やさなければ生産力の問題で軍の機械化部隊を満足な状態に維持できない。スィルアツカ達は何処で妥協すべきかという悩みを抱えているらしいという内容であつた。

「技術を盗みに来る奴って、やっぱマーハティーニって所からなのか？」

「スイル達はそうおもってるみたいだよ」

「ふーん…… ナツハトームって昔のソ連みたいだけど、あんまり結束してない国なんだな」

「みんな一番になりたいんだよ」

マーハティーニは豊富な鉱山資源を背景にその資金力を持って国内での勢力を伸ばしている。恐らくナツハトームでは最もお金持ちの国と言えるだろう。

食糧事情と水の問題、それに今は機械化兵器による軍事力の差で宗主国の座はエツリアに一步譲っている形だが、機械化兵器の生産に必要な資源産出はマーハティーニが一手に握っている状態。

スイルアツカからは策略家の狸親父と評されているレイバドリエード王の政策で高給と高待遇を餌に帝国中から呼び集めた多くの技術者を囲い込んでおり、鉱山の効率的な採掘に必要だとしてエツリアに機械化技術の提供を求めるなど、着実に国力の増強を図っている。機械化技術、特に兵器関連の流出はエツリアにとって死活問題でもあるのだ。

「ま、俺は一般人だしその辺りの事情は傍観するしかないけど、やっぱり世話になってる国には頑張っただけで欲しいわな」

「しかつ問題だもんね」

そろそろスイルアツカ達が日課の公務を済ませて迎えに来る頃だろうと建物の中に戻るコウと京矢。すると丁度、廊下に出た所でこちらに向かって歩いてくるスイルアツカとターナの姿を見つけた。

「コウ、キョウヤも一緒か。また街の様子でも眺めていたのか？」

「こんにちは」

「ちよつとむずかしいお話ししてたんだよ」

最近の二人の生活はコウがスイルアツカ達と宮殿内で偉いさん巡りをしている間、京矢は離宮の奥部屋で言葉の読み書きを勉強したり、各国の風習や情勢などこの世界に関する知識を学んでいる。

コウが今まで見聞きしてきた記憶による補正がある為、京矢の異世界学習は比較的スムーズに進んでいた。

「グランダルとの休戦が決まった。ついでにはキョウヤ、近く調印式に国境回廊の砦まで出向くので一緒に来ると良い」

宮殿を空ける事になるのでその間に”謎の客人”への探りを入れられないよう連れて行くのだ。調印式を終えて帰国する頃にはエツリアに集まっている各支分国の大使達も半数以上が自国に戻っている筈なので、そのタイミングで京矢の事を発表するのだという。

例の書物に関しては既に”あれは異界の兵器を記した書の類ではなくゲームの攻略本と解説本である”という事を話してある。

あまり上手く伝わらなかつたが、本に描かれている兵器類はほぼ架空のモノである事、ただし実在する兵器が基本モデルになっている事も上げ、現在のナツハトームが誇る機械化兵器は良い感じに京矢の知る現代兵器に似ている事などを伝えていた。

兵器類の進化によって戦術も大きく変わっていった歴史なども一般人が知る程度の浅い知識だが披露し、魔導兵器を導入したグランダールの戦術変化に通じる部分があるとスイルアツカから関心を向けられている。

機械化戦車の構造を見るに、本に描かれてる絵では伝わらなかつたらしい”無限軌道”^{キャタピラー}についての何気ない指摘が新型機械化戦車や新型滑走機開発構想に繋がるなど、京矢も”単に異界の書物を読めるだけでコウのオマケ”というような扱いにはならず、スイルアツカから一定の信頼を得るに至っていた。

「それじゃ俺はまた部屋で待機してるよ」

「うん、また後でね」

「では行くか。今日の相手は北西にある小国の王子だが、マーハテイーニに近い国だから向こうとの繋がりがあつてもしれん相手だ」

すっかり意識調査を頼むぞと、何時ものようにターナの隣へ従えて宮殿の広間へと向かうスイルアツカ。コウを連れたスイルアツカ達のやりとりはコウと意識の繋がりを持つ京矢も大体把握していた。部屋で特に何もする事がない時などは、離宮の限られた範囲内を散歩して気分を紛らわせる他に、コウの意識から情報を読み取って暇を潰すというライフスタイルが確立されている。

年頃の若者という事で退屈しのぎに閨の相手を都合してくれるという話もあったのだが、まだまだ馴染みきれない異世界での新しい生活で怠惰の機会を与えられると、色々ダメな人間になりそうだったので断った。

勿論、京矢も健康な若い男児であるからして、もう少し気持ちに余裕が出来たならばと、そういう遊びにも興味はあつたりする。

「俺も早く慣れないとな……」

通路の先にさり気無く立っている使用人を視界の端に捉えながら呟く京矢。一見普通の使用人に見える彼女達は、ターナトリア直

属の部下で、護衛兼監視役も担っているのだ。

こちらに視線を向けてくる事はないが、気配でこちらの動きを察知している事はコウの意識経由で知っている。

人間関係で色んな事が透けて見えるこの能力、常に相手の真意を測る事が出来るので便利ともいえるが、他人の胸の内など知らないでいる事の方が如何に楽であるかという事も実感する京矢なのであった。

エツリア宮殿上層階の一角。各支分国の王族や大使が滞在する際に使われる部屋の一室にて、日除けの布に濾された太陽光の欠片が薄暗い部屋の床で白く輝きながら揺れる。そんな幾つかの光の欠片が豪華な天幕付きベッドで絡み合う若い男女にも降り注ぐ。

ベッドに横たわっている大柄な男は、自分の上に跨って唇に吸い付いている少女の肩を掴むと、そっと引き剥がしに掛かった。貪るように吸い付いていた少女が不満そうに文句を垂れる。

「どうして止めるの？ キスまでは許すって言ったじゃないっ」

「許した範疇を越えてるだろうこれは」

もう少し自重するように促しながらやれやれと身体を起こした彼、デイドルバード王子は、とりあえずその胸を仕舞いなさいと妹姫メルエシードの淫らにはだけられた胸元を整えた。

ナツハトームは帝国に属する大多数の国家も含め概ね性に大らかで、地域によつては近親婚、同性愛も珍しくない。

極端な例を上げれば、自分の娘に産ませた娘の娘を嫁にしたような富豪もいる。帝都エツリアはそれ程でもないが、マーハティーニなどは例に洩れず、ナツハトーム領でも西の地域へ行くほど開放的な傾向が見られるようだ。

そんな土地柄の影響もあつてか、王女メルエシードは物心がついた頃より兄のデイドルバード王子を慕い、関係を迫っては宥められている。

デイドルバード王子はその魅惑的な容姿ゆえに幼少の頃から男女問わず色欲の目を向けられていた事もあり、そういった情事の絡む事柄に対しては冷静に対処する術を身に付けていた。

さつさと身支度を整えて部屋を出て行くこととするデイドルバードに、ベッドでぺたん座りしているメルエシードは頬を膨らませる。「むう」

「俺は明後日の夕刻にはマーハティーニに帰国せねばならん。また反乱軍共が暴れているらしいからな」

「そんな他の將軍に任せとけばいいのに」
「そういう訳にもいかんだ。分かっているだろう？」

反乱軍はナツハトーム内でデイドルバード王子の功名を稼ぐ為の良い標的となつている。情報が入れば近くに他の將軍がいても監視させておくに留め、王子の到着を待つて征伐に乗り出すのだ。

当然、征伐軍の動きが遅くなればそれだけ勘付かれて逃げられる確率も高く、反乱軍は何時まで経つても数を減らさない。

だが、これらの事情に隠された裏の意図を知るのはマーハティー

二でも極一部の幹部のみ。マーハティーニをナツハトームの宗主国に押し上げ、デイドルバード王子を次期皇帝の座に就かせようと目論むレイバドリエード王の策略の一環である。

「あまりスイル達に迷惑を掛けるんじゃないぞ？ それから、あの従者の少年には気をつける」

まだ暫くエツリアで滞在する事になっているメルエシードを残し、デイドルバードは反乱軍の征伐に向かうべく宮殿の部屋を後にした。一人残されたメルエシードは暫くベッドに突っ伏していたが、やおらむっくり起き上がると気晴らしに庭園へと足を向けるのだった。

高い塀に囲われた宮殿の敷地内には外界から隔離された空間ともいえる庭園が設けられており、砂漠地帯であるナツハトームではあまり見る事が出来ない色とりどりの花々や木々が植えられている。

砂色の街が広がる外とは対照的に緑溢れる鮮やかな風景。これも水源が豊富なエツリアだからこそ維持できる景色であった。

メルエシードは谷と岩山ばかりが目立つ祖国マーハティーニの景色にも特に不満はなかったが、この庭園だけはエツリアを羨ましいと思うほど気に入っていた。特に花々の間をヒラヒラと舞うように飛ぶ美しい羽色の虫が好きだ。

「ああー……捕まえて髪飾りにしたい」

何度か捕獲に挑戦して駆け回った事もあるのだが、ヒラヒラ躲さ

れてどうやっても捕まえる事はできなかった。

大きなお皿を重ねたような噴水から流れ出る水が小川に見立てた水路を満たし、風に散らされた花びらなど浮かべては太陽の光をキラキラと反射している。

水面からの照り返しを浴びながら水路沿いを歩いていたメルエシードは、ふと、庭園を横切っていく小さな影を見掛けた。

スイルアツ力達と支分国の偉いさんに会う仕事を終えて離宮へと戻るコウ。結局コウの住む場所については京矢の事もあり、近くに置いた方が色々と手間も省けるとして同じ離宮に部屋を用意して貰っている。

コウと京矢の対話は深層意識レベルで双方の想いが伝わるので、京矢がこの世界に馴染むに当たってコウがこれまで経験してきた様々な出来事の知識が非常に役立つ。

また、京矢が学習した内容もコウの知識に反映される為、二人が共に別個の存在として生きる今の状態はある意味、とても効率の良い在り方だった。

「コウくん」

「うん？」

名前を呼ばれて振り返ると、庭園の中程から手を振っている少女の姿。金髪のツォーテールを揺らして小走りに駆けて来たのはマーハティーン二の王女メルエシードだった。

「いま何してるの？ スイル姉さまは一緒じゃないんだ？」
「今日の仕事がおわったから離宮に帰るところだよ」

先日、廊下で初めて顔を合わせた時から偶に宮殿内で見掛ける事もあったが、何れも公務中のスイルアツカと行動していたり、自身の方に急ぎの用事があったりして中々話をする機会が得られなかったというメルエシード。

人懐っこい無垢な笑顔を向けて来る彼女の内心では、やはり自分の影響力をねじ込んで置くべきだという企みが蠢いていた。

スイルアツカからは随分と目を掛けられ、エツリアの有力家からも受けが良いと見られるコウ。

その外見こそ”ちっちゃくて女の子と見紛うような容姿で人畜無害そう”な雰囲気醸し出しているが、初対面で『君、美味しそうな匂いがするね？』とか『唇に甘いお砂糖でもついてる？』などと妖しげなアプローチを仕掛けてくる推定誑しである。

「ねえ……わたし、あなたの事をもっと知りたいわ。お話ししましょう？」

あの時は油断していたので不覚をとったが、今回は初めから誘惑モードで挑む。

兄デイドの未だ煮え切らない態度で不完全燃焼な気持ちも燻って欲求不満気味なメルエシードは、有力家に仕える従者や使用人達を何人も虜にしては落として来たコケティッシュスマイルで身体を寄せた。

「さつき蜜和えのお菓子を食べてきたの。まだ唇に蜜がついてるかもね？」

クスツと悪戯つばい笑みなど浮かべてしなを作る。乗ってくれば良し。乗って来なくても先日 of 意趣返しが出来た事に溜飲を下げられるというモノだ。何でも良いので弱みを握れば、そこからはエツリアに構築した情報源の一つとして使っていける。

スイルアツカ皇女の従者という立場なら引き出せる情報も重要なモノが期待出来る。だが、コウはメルエシードの誘惑に表情一つ変えず、こんな事を言った。

「メルはデイド王子の事が好きなんだね」

「え？ え、ええ……デイド兄さまの事は好きよ？ 兄妹ですもの、普通でしょ？」

「だからスイルに嫉妬して邪魔するの？」

「っ！」

メルエシードの媚びた瞳が一瞬見開かれると、警戒の色を浮かべて鋭い眼つきに変わる。

デイド王子がスイルアツカに対して政治的な意味合いだけでなく、少なからぬ好意という想いも持ちながら接している事を知るメルエシードは、スイルアツカに強い嫉妬心を懐いていた。

父王の言いつけに従ってスイルアツカの動向を探ったり、纏わり付いて微妙に行動を阻害したりという行為は、そういう理由からによる意図的なモノだったのだ。

「……スイル姉さまはワザとらしいのよ。男嫌いだなんて噂を流してる癖に、将兵には媚びちゃってさ」

ナツハトームでは一般的に”女性はより多くの男と経験を重ねている女ほど魅力的である”とされる。

しかし、皇女のような一種アイドル的立場にある者はそうだった

経験に疎いほうが好ましく思われた。理由は”より良い女”として成長し、魅力を磨いていくその過程に自分という存在を刻む事が出来るから。

普通の街女で経験の少ない娘を相手にするのは面倒くさいが『皇女のような高貴な娘の手解きをして女としての成長に絡む事ができるのは男冥利に尽きるじゃないか』というのがナツハトームの一般的な男性が持つ女性と性に対する価値観なのだ。

「デイド兄さまも、今まで周りにスイル姉さまみたいな女がいなかったから騙されてるんだわ」

「スイルは皇帝になる人だよ」

「へえ、従者らしいコトいうのね……でも普通”スイル様”でしょ。主人を呼び捨てなんて、あなたスイル姉さまとどんな関係なのかしら」

「ボクはスイルさまの手伝いをしに来たんだ」

完全に猫を被ることをやめたメルエシードの指摘を素直に学習したコウは、意識の奥で京矢が呼んでいる事を感じ取ると早めに会話を切り上げて離宮へと向かう。

『またねー』と去って行くコウに、なんだか適当にあしらわれた気がして不満を募らせるメルエシード。

「……ふんだつ　なによゴーレムの癖に」

唇を尖らせながら腹いせに小石など蹴飛ばしてみると、一緒に舞った芝草が水路に落ちて離宮のある方へと流されていく。

『そういえば』と、最近スイルアツカ絡みの噂で聞いた”離宮に

謎の客人を住まわせているらしい”という話を思い出す。コウが去っていった方向に視線を向けながら、彼は”謎の客人”にも関わっているのではないだろうかと推察する。

スイルアツカが隠す人物　なんらかの重要な秘密があるに違いない。

「よーし……」

それならば是非とも探ってやろうと動き出したメルエシードは、少し離れた先で森をイメージした木々の扉に囲まれる離宮を見上げながら、獲物を狙う猫のような表情で口元に笑みを浮かべたのだった。

「あっ！　　そういえばあの子、わたしの事”メル”って呼び捨てしてた！」

さり気なく愛称で呼ぶなんてやっぱり誑しっ子だと警戒を新たにするメルエシードなのであった。

53話・翠色の月（前書き）

挿絵テスト入り。この章は京矢に焦点を当てています。

53話・翠色の月

離宮に戻って来たコウが京矢の部屋になっている奥部屋を訪れると、寝室の隣にある部屋の机で広げられた紙に何やら書き込んでいる京矢が顔を上げた。

「よっ 来たか」

「きたよー。どうしたの？」

「いや、ちょっと聞きたい事があったさ」

コウの記憶漁りをしていた京矢は、コウが破壊した”生命の門”絡みでバラツセのダンジョンから大量の骨が高級触媒として採集されている情報を読み取り、触媒についてももう少し詳しい情報が欲しいと頼んだ。

記憶を深層意識レベルである程度共有しているとはいえ、何処にどんな知識が記憶されているのかまでは分からないので”目当ての知識を思い出す”という事が難しい。簡単なフレーズを度忘れしてしまっても思いつけなくなる感覚に似ている。

こういう場合はその知識を記憶した側が強く意識する事で関連する情報の記憶が集まり、参照し易くなるのだ。

「……ふーん、なるほどな。って事はこれ、他の街の決定次第でかなり動くんじゃないか？」

各街のダンジョンに関する状況や触媒に関するコウの知識から、京矢は近々触媒骨に値崩れが起きたり反動で高騰したりするんじゃないか？ と興味を持った。値崩れは既に起きているかもしれない。

「冒険者協会に行けばもつと詳しく分かるとおもうけど、エツリアには正式な支部が無いみたいだよ」

エツリアで冒険者協会の情報を仕入れられる有力家といえば、古代遺跡の研究などをしている考古学者をお抱えの魔術士に持つルツカブルク卿辺りが最も確実な所だ。

「あゝあの人か、なんか気難しそうだよな」

「影で苦労してる人みたい」

頼んでみようか？ と訊ねるコウに宜しくお願いする京矢。一応スイルアツカの許可を得てからでなければ勝手に動くとは問題があるので、明日あたりにも宮殿でルツカブルク卿を尋ねて冒険者協会の最新情報を仕入れられないか頼んでみる事になった。

その夜。

「コウにルツカブルク卿と交渉するよう頼んだと聞いたのだが」

昼間の件で奥部屋にやって来た少々顔色の険しいスイルアツカから質問を受けた京矢は、そんなに深刻な内容ではないのだと苦笑交じりで事情を話す。

今後の状況によっては触媒の値段が大きく変動するかもしれない

ので、うまくいけば儲かるかもしれないという思いつき。

基本、読み書きの勉強以外にこの国の習慣とか近隣国との情勢について少し学ぶくらいで他にやる事も無く、偶々興味湧いた事に手を付けてみた、という程度の気持ちからののだと。

「ナツハトムでも戦車の動力とかに魔法の触媒が使われてるみたいだし、研究用に確保しておいても良いんじゃないかなって」

「ふむ……あくまで冒険者協会の情報が目当てで、エツリアではルツカブルク卿に聴くのが確実だからという理由か」

コウから聞いた限り、ルツカブルク卿は敵では無いという事なので少しでも距離を近づけるには良い機会かもしれないと、京矢の提案に許可を出すスイルアツカ。だが、あまり目立つ行動は控えるようにと釘も刺しておく。

「まだお前は明確な立場すらも決まっていけないのだからな」
「ういつす、氣いつけます」

特殊な在り方でコウの補佐もあつたとは言え、僅かな期間にすっかり普通の会話も交わせるようになった京矢の何処かおどけた返答に、スイルアツカはやれやれと溜め息など吐いてみた。

異世界の教育レベルは相当に高いらしく、京矢もただの平民とは思えない程の聡明さと知性を備えているようだが、どうにも権力や野心といったモノに対する関心が低く、謀への警戒感が微塵も感じられない。

単に平民だからこそ権力闘争などに馴染みが無く、そういつた事柄への実感が薄いのかも考えられる。しかし、あまりに無防備だと宮殿に跋扈する有象無象の野心家達から直ぐに付け入られてしまふのではないかと心配になる。

「なんか溜め息吐かれてしまったぜ」

「お前が頼りないからだ」

「はつきり言われた！」

ガーンと頭を抱える京矢とそれを笑うスイルアツカ。常に一步下がった位置から二人を観察しているターナには、スイルアツカが楽しんでるように感じられた。随分と京矢に心を許している印象を受ける。

『顔も声も年齢も、何もかも違うのに……霧困気が彼に似ているからかしら』

ターナは少し昔の出来事、スイルアツカ皇女に仕え始めた頃に起きたとある事件を思い出しながら、和やかに談笑を続ける皇女殿下スイルアツカと異世界人を見守っていた。

深夜、スイルアツカ達も自室に引き上げ、静かになった奥部屋で一人ポーンと過ごしていた京矢は、寝付けないので屋上の空気を吸いに部屋を出た。

この世界で一年近くにも及ぶ眠りから目覚めて十数日、まだ体力が戻っていないとはいえ、日がな一日特に身体を動かす事もなく殆ど部屋に籠もりっぱなしな生活を続けていると何故か夜中に目が冴えてしまう。

「まあ、向こうでも大体夜型人間だったしなあ……」

テレビのような手軽な娯楽は無いが、コウが経験を重ねて来た冒険の記憶があるので静かな夜は小説を読むが如く記憶の海を漂い、様々な知識に触れる事で楽しめて来た。それでも限度はある。

「あゝ、思いっきり身体動かしてえー」

などと言いつつも屋上までの階段を十数段上っただけで既に息切れを起こしている京矢。ぜいぜい言いながら夜空を見上げると、緑掛かった大きな月がぽっかりと浮かんでいた。ちよつと色が違うだけでココまで印象が変わるものなのかと暫し見惚れる。

あまりに綺麗だったので今夜はもう少し夜更かしする事に決めた京矢は、更なる情緒を求めて離宮周りの庭園まで降りて来た。等間隔に並ぶ木々に囲まれた離宮庭園。屋上から眺める月明かりの街並みも良いが、庭園の並木越しに見上げる月も格別だ。

宮殿の敷地内には魔術式の明かりが置かれているので夜でも十分足元を見通すことが出来る。ちなみに、触媒を使う魔術式ランプはエイオア製のものと同グランドール製のものが普及しており、ナツハトームで使われている魔術式の道具は主にエイオア製品が多い。

「これで蛍とか飛んでたら完璧だな」

微かに聞こえる虫の音に耳を傾けつつ水路沿いを歩いていた京矢は、徐によつこらしよとしゃがみ込むとエメラルドグリーンに輝く水面の月に視線を落とす。『風流だー』などと浸っていたその時、

並木の間を覆うもっさりした草がガサガサと揺れた。

「ん？」

「あ……」

京矢が何だろつと注目を向けると、もっさりした草が割れて女の子が顔を出した。水面の月に似た翠色の瞳が瞬き、ツォーテールにした金髪が揺れる。暫し見詰め合う二人。

「あなた……もしかして、離宮の客人？」

先に沈黙を破ったのは女の子の方だった。草むらから這い出て水路をぴよんと飛び越えて来た彼女に、驚いた京矢は元々弱った足腰で不安定な姿勢をとっていた事もあってか、体勢を崩して尻餅をついた。

それを見た女の子はキョトンとした表情からジト目を向けて来た。『男の癖にひ弱そうで情けない』という感情がありありと表れている。

マーハティーン二の王女メルエシード。京矢はコウの記憶から彼女の事を知っていた。スィルアツカに懐いているように見せ掛けて、その内心は実兄への恋慕からスィルアツカに対する深い嫉妬心に満ちている。

宮殿に居る時のスィルアツカ程ではないが、少し露出の目立つ高価そうな衣服を纏っているメルエシードは尻餅について自分を見上げてている”謎の客人”と思しき異国人の青年に再度尋ねた。

「ねえ、あなたが離宮の客人なの？」

「え？ あ、ああ……うん、一応そうなのかな」

「なによ、はつきりしないわね……あつ そつか、秘密にしているんだものね。大丈夫よ、わたしはスイル姉さまと親しいから」

教えても叱られないわよと手を差し伸べながら微笑んでみせる。天使のような無垢な笑みなのだが、中身を知っている京矢からすれば小悪魔の微笑だった。

夜の庭園をゆっくり散歩しつつ、何処から来たのかとか、何をしているのかなど色々尋ねてくるメルエシードに、京矢はどう答えたモノかと困っていた。とりあえず、かなり遠い外国から異文化を学びに来たというような内容の返答でお茶を濁す。

「ふう〜ん？ でもそれならどうしてスイル姉さまは、あなたの事を秘密にしているのかしら」

「さあー……どうしてだろうねえ」

「ねえ……あなた、ほんとうは一年くらい前からずっと眠り続けているって言われてた異世界人じゃないの？」

「ぶっ」

あまりにピンポイントな指摘に思わず吹き出す京矢。その反応で全てを悟ったメルエシードは『やっぱりそうなんだあ』と興味津々で詰め寄って来た。

眠れる異世界人の話は各支分国の上層でも真偽を交えながらそれなりに知れ渡っており、エツリアの誇る機械化兵器は異世界人の持ち込んだ資料を参考に造られているという事は色々な筋から洩れ伝わっているのだ。

「いや、その……」

「そっかあ、それならスイル姉さまが隠したがるのも当然ね」

しどろもどろな京矢にそう言っただけで納得してみせるメルエシードは内心で『これは大当たりだ』と興奮しながら、京矢に対するアプローチを”諜報”から”誘惑”に切り替える。

この見るからに気弱そうな線の細い男、今までの経験上こういうひ弱な男にはこちらから甘えるよりも優しくして甘えさせてやればイチコロだ。ナツハトムでそれなりの力を持つ国なら何れも欲しいが機械化兵器の情報。その秘密を知るであろう異世界人。

味方に引き込む事が出来れば得られる益も大きいだろう。

『あの誑しっ子な従者よりよっぽど役に立ちそうだわ』

与し易し相手と判断したメルエシードは早速、京矢の攻略に取り掛かった。故郷を離れて遠い異国の地に身を置くのは何かと大変でしょうと京矢の心情を気遣い、そんな境遇にあって塞ぎ込む事もなくこうして散歩を楽しむ余裕を持てるなんて立派だと持ち上げる。

「わたしだったら、きっと一日中泣いて過ごしてるわ。やっぱり男の子なのね」

「いや〜ははは……」

コウを通してメルエシードの事前情報を持っている京矢は急に優しくなった彼女の意図が分かるだけに、何とも複雑でもどかしい気持ちに駆られた。このまま素知らぬ振りをして適当に受け流せば、コウやスイルアツカ達が上手く処理してくれそうではあるのだが

『君の意図は分かってる』 とか言ったら、どんな反応するんだろう……？』

中身は怖いらしいと分かっている、見掛けは金髪翠眼にツーテルも可愛く似合う美少女である。京矢の肩より少し低い位置から上目づかいで優しく微笑みかけてくるメルエシードは冗談抜きで魅力的だった。

そしてこれもワザとであろう、姿勢と立ち位置的に胸の谷間が視界に入るので、つついソコへ目が行ってしまう。強調されるほど大き過ぎず、されど小さくはなさそうな魅惑のふくらみ。

何度目かの奪われた視線を戻そうと京矢が顔を上げると、じっと見つめていた翠色の瞳が自分の胸を見下ろし、ついで京矢の顔を見上げながら恥ずかしそうにその胸元を隠した。

そんな仕草もワザとであろうと分かっている筈なのに、『ちら見してたのバレた！』と慌てた気分になってしまう。

「も、さっきからわたしの胸ばかり見て。胸とおしゃべりしてたの？」

「ええと……ご、ごめん」

> i 2 7 8 3 7 — 3 6 1 1 <

「むう……うふふ、そんなに気になるんなら 触らせてあげよ

つか？」

「え”っ」

服の胸元をちよいと摘んで引っ張ってみせるメルエシード。二つのふくらみの先端が見えそうで見えないギリギリのちらリズムに、思わず目が釘付けになったり、直ぐ我に返って乗り出し掛けていた身を気にしたり、このまま凝視するのは失礼かと思いつつも、目を逸らすのは返って失礼になるんじゃないかと思いつつ、少々混乱気味な京矢。

そんな京矢の慌てふためく様子にほくそ笑むメルエシードは、京矢の胸板に頭を預けながら背中からぴとつと身体を寄せてもたれ掛かると、自分の服の胸元を軽く摘んだまま囁いた。

「ホラ、ここからそつと手をいれて……ちよつと触るだけならゆるしてあげる」

今度ははつきり、二つのふくらみの全容が見えた。これは間違いなく誘惑だ！ 据え膳だ！ とうろたえる京矢は、喰わねば男が廢る気持ち半分、乗ってしまうと後が怖い気持ち半分で揺れ動く。

『コウの奴、こんな子に迫られてよく平気でいられたな』

人間の三大欲求に支配されないコウの在り方は知識としては理解しているものの、感覚としての実感が伴わないので、昼間コウにモーションを掛けていたメルエシードの誘惑がこれほど対理性破壊力に満ちているとは想像がつかなかった。

やはりただ知っている事と、実際に経験する事とは違う。

コウの記憶にある巨乳なカレンや貴族娘なアリス嬢の抱擁もかなり凄いのではなからうか、いやいやレフィーティアって魔術士の子も無口系でなかなか などと茹で上がりそうな意識で軽く現実逃避をしていた京矢は、メルエシードの甘えるような声に引き戻される。

「ほらあくはやくう、わたしだって恥ずかしいんだからね」

「で、では、ちよつとだけ……」

乗った。というよりも、ここまで来れば断る事にこそ勇気がある

というものだ。首元にメルエシードのさらさらとした金髪の感触を覚えながら細い肩越しにそっと腕を伸ばし、服の隙間から胸元へ手を差し入れようと

「何をしている」

「うわあああああ！」

「ひゃあああああ！」

「こんばんわー」

何時の間にか背後に立っていたスイルアツカから声を掛けられ、飛び上がって驚く京矢と釣られて驚くメルエシード。そして普通に夜の挨拶を向ける少年コウ。

京矢の意識を通じてメルエシードが動いている事を察知したコウは、自身が出張って京矢への干渉を防ぐよりも手っ取り早く且つ、問題をうやむやに処理できる人材を呼び寄せたのだ。

「こんな夜更けに離宮の庭園にまで忍び込んで何をしているのだ？
メル」

「ス、スイル姉さま！ わたしは別にその……っ」

「キョウヤも目立つ事は控えろと言っただろう、お前が手を出そうとした相手はマーハティーニの王女だぞ？」

「ええーっ 王族の娘だつてー！」

凄くワザとらしい驚き方をする京矢だったが、焦っているメルエシードは気付いていない。一応、メルエシードが”味方では無い”

とコウに判定されている事はスイルアツカの極身近な者しか知らないので、現時点でメルエシードの立場は”スイルアツカ皇女に良く懐いている有力国の王女”であり、二人の仲は良好であるという事になっている。

他の”味方では無い判定”を受けた有力家や支分国大使達と同じく、コウがエツリアにやって来た日からいきなりメルエシードに対する態度を変えるのは周囲からも不自然に見られるので、スイルアツカは今まで通りの付き合い方をして微妙に仕事の邪魔をされたり行動を阻害させたりしていたのだ。

今回、離宮に侵入して重要人物と接触していたメルエシードをスイルアツカが自ら咎める事で、これを機に”マーハティーニの王女の動向に目を光らせるようになった”という状態を、100%相手側の過失を演出しながら自然に作り出す事が出来る。

ちなみにスイルアツカを呼んだのはコウなのだが、メルエシードがそれを知る由も無く、結果、コウはこの事でマーハティーニ側から目の敵にされるデメリットも地味に回避していた。

結局、この件でメルエシードは宮殿内の軍施設区画と離宮の出入りを禁止されてスイルアツカからも距離を置かれるようになった。

その厳しい処置は二人の親しい姿をよく見知っていた宮殿の人々を驚かせ、”謎の客人”について探ろうとしていた他の支分国関係者達を萎縮させるに十分な効果を上げたのだった。

54話：異界の客人

ルツカブルク卿の屋敷は宮殿周りの軍施設地帯と一般民の住む街の間にある水源に近い場所に建っていた。広大な敷地内には研究室として一戸建ての家が十数棟も用意され、囲っている技術研究者や魔術士達を住まわせている。

その内の一軒を尋ねるコウ。ルツカブルク卿に許可を貰い、冒険者協会の情報に詳しい者として例の王冠を鑑定した魔導技士を紹介された。

宮殿でコウに声を掛けられたルツカブルク卿は最近なにかと活動的なスイルアツカ皇女の従者が、まさか自分を頼ってくるとは思っていなかったらしく、皮肉屋を装うのも忘れて目を丸くしていたか。

「いやーどうもお待たせしました、高名な冒険者であるコウ殿に尋ねて頂けるとは恐縮しきりですよ」

「こんにちはー」

” テイルマーク ” と名乗った彼はルツカブルク卿お抱えの魔導技士で、考古学の研究者でもある。機械化技術を魔導技士の立場から支援する傍ら、帝国領内にある古代遺跡の研究探索をさせて貰っているのだそうだ。

大人しくて気弱だが、研究に没頭すると周りが見えなくなる面も。

ちなみに、会った事はないが高名なアンダギー博士を尊敬しているらしい。ただし、博士に持っているイメージは大分本人と掛け離れてるようではあるが。

「冒険者協会の情報を所望との事ですが、回廊を渡ってくる商人やエイオア経由になりますので」

精度も鮮度もあまり期待できないと前置きした上で、ティルマークは現在流通している魔術触媒の市場情勢について、バラッセの一件から高級触媒となる相当数の骨が流通した事でやはり値崩れが起きているらしく、触媒をよく使うエイオア政府やグランダールからも魔術研究棟が大量に買い上げて相場の調整を図っているようだという情報を提供した。

「各街のダンジョンを管理する統治者達は冒険者協会の幹部も交えて対策を話し合っているそうですよ」
「なるほど」

情報を得たコウは意識の奥で京矢がそれを把握した事に確認をとりながら、他に聞きたい内容をイメージして貰い、それをティルマークに尋ねるといふやり方で対話を進めていった。

ティルマークも合間合間にコウが見てきたバラッセの地下奥深くに広がる遺跡の様子などを教えて貰っては研究者魂を煽らせている。まだ帝国領に点在する遺跡の調査が済んでいないので、今暫くはナツハトームを離れる予定は無いそうだが。

「ああ、何時かバラッセの遺跡も調べてみたいものですねえ」

「ナツハトームとグランダールが仲良くなれば、いつでもいけると

「思つよ」

「あつはつは、確かにそうかもしれませぬえ」

雑談も交えながら昼過ぎまで遺跡と冒険者協会を話題にお話をし
て過ごしたコウは、ルツカブルク卿によくとスイルアツカに歩
み寄りを求める挨拶を残しつつ、ティルマークの研究室を後にした。

「ただいまー」

「おかえり、お疲れさん」

離宮に戻ったコウが奥部屋にやってくると、京矢は昨日の紙にま
た何やら書き込んでいた。暇つぶしに始めた高級触媒の売
買シミュレーションをしているのだ。触媒一つ辺りの値段とそれを
運ぶ交易商人達に支払う報酬など、大まかに算出する。

「これ、元の値段から半分近く下がってるんだよなあ」

輸送費の揺れ幅に問題はあがあるが、今の値段で沢山買って置けば値
段が戻った時に売って差額で儲けられそうだという京矢に、コウは
輸送費はタダに出来る事を挙げてみた。

「あ、そうか。お前の倉庫を使えば幾らでも運べるんだよな」

「お金も結構あるけど、皆に行った時にでもアリアトルネで買って
くるっ」

近日中に休戦協定の調印式へ国境回廊の砦まで出掛ける事になっ
ている。砦からアリアトルネまでは近いので鳥にでも憑依すれば一
つ飛びで往復できるという。だが、京矢は今の段階でコウの財産を
使う事には慎重な考えを示す。

「まだ値段が戻るかどうかも分からないしな。それに多分、お前が持ってるお金じゃ桁が足りないと思うぞ」

異次元倉庫に保管してあるギルドコインや帝国通貨ではせいぜい200か300程度の個数しか購入できないだろう。個人で購入する分としては十分な量だが、京矢の計算では1000個単位で購入しなくては大した利益にならないと出ていた。

倉庫にある他のお宝を売って資金に変えれば国家予算並みの資金は作れそうだが、現状そこまでして触媒の買い占めを行う理由もないし、なるべくコウの財産には手を付けたくないという京矢。

「お互い、将来はどうなるか分からん身だからな」

「いちれんたくしようだね」

今はこのナツハトム帝国の宗主国エツリアに身を寄せて生活させて貰っているが、この世界や帝国の情勢を見る限り、何時紛争やら内戦やらに巻き込まれて着の身着のまま放り出される事になるかも分からないのだ。

掘って立つ所が無くなった場合に備えて貯えはとって置きたい。

スィルアッカ皇女殿下から生活を保障されている身にながらも、慎重に将来を見据えた生き方を模索する京矢なのであった。

エツリアから国境回廊までの道のりは通常の馬車で片道五日程の距離。機械化輸送戦車を使えば二日程度で到着できる。

少し前まで戦場だった回廊の砦を見渡せる平原にはナツハトームの大型輸送戦車と護衛の軽量型戦車が並び、砦上空にはグランダーの軍用魔導船が浮かんでいた。今日はナツハトームとグランダー両国による休戦協定の調印式が行われる日だ。

「おおー凄えな……本物の砦も迫力あるけど、魔導船がスゲー」

初めて離宮の敷地外へ出る事になった京矢は、国境回廊を渡る二日間の旅でこの世界を実感していた。回廊地帯を行き来する交易商人や冒険者グループらしき旅人達の姿は映画やゲームの中でしか見た事がないファンタジー世界の住人そのものだ。

コスプレ衣装などにありがちな妙にてかてかした作り物感無く、細かい綻びや傷に修繕の跡、使い込まれたそれら衣服や武器防具に感じる強い生活臭の染み付いた存在感は、京矢の深層意識から働きかけるコウの記憶も相俟ってより明確に現実味を伴わせた。

「キョウヤの世界でも船は飛ばないのだったな」

「普通はね。船って名前のつく乗り物なら星の世界まで行くやつまであるけど」

「ウチユウという所か。空より更に高い場所にある世界など想像もつかんな」

そんな雑談での和やかな雰囲気をつなぐ中、ナツハトームからの一団は国境回廊を強固に護る砦の門を潜った。

砦の兵士に案内されてナツハトーム軍の護衛と共にスイルアッカ

達が会議室に入ると、いきなり一羽の鳥が目の前に向かって飛んで来た。咄嗟にスイルアツカを庇う位置に立つターナ。しかし鳥はターナやスイルアツカを飛び越えて後ろに続いていたコウの肩に降り立つ。

「あ、ぴいちゃん」

「ピュイ」

コウの知り合いらしい”伝書鳥のぴいちゃん”を肩に乗せた姿に軽く笑みを浮かべながら、スイルアツカは懐から短刀を出し掛けていたターナを窺める。

「気を張りすぎだターナ、もう少し楽にしていけ」

「申し訳ありません……」

苦笑するスイルアツカに恐縮の意を示して詫びつつ頂垂れるターナ。そこへ、彼女が緊張を緩められない元凶となっている人物が声を掛けてきた。

「暫くぶりだなコウ、それに………ナツハトームの姫將軍」

「そうだねー」

「随分と意味深な間だな、グランダールの冒険王子」

皆の会議室で顔を合わせたコウとレイオスは王都に居た頃と変わらない挨拶を交わし、スイルアツカとレイオスは何処かぎこちない空気を漂わせる。互いに命のやり取りをした相手、という事もあるのだが、概ねの理由はスイルアツカに対するレイオスの驚きにある。

『あの重甲冑の中身がこんなに華奢で美しい娘だとは予想外だった』という、スイルアツカが自国で支持者集めの一環として将兵達

を相手に使っている印象の落差を狙った懸隔効果がレイオスにも及んだらしい。もっとゴツイ猛女を想像していたのだ。

「お初に御目にかかる、スイルアツカ皇女。私はグランダール第二王子スアロだ」

グランダール側からはスアロ王子も出席しており、こちらは無難に挨拶を交わすとスイルアツカ一行を調印の席へといざなった。無駄なく手早く隙も無く、速やかに式を進行させる手際の良さはさすが政務系派の王子といった所であった。

調印の席にはスイルアツカとエツリアの文官が並び、対面にレイオス王子とスアロ王子が。スイルアツカの後ろに立ち控えるターナとその半歩後ろに並び立つコウと京矢は、粛々と進む調印式を静かに見守っていた。

幾つか保留になったり再考する項目を残しつつも休戦協定の調印は無事に終了し、スイルアツカ達は一晩砦に泊まって帰国する事になった。休戦の報は直ちに両国の全土へと伝えられ、平和の訪れを祝うささやかなパーティー等が行われる。

砦の兵士達も日頃の激務から暫くは解放されそうだと、普段より少し豪華な大食堂での飲み食いを楽しんだ。

ナツハトーム側の文官大使達とグランダール側の官僚達が士官食堂で歓談を交えて寛いでいる中、コウと京矢を連れたスイルアツカとターナ達はレイオス、スアロ王子兄弟と来賓用の個室で私的な会談に応じていた。

ちなみに、部屋の隅にはスアロ王子の腹心で元暗部エージェントである影術士フェーズが隠行術で姿を消して控えている。コウが入室早々手を振って挨拶したので既にバレバレではあったが。

当初、ナツハ टीम側の一団でコウと行動を共にしている青年の容貌に目を引かれたレイオスとスアロは、この会談で探りを入れるべく彼の事を尋ねた。アングギー博士から機械化兵器に絡んでナツハ टीमにも異世界人が存在する可能性を示されていたからだ。

コウからグランダールに住む異世界人の話を聞いていたスイルアツ力は、元々帰国すれば京矢の事は公にする予定だったので今隠しておく必要も無いと判断し、コウに京矢について説明する事を許した。

沙耶華と同じ世界から、恐らく同じ時期にこちらへ来たのである
う事を伝えるコウ。

「なるほど、君はサヤカと同じ国に住んでいたというわけか」

「ええ、多分。コウから聞いた限り、その沙耶華って人も自分と同じ飛行機に乗ってたんだと思いますよ」

「……」

京矢と沙耶華は同郷の者であるらしいと聞いたレイオスが何となく京矢とあまり話をしたくなさそうにしているので、代わりに色々話を聞いたスアロはナツハ टीमに異世界の技術が流れている事を確信して内心で警戒しつつ、表向きは何時かグランダールで暮らす沙耶華と面会できるよう両国の安定と、道は遠くとも友好を願うと語った。

スアロはあくまでも外交的に京矢の存在を脅威になるかもしれないと警戒しているが、レイオスは沙耶華絡みも含めて警戒している。

そんなスアロとレイオスの内心もコウを通じて把握してしまっている京矢は、『自分は人畜無害ですよ』をアピールして終始作り笑顔を浮かべていた。

『まあ、気持ちは分からんでもないけど……』

京矢から見れば超イケメン王子なレイオスに女性絡み六割で警戒されたり、何処と無くルツカブルク卿を思わせる気難しそうなスアロ王子に政治戦略的に警戒されるなど滑稽な喜劇の登場人物にでもなった気分だが、得体の知れない異世界人が敵国に軍事技術を提供していたのだと考えれば色々慎重に対されるのも致し方ないかと納得もしている京矢であった。

その夜。相変わらず寝付けない京矢は、砦の上から緑色の月を眺めながらぼくつとしていた。

ある意味この世界で生まれて生活していたコウの記憶の影響か、日々薄まりつつある望郷の念に浸ってみたりしていた所へ静かにやって来て隣に立つ人物が一人。京矢は彼に挨拶を向けた。

「こんばんは」

「ああ」

夕食の席ではあまり京矢と話したくなさそうにしていたレイオスが無愛想に応える。そして沈黙。暫く二人で月を見上げていたが、やがてレイオスが口を開いた。

「お前は……元の世界に帰りたいとは思わないのか？」
「そりゃあ未練はありますけどね」

世界を渡る具体的な方法が分かっているならともかく、現状ではどういった理由で何故この世界に来たのか、その原因さえ分かっていないのだ。今を生きる事に精一杯で、帰る方法を探すという手掛かりすらも掴めない事柄に気を割いている余裕など無いというのが実情である。

京矢の話を黙って聞いていたレイオスは『そうか』と一言呟くと、徐に自身が沙耶華の気持ちについて少し悩んでいた事を打ち明けた。

普段から口にこそ出さないが元の世界に帰る事を諦めていない意志を感じられるので、同じ境遇にある異世界人の意見を聞いてみたかったのだと言う。

沙耶華にはあまり故郷を思い出して欲しくないので深く聞けなかった異世界の事について、京矢に色々教えて貰ったレイオスは、それらの話から沙耶華が何を望み、何を想いながら過ごしていたのか、王宮群で生活していた頃よりも”胡蝶の館”や”アンダギー博士の研究所”で生活している沙耶華が生き活きしている理由などを臙シヤウげながら掴めたようだ。

「参考になった。何時か王都に来ることがあったなら歓迎しよう。
サヤカにはあまり会わせたくないがな」
「色々正直っすね」

思わず苦笑する京矢は、グランダールの冒険王子と固い握手をして別れたのだった。

休戦協定の調印式を終えて三日後の早朝、国境回廊の砦からエツリアに戻ったスイルアツカは部下からの報告で宮殿に残っている支分国大使達の状況を確認すると、さっそく予てより準備していた京矢の事を発表する舞台作りに取り掛かった。

あまり時間を掛けず、宮殿の重鎮や各支分国大使も都合のつく者だけを集めてさっさと発表し、”ナツハトームの機械化兵器技術に貢献した異世界人”という存在に驚いた彼らがなんらかのリアクシヨンを見せる前に終わらせる。

京矢が”ナツハトーム帝国の客人”として扱われた場合、エツリアには各支分国から京矢へのアプローチに対して制限する正当性がなく、表立って牽制する事が難しくなる。いくら宗主国でもナツハトーム全体の財産を勝手に独り占めする事は出来ない。

タイミングを見計らった公式発表で各支分国からの異議を封じ、京矢の所属をエツリアであると示しておくのが目的であった。要は”私の客人だから手を出すなよ？”と公式に発表した事実を作って京矢に接近する者を牽制するのが狙いだ。

「さあ着いたぞキョウヤ。帰国早々で悪いがこれから皇帝の間で前前の事を皆に発表する。準備はいいな」

「一応、台詞は覚えたよ」

休戦協定の調印式から戻って直ぐの公式発表を告げる案内には、声を掛けられた各支分国も概ね”調印式の成功を知らせる発表だろ”とあまり重要視せず、都合が付かないからという理由で欠席する者も多いと推測出来る。

出席する者はとにかくエツリアとの関係を良くして置きたいと考える弱小国のような所ばかりなので、エツリアの異世界人独占について異議を唱える事もないだろう。後日、他の支分国から抗議が上がっても”呼んだのに来なかったのはそちらの判断”としらばっくれるのだ。

「それにしても、でけえ……」

出発する時も離宮の出入り口からだつたので、初めて宮殿の正面入り口を通る京矢はその巨大さに圧倒される。二度目のコウはまたしても戦車から飛び降りようとしてターナに抱きかかえられていた。そんな二人の様子に苦笑を浮かべつつ無駄に広いと形容できるほどの幅を持つ廊下を進み、宮殿兵の列を過ぎて突き当たりにある昇降機前の老紳士と挨拶を交わす。

「お帰りなさいませスイルアツカ様。調印式の御出席、お疲れ様でした」

「うむ。父上は昼寝中か？」

「はい。夕刻までは閨房でお戯れかと」

「……息災なのは良い事だ」

父帝に余計な横槍を入れられる心配がないのは好都合だと、スイルアツカは皇帝の出席も無しという方向で進める事にした。自分と対立気味な者はますます集まり難くなるだろう。

昼過ぎには出席者達が皇帝の間に集まり始め、既に待機しているスイルアツカ皇女に挨拶を向けて席に着く。

何れも予想していた通りの弱小支分国大使が大半という顔ぶれで、

皇女殿下の後ろに控える話題の従者コウにも愛想を振る舞いつつ、隣の席で深くフードを被って座る人物に誰だろう？ というような雰囲気表情を浮かべていた。

「……………」

「……………」

新たに皇帝の間へ入室してきた支分国の王族が礼をとると、スィルアツカはただ頷いて受け取った。その様子に周りの大使達から僅かなざわめきの気配があがる。マーハティーニの代表で出席したメルエシード王女。

離宮の”客人”に許可無く接触したという理由で懲罰を受ける以前はあれほど親しく接していたのに、今は挨拶がてらの言葉すらも与えない皇女殿下の厳しい対応。

やはり”謎の客人”には下手に関わらない方が良く、この場に集う各支分国の大使達は改めて認識を固めるのだった。

メルエシードの出席には驚いたが、特に何か意見をしてくる事もなく、スィルアツカは努めて冷淡に接している。京矢は余計な発言を控えているので沈黙。コウはスィルアツカに向けられる周囲の反応を探っては異次元倉庫空間でレポートを纏めていた。

「今日集まって貰ったのはグランダールとの休戦協定が結ばれた報告もあるが、実は皆にある人物を紹介したかったのだ」

発表会の開会を告げて直ぐ、スィルアツカは京矢を中央の壇上に

呼んだ。皆が注目する中、割と落ち着いた足取りで中央に歩み出た京矢は、予め示し合わせていた通り壇上に登ると、眼深に被っていたフードを払って素顔を曝した。

色白で堀の浅い少々線が細く見える黒髪の青年。その特徴的な顔立ちに”眠れる異世界人”の情報を持つていた者達はもしやと目を見張り、事情に詳しくない者達は何処と無く雰囲気似ている気がする従者コウにも視線を向ける。

「彼は私が個人的に客人として離宮に保護している異世界人で、名をキョウヤという」

スイルアツカの”個人的な客人”を強調する紹介に合わせて軽く会釈する京矢。『おお』とか『やはり……』などの呟きでざわめく皇帝の間。それらの反応を窺いながらスイルアツカは紹介を続ける。

「我がエツリアの誇る機械化兵器開発に貢献してくれた人物だ。今後の活動では皆の目に触れる機会も増えるだろう」

「何の因果か世界を渡ってしまい、途方にくれていた所を救って頂いた皇女殿下には我が力を持って報いる所存」

と、戦車での移動中に覚えた台詞で口上を述べたあと、日本語で適当な事を喋って皇女を称えるような素振りを見せる京矢。これは時々言葉が通じない部分があるというアピールだ。何か都合の悪い事を聞かれた際の誤魔化しに使う。

ちなみに、京矢が適当に喋った日本語の内容は『今日は良い天気だなあ、しかし適当になんか喋れって言われても困るんだけど、スイルアツカはスタイル最高だーとか、ああ、一応言っとくけどコウ、俺がなに言ったかバラすの無しだからなー』であった。

とりあえず、コウは異次元倉庫空間で纏めているレポートの一部

に横線を入れて記述を取り消した。

京矢の紹介を終えたスイルアツカは休戦協定によってグランダールとの交易もこれから段階的にだが盛んになって行くだろうと、適当に調印式の報告などを繕うと、早々に発表会の閉会を告げて皇帝の間を後にした。

基本的にエツリアへ右に倣え状態の弱小支分国大使達は今後、スイルアツカ皇女がガスクラツテ帝を説得してグランダールとの交易範囲を広げてくれるものと解釈し、これで少しは民の暮らしも楽になるだろうと喜んだ。

マーハティニーのメルエシード王女を含め、この発表会の意図、スイルアツカ皇女の狙いを正確に掴んでいる有力支分国の大使達は、既に帰国している支分国大使や今回この場に出席しなかった大使達からの問い合わせで暫くはエツリア宮殿での生活も騒々しくなりそうだと密かに息を吐くのだった。

宮殿から離宮に繋がる青い絨毯敷きの廊下を歩くスイルアツカ達。廊下の前方と後方にはターナの部下が距離を置きながら防備を固めている。フードを目深に被った京矢は緊張で凝った肩を解しながらこれからの事を尋ねた。

「一応宮殿の敷地内とかにも入っていい事になるんだっけ？」

「そっだ。基本的にコウと同じ扱いになると考えていい」

コウの場合は従者とは名ばかりで特殊任務を専門にこなす密偵のような扱いになっているが、スイルアツカの直属という立場は大きい。

「これからあの手この手でお前を誘おうとする輩も出て来ると思いますが、くれぐれもそういう手合いに引つ掛からんようにな」

幾ら皇女の威光で牽制していても、京矢自ら相手に与して行かれでは手の打ちようがないからなと念を押すスイルアツカに、京矢は現在進行形で世話になっている相手に弓引くような真似はしないと笑って答える。

「なんせスイルアツカ達は命の恩人だからなあ」

「恩人か」

「ん？」

長い廊下の窓から見える宮殿の正面入り口付近に遠い視線を向けていたスイルアツカは、京矢の問い返しに『なんでもない』と笑って見せた。スイルアツカが視線を向けていた先には、裏口の小さな扉から出入りする昇降機前の老紳士の姿があった。

55話・帝都生活と空模様（前書き）

今回ちょっと長いです。少しグロもあり。

55話：帝都生活と空模様

張り巡らされた水路の間を走り回り、まだ木の植えられていない等間隔に掘り返された庭園の穴に飛び込んで虫の幼虫を探したりと、同世代の男の子と間違えそうなほど元気に跳ね回る年の頃は12、13歳くらいの少女。

「スイル様、そっちはまだ工事中ですよ」

「だから面白いんじゃないか、セランも来いつ　庭師の息子なら虫にも詳しいだろう?」

「虫は苦手なんですよー　って、わあ！　皇女様がそんなの掴んじゃダメですっ　捨ててください!」

「わははははっ」

土の中から掘り当てた紐のようなウネウネ動く生物を手に掲げるスイルアツカは、手放すように言いながら慌てふためく少年を見て笑う。宮殿に仕える使用人達の中で、遊び相手として気に入っている同い年の少年セラントリッテ。

庭師見習いのちょっと気弱な所がある優しい少年を、スイルアツカはよくわがままに付き合わせて楽しんでいた。

「ここの土は少し色が違うのだな」

「そこには花を植える予定なんですよ。綺麗ですよー?　東の平原に咲く色とりどりの花々は」

「私は綺麗な花よりも美味しい実のなる木がいいな、沢山生ったら下々の者達にも食わせてやれるだろう?」

「え、えーとそれは……民達の事をよく想っておいでで素晴らしい考えですね?」

なんだその微妙な反応はと頬を膨らませるスイルアツカに慌ててフォローを入れるセラノン少年。あまりに現実的な答えが返って来た事に驚いたのだと。

「普通、スイル様くらいの歳の方は綺麗な花や衣装飾りとか、東方のお菓子とかに興味を持つ事が多いんですけどね」

「私は剣とか動物の方が好きだな、あとこいつ」

土だらけの手でひょいと掴んで見せたのは棘つばい長めのハサミを頭部に持つ黒々とした甲虫。大人の親指くらいの大きさと毒などの害は無く、研究や趣味で集める人もいるくらい割と人気のある虫であった。

「ああつ その虫は危ないですから背中部分を摘むようにしないと」

「挟まれた」

「ああーっ 血が出てるじゃないですかー!」

『いてっ』と、虫のぶら下がった手をぶらぶらさせるスイルアツカの指からハサミ部分を引っぺがしに掛かる。宮殿敷地内に造園中の巨大庭園にみられる皇女殿下と庭師見習いの少年は、いつもこんな感じで穏やかな毎日を賑やかに過ごしていた。

豊富な水源を惜しみなく使った緑溢れる美しい庭園は砂漠の帝国ナツハトームにおいて非常に珍しく、各支分国からの来賓に帝都エツリアの”格”を印象付ける役割も担っている。

事件は完成した宮殿庭園の完成披露パーティーが行われた日の夜に起きた。

「姉上が内緒の相談？」

「はい。普段から皇帝陛下と直接お話ができる貴女でなければ色々問題があるとの事で」

ガスクラツテ帝の息子や娘達はエツリアの宗主国としての地盤を強固にするという政治的な目的で、まだ年端も行かない内から各有力支分国に嫁がせたり、養子に送られるなどして帝国の各地に散らばっている。

そうして十数年、帝国内での地盤も安定し、世継ぎの事も考えなくてはならなくなって来たガスクラツテ帝は、子供達の中でも最後に生まれたスイルアツカは手元に置いて可愛がっていた。

行く行くはエツリアの皇女を娶るに相応しい立派な相手を見つけ結婚させ、その者に帝位を譲ろうと考えていたのだ。

今回、嫁ぎ先の支分国から来賓として故郷エツリアに招かれている大勢の兄弟姉妹がいる中、故国で父帝より唯一愛情を注がれているスイルアツカに嫉妬した姉の一人が、護衛として連れて来た兵士に彼女を穢して辱めるよう命じた。

庭園で開かれているパーティー会場から少し離れた並木沿いの草陰で姉が待っている。従者を名乗る男に誘われたスイルアツカは、いきなり背後から覆い被さって来たその男に押し倒された。

驚いて悲鳴を上げ掛けたスイルアツカの口に手袋を押し込み、片手で顎を押さえつけて声を封じた男は組み敷きながら服に手を掛けると、純白の布を何枚も重ねたパーティー用ドレスのスカートを引き裂いた。

「ん”ん”ーっ！」

「暴れなさんなって、直ぐ気持ちよくしてやるからよ」

露わになった太腿の内側に膝を押し込んで足を開かせようと格闘している所へ、背中に叩きつけられるような衝撃を受けた男は背後の気配に向かって拳を薙いだ。手応えが有り、木の枝を握った庭師見習いの少年が尻餅を付く。

だが少年は直ぐに起き上がって木刀代わりの枝を振り上げた。

「スイル様から離れる！」

『セラッ……っ』

「ち……人払いくらい済ませといて欲しいもんだな」

スイルアツカを草むらに押さえつけたまま片手でナイフを抜いてセラッに向けた男は、振り下ろされた木の枝を叩いて弾くと素早くセラッの喉元にナイフを当てる。

「いいか小僧、これはお前みたいな下っ端にも入らねえ部外者が首つつ込んでいい事じゃねえんだ」

大人しく見なかつた事にして立ち去れと諭す男。しかし、組み敷かれて怯えた眼を向けるスイルアツカのあられもない姿を見たセランは男のナイフを持った腕に掴み掛かった。

とにかくこの男をスイルアツカから引き離しさえすれば、少し離れた場所では皇帝陛下を始め宮殿の重鎮や各支分国より招待されている王族大使など来賓が集まったパーティーが行われているのだ。スイルアツカが助けを求めれば直ぐに宮殿兵士が駆けつけてくれる。

「ちいっ！ このガキ」

ナイフを奪う勢いで挑んできたセランに片手では対処しきれなくなった男の拘束が緩み、スイルアツカが男の腕から抜け出したその時、ふいにセランと男の動きが止まった。

見開かれたスイルアツカの瞳に映ったのは、胸部に深々と突き刺さったナイフを握ってよるめくセランの姿。やがてゆっくりと仰向けに倒れるセラン。手袋を吐き出してセランに駆け寄ったスイルアツカは必死に呼びかける。

「セラン！ セラン！」

「スイ……ル……様……」

微かに答えた声は溢れ出た吐血と共に掠れ、彼の瞳から生気が失われて行く。縋りつくスイルアツカにはそれを止める術はなかった。

「うそだ……セランはこんな……」

お前はこんな死に方をする人間ではないと、目の前の現実を否定したがるスイルアツカ。

怒声やら叫び声を聞きつけたパーティーの出席者達が、何の騒ぎかと様子を窺いに集まって来た事に余計な死体を出して計画が狂っ

たと舌打ちする男は、死んだ少年に縋り付いているスイルアツカに耳打ちする。

「宜しいですか皇女様、私は貴女の姉君テイレイータ様の指示で事に及んだのです」

「……姉上の……」

テイレイータはエツリアの地盤を固める為に嫁がされた皇女達の中でも特に精強な軍を持つ、当時ナツハトーム内でも最強の戦力を有していた古い国ヴェームルツダの王に嫁いだスイルアツカの二つ上の姉である。

グランダールとの戦に負け続けて疲弊し始めていたエツリアにとつては是が非でも友好を深めておきたい国。テイレイータの護衛兵士である男はどうか辻褃を合わせて目的の一部だけでも遂行しようとして画策する。

「ガスクラツテ帝を困らせたくなければ、そこで黙って泣いていればいい。余計な事は言つな　宜しいですね？　皇女様」

巧みに脅しなだ宿めすか賺すようにそう言った男は、宮殿兵に護られながら遠巻きに様子を窺う一同に向かって誤解によるトラブルだと釈明を始めた。　スイルアツカ皇女が庭師の少年に襲われていると勘違いして助けに入った際、誤って刺してしまったのだと。

ざわめく来賓達と顔色を変えるガスクラツテ帝。宮殿兵と皇女付きの侍女が、倒れている少年の傍で座り込むスイルアツカの傍へと駆けつける。

『まあ、なんと痛ましい』という雰囲気演出するパーティーの出席者達。これには本心から気の毒に思っている者と、同情的に振

る舞いながら内心で皇女様のスキャンダルに対する興味本位や嘲りの念を懐いている者も混じっている。

「まさか戯れていただけとは知らず、正義感からつい」

弁を弄する男の主張を耳鳴りの向こうに聞いていたスイルアツカがゆっくりと顔をあげた。周りに控える宮殿兵の中から最近スイルアツカ付きの侍女となった少女が歩み出て心配そうに寄り添う。

「スイル様……？」

「ふざけるな」

小さく呟いたスイルアツカは少年の亡骸なきがらに刺さっていたナイフを引き抜くと、来賓達の方を向いている男の脇腹に突き刺した。辺りに驚愕のザワメキと悲鳴が上がる。

「な、何をやっておるのだ！」

狼狽するガスクラツテ帝にスイルアツカは少し泣きはらした目尻を拭くと、腹に力を込めて大きく息を吸い込み、声の震えを殺しながら叫ぶように言った。

「まったくしゃあしゃあと空々しいことを 父上！ こやつと言った事は大嘘も大嘘、私はこやつに襲われたのです。私を助けようとした庭師の少年が一人死にました」

ざわめく来賓一同。脇腹を刺された男は脂汗を浮かべながら目を剥く。自分はヴェームルツダの王妃ティレイータ様付きの護衛兵士なのだ。ここでティレイータ王妃を糾弾すれば、ヴェームルツダとエツリアの関係は間違いない紛糾する。

来賓として招かれているヴェームルツダの王妃付き護衛兵士がエツリアの皇女に狼藉を働き、宮殿の使用人を殺めたなど大問題。

だが、ヴェームルツダの古い有力家からはエツリア出身のテイレイタ王妃を使った祖国エツリアに利する為の自演工作ではないかと反撥が上がるだろう。エツリア側もヴェームルツダの軍事力という後ろ盾が欲しいとはいえ、宗主国として譲歩できる様な問題ではない。

「……内戦を喚ぶ気が……エツリアが戦場になるぞ」

「子供だと思つて甘く見たか、下郎」

小声で警告する男に対して厳しく言い放ち、ナイフを捻つてさらに押し込むスイルアツカ。皇帝陛下や各支分国からの来賓を前に皇女様を振り払う訳にもいかず、男は堪らず膝を付く。

近くに控えていた宮殿兵の腰から剣を抜いたスイルアツカは、身体を翻して回転の遠心力をつけると叩き付けるように振り下ろした。

あっさりと落ちた男の首が土草を叩き、残された胴体の首元から噴き出す鮮血が一带を染める。血溜まりから男の首を掴みあげたスイルアツカは、それを掲げながら来賓者達に混じつてこちらの様子を窺っていた姉に向けた。

「姉上！」

びくつと肩を震わせるテイレイタ王妃。彼女の周りに控えていた侍女が何人かふらりと気を失い、同じように来賓のパーティー出席者からも気絶して倒れる婦人が続出する。

「こやつ、事もあるうか姉上の指示で私に無礼を働いた等と妄言を吐いておりましたぞ！　しかしこの通り、私が討つて置きましたゆ

え
」

今後も姉上の名を語って偽りを通そうとする下郎は悉く血祭りに上げてみせましようやと笑みを浮かべる。これは当事者同士にしか分からない、スイルアツカから姉ティレイータに対する警告。もしくは宣戦布告であった。

ぼたぼたと赤の滴る生首を掲げ、身の丈に合わぬ剣を手に血溜まりの中で微笑む少女。その壮絶な光景に皆が声を失う。凍りついたような庭園の一角。皇女付き侍女の少女がスイルアツカの血糊を拭いに動いた事で、ようやく周囲の時が動き出す。

この時、ガスクラツテ帝は自身の後継者にスイルアツカを、次期皇帝の座を預けられるのは娘しかいないと強く確信したのだった。

「……久しいな」
「スイル様？」

お昼寝中だったスイルアツカが起き抜けに呟いた言葉に小首を傾げるターナ。

「いや、何でもない。キョウヤは部屋か？」
「はい、例の高級触媒について色々調べているようですよ」

表向き”皇女殿下は男嫌い”という設定にしてある裏の理由は、その方が受けが良いという人気取り狙いなのだが、更にその裏に潜む理由に関係する昔の夢を見て何となく憂鬱な気分のスイルアツカ

は、自然と京矢の事を考えてしまう。

「そうか。ひ弱に見える割りに、妙な行動力もある奴だからなあ」
「うふふっ ひ弱と言っては可愛そうですよ。まだ体力も戻ってないのでしょうし」

口さがない言い方をしているが何処と無く楽しそうなスイルアツカに、やはりあの少年と雰囲気似ている事で京矢に気を許しがちなのでは？ と、ターナは冷静に自身の主を観察する。行き過ぎるようであれば諫言も考えなくてはならない。

過去に起きたあの事件は結局、ヴェームルツダ側が一兵士の犯した失態としてエツリアに詫び、ガスクラツテ帝も娘テイレイータを王妃に迎える大事な軍事同盟国に寛大な対応を示して終わった。

言わば、スイルアツカが自ら裁いた実行犯の男をスケープゴートにする事で両国の軋轢を回避しつつ、姉テイレイータ王妃のみならず、スイルアツカに対して嫉妬を向けていた他の兄弟姉妹達にも警告を促した形になったのだ。

ただの偶然なのか、スイルアツカが狙ってやった事なのかは、ターナにも分からない。

「さて、それじゃあ食事がてら様子でも見に行くか。コウはグラندانルに出掛けているのだったな？」

「はい。冒険者協会の情報を集めに行くのだそうです」

スイルアツカのコウを連れて回る公務（通称”敵味方判別巡り”）も一段落したので、暫く自由に活動できるよう休暇を与えている。

数日前、文字通り鳥になって飛んでいったコウ。休戦協定の調印式で赴いた国境回廊の砦より連れ帰ってきた伝書鳥に憑依してグラندانル領まで出掛けているようだ。

王都トルトリユスの冒険者協会中央本部までは流石に遠いので、近くの街アリアトルネを訪れたコウは、この街の冒険者協会を探して上空を暫し旋回。それらしい建物を見つけて屋根へと降り立った。重要な街なので情報も早い筈だとあたりをつけている。

伝書鳥には屋根で待っていて貰い、壁に張り付いていた小さな虫に憑依したコウは屋根の隙間から建物の中に入った。

休戦協定によってナツハホームとの交易が緩和される見通しに多くの商人達がアリアトルネを訪れて来ており、一階は護衛を探す交易商人や仕事を探す冒険者達で賑わっている。

建物の上階をふよふよと探索していたコウは、協会幹部の人達が集まる部屋を見つけて潜入。天井に張り付いて彼等の会話などから情報を集め始めた。

その中で、市場の安定を謡ってダンジョン最深部にある装置の破壊を禁ずる処置をとる方針が推されているらしい情報を拾う。コウが現場で得たこれらの情報はエツリアの離宮にある奥部屋で京矢がリアルタイムに取得していた。

「こりゃやっぱ値上がりするんじゃないかな」

「うん？ どうしたのだ？」

「奥部屋で”例の書物”から現状の技術で開発できそうな機械類の物色をしていたスイルアツカは、同じテーブルで書物の内容を解説

させていた京矢の呟きに顔をあげる。

「いや、ついさっきコウが拾った冒険者協会の情報でね、ダンジョンの装置を破壊禁止にするって方針で進めてるらしくてさ」

今後大量の触媒骨が容易く供給されるであろう事を見越しての値崩れなら、それが無理になると分かれば値段が戻る筈だと読む京矢。読みの内容自体は特に珍しい訳でも優れている訳でもないが、正確な情報に基づいた予測という強みがある。

今の内に買えるだけ買い付けておく事を勧める京矢に、機械化技術や魔導技術の研究の事もあるので触媒を買い溜めておく事に関しては異存はないのだが、先立つものが無いとスイルアツカは肩を竦めて見せた。

「あゝ金が無いのか」

「……もう少し言葉に配慮しろ」

資金が無いのは確かだが、明け透け過ぎだと注意する皇女殿下。今後は単なるポーズとしてだが機械化工場の視察などにも行つて貰う予定なのだ。スイル將軍直属の立場にある者が兵士や技術者達の前で『金が無い』では格好が付かない。

「お金が足りてない？」

「一緒だそれは！」

噴き出すターナ。『資金に余裕が無い』とか、もつと言い方があるだろうと突っ込むスイルアツカに、京矢は『ああ！なるほど』等と言いながらポンと手を打ったりしている。

「まあその辺りはどうにか遣り繰りしているからな、キョウヤが気にする事ではないさ」
「うーむ」

書物の検索に戻ったスイルアツカはそう言って笑みを向ける。離宮の奥部屋で異世界の書物ゲームの解説本に向かう京矢達は、そんな調子で夕刻まで過ごしたのだった。

各支分国の王族や大使が滞在する際に使われる宮殿上層階の部屋。その一室にて、護衛も兼ねたマーハティーニの連絡諜報員から報告を聞いたメルエシードは憂鬱そうに溜め息を吐いた。

「そう、デイド兄さまはまだこっちに来られないのね……」

兄デイドルバードは反乱軍の征伐に帰国しており、何時もより長引いているので暫くエツリアまで来られない。

スイルアツカには離宮庭園での一件で未だ距離を置かれており、宮殿の使用人や侍女達は殆どスイルアツカの息が掛かっているのであまり話し相手になつてくれない。

他の国の大使や将校達もとぼっちりを恐れてか自分に関わろうとしない為、エツリアでは親しく振舞える相手が居ないのだ。

「……つまんない」

実は寂しがりやなメルエシード。連絡諜報員が去った後、暫くベ

ツドでごろごろしたり枕で一人遊びをしてみたが余計に空しくなつてしまったので、気晴らしに夜の庭園でも歩こうと一人薄暗い部屋を後にした。

離宮の庭園と比べて倍以上に広く大きく、夜でも色とりどりの花々が鮮やかに照らし出される宮殿の庭園。実はグランダールのトルトリユス王宮群にある庭園を真似て造られたという、ガスクラツテ帝の前で口にしてはいけない周知の事実があつたりする。

「んゝ資金かゝ」

機械化技術開発で支分国にそれなりの借金を残すエツリアは現状を維持させるだけでも資金繰りに苦労しているらしく、今後の発展に向けて新たな研究開発に魔導技術研究の基本となる触媒も揃えておきたいのは山々だが、金が無い。

今のところ殆どタダ飯食らいの状態なので何かスイルアツ力達のためになる事をしたいと考える京矢は、高級触媒で一儲けするチャンスをどうにかモノに出来ないかと悩んでいた。

現在、ダンジョン関連の取引される品は情報が錯綜して高騰したり下落したりしている。時期を逃すと”装置の破壊禁止令”が正式に発表されて全て正常化されてしまう。

「半値近い今の内に買つといた方が後で売らないとしても得なんだよな て、あつ」

「あ……」

迷路のように整えられた垣根の角を曲がった所で、京矢はメルエシードと鉢合わせた。互いに姿を確認して思わず動きを止める。

「や、やあ。元気？」

「……」

とりあえず、軽く挨拶などしてみる京矢だったが、メルエシードはそわそわと落ち着かない様子で周囲を見渡した。京矢を護衛している者がいる筈だと監視の目を気にする。

「……無視された……」

「え？ ち、違っわよっ わたしはただ……」

どよんと落ち込んで見せる京矢に慌ててフォローを向けたメルエシードは、問題があるなら向こうから介入して来るだろうと開き直ると、京矢の話し掛けに応じた。

「ハア……あなた、こんな所をひとりでウロウロしていいの？」

「ん、一応コウと同じくらい行動の自由が許されてるんだ」

離宮の奥部屋こしやちにいても特にする事は無し、向こうの庭園は歩き尽したので宮殿こしやちの庭園も散策してみようと、悩み事について考えがてら散歩に來た事を説明する。

「悩み事？」

「うん、ちよっとね」

機械化技術の情報とは直接関係しないほぼ個人的な思い付きによる買い付け計画なので話しても大丈夫だろうと判断した京矢は、一儲け出来そうな話があるのだが資金が無くて困っている事を説明し

た。

個人の思い付きではあるがエツリアに貢献する内容でそれなりに規模の大きい取引となるので、個人レベルの資金では全く足りない。

「エツリアって結構借金してるんだってなー」

「ええ、そうね……機械化技術の開発費用に、マーハティニーわたしの所からもかなり投資してるってお父様が言っていたわ」

この前の戦でせしめた捕虜の身代金で少しは借金も減らせたようだが、戦の出費も大きかったのでエツリアの財政的にはあまり変わらないようだ。そんな話をしながら、メルエシードはちらりと京矢の横顔を窺う。

スイルアツカ皇女からの信頼を損ねる事は無いという確信でもあるのか、あからさまに自分から距離をとるといような事もせず普通に接して来る京矢に少し興味を持ち始める。

「ねえ、あなた……スイル姉さまからわたしと話さないように言われていないの？」

「んにゃ、別に？」

「……」

「まあ俺はちよつと境遇が特殊というか事情が事情だから、皇女様のご機嫌窺って行動制限しなくちゃならないほど切実でもないんだ」

勿論、わざわざ皇女殿下の機嫌を損ねるような事はしないぞ？

と付け加える京矢に、そりゃあそうでしょうよとジト目を向けるメルエシード。やはり機械化兵器の情報を握る異世界人だからこそ、その扱いや待遇も一有力支分国の大使とは一線を画しているのかと推察する。

「まあそれはそうと、……大丈夫か？」
「は？」

「いや……なんか寂しそうに見えたからさ、この間のアレで他の人からも避けられてるんだろ？ あんまり酷いようなら俺から言っとくぞ？」

「なっ、なに言ってるのよ……スイル姉さま怒らせちゃったんだから、避けられるのは当然だし……仕方ない事だし……」

最後の方はもごもごと小声になって視線を彷徨わせるメルエシード。彼女はマーハティーニの王女として、或いは誘惑した相手などからチャホヤされた事はあっても、真摯に優しくされた経験があまり無く、胸を打つ謎の動悸に戸惑いを感じていた。

「さて、そろそろ戻るとするか」

「え？ あ……」

『またなー』と誰かによく似た仕草で手を振り離宮の方へと去っていく京矢を、メルエシードは複雑な視線を向けて見送るのだった。

国土の大半が険しい岩山と渓谷で形成され、ナツハトームで資源採掘国として存在感を増している有力支分国マーハティーニ。

岩山を割り貫いて造られたと謂われる王宮で政務に励むレイバドリエード王は、エツリアに置いているメルエシードからスイルアツカ皇女殿下に資金提供を行う提案がなされた事に関して、連絡諜報

員の詳しい報告に耳を傾けていた。

「では、その異世界の技術者にマーハティー二への関心を持たせる事が期待できるという訳だな？」

今後、次期皇帝の座にデイードルバード王子を推して行くに当たり、エツリアの財政状況改善に際してスイルアツカ皇女の一人勝ちを防ぐ方法としても成り立つと判断したレイバドリエード王は、高級触媒買い付けの資金提供に乗り出す事を決めた。

「それと、メルエシード様の事です。」

ここ最近のメルエシード王女に見られる心境の変化など、推察できる内心の動きも報告する連絡諜報員。例の異世界人に対して好意を持ち始めているようだという観察報告。

「何時もの気まぐれではないのか？」

「いえ、メルエシード様はあの異世界人の青年を誘惑しようとはしていませんでした。」

明らかにこれまでと接し方が違う事を挙げ、今回の提案も異世界人が要望しているらしい触媒の買い付けに対して、エツリアの財政が厳しい為に資金を用意できないでいるスイルアツカ皇女への横槍を入れる形を装っているが、本音はその異世界人の気を惹きたい気持ちが大きいようだと見られる。

「ふむ……そろそろアレにも役にたっってもらおうか。」

策略家の眼でそう呟いたレイバドリエード王は、メルエシードの名が入った書類にサインを入れてエツリア担当の連絡諜報員を下が

らせると、この件に回せる資金の調整に財務官を呼びつけた。

この日、コウが帰還する事を以心伝心で確認した京矢は離宮の屋上で空を眺めながら伝書鳥が帰ってくるのを待っていた。”今エツリアの下街が見えたよー”とか”宮殿の近くまで来たよー”などのメッセージがリアルタイムに意識の奥から伝わってくる。

やがて上空に現れた一羽の鳥が視界に入る。京矢の頭上を越えて屋上の床へと急降下した鳥は着地寸前でスイツと上昇を見せると、召喚の光と共に現れた少年コウがすちゃっと着地。その肩に降り立つ伝書鳥。幾つか舞った羽毛が風に吹かれて弧を描く。

「おおっ かつけえ！ おかえり」

「えへへー、ただいま」

任務ご苦労とハイタッチなど交わすコウと京矢。そこへ、何やら腑に落ちないような表情をしたスイルアツカがやって来た。

「キョウヤ、例の資金の事だが ああ、戻ったのかコウ、丁度良かった」

「ただいまースイル。どうしたの？」

「なんか難しい顔してるな」

「うむ、実はついさっきマーハティーニの使者が尋ねて来てな」

マーハティーンから自分宛てに資金提供の申し出があったのだと、スイルアツカは戸惑った様子を見せながら説明する。まだどういった意図での資金提供なのかは分からない。については必要な金額を挙げて欲しいと要請が来ているのだとか。

「一応まだ下で待たせているのだが、コウ」
「うん、わかった」

使者では詳しい目的まで知らされていない可能性もあるが、相手の思惑を探る為にコウの力を借りるスイルアツカは、せっかくなので京矢も同席させて交渉の雰囲気慣れさせたり、皇女直属の重要人物としての経験を積ませたりするのだった。

マーハティーンからの資金提供を受けた事により、エツリアは今後ナツハトームでも魔導技術研究を進めなければという名目で高級触媒を大量に買い付けて確保する事が出来た。

スイルアツカはマーハティーンに資金を出して貰ったという部分で技術提供の催促が強まる事を懸念していたが、レイバドリエード王から離宮の一件に触れて娘の行動を詫げる言葉を添えながら”投資”という形での提供に、メルエシードとの関係改善を狙う意味もあったのだろうと納得。これを機にメルエシードへの懲罰制裁を一部解除し、以前ほどではないが親しく振舞う事を許した。

コウによれば、まだ味方とは言えないがメルエシードのスイルア

ツカに対する敵対度は随分下がっているらしい。

それから間も無く、冒険者協会より『ダンジョン最深部に存在すると思われる装置の破壊を禁止する』という条例がグランダール王室とエイオア政府の公認で発表された。

高級触媒の市場や世間の動向については、値崩れの影響で多くの研究者達が高級触媒を大量に使えるようになり、研究が進んだ結果、より高性能な製品が作られるようになった。

おかげで質の高い触媒を必要とする商品が増え、高級触媒の需要も更に増える事になったのだが、その矢先に発表された”装置破壊の禁止令”によって市場は一時混乱。触媒の買い占めが多発してかなりの高騰を見せた。

暫くは大買いした所が売りに出す分で供給は安定するだろうが、今後はどうなるか分からないという事で値段は元の価格より少し高めで安定。触媒骨の売買で儲ける骨富豪が各地に現れる事となった。

エツリアも例に漏れず余った分を売りに出して利益を得た事により、支分国への借金も一気に減らす事が出来た。

「これでようやく魔導技術研究施設も稼働させられますね、スィル様」

「そうだな、まあ機材を揃える前に掃除から始めねばならんだろうが」

「くすっ　そうですね、随分長く放置していましたから」

水源汚染のジレンマに苛まれながらも街の近くに置く機械化兵器工場とは別に、魔導技術研究用の工場施設もエツリアの領地で街から離れた場所に幾つか建設されていたのだが、こちらは資金不足と人材不足で使われないまま放置されていた。

魔導技術研究も進めば機械化戦車の動力や機械化兵器全般の性能向上が見込める。その為の資金も触媒の売買で得る事が出来たし、人材も休戦協定によってエイオアやグランダーから売り込みに来る魔導技士が増えていく。

マーハティーニが集めるだけ集めて困っていた技術者達からも、本当に研究をしたいと思う者が高給高待遇を蹴ってエツリアにやって来ている。上手く事が進んでますます京矢に対する信頼も深めるスイルアツカは、この所ずっと上機嫌であった。

最近日課となっている宮殿庭園の散歩を楽しむ京矢は、何時もの場所で何時ものようにメルエシードと顔を合わせると、他愛無い世間話などをして歩く。特に示し合わせている訳ではないのだが、京矢は大体いつも同じ頃にここへと足を運ぶ。

以前はメルエシードとよく顔を合わせるこの場所に”ワザと会いに来ていられると思われるのも恥ずかしい”と散歩コースを変えてみたりした事があるのだが、その場合は不自然な場所から『あら、偶然ね』とツートールにくっ付いた葉っぱを掃いながら現れたりする。会わなかった翌日はやたらしょんぼりしている姿を見掛けたりもしたので、空気を読んだ京矢は堂々と会う事にしたのだ。

「今度また施設の視察に行く事が決まってるさ」

「魔導技術研究施設ね？ マーハティーニ うちからも魔導研究の技術者がエツリア

に流れたつてお父様が言つてたわ」

「キョウヤ」

本格稼働が始まる魔導技術研究施設について話していた二人の所へ、スイルアツカの声が掛かった。側近のターナを連れて凜々しく歩いてくる皇女殿下。

距離を置かれる事は解除されたが以前ほどベタベタしなくなったメルエシードは、マーハティーニの王女として挨拶を向ける。スイルアツカも頷いてそれを受けると、例の施設視察の件で話があると、言つて京矢を連れに来た事を話す。

「私の予定が入つたので同行者の面子を考えねばならん」

「あー、新型戦車のお披露目だっけ。キャタピラ外れないようにするのに随分掛かつたもんなあ」

「キョウヤの助言が役に立つた、感謝している」

「いや、あれは助言つて言つて良いんだらうか……」

『後出しでセンターガイドの事を指摘したダケなんだけどなあ』
などと頭を掻く京矢に、謙遜するなと穏やかな表情を向けるスイルアツカ。そんな会話を交わす二人にやや固くした表情を向けているメルエシード。

スイルアツカと特に親しい者でもなければ気付かれないが、色々事情を知るターナのほか、ある意味で同じような立場にあるメルエシードはスイルアツカの京矢を見る目が女のそれだと気付いている。

「……………」

デイド王子に続いて京矢の事でもスイルアツカに嫉妬を懐く事になったメルエシードだったが、国に帰れば何時でも会える兄王子と違って、今度スイルアツカ皇女の機嫌を損ねれば京矢とは二度と会えなくなってしまうかもしれないのだ。

それを思えば軽率な行動は取れない。表面上は極めて穏やかで良好な関係に見える三人の姿は宮殿内でも注目を集めていた。

夜。離宮の屋上で緑色の月を眺める京矢は、唯一心底から気を許せる相手、というか根底で繋がっている相手と本当の意味で穏やかなひとときを過ごす。

「なんつーか、平和な日本でならスゲー喜べる状況なのになあ」

「でも、メルとか”ヤンデレ”？ になりそうだよな」

「怖い事いうなよ……」

コウを通してスイルアツカとメルエシード、二人の気持ちの変化まで把握してしまっている京矢は、やっぱり人の内心なんて分からないでいた方がずっと楽だと悩む羽目に陥っていた。

「どっちに媚びても媚びなくても角が立つ……」

「こまったねえ」

のほほんと他人事なコウにジト目を向ける京矢。

「お前は悩みなくていいよなっ」

「えへへー」

コウの頭に手を乗せてわしゃわしゃする京矢と、されるがままになっっているコウなのであった。

56話：兆候【前編】

ナツハトームの西方に広がる砂漠を砂色のロープを纏った一団が夜の闇に紛れて移動する。約二十人程の若者で構成された小集団。明かりも持たず、軽装で荷物を背負って帯剣している姿は商隊には見えない。冒険者グループとも違うようだ。

五人一組で等間隔に列をなして黙々と歩き続ける彼らは、やがて目的の地点に到着すると荷物の中からナツハトーム正規軍の装備一式を取り出した。速やかに装着を済ませて再びロープを纏う。

砂峰に身を隠しながら見下ろす先には、砂漠の真ん中にぽつんと箱を置いたような飾り気のない大きな建物。

「あれか」

「警備の兵はあそことあそこだ、裏にも二人と中に交代要員がいる筈だ」

リーダー格の男が指し示した先で、警備兵の持っているらしき小さなランプの光がゆっくりと移動している。

「上には？」

「蒸し焼きになりたい奴は居まい」

「思ったより少ないものだな。あまり重要な施設ではないのか……」

「早朝の交代時間に仕掛ける、それまで待機だ。
に自由を！」

バッフェムト

「自由を！」

言葉少なに他の仲間にも必要事項を伝えて”誓いの言葉”を復唱し合った彼らは、見張りを立てながら一塊になって休憩に入る。携帯食を齧って木の実汁で喉を潤し、ローブに包んだ身体を半分砂に埋めるようにして仮眠を取り始めるのだった。

エツリア宮殿の周りを囲む軍施設地帯。その一角にある訓練場ではナツハトーム軍の戦士たちが連日鍛錬に励んでいる。

剣や槍、弓といった基本的な武器を使う訓練施設の他に機械化兵器を扱う施設もあるが、こちらは技術情報の漏洩防止の為、施設内にある屋内訓練場が使われていた。

”携帯火炎砲”の改良に向けて意見を聞きたいと機械化兵器の訓練施設に招かれていた京矢は、兵器の実演を見ながら幾つかアドバイスなどを出して照準装置を使った命中精度の向上や、更なる小型化で携行性の改善などを挙げた。

現在の”携帯火炎砲”はグランダール軍の”魔導小銃”に比べると二周り程大きくて取り回しが利き難く、威力は互角だが連射性も劣っている。燃費の悪さはもう比べてはいけないレベルの差があった。

グランダールの魔導技師アンダギー博士が作る魔導小銃は内燃魔

導器の中で爆発系の魔術を発現させて別工程で精製された火炎弾を射出するという機構なので、基本的に弾切れするという事もない。

対して携帯火炎砲は魔術用の触媒を使って筒の中で爆発現象を起こし、触媒の先端部分を飛ばす方式なので一発撃つ毎に一個の魔術触媒を消費する。しかも規格に合わせて加工しておく必要があり、質によっては不発や暴発を起こす危険もある。

「使うのにも維持するのにもコストが掛かる所まで現代兵器そっくりになってるなあ」

特に銃器類に詳しいという訳でもない京矢に出来るアドバイスなどたかが知れているが、それでも”銃という武器を知っている者”による細かい部分の指摘は技術者達にとって新しい発想であり、大いに研究開発の刺激となっていた。

施設から宮殿の敷地まで体力作りも兼ねて馬車を使わず、徒歩で移動していた京矢は一般の訓練場前を通り掛かった。ここは整地されたグラウンドのような広さの浅い砂地が広がり、訓練用の案山子や的が備え付けられている。

簡単な屋根のついた武器置き場には訓練用の模擬剣や槍などがずらりと並べられていて、時折雇われた鍛冶職人がやって来て壊れた模擬剣の修理などを行う。刀剣類に興味があつた京矢はちよつと見せて貰おうと武器置き場に立ち寄つた。

「おい、あれ見ろよ」

「最近スイル將軍の直屬についた奴だな」

嘘か真か、異世界からやって来てスイル將軍に機械化技術を売り込んだ技術者らしいと、下っ端兵士達の間でも色んな尾ひれを付け

ながら噂になつてゐる京矢。

「あいつがあんな金食い虫を持ち込んだ張本人か……」

「確かに相当な金が掛かつたつて聞くな」

「この頃は機械化兵器部隊ばかり持ち上げられてるし、我が軍も随分と様変わりしたもんだ」

「実際、戦果もかなり上げてるからなあ」

現在のナツハトーム軍で主流となりつつある機械化兵器。その先駆けとなつた市販品である機械化連弓の成功でヴェームルツダに借りる兵の数が減り、エツリアの兵士が脚光を浴びるようになった。それも長期間の経験を積んだベテラン兵士ではなく、比較的若い層の兵士が目立っている。というのも、機械化戦車や携帯火炎砲、滑走機など、機械化兵器に関してはベテラン兵士よりも若手兵士の方が扱いに優れる場合が多いからだ。

「しっかし……ありやあ本当に男か？ 女みてえに細い奴だな」

「だから將軍も傍に置いてるんじゃないかってうちの部隊長が話してたぜ」

スイルアツカ皇女殿下は”スイル將軍”として兵士達の間で絶大な人気を誇っている。それだけに、機械化兵器をもたせさせた異世界人としてスイル將軍から特別扱いを受けている事になっている京矢は、兵士達から少々目の仇にされている部分があった。

『ちよつとからかつてやれ』とばかりに兵士の一人が声を掛ける。

「キョーヤー殿、剣に興味がおありなら少し振るってみませんか」

「え、いいの？」

当の京矢は本物の剣に興味があつたので触らせて貰う事にしたのだが、訓練用の刃を潰した模擬剣は中々に重く、片手で使う剣でも両手で持たなければまともに振るう事が出来ない。

腕力が落ちている事を差し引いても五、六回の素振りでへとへとになってしまい、自身の力の無さも然ることながら『こりゃ兵士は大変だなあ』と色々実感する京矢。

「ちょっと手合わせしてみませんか、キョーヤー殿」

「いやいや無理だからそれ。つか”キョーヤー”じゃなくて”京矢^{キョウヤ}”ね」

振り回すだけでも一苦勞なのに手合わせなんて出来る筈がないと肩を竦めて見せつつ、呼び名の訂正を求めたりしてみる。

「まあまあそう言わずに、スイル將軍の直属に選ばれる者の実力を見せてくださいよお、キョーヤー殿」

「……？」

ニヤニヤ笑いを貼り付けた顔で微妙に周りを取り囲んでいる兵士達に違和感を覚えた京矢は、そこでようやく彼らから悪意を向けられているらしい事に気付いた。

宮殿などでコウが傍に居れば意識しなくても近くに居る人間の内心が伝わってくるので、相手の表面と内側とのギャップなどをよく観察したりしていたのだが、宮中の狸達と違って訓練場の兵士達は良くも悪くも真っ直ぐだ。

『気持ちは分からんでもないが……』

何となく、人気アイドルの親衛隊にでも囲まれている気分になる京矢。と、そこへ

「あなた達、そこで何してるの？」

ツートールにした金髪を風に靡かせ、皇女殿下の宮中服に負けず劣らずな露出度の高い衣服で脚とか鎖骨とか首筋付近に兵士達の視線を集めながら、しなるような仕草で歩み寄る翠眼の少女。マーハティーニの王女メルエシード。

宮殿の軍施設区画にはまだ立ち入りを禁じられているが、宮殿周りの軍施設地帯は機械化兵器工場などの最重要施設を除いて自由に出入りできる。

メルエシードにとってはスィルアツカが居ない時こそ京矢と親睦を深めるチャンスなので、移動時や一仕事終わった後の僅かな合間など隙間の時間を狙って会うようにしていた。

今日は機械化兵器の訓練施設に出掛けているという事で施設から京矢が戻るのを待っていたメルエシードは、空で帰って来た送迎馬車の御者から徒歩で戻る事にしたらしいと聞いて、宮殿から施設までの道のりを辿って来たのだ。

「これはこれはメルエシード様」

「こんなむさ苦しい訓練場に何か御用で？」

「彼に用事があるのよ。行きましょう、こんな所で遊んでるとスィル姉さまに叱られるわよ？」

「あ、ああ……じゃあ早く戻るか」

それじゃあこれだと、マーハティーニの王女様に手など引かれながら去っていく異世界人に「あの野郎、メル様まで……」という兵士達の嫉妬交じりな視線が向けられる。

色々状況が悪化しているような気もする京矢だったが、とりあえず助かったよと並び歩くメルエシードに礼を言った。

「あなた、スイル姉さまの直属なんだから、もっと偉そうにしてなくちゃダメよ?」

「堂々とじゃないんだ?」

下っ端の兵達に舐められては後々問題になるわよと忠告をくれるメルエシード。身分の肩書きだけでは人の意識まで支配出来ない。使う側にいる人間は相応の毅然とした振る舞いをしなければ、部下も付いて来ないものだ。

「あなたの下に居る者にはちゃんと命令して動かして掌握してやらないと、曖昧な態度はつけあがらせるだけなんだからね?」

「善処します……」

上に立つ者の心得を説かれたりしながら宮殿まで一緒に歩いた京矢とメルエシードは、宮殿前でこれから出掛けようとしていたらしいスイルアツカと鉢合わせた。いつも通り、マーハティーニの王女としての挨拶を向けるメルエシードと、頷いて受けるスイルアツカ。

「じゃあわたしはここで、またね。スイル姉さまも、ごきげんよう」

メルエシードはそう言っただけ軽く手を振りながら、何処か優越的な笑みをちらつと浮かべてから去っていった。僅かに頬を引きつらせるスイルアツカ。降って湧いた奇妙な空気に、はてな顔で小首を傾げる京矢。

「どうかした?」

「いや……なんでもない。戻るぞ」

「あれ？ 何処かに出掛けるんじゃないの？」

「ああ、それはもう済んだ」

出遅れたかと小さく呟いて宮殿に帰っていくスイルアツカの後に続いた京矢は、離宮の奥部屋に戻る途中でコウに会い、全てを理解して軽く頭を抱えた。

訓練場で京矢が”兵士達から悪意を向けられている”と感じた瞬間、それは自動的にコウへと伝わり、コウからスイルアツカに伝えられる。

コウの報告を聞いたスイルアツカは即座に訓練場へ向かおうと私室を後にしたのだが、宮殿前まで降りて来た所でメルエシードと並び歩く京矢に鉢合わせ。ある意味、お互いに何も言わずとも分かり合えているメルエシードからワンポイントリードしたという出し抜きの笑みを向けられたのだ。

「ああ……色々状況が悪化している」

「こまつたねえ」

「なんとかかしてくれ」

「むりだねえ」

テメーコノヤロー。この日は離宮の廊下で追いかけてこをじてじゃれている異世界人と少年従者の姿が見られたそう。

機械化技術製品の動力には魔導技術が中心に使われており、ナツハトームでの魔導技術研究には魔術触媒の購入に多額の資金を出した関係でマーハティーニも本格的に参入する事が発表された。

基本的に鉱山の採掘や製鉄に関連する施設しか持たないマーハティーニは、新たな研究用施設を作るにあたってエツリアの魔導技術研究施設を参考にさせて欲しいと要請し、ガスクラツテ帝はこれを了承している。

「研究施設の視察かあ……遠いし、一日掛かつちゃうわね」

「明日、我々側から派遣される研究員がエツリアに到着しますので、出発は明後日となります。それからこれを」

「手紙？」

「レイバドリエード王から、重要な手紙なので読み終えれば処分するようにとの事です」

本国からの通達を届けた何時もの諜報連絡員はそう言って礼をとると、静かに退室して行った。

「お父様からわたしに手紙なんて、珍しい……」

手紙には触媒の買い付けに資金提供をする提案をした事を挙げ、その成功によりマーハティーニが魔導技術研究に参入する事を容易にしたとしてメルエシードの働きを称える言葉が綴られ、続けて短くこう記されていた。

『我が祖国と兄ディードルバード王子の為に、マーハティーニの王女として役に立て』

添えられた一文の意味はよく分からなかったが、これからもその調子で上手くやれというような意味だろうと解釈するメルエシードは、何よりも、父王に褒められた事が嬉しかった。

今までそれなりに大事にされて来たとは思えるが、レイバドリエード王から父親としての愛情染みたモノは感じた事がなかったのだ。

ガスクラツテ帝から目に見えて親の愛情を注がれているスィルアツカ皇女殿下に羨望と妬みの気持ちを抱いていたメルエシードは、ようやく一つの答えを見つけたような気持ちになった。

「そっか、スィル姉さまはエツリアと皇帝陛下のお役に立ってるものね。だからあんなに……わたしも、もっとお父様の役に立てれば

」

父レイバドリエード王が兄のデイードルバード王子に強い期待を寄せているのも、反乱軍征伐などで活躍してマーハティーニに貢献し、父王の助けになっているからに違いない。

資金提供の提案はあの異世界人の気を惹きたかったのが本音ではあるが、今回のように上手く事が運んで祖国に貢献し、父王の役に立つ事ができれば、きっとまた褒めて貰える筈だ。兄王子に対するのと同じように、もっと自分を見てくれるようになるかもしれない。

「研究施設の視察、頑張らなくちゃ」

魔導技術に関する知識などサツパリなので本当にただ付いて行くだけなのだが、一応マーハティーニ王女としての公務である。しっかり自分の務めを果たさねばと張り切るメルエシードであった。

先日に取り続いて軍施設地帯にある機械化兵器専用の屋内訓練場を訪れていた京矢は、併設されている機械化兵器研究開発施設から運ばれて来た試作品の実験を見学していた。

今日はスイルアツカとターナが一緒に、コウは魔導技士ティルマークと話をしにルツカブルク卿の屋敷まで出掛けている。

「これは……」

「お前が言っていた”拳銃”というモノに近づけて小型化した携帯火炎砲の試作品だ」

銃身を短くした二連装の携帯火炎砲。京矢の世界の銃で表現するなら、カンプピストルを縦二連式デリンジャーのようなデザインにした連装銃だ。

「安全確認は済ませてある。今後お前の護身用武器として持つておくといい」

「護身用にしちゃでつかいけど、確かに銃って威圧感も武器としての効果の一つだからなあ」

一応、試し撃ちをして気付いた点があれば教えて欲しいと要請された京矢は、屋内訓練場で実際に射撃を行ってみた。結果、武器の性能なのか自分の腕の問題なのか、或いはその両方か、十発撃つて的に当たったのは二発という有様であった。

「これはひどい」

それでも威力は中々のモノだ。接近戦用の飛び道具であると認識する事にした京矢は使う機会もまず無いだろうなどと思いつつ、ベルトに付けた専用のホルスターに小型携帯火炎砲を仕舞う。

「ふむ。なかなか様になっているじゃないか」

「ああ、衣装と結構あつてるかもね」

京矢が普段着ている衣服は異世界人である事を強調して少しデザインにも工夫を凝らしたエツリア産の高級衣である。

装飾の少ないシンプルなチュニック風シャツとパンツの上にこれまた装飾のない無地なベストを着ているので、無骨な小型携帯火炎砲とそのホルスターの素っ気無いデザインがしっくりとマッチしているのだ。

「異界の戦士っぽいや？」

「いや、得体の知れないっぽさが良い感じで威圧感を出している」

今のは褒められたのか揶揄されたのか分からんと、リアクションに迷う京矢なのであった。

57話：兆候【中編】

王宮のテラスから見渡す景色は、灰色の岩山と渓谷が続く世界。部屋に戻れば鮮やかな色合いで染め上げられたフカフカの絨毯やフリルの付いたカーテン、やわらかいベッドには動物の縫い包みが沢山飾られている。

自分の為に用意されたその部屋は、賑やかな極彩色とは裏腹に、いつも暗く寂しい。人と接する事が苦手だったメルエシードは、王宮の廊下などに垂れ下がる厚手のカーテンの裏に隠れながら、使用人達の噂話に耳を欬てて外の世界の事を知る。

「デイド様がとうとう部隊を指揮する立場に就かれたとか」

「流石よねー、美男子で勇敢で賢くて、国王様が入れ込む気持ちも分かるわあ」

「なんでもエツリアの皇女様と手合わせして互角だったんですって？」

「ここだけの話、国王様は将来デイド様を皇帝陛下の後継者に推すつもりなんだそうよ？」

兄王子が褒められているのを聞くのは嬉しい。普段構ってくれない父王の変わりに、兄デイドはいつも優しくしてくれる。しかし最近は何の稽古や軍の人達と難しいお話しをしたりする事で忙しいらしく、あまり遊んで貰えなくなった。

「それにしても、デイド様はどんどん立派に成長なさってるのに

……メル様は相変わらずね」

「今日もお部屋に居なかつたの？」

「そーなのよ、偶に居たかと思えば直ぐベッドやカーテンに隠れちゃっし」

「照れやさんなのはいいけれど、今のままだと将来が心配だわ」

やっぱり隠れるのはいけないコトなのだろうか？ デイード兄さまにも言われたように、もっと人とお話しなくちゃダメなんだろうかと、カーテンの裏でもじもじと考えるメルエシード。

『そつだ、もうすぐお誕生日パーティーがあるからその時に』

去年までは沢山の料理やプレゼントに囲まれ、多くの人々を前にして俯いたまま兄王子の背中に隠れて過ごしていた。今度のパーティーでは祝ってくれるみんなにちゃんとお礼を言ってまわろう。そう小さく決意する。

そして、メルエシードが十二歳の誕生日を迎えた祝いの席で。

「西の渓谷を渡つたと？」

「ハッ、恐らくは北側の廃鉱を根城にしようとしているのではないかと」

反乱軍の本隊と思われる大部隊がマーハティーニの国境を越えて渓谷を横断し、廃鉱が集中する区域に移動しているという緊急報告を受けたレイバドリエード王は直ちに征伐隊を組織して向かわせるよう指示を出す。

次々と席を立って会場を後にする軍関係者と、後に続く彼らの部

下や従者達。今日のパーティーに出席していた将校達と共に、デイドルバート王子も部隊の指揮官として征伐に参加する。

俄かに物々しくなったパーティー会場の雰囲気は呑まれながらも、メルエシードは兄王子を気遣って声を掛けようとした。

「兄さま……」

「メル、後にしなさい。よいかデイドよ、渓谷の橋は落としても構わんが、廃鉱はいずれ精製工場として再利用する予定だ」

反乱軍に立て籠もられる前に出入り口を封鎖し、入り込んだ者の排除を徹底するようにと方針を伝えるレイバドリエード王。二人の周囲に各部隊の指揮官が集まり、大まかな作戦について意見を交わし合いながら軍司令部へと足を運ぶ。

会場を出る際に一度振り返ったデイドルバード王子は、主賓の席で一人ぼつんと残され心配そうな表情を向けているメルエシードに『大丈夫だよ』と軽く手を振ると、使用人達に後を託して反乱軍の征伐へと赴いたのだった。

緊急事態であったとはいえ、これではあまりに可愛そうだと同情されたメルエシードは、この日から少しづつ使用人達と交流する機会が増えていき、少々俗な知識に偏りながら育ったお陰で社交性は増したが中途半端に早熟な少女へと成長してしまったのだ。

「手の早い男は飽きるのも早い、こちらから惚れ込んじゃダメだつてみんなは話してたけど……」

”彼”はどっちなんだろう？ と、メルエシードは首を傾げる。

離宮の庭園にて初対面で誘惑した時は割りとおつさり乗ってきたよ
うだが、その後はまったくさういう気配を感じさせない。

スィルアツカ皇女が目を光らせている事を考慮しても、何かしらの
アプローチがあってもいい筈だ。

「貞操観念が強い国出身らしいって聞いたし……わたしじゃダメな
のかな」

薄暗い部屋でまどろみに浸りながらぼんやり情眠を貪っていたメ
ルエシードは、そろそろ出発の準備が整う事を告げられて気だるそ
うに起き上がると、香皿の中で粉々になっている先日灰にした手紙
の燃えカスに一瞥を向けつつ着替えをしに立ち上がった。

エツリアの領内で水源から離された位置に建設されている幾つか
の魔導技術研究施設。研究用の機材も運び込まれ、食料の備蓄や貯
水処理も完了して稼働を始めた施設の一つに、マーハティーニから
派遣された研究者を含む視察団が訪れていた。

「なあにこの建物、帝都の兵器工場にそっくりじゃない……壁面に
装甲まで貼ってあるわ」

「この形式の建物は賊に侵入され難いって事が帝都の工場で実証さ
れてますからね。昼間は屋根の上で肉が焼けるそうですよ」

「暑そう」

「エイオア製の呪術式室温調整機を導入してますから、中は意外と

快適ですよ」

案内人の説明を受けながら研究施設の入り口を潜るマーハティ―二の一団。本国から派遣されている研究者達は今回の視察に同行している王族、メルエシード王女の存在に緊張を懐きながらも、設備の整った研究環境に感嘆の溜め息をつく。

「本格的な稼動には研究員の生活全般を支える世話係として使用人も必要になりますので、まだ先になりますか」

現状でもそれなりに研究は行えると説明をしながら施設の内部へと案内されるメルエシード達。

施設内は建物の三分の一が生活に関する区画になっていて、一階に使用人達が住む部屋と並んで厨房や食堂などが用意され、研究員の居住区はその上の二階と三階部分に分かれている。

研究実験を行う区画は一階から三階まで吹き抜けにしてあり、建物の中を一周する廊下の上階から研究区画全体を見渡すことが出来る造りになっていた。

一通り案内も終わり、ここらで一息つきましようかと三階のサロンへ通された一行は、先に来ていたらしいエリアの視察団グループと同席する事になったのだが、メルエシードはそこで意外な人物と顔を合わせた。

「あれ？メルエシード？」

「え？どうしてあなたがここに」

エリアの視察団グループには京矢も混じっていた。結構前から視察の予定が決まっていたらしく、そういえば以前そんな話を聞いた事があると思いついたメルエシードは、まさか同じ施設だったと

はと偶然の出会いを喜んだ。ここには何時ものお目付け役も居ない。

「あなた魔術には詳しいの？」

「基本、さっぱり」

「うふふっ わたしも」

「難しいよな」

コウの知識を使えば覚えられなくはなさそうだが、魔力の感覚というモノが上手くイメージできないので扱えるようになるには相当掛かるのではないだろうかと自己分析している京矢は、この世界の人間で王族というエリート層にいる者でも使えない人は使えないモノなのだ実感して何となくホツとする。出来ない者同士の共感のような駄目な方向にだが、ちよつと前向きな気分になれた。

「出来る人が出来る事をやればいいんだよ」

「そうよね、できないことまで無理にすることないわよね」

何だか意気投合している二人。エツリアの異世界人とマーハティ二の王女に、双方の視察団一行から微妙な視線が向けられていたそうなの。

機械化兵器工場で新型戦車の試乗会に出席していたスイルアツカは、ターナからこの後の予定を聞く傍らコウに京矢の様子を尋ねた。そろそろ視察に向いた魔導技術研究施設から帰還する準備に入っ

ている頃だろう。

「今は、メルとお話ししてるよ」

「……なに？」

「ああ、そう言えばマーハティーニから派遣された研究者一行も今日視察する予定でしたね」

「いや待て、何故そこにメルが同行している？」

京矢が今日視察に行く予定は誰にも話していなかった筈だ。京矢自身も当日の朝にスイルアツカから行って来いと送り出されたので、幾ら諜報に聡いメルエシードでも京矢の出發を察知してマーハティーニの視察団に自身の同行をねじ込むのは無理がある。

「偶然でしょう、元々マーハティーニの視察団には同行する予定だったのでは？」

「メルもキョウヤが居たことに驚いてたよ」

「うむむ……そうだコウ、くれぐれも羽目を外し過ぎないようにとキョウヤに」

「スイル様、次はエイオア大使との会談のあと冒険者協会の使者と新しい交易商の認可についての話し合いに出席です」

さあさあ次の公務に向かいますようと話題を流すターナに背を押されながら、スイルアツカは何かあれば直ぐに知らせるようコウに念を押すのだった。

そして、異変はスイルアツカの懸念とは全く違う形で現れた。

魔導技術研究施設の三階サロンにて、エイオアから取り寄せられたアルメツセ産のお茶など楽しみながら談笑していた視察団一行の所へ、彼らを警護する兵士が駆け込んで来て皆に避難を呼びかける。

「一体何事です？」

「我々にも何が起きているのか分かりませんが、一部の兵士達が反乱を起こしたようです」

「反乱!？」

「下の階で何人かここの研究員が殺害されました、皆さんは早く避難を」

この施設の正式な入り口は正面にある一箇所しかないが緊急用の避難路が一階廊下の奥にある筈なので、警護隊が二階の通路と階段を護つて反乱兵士達を引き付けている間にそこから脱出して欲しいと説明する警護隊の兵士。

やがて下の階から剣戟の打ち合う音や火炎砲の炸裂音が轟き始める。

「急いで下の階へ!」

先導する警護隊兵士に続くエツリアとマーハティーニの視察団一行。特に要人である京矢とメルエシードは集団の真ん中辺りに挟まれて前後を護られながら移動していた。

『なんか、エライ事になったなあ』

この非常事態は既にコウを通じてスイルアツカ達にも伝わっており、公務の会議を中断したスイルアツカが兵を率いてこちらに向かつて来ているらしい事を確認しているので、比較的落ち着いて周り

の状況を観察している京矢。

何となく、ベルトのホルスターに納まる小型火炎砲を手で確かめた京矢は、これを使わなければならぬ状況になっただらうしようかと考える。装弾数は二発。威力は十分だが命中精度は最悪。予備弾は持つて来なかつたので一度使い切れればそれで撃ち止めだ。

もし使う時があるとするれば、本当にここぞという時の切り札として抜く以外には考えられない。

避難路へと誘導される視察団一行の皆はエツリア領内の研究施設で警備兵が反乱を起こすなど、今ひとつ実感の伴わない戸惑いの表情を浮かべていたが、二階に下りて来た所で反対側の階段昇降口を固める警護隊兵士の一人が火炎砲の一撃を受けて隊列から弾き出される姿を目撃した事で現状の危険さを認識した。

壁際に大きな血痕を残して動かなくなった警護隊兵士。避難を勧告に来た警護隊兵士の話では、下で作業をしていた施設研究員達は既に殺害されているとの事だった。

「やはり反乱軍との繋がりが？」

「分らん、幾ら連中が神出鬼没といっても、簡単にエツリア領の研究施設に侵入できるとも思えんし」

視察団の中でも軍との関わりが深い有力家出身の研究者達が憶測も交えながら、反乱を起こしたとされる兵士達の目的について議論を交わす。反乱軍にとってもエツリアの持つ魔導技術は機械化技術ほどでないにせよ十分な価値を持つモノの筈だ。

しかし真つ先に無力な研究員を拘束、誘拐するでもなく殺害している。とすれば、反乱の目的は研究成果の奪取などではなく、単純に施設の壊滅を狙っているのかもしれない。

「反乱軍に寝返る手土産として、要人の誘拐という線は？」

皆の視線がメルエシードと京矢に集まる。が、有力家出身の研究者は『それはないだろう』と首を振った。

今日、ここを訪れる視察団にマーハティー二の王女やエツリアの皇女殿下直属の要人が同行するという情報は、一般兵には勿論のこと軍上層部でもほんの一部にしか知らされていない極秘事項なのだ。要人の来訪に合わせて反乱を起こしたとは考え難いという。

「或いは、マーハティー二の背後を脅かす為の作戦か」

つい最近になって反乱軍の本拠地が見つかったらしく、マーハティー二のデイドルバード王子率いる征伐軍がかなり押し込んでいくという戦況が聞かれていた。ナツハトーム軍内部に潜む反乱軍のシンパが、本隊を援護すべく行動を起こしたとも考えられる。

「だとすれば、エツリアには相当数の内通者が入り込んでいる事になるぞ……」

「この警備にあてられた兵のほぼ全員が一度に決起している訳ですからね……」

それこそ兵員の配属を管理する部署から調べなくてはならないだろうと唸り合う。そうこうしている内に一階まで下りてきた一行。

先導する警護隊兵士が廊下の様子を窺う。建物の中を一周する廊下には一定区間に隔壁が降りる仕掛けが施されており、反乱兵が襲撃している正面入り口側の廊下と、こちら側の廊下は完全に隔てられている。

「よし、敵影なし。このまま進んで研究区画の中程まで行けば緊急

避難用の出口がある筈なので、そこから」

先導役の兵士がそこまで言った時だった。不意にカツカツという廊下の床石を突つくような音が迫って来たかと思うと、警護隊兵士の胸部から鮮血と共に生える白い突起状の物体。

一瞬の驚きに硬直した兵士の身体が絶命によって弛緩し、その身を貫通している突起物からずりりと崩れ落ちる。

「召喚獣だ！」

警護隊兵士の身体を刺し貫いたモノの正体、それは頭部に槍のような鋭い角を持つ一角狼型召喚獣。安価で手に入る召喚獣の中でもそこそこ高い性能を誇り、使い勝手が良いので多く普及している型の召喚獣だ。

「二階の居住区へ！」

もう一人の警護隊兵士が視察団一行に退避を呼び掛けながら一角狼に斬り掛かった。たちまちパニックになりながら我先にと階段を駆け戻っていく視察団の面々。

「きゃあっ」

「メルエシード！ 手をつ」

急激な人の流れについて行けず、足をもつれさせて転びそうになりながら、メルエシードは差し伸べられた手を必死につかんだ。ぐいっと引っ張り上げられるように階段を駆け上がる。

二階の廊下に出ると、反対側の昇降口を固めていた護りが崩されてこちらに向かって来る反乱兵の姿が見えた。

「うわっ 駄目だ！」
「逃げろっ！」

緊張と恐怖の為に白く霞み掛かる視界と意識。バラバラに逃げ惑う視察団一行。自分を置いて何処かへ去っていく彼等の後姿が、幼少の頃の記憶と重なる。

…… みんな、どこへいくの……？ 母さま…… 父さま…… 兄さま……
メルをおいていかないで

大人たちの背中が遠ざかっていく中、特徴的な無地のベストを弾ませ、腰に下げた小型火炎砲のホルスターを揺らしながらしっかりと握られた手を引く青年の背中には、自分を置いて行く事なく振り返った。

「 エシード！ おいメル！ 大丈夫か！？ 気をしっかり持て
！」
「っ！」

白く霞み掛かっていた視界が戻り、遠くに響いていた喧騒が直ぐ近くで聞こえ始める。途端に息が苦しくなった。

「はっ わ、わたし」
「とりあえず、近くの部屋に隠れるぞ」

同じく息が上がっている京矢は、背後に反乱兵の姿が見えない事を確認して適当な部屋へと駆け込み、音を鳴らさないようにそつと扉を閉める。部屋は施設で働く研究員に用意される一般的な間取りのワンルームで、壁際に椅子とテーブルが並ぶ他は奥にベッドが置いてあるだけの殺風景な作りだ。

「一応鍵は掛けとくか……大丈夫か、メル？」
「う、うん……だいじょうぶ」

その時、施錠したばかりの扉がガタガタと揺れる。思わず飛びのいて注視する京矢とメルエシード。

扉を開けようとしているらしく、ガチャガチャと騒がしく鳴っていたドアノブは部屋の外から男の断末魔が響いて静かになった。視察団の中にいた誰かの声に似ていたような気がする。甲冑のこすれ合う音と共に漏れ聞こえる反乱兵のモノらしきぐもった話し声。

「この部屋は？」

「鍵が掛かっているようだ」

「中に隠れていないか調べよう」

鍵を壊して扉をぶち破った兵士達が部屋に踏み込む。まだ使われなかった痕跡のない新品の部屋は生活臭もなくガランとしており、人の気配も無い。質素なテーブルと椅子、申し訳程度に置かれた安っぽいソファア、奥のベッドはシーツも畳まれたままだ。

「……誰もいないようだ」

「とりあえず、この階と上の階の部屋は虱潰しだな」

隠れる場所もなさそうなシンプルな部屋を見渡して無人だと判断した彼らは、時折り怒号や悲鳴が響く廊下へと出て行った。傾いて半開きになった扉の揺れが収まる頃、使われた形跡のないベッドの畳まれたシーツがもぞりと動く。

「行ったみたいだ……」

「そうね……」

シートの下から顔を半分覗かせた京矢とメルエシードは小声でそう確認し合う。隠れるのは得意というメルエシードの気転でベッドのマットレスと底板の一部を外してソファアーに偽装し、二人してベッドの中に潜んでいたのだ。

「これがホントのベッドイン」

「ん？ なぁに？」

「なんでもないです」

当面の危機を回避できた事で少し気持ちに余裕が出来た京矢は、つまらない冗談など口にしつつ意識の奥でコウに状況を伝えて、同時にスイルアツカ達が現在どの辺りにいるのかを把握する。

一番足の速い新型戦車でぶっ飛ばして来ているので、暗くなる前には救出に現れるだろう。伝書鳥を使うコウならもっと早く来られるのだが、コウは施設の正確な位置を知らない。

「とにかく、夕方まで隠れてればスイルアツカ達が来てくれる。それまでの辛抱だ」

「スイル姉さまが？ でも、夕方は無理だと思っわ……ここには”対の遠声”も置いてないみたいだし」

兵達の反乱がエツリアに伝わるまでかなり掛かる筈だと眉尻を下げるメルエシード。視察団の誰かが話していたように反乱兵達の目的が施設の壊滅だったならば、生存者の有無に関わらず建物に火を放つくらいはやりそつだ。

「ああ、その問題があったか……イザって時は直ぐ外に出られる場

所の確保はしておきたいな」

「そうね……一階の、もう調べ終わった場所に隠れ直せば大丈夫かも」

さっきの兵達は二階と三階の部屋を搜索するような事を言っていたので、どうにか一階の食堂や厨房にでも潜り込めれば上手くやり過ごせるかもしれない。

廊下にいた召喚獣は厄介だが、あの型はあまり複雑な命令や一度に複数の命令には対応できない仕様の筈。

「単独で動いてる奴なら、物音とかで気を逸らせて突破できると思う」

「じゃあ、兵士達と合流しない内に下りる？」

「うーん……下を見張ってる奴もいるかもしれないから慎重に行きたい所だけど」

と、その時、部屋の前を駆け足気味に通り過ぎる甲冑の音が響き、反乱兵達の話し声が聞こえてきた。京矢とメルエードは互いに目配せし合いながら再びベッドの中に身を潜めると、相手の情報を探るべく耳を敬てる。

「この階には居ないようです」

「三階も全て調べましたが、見つかりませんね」

「そっちはどうだ」

「駄目です、食堂や厨房、使用人部屋、食糧庫や貯水槽まで調べましたが、何処にも見当たりません」

既に施設の外へ逃げたのでは？ と問う部下らしき兵士に、隊長格の兵士がそれは無いと否定した。出入り口は避難路も含め、全て

見張りの兵と召喚獣で固めてあったのだ。襲撃開始時、ターゲットは三階のサロンにいた事も確認している。

「一階に繋がる手前と奥の階段は完全に制圧していたからな、必ず二階か三階の何処かに居る筈だ。もう一度よく探せ」

家具やベッドもひっくり返し、壁などにも隠れる穴がないか叩き割って徹底的に調べると指示を飛ばす反乱兵の隊長。

細工したベッドの中でシーツを頭に乗っけながら顔を見合わせた京矢とメルエシードは、ここも直ぐに見つかる危険が出てきた事で行動の決断を下した。

兵士達が他の部屋でどつたんばつたんと音を立て始めた頃を見計らい、半開きの壊れた扉からそつと廊下の様子を窺う。部屋の前には使節団の一員だった男性の亡骸が転がっていた。見張りの姿が無い事を確認して速やかに部屋を抜け出す二人。

「いきなり階段に行くのは危険だな」

「ええ、この階で彼らがひっくり返した部屋に隠れ直すのがいいと思っわ」

身を隠し難い広い廊下に出ないよう気をつけつつ居住区の狭く入り組んだ廊下を伝って家捜し状態の部屋を迂回し、既に調べ尽くされて家具の残骸が散乱する廃墟のような有様の部屋へと忍び込む。

「ベッドが穴だらけでバラバラになってる……」

「壁にも穴があいてるな、絨毯まで引っぺがしてあるぞ」

ここまで徹底して調べた後なら、もう二度と探りに来る事もあるまい。そう判断した京矢は入り口から見えない場所に陣取り、散り散りに千切れたベッドマットと破れたシーツを床に敷いて休む場所

を作ると、壁を背に一息つく。

隣にちよこんと座って身を寄せるメルエシードも緊張が和らいだのか、大きく息を吐いた。反乱兵達が他の部屋でドタバタやっている音を聞きながら、暫し会話も無く沈黙の時が続く。その間、京矢は意識の奥でコウと連絡を取り合っていた。

状況を整理し、考える時間を得たメルエシードの心に、一つ気掛かりな事が思い浮かぶ。

『あの兵士達が探してるターゲットって、わたし達の事よね……？
でも』

有力家出身の研究者は”特に要人を狙って行動を起こした訳ではないだろう”と推察していた。その理由として、今日ここを訪れる視察団員の中に重要人物が含まれる事を知る者は、ほんの一握りの上層の人間しか居ないからだ。

偶々反乱を起こそうとしていた所へマーハティニーの王族やエツリアの皇女殿下直属に在る者が視察に来たものだから、これ幸いとターゲットに据えて事に至ったのかとも考えられる。

ここまで執拗に搜索しているのは、やはり要人の誘拐か、或いは殺害が彼らの目的ではないのかと。メルエシードがそこまで考えた時だった。

「隊長！ ちょっと来て下さい！」

何処かの部屋から反乱兵の叫ぶ声が響く。京矢とメルエシードは声の方向と位置的に見て、最初に隠れていた部屋だろうと当たりをつけた。そしてその予想は当たっており、順番に部屋を探っていた兵士がベッドの細工を発見して隊長に意見を聞こうと声を掛けたのだ。

「……最初にこの部屋を調べた者は？」

「ハッ 自分達です」

詳しい状況を聞き、この部屋に逃げ込もうとしていた視察団員を斬り捨てて彼らが部屋に踏み込もうとした時、扉の鍵は掛かっていたという事実を突き止めて確信する反乱兵の隊長。

「他の部屋で鍵が掛かっていたのは、どれも使われている部屋だったな」

「そう言えばそうですね、空き部屋はいずれも鍵は開いていたかと」
「すると……あの時ここに？」

「よし、三階の者も呼んで全員でもう一度この階を調べつくせ！
近くに居る筈だ！」

隊長の号令で上の階へ連絡に走る者や武器を構え直す者、少人数で隊を組んで端の方にある部屋を目指す者達と、それぞれ動きを見せ始める反乱兵達。

副隊長のポジションに居るらしき別の兵士が、部下達を鼓舞するように作戦内容を補足しながら命令を飛ばす。

「見つけたら確実に仕留めろ、女とて容赦するな！ それと、男の方は間違っつて殺すなよ、ターゲットを仕留めたら直ぐに撤退だ」

58話：兆候【後編】

反乱兵達の会話を近くの部屋に潜んで聞いていた京矢は、その内容に首を傾げる。彼らが施設の研究員や視察団の生き残りではなく自分達を探している事は、もはや疑いない。

だが、『女とて容赦するな』と確実に仕留めるよう指示を出しつつ、『男の方は間違つて殺すな』と注意を促している。

「なんだ……？ どういう意味だ？」

更に続いた『ターゲットを仕留めたら直ぐに撤退』という言葉から考えると、彼らの”ターゲット”とは”京矢^{自分}とメルエシード”ではなく

「アイツらの狙いつて、メルエシードなのか？」

隣でメルエシードが僅かに身じろぐ。京矢と同じ結論に至っていたメルエシードは自身が狙われる理由を考えていた。

反乱軍の征伐に関しては筆頭国であるマーハティーニに揺さぶりを掛けるのが目的かとも思ったが、それならば暗殺よりも誘拐や拉致による身柄の確保で人質にとる方が効果を望める筈だ。

それを実行できるだけの条件も揃っている。にも関わらず暗殺を選ぶ理由。

『単なる浅慮？ 私怨？ それとも』

破壊された内装や家具の残骸が散乱する薄暗い部屋の隅で、息を潜めて身を寄せ合う京矢とメルエシード。

三階にいた兵士達も降りてきたらしく、二人が隠れている部屋の前を通り過ぎる兵士達が今回の”襲撃任務”について話し合う。先程の副隊長らしき兵士と同じく、直ぐ近くで”ターゲット”に聞き耳を立てられているとも知らずに。

「しかし何で暗殺なんだ？ 人質にしてマーハティーニの兵を退かせる方が本隊を救えるんじゃないか？」

「いや、なんでもここで殺す事に意味があるらしい。その為にこれだけの精鋭を投入して施設を制圧したんだからな」

マーハティーニとエツリアを切り崩す作戦らしいと話す兵士達の会話を聞いた京矢は、何となく今回の事件についてのあらましが見えた気がした。『ここで殺す事に意味がある』という内容から察するに、エツリア領内の施設で反乱を起こした兵士によってメルエシードが殺害される事で、マーハティーニとエツリアの関係を拗らせようという目論みなのかもしれない、と。

『確かに両方の国の要人が居て、片方があからさまに見逃されたりすれば、殺された側の国は疑念の一つや二つ持つかもしれないな』

次期宗主国の座を狙えるほど勢いのあるマーハティーニは、潜在的にエツリアとの対立姿勢も見え隠れしているとスイルアツカが言っていた。ナツハトム内部で二大有力国が対立を始めれば、周辺国も巻き込む混乱が起きて反乱軍も動き易くなるのだろう。

幾つか気になる点を残しつつも、反乱軍と通じているらしい反乱兵達の目的について京矢がそんな推測を立てていた時、隣で静かに思考をめぐらせていたメルエシードはもっと深い所まで考えを至らせていた。

京矢はまだ反乱軍についての詳しい知識を持っていないが、メルエシードは幼少の頃から色々と話を聞いて育っている。

反乱軍と呼ばれる彼らは”バツフェムト独立解放軍”を自称する武装集団で、ガスクラツテ帝の治世に抗い独立を掲げて叛旗を翻した小国の集団だ。

一応、自称名の通り”バツフェムト”という海沿いの港街を首都とする小国を治めていた一族の長が首謀者なのだが、その実態は規模の大きい盗賊団と大差なく、周辺国を渡り歩く訓練されたごろつき集団であると揶揄されている。

これまでに幾度となく繰り返された征伐軍との攻防でも特にこれといった戦略的な行動は見られず、ナツハトーム中の彼方此方に派遣された反乱軍部隊が物資を調達してはそれを軍資金に換えて補給を繋ぎ、兵を増やし、本隊は常に移動して征伐軍をやり過ごす。”独立解放”の呼び掛けと決起を促す宣伝はしているようだが、近隣諸国で反乱軍の主張に同調する者は少ない。

そんな行き当たりばったりな彼等に、二大有力国を相手取ったここまで政治的な策略を仕掛けられる下地が果たしてあるだろうか。今し方聞いた兵士達の会話内容からして、今回の反乱は予め計画されていたモノである事が分かった。

『つまりそれって、今日ここに”彼”や”わたし”が視察に来る事を知っていた？』

ふと顔をあげ、隣に座って扉の方を注視している青年の横顔を見上げる。彼が今日ここを訪れる事は、宮殿に敷いた自分の諜報網を持ってしても、まったく掴めていなかった。

例の懲罰で多少精度が落ちたとはいえ”彼”の予定を探り出す事は難しくなく、本人も今日の朝になつていきなり皇女殿下スィルアツカから行つて来いと言われたそうなので、エツリアの要人が視察する情報は完全に伏せられていた事になる。

メルエシードと京矢がここで顔を合わせたのは、本当に偶然なのだ。それはつまり

『反乱を起こした兵達は、今日ここに”わたし”が来ることを知っていた』

そして彼らは自分をターゲットにしている。その事に気付いた瞬間、メルエシードの脳裏を過ぎる手紙の一節。

今回の視察に赴くよう通達を受けた日、父レイバドリエード王からの手紙の最後に記されていた『我が祖国と兄ディードルバード王子の為に、マーハティーニの王女として役に立て』という一文の意味を唐突に悟る。

マーハティーニの王女として役に立つ事とは、”エツリア領内の施設で反乱軍を名乗る者に殺される事”なのだ。

岩山を刳り貫いて造られたマーハティーニの王宮にて、政務に励

むレイバドリエード王は執務室にやって来た伝令と連絡諜報員から反乱軍の動向や征伐軍の状況、エツリアの施設の様子などについて報告を受けると、うむと頷いて必要事項を記した書類を伝令に渡す。新しい指示を受け取った伝令はそれを現場の征伐軍本隊に届けるべく執務室を後にした。

部屋に残った連絡諜報員は特に指示を出すでもないレイバドリエード王の傍らに控えると、徐に訊ねる。

「姫様のこと……本当に、よろしかったのですか」

「構わん、あれも王族の女に生まれた意味を理解しているだろう。それよりも、雇った連中はちゃんと仕事を果たせるのだろうな」

「反乱軍の兵がどれだけ使えるかは疑問ですが、指揮に雇った者の腕は確かです。実績も問題ありません」

「まあ……目的さえ果たせばよい。安くはない出費だったのだからな」

レイバドリエード王が仕掛けた一連の策略。高給触媒の買い付け資金を出す事でスイルアツカ皇女に対してメルエシードとマーハテイーニの信頼を回復し、便乗の触媒ビジネスで儲けてエツリアの一人勝ちを阻止。

魔導技術研究参入の足掛かりとして稼動を始めたエツリアの魔導技術研究施設に研究員の視察団を送り、同行させたメルエシードがそこで反乱軍に殺害されるよう仕向ける。

エツリア国内で起きた事件で来賓の王族を死傷させるという不名誉をエツリアに被せる事で優位な立場を得ると、責任の追及がたら機械化兵器技術の支援を求めていくのだ。

その過程で、機械化技術にも欠かせない魔導技術研究に貢献したメルエシードを死なせたのは技術の流出阻止を優先したエツリアの

故意ではないかという疑いの噂も絡めて圧力を掛けつつ、メルエシードに資金の相談をした異世界人の動向も注視していく。

メルエシードが件の異世界人に想いを寄せ始めていた事も報告で明らかになっていたので、その異世界人がメルエシードに気があったならば、今後エツリアに不審を懐くかもしれないという期待もある。

「お前はエツリアからの急報に備えて待機しておれ、下がってよいぞ」

「御意……」

ふいに立ち上がったメルエシードに『どうしたのかな?』と視線を向けた京矢は、震えながら扉に向かって歩き出した彼女の腕を咄嗟に掴んだ。

「離して……、わたしが行かなくちゃいけないの」

「何言ってるんだ」

「大丈夫。わたしが彼らに投降すれば、あなたは助かるから」

そう言って無理に笑顔を繕おうとするメルエシード。だがその顔は血の気も引いて青白く、恐怖や哀しみがありありと表れている。京矢の心に得体の知れない強い憤りが湧き上がった。

「あ、今のカチンと来た。ムカついた」
「え、え？」

「女の子見殺しにして自分だけ助かるとか、俺そこまでへたれじゃない」

「いや、あの……そうじゃなくて きゃっ」

どう説明すれば良いのかと戸惑うメルエシードの震えている手をしっかりと握りなおした京矢は、少し乱暴に引き寄せてとりあえず隣に座らせながら言った。

「ムカついたから、ぜってー離してやらない」

「キョウヤ……」

初めて京矢の名を口にしたメルエシードは、強く握られたその手を振り解く事が出来なかった。”自身の役割”を果たそうとする気持ち、絶る想いが妨げる。やはり怖いものは怖い。王族としての自覚はあれど、生に繋ぎ止めてくれる手を振り解けるだけの覚悟は、まだなかった。

薄暗い廃墟のような部屋の壁際に無言で並び座る二人。暫くそのまま、沈黙の時間が過ぎていく。

「……………」

廊下を歩く複数の足音が近付いて来ている事に気付いた京矢は、警戒しながらゆっくりと立ち上がった。

もうこの部屋を調べに来る事は無いだろうと思っていたのだが、反乱兵達を指揮する隊長はこの階にターゲットが隠れている事を確信しているらしい。合流した兵達の足並みを揃えて端の部屋から順番に限なく調べ直しているようだ。

「やばいな、こりゃ隠れながら移動するって訳にはいかなそうだぞ」
「……キヨウヤ、やつぱりわたしが……」

そつと手を解こうとするメルエシードをもう一度引き寄せて”離す気は無い”という意思表示を見せる京矢。意識の奥より伝わるコウからの情報では遠くに施設の影を捉える位置まで来ているらしい事を確認している。

「大丈夫だつて、スイルアツカ達がもう直ぐそこまで来てる」

外に出られさえすれば助かると励ます京矢に、コウと京矢の関係を知らないメルエシードは自分に生きる希望を持たせる為に鼓舞してくれているのだらうと認識した。その心遣いに胸を打たれる。

手紙にはハッキリ『ここで死ぬ』と書かれていた訳ではない。どうにかこの状況を生き延びて、手紙の意味には気付かなかった振りですらばつくれるという手もある。そんな選択を思い浮かべた時、メルエシードの震えていた身体は少し落ち着きを取り戻した。

「部屋へ踏み込まれる前に一気に走り出て一階を目指そう」

「でも、階段にも見張りがいるかも……」

「大丈夫、そんなときやこれを使う。撃たなくても威嚇くらいにはなる筈だし、上手くいけば……向こうの裏を掻けるかも」

ベルトに付けた小型火炎砲のホルスターをポンと叩いた京矢は、一か八かになるが反乱兵達の作戦を逆利用して脱出する手を思いついていた。

探り尽くされて滅茶苦茶になっている部屋を搜索して回る兵達。隊長は必ずこの階にいと確信しているようだが、既に二度も調べた部屋まで見て回る作業に意味はあるのかと半信半疑だった彼等は、突然それらの部屋の一つから飛び出してきた二人組みに思わず緊張を高める。

「っ！ いたぞっ ターゲットだ！」
「ほんとに居やがった！」

居住区の狭い廊下から施設を一周する広い廊下へと一気に駆け出す京矢達。走りやすい屋内の廊下、重武装の兵達より身軽な京矢とメルエシードの方が素早く移動できる分、短い距離なら追いつかれる前に目標地点へ到達できる。

携帯火炎砲を構えた隊長らしき兵士が片膝を付きながら狙いを定めて叫ぶ。

「どけっ 射線をあける！」

追って来ていた兵士達が足を止めて廊下の壁際に避けた事で飛び道具による狙撃に気付いた京矢は、彼らの作戦を逆利用すべくメルエシードに指示を出す。

「メルっ 俺の前を走れ！」

そう言ってメルエシードの後ろにぴったり付いて走る京矢は、廊下の先に気を配りながら後方で携帯火炎砲を構える反乱兵の動きに注視する。

『さて、撃つてくるか……？』

携帯火炎砲は命中精度が低いので正確な狙撃には向いていない。当てるだけなら少々距離があっても腕次第という所だが動いている相手の何処に当たるかは運任せになる。威力が高いので当たり所によつては死亡させてしまう。

「ちい……追えっ 逃がすな！」

『よし！ やつぱり撃つてこなかったぞっ』

メルエシードを暗殺のターゲットにしながら、同時に京矢^{自分}への攻撃は禁じられているらしい。何か裏がありそうだが、今は逃げる事を優先する。

「キョウヤ……っ！」

廊下の角を曲がった瞬間、メルエシードが小さく叫んで足を止める。前方の階段前に立つ反乱兵の姿が見えた。騒ぎを聞いていたのか、既にこちらには気付いているようだ。

「止まるなメル！」

ポンと背を叩いて前に出た京矢はホルスターから小型火炎砲を抜いた。階段前で剣を構えている兵士は一人。とにかく自分が前面に立てば反乱兵達は攻撃を躊躇する事になるのだから、メルエシードを一階に逃がす隙くらいは作れる筈だと睨む。

「そこをどけえー！」

小型火炎砲を正面に構えて突進する京矢。相手が殺す気で掛かれば恐らく一振りで倒されるであろう事を自覚する京矢は、正直怖くて腹にも力が入らないような状態だったのだが、意識の奥から励ましてくれるコウの声とコウが経験して来た戦いの記憶、それにメルエシードを護らなくてはという使命感にも似た自尊心を勇気に変えて廊下を蹴り出し突き進む。

対峙する若い兵士は”殺してはいけない人物”と命令されている相手の突撃にどう対処すべきかと戸惑った。

少し風変わりな格好をしたその相手は火炎砲らしき武器を向けて突っ込んで来る。エツリアの機械化兵器でも歩兵の主力となりつつある携帯火炎砲の威力は、施設の制圧時に隊長が使用している所を見て十分に理解している。

あの強力な武器はただの一般人でも敵に向けて引き金を引くだけで魔術士が放つ火炎弾並みの攻撃を繰り出せるのだ。一撃必殺の攻撃力を持った相手を傷つけずに無力化できる自信は無い。

ここは防御の構えで足止めをして時間を稼ぐのが得策かと判断した兵士は剣を盾にして立ちほだった。

「……くっ」

相手が怯まず通せん坊をして来た事で後に退けなくなった京矢は、小型火炎砲の威力を信じてそのまま接近、絶対外さない距離まで詰めて引き金を引いた。ドンツという発砲音と共に反動で腕が跳ね上がる。

「がはっ！」

至近距離から放たれた火炎弾は兵士の剣を砕き、甲冑にめり込んでその身体を弾き飛ばした。

背中から派手に倒れ込む兵士を捨て置き、駆け寄って来たメル工シードの手を引いて一階へと続く階段に踏み出す。追っ手がすぐ後ろに迫っている今の状況で悠長に下の様子を探っている暇は無い。もし召喚獣がいた場合、京矢じげんに対する攻撃不可の命令が与えられている事を祈りつつ廊下まで一気に駆け下りる。

「えーっと、出口は右かつ」

「ええ、そっちの キョウヤ！」

廊下の先に見える施設の正面出入り口前に立つ兵士が二人、一瞬戸惑った様子でこちらを向いた。

召喚獣は居なかったが出入り口を兵士に固められていたようだ。こりゃダメだと踵を返す京矢。出入り口前の兵士達もまさかターゲットが目の前に現れるとは思っていなかったようで、京矢達が背中を向けて走り出した所でようやく追跡に動き出した。

「この先は食堂とか厨房だっけ!？」

「確かそう聞いているわっ」

食堂の出入り口は広く大きめに作られており、廊下の途中からも中の様子が窺える。長いテーブルや椅子が散乱している食堂は柱が少なくて見通しもよく、開け過ぎているので身を隠せそうも無い。ならばこの先にあるらしい使用人達の部屋が並ぶ一角に逃げ込もうと、食堂を素通りして廊下を左に曲がった所で足を止めた。

「って、隔壁かよっ」

「そんな……」

対侵入者用の隔壁が行く手を阻む。他に進めそうな場所とは周りを見渡すが、窓も扉もない廊下の壁で照明のランプが輝いているば

かり。完全に袋小路となっていた。重厚な隔壁は蹴つても叩いてもびくともしない。火炎砲を使っても効果はなさそうだ。

隔壁を背に廊下の角を振り返ると、ガシヤガシヤと甲冑の揺れる音を響かせながら反乱兵達が現れた。上の階から追つて来た兵も合流して七、八人近い姿が確認できる。更にまだその後ろからも集まっ

つて来ているようだ。
メルエシードを背に庇いながら小型火炎砲を構える京矢。だが、込められた触媒の弾丸は残り一発しかない。まさに万事休すといった所であった。

京矢とメルエシードを隔壁前に追い詰めた兵士達の隊列が割れ、携帯火炎砲を持つ隊長兵士が現れた。

本来ならこれだけの数の差があれば普通に寄せて行つて捕獲してしまえる所なのだが、兵達は京矢の持つ小型火炎砲の威力を恐れて迂闊に近づく事が出来ず、少し距離を置いた場所に陣取つて隊長に判断を仰いだというのが今の状況である。

互いに火炎砲を向け合つて睨み合う中、反乱兵の隊長はじりじりと距離を詰めて行き、隊列の壁を作る兵達も盾を持つて来た者を先頭にして後続く。

メルエシードが攻撃不可対象の背後に庇われているので火炎砲の一撃を放つ事が出来ない反乱兵の隊長は、相手も撃つて来ない事に対して確実に命中させる為に引き付けているのか、或いは撃ちたくても撃てない状態なのかと考える。

見た事の無い形の火炎砲だが、階段前に立たせていた部下の剣を砕いて甲冑も破損させていた事から、十分な威力を誇る武器だという事は分かる。

携帯火炎砲で撃ちたくても撃てない理由といえば、故障の他に触媒の弾切れが挙げられるが、見たところエツリアの要人である青年

は予備弾倉らしき装備を下げている。

「弾切れか」

構えていた携帯火炎砲を下ろし、反乱兵の隊長が放った一言にぴくりと反応する京矢。それで確信した反乱兵の隊長は、部下達を振り返って”捕らえる”と指示を出した。少し戸惑いを見せながら二人の確保に向かう兵達。

動きの鈍い部下達に『あの火炎砲は弾切れなので反撃は無い』と、いつて迅速に仕事を済ませるよう促す。殺すなどは言われているが、傷一つ付けるなどまでは言われていない。これ以上邪魔立てされるのも面倒だ、多少痛めつけても大丈夫だろう。

肩に乗せた携帯火炎砲の銃身をトントンと弾ませながらそんな事を考えていた隊長は、少々手間取ったせいで幾つかの撤退ルートが使えなくなった為、ターゲットの処刑を済ませたら直ぐに最適な撤退ルートを算出しなくてはと次の段階に思考を切り替えていた。

迫る反乱兵達に火炎砲を向けたまま京矢は必死に考える。残りの一発を放てば多少怯ませる事は出来るだろうが、それで終わりだ。相手も火炎砲を持っていたならばそれを奪うという手があったものの、携帯火炎砲を持っているのは彼らの隊長だけだった。が、そもそもこれだけの数を相手に単発の火炎砲ではどうしようも無い。ここで捕まれば背中地震えているメルエシードは殺される。しかし、正面には十数人の反乱兵。左右は廊下の壁。背後には重厚な隔壁。もう何も打つ手がない。だが、京矢は諦めたくもなかった。

『くそ……っ 俺にだって何か力が備わっててもいいだろう！ せめてこの子を護れる、ただそれだけの力……何かないのかよっ！』

京矢の力を求める強い想いによって精神領域の”蓋”に歪みが生じ、人格境界線が揺らぐ。

「っ！」

砂漠地帯でも高機動を可能にした新型戦車の上にしがみ付き、前方に聳える砂丘の向こうに隠れた目標施設へ意識を向けていたコウが、何かに気付くように顔をあげた。

「どうしたコウ、キョウヤ達に何か」

「二人が危ない、スイルはこのまま急いで！　ボクは行って来る」

共に移動中だった戦車の上でスイルアツカにそう告げたコウは少年型の召喚を解除、精神体になって京矢に思念を送った。

キョウヤ！　ボクを喚んで！

コウの気付きは京矢の気付き。京矢の強い思念が深層意識で二人の人格を隔てる精神領域に設けられた”蓋”に干渉し、少しでもその境界を開放させた。

京矢がコウの本体である事。コウを自身から分離させた当人である事。京矢側から祈祷術で”蓋”を施している事。これらが条件となり、人格を隔てる”蓋”を京矢自身の強い意思によって開く事が

出来た。

精神体となったコウはたちまち本体である京矢の心に吸い寄せられ、京矢の傍まで空間移動した所で合図を送り、それを受けた京矢は”蓋”を閉じて人格境界線を元に戻す。”視”えはしないが感じ取れる、コウが自分の直ぐ近くにいると。

「メル！」

「え？ きゃっ」

目前にまで迫った反乱兵達に背を向け、メルエシードを抱き寄せ、隔壁と廊下の壁の隅っこに移動した京矢は、メルエシードを庇いながら叫んだ。

「コウ！ いいぞ！」

それを合図に、コウは異次元倉庫から複合体を取り出した。ズシんという地響きを立てて巨漢ゴーレムが出現する。

「な……っ」

「ゴーレムだと!？」

「しまった！ これが狙いだっただのかっ」

動きの鈍いゴーレムが相手とて、こんな狭い場所で一塊になっただけじゃ一網打尽にされ兼ねない。反乱兵の隊長は内心で機械化兵器の技術者なら魔術を使って来る事もないだろうという思い込みがあった事を反省すると、直ちに的確な指示を飛ばす。

「全員さがれっ こちらにも召喚獣で応戦しろ！」

「ヴオオオオオ」

一旦退き始める反乱兵達の隊列に強烈な一撃が叩き込まれ、強制的に廊下の角まで吹っ飛びながら後退させられる兵士達。後方の兵士に召喚された二体の一角狼がゴーレムを殲滅するよう命令を受けて飛び出して来た。

素早く廊下を疾走して来た一角狼が左右から同時に飛び掛かって来る。魔導槌を装備して迎撃する複合体コウ。薙ぎ払うような一撃で右の一角狼を捉えると同時に槌の先端を返し、柄のスイッチを押して攻撃推進用内燃魔導器に点火。

ヒュゴオツという笛の音のような爆発の排出音と共に炎の軌跡を引きながら左の一角狼を叩きつぶす。一瞬でダメージが許容限界を超えた二体の一角狼は、閃光と共に召喚が強制解除された。

「な、なんだあのゴーレムは！」

「召喚獣二体が一瞬で……っ」

「ヴオオオオオ」

魔導槌を片付けたコウは少年型の時に覚えた強化魔術を腕に纏うと、外壁側になる廊下の壁を殴りつけた。派手な轟音を響かせて空いた大穴の向こうに広がる砂漠そとの景色。意識の奥で京矢に脱出を促したコウは、内燃魔導兵器を取り出して兵達に向けた。

「メル、こつちだ！」

メルエシードの手を引いて壁の大穴から施設の外へと脱出する京矢。反乱兵の隊長が携帯火炎砲を構えるが、その射線を塞ぐように

立ちほだかったコウが内燃魔導兵器の引き金を引いた。ウウウウウという唸るような射出音を響かせて無数の火炎玉が放たれる。

壁や床、天井で跳ねる火炎玉が暴風雨のように降り注ぐ。一撃で致命傷になる程の威力はないが、そのありえない射出量が反乱兵達の動きを完全に封じ込めた。

「く、くそ……っ　奴は例の冒険者ゴーレムだ！」

これは堪らんと廊下の角向こうに退避した反乱兵の隊長は、正面の出入り口を見張らせていた部下二人に一角狼の召喚石を投げて渡すと、外に脱出したターゲットを追うよう指示を出した。

「使い方は分かっているな！　召喚獣にはターゲットを最優先で狙うよう命令しろっ　行け！」

施設を脱出した京矢はメルエシードの手を引いて砂に足を取られながら東の砂丘に向かって走り続ける。こちらの方向からスィルアツカ達が来ているらしいとコウから情報を得ていた京矢は、とにかくあの砂丘を越えれば助かると踏み出す足に力を込める。

「召喚獣が！」

「っ！」

メルエシードの声に振り返ると、砂の上を跳ねるような勢いで迫る一角狼の姿が見えた。その後方から反乱兵も追って来ている。見

る間に距離を詰めてくる一角狼に、京矢は再び小型火炎砲をホルスターから抜いた。残り一発。命中率は最悪だが威力は十分。

緊張と疲労、直ぐそこまで迫る希望と絶望。精神領域の”蓋”に干渉する程の強い思念を発揮するなど、非常事態による覚醒で意識がハイになっていた京矢は足を止めて深呼吸で息を整えた。

この世界の人からみれば線の細い優男な京矢だが、元世界では極普通のゴツクは無いが特に細くはない、イザという時に発揮されるらしい火事場の馬鹿力も標準装備した日本男児である。コウの戦闘記憶を参考に、迫り来る一角狼と対峙する覚悟を決める。

「キョウヤ……？ まさか、戦うつもりなの！？」

「ああ、このままじゃ逃げ切れそうにないからね」

コウの記憶情報によると一角狼は角のせいで頭が重いのか、横からの攻撃で態勢を崩され易いようだ。目前に迫る一角狼を前に、頭の中で戦闘シミュレーションをイメージする京矢。そして遂に一角狼がターゲットを攻撃射程に捉えた。

「避ける、メル！」

メルエシードに飛び掛かる一角狼に横から頭突き気味なタツクルを食らわせて砂上に叩き落した京矢は、なんと格闘戦に持ち込んだ。一見すると無謀な行動だが、一角狼が自分を避けて真っ直ぐメルエシードに向かった事から攻撃目標をメルエシードに固定されていると見越した計算づくの判断である。組み付いた京矢を前足などで払おうとする一角狼。

「核っ 核っ 核は何処だ！」

顔や腕に爪による裂傷を作りながら一角狼の胸元に埋まる召喚石を探り出した京矢は、切り札の小型火炎砲を召喚獣の弱点となる核部分に押し当てて発射。撃ち込まれた火炎弾が核である召喚石を砕いて召喚が解除された。

「や、やった……っ」

「……すごい」

砂の上に座り込み、砕けた召喚石の欠片を確認しながら荒い息を吐く京矢を、メルエシードは呆然と見詰める。しかし、ホツとしたのも束の間、召喚獣を格闘で倒すなんてと怯んだ追っ手の反乱兵がもう一体召喚すると、攻撃命令のみ与えて放った。

「走れメル！」

メルエシードを逃がしつつ今度は直接核を殴って壊すか、もう一度コウを喚び寄せるかと焦燥混じりな思考を巡らせていた京矢の頭上を何かがシウルシウルという音を響かせながら飛び越えて行く。召喚されたばかりの一角狼は、炎を噴き出して白い煙の軌跡を引きながら飛来した物体の直撃を受けて爆炎に吹き飛んだ。

「キョウヤ！　メル！　二人とも無事か！」

「スイルアツカ！」

「スイル姉さまっ」

砂丘の上に現れる新型戦車。現場に到着したスイルアツカは二人に迫る一角狼に対して、戦車の上から魔力探知誘導式・筒型火炎槍を見舞ったのだ。

次々と砂丘の天辺に集結するエツリアの機械化戦車隊を見た反乱兵達が慌てて施設の方へと引き上げていく。

「た、助かった」

へなへなと砂上にへたり込む京矢。だがその姿を見て情けないと思う者はここには居ない。メルエシードが傍に歩み寄り、京矢の傷にハンカチを当てる。

「ありがとう、キョウヤ……あなたのお陰で死ななくて済んだみたい」

「ははは、お互い助かったな」

メルエシードの言葉の裏に隠された秘密を知る由も無い京矢は、ただ互いの無事を喜んだ。今回、色んな意味を含めて護られた事で京矢に対する恋慕の気持ちの本物になりつつあるメルエシードと、そんな二人を戦車の上から眺めるスイルアツカ。

思い掛けず京矢の勇敢さを垣間見た事で”彼”^{セラ}を思い出したスイルアツカは、京矢にその想いをダブらせる。

魔導技術研究施設からは作戦の失敗を悟った反乱兵達が撤退を始めていた。

58話・兆候【後編】（後書き）

今回で一先ず京矢の章は終わりです。

59話：特務別働隊

命からがら施設から脱出した京矢とメルエシードは、スイルアツカ率いる精鋭団の戦車隊に保護された。安堵したメルエシードは緊張が解けて疲労が押し寄せた為か、車両内の座席で眠りにについている。

応急手当を受けた京矢は精鋭団を指揮するスイルアツカの活動に加わっていた。施設内の様子がコウから京矢に伝えられ、京矢がスイルアツカに伝えるという方法で外から内部の正確な情報を得るのだ。

「えっ それマジかよ！」

「どうした？」

施設を覗む戦車の上で唐突に驚いてみせる京矢を訝しむ事もなく、冷静に問い掛けるスイルアツカ。コウから何か驚くような情報を得たのだらうと推察しており、既にコウと京矢を介した交信技を使いこなしていた。

複合体コウからの情報によると、反乱兵達の思考を読んでみたところ、彼らは施設の警備をしていたエリアの兵士ではなく、数日前に襲撃して正規兵と入れ替わった反乱軍の兵であるらしい事が分かったのだという。

正規兵を埋めてある場所が伝えられ、スイルアツカはそちらにも兵を向かわせた。

「ふむ……どうにも反乱軍の動きがおかしいな」

今回の緊急事態、公務の会議を中断して側近のターナに後の処理を任せつつ大急ぎで救出にやって来たので、何時も彼女が控えている隣には京矢が居た。

反乱軍の事情になど詳しい筈も無い京矢では相談役にならないが、聞き役に見立てて反乱軍の行動に不審を呟くスイルアツカに、京矢は彼等が自分の事を知っているようだったと話す。

「それも妙だな」

公式発表したとはいえ、京矢に関しては宮殿上層の人間でもまだまだ謎に満ちた人物というイメージが先行しており、これが他国ともなれば『ゴーレムのような巨漢の男』だとか、『小人のような老人』だとか、『日の光を浴びると皮膚が溶けてしまう為、常に闇色のローブを纏っている』などという無茶苦茶な人物像が氾濫する情報の錯綜っぷりが見られる。

一部ワザと偽情報を流して混乱させているのだが、身体的特徴が分かり易いとはいえ京矢の容姿を正確に知っていたとなると、誰かが反乱軍に情報を漏らしていた可能性も考えられるのだ。

近隣国、特に今回メルエシードが狙われた事から、マーハティー二辺りに反乱軍のスパイが潜り込んでいるのではないかと推測する。

ってスイルアツカが言ってるんだけど、兵士達から何か拾えるか？

『うーん、今は”こつち来たー”とか”早く逃げないとー”とかの意識が強くて、細かい事までは考えられないみたい』

緊急避難路から撤退を始めた反乱軍兵と、仲間の脱出を援護する為^{コウ}にゴーレムを誘導している、つもりでいる彼等を追い掛け回しているコウは、反乱軍に潜り込めばてっとり早く色々分かるのではないだろうかと考える。

潜り込むってどうやって……ああ、なるほどその手があったか

『うん、さっき壁を叩いた時に落ちてきたのがくつついてるから』

コウの思考をそのまま理解する京矢と、同じく京矢が理解した事を把握するコウ。

誘導役の反乱軍兵を追い掛けながら施設内を移動中、適当に荒ぶっている振りをして壁を叩いた際、天井に張り付いていたらしき小さな虫がパラパラと降ってきて複合体の身体に付着している。この虫に憑依して兵士達にくつついて行くというアイデア。

「　　って事なんだけど、どうかな？　一応俺も推したい」

京矢から一押し付きでコウの提案を聞いたスイルアツカは、確かにコウが潜入すれば常に反乱軍の動きを把握し、居場所を特定する事も出来ると考える。今回の件を含めて反乱軍の行動については裏も押さえて置きたい。

「暫くは宮殿でコウの活動する機会も無い事だしな、許可すると伝えてくれ」

スイルアツカから”反乱軍潜入案”の許可を貰ったコウは複合体を片付けて虫に憑依。追跡者^{ゴーレム}が突然消え失せた事で『召喚の時間切れか？』と誘導役の反乱軍兵士が足を止める。

その内の一人にくつついた小虫なコウは、カサコソと甲冑の隙間

に潜り込んだ。

「よし、兵士の一人に取り付いたみたいだ」

「そうか、ならば追跡の手を緩めてやらねばな」

反乱軍兵の追跡に深追いを禁じ、施設内の制圧と生存者の搜索を優先するようスイルアツカが指示を出すと、入れ替わりにやって来た伝令から施設の近くに埋められていた警備兵の遺体を発見したという報告が届けられた。

「そうか……よし、これである反乱兵共は施設の警備兵と入れ替わっていた反乱軍兵士だった事が証明された」

一つ憂いが晴れたような表情を浮かべたスイルアツカに、京矢が怪訝な顔を向ける。コウが傍に居れば彼女が何を思い、考えているのか直ぐに把握できるのだが、あいにくと相方は撤退する反乱軍兵士の甲冑の隙間に潜んで移動中だ。

そんな京矢の疑問を感じ取ったスイルアツカは、少し眉尻を下げながら厄介な問題の一つが解消された事に安堵したのだと話す。

「とりあえず、ここで殺された使節団一行が属する国からの抗議や賠償請求を躲せる」

全て反乱軍が行った暴挙であり、エツリアは被害国側の立場であると表明できるのだ。犠牲者の追悼云々より先に、そんな所でホツとしなくてはならないのも政務者の在り方だと自嘲するスイルアツカ。自分の手は今も血塗れなのだ。

「軽蔑するか？」

あくまで軽い調子で、しかし内面の緊張を伴ったその問いに、京矢は『んなこたあ無い』と答えた。自分も生き延びる為に使節団で同行した他の研究者達を見殺しにしているし

「スイルアツカ達の仕事場が、人の命さえ取引に使われるような大変な世界だって事は理解してる」

「……そうか」

京矢の淀み無い理解の言葉に、スイルアツカは少しだけ救われた気分になった。それから暫くして、施設の制圧を完了した精鋭団の伝令から、追撃を逃れた反乱軍部隊が南西方面へ逃走したとの報告が届けられたのだった。

起伏の激しい砂漠地帯では足場の悪さからどうしても機動力が砂馬に及ばなくなる戦車隊。エツリア軍精鋭団の追跡を、施設の厩舎から調達した砂馬の足で振り切った反乱軍部隊は、日が沈む頃に砂峰の影でキャンプを張りつつ今後の事を話し合っていた。

「我々は現在この位置にいる。本隊はマーハティー二軍に北側を抑えられている為、陽動の攻撃部隊が廃鉱を通って」

車座になっている兵士達の間を、小虫なコウがふよふよと飛び回る。本隊と合流すべく自分達”特務別働隊”の、これからの行動について語る隊長兵士。

既にナツハトーム正規軍の装備は解除され、全員がバツフェムト
独立解放軍特務別働隊の基本装備を纏っている。

『この人は”対の遠声”を持つてるのか、何か他の人とはちよつ
と違うような？』

彼らの会話などから色々情報を吸い上げて記憶しておけば、京矢
を通じてスイルアツカ達に伝えられる。あまり近付き過ぎて羽音で
はたき落とされないよう、兵士達の頭上をゆったり漂うコウは、や
がて隊長兵士のローブにぺたりと張り付いた。

まったく、こんな簡単な任務を失敗するとは”精鋭”が聞いて
呆れる……所詮こいつ等の実力なぞこの程度か

隊長兵士の胸の内で毒付かれる心の声。その思考から拾い上げた
情報が、現在はエツリアの離宮まで引き上げている京矢へと送られ
た。

「こりやまた、随分と重要な情報だな……」

離宮の奥部屋でコウからの情報に意識を傾けていた京矢は、隣の
部屋でターナと今回の事件に関する各方面への概要発表を行う日程
などを話し合っているスイルアツカ達に伝えた。

コウが探り出した重要な情報。それは施設を襲った反乱軍兵士の
隊長は反乱軍で同志として活動をしているが、本当の所属は別であ
る事。どうやらヴェームルツダから派遣された雇われ兵らしい。し

かし、反乱軍兵士達もその事は知らないようだ。

「まだあんまり詳しい所までは探れてないみたいだけど、なんかその隊長兵士は別の誰かに雇われて反乱軍に居る、みたいなの？」

「それは、反乱軍がヴェームルツダから雇い込んだ訳では無い、という事ですか？」

「ふむ……色々複雑な事情が絡んでいそうだな」

過去の心傷を思い出すのであまり聞き心地の良くない国名だが、その精強な兵力を持ってエツリアの後ろ盾を担って来た嘗ての軍事強国であるヴェームルツダは誇りや名誉を重んじる国柄であり、国王の方針も変わっていなかった筈だ。

裏で反乱軍に手を貸している等とはちょっと考えられない。スィルアツカはそう考える。

「グランダールとの一戦で帝国内の安定は図れたと思ったが、そうそう思い通りにはいかないものだ」

これはもう一波乱、何か大事が起きそうだとスィルアツカは気を引き締めた。

ナツハトーム帝国内の勢力図はここ数年でかなり変動しており、機械化兵器の開発成功によってエツリアがヴェームルツダからあまり兵を借りなくなった代わりに、反乱軍征伐などでマーハティーニが多く借りるようになっていた。

エツリアのガスクラツテ帝はヴェームルツダのこれまでの貢献を称えて関係は大事にしているのだが、年々エツリアに貸与する兵が減り、唯一の強みであった武力で差を付けられた事がヴェームルツダの不安と嫉妬を煽り、疑心呼び起こす。

スイルアツカの想いとは裏腹に、ヴェームルツダは暫定的にだがマーハティーニの策謀に手を貸している部分があった。

ヴェームルツダ側としては、エツリアの帝都としての格を保つ為に散々後ろ盾の役割を果たして来たのに、強い兵器を手に入れた途端お払い箱扱いかという意識があり、そこをマーハティーニのレイバドリエード王が巧みに突いた形だ。

「エツリアの施設で反乱だと？」

「ハッ まだ詳しい情報は不明ですが、メルエシード様の同行する視察団一行が巻き込まれ、壊滅したという話も……」

「な……っ！」

妹姫メルエシードの顔が脳裏を過ぎり、一瞬言葉を失うディードルバード王子に、伝令から戦況が伝えられた。反乱軍の攻撃部隊が左方向から奇襲を仕掛けて来たという報告。

どうにか対応しようとするディード王子だったが、直ぐには意識を戦術指揮に切り替えられない。

「迎撃の準備を いや、包囲網を固めて敵本隊の動きに注意しろ！」

「反乱軍本隊より突撃部隊が接近！」

征伐軍の動きが鈍る。その隙を突いて攻勢に出た反乱軍の本隊が崩れた包囲網を突破した。

「敵攻撃部隊、退いて行きます！」

「反乱軍本隊は散開しながら撤退中」

「ええいつ またこの戦法か！」

反乱軍の撤退は何時も素早く、まるで壊走しているかのように散り散りになりながら退いて行くのだが、どういつ指揮なのかちゃんと統制がとれていて非常に鮮やか。逃げる事に掛けては高い錬度を誇っているようだ。

今回もまた逃げられてしまったと呻くデイド王子はしかし、ここまで追い詰めて逃げられた反乱軍の事よりもエツリアの施設で起きたという反乱の事が気に掛かっていた。追跡隊を組織した後、一日本国まで引き上げる事を検討する。

「エツリアの反乱について親父殿から何か連絡は入っているか？」

「いえ、特には。本国でもまだエツリアに問い合わせを行っている最中なのではないかと」

部下の答えに『そうか』と呟いたデイド王子は反乱軍が撤退して行った方角を一瞥すると、征伐軍の撤収に取り掛かるのだった。

バツフェムト独立解放軍という組織が生まれたのは凡そ四年前。

元々の発端はガスクラツテ帝が支分国への食料援助でエツリアの価値を上げる為に、バッフェムトから大型漁船を接収して漁業の縮小などを突きつけた事に対する反発だと謂われている。

当時、バッフェムトの港街を中心に周辺の村や集落を治めていた一族の長が、首謀者となつて組織を立ち上げたのが始まりだ。

「現在、本隊は南の廢鉱から溪谷を移動中との事だ。我々は平野を迂回して山間部からのルートに行く」

本隊が無事、征伐軍の包囲を抜けて集合地点へ移動を始めたとの連絡を受けた”特務別働隊”は、速やかに合流を果たすべくマーハティ―二領内を横断していたのだが、一つ問題が発生していた。

エツリアの魔導技術研究施設からは本来もつと余裕を持って撤収する予定だった為、施設の物資を確保しておく段取りが崩れて手持ちの水や食料が心許ない状態になっているのだ。

「補給が必要だな」

「確か、この先の近くに村があつた筈です」

岩山と溪谷ばかりが連なるマーハティ―二の領内。エツリアのある東方向に進むほど地形は山間から荒野へと変わり、やがて砂漠が広がり始める。特務別働隊は砂漠と荒野が交わる山間の寂れた村へ補給に立ち寄つた。

「我々はバッフェムト独立解放軍の部隊である！ 活動物資が不足している為、この村に立ち寄つた次第だ！」

村の代表者を求める声に何人か村人が姿を現す。対応するのは何れも老人ばかりで、若者の姿は見あたらない。隊長が村の代表者達

と話している間、隊の兵士たちは見張りの兵士を残して三人一組で村の中を練り歩く。

「年寄りばかりだな、ここは」

「へえ、若い衆はみーんな都の鉾山まで出稼ぎに出ていますじゃ」

隊長のローブにくっ付いていたコウは兵士と村人、双方の思考からそれぞれの思惑を読み取った。村人達は女子供を含む若い衆が見つかると、解放軍の新たな構成員として連れて行かれてしまうので隠しているようだ。

兵士達は使える人材が居ないか探している。特に、年端の行かない子供は解放軍兵士として教育し易いので、成長した若者よりも重宝される傾向にあった。

『なるほどー、こうやって仲間を増やしてるのかー』

人員補給で村や集落を訪れた場合は家捜しまでして見えそうな者を連れて行く所だが、今回は物資の補給に立ち寄ったので僅かばかりの水と食料の提供を受けて出発準備に取り掛かる特務別働隊。村人達も内心でホッとしている様子が窺える。

村人達の思考から子供達を隠している場所を割り出していたコウは、隊長のローブからふよふよと飛び立った。

「？」

「どうしました？」

「いや、気のせいかな」

首を傾げつつかぶりを振った隊長は、何でもないと言って出発準備を整え始める。

一昨日辺りからやけに近い場所、自分の直ぐ傍に誰かの気配を感じて不気味に思っていた彼は、急にその気配が遠ざかった気がして疑問を浮かべたのだが、兵士家業などやっていればよくある事だと流した。

石と土を固めて造られた村の建物上空を浮遊するコウは、岩壁の角部分に立つ家の屋根に降り立つ。煙突らしき隙間から屋内に入り込み、更に床に敷かれた薄い絨毯の上を旋回。この下に自然の小さな洞穴があつて、そこが隠し部屋になっているのだ。

『うーん、小虫くんの身体じゃ入れないなあ』

暫く部屋の中を漂っていたコウは、壁際にクローゼットらしき家具を見つけたのでそちらへと飛ぶ。扉に張り付いて精神体の頭を突っ込んでみると、何点かの衣服が吊られていた。

『これをもらつていこう』

少年型の体格に合いそうな村服を拝借し、変わりにお金を置いていく。新品の服が三着は買えそうな額だ。

あちこち修繕された跡の残る少々傷んだ服だが、この方が自然だと満足げに異次元倉庫へと仕舞ったコウは煙突から建物の外に出ると、そのまま村の出口に向かって飛んだ。

『小虫くん、ここまでありがとね』

” ”

村の外れまで移動して小虫から抜け出たコウの語り掛けに何か答えるような雰囲気を残して、小虫は何処かへと飛び去った。

周囲に人の影が無い事を確認し、複合体を出して憑依したコウはとりあえず魔導輪でこの場を離れると、村人達から得た情報を元に近くの果実採集場所へと向かう。

目的の場所に付くと身体を少年型に乗り換えて作業開始。山間に出来た僅かな平地に群生する植物から幾つかの実を採り、以前ダンジョンで拾った古いかばんに詰めて擬装用の小物が完成。次に少年型の外装をいつもの街服から全裸に切り替える。

「そういえば、こうして服を着るのって初めてかも」

拝借してきた村服に袖を通し、村の子供に変装したコウはごろごろと地面を転がって適当に身体を汚すと偽装完了。特務別働隊が通る道に先回りして如何にも”村の外へ食料の実を採りに行って来た子供”を装いながら道を行く。

やがて、移動を始めた部隊と鉢合わせした。

「む？ 小僧、その村の者か？」

「うん、そっだよー」

一言二言、言葉を交しながらじろじろと値踏みするように村人なコウを見定める隊長。少し舌足らずに感じるが、こんな辺境の田舎村に住む子供など大体こんなモノだろう。泥で汚れた顔もよくよく観察して見れば、かなりの器量が窺える。

両親は既にないという村の少年に、隊長は”上玉”の判定を下した。

「お前、我々と一緒に来い。同志として迎えてやるっ」

バツフェムト独立解放軍に来ればもつとマシな服も着られるし、飯も腹いっぱい食べる。同年代の友人も出来るぞと言ってほぼ強引に部隊の小間使いに編入されるコウ。

戸惑い の演技 を見せながら彼らについて行く事を了承したコウは、最後尾を行く兵士に引き上げられて砂馬に跨った。

『というわけで、ばつふえむと解放軍に潜入するよー』

独立解放軍な。とりあえず宮殿きうてんも今はバタバタしてるけどその内そっちの動きにも呼応できると思うから、無理せず頑張ってくれ

京矢と意識の奥で交信したコウは、『りょーかい』と返して特務別働隊の隊列が進む山道に視線を向ける。徐々に険しさを増す周囲の山々。低く流れる千切れ雲が岩肌に影を落としては去っていく。

『良い人がいればいいなあ』

溪谷から吹き上げる風に髪を撫でられながら、コウは反乱軍、バツフェムト独立解放軍の人達との出会いに期待するのだった。

60話：解放軍キャンプ

渓谷を越え、廃鉱と繋がる入り組んだ洞窟を抜けると、そこだけ切り取られたかのような開けた空間が広がる。険しい岩山の連なる山脈の中に出てきた平地空間。

この辺りの岩山には同じような場所が幾つか点在しており、ここはバッフェムト独立解放軍が隠れ家に使っている内の一つだ。

先日、マーハティーニの征伐軍からどうにか包囲を突破して逃げおおせた解放軍本隊は、新たな本拠地を構えるに当たって損害の出た各部隊の編成を見直すなど、組織の立て直しを図っていた。

「別働隊が帰還したぞー！」

洞窟前の見張り役が叫ぶ。出入り口を塞ぐ格子状のバリケードが開かれ、帰還した特務別働隊を本隊の同志達が出迎える。

「おお、砂馬じゃないか！ 調達してきたのか？」

「エツリアの施設からかつぱらって来たんだ、残念ながら任務は失敗してしまっただが」

「そうか……いや、しかしお互い無事で何よりだ」

「本隊もかなり危なかったそうだな」

わらわらと集まって来た若者や年配の同志達が互いを労い、無事

を称え合う。そんなちよつとした盛り上がりの中、後方から人垣が割れて若い男性を従えた少女が、特務別働隊の前に現れた。

ゆるくカールした金髪混じりの斑な茶色髪を後ろで纏め、橙色の瞳で真つ直ぐ別働隊の隊長を見上げる年の頃は十六、七歳くらいの少女。別働隊の隊長はさつと姿勢を正して敬礼を向けると、部隊の兵士達もそれに習う。

「申し訳ありませんフロウ様。どうか帰還は果たせましたが、任務は完遂出来ませんでした」

「いいえ、無事に戻ってくれて何よりです。危険な任務、ご苦勞様でした」

頭を垂れて任務失敗を詫びる隊長を優しく労う少女。彼女こそバツフェムト独立解放軍の指導者として崇められる、嘗て組織を立ち上げた”プック一族”の長の娘”フロウ・プック”であった。

『この人がリーダーなのかな？』

厩舎に運ばれて行く砂馬から降りたコウは、集まった人々から敬意を払われている少女を観察する。解放軍を統べる指導者としては随分歳若く、スイルアツカのような支配者らしい毅然とした覇気も感じられない。極普通の少女に見える。

「あら？ その子は？」

特務別働隊の隊員達に混じってこちらの様子を窺っている黒髪の子供を認めたフロウが徐に訊ねると、隊長は少年コウを道中の村で拾った孤児だと説明した。身寄りも無く、寂れた村に独りで暮らしているようだったので同志に誘ったのだと。

「まあ、そうでしたか……。あなた、お名前は？」
「ボクは、コウ」

偽名を使おうかとも思ったコウだったが、この地域の自然な名前が思い浮かばなかった。そのまま乗る。特務別働隊の隊長が一瞬『ん？』という表情と共に内心で冒険者ゴーレムのイメージを思い浮かべるも、『関係ないか……。』と直ぐに忘れた。

冒険者協会の影響が低いナツハトームでは”冒険者コウ”の名も然程知れ渡っていない。

グランドールからも遠い位置にあり、特にナツハトーム帝国内では反乱軍という立場にあるこの人達が、エツリアの上層にいる人間でさえ見抜けなかった冒険者ゴーレムのコウと、少年コウの関係になど気付ける由も無いのだ。

「ようこそ、コウくん。私達はあなたを仲間として歓迎するわ」
「よろしくー」

大勢の知らない大人達に囲まれてきつと緊張しているだろうと思いき、気分を解してあげようと声を掛けたフロウは、妙にあっけらかんとしたコウの返答に少し驚きながら思わず笑みをこぼした。見かけによらず肝が据わっている子なのかもしれないという印象を懐く。

「うふふ。ではマズロ、コウくんに同志の服を用意してあげて？
所属は少年部になるのかしら」
「畏まりました、お嬢様」

フロウに付き従っている男性が丁寧に答える。彼は先代であるフロウの父に参謀役として仕えていた解放軍でも古参のメンバーで、

今は参謀総長としてフロウの補佐をしながら、組織のまとめ役を引き受けている。

実質、独立解放軍を動かしているのはこの男であった。

「初めましてコウ君、私はマズロッドという」

「コウです」

灰色の髪に長身で面長、冷静沈着な光を携えた碧眼がコウに向けられる。子供の扱いも心得ている雰囲気です。優しく微笑みかけるマズロッド。だが、コウは彼に対してバッフェムト独立解放軍の中では最も注意しなくてはいけない相手であるという判断を下した。

「じゃあ行こうかコウ君、少年部のテントに案内しよう」

「はい」

バッフェムト独立解放軍の参謀総長マズロッド。彼の思考から読み取れた個人情報の中でまず明らかになったのは、幼児趣味な性癖を持ち、特に小さな男の子を好んでいるらしい事などが分かった。が、その辺りはコウにとっては些細な他人の嗜好でしかない。

マズロッドの注意しなくてはならない部分、それは彼がマーハテイーニと通じている事であった。

コウが配属された”少年部”は、年齢が若過ぎて一般訓練生や攻撃隊候補生になる前段階の子供が主に所属している。配膳係りや清

掃、裁縫、武具磨き、組織内の支給品を配達するなど、雑用を担う
”予備隊”の部署だ。

”予備隊”の中でも少年部を卒業する年齢になれば”青年部”へ
と上がり、そこで組織の一般構成員として訓練生になるか、素質が
あれば攻撃隊の候補生として各種訓練を受ける事になる。

解放軍構成員少年部の制服となる衣装に着替えたコウは、早速少
年部に所属する他の子供達に紹介された。

「今日から我々の仲間になるコウ君だ。皆、仲良くするように」

マズロッド 参謀総長の紹介に子供達から素直な返答が上がる。満足気に頷い
たマズロッドは後の事を少年部の纏め役に託すと、コウの頭を一撫
でして自分の仕事場へと帰っていく。

着替え中、身体を彼方此方触れられても嫌がらないし怖がらない
上に、異国人特有のエキゾチックな容姿で相当に器量も良いコウの
事を、マズロッドはかなり気に入っている様子であった。

ちなみに、意識の奥でリアルタイム交信中だった京矢からは『そ
いつ、バールのようなモノでぶん殴りてえー』という感想が述べら
れた。

「コウくん、コウくん、あなたはどこから来たの？」

「その……コウくんの黒髪って、め、珍しいよね……ぼくも、ちょ
っと黒っぽいんだ」

「あまね”たべるー”？」

わいわい集まってきた少年部の子供達が口々に話し掛ける。見た
目が珍しい事もあってか、みんな興味津々といった様子で瞳を輝か
せているようだ。そこへ、いかにもワンパク小僧な雰囲気纏った

男の子が他の子達を押しつけてコウの前に立つ。

「おい新入りっ オレがこのボスのバゼムだ、きょうからはお前もオレの子ぶっ」

スパーンと後頭部を叩かれて言葉を詰まらせるバゼム。見れば最初に話し掛けてきた活発そうな女の子が、平らな板切れを重ねて棒状にしたような物体を片手にふんぞり返りながらバゼムを睨みつけている。

「　　ってーなミア！ なにしやがるっ」

「なにしやがるじゃないでしょっ 来たばかりの子にウソ吹き込むんじゃないわよ！」

「ねーねー、”あまね”たべるー？」

ミアと呼ばれた女の子とバゼルが言い合いを始める中、子供達の中では一番幼い感じの女の子が白っぽい食べられる木の根で作られるお菓子を手に、マイペースでコウに話し掛けている。とりあえず、コウが一番小さな子の相手から始める事にした。

「今はいいよ、ありがとう」

「んー」

甘根をもぐもぐしながらニコーと笑う女の子。名は”ラッカ”というらしい。

その後、なんだか地味で目立たないトウロという男の子と挨拶を交して黒髪が本物である事などを話すうち、自分達を差し置いて自己紹介が進んでいる事に気付いたミアとバゼムが慌てて紹介に参加した。

「あたしミア、よろしくね！」

「オレはバゼムだっ 少年部でボスを

スパーンと小気味良い音が響いた。

一通り顔合わせの挨拶が終わり、少年部に配属されたコウの最初の仕事は武具磨きからだった。

武具磨きに衣類の修繕といった内職的な仕事で解放軍の生活環境に慣れ、清掃業務や配膳係りに就く期間で各部隊の関係者や部署を覚える。そうして組織内で同志の皆と顔馴染みになる頃には支給品の配達なども任せられるようになる。

解放軍の主力攻撃隊や一般兵士の使う支給品である武具は金属を使った装甲部分が少なく、革鎧を少し補強した程度の軽装備になっている。これは別に身軽さを強調した作りにしてある訳ではない。

解放軍の正式装備として武具の仕様を統一するにあたり、生産力の問題で殆どが戦利品など、手に入れた既存の武具を弄って外観を合わせるという方法で対処しているためだ。

ぶつちやけ、ガワだけ似せて中身はバラバラの性能なので、当たり外れの激しい規定装備品であった。

十歳前後の子供達に混じって作業場に積み上げられた武具をキュッキュツと磨きながら、解放軍内のシステムやら懐事情など確認できる範囲で情報を集めて記憶していたコウは、ふと、作業場の奥からこちらを窺う小さな影に気付いた。

武具の山から半分顔を出してじい〜と観察している女の子。自己紹介の顔合わせが行われた時は見なかった子だ。

コウが視線を向けると、ビクツと肩を震わせて武具山の向こうに隠れてしまった。しかし、女の子から向けられる視線のような気配は、まだハッキリと感ぜられる。その”視線”というよりも”思念”といった方がしっくり来る感覚は、祈祷士リンドーラの事を思い起こさせる。

試しに女の子の気配に向かって話し掛けるコウ。

『……君、ボクのこと分かるの？』

っ！ ……あなた、にんげんじゃない……

なんと思念による答えが返って来た。この子には祈祷士系の才能があるらしい。

『うん、この身体は召喚獣だけど、ボクはちゃんと人間だよ』

……ウルハには、こわい影がいっぱい見える……

自身の事を”ウルハ”と名乗った少女は、コウの周囲に沢山のモンスターの影が見えて怖いと怯える。心の中に直接話し掛けられたのも初めてだったので、その事にも恐怖しているようだ。

このウルハという少女、まだ能力が形をなしていないようだが、人の心のある程度見通せる方面の才があり、その人に関連する”命の残り香”を視覚的に感じ取る事が出来るらしい。

そしてこの能力故に人を怖がり、何時もどこかに隠れてはこっそり観察するという引っ込み思案な子になってしまった。

ネズミとかコウモリとか、足いっぱい虫とか、おつきいトカゲとか、こわい顔の黒い犬とか

他にも巨大な蛇や犬の頭に擦れた角を持つ白いモサモサの巨体な魔物といったモンスターが視えるらしい。普通の犬や猫、鳥も視えるという。それらは皆、今までコウが憑依した動物やモンスター達であった。

……マモノたち、呼び寄せられて……いつぱい来る

『それはみんな身体を借りたり、一緒に旅したりした動物やモンスター達だね。凶暴なものもあるけど、ここには来ないから怖くないよ』

ウルハはふるふると首を振る。そしてハツと顔をあげると、何時の間にか目の前まで迫っていたコウに驚いて逃げようとした。が、武具山からはみ出していた籠手を踏んづけてしまい、足を滑らせてペタリと尻餅をつく。

「は、はわわわう」

「こわくない、こわくない」

なでなでなで。首を竦めてはわはわ言っているウルハの頭を優しく撫でつけ、少し癖っ毛のある髪を軽く梳く。暫くすると、ウルハの表情が恍惚でポヤーとしたモノになった。

ちなみに、頭を撫でつける際の絶妙な手つきや、髪を梳く繊細な指使いなどはコウの意志によるモノではなく、例によって”身体性能”が発揮されたモノである。

警戒心を蕩かされてポーっと見上げるウルハに、コウは自分の正体について『内緒にしておいてね』とお願いする。

こくりと小さく頷くウルハ。『コウは怖くない』と知って落ち着きを取り戻した彼女は、以後、解放軍（とっし）の中でも自分の能力で話が出る唯一の相手としてコウに懐いていくのだった。

夕刻を過ぎる頃、昼の仕事を終えて休息に入る者は食堂テントに向かったり、身体の汚れを取る為に洗い場へ赴いたりと思いきいの行動で一日の終わりを過ごす。

少年部も支給品配達や清掃業務、配膳係りなどの仕事以外は早めに切り上げるので、コウの所属する武具磨き組の子供達はこれから自由時間に入る。

「今日は湯浴みの日だから、男の子達は水汲みに行ってあげてねー」

青年部から纏め役として来ているお姉さんの呼び掛けに、「はい」という複数の返事がある。近隣の街を含めてこの辺りでの湯浴みといえば、ほぼ密閉状態の室内で焼けた石に水を掛けて水蒸気を発生させるサウナが一般的であった。

解放軍キャンプでは何重にも布を重ねて作られた密閉状態のテントが、サウナ小屋として使われる。基本的に子供から大人まで男女の区別はなく、一つのテントで大人なら四人、子供なら六人程が入って皆で汗を流す。

余談だが、ミアがバゼムをしばくのに使っている平板の棒は、サウナで温まった身体を叩いて血行を良くする為に使う道具だ。

「わあー、コウくんって肌がきれいー」

同じテントで汗を流しているミアが感心したようにコウの腕や背中を眺めている。

この年代の子供達ならば、健康である限り誰もがすべすべとした瑞々しい肌を持っているモノのだが、コウの身体は奉仕用に作ら

れた召喚獣の中でも最高蜜のモノだけに、その美しさも群を抜いていた。

「おんなみてえだな、ぜんぜん肉ついてねえ」

「あんだだつて貧相でしようが」

「なに、オレはちゃんと筋肉ついてるぞ！」

『見ろっ』とカコブを作るバゼムの少し日焼けした身体には、無数の小さな傷跡が窺える。少年部の仕事や遊びで付いた、いずれも成長の途中で消えてしまふであろう傷跡だが、彼が如何に活発な少年であるかを表していた。

「あ、ウルハ？ のぼせそうなら一旦でなきやだめよ？」

「ん……」

ぼけーっとして見えるウルハにミアが声を掛けると、大丈夫と小さく答えるウルハ。子供ながら姉さん女房的な貫禄を持ちつつあるミアは小さい子供達の面倒をよく見ていた。濡れた布と巻いた布で垢すりもして身体を洗った子供達はスッキリしてサウナを後にする。

心地よい夜風を浴びながら並んで歩くコウ達。少年部の子供達は皆がまだ幼く、組織と共に行動し、組織の為に働いてはいるが、自分達解放軍の事を正しく理解していない者も多い。

「バゼムやミアは青年部にあがったらどうするの？」

「あたし？ あたしは一般の訓練生に入るかなー。衛生の仕事につきたいの」

「オレは攻撃隊候補生狙いだぜ！」 炎と剣”のマークを付けて活躍するのさっ」

解放軍の構成員としてスローガンを刷り込む本格的な教育が始まるのは青年部からになるので、少年部の彼等は普通の村や街にいる子供達と思想も大差なく、ただ組織の指導者を敬い、組織を支える為に働く事を良い事だと教えられている程度であつた。

「コウくんはどうするの？」

「ボクは決めてない」

「即答かよ」

「あははっ まだ来たばかりだもんね」

コウの答えにバゼムが突っ込み、ミアがフォローを入れる。三人の直ぐ後ろをウルハがちょこちょこ付いて歩く。就寝の刻までを過ぎす中央広場の焚き木の前にて、和やかに語らっている青年部の若者達を横目にコウ達が少年部のテントへ戻ろうとしたその時

「調達部隊が帰還したぞーっ 皆を集めてくれー！」

洞窟前の見張り役より、バッフェムト独立解放軍の生命線でもある第四軍、”水と船”のマークを付けた”調達部隊”の帰還を知らせる声が、夜の帳に包まれた解放軍キャンプに響き渡った。

61話：組織の裏事情

食料や日用品を仕入れてくる調達部隊の帰還によって俄かに騒がしくなる中央広場。ある意味、祖国の地を離れて流浪する集団でもあるバツフェムト独立解放軍にとって、なくてはならない存在、それが調達部隊だ。

だが彼等の存在こそが、近隣国から”解放軍は訓練されたところつき集団”と揶揄される原因でもあった。

広場には部隊が調達してきた軍資金と、換金せずそのまま使う日用品が並べられている。衣類や少々使い込まれた食器類の他、嗜好品も幾つかあり、これらは所謂”戦利品”であった。品物の中には僅かに血痕の付着している物も見受けられる。

暫くすると人垣が割れ、解放軍指導者フロウと彼女に付き従う参謀総長が、調達部隊の帰還を出迎えに現れた。

「おお、これはフロウ様、マズロ殿」

「我ら第六調達部隊、ただいま帰還いたしましたっ」

「みなさん、いつもご苦労様です。ところで、今回は随分と品物が多いですね？」

やけに生活用品が目立つと入手経路を尋ねるフロウに、第六調達部隊の部隊長はマーハティー二軍の輸送部隊を発見したので襲撃してこれを撃破。後は帰還途中に遭遇した盗賊団を征伐してその馬車

と積荷を手に入れたのだと答えた。

凄い功績じゃないかと、広場に集まっている同志達が武勇伝に沸く。調達部隊の帰還に居合わせ、出迎えに参加していた少年部の子供達も、バゼムが『水と船のマークでもいいかな……』などと呟いている。

そんな中、ここに集まっている人々の思考を読んでいたコウは、この調達部隊が実は一般の商隊を襲って荷物を奪っていた事を見抜いた。

隣村までの引越して商隊に同行していた一家が略奪行為の隠蔽目的で諸共皆殺しにされており、日用品が多いのは彼らの家財道具を戦利品として取得したからだ。

一応、足の付きそうな物は換金せずに破棄して処分し、組織内で再利用できそうな物を戦利品に加えたいらしい。

ちらりとフロウの思考を読んでもみると、調達部隊の一部が略奪行為を働いている事に関して、彼女も薄々感づいてはいるようだ。が、何も知らない振りをしている。

自身はただ、組織の象徴的な指導者でいなくてはならないとし、部下達の行動は組織の為に目を瞑り、その働きを労う。良心の呵責と不安に押しつぶされそうな心を封印して指導者を演じている。コウはフロウの在り方をそんな風を感じた。

「ん？　こんなものまであるぞ」

「あ……ああ、そいつは盗賊団の積荷にあつたものだな。多分、何処かの集落でも襲撃した帰りだったんだろう」

戦利品の中には手作りらしい布製のお人形が混じっていた。どう

やら処分しそびれた物らしい。持ち主への所業を思い出した部隊長が若干態度に動揺を浮かべるが、それに気付く者はいない。その内心を見通しているコウ以外は。

少年部の小さな女の子にでもあげようかと人形を手に取った同志の一人が、誰か欲しい子は居るか？ と集まっている子供達に向ける。如何にもお人形を抱いた姿が似合いそうなウルハは、人形の正面に立つ事を嫌がってコウの背中に隠れた。

「祈禱士の才により」命の残り香”を覚悟する彼女には、人形の持ち主であった女の子の姿が視えているのだ。

”命の残り香”はそれ自体が現象界に何らかの干渉を及ぼしたり影響を与えるような事は無いので、基本的に無害な幻影と同じである。視えていても気にしなれば問題なく、視えていなければ尚更なおよから問題ない。

「あつちつ あつちがほしいー！」

「お、欲しいのか？ ならチビちゃんにやろっ」

「わーい」

人形はラツカに与えられる事になった。

夜も更けてきたという事で少年部の子供は休むよう言い渡され、テントに帰って来たコウ達は就寝のベッドに入った。

ベッドといってもマットレスが敷かれたような上等なモノではなく、干草を包んだシーツを置いて横になり、その上から毛布を被る

といった簡単な作りで、皆が一箇所に寄り添って眠るのだ。干草が無い場合は大量のポロキレなどを代用にしている。

「あれ？ ウルハ、今日はコウちゃんと寝るの？」

「うん……」

コウの隣に自分の干草ベッドを置いてもぞもぞと毛布に包まるウルハ。何時ものようにベッド群の真ん中に転がるラツカは、貰ったお人形をしっかりと握って既に寝息を立てている。

普段なら就寝前の一暴れでバゼムチームとミアチームによる毛布を丸めての叩き合いなど始まる所だが、今日は調達部隊の帰還で長く広場において遅くなっていた為、みんな素直に横になっていた。

寝静まった少年部の共同生活テント。広場の方からは時折、大人たちの笑い声などが響いてくる。酒盛りでもしているようだ。睡眠をとる必要が無いコウは、夜から明け方に掛けて寢床で諜報活動を続ける。

今日の出来事を纏めてエツリアの離宮にいる京矢と意識の奥での話し合い。元々日本でも夜型な生活をしてきた京矢はこの世界でもほぼ夜型生活に入っているの、静かな夜間はコウとの交信をして過ごすのにも最適だ。

その存在を宮殿で公式に発表される以前から離宮で現状と似たような生活スタイルをとっていた京矢は、コウから受けた情報をスイルアツカへ、スイルアツカからの指示をコウへと、実にスムーズな情報の橋渡しをおこなっていた。

調達部隊なあ………実質”略奪部隊”なわけか

『うん、フロウはそういう事させたくないみたい。調達部隊が略奪

してる事を知らない構成員も多いみたいだね』

で、例のペド参謀はその辺り全部知ってるのな

『まだ本格的に探ってないからはずきりとは分からないけど、あの^{マズロ}人を調べたら色々分かるかも』

マズロッド参謀総長を本格的に調べようと思うなら、少し接触の機会を増やすだけで自然に接近する事が出来るだろう。なにしろコウは彼が目をつけているお気に入り少年リストの中でも、一番注目している少年構成員なのだ。

それはちよつとな……絶対お前の身体求めてくるぞ、アレは
『ボクは平気だよ?』

俺がいやだ

『あはは』

そんなやり取りをしつつ、公務を終えたスイルアツカが離宮に顔を出したので京矢から相談を持ち掛けてみると、暫くは現状を維持しながら反乱軍指導者の支えになってやれというアドバイスが示された。

「実権は参謀総長^{マズロッド}が握っているとして、反乱軍構成員の支持を一身に受けているのがその指導者^{フロウ}なら、権威は指導者にある」

組織の乗っ取りではないが、指導者が自身の意見を強く主張できるようにになれば、組織の在り方にも反映される筈だ。ただし、実権を握っている参謀総長の人となり次第では、思い通りにならない傀儡は邪魔とばかりに謀殺を計ろうとする危険性もある。

「マーハティーンと通じてるんだっとな、そう言えば」

「まだ策略家レイバトリエド主の狸親父と直接関係しているのかまでは分からないがな、コウにはその辺りも調べて貰いたい」

参謀総長とマーハティーンとの繋がりがどういふ性質のものなのか。指導者フロウが目指す組織の最終目的や理念は何処にあるのか。まずは敵の事情をよく知る事からだ。

「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」ってどこか……」

「ほう？ 良い言葉だな。キョウヤの国の軍訓か？」

「んにゃ、ずーっと昔にお隣の国で兵法書とか作った偉い人の名言かな？」

調べる情報の優先順位や組織中枢への干渉を指示するスイルアツカの『反乱軍の手助けはほどほどにな』という忠告に、京矢は『略奪とかする必要が減るような助け方ならいいかもな』と意見を付け加えてコウに伝えた。

『分かった。何か考えてみるよ』

「おー無理せず頑張れー。あと、くれぐれも簡単に身体許すなよ」

リアルタイムで擬似体験とかイヤ過ぎるぞと釘を刺しておく京矢なのであった。

翌日。まだ少年部の皆が寝静まっている内から起き出したコウは、水汲み用の桶を持って廃鉱と繋がる洞窟に向かった。

隠れ家の一つであるこの平地空間では、洞窟の中に湧き出している地下水を生活用水として使っている。薄暗い解放軍キャンプの中央広場を通り抜けて洞窟の入り口にやってくると、バリケードの格子を背に居眠りをしている見張り役の姿。

「おじさーん」

「んをつ！ なんだなんだっ」

「おはよー、水汲みにいくからあけてー」

「なんだ坊主、随分と早起きだな」

あくび交じりに首と肩をコキコキ鳴らしながら格子状のバリケードを開く見張り役のおじさん同志。明かりのランプを受け取り、コウは洞窟の中へと入っていった。湧き水の場所までは入り組んだ洞窟内で迷わないよう、壁に目印が付けられている。

目印に沿って順路を進んでいたコウは、入り口が見えない位置まで来た所で適当な横道に入って明かりを消すと、憑依できそうな虫が居ないか探索する。地元の虫ならこの辺りの事に詳しいかもしれない。

何処に餌場があるとか、何処に近付いてはいけないといった本能的な意識を感じ取るだけで、その虫の行動範囲内に限るが付近の様子を推測し、把握する事ができる。

解放軍構成員達の思考を読んだ限り、普段は緊急時などに使われる隠れ家の一つでしかないこの平地空間周辺は、通り道となる廃鉱と洞窟も浅い所までしか探索が行われていないようだ。

奥まで探索すれば何か見つかるかもしれないし、何も見つからなくとも異次元倉庫から適当な金目のお宝を繕い、『迷子になってたから見つけた』と言って差し出すことで軍資金を少しばかり増やしてあげられる。 というのがコウのアイデアだった。

魔力の籠もった石の欠片を目印代わりに置きながら洞窟の奥へと進んで行く。目印の石は普通の人の目にはただの石ころにしか見えないが、魔力を視認できるコウにはぼんやりと発光しているように見えるので見失う事も無い。

しばらく探索していると洞穴生物らしき小さな虫を見つけたので憑依。人や動物では通れない岩の隙間情報など拾いつつ、近くに餌場がある事を感じ取る。かなり大規模な餌場らしい。

『あつちの方向か……この虫君なら岩の隙間を這って行けるけど、人が通れなきゃ何か見つけても意味ないからなあ』

場合によっては複合体で壁に穴を開けて道を作るという手もあるが、あまり派手な事をして崩落でも起こしては大変だ。大まかな方向を覚えて少年型に戻ったコウは、再び洞窟の探索を始めた。

少し高めの段差を降り、大きな水溜まりが出来ている開けた空間に出ると、微かに空気の流れを感じられた。その風に乗って漂う悪臭。これは近くにコウモリのような生物が居る事を示している。

風と悪臭を追って右側に見える穴へと足を進め、相当に曲がりくねった通路を進むにつれて徐々に湿気が増していき、周囲の温度も上がり始める。そして反響するキィキィという特徴的な鳴き声。壁や床で蠢く虫の数も急激に増えていく。

『虫君の餌場はここかあ』

床一面を埋め尽くすコウモリの糞と、それを覆って蠢く虫の大群。天井には黒い小柄な体躯のコウモリがキィキィと群れをなしてぶら下がっていた。足元の虫たちがワーツと放射状に逃げ出して行く中、緩やかなカーブの続く通路の先へと歩を進める。

やがてコウモリの糞絨毯地帯を抜け、岩壁の先に現れる青い水面と光の柱。

「あ、外だ」

ぐるりと弧を描いた通路の先は広々とした地底湖が広がり、ぽっかりと開いた天井から外の光が射し込んでいた。そこから大きな蔦のような植物らしきモノが大木の如く束なり、地底湖まで垂れ下がっている。よく見ると表面が白っぽいそれは、木の根っここのようだ。中々に美しい幻想的な光景。青く澄んだ地底湖の水はやけにしよっぱく、塩分が高いように思われる。

「そろそろ戻ろうかな」

少年部の子供達も目を覚ましている頃だろう。あまり収穫はなかったが、昨日の今日で居なくなってしまうては皆に心配を掛けてしまうという事で、今日の探索を切り上げて解放軍キャンプまで戻ることにした。

とりあえず、天井から降ってくる虫やら糞やらで汚れてしまった服を洗い、素っ裸で糞絨毯地帯を抜けると少年型の召喚を解除、もう一度召喚しなおして綺麗な身体に戻り、異次元倉庫から少年部の制服を取り出して着替え終了。

ちなみに、服の乾燥には付与系の魔術を使って水分を弾き飛ばした。

水汲み場までの順路を外れた辺りまで戻ると、コウの名を呼ぶ複数の声が聞こえた。ミアやバゼムの声も混じっている。どうやら手の開いている者で捜索隊が組織されたらしい。水汲み用の桶とランプを取り出したコウは、『ここだよ』と声を上げてみた。

「コウ君！」

「やっと戻ってこられたよー」

”虫を追いかけてたら迷子になった”というコウの答えに、脱力半分呆れ半分の反応を見せる捜索隊の面々。脱走の類ではなかったと分かって一同ホツとしている。

洞窟のずっと奥にコウモリが居た事を話すと、捜索隊に加わっていた大人組の一人が興味を示した。部隊の出撃や帰還ルート幅が増え、本隊を安全に移動させる際にも利用できる、新しい入り口が見つかったのならば調べておきたい。

「それに、コウモリの糞が石になったやつは農作物の肥料として高く売れるからな」

「へー、そうなんだー？」

今日の探索による収穫はイマイチかと思っていたコウだったが、意外と有意義な発見だったのかもしれない。大体の方向や途中に段差があるなど道順の特徴を伝えると、急遽組まれた探索隊が洞窟へと赴く。

コウは自分の仕事である武器磨きをしに少年部の作業場へと向か

った。

「なあなあ、洞窟の奥って魔物とかでなかったのか？」

「魔物はいなかったなあ」

清掃の仕事をサボって武具磨きの作業場に顔を出しているバゼムが興味津々に訊ねてくる。この洞窟にはあまり危険な生物は居なかったと答えるコウ。

冒険者に憧れる少年のような雰囲気を感じられるバゼムだが、彼自身は冒険者という存在について詳しい知識を持っていない。物心付く頃から組織と共に行動し、組織の中で育って来たバゼムは、外の世界の事を殆ど知らないのだ。

「こーらっ なにサボってるのよ！」

「げっ うるさいのが来た」

平棒を振りかざすミアを捕捉したバゼムはそそくさと作業場を後にした。騒がしく走り去る二人を見送ったコウの傍に、ウルハがやって来て隣で武具磨きを始める。そうしてやおら念話を使って話し掛けて来るウルハ。

「……お仕事、してたの……？」

『うーん、半分はそうかな』

コウがエツリアから来た諜報員であるという認識を持つウルハは、朝方コウが姿を消したのはそちらの仕事関係だと思ったようだ。

もし……脱走するなら、一緒につれて行ってほしい
『ウルハは、ここに居たくないの？』

ふるふると首を振るウルハ。この皆の事は嫌いではないのだが、コウと居る時の方が安心できるという。それは取り繕いや見得といった虚勢による心の誤魔化しを纏わないコウの安定感と信頼感。

他者の心に触れられる祈祷士の才を持つが故に、表と裏の温度差が少ないコウは、一緒にいてとても安らぐのだと。

『そっかー。ボクもずつとここに居られる訳じゃないから、エツリアに帰るときはキョウヤにも相談してみるよ』

エツリア……キョウヤという人……兄弟……？ お兄さん？

『キョウヤはもう一人のボクだよ』

???

一心同一の存在でもあるコウと京矢の関係については、コウの心に触れられるウルハにもよく理解できなかったらしい。コウと並んで籠手を磨きながら、ハテナと首を傾げるウルハなのであった。

昼前頃にはコウが見つけた地底湖の広がる洞窟の出入り口を確認できた探索隊が戻り、そこで採取して来たコウモリの糞石フンセキや、地底湖に垂れ下がっていた巨大根の表面から取れたらしい塩の結晶などが広場に並べられていた。

組織の活動資金として大いに使えると、解放軍指導者のフロウヤ参謀総長マズロッドも交えながら話し合っている。

「やあ、コウ君。お手柄な発見だったね、君の見つけた出入り口には素晴らしい資源が見つかったよ」

ウルハと食堂テントまで移動中だったコウは、広場を通り掛かった所でマズロッドに声を掛けられた。ウルハはマズロッドに”捕食者”の気配を感じるらしく、やはり苦手としているようだ。コウの服の裾を掴んで背中に隠れてしまう。

そんなウルハの様子を気にした風でもなく、マズロッドはコウモリの糞石と塩の結晶でかなりの活動資金が得られると語った。

「マズロ、子供達にそんな話をしても、きっと難しくてよく分からないと思うわ」

「おおっと、これは失礼。少々舞い上がってしまいましたよ」

フロウに窘められて頭を掻く参謀総長の姿に、周囲の皆から和やかな笑いが零れる。この時、コウは”活動資金”というキーワードからマズロッドの思考より重要な情報を読み取っていた。

最近新しい研究事業とやらで資金の減少が著しかったからな、これで何とか凌げるだろう

マズロッドはマーハティーニから供給されていた組織の活動資金がここ最近減少気味だったせいで、調達部隊の稼いでくる軍資金程度では現在ののような活動体制を維持できない問題について悩んでいた、という事が分かった。

マーハティーニのどの辺りから資金が出ているのかまでは把握していないようだが、恐らくはレイバドリエード王による指示であるかと推測しているようだ。その目的についても凡その範囲で見当をつけている。

『デイドルバード王子の名声を上げる為の策かあ』

反乱軍、バツフェムト独立解放軍がデイドル王子の功名稼ぎに利用されている事に関しては、スイルアツカを始め各国の王達も暗黙のうちに理解している所ではあったが、まさか活動資金の提供までおこなっていたとは思っていなかった。

例によつて解放軍指導者であるフロウは参謀総長マがマーハティーニと通じている事も、調達部隊の実態も、また特務別働隊を率いる隊長の正体が、マーハティーニに雇われたヴェームルツダの上級戦士長である事も知らない。

完全な傀儡だなそりゃ

『あ、おはよーキョウヤ』

おはよう。とりあえずその情報、スイルアツカに伝えてくるよ

『うん、よろしくー あっ それとねー』

解放軍の重要な裏事情を探り出したコウは、何時もと変わらない調子で自身が帰還する時の事を相談し始める。マーハティーニの策略によつて演出されていた数年に及ぶ反乱軍と征伐軍のイタチごっこは、コウの暗躍により大きな変化を迎えようとしていた。

62話：綻ぶ蜘蛛の糸

ナツハトーム帝国内で活動する反乱軍の存在。元々は漁師達が集まって結成された小規模な抗議集団でしかなかったバツフェムト独立解放軍を影で操り、糸を引いていたのは、最も征伐に熱心だったマーハティーニのレイバドリエード王であった。

レイバドリエード王の策略で反乱軍に求められた役割は、反皇帝を唱える集団組織の表立った活動によって現皇帝ガスクラツテや帝都エツリアの帝国内での牽引力を弱め、それらを鎮圧するディード王子の支持を高める事。

エツリアを宗主国の座から追い落とす為の道具として、圧制に苦しむ弱小国や地方部族から人材を集めて現在ののような中堅国の一軍にも匹敵する武装組織を結成させたのだ。

長きにわたり隠蔽されてきたこれらの事実は、イレギュラーな存在によって明るみにされつつあった。

宮殿の資料室にてガスクラツテ帝の治世に起きた小さな反乱から大きな反乱まで、記録に残る多くの叛徒達の中でも、バツフェムト独立解放軍に関連する反乱軍資料を読み漁っていたスィルアツカは、

コウからの決定的な情報を元に現状の凡その構造を推測、把握した。

「組織の創始者が掲げていたのは自由な漁業。大型漁船の接收と漁の規制に対する抗議か」

彼らがバツフェムト独立を謡い始めた時期を調べてみると、約五年前、組織の首謀者だった一族の長が戦死して娘が後を引き継いだ頃からのようだ。この娘は恐らく現在の指導者”フロウ”の事である。

バツフェムト独立解放軍の活動による被害報告が増え始めたのは、それから少し後の頃からである。

「しかし……コウからの情報を聞く限り、組織の拡大や過激派化するような人物ではない」

となれば、やはりマーハティーニと通じる参謀総長マスロットが指導者フロウを旗印に組織の結束を図りつつ、規模の拡大と武装集団化を進めていったと考えられる。

活動が行き当たりばつたりなのは戦略性が無いのではなく、明確な意図が分からないような動きをして見せる事で、本来の目的である”デイド王子の名声を高める餌として存在している事実”から人々の目を欺く為の処置であろう。

実際、目的がハッキリしないせいで何処に現れて何を行い、また何処へ行くのか予測が立てられず、他国の征伐隊が領内の巡回や待ち伏せで反乱軍と遭遇した事例も殆ど無い。

ちまちまとした被害報告は上がるものの、街を占領されたり重要拠点など帝国内の要所を押さえられたりといった大きな被害も無く、征伐隊が向かえば直ぐに逃げてしまふ事から、当初はあまり脅威と見做されていなかった。

近年、反乱軍の兵力が『所詮は烏合の衆』と看過できない規模にまで膨れ上がった事で危機感を覚え始めた近隣国は、マーハティーニに征伐隊の派遣を依頼するようになっていた。丁度、エツリアではグランダールとの戦に備えて戦力の再編をしていた頃だ。

「宗主国の座を狙った長期的な戦略、と見るべきか……」

約一年前、京矢を保護した事を切っ掛けに発展した機械化技術の優位性がなければ、今頃はエツリアの凋落とマーハティーニの台頭がハッキリと現れていたかもしれない。

「スイル様、少し休憩なさってはいかがですか？」

机に向かって唸るスイルアツカの傍にやって来たターナが、お茶を淹れて勧める。うむと一口啜り、椅子の背もたれに身を預けるスイルアツカ。机の上に広げられた資料の隣にはメモ書きに”マーハティーニと反乱軍についての考察とその対策”と綴られている。

「難しい状況ですか？」

「ああ……正直、芳しくない」

マーハティーニの策略は予想以上に深い所まで進んでおり、近隣国への発言力、影響力がその資金と共に浸透しているようだ。

スイルアツカはグランダールとの休戦協定が結ばれる以前、コウが味方判定を下した支分国の王達の中にも、自国の重鎮がマーハティーニ寄りである事に憂いを持つ者がいた事を思い出す。

「近隣国の王よりも王家を支える有力家との結びつきが強い。要は足元からの切り崩し工作だった訳だ」

反乱軍の被害が多い地域では、征伐隊の派遣と街の復興によく投資や資金援助をしてくれるマーハティーニへの友好度が高く、各街の領主が自国の王室うぐえを通さず直接マーハティーニと交渉を重ねるなどして援助を受けるケースが増えている。

特に不正がある訳でもなく、恩恵こそあれど資金援助による無茶な見返りを求められる訳でもないそれらの国々の王達は、マーハティーニとの今後の関係を考えると、領主達にそういった資金の受け入れを禁止する訳にもいかない。

近隣国のマーハティーニとの繋がり是最早、簡単には断ち切れな
い所まで来ているのだ。

「反乱軍との繋がりを暴露して糾弾する訳にはいかないのですか？」
「明確な証拠が無いし、あの狸親父がそうそうボロを出すようなへ
マをすることも思えん」

コウの情報は正確なモノではあるのだが、相手の思考を読んで取
得した機密であるだけに、それが間違いなく正しい情報であると第
三者に証明できるだけの証拠となるものが無い。

証拠になりそうな物や人は早々に隠滅を図られるであろうし、そ
の上で白を切り通されてしまえばそこで手詰まりだ。逆に証拠もな
く反乱軍との繋がりを指摘して糾弾した事に対する抗議の切り返し
を受ける危険性もある。

「内容が内容だけに、相談できる相手も居ないのが痛い所だ」
「キョウヤは……こういう事に詳しい訳でもありませんでしたね」

「こういう話にもしれっと参加して来るから忘れがちになるが、ア
レは一応、素人だからな」

「そうでした」

へっくしよい等と呟きながら、ぶらりと資料室にやって来た京矢が二人の前に現れる。別に悪口を言っていた訳ではないのだが、噂をしていた本人がいきなり現れた事に少し動揺などしてみせるターナとスイルアツカ。

「素人からの提案いかがですかー」
「な、なんだ？」

謎のテンションに気圧されながら京矢の”提案”とやらに耳を傾けると、京矢はコウの記憶と自分の知識、双方を交えた発想より至った結論を披露する。

「適材適所、目には目を、狸親父には狸親父を　　って事で、コウと俺からのお勧め」

策略や陰謀に通じていそうな人物。カウンターアタックを任せられそうな海千山千の手腕を持つ人材に相談する事を進める京矢達。その人物とは

「ルツカブルク卿、か……」

少し前。解放軍キャンプの昼下がりに。

本来なら食事の摂取も必要ない為、少量の配給スープで早々に食事を済ませて諜報活動に勤むコウ。食後の自由時間を散歩で過ごすコウは、キャンプの敷地内でもまだ立ち入った事が無い区画を見て回っていた。

攻撃部隊に所属する同志達の共同生活テントが並んだ一角から、更に奥まった所に見えるひととき大きな指導者のテント。その背後に聳える高い崖には木枠で組まれた階段が設けられており、崖の途中にぽっかり開いた洞穴へと繋がってる。

『あそこはなんだろう？』

コウが洞穴に注目していると、指導者のテントからフロウが姿を現した。疲労を感じさせる何処か気だるげな足取りでテントの裏に回ったフロウは、階段を上って洞穴へと姿を消す。

何かあるのかと興味が湧いたコウは、指導者のテント裏にある崖の洞穴を探索してみる事にした。

普段なら指導者のテントに向かう小道には見張り役が立っているのだが、今日はコウが見つけた地底湖周辺のお宝資源集めに人手が駆り出されていた事や、昼食時であった事も重なって警備に空白が出来ていた為、コウの侵入を見咎める者は居ない。

真つ当な軍組織でならありえない失態だが、バツフェムト独立解放軍は”真つ当な軍組織”ではないのだ。

指導者のテント前まで来た時、中から誰かが出て来る気配がしたので、コウは素早く物陰に隠れた。指導者の付き人くらい居てもおかしくはない。そんな事を考えていたコウの視線の先で、テントの出入り口から現れたのは参謀総長メスロケットだった。

『あれ、この人が来てたのかー』

マズロッドは服の裾や襟を軽く整えながら一度振り返り、テントの裏手に見える崖の洞穴を見上げると、そのまま踵を返して攻撃部隊の共同テントが並ぶ一帯へと下りて行った。去っていく参謀総長の後ろ姿を物陰から静かに見送るコウ。

やがて物陰から出たコウは木柱で組まれた階段を上って洞穴に踏み入れた。くぐもった水音が反響している洞穴内は、少し奥まで入った辺りで厚そうな布壁に遮られている。

サウナ用テントのように何枚も重ねられた布をカーテンにしているらしく、閉じた隙間から僅かに白い蒸気が立ち昇っていた。

『もしかしてフロウ専用のサウナなのかな？』

コウが布壁に触れてみると、以外にもあっさりとした手応えで簡単に隙間が開かれ、外気の流入と蒸気の流出で発生した風がコウの頬を撫でて行く。そんな空気の流れに反応したフロウが、ぼんやりした表情で振り返った。

「マズロ……？ ごめんなさい、私……今日はもう」

真っ白な肌に刻まれたばかりの赤い痣と情事の痕跡を暖めた湯で汗と共に洗い流しながら、また今度にして欲しいと懇願するフロウはしかし、視線を向けたそこに少年の姿を認めると驚愕を露にする。

「えっ！ あ、あなた、何故ここにっ」

「何があるのかなと思って、勝手に上ってきちゃった。ごめんなさい」

頭を下げてごめんなさいするコウ。身体も露にしていた事を思い出したフロウは、汗を拭き取るサウナ用の薄いタオルを身体に巻きながら自身の動揺を抑えつつ、努めて冷静に話し掛けた。

「そ、そうだったの……あ、あの、下で誰かに会わなかった？」

「マズローさんがテントから出て行ったよ？」

「そう……えーと、彼が訪ねて来てたのは、あなたが見つけた資源の事で大事な秘密のお話があったからなの」

だから組織の他の人達には内緒にしておいてねとお願いするフロウ。何かを必死に誤魔化そうとしている様子がありありな彼女の思考から読み取れた情報には、スイルアツカに先程の件を伝えて離宮の奥部屋に戻って来ていたりリアルタイム交信中の京矢が反応した。

コウ

『どうしたの？ キョウヤ』

あのレイパーペド参謀、やっちまおう

『え〜まだダメだよ〜』

単なる傀儡というだけにあらず、お飾りの指導者は先代より受け継いだ組織を護る為、ここまで大きくなったバツフェムト独立解放軍を維持していく事が可能な手腕を持つ者に、見返りとしてその身を捧げていた。

ありがちな話ではあったが、自らその判断を下しての決意からではなく、当時まだ年端も行かなかった少女が組織の解散か継続かという選択を突きつけられての、なし崩し的に奉仕を迫られての結果である事に、京矢の倫理観が火を噴いた。

殴りたい、ああ殴りたい、殴りたい

『うーしちごーだねっ』

まあそれはともかくとして、解放軍もマーハティーニの傀儡組織だつて事は間違い無い訳だよな

『そうだね、それを知ってるのは参謀の人と、この前の部隊長の人くらいみただけど』

それならば、解放軍をどうこうするよりも大元であるマーハティーニをどうにかしてしまふ事で色々な問題が一気に解決するのではないか、そんな風に考えてコウに意見を求める京矢。コウは自分がこれまでに見たり関わったりして来た問題を思い出す。

クラカルの街でデイレトス家の世話になっていた頃に関わった行政院の幹部貴族による不正事件。グランダールの王都トルトリユスでレイオス王子達と共闘した沙耶華の拉致誘拐にも絡む一連の陰謀。ナツハトームとの戦争でバラツセの防衛に支援として参加した折、総指揮を担っていた老紳士が語ってくれた昔話とその顛末など。全て潰してしまうよりも、悪い部分を切除するなり、良い流れに向かうよう処置した方がいいと答えるコウ。

『マーハティーニが何もかも悪いわけじゃないと思うんだ』

外科手術的なやり方が……

策略に策略で対抗する静かな戦い。今後の成り行きでスイルアツカにそれを推すならば、コウには是非ともマーハティーニに潜入してレイバドリエード王に張り付いて貰いたい所だと考える京矢に、コウは疑問を呈する。

例え相手が何を企んでいるか全て筒抜けに出来たとしても、必ずしもそれで相手の策略全てに対抗できる訳ではない。

大勢の思惑が絡む国家間の策略合戦では、一つの企みからそれに絡む様々な要素が派生する。それらを全て把握するのは勿論、予測するのも困難だ。

寧ろ一人の企みに意識を集中し過ぎるあまり他の動きに対する警戒が薄れ、派生から広がった別の要素を経由して迫る脅威を見落とす危険もある。

相手の策略内容を知ってから対策を講じるような”受け”の対処法ではなく、相手の目的や方針を理解した上でそれらを織り込みながら仕掛けられる”攻め”の戦略が必要だと考えるコウ。

うーむ……なんか自分の分身とは思えない思慮深さだな

『キョウヤだって覚えてる記憶とか全部使えたら、すぐに思いつくと思うよ？』

何かを考えるにも覚えるにも、また思い出すにも”脳”を使う普通の人間に比べると、記憶情報にほぼ直結している精神体なコウは、自然と頭の回転も速いような状態に在る。本体が目覚めた事きょうちやで魂が活性化してからは特にその傾向が顕著だった。

しかし、難しい問題だな

スイルアツカも頭は良いのであるが、彼女自身が”策略家の狸親父”と呼んで警戒している相手を、果たしてやり込められるだけの策略手腕を発揮できるのか否か。

『それは大丈夫。味方になってくれそうな人に、そういうの得意な

人がいるから』

それって誰……ああっ　なるほどな、確かにあの人なら対抗できそうだよな

コウの意識から該当する人物を読み取って納得した京矢は、早速スイルアツカ達に勧めようと奥部屋を後にする。『確か宮殿の資料室に居る筈だ』という京矢の思考を拾ったコウは、宮殿内の詳しい道順を思い出す事で京矢の移動を補佐した。

と、その時

「あの……コウくん？」

先程から黙り込んだままボーっと立っているコウに対して、参謀総長マスロットが自分のテントを訪れていた理由をあれこれ説明していたフロウが訝しむように覗き込む。

「ごめん、フロウに見とれてたんだ」

「なっ！　こ、コウくんだったら……もう、大人をからかうものじゃないわよ？」

ぼつと頬など染めたフロウは少年コウを回れ右させると、洞穴サウナ部屋から追い出した。優しく退室させられたコウはそろそろ武器磨きの仕事場に戻ろうかと洞穴を後にするのだった。

つくづく、俺の分身だとは思えない……

意識の奥で、京矢がぼつりと呟いた。

63話・其々の選択と決断（前書き）

今回ちと長くて重めです。

63話：其々の選択と決断

帝都エツリアではスイルアツカ皇女を支持する者は多く、宮殿上層を占める半数以上の有力家からも次期皇帝としてスイルアツカ皇女の帝位継承が望まれている。

だが女帝を戴く事に慎重な一派も少なからず存在し、とりわけルツカブルク卿はその筆頭として知られている人物だ。

「ふむ。私に内密な相談という事ですが、例の従者は連れておられないようですね？」

「コウには別の仕事を任せていますので」

重要な会議や支分国大使達との会談でも特に議論で良い流れを作ったり、有益な結果に結びつけた時は何時も”例の従者”が傍にいた事を言外に指摘するルツカブルク卿。

のっけから、あの従者には”珍しい冒険者ゴーレム”という以外にも何か秘密がある事に気付いているようなニュアンスを含ませて牽制するルツカブルク卿に、苦笑を返したスイルアツカは言葉遊びに乗らずストレートに切り出した。

「マーハティーニに仕掛けたい。貴方の力を貸して欲しい」

「それは……」

「勿論、謀略の類だ。国力はそのままに、帝国内での影響力を削ぎたい」

「……私に策略の知恵を貸せと仰る訳ですか」

対立的な立場を明確にする自分の所へ、皇女殿下が直々に協力を求めて来た事の真意を推し測ろうとするルツカブルク卿に、スィルアツカは表に出せないマーハティー二絡みの事件やその真相を語って明かす。

先日の魔導技術研究施設が反乱軍に襲撃された事件の真相。反乱軍、バツフェムト独立解放軍の実態とその裏に隠されたマーハティー二の暗躍など、帝国内の暗部にかなり踏み込んだ危険な内容だ。

「そのお話、陛下には？」

「父上の耳には入っていないし、今後も事が済むまでは知らせるつもりはない」

横槍を入れられたくないというスィルアツカの判断は、現皇帝の与り知らぬ所で全ての処置を行う事を示しており、将来自身が次期皇帝として君臨し、帝国を治めていく心積もりである事を表明するモノだった。

スィルアツカの帝位継承に対して慎重な立場であると公言する重鎮を相手に、これほど重要な情報ネタを持つて秘密裏に協力を要請する行為は、「正面から」我が軍門に降れ」と誘っているようなモノである。

「……殿下は、随分と私を買い被っておられるようだ」

「正直な所、私は貴方が苦手だった」

唐突な告白に、それは確かに正直な意見ですなと肩を竦めて見せるルツカブルク卿は、スィルアツカが自身と対立する一派を掌握する為に何を語り、如何なる説得にて慎重派筆頭の重鎮を味方に引き

入れるつもりなのか興味を持った。

「コウは人の本質を見抜く力を持っている。そのコウが、貴方は敵ではないと言った」

「ほう、祈祷士のような能力ですか？　しかし、従者の進言を根拠に味方を選定するというのは、些か……」

「勿論、それを信じるか否かは私の判断だ。そしてコウを起用した私の判断は正しかったと明言できる」

「ふむ。まあ確かに、ここの所はトラブルの対処を含め色々と上手く運んでおるようですね」

スイルアツカはコウの素性や能力について伏せた部分を残しながら、今回ルツカブルク卿に歩み寄る事を決めた理由の一つに、政治的な戦略手腕を持つ有能な参謀役が部下に必要である事を挙げた。

「はて、最近殿下の携わって来た交渉事を悉く良い方向に導いて来た彼は、貴女の直属ではありませんでしたかな？」

「彼の役割はあくまでも判断材料を提供する為の補佐だ。コウが正確な情報を上げ、それを私が判断する」

今私が欲しいのは、敵勢力をこちらの望む形に弱体化させた上で理想的な関係に持ち込めるような、効果的な政治戦略を組み立てられる人材なのだと言ふスイルアツカ。

「なるほど、殿下の仰りたい事はよく分かりました。では……私めが殿下の側につくとして、その見返りには何を？」

皇帝の臣下という立場にある者が皇女殿下の要請に応えるに当たって見返りを求めるなど、本来なら不敬の謗りを受け兼ねない言動

だが、己が主君はあくまで皇帝陛下であるとするルツカブルク卿はこの問い掛けでスイルアツカを駈した。

交渉する相手の事を何処まで把握し、理解出来ているか、何と云ってどう対処するのか、その答え如何によつてはスイルアツカ皇女に対する見方や自身の立場も変えていかななくてはならない。

ルツカブルク卿の最後の駈しに対して、スイルアツカは淀みなくこう答えた。

「帝国の発展と民の憂い無き平和な世界を約束しよう」

スイルアツカは既にコウを通して得た情報によつて、ルツカブルク卿が普段から何を求めているのか把握していた。最初にコウからそれを教えられた時、意外過ぎて聞き直したほどだ。その為、卿の願う”民の憂いなき平和な世界”という願いをしつかり覚えていた。

「……これは驚いた　いや、感服致しました。これまでの数々の非礼、お許しください」

「非礼だったとは思っていない。それに、貴方の願いを知っていたのはコウの功績だ」

大きく態度を改めるルツカブルク卿に少々面食らったスイルアツカはそう言つて卑下するが、優秀な人材を部下に招く事も、部下の功績を活かせるのも、上に立つ者として優秀である証だと諫められる。

「この上は微力ながら姫様の為に策謀の知恵を尽くしましょう」

「そうか、よろしく頼む」

若干表情を緩めたスイルアツカとルツカブルク卿はしっかりと握手を結んだ。

その後、ルツカブルク卿の私室にターナも呼び寄せたスイルアツカは、対マーハティーニの策を練るにあたって話し合いに入り、その際ルツカブルク卿から心構えの確認を向けられた。

「差しあたり、マーハティーニに仕掛けたいという事でしたが……お手を汚す覚悟はありますか？」

「うん？ 私の手はとうに血塗れだが」

「貴女個人の闘争によるモノではありません。貴女の働き掛けにより、他者の手を血で汚す覚悟を問うております」

「既に通った道だ」

宮殿庭園で姉の護衛戦士を屠った時から、スイルアツカ自身もこれまでになりに小なり策略の類は仕掛けたり仕掛けられたりを重ねて来ているのだ。流石に国家戦略規模の謀にはまだ経験も乏しく、グランダーに仕掛ける時は暗部同盟に任せきりだったが。

割とあっけらかんと答えたスイルアツカスイルアツカに、これは自分も掴みきれない所で相当数の問題と向き合ってきた経験があるのだなと悟るルツカブルク卿は、ならばこそ、個人的な感情に惑わされる事なく、支配者として非情な決断も下せるであろうと期待する。

実際の所、スイルアツカに向けられていた”個人的な感情による迷い”の可能性とは、凡そルツカブルク卿の認識不足による杞憂の類でもあった。

ルツカブルク卿が懸念していた要素とは、スイルアツカと”非常に親しい”マーハティーニの王族兄妹、デイドルバード王子とメ

ルエシード王女に対して感傷が働き、計画の詰めに甘さが出るのではないかというモノだったのだ。

逆に言うなれば、ルツカブルク卿の眼をもつてしても、メルエシードが演じていたスイルアツカとの親密さという演技の繕いは見抜けなかった事になり、ある意味、レイバドリエード王の持つ策略の才が娘メルエシード王女にも備わっていた、とも言えた。

「では、現在の状況と先の施設襲撃事件の真相を利用した策を一つ挙げたいと思います」

「ほう……さつき教えたばかりの情報をもう活用するのか」

反乱軍を巡る一連の流れからルツカブルク卿を味方につけたスイルアツカは、エツリアの安泰と帝国内の安定に向けて、対マーハテイーニの策謀を練り上げて行くのだった。

バツフェムト独立解放軍キャンプ、少年部のテントにて。今日も武具磨きの仕事を終えたコウは、就寝時間の静かなひと時を京矢との交信で過ごしていた。京矢からの知らせによれば、数日中に帝国内で大きな動きが見られる可能性があるという事だ。

俺も詳しい事までは聞いてないんだけど、そっちにも影響が出るかもしれないから備えておくようにってさ

「んー、わかった」

今の所は解放軍キャンプにも特に問題ないみたいだな

『うん、征伐隊もこないし、調達部隊はコウモリの糞と塩の結晶を売りに行ってるみたい』

何か起きた時は正体をバラしても良いので子供達は護つてやれよ？　と言う京矢に、コウもそのつもりでいると応える。後、ウルハを連れ帰る事に関しては許可が下りたと伝える京矢。

まあ、その子の能力を利用する事が前提みたいだけだな

『それはウルハも分かってるみたいだよ、ちゃんとスイルの為に働くって言った』

祈祷士としての訓練も無しに才能だけで熟練祈祷士であるリンドーラ並の交感能力を発揮するウルハについては、話を聞いたスイルアツカが即日お持ち帰りOKを出した。実質、人材選定をこなせる者が一人増えるようなものである。

そんな感じで、解放軍キャンプでの当面の過ごし方と今後の方針を定めたコウは、スイルアツカ達の活動による大きな動きがあった際に組織内で動き易いよう、フロウからの信頼を得ておくべく接近して距離を詰める予定を立てた。

…… お前も大概策士だよなあ

『そーお？』

コウの内心予定を読み取った京矢が溜め息まじりな思考を飛ばす。主に境遇に対する愚痴っぽい思考。

俺もイケメンマスクか可愛い系の顔を持っていれば、訳有り皇女様や訳有り捲くり王女様、中身がアサシンソルジャーな離宮の侍女さん達ではなく、普通の美人使用人とか何処かの御令嬢辺りと良い

関係になつたり出来たかもしれないのという嘆き。

不死身とか抜きにしても、ほんとに便利だよなーその身体

バラツセのニーナ、エルメール、クラカルのアリス、ガウィーク隊のカレンにレフ、トルトリユスの沙耶華とエルローゼに王宮群の使用人さん達、エイオアのリンドーラ、その他旅の途中で立ち寄った街の酒場にいる給仕のお姉さん方、そして解放軍少年部のウルハ

指導者のフロウには計画的に接近予定とか、お前あらゆるタイプから抱擁を受けてるだろ

『ニーナにはハグされたけどエルメールさんには頭撫でられた事しかないなあ』

正直、羨ましい

『あはは』

立場上、こういつた気楽な雑談を交せる相手が周囲にいない京矢は、文字通り気心の知れ合ったコウと若者のな会話を楽しむ。だが、意識の奥で繋がっているが故に京矢が敢えて触れないようにしている事柄も知るコウは、遊び心と悪戯心も発揮する。

『でも、ボクとチューしたのはキョウヤだけだよ？』

ぎゃーっ

エツリアの離宮にある奥部屋から『忘れたい……』という願いと共にジタバタする思考が伝わってくる。夜の空いた時間に京矢を弄って遊ぶコウなのであった。

数日後、エツリア宮殿上層階の一角。帝都を訪れた支分国の王族や大使達が滞在する際に使われる部屋の一室にて。

急遽マーハティーニから妹姫メルエシードの安否を確認に訪れたデイドルバード王子は、何時もなら十数日ぶりに顔を合わせる時など飛びつく勢いで抱きついてキスの一つもくれていたメルエシードの、何だか余所余所しいような雰囲気、ぎこちない態度を訝しむ。

「どうしたメル、怪我は無いと聞いていたんだが……何処が悪いのか？」

「兄さま……」

人払いのされた部屋。心配するデイドル王子にそつと歩み寄り、ぴとりと身体を預けたメルエシードは、戸惑いがちに訪ねる。

「お父様は、何か言っただけでなかった？」

「ああ……いや、親父殿は 反乱軍の征伐を優先しろと言っていたが、無理を言っただけでエツリア行きを許可して貰った」

多分、親父殿もメルエシードが狙われた事で腹に据え兼ねて反乱軍の征伐を強調したのだろうと語るデイドル王子。その答えに半分気持ちを上させたメルエシードは、最愛の想いを寄せていた兄王子に確認しておきたかった事を告げる。

「ねえ兄さま、兄さまは……あの日、わたしが施設の視察団に同行する事を知っていた？」

「いや？ 公務だったという話を後で聞いた。俺はてっきりまたメルが気まぐれでついに行っただのかと思っただぞ」

「じゃあ、兄さまはお父様から何も聞いていなかったのね？」

「うん？ なんの事だ？」

デイドルバードは先程からの探るような問い掛けに、メルエシードが何を言わんとしているのか分からず疑問を呈す。その反応にホツとした表情を浮かべるメルエシードは、一度ぎゅっと抱きついてデイドルバードの胸に顔を埋めると、ゆっくりと離れながらこう言った。

「わたし、お父様の言いつけに背いてしまったの。秘密の任務があったのに」

「それは仕方あるまい、警備兵になり済ましていた反乱軍に襲われたのだろう？ メルのせいではない」

「ううん、違うの。わたし、本当はその反乱軍の手に掛かって死ななくちゃいけなかったの」

「なにを……言っている……？」

メルエシードの言葉に眉を顰めて混乱するデイドルバード。そこへ、ノックもそこそこに部屋を訪れたスイルアツカ皇女殿下が、側近の侍女ターナを扉の外に待機させて二人の前に立った。

示し合わせていたように小さく頷き合うスイルアツカとメルエシードに、デイドルバードはますます混乱を深める。

「スイル、これは一体……メルは何を言っているんだ？ 君は何か知っているのか？」

「とりあえず、貴方が潔白である事をまず信じよう」

スイルアツカはそう言っただけで部屋のテーブルに向かうと、戸惑うデ
イードルバードを手招きして椅子に腰掛けるよう促した。

ターナとその部下が護りを固めたメルエシード王女の滞在する部
屋にて行われるスイルアツカ皇女とデイドルバード王子の極秘会
談。その席で、魔導技術研究施設襲撃事件の真相を聞かされたデ
イドルバードは俄かに信じ難いと呻く。

「それは　　本当の事なのか……？」

「残念ながら、事実だ」

きっぱりと答えたスイルアツカに追従するようにメルエシードが
頷く。更に、スイル將軍直属の諜報員によって明らかにされたとい
う確信の響きを持って示された”マーハティーニから反乱軍への資
金提供”という反乱軍征伐の自作自演情報に言葉を失う。

デイドルバード自身、父王から推されるやたらと効率の悪いや
り方に沿った反乱軍の征伐法には常々疑問を感じていたのだ。

「エツリアとしては、このままマーハティーニの不正と暴挙を放置
しておく訳にはいかない」

その言葉にハツとなるデイドルバード。確かに今はショックを
受けたと呆けている場合ではない。

宗主国の、実質政務まで取り仕切り始めている皇女殿下にここま
で問題を把握されている状況、もはや糾弾と制裁は免れない事態だ。
最悪の場合、王室が解体されて領土はエツリアと周辺国に分割編入

され、マーハティーニという国家は消える。

「俺に、この話を聞かせた目的はなんだ？」

祖国の将来を担う王族の長男として何とかしなくてはならない。

態々こうして会談の席を設けている事から、直ちにマーハティーニをどうこうするつもりは無いと見たデイドルバードは、スィルアツカの目的を訊ねた。

今まであまりじっくり見る機会もなかったデイドルバードの真剣な表情と向き合うスィルアツカ。

事前に話を通しておいたメルエシードは黙って俯いている。その沈痛な面持ちも露にした様子からは完全に納得している訳ではないという気持ちを窺えるが、受け入れる事は出来ているようだ。後はデイドルバード王子の選択と決意次第。

スィルアツカ皇女は既に引き返せない所まで進んでしまったマーハティーニに、糾弾と制裁を下さず是正する為の処置を言い渡す。

「お膳立ては全てこちらで済ませる。 レイバドリエード王を討

て

「っ……！」

街や村の農家ではそろそろ作物の収穫の時期に差し掛かる季節。

今日も今日とて朝から賑やかな解放軍キャンプの少年部テント周

辺では、トウロに雑用を押し付けようとしたバゼムがミアに平棒で叩かれたり、以前ラツカが貰ったお人形のほつれた部分をウル八が修繕してあげたりと平和な時間が流れていた。

ちなみに、お人形からは前の持ち主の影である”命の残り香”は消えている。

ラツカが大事に使っていく内に人形と重なって視えていた影は次第に薄くなり、やがて見えなくなったので、ウル八も触れる事が出来るようになったのだ。

「あれ？　そういえばコウくんは？」

ふと、コウの姿が見えない事に気付いたミアが誰に向けてでもなく口にする、最近少しだけ以前よりもよく話すようになったウル八が、修繕を終えた人形をラツカに返しながらボソボソと答える。

「彼なら、フロウさまの所に行ってるみたい」

「またあ？」

「コウちゃーフロウさあーとなかよし？」

「そ、そういえば……この頃よく一緒にいるところ、み、見かけるよね」

ミアのバゼムクラッシュャーに巻き込まれたトウロが頭を擦りながら言つと、『確かに』と皆で頷く。

「さてはあいつ、フロウさまに売り込み掛けてやがるな！」

「なに言ってるのよ、アンタじゃあるまいし」

「彼、大人のむずかしいお話もできるから、フロウさまの話し相手になってる」

若干、言葉に不満気なニュアンスを含ませながら指導者のテントがある崖の方角に視線を向けるウルハ。

つられて同じ方向を見た少年達は、崖の途中に開いている洞穴へと掛けられた階段の上で並び立つコウ少年と指導者フロウの姿を見つけて『なるほど』と、誰かによく似た口調で声を揃えた。

先日、専用洞穴サウナに迷い込んで来て以降、毎日のように顔を出すコウ少年に、フロウはあまり特定の相手と親しく振舞うのは組織にとって良くないと思いつつも、話し相手として聞き上手でとても話し易いコウと過ごす時間を増やしていた。

以前コウが洞窟の新しい出入口を見つけた時、一緒に見つけた資源についてマズロッド参謀総長が組織の資金繰りについて語った際には、子供にそんな話をしても分からないだろうと宥めたフロウだったが、コウはちゃんとそれらの仕組みを理解しており、驚くほど組織の全容を正しく把握、認識していたのだ。

その中でも、フロウが心に秘める誰にも相談できない組織の暗部について、コウはフロウの気持ちを正確に察してくれる。

「その人たちつてもう、フロウのお父さんが作った組織とは関係なくなってるんじゃないかな」

「そうよね、私もそう思うの。だけど、彼等がいないと今の組織を維持できないってマズロは言うし……」

解放軍の中でも特に維持費が掛かっている第二軍独立部隊や、別働隊の活動は指導者の立場にあるフロウでさえ把握しておらず、マズロッドが色々と指示を出しているようだが、その詳細を伝えられ

る事はない。

「教えると不味いつて思ってるんだね」

「ええ、そうみたい。まあ、何をしているのかを知ったとして、私にどうこう出来るとも思えないけど……」

何時の間にか独立と解放を掲げて戦う武装集団と化してしまつたこの組織も、元々はエツリアの都合で船を奪われた漁師達の抗議を纏めて訴える平和的な集団だつたのだ。

「元の平和な抗議団体に戻ろうつてみんなに話してみたら？」

「ええー、今更そんな事……」

「もしかしたら、フロウと同じこと思ってる人とか沢山いるかもしれないよ？」

「……そうかしら」

先代の事を敬い、フロウを慕つて組織の活動に身を投じている人達なら、フロウの言葉も十分届くのではないかと勧めるコウ。

実は諜報活動の一環で”同志達”の内面も読み取り済みである為、ちゃんと根拠があつたりする。今の組織の在り方に疑問を懐いている同志は結構多い。確信を持って語られるコウの言葉は、着実にフロウの気持ちを脱戦闘集団へと傾かせていくのだった。

その夜。参謀総長のテントで密談を交わすマズロッドは、焦燥を浮かべた様子で特務別働隊の隊長、ヴェームルツダから派遣されている上級戦士長カロムツソに詰め寄っていた。

「どういう事だ！ 今更抜けるなどと……組織はどうなるっ それにマーハティーニの連絡員は」
「どうもこうもないさ、今言っただ通りだ。俺の雇い主はあんたじゃなくマーハティーニで、派遣の命令を下したのはうちのお上だ」

契約が切れた以上、この組織がどうなるかと自分の知った事ではない。無情に切り捨てるカラムツソは面倒くさそうにそう説明すると、背を向けてテントの出口に向かう。

「ま、待て！ ではせめてマーハティーニの連絡員と交渉を持たせてくれっ 何処へ行けば会える？」

「ああ、そりゃ無理だ。こっちもその都度向こうが決めた場所に呼ばれて資金の受け渡しやってたんだからな。それに」

もうマーハティーニの連絡員がこの組織と接触を持つ事はないだろうと告げる彼は、一応長く過ごした組織に餞別として自分の知る情報と忠告を与えて行く。

「多分、数日中に偵察隊が情報を持ってくるだろうけどな、マーハティーニで王子が謀反を起こしたそうだ」

現在は国王派の残党と王子派による内乱状態にあるという。混乱が収まれば何れまた征伐軍も活動を始めると思われるが、恐らく今までのように手を抜いてはくれない。確実に殲滅を仕掛けてくる筈なので、命が惜しくば早い内に解散しておいた方がよい、と。

「何故だ、証拠隠滅の為か？ しかし謀反など起こしたと言っのなら、尚更デイド王子には名声が必要になるのではないのか？」

「さてね、そもそもあの王子は組織（組織）がマーハティーニと繋がって

る事自体を知らなかったようだぞ」

ウエームルツダ
自分の所の上から急いで引き上げるといふ命令が届いた事から考えて、もしかしたら裏工作に気付いたエツリアが何か仕掛けたのかもしれないと推測を語ったカロムツソは『まあ、逃げるなら今の内だぞ』と言い残し、今度こそテントを出て行った。

残されたマズロッドは執務機の椅子にドスリと腰を下ろすと、腕組みをしながら考える。マーハティーニからの活動資金が無くなれば、組織を現状の体制で維持させるのは難しい。

『せっかくここまで築き上げた私の理想郷、むぎむぎ放棄などしてたまるか』

精強な兵士、組織内で確立した経済、可愛い子供たち、自分の思い通りになる傀儡の象徴的存在。バツフェムト独立解放軍の在り方は、最早一個の国とまで言える。その中で最高権力者として君臨している今の立場を、どうして棄てられようか。

「くそ……デイドルバード王子め　今まで散々その名声作りに貢献してやってたというのに……」

愚痴れど罵れどそれで現状が変わる筈もなく、これからの展望も開けずどうするべきかと朝まで悩み続けたマズロッドは、思わぬ所から自分の身の振り方を定める事になる。

思いの外早く帰還した偵察隊より、マーハティーニで王子の謀反による内乱発生という一報が伝えられた事で、組織内の好戦派から今がマーハティーニ領の街を襲撃するチャンスだという声が上がった。

彼等の主張には呼応する者がいる一方、マーハティーニ主導の征伐軍相手に幾度となく戦ってきたとは言え、元々エツリアの横暴に抗議する目的で集まった自分達がマーハティーニを攻撃する事に意味はあるのかという慎重論も同志の半数以上を占めた。

そんな中、指導者フロウがこれを機に組織の在り方を見直して方針転換を図る事を訴えるという行動に出たのだ。

「もっとも、転換というよりは原点回帰というところでしょうか」

「しかしフロウ様、我々は既にナツハトーム帝国全体から反乱軍として見られているんですよ？」

「今更ただの抗議団体に戻るといつても……」

慎重派の同志達は穏便路線で行く事に関しては賛成するものの、組織の知名度としては周辺国から征伐隊を向けられるまでに至ってしまった我々が『今後は平和的に活動する』と表明した所で受け入れられるものだろうかと疑問を呈する。そこへ

「私に良い考えがあります」

議論で紛糾する中央広場に遅れて現れたマズロッド参謀総長がそう言ってフロウの隣に立った。

エツリア宮殿の最奥にある皇帝の自室にて、アルメッセ産の嗜好

品をゆつたりと楽しんでいるガスクラツテ帝は、マーハティーニで起きた突然の政変に対する処置と事後報告、これからの方針を聞きながら、それらを上手く纏めたスイルアツカの政治手腕に頷いていた。

「とりあえず、王子派と国王派残党による内乱が落ち着き次第、エツリアはデイド王朝を容認する方向で進めます」

「先に真意を問う使者は送らなくて良いのか？ それに、国王派の有力家が王子の謀反を裁くよう訴えてきた場合はどうする」

「問題ありません。全て、話については……」

その含みを持たせた物言いに、怪しく眼を光らせたガスクラツテ帝はスイルアツカの策略かとほくそ笑んだ。

近年マーハティーニの勢いはエツリアにとって脅威であり、機械化兵器の優位性も資源を独占されている立場から危うい傾向にあったのだが、首だけ挿げ替えて従順な支分国に仕立て上げるのだなど納得する。ルツカブルク卿とも協調したようでは喜ばしい。

ガスクラツテ帝はこれでエツリアとナツハトーム帝国はますます安泰だと、スイルアツカの帝位継承の日を想い描く。

エツリアが逸早くデイド王朝を認めた事により、宗主国の決定に他の国々も追従を見せると、マーハティーニ国内でも皇帝が認められたらばとデイド王子の傘下に降る者が続出。内乱は早々に収束へと向かい始めた。

マーハティーニの情勢が落ち着くまで、メルエシードは”人質”という形でエツリアに保護される事が決まっている。

報告を終えて離宮に戻る途中、スイルアツカはふと廊下の窓から

宮殿庭園を見おろすと、枯れ葉の目立ち始めた枝が広がる木陰にて、京矢の胸に顔を埋めて肩を震わせているメルエシードの姿を見つけた。

若干表情を翳らせたスイルアツカだったが、直ぐに”スイル將軍”の仮面を繕うと、凜と背筋を立てて離宮への廊下を歩いて行くのだった。

ちよつと胸を貸して欲しいと言って静かに泣いているメルエシードの肩をそつと抱きながら、京矢は自分の行動を省みる。こんな展開になる事をコウは予測していたのだろうかと考え、意識の奥から『そんなことないよー』と返されて複雑な想いを懐く。

そのコウの方はといえば、バツフェムト独立解放軍の内部分裂に立ち会っている所だった。といっても、主義主張の対立による物別れではなく、自ら性質の違う集団に分裂する事を選んだ彼等は仮の解散と新たな出発の時を迎えていた。

組織が分裂した事にすればいいというマズロツドの提案により、”バツフェムト独立解放軍”の名は第二軍と特務部隊で構成された戦闘集団を中心にマズロツドを指導者として活動する事で引き継ぐ。フロウは自由な漁を訴える会、”バツフェムト自由漁業組合”の組織名を戻し、主に非戦闘員の同志達を引き連れて街へと帰る。一応、本隊の大部分がそのままフロウの配下となり、それなりに戦力を保持した集団なので道中は盗賊団に襲われる心配もないだろう。

組織の権力を棄てられないマズロツドは、マーハティーニの資金

がなくとも武装集団としてならやっていけると考えた。

戦闘部隊さえ持つて行けば、本隊のような集団はまた再構築できる。この際、先代への忠義からフロウを慕う古参メンバーはこころで切り離してしまおうと目論んでの提案だった。

「それではフロウ様、道中お気をつけて」

「ええ、あなた達も。みんな元気だね」

臨時の本拠地としていた平地空間にはマズロッド達が引き続き滞在し、フロウ達はバツフェムトの港街に帰郷するのだ。

もしバツフェムトに元反乱軍の征伐と称して軍が送り込まれるなどした場合は、非戦闘員と子供達を街に潜ませて逃がしつつ本隊の戦闘部隊で対処してマズロッド率いる”解放軍”の救援を待つ事になる。

しかし、フロウ達には知る由もないが、コウがこの場に居る時点でそれらの心配は無いも同然であった。少なくとも”バツフェムト自由漁業組合”に征伐隊を向けられる事が無いのは確実だ。”バツフェムト独立解放軍”の方は、今後の活動次第だが。

コウから京矢へ、京矢からスイルアツカへ、何時もの方法で情報が伝えられ、スイルアツカも彼女達”自由漁業組合”を征伐する気はないと、非公式にだが明言した。自分が皇帝になつた暁には、バツフェムトの求めていた漁業拡大に寛大な処置を考える。いずれは支分国として復帰を迎えるつもりである事も、フロウ達にはまだ内緒にしておくようにと前置きしてコウに伝えられた。

そういう方向で収めるよう動く事を伝えられたガスクラツテ帝も、あまり影響の無いバツフェムトの反乱の事はとうに捨て置いているらしく、スイルアツカの思うようにして良いと答えたそうだ。

まあそんな訳だから、そっちも戻るのはゆっくりでいいぞ。つか、今帰って来られるとメルやスィルアツカ達の内心が読めて辛い

『うん、わかった。バッフェムトの街で旅の準備ができれば、ウルハを連れて帰るね』

バッフェムトの港街を目指して街道を南下するフロウ達一行と今しばらく行動を共にするコウは、若干気持ちに迷いを生じさせている京矢を慰める。

『キョウヤは悪くないよ。スィルも間違っただけだと思っ』

……

『これからもまた同じような事があるかもしれないけど、もしスィルが間違えそうになった時は一緒に止めてあげればいいんだよ』

ああ、そうだな……

きっとこの選択は間違っていないのだろう。他にもっと良い方法はあったかもしれないが、それを示せなかった自分がとやかく考える事ではない。自らの責任を持って非情な決定を下したスィルアツカを労いこそすれ、彼女に疑問を懐くのは一時の感傷に過ぎないのだ。

京矢はそう思う事にした。

ありがとな、コウ

『ごーいたしまして』

64話：凶兆の双星

マーハティ―二領の山岳地帯にある仮設本拠地から一日掛けてバツフェムトの港街に入ったフロウ達。

”バツフェムト自由漁業組合”は、昔使っていたブック家の屋敷を本拠地として利用すべく、荷物を運び込みながら建物や敷地の状態を調べていた。多少寂れてはいるがあまり痛んでいる所もなく、直ぐに使いそうだ。

昔ここで働いていた元使用人達が屋敷と庭の管理を続けてくれていたらしい。

「おやしきーっ おやしきーっ」

「す、すごく大きいねえ」

「こーらラツカ、危ないからあんまり走り回っちゃダメよ。トオ口も通り道でばーっとしない」

「おいっ 海見に行こうぜ、海！」

子供達はこれから街で大きな屋敷に住めるとあって、皆はしゃいでいる。ブック家の敷地は結構広く、庭に何棟か宿舎を併設すれば全員を寝泊りさせる事が出来るだろう。

組織の資金もマズロッドが率いる独立解放軍の方が多目だったが二分され、暫くは凌げるだけの蓄えもある。古参の同志達は元漁師や農家出身者などが大半なので、皆で慎ましやかに生活していく分の糧は問題なく得られる筈だ。

「コウくん」

「あ、フロウ」

何処かサツパリした表情を見せるフロウは『あなたの言った通りだったわね』と、コウがアドバイスをしてくれていた事について感謝している気持ちを語る。

「あなたは山岳地帯の集落から来たのだったわね、これからどうする？ 私はこのまま一緒に居てくれると嬉しいのだけれど」

大所帯だった”バツフェムト独立解放軍”は事実上、解散したようなモノなので、将来向こうの戦闘集団である”独立解放軍”に入るのでもなければ、生まれ故郷の集落に帰る選択もある。

実際、物資調達に部隊が立ち寄った村や集落で声を掛けられ、半ば強引に解放軍へ連れてこられたという立場にあつた若者が数人、組織を分ける際に抜けていったという。

「もし集落に帰りたいなら、砂馬を手配するけれど……」

「んー、その事でいいじなお話がしたいから、後でフロウの部屋に行くね」

コウの言葉に小首を傾げたフロウは『分かったわ』と了承すると、大掃除が進められている屋敷へと入っていった。

その夜、フロウの自室を訪ねたコウは、自分が反乱軍の内部情報を探る為に潜入したエリアの諜報員である事を明かした。

初めは何の冗談かと戸惑いの表情を見せていたフロウだったが、

コウに次々と組織結成時の裏事情やフロウ自身の隠し事など、当事者にしか分からない秘密を言い当てられて狼狽する。

「じ、じゃあ……わたしに組織の方針転換を勧めたのも……」

「それはボクの判断だよ」

全てエツリアからの指示で動いてた訳ではなく、自由に動き回った上で殆ど自分自身が感じ、思った事に従っての行動であった事を告げるコウ。

そして、フロウに背負わせるには少々重い問題になるかもしれないと前置きした上で、今後はマズロッド参謀総長の率いる”バツフエムト独立解放軍”とは疎遠になるよう行動したほうが良いとアドバイスを入れておく。

「理由はまだ言えないけど、向こうと関わらなければフロウ達は完全に暮らせる筈だから」

「それは……っ 仲間を売れという意味なの？」

普段ほわほわした雰囲気の彼女に似合わず、キツと眉尻を上げて語気を強めるフロウに、言い方が不味かったかな？ と伝える情報を整理したコウは、マズロッドの考えていた事やマーハティー二との繋がりを一部暴露した。

今回マーハティー二で政変が起きたのも、そこを探り当てた事による宗主国エツリアの処置であった事をちらつと匂わせる。流石に事が大き過ぎて思考がついて行けず、呆然とするフロウ。

調達部隊が略奪をして近隣の村や集落に迷惑を掛けていたかもしれないという薄々感づいていた組織の暗部どころか、実質組織を取り仕切っていた参謀総長がハナから仲間全てを騙していたなど、あまりのショックに座り込んでしまう。

「フロウは良い人過ぎて、こういう組織の指導者には向いてないのかもしれないね」

「……コウくん」

先代の娘であるという理由だけで指導者を継ぐことになったフロウは、実際、ごく普通の少女でしかなかった。先代の部下だった者達が幹部として周りを固め、彼女を支えることで成り立っていた組織は、身内の裏切りには脆弱だった。

次々と不慮の事故や無念の戦死をとげる幹部達。今のままでは組織が潰れてしまうと戦力の増強を図り、次第に戦闘集団へと変貌を遂げて行った組織は、やがて彼女の手にあまる武装組織にまで拡大した。

指導者が制御できない組織は暴走して内部崩壊を起こすのみ、マズロッドはそこに付け込む形で組織の全権を掌握したのだ。

実はマズロッドの策略は先代の謀殺から始まっているのだが、そこまで教えるのは今のフロウにとって酷だろうという判断の元、コウはマズロッドが肥大化した独立解放軍と組織内での権力を維持する為に、マーハティーニと密約を結んで征伐軍との戦いを演出していた事実のみを選び分けて説明した。

「エツリアのスイル將軍には全部バレてる事だよ。だから向こうの組織と関わらなければ、フロウ達は安全だと思う」

「……分かったわ……」

どうにかそれだけ答えたフロウは、フラフラと立ち上がると疲れの様子でベッドに腰掛けた。大きな溜め息を一つ吐いて気持ちを切り替え、コウに礼を言う。

その場で気持ちを立て直す精神力の強さは、例えお飾りでも伊達

に数年間も指導者をやっていた訳ではない事を窺わせる。

「ありがとう、コウくん……色々気を使ってくれて」

「どーいたしまして」

コウは旅の準備を整え次第エツリアに戻る予定である事と、その際ウルハを連れて帰る事を話した。実は旅の準備が必要なのは概ねウルハの為であった。

「そう……分かったわ、必要なモノがあれば何でも言っただいね」

「ありがとう」

コウがバッフェムトの港街でノンビリ過ごしながら旅の準備を進めていた頃、グラウンダールの研究家で星の配列による魔力への影響とその関連性などを調べて天体観測をしていた魔術士達が、奇妙な星を発見した。

今まで何も存在していなかった場所に突然現れた二つの星。昼間でも見える白月のように浮かんだその星は、何故か見る者によって姿形を変える。

普通の一般人には薄っすらとした雲の欠片のようにしか見えないが、魔術を扱う者にはハッキリとした岩の塊に見えるのだ。

エイオアやナツハトームの研究者からも報告が上がっており、特

にエイオアでは実力の高い呪術士や祈祷士達から『空に浮かぶ二つの島が見える』という不思議な報告が寄せられていた。

俺にもぼんやり月の小さいのっぽく見えるけど、コウは島に見えるんだよな？

『うん、なんかキョウヤの記憶にある古いゲームにあった天空のなんとかみたいな感じに見えるよ』

ふーむ、なんなんだろうな。こっちの人もこんな現象は初めてだつて騒いでるみたいだし

『悪いことが起きないと良いんだけどねー』

世間では何かの凶兆ではないかと不安がる者や、吉兆に違いないと楽観的な者、星をシンボルにしている土着神の信仰者達が連日祈祷を捧げて回るなど、少しばかり騒がしい事になっていたが、何れも大きな問題には至っていない。

そんな話をしていた所でふと、京矢はコウの記憶からこの現象に関する気になる情報を読み取った。

ん？　なんか悪いイメージがあるみたいだな？

『うん、ちよつとね。ウルハが言ってたんだけど』

空に浮かぶ二つの島を見上げていたウルハが、初めてコウと接した時に呟いた”多くの魔物や魔獣が呼び集められて押し寄せる”というイメージが強まっている感じがすると不安を口にしていたそう

それって確か、コウに”命の残り香”を見て云々てな話じゃなかったっけ

『ボクもそう思ってたんだけど、なんかちょっと違ってたみたい』

まさか、空の島から魔物の大群が降って来るとかそういう類の話か？

『うーん、どうなんだろう？ ウルハ自身もよく分かってない感じだし』

もしかしたら予知的なモノかもしれないというコウに、京矢は昼間ルツカブルク卿のお抱え魔導技士ティルマークから聞いた話を思い出す。

冒険者協会で出回っている噂の中に、世界中の祈祷士や呪術士の中でも特に精霊との交感力が強い一部の者達が、予知のそれに近い感覚で凶兆を感じ取っているらしいという話。

うーむ、ほんとに何か起きるのかもしれないな……今日出発だっけ、道中気いつけて帰って来いよ？

『うん、大体五日くらいで帰れると思う』

京矢と交信を終えたコウは、ウルハの安全を考慮してなるべく早くエツリアに到着できるよう、特殊な移動手段を考えていた。

「コウくん、ウルハも元気だね」

「たまには遊びに帰って来いよなっ」

「ふ、二人とも、気をつけてね。渡りの商人が来たら、手紙書くから」

「コウちゃーウルハねえちゃーまたねー」

少年部を代表して見送るミアに、海の男を目指すことにしたらしいバゼム、珍しく目立っているトオロ、よく分かっているラツカ。組織の中でも特に親しく一緒に過ごした子供達と別れの挨拶を交わすコウとウルハ。

まだ年端も行かない子供を二人だけで送り出すのはどうかという大人組からの心配する声もあったが、コウの正体を知るフロウが問題ないと許可した事で、二人は”自由漁業組合”の同志達に見送られながらバツフェムトの港街、プック家の屋敷を後にした。

港街を出て街道を進み、周囲に人影が見えなくなつた辺りの岩陰で少年型の召喚を解いたコウは、複合体を出して憑依。祈祷士的な能力で予めコウのあらゆる姿を視ていたウルハは少し驚きはしたものの、複合体のゴツイ姿にも怯える事はなかった。

「ヴォウウ」それじゃあ、いこうか”
「うん」

旅の荷物を異次元倉庫に仕舞い、干草を包んだシーツベッドを膝上に敷いてウルハを乗せると、魔導輪を装着して街道を滑走していく。砂馬ほど速くはなくとも大人が全力で走るくらいの速度。殆ど揺れもなく安定しているので、滑走中は複合体の膝上で食事や睡眠をとる事も出来る。実に快適な乗り心地であった。

エツリアへ向かう旅の途中、ウルハは度々空を見上げては、脳裏に浮かぶ光景と悪い予感を気にしていた。

空に謎の双星が現れてから三日ほどが経過した頃。

力ある祈祷士達が双星から微かな”意思”のようなモノを感じ取れると訴え始め、吉凶どちらを暗示しているとも言えないが、何か起きる前触れでは無いかという声に応える形で、エイオア政府より冒険者協会や近隣国に向けて注意が呼び掛けられた。

それから間も無く、二つの星に変化が見られた。双方の距離が徐々に近付き始めたのだ。そして、世界に異変が訪れる。

「ダメだ、まともに動かんぞ」

「こつちもだ、魔力の流れが乱れて安定しない」

双星の接近が観測されると同時に、世界中で魔導製品全般に異常動作が報告され、各地の古代遺跡からは謎の発光現象が確認されるなど、ここ数十年の記録にも見られない不可思議な出来事が次々と起こり始めたのだ。

”凶兆の双星が世界に災いをもたらせる”そんな噂が、人々の間に広がって行く。

魔導技術文明で栄えるグランダールの王都トルトリユスでは、住人の生活を支える街中のあらゆる魔導製品が誤作動や異常動作を起こし、多少の混乱に陥っていた。

原因の究明と対策に乗り出した研究者達も、魔術研究棟施設の魔導製品が軒並み使用不能になっている為、術者として能力の高い者が中心となりながら魔力の乱れる原因を探っている。ほぼ手探り状態であった。

アングギー博士の研究所も例に漏れず、飾っておいた試作魔導兵が暴れだしたり、倉庫に眠るお蔵入り発明品が勝手に起動していたりと、研究所の壁や床、天井など至る所に発明品を組み込んである研究所は建物それ自体が暴走状態に。

不幸中の幸いか、試作魔導兵は事故に備えて稼働時間を短く設定してあったので直ぐに停止し、倉庫のお蔵入り発明品による被害は倉庫の中に止まった。

だが壁や床、天井に備え付けられている空調や照明は動作異常の末に破損。風と埃が吹き荒れ、明かりも全て落ちて真っ暗、火災対策の仕掛けで部屋も廊下も水浸し。研究所内部はもう、しっちゃんめっちゃかであった。

「あーあー、足の踏み場もないわ……サヤちゃん大丈夫？」

「はい、なんとか」

ほわっとした明かりを出す魔術の光源を手に廊下を進むサータと、その後ろに続く沙耶華。一度外に避難していた二人は、研究所内に残った博士の様子を確かめに足を踏み入れた。後片付けが大変だと話しながら、アングギー博士の安否を気遣う。

「博士ー、博士どこですかー？」

「おーう、ちょっとまっとれ」

廊下の奥の方から何時もと変わらない調子の声が帰って来た事に、顔を見合わせて一安心のサータと沙耶華。ちまたでは変態博士と呼ばれる高齢の爺さんだが、腕は超一流の魔導技師。ちよつとやそつとの出来事には全く動じない古強者なのだ。

「まったくヤレヤレじゃ、倉庫内の魔導器も半分以上が破損しておつたわい」

これでは研究も実験も出来んではないかと愚痴る博士は、手に少し変わった形のランプを下げていた。火が灯つているので油式かと思われたが、微かに魔力を感じ取ったサータが訊ねる。

「そのランプ大丈夫なんですか？ 魔力を使ってるなら、また暴走するかも」

「ああ、こいつは舶来品でな。確かに魔力を使った魔導製品の一種じゃが、随分と面白い構造をしておつてなあ」

何故か双星の影響を受けないこのランプの構造を参考に、従来の魔導器を弄るのだという。とりあえず、街や王宮群の混乱はそちらにいる魔導技士や魔術士達に任せ、博士は現状を打開する一時的な対策として魔導器の改良に着手する。

王都トルトリユスで普及している魔導製品にはその殆どに組み込まれている心臓部となる魔導器。これを双星の影響を受けないモノと取り替えれば、王都の機能は半分以上が復旧出来る筈だ。

まだ魔導製品が異常動作を起こす原因すら特定されていない時点で取れる、最大の効果的な対策であった。

舶来品ランプの構造を参考に改良を施された魔導器は、出力は低めに止まるも双星の影響による魔力の乱れを抑えられる。これを臨時に組み込む事で、トルトリユス中の魔導製品はどうか控えめのだが通常稼動に戻った。街中に魔導技術の明かりが灯る。

高い出力が必要な兵器類や魔導船用の動力を稼動させるのは無理だったが、一先ず混乱を治める事に成功したのだった。

「さすがアングギー博士」

「クワツカカカ！ もっと褒めても良いんじゃないよっ」

大分片付けの進んだ研究所内の広間にて、サータのよいしょに10度ほど踏ん反り返って笑っている博士。先程までレイオス王子が沙耶華の様子を見に訪れていたが、今は色々な処理に追われて王宮に戻っている。

何せ魔導船を始め軍の魔導兵器はその大半が使用不能。騎士団も魔術の補助効果を持つ装備品は軒並み全滅。

魔法の装備品で言えば使用率が群を抜いている”金色の剣竜隊”など、武器防具その他の殆どが使えなくなってしまっているので、活動にも支障が出ているのだ。

休戦協定が結ばれて間もないとはいえ、この現状ではナツハトームの動きにも目を光らせておかなければならないので、忙しくて仕方がないらしい。そんな状況でもしっかり会いに来るマメさは、沙耶華の気持ちも順調に絆していた。

「そういえばこのランプに付いてる模様って、漢字に似てますね。」

あ、漢字っていうのは私がいた世界の文字です」

「ほう、そうなのか。ああ、そういえばこの舶来品ランプの正式名称は、サヤ嬢の名前に似た響きを持っておったな」

なんじやったかのうと顎に手をあて、うむむと唸る。ここよりずっと東の方角にある大陸の発明家によって製作されたい、自然石を使った魔導製品なのだと答える博士は、その名を思い出してポーンと手を打つ。

「そうじゃ、確か”サクヤ式ランプ”じゃったかのう」

その大陸の名はオールドリアというらしい。

65話：墮樹の胎動

グランダールの王都トルトリユスが魔導技術に特化した都市であったが故に”双星”の接近が原因と思しき魔力の乱れによる影響を大きく受けたのに対し、ナツハトームの帝都エツリアでは機械化工場など一部の施設を停止させる程度に被害が抑えられていた。

魔導製品のような高価な品はあまり一般に普及していなかった事も、大きな混乱が起きるまでに至らなかった理由でもある。

エツリア宮殿の庭園に並べられていた魔術式ランプは過剰放光であつという間に触媒を使い果たしてしまい、発熱して焼きつく前に魔力切れとなつたので庭園を焦がす事もなかった。

異変が発生した瞬間、宮殿の周囲が一瞬ライトアップされたように光で溢れる状態になっていたそう。

「ありました、これです！」

ルツカブルク卿のお抱え魔導技士で考古学者でもあるティルマーは、態々自分の研究室まで足を運んで今回の異変について意見を求める皇女殿下に恐縮しながら、以前ナツハトーム領内の地下遺跡から発見した古い文献らしき石碑の写しの写しを広げる。

”空に現れし凶星が魔力を乱す。各地で魔術装置を暴走させて混乱を招く。凶星は異形を生み、疫病を流行らせ、飢饉を喚び寄せる”

石碑には数千年前に凶星が現れた事が記されていたようだ。ただし、この石碑の写しである文献の写しは”古代の伝承が記された文献を発見した”という古代の文献なので、合わせて考えると一万年近く昔の伝承という事になる。

「ふむ……では過去にも同じような現象が起きた可能性はある訳か」「そうなりますね、恐らく一万年以上前に今回のような異変が起きたのではないかと」

ここからはティルマーク自身の推測だが、古代遺跡からは現在の魔導技術でもまだ実現不可能な転移装置のような魔術装置が実際に見つかっており、各地の遺跡にはそれらしき跡が多く残されている事から、古代魔導文明は現在では考えられないほど魔導技術の進んだ世界だったのではないか。

それこそ世界の端から端まで一瞬で移動できる転移装置が当たり前のように設置され、一般人が普通に利用できるような、超魔導文明都市が大地の果てまで続く世界。

そこまで高度な魔導技術で繁栄する世界に、今回のような異変が起きればどうなるか。強力な魔導製品ほど暴走した時の被害は計り知れない。何から何まで魔導技術に頼った世界は、一瞬で崩壊してしまうのではないか

「ふふ、中々興味深い話だが、その講義を受けるのはまた次の機会にしよう」

「は……っ す、すみませんっ つい熱くなってしまっ」

古代文明について語る事に夢中になっていたティルマークは顔を赤らめると慌てて頭を下げる。スイルアッカもこういった話は割り好きなのだが、今は異変によって引き起こされるこれからの

影響を予測し、対策を講じる事を優先しなくてはならない。

大昔にも同じような出来事があったと記す文献があるのならば、そこから教訓となりそんな記述を拾って今後の対策に活かす。

「えーとそうですね、疫病や飢饉は魔法系植物に何らかの影響が出ていないか調べて、何もなければ無視して構わないかと」

異形を生むという記述が魔物や変異体の発生を指しているなら、魔力の乱れによって魔力を溜め込む性質を持つ植物に悪影響が出た場合や、その植物を口にした動物が変異体となり、農作物の畑や人里を荒らすなどした場合が挙げられる。

「地脈草の類が変質して毒性を持つなどした場合、といった所でしようか」

魔力を溜め込む植物は冒険者協会で多くの初心者に採取が依頼される仕事なので、そちらから情報を貰った方が早いと、ティルマークはアドバイスを付け加えて意見を纏めた。

ティルマークの意見を参考に対策を練るため、宮殿へと戻るスイルアツカは今回の出来事についてターナと細かい情報などを話し合う。影響を受ける魔導製品の中には当然、召喚獣やゴーレムの類も入っており、バッフェムトからの帰途につくコウの事が気に掛かる。

「無事に戻ってこられると良いのだが……」

「キョウヤの話ですと一両日中にはエツリア領に入るという事でしたから、迎えを出しておくのも良いかと」

エツリア領に入ってしまったえば直ぐにでも迎えを送れるものの、マーハティーニ領を横断中の場合は元国王派の残党が街道の国境付近をうろついているという情報もある為、下手にエツリアの兵を送ると返って危険を招く恐れがある。

デイド王子の謀反によるマーハティーニの内乱は、エツリアがあっさりとデイド王朝を容認した事で治まりはしたが、元国王派にしてみれば納得できる話である筈もなく、彼らは反デイド王朝を掲げつつエツリアに対する疑惑を持ちながら地下に潜ったという。バツフェムト独立解放軍とはまた別の反乱予備軍が出来てしまったという所であった。

「恨の連鎖はなるべく早く断ち切らねばな」

「そうですね……」

ある程度は自然光も取り入れられる造りになってはいるものの、やはり普段よりは薄暗い正面入り口の広い廊下。臨時の処置として並べられている油式ランプは数が足りていない。

「お帰りなさいませ、スィルアツカ様」

「うむ」

宮殿に戻って来たスィルアツカ達を、昇降機前の老紳士は何時ものように迎える。何時もと違ってしているのは、老紳士の隣に伝令役の宮殿兵が立っている事だ。

「スイル将軍がお乗りになるぞ！ 昇降機、起動準備！」

” 対の遠声 ” の模造品で ” 対の大声 ” などと揶揄される通信具を使い、昇降機の動力室に合図が送られる。機械化技術の動力部分はゴーレムの技術を利用してあるので、グランダール側と同じくエツリアも機械化戦車や昇降機などが使用不能状態にある。

しかし、機械化技術が魔導技術に頼っているのは基本的に動力部分だけであり、ものによっては手動で動かせる。宮殿の昇降機も動力が使えないかわりに人力で動かす事が出来るのだ。

ちなみに、昇降機の手動運転ちゅうしん担当は一般兵士から選ばれ、特別手当の報酬があるので結構な人気職となりつつあった。

「よし、いくぞ！ 息を合わせる！ 回転を乱すな！ ソイヤ！
ソイヤ！」

「ソイヤッ！ ソイヤッ！」

「……暑苦しくてかなわんな」

昇降機の中でげんなりしているスイルアツカに、ターナは同意の苦笑を返すのだった。

エツリア領の国境に近いマーハティ―二領の街道脇にて、迎への応援が来るのを待っているコウとウルハ。岩陰に干草を包んだシー

ツを敷いて座っているウルハの傍で、コウは精神体になって浮いている。

少年型召喚獣も複合体も長時間出しておけるのだが、制御そのものには然程問題もなかったものの、動作に問題があった。

今朝方、複合体の膝にウルハを乗せて街道を滑走中だったコウは、突然魔導輪が浮力を失った事で地面にスライディング急停止。複合体はちよつと尻を擦っただけで済んだが、下敷きになった魔導輪が一部破損。

魔導輪はトルトリユスまで持っていて博士に直して貰わなければと異次元倉庫に片付け、ここからはウルハを肩にでも乗せて歩こうかと立ち上がり掛けたコウは、複合体からだの調子がおかしい事に気付く。

力の調整が効き辛く、うまく動けないのだ。大雑把にならば動けるが、ゆっくりとした精巧な動作が難しい。今までこんな状態になった事はなく、危険と判断したコウは一旦ウルハに離れて貰った。

複合体の膝から降りて干草いりシーツベッドを腕に抱き、少し離れるウルハ。そうして何処かぎこちない動作で立ち上がった複合体は、下腹部を左右に開いて普段は収納されている生殖用の管を勝手に露出させた。

ハツと息を呑み、顔を赤らめたウルハは複合体コウを見上げると一言、こう訴えた。

「無理……」

『わざとじゃないよ』と釈明していたコウに、意識の奥から京

矢が送ってきた情報で大まかな原因や状況を把握、今に至っている。

複合体は生殖用管が露出しっ放しになるので視覚的に問題があり過ぎる。少年型召喚獣は奉仕用の機能や演出効果が勝手に発動するので色々と危ない。

具体的には手を繋ぐと無意識に手の平をこちょこちょしたり、誘惑の視線を向けたり、常に妖しげなフェロモンが出ているのでウルハがどぎまぎしっ放しに。エツリアへ着く前に茹で上がってしまう。

そこで、コウは現在エツリアの離宮で世話をしている伝書鳥のぴいちゃんを送って貰えるよう京矢に頼み、暫くは伝書鳥に憑依して過ごす事にしたのだ。現在はぴいちゃんの到着待ちであった。

” なにかたべる？ ”

「 ううん、まだ大丈夫 」

ほわっと空中に浮かび上がる文字に答えるウルハ。その辺りの適当な虫に憑依すれば、ウルハにくっついて一緒に移動できるのだが、年端も行かない女の子に一人で街道を歩かせるのは危険だ。

伝書鳥のぴいちゃんに憑依すれば、上空から常に周囲の状況にも目を配れるので、安全に移動させる事が出来る。危険が近付いている場合は直ぐに物陰へと隠れさせ、複合体を出して対処する。

例え相手が盗賊団のような類であっても、自己主張する立派な象徴を露にした巨漢ゴーレムに遭遇すれば裸足で逃げ出すであろう。

別の意味で逃げるだろ、それ

コウの” かんぺきなけいかく ” に突っ込む京矢であった。

グランダールやナツハトームで混乱が起きていたのと同様に、双星の影響はエイオアでも評議公会館の通信用祭壇が不安定になり、情報の伝達に遅れが出るなどの混乱を招いていた。

そんな中、先日グランダールから帰国したエイオア評議会の本部宮殿に席を置く呪術士の一人が、自宅の地下室で研究していた古代遺跡の魔術装置に最近稼動したらしき痕跡を見つけて狂喜の笑みを浮かべた。

エイオアの呪術士トゥラサリーニ。彼はグランダールで限定公開されていた”生命の門”を詳しく研究する為、調査団の派遣と受け入れ要請の打診を提案した当人であり、古代遺跡に発見される魔術装置の研究者でもあった。

「やはり……私の推論は正しかった！ とすれば……この異変で各遺跡の装置も稼動する筈……っ もっと情報を集めねば！」

まだ一般には公にされていない事だが、トルトリユスでは地下遺跡が一部稼動しているらしく謎の光源で内部が明るくなっており、訓練でダンジョンに降りていた騎士団が一時行方不明になった後、まったく別の場所で発見されるなどの事件が起きている。

冒険者達の間でも遺跡のあるダンジョンを探索中に突然、違う場所に飛ばされたなどの体験談が上がり始めていた。

エイオアでも研究されている区画転移装置と思しき魔術装置に稼動の痕跡が確認された事から、恐らくは長い時間をかけて魔力が蓄

積され、何らかの条件が重なった時に偶然稼動する事であった古代遺跡の魔術装置が、双星の影響による魔力の活発化を受けた事で一斉に稼動したのではないかと思われる。

「ふふふふ……」生命の門”の構造は理解した……この装置が完成すれば、私の名は永遠に魔術の歴史に刻まれる……」

トウラサリーニは地下室に置いてある古代遺跡の魔術装置と、奥に鎮座している石塔型の呪術装置に恍惚にも似た視線を向ける。

その昔、”ダンジョンコーディネーター”と呼ばれた魔術士が作ったと謂われる『禍々しい魔力を放出していた呪術装置』の原型と思しき古代遺跡の魔術装置。

それを参考に組み上げた自作の呪術装置に”生命の門”の構造からヒントを得て最終的な仕様を決める目処も立った。

街中で稼動させれば装置の発する異常な性質の魔力を感知され、勘の良い祈祷士や呪術士にならその効果に気付かれてしまう危険もある。どこか目立たないダンジョンでひっそり実験を進めようと計画していたが、今の混乱した状況は都合が良い。

「さあ、歴史に名を残す偉大な装置の完成まで、あと一歩だ」

研究熱心で割かし大人しい性格のトウラサリーニは、どんな形であれ歴史に名を残したり、世界に影響を与えた魔術士は偉大であると尊敬するタイプであった。

本部宮殿に保管されている呪術装置を研究するうち、”生命の門”とこれらの装置を作った魔術士の思想に一部共感を持った彼は、自分なら違う方法で世界に君臨する等という妄想を密かに楽しみな

がら、研究に明け暮れる日々を送っていたのだ。

件の魔術士”ダンジョンコーディネーター”は、他者の魂を取り込んで自身を進化させ、究極の存在として君臨しようとした。対して彼は、自身を変えるのではなく世界を変えようと考えた。

勿論それは、胸中に秘めたささやかな楽しみである”夢想”の中の考えでしかない。そんな他愛のない妄想、ささやかな楽しみが現実味を帯びたのは、凶星の出現によって古代の魔術装置が稼動する所を観察出来た事であった。

『禍々しい魔力を放出していた呪術装置』の原型と思しき古代遺跡の魔術装置を参考に”生命の門”を真似て組み上げた自作の呪術装置。最初は単なる趣味と研究の一環でしかなかった。

ただのオブジェになる筈だった装置は、密かに妄想して楽しんでいた世界征服が可能であるという結論に至らせ、凶兆の双星騒ぎを経て遂に行動にでる事を決意したのだ。

「天よ地よー 世界にあまねく生命よー 万物を見守りし精霊よー ふふふ……」

ダンジョンの最深部に設置されていた魔物を生み出す装置の後継機である”生命の門”、それらの最終形態となるであろう呪術装置”支配の呪根”の完成に向けて、自らの”夢想”に取り憑かれたトウラサリーニは人知れず呪術を振るうのだった。

子供の頃からの好物である甘根など齧りながら。

66話：予兆

凶兆の双星が重なり、一個の凶星となって空に輝き始めた頃。道中に多少のトラブルもあったが、伝書鳥コウとウルハは国境を越えてエツリア領に入った所で迎えの部隊に拾われ、砂馬に乗って無事に帝都へと運ばれた。

魔導製品の動作異常や古代遺跡の発光現象など、三日も経てば皆慣れたもので、街の人々は普段と変わらない生活を送っている。もつともそれは、あまり魔導技術製品が浸透していないナツハトームの環境だからこそとも言えるのだが。

「ぴゅぴい」 「ただいまー」

「お帰り、大変だったな」

「はじめまして……」

「君がウルハちゃんか、ようこそエツリアへ　　って、俺が歓迎してもいいんだらうか」

一応自分はこの世界と帝国の客人であると自覚する京矢は、公務中で不在の皇女殿下に代わって出迎えつつ小首を傾げる。と、そこへ、ターナ達側近の侍女を引き連れたスィルアツカがタイミングよく現れた。珍しくメルエシードも一緒だ。

この場で一番偉い人である事を把握したウルハがペコリと頭を下げた。

「ウルハです」

「うむ、よく来たな。コウ共々道中無事で何よりだった」

ウルハの事に関しては既にコウから京矢を通して話が付いている。とりあえず、人の心を読み取る能力の披露など確認を済ませると、スイルアツカが責任をもって身柄を預かる事を告げた。当面は離宮で従者として侍女の教育を受ける事に。

「がんばれな」

「はい、ありがとうございます。キョウヤさん」

コウの本体である京矢に対しては”優しいお兄さん”と認識しようだ。素朴で控えめな純真の笑顔を向けられ、最近色々と気忙しかった京矢はとても癒された気分になった。

本来なら和やかな雰囲気に含まれそうな微笑ましい場面なのだが

「……………」

『またライバルが増えたのか!』と危惧するメルエシードが、スイルアツカに抗議の視線を向けた。一番”堅気っぽい”のを近づけてどうするんだという視線。目配せで通じ合う二人。

『自信がないのか?』とばかりにフンとした挑発の視線を返すスイルアツカ。

『スイル姉さまこそ諦めた振りですか?』と更に挑発返しをするメルエシード。

視線の応酬で何だか部屋の雰囲気がおかしい状況。ターナや侍女

達は高貴な身分にある女性の間では珍しくない、よくある静かなやり合いを傍観しながら、スィルアッカ皇女殿下とメルエシード王女様の仲が少しだけ良くなったようだとすまし顔で控えている。

しかし、この場にはコウがいるのだ。二人の思考戦闘は全部筒抜けで、ある意味元凶の位置にいる京矢はひたすら胃が痛い。

「たいへんですね」

ウルハに優しく気遣われ、思わず感激する京矢。なるほどコウに通じるモノがあると納得する。彼女がコウと一緒にいると落ち着くと言うのは、似た性質を持つ者同士という部分もあるのだろう。

同属嫌悪という心理もあるが、それに当て嵌まりそうな例は別の二人が担当しているようだ。

「！」

「！」

早速自然体でポイントを稼いでいるウルハにちよっぴり危機感を募らせる皇女様と王女様なのであった。

「ところで、コウはこれからグランダールに向かうのか？」

「びゅり」「うん」

複合体や少年型召喚獣の調整と、魔導輪の修理もして貰いにアンダギー博士の所へ行くのだという。コウの身体に関してはどういう状態にあるのか、ある程度の内容を京矢から聞いていたスィルアッ

力は、何となく興味本位で今どんな具合なのかを訊ねてみた。
とりあえず、複合体は危険なのでまだ安全な少年型に憑依してみせるコウ。

「こんなかんじだよー」

上気した表情に潤んだ瞳、少し浅い息遣いで囁くように語り掛ける。普通の内容を受け答えで喋っているだけなのに、やたらと艶かしくて色っぽい。

仕草が日々官能的だ。溢れるフェロモン。少年コウを中心に結界の如く広がる桃色空間。色々とヤバイ事が理解できた。

「なるほど、分かった。いって来い」

そう言って送り出すスイルアツカ。伝書鳥に憑依し直したコウは「装飾魔術で”いってきまーす”の文字を浮かべながら、離宮の窓より飛び立った。部屋ではスイルアツカやメルエシードの他、ターナと彼女の直属達も赤面しており、京矢は何故か落ち込んでいる。

「ちがうんだ……アレは元々少女型だったからなんだ……」

反応してしまった事を気にする京矢だったが、『生理現象だから気にすることはない』とウルハに慰められ、またしても感激。

「す、スイル姉さま……」

「……………」

優秀な能力を持つ新しい人材の確保は、そのリスクも高かったよ
うだ。

各国が凶星の影響対策に追われている中、ナツハトームからの呼び掛けにより冒険者協会でも地脈草など魔法薬の素になる植物類の状態を調査するなど、一般の冒険者にも凶星対策関連の仕事が増え始めた今日この頃。

グランダールでは王都の地下遺跡で訓練中だった騎士団が突然余所のダンジョンへ飛ばされるなどの事件があり、なんとか無事に帰還を果たした彼等と同じような体験をした冒険者達からも事情を聞くなどして、各地に点在する古代遺跡の魔術装置や仕掛けが不規則に稼動しているらしい事が突き止められていた。

王都の地下遺跡に関してはアンダギー博士が陣頭に立った調査隊によって安全な場所と近寄らない方が良い場所の確認が行われ、謎の明かりについても天井や壁の一部が発光しており、元々そういう仕掛けが施されていたのだろうという結論に至っている。

許可制で一般の冒険者に開放されている区画にも何箇所かどこかへ飛ばされてしまう危険地帯が見つかっている為、暫くは閉鎖する処置が取られていた。

「魔導輪は外殻がちょっと割れただけじゃな、どっちみち今は正常に動かんから暫くは使えんぞい」

昨夜トルトリユスに到着して研究所にやって来た伝書鳥コウの魔導輪をちょちょいと修理した博士は、そう言って魔導輪に加速装置

も装着する。複合体の検査もしたい所だが、今は実験用機器の大半が使い物にならない状態だ。

「ぴゅいぴゅい？」 召喚獣は？」

「そっちは加工用の機器が復旧してあるから大丈夫じゃ」

コウ側から各種機能を制限出来るよう召喚石に仕様の改良を加えれば、奉仕用の身体が持つ演出効果や誘惑動作などの暴走も抑制できる筈だという。何故初めからそういう仕様にしておかなかったのかと言え、単に思いつきで作ったからに他ならない。

自律行動する為の擬似人格を廃して形態維持機能を強化した少年型、という目的の仕様さえ達成出来ていれば、他は特に弄る必要も無かったので奉仕用機能もそのままにしていた。

「しかしお主の本体とは中々興味深い存在じゃのう、是非とも会って話を聞いてみたいものじゃ」

「ぴゅいぴゅいぴゅい」 キョウヤも博士くらいの天才なら帰る方法みつけてくれるかもって言ってるよー”

「ほうほう、中々分かっておるなあ。 ん？ なんじゃ、考えてみれば今コウを通して話しておるようなものか」

色々と聞きたい事のある博士だったが、研究所の状態が正常に戻らないうちは出来る事も限られる。

ナツハトームに機械化技術をもたらせた という事になっている京矢の持ち込んだ書物についての質問はまた次の機会にという事にして、博士は凶星対策の一環で進めている地下遺跡の調査に参加しないかと持ち掛けた。

「どうじゃ、今からまた出向くんじゃが、コウもついてこんか？」

調整の済んだ召喚石を伝書鳥コウに渡しながら、地下遺跡の調査でコウと京矢にも意見を聞いてみたいと提案する。

それを聞いていた沙耶華がちらつと視線を向けた。アングギー博士の思考にハッキリとした目的があつて誘っている事を読み取るコウ。博士は何かを確かめようとしているようだ。

「おもしろそう」

召喚の光が溢れ、さつそく少年型召喚獣に憑依したコウは調査への参加を了承した。

王都トルトリユスの地下遺跡。コウがここを訪れるのはガウィーク隊の薬士フランチエと地脈草の採取に来たのが最初で、後に隊の若手を鍛える修行に付き合う形で赴いたり、暗部同盟が暗躍した事件で沙耶華とレイオスの救出に乗り込んだ時以来だ。

明かりのない暗闇に包まれたダンジョンでも普通に見通す事が出来るコウにとっては、謎の明かりに照らし出されている今の地下遺跡の様子も以前とあまり変わりはないのだが、コウの視覚情報を鮮明には行かずともリアルタイムで感じ取る京矢は、この地下遺跡の雰囲気に対して『まるで地下街のようだ』と感じた。

その京矢の感想が、コウから博士に伝えられる。

「ほう……これは、非常に興味深い話じゃのう」

そう言って顎に手を当てる博士は、今回の調査で確かめようとしていた事的一端を教えてくれた。

実は地下遺跡の調査で幾つか動いている事が確認された仕掛けの中に、動く床や階段といったモノがあり、その事を研究所で話していた際、沙耶華から”ムービングウォーク”や”エスカレーター”と言った名称が語られたのだ。

沙耶華の知る、沙耶華の世界にある公共交通機関とよく似た施設装置が存在していた事に興味を覚えた博士は、安全が確認されたその一角を直接沙耶華に見て貰おうと地下遺跡へ招いて連れ歩いた。

その際、沙耶華はなんだか地下街を歩いているようだ、自分の住んでいた世界の事を話したのだ。

以前、攫われて地下遺跡へ連れて来られた時は周りが暗くてよくわからなかったが、居住空間にしては間取りや部屋の形状に人の生活を感じられず、通路に沿って等間隔に並ぶ広い空間などは商店街の店舗スペースをイメージさせる。

通路の壁に設けられた謎の隙間、ショーウィンドウのような空間などが今はハッキリ見えるので、より強く地下街の通路っぽさを感じるので。

「同じ人間の作る文明じゃ。多少性質が違って進んだ文明同士、何処か似通ってくるのかもしれない」

この魔導技術文明の進んだトルトリユスでさえ、京矢や沙耶華の住んでいた世界から見れば”まだ少し遅れた街”に見えるという機械化技術の街、所謂科学技術の発展した街と、現在の魔導技術ですらその境地に至っていないと思しき古代魔導文明の地下遺跡。

京矢と沙耶華が同じ感想を持った事について、博士は案外地下遺跡の正体を言い当てているのかもしれないと言う。

「やっぱり発想が他と違うな、その博士」

「キョウヤが博士の発想は他と違うつて感心してるよー」

「クワツカカカツ そうじゃろう、そうじゃろう。さて、お前さん方にはもう一つ見て貰いたいモノがあるんじゃない」

先導する博士とサータの後に続くコウ。今回は調査して周る場所の安全が既に確保されている事と、沙耶華や京矢について博士の個人的な研究考察も兼ねている為、他の調査員はいない。

一般の冒険者は立ち入り禁止になっている区域の更に奥。遺跡が明るくなってから色々動いている仕掛けの中でも、何に使われているのか、どんな意味があるのか、これといった効果も観測できない謎の仕掛けが幾つか見つかっている。

その内の一つ。壁の一部分に動く象形文字が浮かんでおり、何かを示しているようだが、何を意味しているのかよく分からないモノ。この地下遺跡の作りが異世界の文明とよく似ているのだとしたら、そこから謎の仕掛けの意味を解明するヒントが得られるかもしれない。

「これじゃ」

「絵がうついでるね」

「これは……」

壁の一部に正方形の枠があり、そこに映し出される簡素な絵と文字らしき模様。これを見た沙耶華は何かの宣伝ではないかと感じたらしい。京矢も同じような感想に至ったようだ。

なんか、AEDの使い方マニュアルとかに似てる感じがするな

簡略化された人体の絵と何かの操作手順を表現しているような短い動画が繰り返し表示され続けている。

「　って言ってるよ？　えーいーでいーって言うのは救命処置のための装置なんだって」

「ほうほう、救命処置とな。治療装置のようなものか」

これを解読できれば地下遺跡でまだ見つからない魔術装置を発見したり、そこから画期的な発明に繋がる新しい発想を見出せるかもしれないという博士は、コウと京矢にも協力して貰って帝国側にいる研究者達との連携を提案する。

え、それっていいのか？

王都の地下遺跡で一般の冒険者にも公開されていないような遺跡の秘密染みた情報を、帝国側に知られても良いのだろうかと気にする京矢だったが、コウからその危惧を伝えられた博士は今更じゃと言ってクワツカカカと笑い飛ばした。

「んなもん気にしても仕方ないわい。コウやお主と今こうして地下遺跡で話している時点で秘密なぞ無意味じゃろ」

それに、こういったモノの検証は一面からの視点で得られる情報

など欠片の真実、微々たる量に過ぎず、そこに固執すれば間違った答えを踏んでしまう。未知のモノへの研究に国境のような足枷を設けるのは真の研究者足りえないと胸を張る博士。

……やっぱ考え方が他の人と違うんだな

「……ってキョウウヤが感心してるよ」

「そうじゃろう、そうじゃろう」

「おかげでよくレオゼオス王とやりあってるんですけどね……」

上機嫌な博士とは対照的にサータが溜め息など吐きながらポツリと呟く。あまりというか殆ど公にされる事はないが、アンダギー博士とレオゼオス王の付き合いは前国王時代からと長く、意見を対立させて殴り合いまで演じた事があるほど親しい間柄だったりする。

互いに相手の才を認め合っており、レオゼオス王はアンダギー博士が好きなように研究できる環境を。アンダギー博士はその奇才を如何なく発揮して役立つ発明や意味不明の発明品を創り出す。そこからまたレオゼオス王が使いそうなモノを拾い上げるのだ。

「この際じゃ、凶星がいぶりだした様々な問題に挑んでみるのも一興というものじゃな」

凶星の影響が何時まで続くのかは分からないが、あの星の影響で今まで殆ど解明されていなかった古代遺跡の謎や、魔導技術文明の脆弱な部分が浮き彫りにされるなど、騒がしくはあれど世界が新たな時代に進もうとしている気運を感じられると博士は語る。

「なんだか、わくわくするなあ」

俺もこういうのは嫌いじゃない

何となく”激動”を感じさせる”世界”の流れに”ロマン”など感じてみる『男の子』なコウと京矢なのであった。

グランダールの王都トルトリユスから北東に進んだ場所にある中規模の宿場街。エイオア領に近いこの街の冒険者達が集う酒場にて実しやかに囁かれる数々の噂。荒唐無稽なモノから意外な真実を含むものまで、様々な情報が取り交わされている。

ダンジョンを探索中だった冒険者が突然何処か別の場所へ飛ばされてしまう事件が多発していた時期に、同じくダンジョンを徘徊していた魔物や変異体も別の場所に飛ばされるなどしており、その内の何体かは地上に飛ばされたモノもいるようだ。

集合意識の存在するダンジョンの奥深くにしか見られない筈の魔物の姿が各地で確認されていた。

「やっぱり東側の平野が多いのか」

「ああ、どうもあの辺りに現れる奴はアルメッセ近くのダンジョンから飛ばされて来た奴らしいな」

「あそこの探索中に平野まで飛ばされたグループがいたらしいぞ」

地下から転移して来たらしい魔物は凶星の影響か、地上でも殆どその力を失う事無く活動しているようだ。ただ、ダンジョンにいる時のように集合意識の支配を受けている状態とは違い、個体の意思で動いている節がみられる。

魔獣犬などは本能で暴れているモノやぼーっとしているモノ、寝ているモノなど、バラツセのダンジョンで”生命の門”が破壊された時に見られた魔物の行動がそのまま再現されていた。

「元から地上にいた奴と比べると、単体で行動する奴が多くて幾分狩りやすいって話だが」

「集合意識の支配がなきゃ本能でしか動けないらしいぞ？ 人間を見ても襲ってこない場合が多いんだとさ」

「あの平野、ちよつと前まで良い狩場だったんだがなあ、今は余所のグループが多くて得物の奪い合いだよ」

そんな討伐事情の話の中で最近、地上でも度々目撃されるようになったダンジョン系の魔物に関する動向について、エイオア地方の魔物はまるで何かに呼ばれているかのように、ある方向を目指して北上を始めているという噂があった。

他の地域の魔物も何処へともなく彷徨っているように見えたが、どうも明確な目的地があつて移動しているようだ。と、何処かの冒険者グループに属する祈祷士が気付いたという。それらは何れもエイオアの方角を目指しているのだと。

「エイオアなあ、あそこは結界だらけでまともに歩けないからなあ」

「地元のメンバーがいるグループはちよくちよく結界の隙間に入り込んでる魔物を討伐して儲けてるらしいな」

「ああ、最近はその狙いで向こうの案内役雇ったり売込みが掛けられたりしてるって話だ」

「でも高いんだよな、祈祷士雇うのって……あゝ」 祈祷士のアミュレット”があればなあ」

エイオアの領地は無数の様々な結界が彼方此方に張られているの

で、地元を知る者や案内役なしには歩けない地域だ。

さほど広い範囲でなくとも、結界地帯に不用意に踏み込めば遭難して一生出られなくなってしまう。張り巡らされた結界地帯は他国からの侵攻に対する防壁の役割も果たしていた。

「誰か売ってくれねえかな、祈祷士のアミュレット」

「今は確かギルド金貨の棒20本くらいじゃなかったか？」

「えっ！ このまえ12本くらいだったぞ？」

「狩りやすくて良い素材も取れる魔物が結界地帯に多く迷い込んでるからな、あそこを安全に歩ける道具は軒並み値上がりしてるよ」

結界を素通りできる祈祷士のアミュレットは基本的に非売品で、エイオア評議会に席を置けるそれなりに実力のある祈祷士でなければ手に入らない。

一般の冒険者が手に入れようと思えば、そういった腕利きの祈祷士とコネを持つ事で個人的に売って貰うなどするしかなく、その価値は高騰を続けている。

「魔物がエイオア地方に集まっているのって、やっぱり祈祷術とかが盛んだからかな？」

「どうだろうなあ、魔力に惹かれるらしいって話からすれば、グラナダールの王都にも集まりそうなもんだが……」

どちらにせよ、結界地帯と冒険者の討伐隊に護られているエイオア地方の街やその周辺が、今や格好の獲物である魔物に徘徊されるような危険は無いだろうと見られていた。

魔物達が目指している場所がエイオアの首都ドラグーンの一
角、とある呪術士の屋敷である事に、この時点ではまだ誰も気付い

てはいなかった。

67話：遺跡調査

” 月が黄色かった”。

王都の遺跡から何処かの地へと飛ばされた後、更に別のダンジョンへ転移してどうにか帰還を果たした騎士団より決定的な証言が得られた事で、京矢はコウを通じて行われるアンダギー博士の遺跡研究にかなり前向きに取り組んでいた。

危険な夜の平原で碌な武装もせず、色鮮やかな装飾の少ない貴族服にも似た格好で、先端がやけに明るい光を放つ長い棒や、銀色の板を掲げた男達。

” 対の遠声” のような伝送具の一種なのか、手に持った短い棒状のモノに向かって何かを喋り続ける浅黒い肌色の女性。その後ろで見様によっては大型魔導砲を小型化したような、紐の付いた何かを肩に背負って砲口をこちらに向けている人物。

平原を見渡せる石柱群に囲まれた場所へ飛ばされたらしい騎士団が遭遇したという奇妙な格好をした一団の話。聞けば聞くほど、その姿に” 現代人” の像が浮かび上がる。

京矢のイメージからコウが絵に描いて見せると、『 ああそんな感じだった』 という騎士達の反応。円形に配置されていたという石柱群の特徴を聞いて描き出されたそれは、イギリス辺りにある有名なストーンヘンジそのものだった。

テレビの撮影スタッフが観光地の取材にでも来てたような感じか。なんで夜なのかは気になるけど

『おまつりだったとか？』

ダンジョンから一度地上へ飛ばされ、そこからまたダンジョンへ飛ばされるなどした騎士や冒険者の中には、何人が意識を失ったままの者がいる。その様子はまるで、一年前に帝国の遺跡内で発見保護された京矢のように。

”黄色い月を見た”という証言内容から、彼らが転移した場所が地球だった可能性が高まる。

「しかし、必ずしもその石柱群のある場所に出た訳ではないという辺りが、コウやサヤ嬢がこちらへ来てしまった理由に繋がるかのう」

この際だからと、京矢や沙耶華が世界移動してしまった原因の一端を推測してみる事にしたアングギー博士の見解では、十中八九こちら側の遺跡にある装置が原因であろうという結論に至っていた。遺跡の装置が何かを切っ掛けにして唐突に稼動した例は、過去にも幾つか確認されている。

「二人が同じ時、同じ場所で死を覚悟するような魔導船事故に遭った事。まずこれは条件から外せんの」

飛行機事故な

「魔導船事故じゃなくて飛行機事故だよー」

「ふむ、機械技術だけで大勢を乗せて飛べるといいうのも興味深いのう」

脱線しそうになった話題を戻し、その事故とこちら側の転移装置が稼動した瞬間が偶々重なったのか、もしくは転移装置の稼動が事故の原因となったのか。

エンジンから火噴いてたし、こっちに來たのって多分、海に投げ出されてからだからなあ

転移装置の稼動が事故の原因という事はないだろう。京矢は思い出せる状況からそう分析する。海に投げ出された後で転移したらしいという仮説は、沙耶華も地下遺跡の通路で目覚める直前の記憶が、暗い海に沈んでいく所だったという部分で合致する。

「コウはバラッセのダンジョンで目覚めたのじゃったな」

「うん、一階の壁の奥にある祭壇みたいところ」

「むん？ はて……ワシが把握しとる限り、バラッセのダンジョンは一階に祭壇の間なぞ無かった筈じゃが」

「あそこはまだ誰も入ったことないんじゃないかなあ」

あの場所への出入り口は無く、ネズミの身体で穴から通路へ出たのだ。コウが目覚めた場所についてさらっと説明した中に、重要なヒントを掴み取るアンダギー博士の発想アンテナ。

場所は違えど、コウも京矢も沙耶華もみな古代遺跡の中で発見されたり、目覚めたりしている。コウが目覚めた古い祭壇も古代遺跡の装置である可能性が高いとして、まずそこの調査を進めようと提案する博士。

「もしかしたら、”生命の門”が絡んでるかもしれんぞい」

「ああ、なるほどー」

バラッセまでの道のりは遠いので、魔導船が使えない今は直接調査に行く事が難しい。そこで、王都の冒険者協会中央本部を通じてバラッセの冒険者協会から信頼できる冒険者に調査の依頼を出す事になった。

夕刻を過ぎたバラッセの街。冒険者協会支部の傍にある大衆食堂にて、奥のテーブルで顔を揃える訓練学校講師の二人に、街の安全を担う防衛隊の隊長。

「へえ、王都からとはねえ」

「まあ特に危険な仕事ではないからな、今年卒業の訓練生も同行させようと思う」

「その祭壇が転移装置系で稼動してたりした場合は、必ずしも危険は無いとはいえないかもしれないけどね」

コウが目覚めた場所の発見と探索。祭壇の型や状態の調査。アンダギー博士の調査依頼は、コウの希望もあつてかエルメール達に仕事が回された。

エルメールは既に危険の無くなったダンジョンの探索になるので訓練生も連れていく方針を語り、仕事の依頼内容を細かく分析するリシエロは凶星騒ぎから冒険者達の間でよく聞かれる、探索中に突然別の場所に飛ばされてしまう現象について危惧する。

「それについても祭壇の一定範囲に近付かなければ問題ないという話だ」

「ああ、そういうやエイオアの方にあるダンジョンは転移する場所が決まってるからって、ワザと遺跡部分に近付く冒険者もいるらしいな」

手っ取り早く地上に出られるので、さっそく便利に使おうとする怖いもの知らずもいるのだそう。

リシエロが『ダンジョンから地上へ転移した者の中には、意識不明になって目覚めない者もいる』という噂がある事を指摘するが『そういう例が多いのなら、もっと多くその手の話も出てくる筈だ』とガシエとエルメールが反論する。

一見すると仲間内で意見を対立させているように見えるやり取りだが、リシエロが不安要素を挙げ、エルメールとガシエが検証と反論を行いながら行動方針を定めていく。三人が組んで冒険する時の、何時ものやり取りであった。

翌日、早速依頼の現場に向かう調査隊。ほぼ発掘調査となる今回のメンバーはエルメールとリシエロ、ガシエの三人に防衛隊から二人、訓練学校から訓練生一人の六人体制。

魔物や変異体が居なくなってお宝も粗方漁り尽くされたバラツセのダンジョンは現在、観光用の地下街を作る為に改装中だったのだが、凶星の影響で工作機械や魔導製品の照明が壊れて使えなくなったので作業は一時中断している。

一階で新たに設置されていた照明も一旦全て回収され、今はまた

以前のように松明が並べられていた。

「なんか、全然探索って感じしませんね」

「まあ、場所も分かっているって確認に行くだけだからな」

今年卒業予定の訓練生で、既に冒険者の仕事もこなしている隣国エパティタからやって来た少女剣士アルシアは、探索場所となる一階の突き当たりで崩した壁の残骸を運びながら講師でもあるエルメルとそんな話をする。

壁の向こうにあるらしい古代遺跡の祭壇が置いてある部屋を見つける。ある意味、真つ当な冒険なのかもしれない。

「これだけ力仕事した後なら、今夜はゆっくり眠れるかも」

「ふふ、この程度で力仕事だと感じているようではまだまだだな」

「え〜。あ、そういうえば最近よく変わった夢を見るんですよ」

「あからさまに話を逸らしたな」

逸らしてないですよ〜と抗議するアルシアは、凶星騒ぎが起きた頃からよく見る夢について語る。他人の夢など荒唐無稽なだけで、面白いのは本人だけというパターンが多いのだが、アルシアの見る夢は随分と具体的な内容だった。

王都トルトリユスのような魔導文明の栄えた街で、アルシアは勇者をやっているのだそう。

「その時点で吹き出してしまおう。そういう願望があるのか？」

「うーん、強くなりたいとは思ってますけど……でも夢の中だと超人みたいな力を持つてるのに何時も焦ってる感じなんですよね」

何か劣等感を抱えて塞ぎ込みがちな自分の姿を見るのだという。

確か現実の悩みが夢に反映されるといふ説もあつた筈だと語るエルメールは、卒業を間直に控えて不安な気持ちが見れているのかもしれないと語り、アルシアはそうかもしれないと納得していた。

そんな感じで割とノンビリした発掘作業は順調に進み、やがて件の閉鎖部屋を発見。依頼内容で示されていた祭壇らしき風化した建造物を見つけた。天井には光が差し込む亀裂もみえる。

「どうだ？ リシエロ」

「うん……確かに稼動した痕跡があるね。微かに魔力の流れが残ってる」

「コウはここで目覚めたのかあ」

稼動した場合は何が起きるか分からないのでリシエロが魔力の動きに注意しつつ、エルメールとガシエ達は部屋の構造を隅々まで調べ、アルシアが祭壇の外観や文様など細かい部分をスケッチして古代遺跡の祭壇調査は終了した。

最近稼動した痕跡があつた以上、また動く可能性もあるので危険だから近付かないようにと立ち入り禁止処置もとっておく。

「よし、これらの資料を纏めて提出すれば任務完了だ」

「お疲れ様でしたー」

「案外早く終わったね」

「食堂で一杯やるか」

入り口部分を簡単に封鎖して引き上げる調査隊。今は人気の無いダンジョン。彼らが去った後、ダンジョンの奥深くから現れた黒い影がこっそり祭壇の間へと入っていった。

エルメール達がバラッセのダンジョンで遺跡調査をしていた頃、王都では地下遺跡で見つかった動く絵の内容がある程度解析され、アンダギー博士を中心にした調査隊がそちらの調査を進めていた。

この地下遺跡が古代の地下街みたいな通路だとすると、簡単な地図板とかあっても不思議じゃないわな

『もしかしたらその場所に何かあるかも知れないんだって』

動く絵に描かれていた図形が、地下遺跡の一角にある通路と一致したのだ。

調査隊といっても現在のトルトリユスは街の復旧作業など凶星対策に忙しいので、メンバーはアンダギー博士に助手のサータ、少年型なコウと思念だけ参加の京矢、それに沙耶華と金色の剣竜隊から以前護衛についた二人という顔ぶれである。

「この先じゃな」

「確かこの近くだったわよね？ サヤちゃんが最初に見つかった所って」

「はい。あの時と雰囲気が違うから、正確な場所までは分かりませんけど」

騎士達の訓練場に使われる区画の奥まった辺り。一応、特にこれといって何も無かった場所という事になっているのだが、凶星騒ぎ以降、遺跡の彼方此方にこれまで発見されていなかった通路や部屋、仕掛が見つかるなどしているので、新たな発見もあり得る。

「あそこじゃ。ふむ、ここにも明かりが灯っておるのう」

「以前王子と訓練目的で来た時は、ただの壁だったと思うが……」

動く絵に記されていた図形の写しはこの位置を示している。沙耶華とサータの前にコウが立ち、隣に剣士、博士が闘士と並んで明かりの灯っている壁を調べに掛かった。

「むくん　　むむ？　　これか？」

壁に手をあてながら魔力の流れに怪しい部分がないかと探っていた博士は、壁の端っこの辺りに何か反応を見つけてそこを調べる。

表面に薄っすらと浮かぶ溝を金属棒で力リ力リと削ってみると、手の平ほどの四角い窪みが見つかった。窪みの中には小さな四角い棒が縦横三列に並んでいる。様子を見に来たコウの視点から”それ”を見た京矢が呟く。

キーパネルじゃないか

「キーぱねるじゃないかって言ってるよ、正しい順番でボタンを押して扉を開いたりするんだって」

「ほうっ　　そいつは面白そうじゃな」

「間違ったら罠が作動したりしないですかね？」

ダンジョンの探索をして来た者なら当たり前に浮かべる闘士の素朴な疑問に、この地下遺跡が古代の『普通の公共施設』であった場合、入力を間違えても危険な罠が作動するような仕掛けは、まず無いだろうと考える京矢。

沙耶華も同意見で、本当にここが地下街のような施設だった場合、入力を何度もミスすれば警備会社のような所に連絡が行って警備員が様子を見に来るなり、防犯カメラが入力パネルの周辺を監視した

りして然るべき機関に通報がなされるなどの処置がとられるだろうと、元世界の防犯システムを思い浮かべながら意見を述べた。

「なんじゃ、ここへ来てまたぞろ研究意欲を刺激する異世界の情報がぼんぼん出て来たのう」

「あはは……普段は防犯の仕組みとか考えないですし」

「あら？ コウくん、何してるの？」

「向こうに部屋があるみたい」

窪みの中に並んだボタンをばち押ししている博士と沙耶華が話している横で、壁にびたつと張り付いているコウにサータが声を掛けると、精神体で壁の向こうを覗き込んでいたコウが部屋の発見を告げる。

「なんか”ボ―”がいつぱい居た」

「ボ―が？」

通称”治癒くらげ”と呼ばれるラッキーモンスター。ボ―の生態はよく分かっておらず、あれも実験で作られてダンジョンに放たれた魔法生物の一種であろうとしか認識されていない。

結構便利なモンスターなので、ボ―が集まり易い場所など見つけられたのなら、それはそれで良い発見だといえる。

窪みのボタンがちゃんと反応しているのかどうか見た目では分からなかったが、押せば魔力に僅かな変化が起きている事を確認した博士が総当りで調べている間、お弁当など食べながらノンビリ過ごす調査隊の面々。

「でも、サヤちゃんが調査隊に参加する事、よくレイオス王子が承

知したもののね？」

「気乗りはしてなかったみたいですけどね、安全だから大丈夫って
説得しました」

「博士が異世界との繋がりについて調べてるって事で、王子は心配
なんですよ」

「サヤ殿が元の世界に戻る手立てを見つけてしまうのではないかと
危惧されている」

もし、元の世界に戻る手立てが見つかったなら、その時、自分は
どうするのだろうか？ 時折そんな事も考える沙耶華。気軽に元世界
とこちらの世界を行き来できるような手段でもあれば、悩むまでも
ないんだろっとなと、夢のような事を想う。

『そんな都合よくいかないわよね』

帰るにしても残るにしても、選べるはずも無い掛け替えの無いも
のを選ばなくてはならなくなるのだろっ。どちらかを取り、どちら
かを棄てる。そんな選択は突き付けられたくないものだ。

「いよっしゃ！ 分かったぞっ」

魔力変動の法則を掴んだ博士がそう叫ぶと、改めて窪みのボタン
群に挑む。まず全ての入力を初期化するボタン。これで一番最初の
状態に戻る。次に右上、左下、真ん中 と、ある一定の魔力が維
持されるボタンを順に押していく。

「そして、こうじゃー！」

最後に揃った魔力を照合するボタンで予め設定されている魔力と同じ波長の魔力を、ボタンの組み合わせで作った魔力に通す。ポーンという不思議な音がして壁が動いた。パラパラと埃や欠片が舞い落ちる。

「おおおっ 見よ！ 封印されし壁が開くぞ！」

「おー」

が、床と壁に僅かな隙間を空けて上へとスライドしていた壁は止まってしまった。

「……なんじゃ？ コレだけか？」

「下に隙間があいてるよー」

「古代遺跡ですし、魔力切れで止まっちゃったとか」

「かなり古そうですね」

調べてみた所、本当に魔力切れで動かなくなっているらしく、窪みのボタンに集まっていた魔力もなくなっていた。壁自体はそれほど厚みがある訳でもなかったなので、ここは力仕事担当の出番だと闘士にこじ開けて貰う。

「ふんぬっ」

「あ、開いた」

人が中腰で潜れる程度の隙間が出来たので、壁が下りないよう支柱を設けて部屋の中へと踏み込んだ。

倉庫っぽい広い空間。壁際に何本もの管が走り、机と椅子らしきモノが埃にまみれて散乱している。部屋の中央には液体の満たされたプールのようなモノがあり、その縁には管で繋がった長丸い物体。京矢達の知る水道タンクっぽいモノが並んでいた。

そしてプールの中から泡のように”ボー”が浮かび上がり、天井付近の通気口らしき穴からふわふわと何処かへ流れていく。

「なんじゃここは……ボーの繁殖場か？」

プールの部分は幾つか仕切り分けされていて、液体の満たされている部分と空になっている部分が見える。空の部分に繋がっている管は途中で干切れていたり、繋がっている槽に穴が開いていたりしているのが確認できた。

「博士、こっちの壁に何か書いてありますよ」

「おう？ どりゃどりゃ」

机と椅子らしき物体が散乱している側の壁に大きなパネルがあり、何かを記した絵付きの古代文字。動く絵にも出て来た丸い物体について解説しているような内容に見えた。早速解析を始める博士。サータは机回りを調べている。

コウはプールを覗き込んだりしながら周りで漂うボーを観察していた。その様子を入り口付近から眺める沙耶華と護衛の二人。

「あの白いくらげのお化け、初めてこっちで目覚めた時に追いかけられた怪物だわ……」

「確か、保護した騎士達も何かから逃げて来た様子だったと話して

いたな」

「アレは人を襲うようなものではない筈だが」

訓練場に行っている区画には実験生物も訓練用のモノしか放っていないので、一般開放されている区画から迷い込んで来たモノに追われていたのではないかと考えられていた。

まだ沙耶華がこちらの言葉も話せず、意思疎通が困難な頃だった事もあり、特に注視する程の問題でもないので流されていたのだが

「なるほど、分かったぞ」

解析を済ませた博士がこの場所とボアの生態について、かなり細かい事が分かったと説明を始めた。ここはボアの繁殖場。正確には製造工場兼、管理室だったという。ボアに関する詳しい仕様の記された資料も見つかった。

ボアは人工精霊を使った自動治癒装置で、特定の思念の送り方で呼び寄せる事が出来るらしい。生き物ではなく、実態を持たない召喚獣のような類の”装置”なのだという。

「ちょっと見ておれ……こうやって、魔力を乗せた思念を送るとじやな」

「あ、ボアが……」

「寄って来たね」

博士の傍に近付いて来たボアが、餌も与えていないのに治癒の粉を振りまく。

古代文明の地下商店街？ に設置されていた緊急自動治療装置。気分が悪くなったり、怪我をした時に特定チャンネルで思念を送って助けを求めると、飛んできて治療してくれるシステム。

元々はあの宣伝パネルに描き出されているように丸っこい形をしていた。今は形が崩れて水くらげみたいになっているようだ。

「これはワシの仮説じゃが、サヤ嬢らが世界を渡る際、別次元を通って来たと思うのじゃ」

沙耶華は白いくらげの怪物に追われているつもりだったが、ボイは助けを求める沙耶華の思念を受けて救援に来ていたのだろうと博士は語る。

魔力の扱いを知らない沙耶華の思念に反応したのは、世界を渡る際に助けを求める強い思念がずっと保たれていたのも、転移装置の魔力に思念が乗って偶々ボーを呼ぶ時に使うチャンネルにも繋がったとも考えられる。

「まあ、色々穴はあるがの」

転移装置についてもまだまだ解明されていない事は多いので、今はバラツセの調査結果待ちじゃの、と締めくくる博士。なにせよ、この場所の発見は非常に有益な事だと言える。

コウと京矢が動く絵について意見を求められた時にも話していた『これを解読できれば地下遺跡でまだ見つからない魔術装置を発見したり、そこから画期的な発明に繋がる新しい発想を見出せるかもしれない』という博士の言葉が証明された形だ。

博士すげえ！

「博士すげえってキョウウヤが言ってるよー」

「クワツカカカ！ そうじゃろう、そうじゃろう」
「ホントに見つかるとは、わたしも予想できませんでした」

またぞろ110度ほど踏ん返り返って高笑いしている博士に、今回は本当に感心しているサータ。研究所内にいるような賑やかで和やかな雰囲気になりながら、沙耶華はプールの周りを漂うボー達を見詰める。

その時代の人間がいなくなっても、ずっと稼動していた緊急自動治療装置の製造工場と管理室。時折ふわふわと天井付近の穴から何処かへ流れていくボーの姿に、なんだか切ないような哀しいような気分になる沙耶華なのであった。

バラッセからの調査報告が届いたのは、それから三日後の事だった。

68話：魔王誕生

コウが目覚めた最初の場所。バラッセのダンジョンに隠されていた古代遺跡らしき祭壇。その調査結果が届いたアングギー博士の研究所では、ようやく機器が復旧して調整に入った複合体に新しい能力を付与する実験が行われていた。

先日の地下遺跡調査で発見されたボアの製造工場は直ちに国の重要施設として軍管理下に置かれたのだが、博士がちやつかり入手しておいた液体”ボアの素（仮）”を複合体に注入して超回復能力を持たせる実験である。

「馴染むまでには暫く掛かるじやろうな、こっちはまだ様子見じゃから置いておくとして」

バラッセの調査結果はやはり予想通りだったかと、報告書をパラパラと捲りながら内容をチェックする博士。スケッチに描かれた祭壇の型はエイオア評議会が保管している転移装置と同型だと思われる。

「最近稼動した痕跡があったという事は、まだ装置が完全に壊れている訳ではないという証拠じゃ」

それはつまり、凶星騒ぎ以前にも何かを切っ掛けに稼動した可能性が考えられるという事だ。

博士の仮説によれば沙耶華や京矢は別次元を通って世界を渡ったと思われ、転移装置の仕組みも現在判明している内容の中には、対象を転移させる際、別次元への扉を開いてそこを通してという説がある。

本来なら転移する際に入り口と出口が繋がれた状態で転移の扉が開かれていたとして、装置単体の偶発的な稼動によって出口と入り口がきちんと結ばれないまま別次元への扉が開かれてしまい、本来の座標とは違う場所に転移させるなどの事故が起きているのではないか。

アンダギー博士はそう睨んでいた。

「魔術は人の思念の力が大きく影響しておるからなあ」

”飛行機”の事故と転移装置の稼動が偶然重なり、人の強い思念が一箇所に集まった際に偶々開いていた別次元への扉に引かれたか

「死者の魂が通る道とも言われるとるでな、多くの死者がその道に入る流れに引き摺られたか」

それって元々死んでたかもしれないって事が

「ほんとに死んでたかもしれないって事？」

「どうじゃろうな、サヤ嬢も目覚めた時はボーに襲われたと本人は思っておった。つまり、ボーに蘇生処置を受けておったのかもしれない」

帝国の遺跡内で発見された京矢も、実は発見した治療術士が蘇生

処置を行っている。

うーん、逆を言えば世界を渡るので死ぬような危険があるって事にもなるのか

「世界を渡るので死ぬほど危険な事にもなるの？」

「まあ同じ世界でも出る所を間違えればエライ事になるのが轉移じや。世界なぞ渡ろうものなら、どんな副作用がある事やらじゃな」

別の世界へ渡る手段にも興味は尽きない所だが、まだまだ轉移そのものの技術も確立されていない現状、明確な答えも予測すらも出せないというのが答えであった。

複合体の調整が済むまでグランダーに滞在する事になったコウは、一、三日手持ち無沙汰になる所だったのだが

「どうせなら稼働が確認された轉移装置を直接調べてみるのも悪くないのう。お主が視れば何か分かるかも知れん」

という博士の発想と破天荒な行動力によってレオゼオス王から『轉移装置の回収許可書』が発行され、もし持って来られるようなら持って帰って来てくれと”バラッセにある祭壇の調査と回収”を依頼された。

いいってさ、こっちもまだ暫くはバタバタしてるからな

差し当たりコウの力が必要になるような事態も起きておらず、古代遺跡の調査研究については帝国にも益をもたらせているアンダギー博士の依頼なら、グランダールで活動しても構わないとスィルアツカも理解を見せたそうだ。

そんな訳で、スィルアツカ皇女殿下の許可も得たコウはこれからまたバラツセの街へ赴く事になった。魔導船が使えない今は飛竜も各方面に大活躍中という事で、今回の貸し出しは無理。したがって伝書鳥びいちゃんで二日ほど掛けて飛んでいく。

「ぴゅぴゅーい」じゃあ、いつてきまーす”

「おう、良い知らせを待つとるぞ」

帰ってくる頃には複合体の調整も済んでいるだろうと送り出す博士とサータ、沙耶華達に見送られ、コウは研究所を飛び立った。

凶星騒ぎ以降、グランダールの空は行き来する魔導船の姿もなく、偶に飛竜を見掛ける時があるくらいでとても静かだ。逆に地上ではそれまで魔導船を使っていた層が馬車を利用するようになった事で、護衛の需要も増えて傭兵達には楽な割りに実入りの良い仕事が増えていた。

トルトリユス近辺や大きな街との間を走る街道にはひっきりなしに馬車隊の車列が続く為、盗賊団も迂闊に手を出す事が出来ず、一般の旅人達にとっても安全な環境が出来上がっている。

そんな街道を見下ろしながらバラッセに向けて一直線に飛ぶ伝書鳥コウは、トルトリユスとクラカルの間にある街の上空に差し掛かる頃、伝書鳥の飛ぶ高度よりも更に高いところを行く黒い翼を広げた存在を見掛けた。

人間の少女に見えるが、物凄い濃度の魔力に包まれているらしく、コウの視点からだとも光り輝いて見える。一瞬こちらに意識を向けたあと、その存在はバラッセ方面へと飛び去って行った。速度もかたりのもので、飛竜より速いかもしれない。

『すごいなあ　いまのなんだったんだろう』

『そういやあんまり聞かないけど、飛行系の魔術でもあるんじゃないか？』

遠ざかる魔力の光を見送りながら、コウは京矢と今見た存在についてあれやこれやと推測してみたりするのだった。

エイオアの首都ドラグーン。優秀な祈祷士や呪術士を輩出する森と結界に囲まれたこの地域では、凶星騒ぎ以降、ダンジョンから地上に転移したと思しき魔物や、元から地上に棲んでいた魔物がどういふ訳だか多く流れ込んで来ている。

一般人には危険が増したが、討伐も請け負う冒険者達には良い儲け場所として、人、金、物も集まり始め、他国と同じく凶星対策に追われる中で、エイオアには好景気の兆しが囁かれていた。

そんな喧騒と賑わいで溢れる首都の一角、エイオア評議会に席を置き、本部宮殿に勤める幹部達の屋敷群が並ぶ閑静な邸宅街にて、人知れず自宅の地下で実験を繰り返していたトウラサリー二は、遂に装置の完成に漕ぎ着けた。

「よし……でーきーたーぞー！ くふふふ……起動実験だけであれだけ広範囲の魔物を喚び寄せられたんだ」

本番の稼動ではいよいよ魔物を含めた生きとし生けるもの全ての支配。集合意識の拡散と浸透の効果が試される。”生命の門”を参考に作られた”支配の呪根”が持つ機能は、”生命の門”の失敗を逆手にとったモノだ。

死者の魂を集め、自身に取り込んで融合させる装置であった”生命の門”。古の魔術士”ダンジョンコーディネーター”は、装置の暴走によって魂の取り込み口となる空間に自らの魂を逆流させてしまい、それが集合意識となってダンジョンの魔物を支配していた。

”支配の呪根”は集合意識に満たされたダンジョンのように、思念を乗せる魔力の広げられた一帯を人工的に構築し、そこに装置を通して使用者の意識を繋ぐ事で、思念帯を地上に展開する。要は自己の意識を繋いだ集合意識を地上に発現させる装置である。

強い拘束力が無くとも、殆ど無意識下に服従するよう働き掛けを続ける事で、時が経つに連れて自意識と繋がった集合意識の存在する地域の、全ての意思ある生物が自分に従うようになるという算段。ゆくゆくは中継塔を使って世界中に自意識と繋がる集合意識を浸透させ、全世界の支配をも目論む。

「さて、では……”支配の呪根”、起動！」

オオオンという何かの叫びにも似た起動音と共に、” 支配の呪根 ” が稼動を始めた。装置の前面に繋いだお気に入り椅子に腰掛け、広がって行く思念帯に自己の意識を繋ぐ呪術を行使する。

彼の計画では、地上に発現させた集合意識と繋がる事でそこに自分の意思を乗せ、思念帯範囲内に存在する全ての意志在る生物の意識にそれと気付かれず干渉して、自分の意思を植え付けて行く。

魂の取り込みなどという危険な賭けはしない。不老不死や進化ではなく、有限の生の中で功績を残す事を選んだ。

「おおお　広がる！　広がるぞおっ」

広範囲に伸ばした思念帯のベースとなる魔力に自分の意識を繋いで集合意識を発現させた瞬間、遺跡のあるダンジョンの転移装置によって地上へと現れていた魔物達は彼の意思に引き摺られ始める。

双星の影響で地上に上がっても殆ど力を失う事無く行動できる魔物や変異体がエイオアの首都周辺に集まり始めた。主に、装置が稼動しているトウラサリー二の自宅を目指して。

夕刻頃、ある屋敷の庭に無数の魔物が屯しているという付近住民の通報で駆けつけた警備隊は、この一帯が異様な性質を持つ魔力に覆われている事に気付いた。

「もしかして、この魔力が魔物を呼び寄せているんですかね？」

「もしかしなくてもそうだろう。俺はダンジョンの下層まで下りた

経験があるんだが、この気配はまるで集合意識そのものだぞ」

「どうしてこんなになるまで放っておいたんだ」

「凶星騒ぎで異常な魔力の流れは度々あったからな、誰も気付かなかつたんだろう」

張り巡らされた結界の隙間を縫うように走る回廊。地元の間でも一部にしか知られていない抜け道を通ってエイオアの首都ドラゴンに侵入した魔物達は、街の住人や警備隊に気付かれること無く邸宅街にあるトゥラサリー二の屋敷まで辿りつくと、庭などに屯して命令待ちの待機状態に入った。

彼らは地上に発現した集合意識の”我に従え”という意味に支配を受け、または影響され、トゥラサリー二を群れの統率主ボスとみなして集まって来たのだ。危険地帯となる首都の一角。

「こつちだ！ 数が多いぞ、もつと応援を呼んで来いっ」

「住民の避難は？」

「既に完了している。攻撃魔術の使用許可は出ているが、隣接する建物に被害を出したら自腹だから気をつける」

「そんな場合じゃないでしょうに……まったく上の奴等ときたら」

少なくとも見積もっても四十数体は居ると思われる魔物の群れを前に、三、四部隊程度の戦力では対応できないとして応援を待つ警備隊。ダンジョンでは人間を見ると必ず襲い掛かって来る魔物も、地上に出て来たモノは元から地上にいる魔獣たちより大人しい。

この屋敷の庭に集まっている魔物も警備隊の動きをじっと見詰めているモノや、ただごろごろしているモノ、うろつくと徘徊しているモノはいるが、積極的に牙を剥くモノの姿は見られなかった。こ

れは彼等を支配している者が攻撃命令を出していないからである。

彼等を支配している者 即ち、トウラサリーニは、自宅庭に集まっている魔物達と、周辺の包囲を始めた警備隊をどうしたものかと悩んでいた。

喚び寄せられた魔物達が首都周辺に集まるくらいならば、それを狩りに冒険者達も多く集まるようになり、やがて優秀な彼等も全て自身の支配化に置けるようになる。と考えていたのだが、まさか自宅の庭までやって来るとは思っていなかったのだ。

「むむむ……これは計算外だぞ？ 装置の事が公になったら困るじゃないか……どうしたら」

魔物の視点を繋がった意識からイメージで読み取り、地下に居ながら外の様子を垣間見る事が出来るトウラサリーニは、屋敷周辺の様々な場所に潜む魔物や変異体の視点から警備隊の動きを観察していた。

「うーん、邪魔だなあ……」

少数部隊で遠巻きに庭の様子を窺っている警備隊のなんとも隙だらけな姿を見るうち、どうにか排除出来ないだろうか等と考える。その瞬間、庭に屯していた魔物や周辺の物陰に潜んでいた変異体が彼方此方から一斉に飛び出し、警備隊に襲い掛かった。

「ああっ あははは、すごい！ よしっ そこだ！ いいぞおっ やっぱり安全な首都にいる警備隊の実力なんてこんなモノか」

自分の意識から出す命令一つで思い通りに動く魔物達。トウラサ

リーニは以前、バラツセのダンジョンに中継地点が設けられようとした時に、それを厭った集合意識”ダンジョンコーディネーター”の残留思念が魔物達を動員して作業を妨害したという話を思い出す。

「そうか、集合意識の効果は特質や性向を定めるだけじゃなく、双方向に情報の共有が出来るんだから」

現在進行形で集合意識の支配を受けているモノなら、直接命令を出して操る事も出来るのではないかと考え、”支配の呪根”との意識の繋がりを深めて見た。

「あ……あははははっ 凄いいい！ 出来るじゃないか！」

魔物達を個別の命令で自在に動かす事が出来る。庭に居る魔物の一体に玄関の扉を開けさせて屋敷の中へ招き入れると、廊下を真っ直ぐ、突き当たりを右に、厨房の左の棚を開け、中の容器に盛っている甘根を容器ごと持って来させる。

地下への入り口の仕掛けを作動させ、階段を下り、濃密な魔力に満たされた空間に踏み入れた所で意識をその魔物から自身へと戻し、この部屋の出入り口に視線を向けると、地上の森などで棲息が確認されている猿の魔物が甘根の容器を持って立っていた。

大柄な成人男性並みの身長を持ち、黒っぽい茶色の体毛に長めの腕と尻尾、真っ赤な眼と縦長の尖った耳という容姿から悪魔に例えられる魔猿を前に、狂気の笑みを浮かべたトウラサリーニは両手を広げながら宣言する。

「私は……魔物達を手足のように操る事が出来る魔物達の王　そ
うだ、私は魔王だ！」

凶兆の双星は、エイオアに魔王を出現させたのだった。

「……ちよつと獣臭いな、この甘根」
「ヴギー」

とりあえず、屋敷に入れる魔物には湯浴みをさせておこつと決める自称魔王なトウラサリーニであった。

69話：支配勢力と人脈作り

まだ闇の深い夜明けの刻。森と結界に囲まれたエイオアの首都ドラグーン。その一角にある普段は閑静な邸宅街。

屋敷群が並ぶ通りの石畳や崩れた塀の壁には、夥しい量の血痕がぶちまけられたように付着し、建物は燃え、其処彼処に治安警備隊の死体が転がり、今や戦場のような様相を呈している。

この区域を封鎖するバリケードは既に破られており、首都ドラグーンは街の凡そ半分が魔物の徘徊する危険地帯と化していた。

昨日の夕刻。自宅の地下室で完成した”支配の呪根”を使って魔物達を操り、警備隊を襲撃させたトウラサリー二は、魔物を使って首都を制圧出来るのでは？ と考えた。

街そのものをダンジョンに見立てて魔物で満たす事で、魔物の徘徊する街、魔王の街を作り出す。

食料その他、生活に必要な物はまだ街中に沢山残っているし、魔物の討伐に来た者達から奪うという手もある。人型の魔物を使って畜産や農作業をやらせてみようかとも考えてみたが、家畜や植物が魔物の影響をうけて変異すると食べられない。

「あっそうだ！ それなら人間を奴隷にして働かせれば良いんだ。逃げ遅れた住民がいる筈だから、急いで確保しなくちゃ」

魔王トウラサリーニから指令を受けた魔物達は抜け道や結界の間などから街中へと広がり、人狩りを始めた。

同時に、トウラサリーニはエイオアの中枢機関である評議会の本部宮殿にも潜入と工作に使えそうな魔物を向かわせる。本部宮殿の倉庫には”祈祷士のアミュレット”のような結界破りの効果を持つ高価な道具が保管されているのだ。

これを確保すれば、エイオア領の其処彼処に仕掛けられている結界を自由に通り抜けられるようになる。エイオアの全域を支配下におくのも時間の問題だろう。

首都ドラグーンから避難を図るべく街の門前に詰め掛けている一般住民達。治安警備隊はほぼ壊滅状態にあり、残った少数の精鋭部隊は魔物の急襲を受けて制圧された本部宮殿より命からがら脱出してきた評議会メンバーの護衛に就いた。

「リンドーラ！ 君はこの便で行け、ナツハトーム領まで抜け道の案内を頼む！」

「分かりました。エツリアに着き次第、スイルアツカ殿下に救援の要請をしてみます」

「頼む。我々はアルメツセまで後退して、そこで態勢を立て直す」

エイオア評議会は中枢を南のアルメツセに移し、各国に支援を要請する方針でドラグーンを脱出。凶星対策の関係で偶々首都を訪れていたリンドーラは、ナツハトーム帝国の皇女殿下に顔が利くという事から評議会の代表として帝都に赴く任を受けた。

一般住民達も街に滞在していた冒険者グループ等と共に脱出を始めたのだが、馬車に乗りあぶれて徒歩で森の街道を進んでいた者達は街から追って来た魔物や、茂みから飛び出して来る魔物に次々と攫われていった。

多くの魔物が蠢く暗い森に踏み入るのは危険なので、攫われた人々を助けに行ける者はいない。ドラグーンを脱出した人々は追いつがる魔物の恐怖に怯えながら、ひたすら夜の森の街道を南下して行くのだった。

グランダールの食糧庫とも謳われるクラカルの街。その統治者であるバーミスト伯爵の屋敷に、伝書鳥ぴいちゃんの翼を休ませがてら立ち寄っていたコウは、御呼ばれしている朝食の席にて最近の出来事などを掻い摘んで話していた。

重要拠点でもあるクラカルの街は、通常なら王都に出回った情報など軍や冒険者協会を通じて二日と遅れる事なく届いていたのだが、今は凶星の影響で情報の伝達が軒並み遅れており、既にほぼ全域が復旧している王都の状況もまだ十分には伝わっていなかったようだ。

「なるほど、では先日届いた魔導器は、魔力の乱れに対応した新型だったという訳か」

バーミスト伯爵は数頭の飛竜によって王都から届けられた魔導器について、詳細が分かった事に納得してみせた。

現在は行政院の倉庫に積み重ねられているそれら新型魔導器は、当初、

凶星騒ぎで破損した魔導器の予備が送られて来たモノと判断され、今使えばまた壊れてしまうだろうという配慮から騒ぎが収束するまで大事に保管される事になっていたのだ。

「直ぐに各施設の魔導器を換装するよう指示を出しておこう」

この頃は行政院内の明かりを維持する為の照明用燃料購入に予算が食われ、各部署の業務にも支障が出始めていただけに、『これで夜間も仕事がやり易くなるな』と安堵の息を吐く伯爵は、その一方で情報が初めからきちんと伝わっていれば資金を無駄にする事もなかったろうにという、残念な気持ちもあつて複雑な表情を浮かべている。

「冒険者協会の情報もまだちょっと混乱してるのかも」

クラカルの街にある冒険者協会支部は情報がどの程度遅れているのか、コウは出発する前に少し調べてみる事にした。

今日は貴族学校に行く予定のアリス。玄関ホールにて出発準備が整うのを待つアリスは、もっとゆっくりお話がしたかったのにと残念がっている。

「コウは、今はナツハトム帝国に仕えているのよね？」

「うん、スイル將軍っていう皇女様の従者だよ」

「……何がどうなってそうだったのか、凄く興味があるわ。あなたの本体だという キョウヤという人にも」

「いつかまた時間が出来た時にでもお話してあげるよ。多分、朝まで掛かると思うけど」

そんなコウの答えに、ハツとした表情を見せるや顔を赤らめて目を逸らしてしまうアリス。『あ、朝までだなんて……』とか呟いている。

コウの言葉に深い意味はなく、体験談を一から話せばそのくらい掛かると見積もつての答えだったが、機能を抑えているとはいえ最高級の奉仕用召喚獣な美少年コウを前に、多感な時期にある少女アリスは色々と妄想を膨らませてしまったようだ。

このくらいの子はみんなこんな感じなのかなあ……

『どうだろうねえ。バラツセに着いたらニーナ達にも試してみようか?』

をいつ

『何を試す気だなにを』と意識の奥から突っ込む京矢に、『年齢別誤解を招きそうな言い回し?』とか答えてみるコウ。

妙なデータベース作成しようとするんじゃないやありませんっ

『あはは、じょうだんだよー』

実は既にアンダギー博士が似たような実験報告書を纏めているとは知る由もない二人であった。

ディレトス家の門を出た所でアリスと別れたコウは、伝書鳥びいちゃんを頭に乗つけて冒険者協会クラカル支部に向かう。

街の中心付近で大通りに面した場所にあるクラカル支部にはフリーの冒険者や一般人も居るほか、数グループの冒険者集団が来てい
るらしく、受付前や長椅子の並ぶ休憩所もそこそ賑わっていた。

戦いくさが近い時期の酒場ほど殺伐としてる訳ではないが、子供の遊び場には適さない程度の重圧感漂う施設内を、どこからどうみてもただの子供にしか見えない黒髪の少年がてくてく歩く。

何処かのグループの従者が何かか？ と訝しむような視線が向けられる中、コウは空いている窓口はないかなーと受付前をうろつろ
していた。と、その時

「だから、言い掛かりだといってるだろう！ いい加減にしろっ」
「なんだとっ 陰口で愚弄しておきながら言い逃れするつもりか！」

何やら揉め事が起きたらしい。何だ何だと集まった野次馬が遠巻きに見物始める。ごく自然に周囲の人々のザワメキに耳を傾け、そこから情報を読み取るコウ。

どうやらそこそこの名の通っている傭兵団が初心者向けの簡単な依頼を受けていたところ、余所の冒険者グループから『剣と猛獣』のメダルを持つ中堅グループの癖に”と陰口を叩かれ、それを耳にした若い団員が詰め寄ったらしい。

『双短剣と狼』のメダルを持つ冒険者グループのメンバーは言い掛かりだと反発し、現在言い争いにまで発展している状況。

「あれ？ 紅狼傭兵団だ」
「む？」

傭兵団側に何人か見覚えのある顔を確認したコウが呟くと、紅狼

傭兵団の参謀役が場違いな子供の声に振り返る。若手の団員が引き起こしたこの騒ぎをどう治めたモノかと悩んでいた彼は、コウの姿を見て良い助け舟が現れたと若干表情を緩めた。

王室主催の武闘会で予選を闘った相手。常に情報収集を怠らない堅実な参謀役は、この少年が実はガウイーク隊に所属する複合体ゴームのもう一つの姿である事を知っていたのだ。

見た目が見た目なので少々格好はつかないが、今この場にいる冒険者の中では恐らく最も高い実績を持つであろうコウに割って入って貰う事で收拾を図ろうと画策する。

「おお、コウ殿ではないですか。久しぶりですな」

「ひさしぶりー、なんか揉めてるね？」

参謀役の思考を読み取ったコウは、そうする事が当たり前であるかのように彼の画策に協力した。それがコウの”在り方”なのである。

事情を知らない野次馬を含む他の冒険者達は、傭兵団の幹部がどうみても場違いでしかない子供を相手に親しく丁寧な接し方をするのを見て、あの少年は何者なんだろう？ と興味を引かれる。

彼らの中にも何人かはコウを知る者がいるらしく『バラッセの地下で見た』とか『金色の剣竜隊と一緒にいた』などの声が聞かれた。

「いや、お恥ずかしい。うちの若手にも気性の激しい者がいます」「そっかー。でも仲間の悪口を言われたからって怒ってるんだよね」

のほほんとした雰囲気ですす参謀役とコウ少年の姿に、言い争いをしていた若手団員と冒険者メンバーの二人は何だか氣勢を削がれてしまい、掴み合い直前まで張り詰めていた緊張感はゆるい雰囲気に四散した。

しかし、”言い掛かりを付けられた”として対立していた冒険者グループ側はこのまま話がうやむやになる事に納得しない。

「おい、子供を使ってまで言い掛かりを通すつもりか？ 紅狼傭兵団の参謀殿は工作も達者なんだな」

「てめえ……まだしらばっくれる上に参謀を侮辱しやがったなもう許さん」

若手の傭兵団員が剣に手を掛けた。こりゃイカンと団員を抑えに掛かる参謀役に他の団員達。冒険者グループ側もそう来るなら相手になってやると臨戦態勢をとった事で、緩んでいた場の空気が一気に緊張する。

そんな状況で睨み合う両陣営の間に立ち、まあまあ落ち着いてと宥めに入ったコウは、紅狼傭兵団側の若手団員と、冒険者グループ側で言い掛かりを付けられたと訴えていたメンバーをそれぞれ観察して思考を読み取り、争いの原因を特定する。

「さつきから何なんだその子供は」

「危ねえからガキは引っ込んでろ」

「二人とも誤解してるんだよ」

殺気立っている傭兵団員と冒険者メンバー達の威圧も意に介さず、コウは淡々と説明する。

冒険者メンバーが紅狼傭兵団の受けた仕事を見て『中堅グループの癖に』云々の文句を口にしたのは事実だが、それは別に悪口を言ったのではなく、自分達が狙っていた適正ランクの仕事を先に

取られてしまった事に対する愚痴の類であったこと。

その際、手続きにもたついていっているうちに良い仕事を持っていかれてしまったと自嘲も含んでいたのだが、偶々その愚痴を耳にした若手の傭兵団員が”冒険者メンバーの自嘲”の笑みを自分達紅狼傭兵団に対する”嘲り”^{あざわらひ}の笑みと捉えたのだ。

「傭兵団の人達は若手を育てる為に簡単な仕事を選んだんだけど、冒険者の人達には死活問題だから愚痴が出ちゃったんだね」

整然と双方の立場や事情を説明され、戸惑う当事者の傭兵団員と冒険者メンバー。とりあえず一触即発の空気は流れ去り、武力衝突の危機は回避された。そこへ、ようやく騒ぎを聞きつけた街の警備隊がやって来た。

野次馬を解散させ、騒ぎの中心となっている傭兵団と冒険者グループ双方から事情を聞く警備隊。

『ありがとう、助かった』と眼で感謝を送る紅狼傭兵団の参謀役にウインクを返したコウは、自分の役割は終わったと判断して集団から離れると、目的達成に満足しながら空いている受付の窓口へ向かう。情報の遅延状態を調べなくてはならないのだ。

地味にコネ作りしてるよな

『人脈は大事だってエルメールさんも言ってたよ』

習った冒険者の心得もしっかり実践して活かしているコウなのであった。

70話：来訪者

昨日、冒険者協会クラカル支部で昼過ぎまで情報収集をしながら過ごしたコウは、遠くの街からの情報そのものは然程遅れる事無く伝わっているものの内容に抜け落ちがあったりする為、正確な情報が全て伝わるのに二日から三日ほど遅れている事を確認した。

その事をバーミスト伯爵に伝えてからクラカルを出発し、バラッセに到着したのは夕刻を過ぎる頃であった。

街猫として過ごしていた頃によく使っていた抜け道の途中にある開けた場所に下りると、少年型召喚獣を喚び出して憑依する。ピュイツと一鳴きしたピイチャンがコウの頭の上に陣取った。

「さて、じゃあ冒険者協会にいつてみよー」

「ピュイツピ」

冒険者協会のバラッセ支部は普段ならこの時間帯、近くの大衆食堂に客を取られるので閑散としているのだが、協会の職員や行政関係者が何かを確認しながら走り回り、受付も窓口に詰め掛けている傭兵集団からの問い合わせ捌きにてんてこまい状態。

賑わっているというよりも浮き足立っているような騒然とした雰囲気包まれていた。

『なんだろう？ 何かあったのかな？』

みんなエイオア、エイオア言ってるみたいだな？

受付前を埋める傭兵集団の思考を読んで何の騒ぎか調べようとするも、内容が雑多過ぎて焦点が合わずよく分からない。

窓口には暫く近づけそうにもないが、”関係者以外立ち入り禁止”の札付きロープ前にて、深刻そうな表情で何やら話し込んでいる協会職員を見つけたコウは、彼等の思考を読み取って情報収集を試みる。結果、この騒ぎの原因を特定できた。

『エイオアの首都が魔物で溢れたんだって』

エライこつちやな

エイオア側の国境の街アルメツセから首都ドラグーンに向かおうとしていた商人達が皆、クラカルやバラツセに引き返して来ている。首都を脱出したエイオア評議会はアルメツセに拠点を移してこの事態に対処するべく動いているとの情報を得た傭兵達が、戦力の募集枠などについての問い合わせに集まっているのだ。

独自のルートで魔物の討伐に乗り出す者達もいる中、まずはエイオア評議会や支援を要請されるであろう各国が討伐報酬に幾ら出すのかを聞いてからだ、情報集めに奔走する賞金稼ぎ達が冒険者協会に詰め掛けている。

グランダールからエイオアを支援する声明などは出されていないので、まだ王都には伝わっていないのかもしれない。

凶星の影響で景気が良いらしいって話だったのにな

『魔物が討伐しきれないくらい集まり過ぎたのかなあ？』

エイオア国の内情に詳しい訳ではないが、大規模な結界と深い森

に囲まれた首都ドラグーンはグランダールの王都トルトリユスに次ぐ難攻不落の魔導文明都市と聞く。そんな街が魔物で溢れてしまうなど、余程の想定外な出来事でも起きたのだろう。

確か、結界の隙間に迷い込んだのを討伐してたんだよね？

『討伐隊に見つからなかった魔物が街に入り込んでたとか？』

詳しい情報が入らないので詳細は分からないものの、コウを通じて得たこの情報をスイルアツカに伝えると言って離宮の奥部屋を出た京矢は、一旦交信から意識を外した。

一向に途絶える事のない受付前の喧騒をざっと眺めたコウはここで人が空くまで待つよりも先に、バラツセの行政院を訪ねて『転移装置の回収許可書』を提示しておこうかと考える。

『後で下見にも行かなくちゃ』

もし装置が床と一体化していた場合は一度掘り出して単体で存在する状態にしなければ異次元倉庫に移せない。工事に人手を借してもらう事にもなるかもしれないので、事前に上にも挨拶と話を通しておいた方が良さだろう。

そろそろ眠そうにしている伝書鳥ひこちゃんを胸に抱えたコウは、行政院と統治者の屋敷を目指して冒険者協会バラツセ支部を後にするのだった。

翌日、装置の回収に立会人として前回調査依頼を受けたエルメール達が同行する事になり、コウは待ち合わせ場所であるダンジョン

前の公園に向かっていた。

高い鉄柵に囲まれた祠のある開けた場所。途中の並木道には今日もベンチに腰掛け、射し込む木漏れ日に和んでいるバスクレイ爺さんの姿。

ダンジョン前の公園は以前に比べると人の多さは変わらずとも、冒険者風の者が減って一般住民や商人の姿が目立っている。

”生命の門”が持ち出されて魔物の脅威が無くなったバラッセのダンジョンは、新たな観光名所とすべく地下迷宮街の建設が進められており、現在は凶星騒ぎで作業が中断されているものの一部区画は地下露店用に開放されていた。

鉄柵前にエルメール達の姿を見つけたコウはそちらへと足を向ける。何時もと変わらずピシッと剣士の甲冑で固めたエルメールに、治癒術士のローブを纏ったりシエロ、部分的に弄ってある防衛隊の甲冑を身に付けたガシエ。

それにもう一人、若い剣士風の少女が居た。訓練生の甲冑を纏っているのでエルメール達の教え子かもしれない。

彼等の傍に駆け寄ろうとしたコウは、ふと視界に飛び込んで来た違和感に足を止めた。

まばらな人込みの中、明らかに異質な光を放つ存在。赤いコートを纏い、艶のある黒髪をふわりと靡かせた少女、の姿をした何か、エルメール達の様子を窺っている。

コウはその存在に見覚えがあった。

「あ、光の人だ」

「え？」

その声に気付いて振り返るエルメール達。

「おお、来たかコウ。ん？ そちらのお嬢さんは知り合いか？」

コウと向かい合っている黒髪の少女に視線を向けたガシエが声を掛ける。特に知り合いと言う訳でもないのだから『ちがうよー』と答えるコウ。するとその少女は会話の切っ掛けを掴んだとばかりに話し掛けてきた。

「あゝ、実はあたしそちらのアルシアちゃんに用がありました

」

「え、わたし？」

キョトンとするアルシア。”サクヤ”と名乗った黒髪の少女は、アルシアに『最近こういう夢をみませんか？』と、何かの御伽噺の一節のような内容を訊ねる。

それは以前、発掘調査に参加したアルシアがエルメール達に話した最近よく見る『自分が勇者をやっている』という夢の内容と同じだった。

「見る見る！ 確かにそんな夢見てるっ 確かにこの前辺りから夢の登場人物に新しい人が増えて、その中の一人が……」

凄いい勢いで肯定していたアルシアは、二、三日前から少し展開に変化が見られ始めた夢の内容を思い出そうとしてハッと目を瞠ると、見る見る表情を強張らせた。夢の中の自分が出会った”悪夢のような友人”という矛盾する存在。

目の前に居る少女があまりにその”友人”にそっくりなので、思

わず言葉を失う。

「この前って事は……カルツイオの人達と一戦交えた日の事かな？
もしかして、あたしの事 覚えてる？」

『知っているか』ではなく、夢の中で見た人物として自分を『覚えて
いるか』と訊ねる朔耶に、アルシアはかくかくと頷いた。

”勇者”として超人的な力を持つ夢の中の自分が”悪夢”に例え
る”友人”。そんな夢の世界の登場人物が、現実世界の自分の前に
現れるなど、ちよつとした恐怖モノである。

アルシアの様子が明らかにおかしくなった事で、エルメールは教
え子を怯えさせる朔耶に警戒を向けながらも、コウに判断を仰いだ。

「大丈夫だよ。この人、沙耶華やキョウヤと同じ世界から来た人み
たい」

コウから沙耶華や京矢の事を聞かされていたエルメール達は『ほ
う？』と興味深そうな視線を朔耶に向け、朔耶はまだ詳しい自己紹
介もしていないのに自分の素性を言い当てたコウに対して、特に驚
くでもなくうんうんと頷いていた。

”都築朔耶”と改めて名乗った異世界からの来訪者は、訓練生で
ある”見習い剣士アルシア”に、”狭間世界”というこの世界と別
世界との隙間にあるもう一つの世界に居る”勇者アルシア”につい

て語った。

今現在、世界中に混乱を引き起こしている魔力の乱れは”狭間世界”での出来事が原因であるなど、コウの真偽判定がなければとても信じられないような”事実”が明かされる。

驚くべき事に、彼女は異世界からの来訪者というだけに止まらず、元の世界とこの世界、更にはその隙間にあるという世界を自由に行き来しているらしいという事だった。

尤も、これらは朔耶がアルシアと話をする為に必要な情報であるという判断の下に明かした内容であり、この『狭間世界での出来事が魔力の乱れの原因である』という情報を広めるつもりもなければ信じて貰うつもりもないようだ。

当事者であるアルシアにだけ事情が伝わればOKとする朔耶は、判断材料として夢の中での話以外にアルシアが体験したであろう、とある不思議な出来事を挙げる。

「これは覚えてるかどうかわからないけど、アルシアちゃん、三年前この街に来る途中で”来たれ勇者よ”って声を聞かなかった？」
「っ！ き、聞いたっ それ覚えてる！ あの時はずりに誰も居なかつたし、不気味で怖かつたから駆け足になっちゃったのよ」

そこからはスムーズな会話がなされ、この世界のアルシアに会いに来た理由等が伝えられた。

狭間世界の勇者アルシアはその国の信徒達から”神に喚ばれし者”と崇拜され、信望される立場にありながらも、支配者層からはほぼ便利な道具として扱われているらしい事など、何処の世界にもありそうな現実的な話が語られる。

「夢で感じてた焦りや閉塞感って、そういう事だったのね……」

「それで、向こうのアルシアちゃんを励ます意味でも、こっちで頑張ってるアルシアちゃんのメッセージが欲しいわけなのよ」

手紙を届ける事も出来るという朔耶に、アルシアは手紙と一緒に届けて欲しいモノがあると言う。

「故郷の品なんだけど、あと手紙も書かなきゃね。あの、エルメール先生」

「ああ、事情は分かった。こっちはただの立会いだから行って来て構わん」

転移装置回収の立会いから外れる事に許可を貰ったアルシアは、ぺこりと頭を下げると訓練学校の遠へと走っていった。それを見送る朔耶に、エルメールは付いて行かないのかと訊ねる。

「ん〜、なんか勘が引っかかっちゃって。その立会いってのに同行していいですか？」

「？ それは、別に構わんと思うが どうだリシエロ？」

「うん、同行するだけなら問題ないよ」

「コウの同郷人って事だしな、俺もいいと思うぜ」

同行を許可する理由にコウの同郷人である要素はあまり関係無いのだがと突っ込みつつ、エルメール達はとりあえず自己紹介をする。

「私はエルメールという。訓練学校の講師をやっている」

「僕はリシエロ。彼女と同じ講師だよ」

「ガシエだ。一応この街で防衛隊ってのを指揮してるぜ」

「ボクはコウ」

コウの自己紹介は肩書きのないシンプルなものだったが、グラウンドル寄りの討伐集団であるガウィーク隊のメンバーで且つ、グラウンドルと敵対していたナツハトーム帝国で皇女殿下スイル將軍の従者をやっているが、グラウンドル随一の魔導技師アングギー博士から与えられた特殊ゴーレムを本体として冒険者に登録されている元魔獣犬に憑依していた精神体、その実、異世界より迷い込んで来た者の精神から分離独立した存在

という、説明すると意味不明な肩書きになってしまつので、シンブルに名前だけ告げたのは無難だろうとエルメール達は思っていた。しかし、実際はコウと京矢の関係や事情を含めて、朔耶がこちらのほぼ全容を把握していると判断したが故の省略であつた。

コウの視点からは朔耶と重なる光の存在が世界と溶け合うように繋がっている様子が見て取れる。この”都築朔耶”という少女は、この世界にただ”存在している”だけでなく、世界と”繋がっている”のだ。

そして世界と朔耶を繋げている光の存在が、自身の事コウをつぶさに観察しているのが分かる。

「朔耶です。オールドリア大陸のフレグンスにある学生で一応、精霊術士見習いと小物作りの工房主やってます」

よろしくねつ と、フラキウル大陸では中々お目にかかれないレアな肩書きを披露した朔耶の言葉には「戦女神とか呼ばれています」という通り名や「フレグンス王室特別査察官もやっています」という役職や「精霊神殿の象徴シンボルにされています」等の思考情報が含まれていた。

勿論それらを読み取れたのはコウだけである。

しっかし、世界を歩き来してるとか……

『びつくりだねえ』

コウを通じて朔耶の在り方を知った京矢が、そんな人もいるのかと驚く。装置の回収にダンジョンへ向かう道すがら、コウと京矢は後で元の世界に還える方法を聞いてみようかと相談しあっていた。直ぐにでも帰還方法を訊ねようとしなかったのは、既にこちらで自分の居場所や役割を抱えてしまっている立場にあるからだ。

元の世界に未練が無い訳ではない。しかし、もし帰還出来るとなれば今の環境を全て棄てる事になるかもしれない。こちらで知り合った少なくとも親しい人達とも、もう会えなくなるかもしれないという別れを惜しむ気持ちが、元の世界に帰る方法の問い掛けを躊躇させていた。

調査隊メンバーに朔耶を伴い、地下街化が進められているバラッセのダンジョンに下りて来た一行は、綺麗に掃除された一階の通路を進んで行く。所々に休憩用の長椅子なども置かれてあり、危険な地下迷宮だった嘗ての面影は無い。

等間隔に設置された松明の灯りが当時の雰囲気醸し出しており、朔耶は珍しそうにきよろきよろと壁や天井を見渡していた。

「ここだ。先日発掘したばかりだから、まだ通路が整地されていないんだ。石の欠片を踏まないよう足元に気をつけてな」

祭壇の間への通路は入り口の脇にまだ崩した壁の欠片が山積み

されている。関係者以外立ち入り禁止の札付きロープを外し、暗い通路を松明で照らし出す。

その時、ふとコウが前隣にいる朔耶を見上げると、何やら細い”光の系”が朔耶を中心に広がっていくのが見えた。コウの視点からだと朔耶は常に光を纏って輝いているように見えるのだが、その放射状に広がる光の系はまるで生き物の触覚のように感じる。

やがて奥へと伸びる一本を残して”光の系”が収束し、先導するガシエの後ろからひよいと通路を覗き込んだ朔耶が小首を傾げながら言った。

「なんか大きな犬が居るみたいだけど、魔物？」

「魔物が……？ ガシエ、壁際に寄れ。リシエロは照明を頼む」

「お、おう！」

「わかった」

剣に手を掛けながら素早く指示を出すエルメール。先程の紹介し合った中で聞いた限りでは見習いという事だったが、祈祷士よりも強い交感能力を持つと謂われる精霊術士が言うなら信憑性は高いと判断したらしい。

リシエロが魔力で作りに出した光源を通路の奥へと投げつける。通路の起伏を陰影に浮かび上がらせながら真っ直ぐ飛んでいった光源は、奥の転移装置にぶつかってそのまま祭壇の間を照らし出す。

「よし、いくぞ」

松明を仕舞ったガシエが戦斧を持ち、剣を構えるエルメールと並んで進み始めると、リシエロも二人を援護すべくその後ろに続いた。三人が組んだ時の何時もの布陣である。警戒しながら慎重に踏み出

す三人に、朔耶は祭壇の間の様子を伝える。

「奥の右の窪みに居るけど、こっちに気付いてるみたいね。敵意は無いみたいだよ？」

「そんな事まで分かるのか？」

やけに具体的な索敵情報に振り返ったエルメールは、ちらりとコウに視線を向けた。コウは直ぐその意味を理解して朔耶の内心を探ろうとしたが

コウくん、さっきからずっと覗いてたでしょ？ あんまり乙女の心を盗み見しちゃダメ・メ・よ

「っ！？ え、と、ごめんなさい」

他者との念話は初めてではなかったが、直接意識が繋がっている京矢や、思念がそつと触れてくる感覚の曖昧なウルハと違って、がつしりと結びついて来るような強力な思念。

朔耶の意識から読み取れた表現では”意識の糸”というらしいソレから感じ取れる余りに強大な力の存在に、思わずびっくりしたコウは、とりあえずゴメンナサイした。にっこり笑みを返す朔耶。

いきなり謝罪するコウに微笑む朔耶、という今のやり取りの意味が分からず、コウと朔耶の顔を交互に見やりながらハテナ顔のエルメール達。その時、何かに気付いたように通路の奥へと視線を向けた朔耶が呟く。

「あ、出てきた」

つられて皆が視線を向けると、転移装置にくっついた光源に照らされながら通路の正面に現れる黒い影。

長く鋭い牙が剥き出しになったゴツイ顔の魔獣犬。元々は地下三階付近に現れる危険な魔獣で、”生命の門”が取り払われて以降、大量に押し寄せる冒険者達によって他の変異体や魔獣類共々全て討伐された筈だ。

「生き残りがいたのか……しかし、これは」

「コウ、な筈はないよね」

「コウならここに居るもんな」

ガシエがコウの頭にぽふっと手を置く。困惑するエルメール達の前で、その魔獣犬はまるでコウが憑依していた魔獣犬のように”お座り”をしてペタペタと尻尾を振っていた。

天井まで届きそうな大きさの祭壇、転移装置を一瞬で消し去るコウの異次元倉庫能力に「なにそれ、便利過ぎ！」と驚いている朔耶の隣で、全身を洗淨されてふさふさの毛並みになった魔獣犬が”伏せ”をしている。

ちなみに、全身洗淨は「獣くさい」と嫌がった朔耶の仕業である。精霊の力で汚れを落としたりしい。いきなり漆黒の翼を生やした朔耶に、エルメール達が何事かと驚いていた。なんでも強い力を使う時は魔力の翼が生える 事になっているらしい。

この魔獣犬、コウが意思に触れて調べてみた所、以前”生命の門”を探索しに来た時に憑依して”亡者の階”と呼ばれていた地下五

階に下りる階段前で別れた魔獣犬であった事が分かった。

「そっかあ、君だったのかあ」

「ヴォフ」

ヘッヘッヘッと舌を出しながら尻尾を振っている彼は、コウに憑依されて地下探索をしていた中で、僅かながら”楽しい”と感じた時から自意識が育っていた。主に朽ち掛けの骸戦士にローリングアタックをかます戦術辺りで。

その自意識はコウと別れて再び集合意識に支配されながらも保たれ、行動を指示する集合意識に対して自分の”楽しい”と感じる行動を通そうと反撥を起こす事で更に育って行き、徐々に明確な自己意識へと進化し始めた。

そこへ”生命の門”の破壊によって集合意識の干渉がなくなり、自己意識の膨らんだ彼は完全な自律行動を取るようになったのだ。

大勢の冒険者が地下に押し寄せている間、彼は小さな壁の隙間に入り口が隠されて目立たない所にある餌用丸ネズミの巣に潜り込んでやり過ごしていた。

お宝が粗方漁り尽くされてダンジョンを訪れる冒険者も減り、地下街建設の改装工事が始まった頃には籠もっていた巣穴の丸ネズミも喰い尽してしまったので、深夜のダンジョンを徘徊して他の巣穴を転々としながら餌の確保をしていたようだ。

凶星の出現で工事の作業が中断して更に人が居なくなると、餌を求めて上の階にも訪れるようになった。魔力の薄い環境にも慣れ、普通に狩りが出来る程度まで動けるようになっていた所へ凶星の影響もあり、活動範囲が一気に広がったらしい。

そうして先日、エルメール達が掘り開いたこの祭壇の間にうつすらとコウの気配が残っているのを感じ取って下の階から上がって来た彼は、ここを拠点にして時々地上まで狩りに出たりしながら過ごしていたのだ。

この部屋の壁は掘り込まれた彫刻による突起物が多いので、壁を伝って天井に開いた亀裂の隙間から出入りしていたようだ。祭壇の間は丁度街の外辺りに位置している。

「蟲やコウモリの変異体は、元はこういった抜け穴部分からダンジョンに迷い込んでいたのかもしれない……」

「確かに、小動物だここに落ちたら戻れそうにないもんねえ」

広くなった祭壇の間に射し込む陽の光。壁際の天井に走る亀裂を見上げながら、エルメールとリシエロがそんな推測を並べる。

「にしても、ある意味こいつあ本物の魔獣犬コウってとこだな。武器や薬を出したりはしねえけど」

ガシエがそう言っつて魔獣犬の頭を撫でる。身体は見た目も凶悪なごつい魔獣犬だが、中身は割と普通のわんこ。

自意識を持ち始めるきっかけであり、自意識が育ち始める最初に触れた”他者”であり”仲間”がコウだった。魔獣犬の彼はコウに仲間意識、家族意識を持っている。

「”三つ子の魂百まで”状態なわけね」

「ほう、面白い喩えだな、オールドリア文化で盛んな賢者の言葉というモノか」

「賢者の言葉と似たようなモノだけど、今のはあたしの住んでた世界のコトワザって言います」

「それにしても、貴女の言った”勘に引っ掛かる”というのはこの事だったんですね。流星は予知に聡いと噂に聞く精霊術士です」
「うーん、勘に引っ掛かってる事には関係してそうなんだけど、まだ何かありそうな……あ、それとあたしの事は朔耶サツヤでいいよ」

装置回収の仕事はコウが実質二秒で終わらせてしまったので、今は祭壇の間に入り込んでいた魔獣犬の事と、朔耶の精霊術について考察や雑談が交わされている。

そんな穏やかな雰囲気の中

「魔王？」

「えっ！ 今、魔王って言った？」

魔獣犬の意識に触れながら情報を読み取っていたコウが口にした一言に、朔耶が強い反応を示した。

「魔王というと、神話や御伽噺に出てくるアレか？」

「ちよつと昔なら偶にとち狂った魔術士が魔王を名乗ったりしてた事もあつたらしいけどなあ」

「こつちでも自称魔王ってそんな感じなのね……」

なぜ魔物がエイオアの首都に集まっているのか。今エイオアで何が起きているのか、魔物達の行動の謎、当事国政府のエイオア評議会でさえ掴みきれない事実と現状を、魔獣犬の彼から把握する事が出来た。

地上に集合意識を発現させた呪術士が、自らを魔王と自称し始めたのだという。

呪術士の魔王宣言は自らが操る魔物達に対してしかされておらず、まだ世間一般には知られていない。自己意識を持った魔獣犬と今日こうして再会する事が出来たコウが、一番にその事実を掴んだ。

自己意識の育った魔獣犬の彼は過ごしていた場所がエイオアから遠い事もあり、”支配の呪根”による呼び寄せを無視する事が出来た。一応、影響は受けているので”支配の呪根”が発現させている集合意識からどんな命令が出されているのかは分かる。

魔獣犬の彼に干渉しようとする集合意識から、自称魔王についてもっと詳しい情報を読み取りに掛かるコウ。

地上で魔物を支配する魔王がエイオアの首都ドラグーンを制圧し、魔物の国を造ろうとしている。首都に住んでいた人々は魔王の命令を受けた魔物達に捕らえられ、街で奴隷として働かされている等の、今の常識では凡そ考えられない内容だった。

これらの情報はコウからエルメール達を経て冒険者協会へと上げられ、王都やエイオア評議会に確認の問い合わせが行われる中、信頼できる筋の情報であると言う事でバラッセの冒険者協会支部を中心に噂が広まっていく。

あらゆる噂が飛び交う酒場では『魔王なんて本当に存在するのか』という半信半疑な反応を見せる者や、『金になるなら相手は何でもいい』という稼ぎ所を嗅ぎ付けて来た者達が集まり、今後の展開について憶測や推測を交えながら話し合っている。

本当に”魔王”と呼べるような存在が現れたのなら、魔物の脅威に曝される周辺国から討伐隊くらいは組織されるだろう。参加者の募集が掛かるのではと、各国の正式な討伐発表に期待が寄せられているようだ。

ダンジョンを後にして直ぐ冒険者協会へ報告に赴き、色々な手続きを終えて再びダンジョン前の公園に戻って来たコウとエルメール達。魔獣犬の確認に協会から派遣された人間も同行している。

高い鉄柵に囲まれる祠を出た所には、ガシエと朔耶が魔獣犬と共に待っていた。

「おかえりー」

「ただいまー」

しゃがんで魔獣犬を撫でていた朔耶とハイタッチなど交わすコウ。てしてしてしつと尻尾を振っている魔獣犬。”魔王の支配から逃れて人間の味方についた魔獣犬”が冒険者協会の派遣員に紹介される。

朔耶は先程まで精霊術士が使う”交感”によってオールドリア大陸にいる仲間と連絡をとっていたそうだ。向こうでは精霊術士の持つ予知的な力で”魔王の出現”が予言されていたらしい。

「それで朔耶はその事を調べに来てたの？」

「うん、一応ね。アルシアちゃんを搜索するついでだったんだけど、探しものいっぺんに解決しちゃったよ」

魔獣犬の取り扱いについて協会の派遣員とエルメール達が話し合

っている間、アルシアを待つ朔耶と雑談を交わすコウ。

世界の渡り方について聞き出すタイミングを計っているのだが、心の覗き見禁止を出されてからは不思議なことに、言葉に乗って伝わる筈の思考を読み取る事も出来ないでいた。朔耶と重なる光の存在、”精霊”がブロックしているらしいのだ。

「えーと……」

「うん？ なにかな？」

相手が何を考えているのか全く分からないという状態は初めての事なので、珍しく言いよどんでいるコウに心の奥から『もうストリートに聞いちまえ』と発破を掛ける京矢。

「ん、じゃあたとーちよくにゅーに、元の世界に帰る方法教えて？」

「沙耶華ちゃんって人と京矢君の事ね」

既に事情を察している朔耶はコウ達の質問に答えてくれた。結論から言えば、簡単にはいかないとの事。朔耶が世界を自由に行き来できるのは”精霊”の力による所であり、世界を渡る行為は精霊の加護がなければ危険なのだと言う。

「向こうからこっちに連れて来る場合はあたしを護ってる精霊が世界を渡る時に護ってくれるけど、逆は無理なのよ」

世界を渡る際、肉体から精神と魂が一旦分離する事になるらしく、精霊の加護によってそれぞれがバラバラに離れてしまう事のないよう包み込みながらでなければ、離れた精神が迷子になってしまう場合があるそうだ。

何となく身に覚えがあるコウと京矢は、直ぐにその意味を理解し

た。

「コウくんが特殊な例だって事は分かったわ。沙耶華ちゃんと京矢君は精霊と重なってるような事はないのね？」

「沙耶華もキヨウヤも特別な力があつたりとかはしてないよ？」

京矢の場合は自身の精神領域に設けられた”蓋”をこじ開けてコウを近くに呼び寄せるといふ、かなり限定的な特殊能力を会得しているが、これは世界を渡つた事とはあまり関係しない。

寧ろコウという京矢の分身である存在自体が、世界渡りで生じた産物といえる。

「安全に世界を渡る条件は肉体と精神と魂を保護する精霊の助けがあるってとこね」

「精霊かあ」

知り合いに精霊は居ないなあ等と呟くコウ。しかし世界を渡る事が出来る人物と知り合えた事は大きい。博士に相談すれば何か手を考えてくれるかもしれない。

「教えてくれてありがとう、何かいい方法が見つかったらその時は」

「うん、時々こつちにも顔出すようにするから、その時は言ってね」

コウ達の提示する方法が安全か否かは、朔耶の精霊が判断してくれるそうだ。

「後はご家族の事かな」

沙耶華と京矢については元世界の家族の事もある。二人が生きて

いる事を伝える事も出来るのだが、『別の世界で生きてるけど帰って来る事が出来ません』では色々と問題が発生してしまうだろう。まず間違いなく、事故で息子や娘を失った家族に対する性質の悪い詐欺の類だと思われるだろう。

「あんまり遠くじゃなければ二人のご両親の様子とかも見て来られるけど、メッセージとかは伝えない方がいいかも」
「キョウヤに聞いてみる」

確かに帰れる算段がつくまでは黙っててもらった方が無難だろうな

『沙耶華にも話だけはしておいた方がいいよね』

二人の家族に対しては余程の緊急事態でもない限り様子を見るに留めて置く事にしようという方針で決まった。場合によっては、二人の所持品を持参して生きている事だけでも伝えられる。

「朔耶には一度、沙耶華や博士にも会ってほしいな」

「そうだね、また機会があればこっちの王都にも行って見るよ」

「コウ、済まないがちょっと来てくれないか」

魔獣犬の事でエルメールからお呼びが掛かった。『いつてらっしゃい』と手をひらひらさせる朔耶と別れ、コウは鉄柵前に集まっているエルメール達の所へ向かう。

「あつ いたいた！ サクヤさん！」

入れ替わりに道の向こうから現れたアルシアが朔耶の所へと駆けて行く。振り返ると、アルシアから荷物を受け取った朔耶は一言二

言アルシアと何かを話し、それじゃあねと手を振って唐突に姿を消した。

『元の世界に帰ったのかな？』

かもな

何にせよ、元の世界に帰る手掛かりが得られた事で、京矢には一つ大きな目標が出来た。

ただ、沙耶華に対するレイオス王子のように、京矢にもスィルアツカ皇女がどう動くか分からない部分があるので、誰に何処まで情報を明かすのかはよく考えなければならぬ。

『とりあえず、博士には出来るだけ詳しく報告しないとね』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5955o/>

スピリット・マイグレーション

2012年1月12日01時03分発行